

福井県埋蔵文化財調査報告 第177集

福井城跡

—北陸新幹線建設事業に伴う調査 6—

第2分冊 遺物編

2022

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設事業に伴い、平成27・28年度に実施した福井城跡（福井県福井市豊島1丁目所在）の発掘調査報告書である。なお、調査範囲が南北に細長いため二分割して整理作業を実施しており、本報告分はその南側にあたるため「新幹線南地点」と通称する。報告書は、第1分冊遺構編、第2分冊遺物編で構成され、本書は第2分冊遺物編にあたる。
- 2 本書の編集は木村孝一郎 御嶽貞義があたり、木村、御嶽、杉田曜、九千房百合、中原義史（現こども歴史文化館学芸員）が分担して執筆した。執筆分担は以下のとおりである。
第1章：木村 第2章：中原 第3章：杉田 第4・5章：御嶽
第6章：九千房 第7章：御嶽 木村 九千房 杉田
なお、第6章1～3節は各種分析報告を九千房が、第4節の樹種同定は杉田が一部加除・編集した。
- 3 福井城跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 4 出土遺物のデジタルトレース・写真撮影は、令和2年度に土器・陶磁器、石製品を株式会社キミコンに、瓦、木製品、金属製品を株式会社サンワコンに委託した。このうち土器・陶磁器、石製品は図化作業も委託した。委託した図の校正、図版作成は、木村、御嶽、中原、杉田が行った。
- 5 木製品の一部は、令和3年度に株式会社吉田生物研究所に委託して保存処理とあわせて樹種同定と塗膜構造分析を実施した。他の自然科学分析は、平成29・30年度、令和2年度に委託し、貝類同定を株式会社パレオ・ラボ、大型植物遺体同定を株式会社パレオ・ラボとパリノ・サーヴェイ株式会社、動物骨同定は、株式会社パレオ・ラボと一般社団法人文化財科学研究センターに委託した。素材同定を株式会社パレオ・ラボ、土壌分析を一般社団法人文化財化学研究センターが実施した。
- 6 出土遺物のうち木製品の文字資料については、宇佐美倫太郎氏（福井県教育庁生涯学習・文化財課主査）の協力を得た。
- 7 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 8 遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および整理作業員が行った。
- 9 本遺跡の所在地は、中世から柴田勝家の時代、さらに結城秀康入国後の17世紀初めまで「北庄」と呼ばれていた。その後、寛永元年（1624）に「福居庄」「福井庄」へと改称され、さらに元禄年間（1688～1704）から「福井」が広く使われるようになっていった。しかし、このような変遷を記述に反映させると煩雑になるため、本書では、柴田勝家の居城を北庄城、結城秀康入城以降を福井城とし、遺跡名としては北庄城の時期を含めて福井城跡と総称する。また、慶長6年（1601）の結城秀康の越前入国を以て近世とする。
- 10 本書で使う福井城の曲輪等の名称は、幕末頃の住宅地図である福井県文書館所蔵の山内秋郎家文書「福井藩家中絵図」（「戊午屋舗絵図」）に記載されている呼称である。

目 次

第1章	土器・陶磁器	1
第1節	A街区 15-1 調査区出土の土器・陶磁器	1
第2節	B街区 16-1 調査区出土の土器・陶磁器	10
第3節	C街区 16-1 調査区出土の土器・陶磁器	13
第4節	C街区 15-2 調査区出土の土器・陶磁器	18
第5節	D街区 15-2 調査区上層出土の土器・陶磁器	26
第6節	D街区 15-2 調査区下層出土の土器・陶磁器	26
第7節	E街区 15-2 調査区出土の土器・陶磁器	34
第8節	15-2 調査区石組水路2 出土の土器・陶磁器	39
第9節	15-2 調査区道路遺構出土の土器・陶磁器	41
第2章	瓦	60
第3章	木製品	63
第4章	石製品	90
第5章	金属製品	114
第1節	金属製品	114
第2節	鋳造関連遺物	123
第6章	自然科学分析	136
第1節	素材同定	136
第2節	自然遺物	138
第3節	土壌分析	155
第4節	遺物の構造分析	184
第7章	まとめ	193
第1節	城ノ橋の変遷	193
第2節	FKJ21-1 調査区について	196
第3節	福井城下における土器・陶磁器の一様相	199
第4節	福井城下における出土漆器の構成	200
第5節	本調査地周辺の自然環境について	202

写真図版目次

図版第1	土器・陶磁器	A 街区	図版第6	土器・陶磁器	A 街区
図版第2	土器・陶磁器	A 街区	図版第7	土器・陶磁器	A 街区
図版第3	土器・陶磁器	A 街区	図版第8	土器・陶磁器	B・C 街区
図版第4	土器・陶磁器	A 街区	図版第9	土器・陶磁器	C 街区
図版第5	土器・陶磁器	A 街区	図版第10	土器・陶磁器	C 街区

- 図版第 11 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 12 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 13 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 14 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 15 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 16 土器・陶磁器 C 街区
 図版第 17 土器・陶磁器 D 街区上層
 図版第 18 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 19 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 20 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 21 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 22 土器・陶磁器 D 街区下層
 図版第 23 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 24 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 25 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 26 土器・陶磁器 E 街区
 図版第 27 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 28 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 29 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 30 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 31 土器・陶磁器 石組水路 2
 図版第 32 土器・陶磁器 道路
 図版第 33 瓦
 図版第 34 木製品 漆器椀類
 図版第 35 木製品 漆器椀類
 図版第 36 木製品 漆器椀類
 図版第 37 木製品 下駄・下駄歯
 図版第 38 木製品 下駄・桶・樽
 図版第 39 木製品 桶・樽・曲物
 図版第 40 木製品 曲物・柄杓
 図版第 41 木製品 建築材等・墨書
 図版第 42 木製品 箸・楊枝・切匙等
 図版第 43 木製品 杓子・庖丁柄・篋・灯明台
 紡錘車・栓
 図版第 44 木製品 櫛・刷毛・柄鏡箱
 竹菅継手・人形・箒・独楽
 図版第 45 木製品 指物等・部材
 図版第 46 石製品 容器類・白類
 (1) 容器類
 (2) 粉挽臼・茶臼・搗き臼
 図版第 47 石製品 暖房具・調理具・井戸関連
 図版第 48 石製品 硯・砥石・重石等
 (1) 硯・砥石・重石等
 (2) 基石
 図版第 49 石製品 石瓦・建材・石塔等
 図版第 50 金属製品 武器武具等
 (1) 武器武具
 (2) 迷子札
 (3) 焼印「神二文字屋」
 図版第 51 金属製品 工具類
 図版第 52 金属製品
 工具・農具・漁具・日用品等
 図版第 53 金属製品 煙管
 (1) 煙管(雁首)
 (2) 煙管(吸口・延煙管)
 図版第 54 金属製品 日用品等
 図版第 55 金属製品 日用品・その他
 図版第 56 金属製品 銭貨
 図版第 57 金属製品 日用品等・
 鑄造関連遺物 1
 (1) 匙・蓋
 (2) 鋳滓
 (3) 鑄造素材
 (4) 鋳滓の付着した取瓶・羽口
 図版第 58 鑄造関連遺物 2
 (1) 鑄型
 (2) 羽口
 (3) 取瓶・坩堝
 図版第 59 縄の素材同定
 図版第 60 自然遺物 大型植物遺体 1
 図版第 61 自然遺物 大型植物遺体 2
 図版第 62 自然遺物 貝類遺体
 図版第 63 自然遺物 動物骨 1
 図版第 64 自然遺物 動物骨 2
 図版第 65 自然遺物 動物骨 3
 図版第 66 土壌分析 花粉 1
 図版第 67 土壌分析 花粉 2
 図版第 68 土壌分析 種実 1
 図版第 69 土壌分析 種実 2
 図版第 70 土壌分析 葉
 図版第 71 土壌分析 微細遺物 魚骨
 図版第 72 土壌分析 微細遺物 種実
 図版第 73 土壌分析 微細遺物 木材 1
 図版第 74 土壌分析 微細遺物 木材 2
 図版第 75 土壌分析 微細遺物 木材 3
 図版第 76 木製品の樹種
 図版第 77 木製品の樹種
 図版第 78 木製品の樹種
 図版第 79 木製品の樹種・漆器 漆薄片
 図版第 80 漆器 漆薄片
 図版第 81 漆器 漆薄片
 図版第 82 漆器 漆薄片
 図版第 83 漆器 漆薄片
 図版第 84 漆器 漆薄片・X線写真

挿 図 目 次

第1図	土器・陶磁器	A 街区①	1	第51図	墨書板材	76
第2図	土器・陶磁器	A 街区②	3	第52図	箸	77
第3図	土器・陶磁器	A 街区③	4	第53図	楊枝・切匙類	79
第4図	土器・陶磁器	A 街区④	5	第54図	杓子等	80
第5図	土器・陶磁器	A 街区⑤	7	第55図	栓	81
第6図	土器・陶磁器	A 街区⑥	8	第56図	櫛・刷毛・独楽・その他	82
第7図	土器・陶磁器	A 街区⑦	9	第57図	指物等	83
第8図	土器・陶磁器	A 街区⑧	11	第58図	部材	84
第9図	土器・陶磁器	A 街区⑨・B 街区	12	第59図	容器類① [盤]	91
第10図	土器・陶磁器	C 街区①	14	第60図	容器類② [円形盤・把手]	92
第11図	土器・陶磁器	C 街区②	15	第61図	容器類③ [槽]	93
第12図	土器・陶磁器	C 街区③	16	第62図	容器類④ [鉢・蓋]	94
第13図	土器・陶磁器	C 街区④	17	第63図	容器類⑤ [容器状製品]	95
第14図	土器・陶磁器	C 街区⑤	19	第64図	行火・香炉	96
第15図	土器・陶磁器	C 街区⑥	20	第65図	石臼	98
第16図	土器・陶磁器	C 街区⑦	21	第66図	暖房・調理具 [温石・竈・鍋掛重り・風炉等]	99
第17図	土器・陶磁器	C 街区⑧	22	第67図	流し	99
第18図	土器・陶磁器	C 街区⑨	23	第68図	井戸関連遺物	100
第19図	土器・陶磁器	C 街区⑩	25	第69図	硯	101
第20図	土器・陶磁器	D 街区上層	27	第70図	砥石①	102
第21図	土器・陶磁器	D 街区下層①	28	第71図	砥石②	103
第22図	土器・陶磁器	D 街区下層②	29	第72図	砥石③	105
第23図	土器・陶磁器	D 街区下層③	31	第73図	日用品・その他	105
第24図	土器・陶磁器	D 街区下層④	32	第74図	石瓦	106
第25図	土器・陶磁器	D 街区下層⑤	33	第75図	建材 [礎石・敷居石等]	108
第26図	土器・陶磁器	E 街区①	35	第76図	建材 [石樋等]	109
第27図	土器・陶磁器	E 街区②	36	第77図	石塔類 [石仏・狛犬等]	110
第28図	土器・陶磁器	E 街区③	37	第78図	武器武具	115
第29図	土器・陶磁器	E 街区④	38	第79図	工具類	116
第30図	土器・陶磁器	石組水路①	40	第80図	工具・農具・漁具等	118
第31図	土器・陶磁器	石組水路②	42	第81図	煙管	119
第32図	土器・陶磁器	石組水路③	43	第82図	迷子札	119
第33図	土器・陶磁器	石組水路④	44	第83図	日用品 [簪・針・指貫状製品・庖丁・分銅等]	121
第34図	土器・陶磁器	石組水路⑤	45	第84図	日用品 [鉄鍋・鉄瓶・火箸・匙等]	122
第35図	土器・陶磁器	道路①	46	第85図	調度品・その他 [引手金具・銹金具・焼印等]	124
第36図	土器・陶磁器	道路②	47	第86図	銭貨	125
第37図	瓦 1		61	第87図	鑄造関連遺物 [取瓶・埴塙]	126
第38図	瓦 2		62	第88図	鑄造関連遺物 [羽口]	126
第39図	漆器椀類 1		64	第89図	鑄造関連遺物 [鋳型]	127
第40図	漆器椀類 2		65	第90図	鑄造関連遺物 [鋳滓・素材]	128
第41図	漆器椀類 3		66	第91図	メロン類種子の大きさ	144
第42図	下駄 1		67	第92図	ニホンカボチャ近似種子の大きさ	145
第43図	下駄 2		68	第93図	151-28 における花粉ダイアグラム	160
第44図	桶・樽 1		69	第94図	151-102 における花粉ダイアグラム	160
第45図	桶・樽 2		70	第95図	151-26 における花粉ダイアグラム	161
第46図	曲物 1		71	第96図	151-204 における花粉ダイアグラム	161
第47図	曲物 2		72	第97図	151-108 における花粉ダイアグラム	168
第48図	曲物・柄杓		73			
第49図	建築材 1		74			
第50図	建築材 2		75			

第98図	151-259 における花粉ダイアグラム	168	第104図	151-108 における樹種と層序の相関グラフ	181
第99図	151-28 における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム	168	第105図	樹種の利用傾向成	189
第100図	151-26 における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム	169	第106図	福井城周辺の旧地形	193
第101図	151-204 における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム	169	第107図	調査区にかかる屋敷地の変遷	195
第102図	151-259 における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム	169	第108図	城ノ橋の発掘調査地点	197
第103図	151-102、151-108 における微細物 (種実) ダイアグラム	181	第109図	FKJ21-1 調査区全体図	198
			第110図	FKJ21-1 調査区位置図	198
			第111図	FKJ21-1 土層堆積状況図	198

表 目 次

第1表	土器・陶磁器観察表 A 街区	48	第32表	硯・砥石観察表	112
第2表	土器・陶磁器観察表 B 街区	50	第33表	日用品・その他観察表	113
第3表	土器・陶磁器観察表 C 街区①	51	第34表	石瓦・建材等観察表	113
第4表	土器・陶磁器観察表 C 街区②	52	第35表	石塔・灯籠等観察表	113
第5表	土器・陶磁器観察表 D 街区上層	54	第36表	武器武具観察表	129
第6表	土器・陶磁器観察表 D 街区下層	54	第37表	生産具類観察表	129
第7表	土器・陶磁器観察表 E 街区	56	第38表	煙管観察表	131
第8表	土器・陶磁器観察表 石組水路2	57	第39表	日用品(簀・庖丁・迷子札等)観察表	131
第9表	土器・陶磁器観察表 道路	59	第40表	日用品(鍋・火箸・匙等)観察表	132
第10表	軒丸瓦観察表	62	第41表	調度品・その他観察表	132
第11表	軒平瓦・軒棧瓦観察表	62	第42表	銭貨観察表	133
第12表	丸瓦観察表	62	第43表	鑄造関連遺物観察表	134
第13表	平瓦・棧瓦観察表	62	第44表	素材同定結果	136
第14表	面戸瓦・飾板観察表	62	第45表	大型植物遺体同定結果	141
第15表	下駄圧痕計測表	70	第46表	大型植物遺体出土状況	143
第16表	箸計測表	78	第47表	メロン類種子の計測値	144
第17表	漆器椀類観察表	85	第48表	ニホンカボチャ近似種種子の計測値	145
第18表	下駄観察表	85	第49表	152-2 出土メロン仲間種子の大きさ	146
第19表	桶・樽観察表	86	第50表	貝類同定結果	149
第20表	曲物観察表	86	第51表	出土貝類の最小個体数	150
第21表	建築材観察表	87	第52表	動物遺存体同定結果	153
第22表	墨書観察表	87	第53表	分析試料一覧表	156
第23表	箸観察表	87	第54表	花粉分析結果	158
第24表	楊枝・切匙類観察表	88	第55表	大型植物遺体(種実)同定結果	167
第25表	杓子等観察表	88	第56表	151-28 における大型植物遺体(葉)同定結果	171
第26表	栓観察表	88			
第27表	櫛・刷毛・独楽・その他観察表	89	第57表	大型植物遺体(動物遺存体)同定結果	172
第28表	指物等観察表	89	第58表	微細遺物分析結果	180
第29表	部材観察表	89	第59表	器種別樹種組成	188
第30表	容器類観察表	111	第60表	木製品樹種同定表	191
第31表	暖房・調理具等観察表	111	第61表	漆塗膜分析結果表	192
			第62表	調査地周辺の屋敷地名義変遷	195

第1章 土器・陶磁器

北陸新幹線建設工事にかかる発掘調査で出土した土器・陶磁器は、江戸時代を中心に近世初頭以降まで大量であるが、紙面の都合上ごく一部を紹介する。遺物は街区・屋敷・遺構・整地土単位で比較的まとまりのあるものを整理し、遺物図版・遺物観察表・遺物写真ともそれに沿って編集した。本文ではそのなかから時期的にまとまりのある遺構・整地土より出土した遺物を中心に生産地ごとに紹介する。

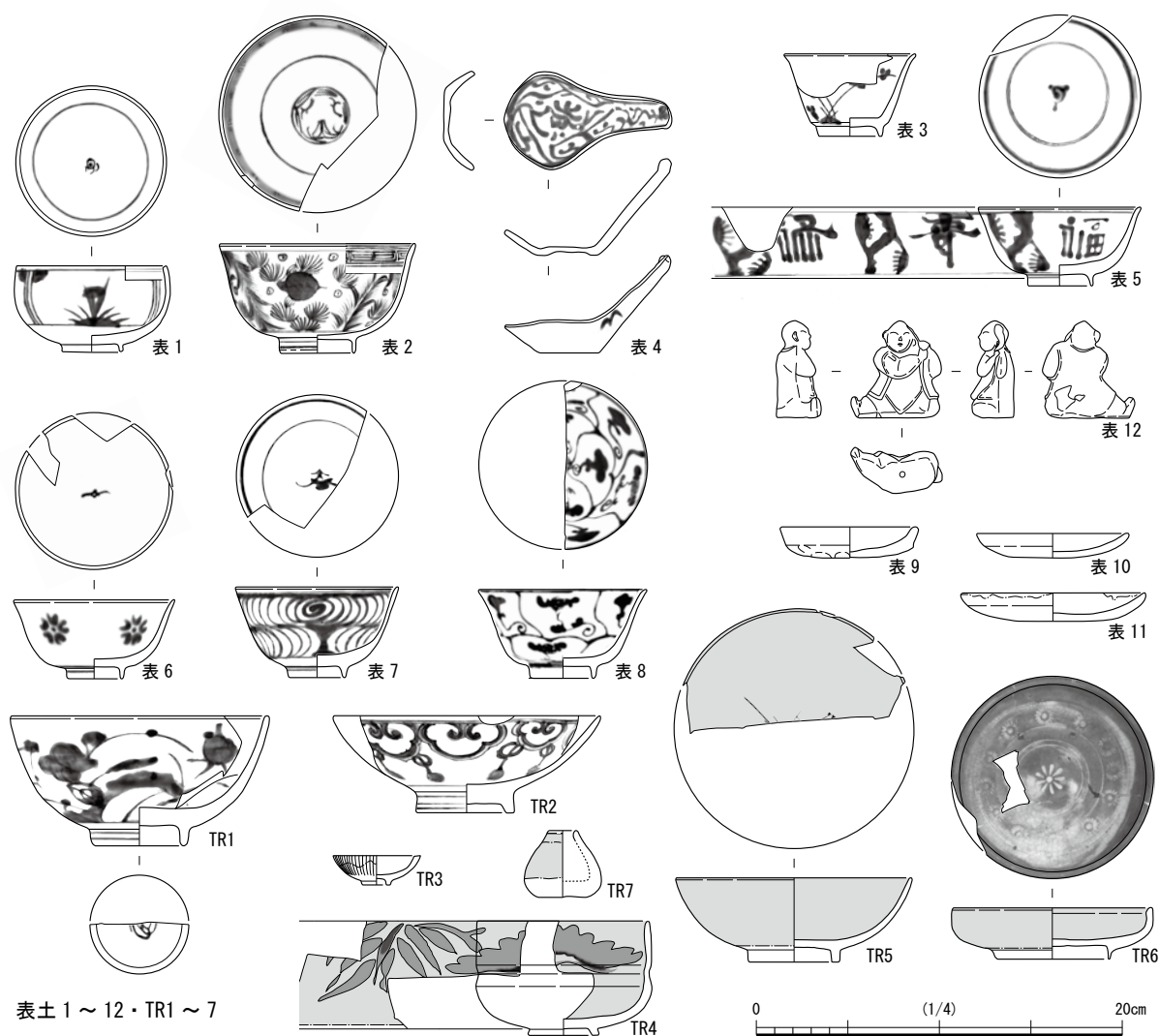
第1節 A街区 15-1 調査区出土の土器・陶磁器

1) 表土出土遺物 (第1図 第1表 写真図版第1)

伊万里 表1は半球碗で窓に草花文、表2は端反碗で、外面に水草亀文と見込に円形松竹梅を描く。表3は草花文の坏、表4は匙で内面に唐草文、外面に笹文を描く。18世紀末以降にまとまる。

瀬戸・美濃焼 端反碗で、表5は福寿文、表6は花文、表7は流水文、表8は内外に唐草文を描く。

土師質土器 G系の皿ほかに、型成形の童子を表した土製品があり文様を刻線で表現する。



表土 1 ~ 12・TR1 ~ 7

第1図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区① (縮尺 1/4)

TR等出土遺物（第1図 第1表 写真図版第1）

伊万里 TR 1は大振りのくらわんか手の碗で外面に草花文、TR 2は口縁に対して器高の低い平碗で、輪宝繫文を外面に描く。

京・信楽焼 体部中央が窪む TR 4は高台無釉の色絵の碗で、外面に赤・緑色で松竹文を描く。このほか見込に白釉の象駝の花文を認める灰釉皿や先端に向けて細くなる瓶がある。

2) 第1面遺構出土遺物（第1～5図 第1表 写真図版第1～4）

井戸3（第2図）

瀬戸・美濃焼 3-1は唐草文と松竹梅を描く碗で、見込に寿文を描く。型紙刷りの皿もみられる。

産地不明品 内面と腰部以下無釉の3-3は土瓶で、両面に文様の違う草木文を描く。また口縁外面に一定の単位で斜線を認める。3-4は直角に曲がる口縁端部に刻目を入れる甕で、外面と内面上部に鉄泥を施し草花文を線刻で描く。いずれも近代のものである。

土坑4（第2図）

瀬戸・美濃焼 4-1は稜花状口縁外面を刺突する深鉢で、屈曲する腰部に明瞭な2条の沈線が巡る。

土坑21・溝22（第2図）

瀬戸・美濃焼 22-1は内外面に唐草文を描く端反碗で、高台内に銘がみられる。

越前焼 21-3は顕著な轆轤目を認める体部に丸みのある口縁を持つ挿鉢である。

土師質土器 内型成形の21-4～6、22-2・3はG系の土師質皿で、この時期から増加する。

土坑28（第2・3図）木製品と植物遺体を含む18世紀後半以降の遺物群である。

伊万里 28-1は稲束、28-3は兎と果実文を描く半球碗で、内面に四方襷文、見込に五弁花を持つ青磁の半筒碗とともに湯呑茶碗である。28-5・6の碗蓋は表に芭蕉文、裏に鷲を描く同規格のセット品である。28-7の破蓋は表に松と家と人物文、裏に雷文と昆虫文を描く。

瀬戸・美濃焼 28-8は梅枝文、28-9は唐草文と銀杏文を描く、28-10は高台裏全面に灰釉系の釉を施す端反碗で、白泥の梅花文を認める。瀬戸の小西窯に類似品がみられる。

京・信楽焼 体部を工具で菱形に削り、下端に刻目を持つ28-11～15を認める。灰釉系の釉を施すこの碗は信楽窯の表採遺物に確認できる。

越前焼 28-18・19は体部が直線的に伸び口縁で屈曲する深鉢で、団子状の3脚が付く。18は底部が穿孔され、植木鉢に転用されている。28-19は通常と異なり装飾的なカキメ状の成形痕を認める。

土師質土器 28-20はG系の灯明受け皿である。

土坑100（第3図）

伊万里 100-1は型成形で、内面に唐草文を認める匙である。

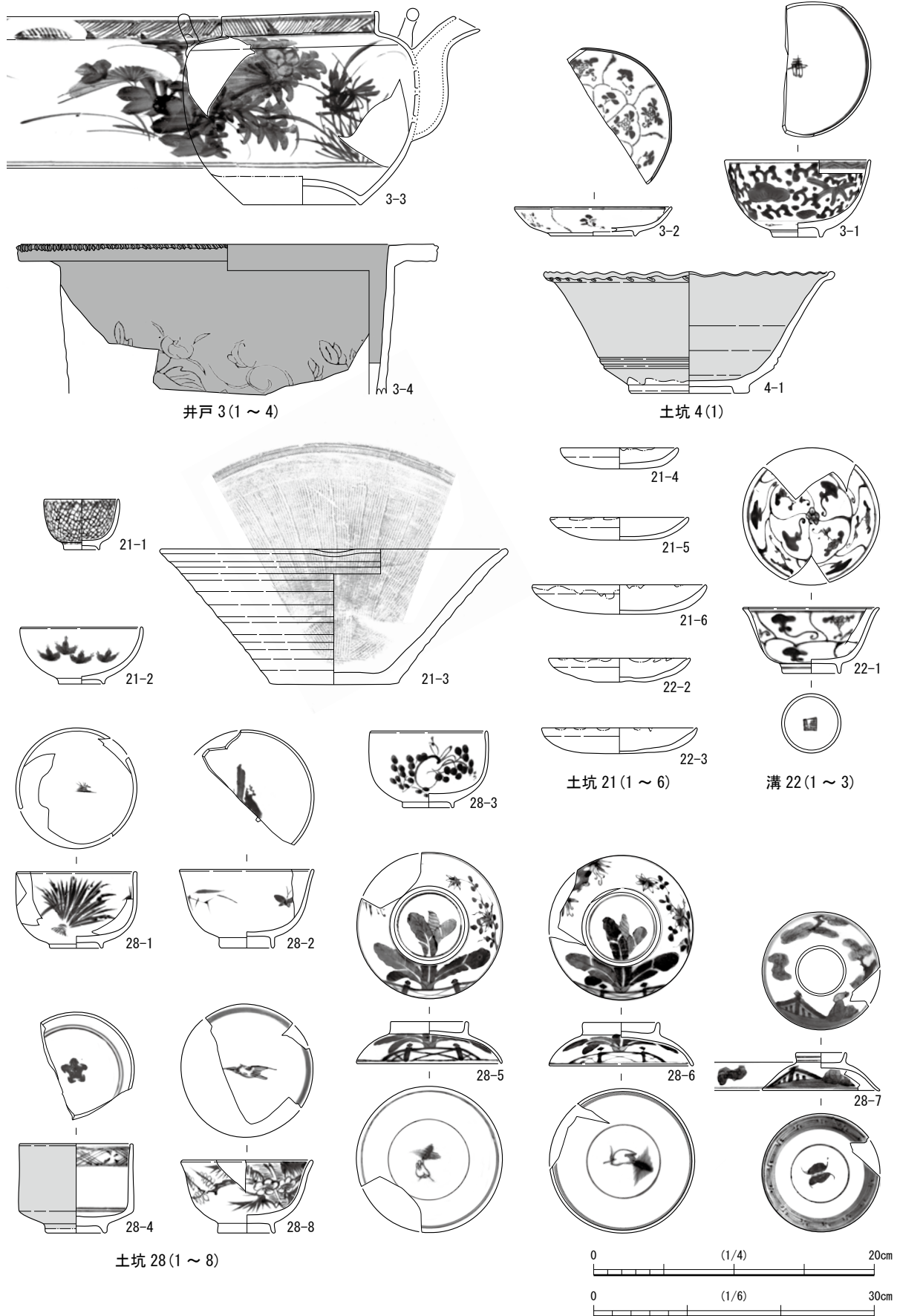
瀬戸・美濃焼 100-2は隸字体文を外面に描く端反碗である。

越前焼 100-4・5は土坑28出土遺物と同形態だが、小振りで鉄泥を全面垂らし掛ける。前者は底部が穿孔される。口縁の張り出しの弱い後者がやや古く18世紀末頃のものである。なお土坑92には同時期のG系の灯明受け皿（92-1・2）がある。

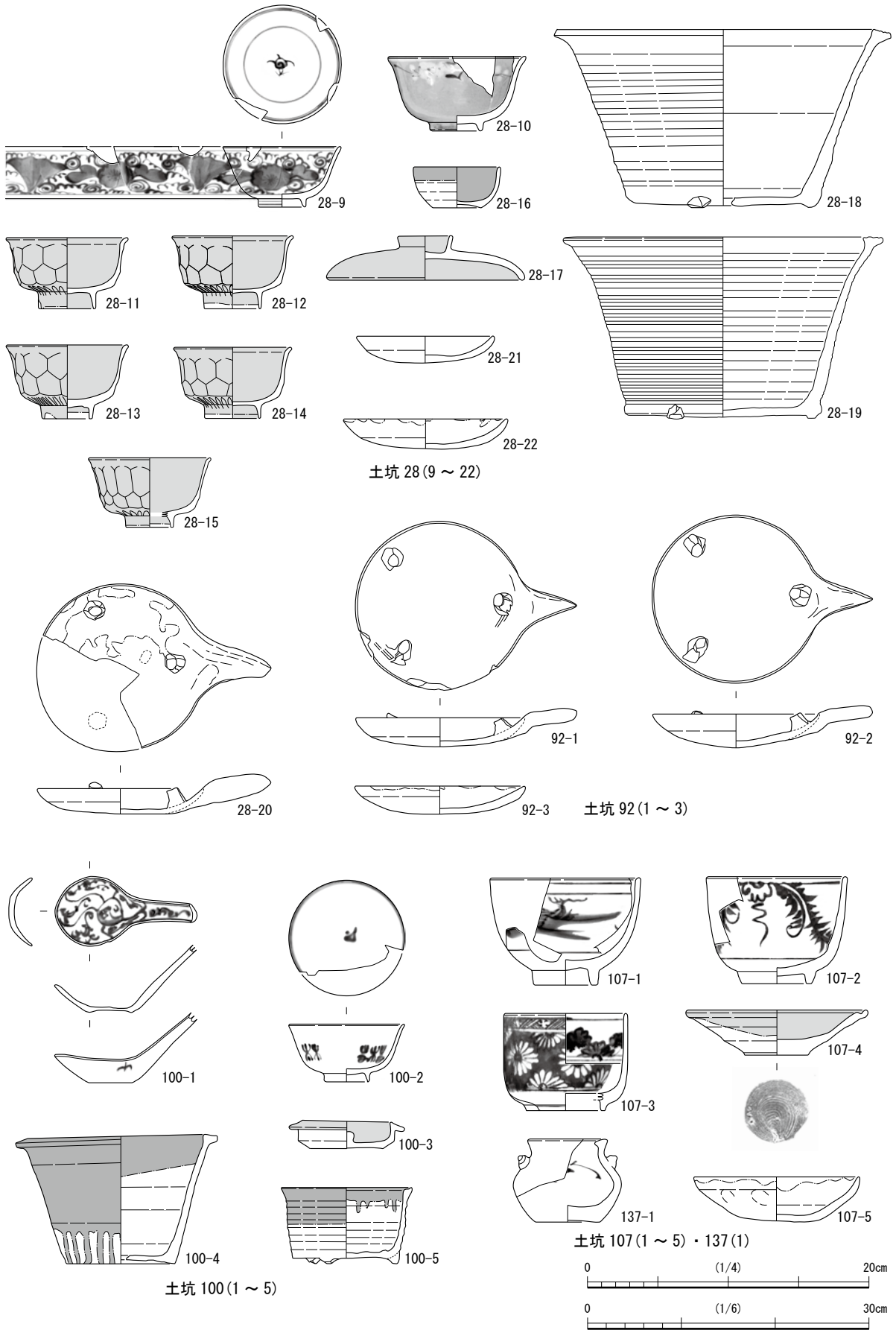
土坑107（第4図）

伊万里 107-1の山水文を描く碗は全体的に丸みを帯びる点で107-2・3と異なる。腰部が張る後者のうち3は外面に散し菊、内面に菊文を描く。草花文を描く2は器面が灰色気味の波佐見産である。

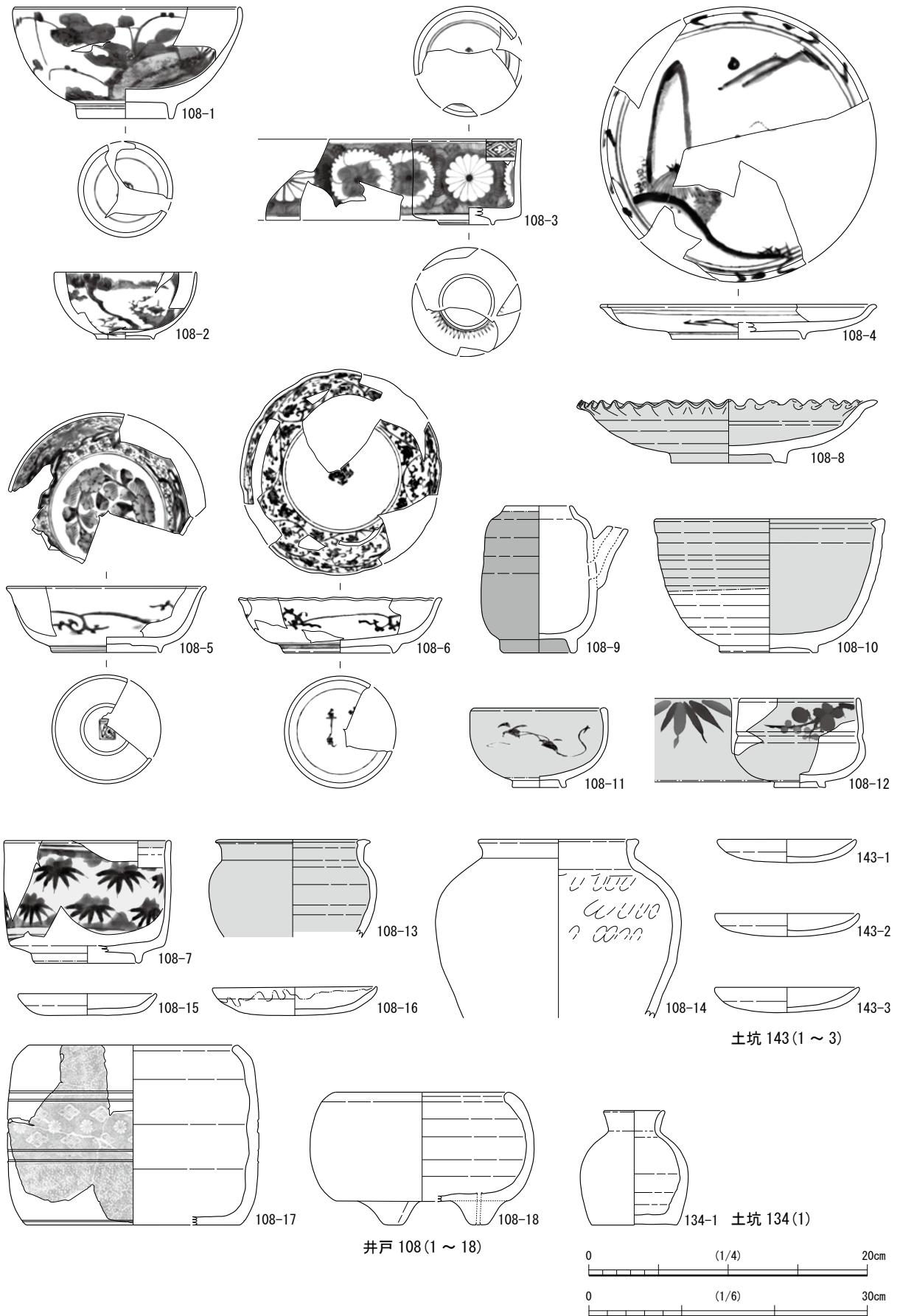
唐津焼 107-4は溝縁口縁を持つ灰釉系の皿で、見込に砂目の痕があり、回転糸切り痕を認める。



第2図 土器・陶磁器 A街区15-1 調査区② (縮尺 1/4 1/6 : 3-4・21-3)



第3図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区③ (縮尺 1/4 1/6 : 28-18・19、100-4・5)



第4図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区④ (縮尺1/4 1/6:108-14・134-1)

井戸 108 (第4図) 18世紀後半以降の遺物群である。

伊万里 108-1は草花文を描く大振りのくらわんか手の碗である。焼成時の歪みが顕著である。108-2は山水楼閣文、108-3は菊花文を描く半筒碗で、五弁花文が見込にみられる。108-5・6は皿で、外面に唐草文が巡る。前者は内面に草花文、見込に牡丹文、蛇の目凹形高台内に「渦福」銘、稜花状口縁の後者は内面に唐草文を描き、見込に五弁花文、高台内に「大明年製」銘を認める。18世紀後半頃のものだが、口縁が屈曲し見込に風水文を描く皿(107-4)は古く、17世紀前半まで遡る。直線的に伸びる体部全面に笹文を散らして描く鉢(108-7)は、口縁内端部が無釉である。

瀬戸・美濃焼 108-8は鬘皿で見込上方に稜が巡り、全面に施した灰釉系の釉に貫入がはいる。107-9は注口を貼り付けた鉄釉の水注で、口縁と内面は無釉である。108-10の鉢は口縁が内側に肥厚する。高台を削り出す際に腰部にも回転削りを施し、体部上半と内面に灰釉系の釉を掛ける。いずれも伊万里と同時期に収まる製品と考えられる。

京・信楽焼 108-11は文様不明の鉄絵を認める半球碗、108-12は体部中央が窪む色絵の碗で、外面に笹文と梅枝文を描く。また笹文には赤色釉が残る。後者は見込に目痕が3つ残り、高台はいずれも無釉である。TR 4出土の類似形態の碗とともにこの頃の組成の一端を示すものと思われる。

越前焼 108-13は全面に灰釉を施す甕、108-14は内面に指頭痕が顕著なねじたて成形の甕である。

瓦質土器 内湾して伸びる 108-17は火鉢で、体部が2条の沈線で3区画され、中段に花文と菱形文を捺印し、上・下段に細密な烈点文を認める。108-18の風呂はより丸みを帯びる外面を丁寧に磨きあげる。これらの資料にはG系の土師質皿が共伴する。同系の皿は土坑143にも認める。

土坑134 (第4図)

越前焼 134-1はお菌黒壺で、体部中央に最大径を持つ胴部に外反気味に伸びる口縁がつく。

土坑123 (第5図)

伊万里 123-1は内面に牡丹唐草文、123-2の染錦の皿は外面に草花文、内面に宝相華文、見込に雲竜文を描き、高台にハリの痕がある。17世紀後半以降のため、伝世品と思われる。

越前焼 123-3は轆轤成形で高台を持ち、口縁部が直立する播鉢で、18世紀末頃のものである。

溝5 (第5図)

唐津焼 灰釉系の皿で、見込の白泥上に銅緑釉を渦巻き状に施す。瀬戸・美濃焼の灰釉皿とC系の土師質皿が伴う。

2) 整地土1・2出土遺物 (第6図 第1表 写真図版第5・6)

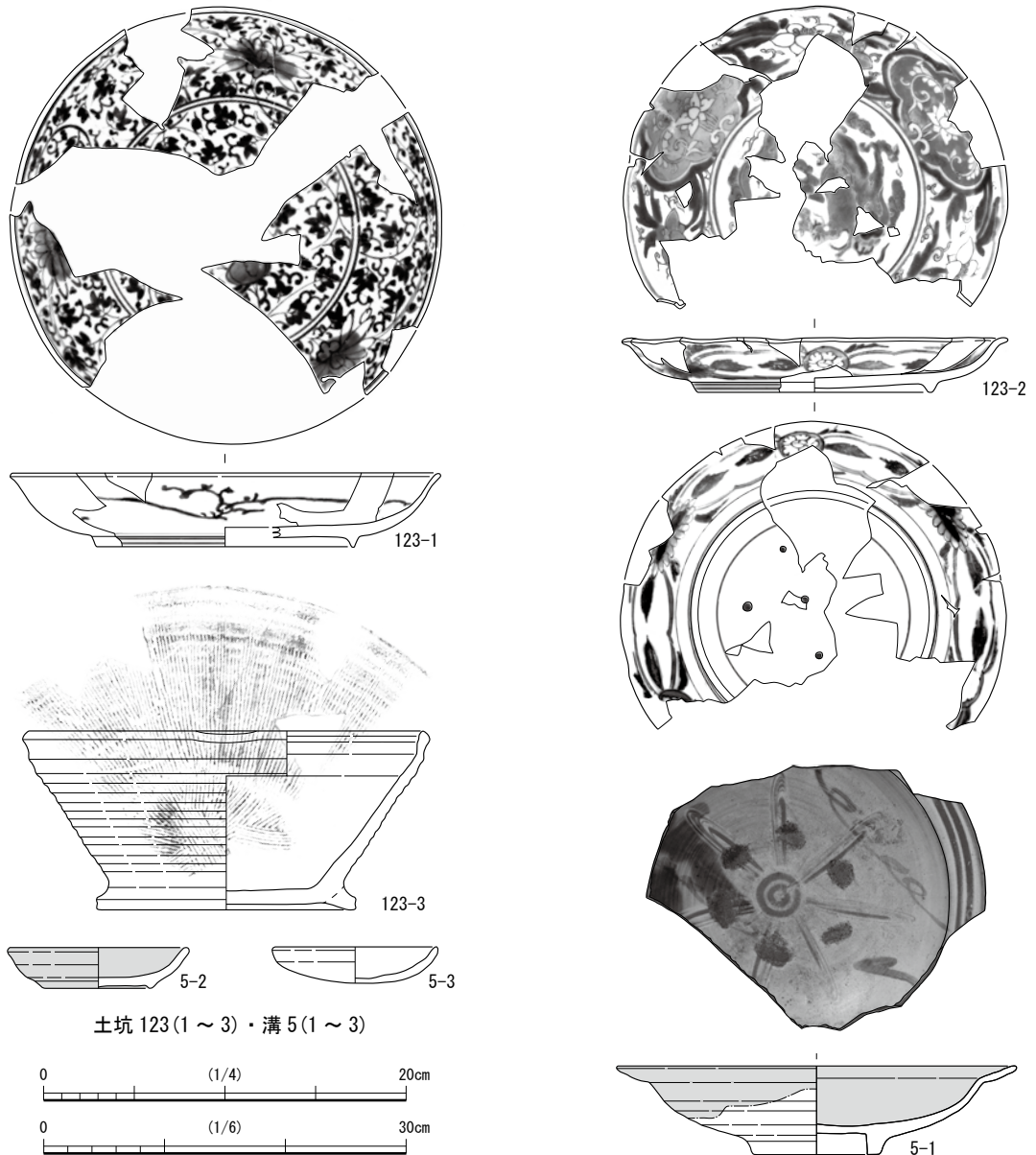
伊万里 整1-1は口縁に雷文、外面に二重格子文を描く小丸型碗で、高台内に福字の示偏が篆書体の偏に変化した銘を持つ。整1-2の碗は花蝶文を伴う家、整1-3の蕎麦猪口は松竹梅を外面に描く。整2-1は小碗、整2-2は大振りの坏で、後者の外面には雪輪文を描き、口縁端部に口紅を認める。

唐津焼 整1-4は外面に山水文を描く高台無釉の京風唐津碗で、17世紀後半のものである。

瀬戸・美濃焼 整1-5～7は端反碗で5は流水文、6は草花文、7は山水文を描く。沈線を認める体部に、灰釉と鉄釉を掛け分ける整1-8は腰鍔碗、整1-9は白泥の梅花文を認める端反碗である。

京・信楽焼 整1-10は灰釉系の釉の上から鉄絵で「風」・「仏」を描く半筒碗である。

産地不明品 整1-11は方形の四隅を窪ます隅入角鉢で、白泥の内外面に岩と文字の鉄絵、青色釉で秋草文を描き、口縁にも同釉を施す。「風」・「蘭」・「芝」の文字を外面に認める。整1-13の土鍋は団子状の脚がつき腰部以下無釉で、整-13の蓋は灰釉系の釉を施す体部内に摘みを貼り付ける。



土坑 123(1～3)・溝 5(1～3)

第5図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区⑤ (縮尺 1/4 1/6 : 123-3・5-1)

越前焼 方形を呈する口縁を持つ整 1-14 は深鉢で、団子状の脚を持つ底部を穿孔し、外面と内面上半に灰釉を施す。同形態で器高の低い整 2-3 の鉢には外面に鉄泥を粗く垂らし掛ける。全面に施釉する製品は幕末以降に認めるものである。

土師質土器 整 1-15・16 と整 2-4・5 は G 系の灯明受け皿で、16 の見込には油痕が残る。このほか同系の皿もあり、道師を表した型成形の土製品も認める。

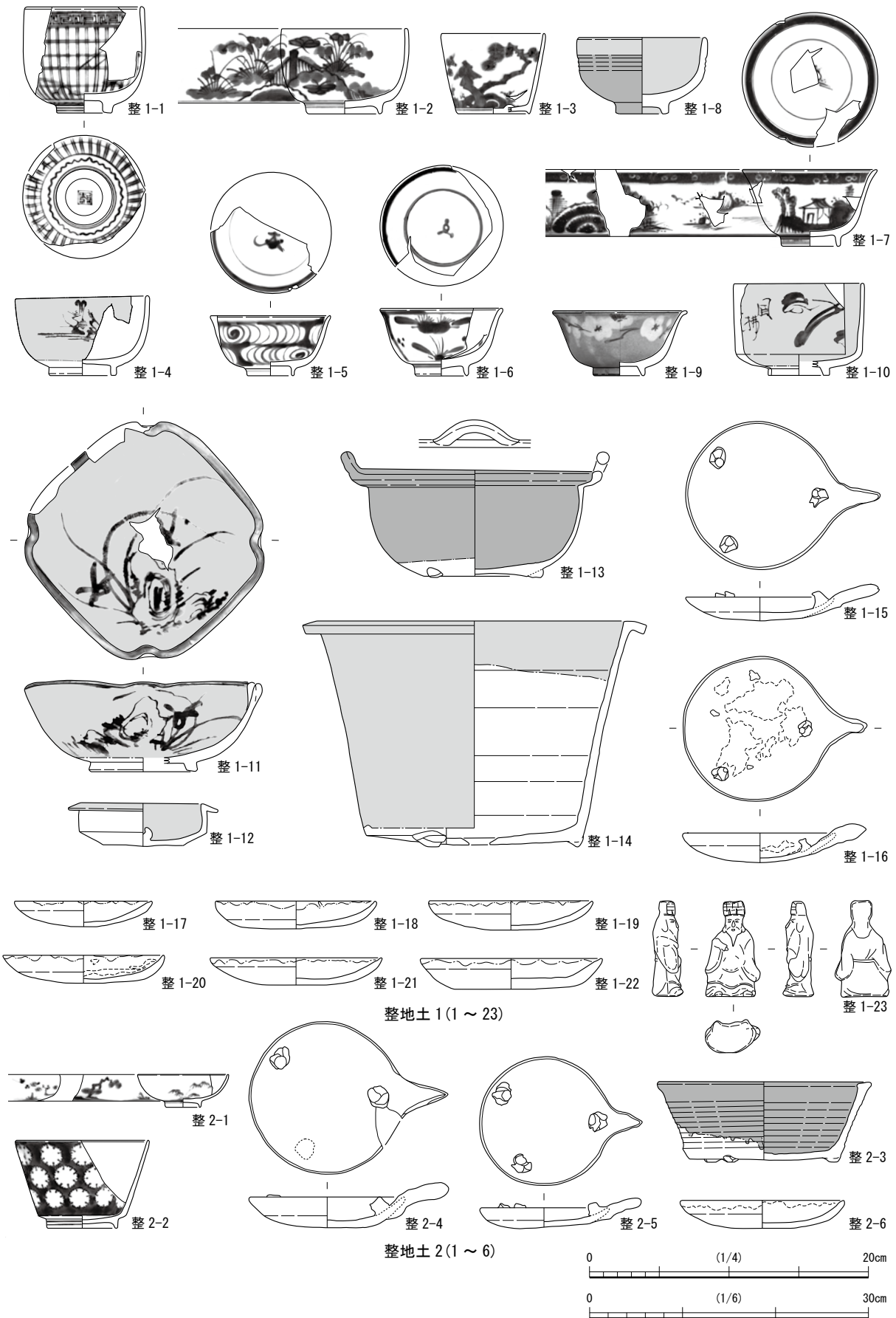
3) 整地土 4 出土遺物 (第7図 第1表 写真図版第6)

伊万里 整 4-1 は口縁内面に放射状の波文、見込に梅枝文を描く碗で、高台内に「大明」銘を持つ。

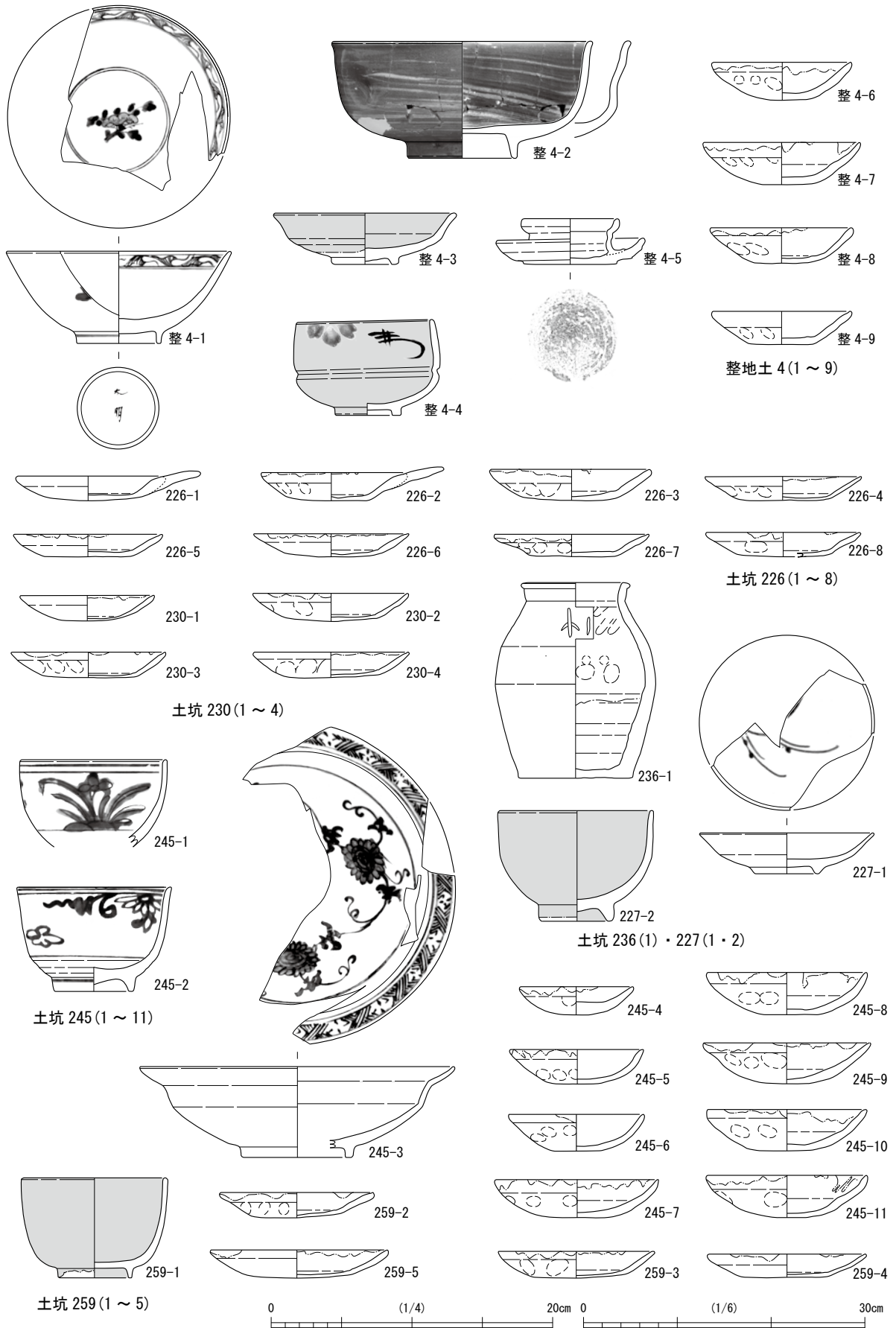
唐津焼 整 4-2 は鉢で内外面に刷毛目を施す。整 4-3 は高台無釉の灰釉皿で被熱痕を認める。

京・信楽焼 整 4-4 は高台無釉の色絵碗で、花の部分は赤、葉の部分は緑色である。

土師質土器 底部に回転糸切り痕を認める轆轤成型の整 4-5 は、やや外反する筒状の体部を貼り付けた皿である。皿部と受け部とも成形痕が顕著に残る。これは G 系のそれ同様、灯明受け皿の可能性がある。整 4-6～9 は C・D 系の皿である。



第6図 土器・陶磁器 A街区15-1調査区⑥ (縮尺1/4 1/6: 整1-4・整2-3)



第7図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区⑦ (縮尺 1/4 1/6 : 236-1)

4) 第2面遺構出土遺物 (第7図 第1表 写真図版第6・7)

土坑 226・230・245・259 (第7図) いずれも土師質皿が多く出土した17世紀後半の土坑である。

土師質土器 226-1～8・230-1～4・259-2～5は、見込と体部との境の圏線を明確に認めるD系の土師質皿で、一乗谷のD類の製作技法をよく受け継ぐ。226-1・2は灯明受け皿である。C系である土師質皿(245-4～11)は底部が丸い体部内面にナデ調整を行うもので、圏線を入れる意識がみられる。系譜は一乗谷のC類の製作技法である。

伊万里 245-1・2は草花文を描く碗で、後者は体部下端に轆轤成形の痕が残る。245-3は肩部が屈曲した体部から内湾気味の口縁に至る大振りの皿で、見込に菊花文を描く。17世紀中頃のものである。

唐津焼 259-1は碗で、灰釉系の釉を全面に施し高台内は平坦である。17世紀後半のものである。

土坑 227・236 (第7図)

伊万里 227-1は見込に草花文を描く皿である。口径に対して高台の幅が狭い特徴を持つ。

唐津焼 土坑 259 出土遺物と同じ灰釉系の釉を施す碗で、17世紀後半頃のものである。

越前焼 236-1は口縁端部が外に張り出す壺で、肩部に傘型の刻文がある。体部外面には鉄泥を全面に施すが、内面は体部下半を密に、上半は頸部のみ粗く塗る。

5) 古代遺物 (第8・9図 第1表 写真図版第7)

須恵器 坏には無台坏と高台坏がある。古2は坏H身、古3～6は坏Aである。4～6は古3よりも底部の屈曲が緩い。古7～10は坏Bで外側に踏ん張り高台を貼り付ける。古11・12は皿でいずれも底部の屈曲が強い。古13～16は坏H蓋で14～16は全体が丸みを帯びる。古17は坏Bの蓋で、やや扁平な摘みが付く。古18のように摘みのない蓋も認める。古19は口縁が垂直な壺で、肩部に沈線が巡る。古20・21は肩部の屈曲の明瞭さと残存部から細口壺であろう。古22は平瓶、古23は上方に伸びる把手が付く甌状の鉢で、削り調整の腰部以下を除きカキメを施す。全て7世紀～9世紀に収まる。このほか、灰釉陶器の耳皿や緑釉陶器の皿もある。

土師器 古26は口縁内端部が肥厚する布留式甕である。古27・28は口縁内面に強いナデ調整により形成された段を数段認める、古29・33は緩く外反する頸部から斜めに開いて口縁へ至る甕で、古31は体部外面にカキメ調整痕が僅かにみられる同形態に長胴甕である。古32は轆轤成型で体部を丸く挽き出した後に底部に削りを施した丸底の甕で、頸部の屈曲が明瞭である。口縁を強くナデて面を形成する平底の小型甕もある。布留甕以外は須恵器と同時期に収まると思われる。

第2節 B街区 16-1 調査区出土の土器・陶磁器 (第9図 第2表 写真図版第8)

包含層出土遺物 (第9図) 包1は青磁の仏華瓶で、強いナデ調整により口縁端部が顕著に窪む。

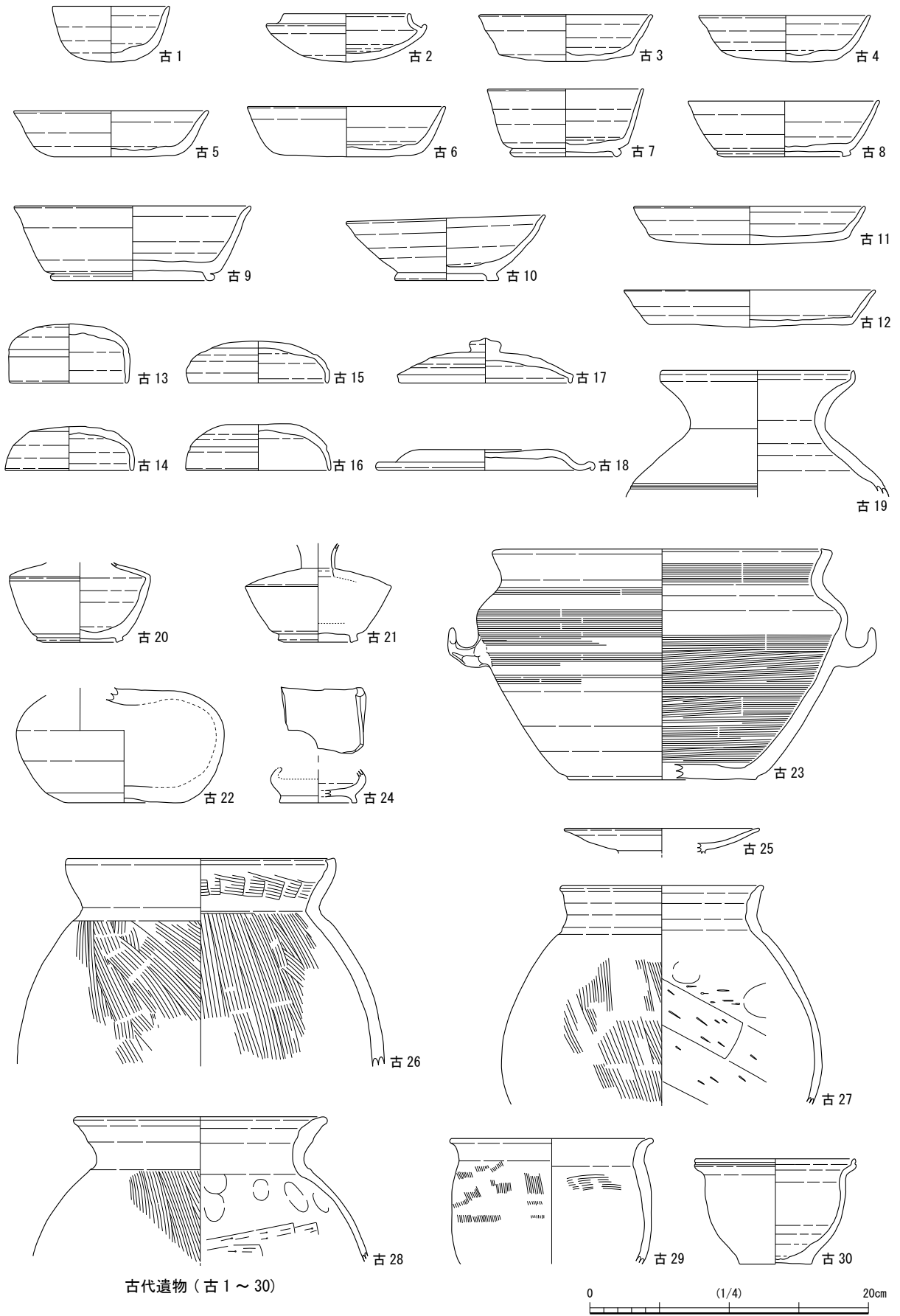
溝 112・115 16世紀末～17世紀初頭の遺物がまとまる。

唐津焼 腰部以下無釉で体部が外反する 112-1の皿と灰釉系の釉を施す襷皿がある。

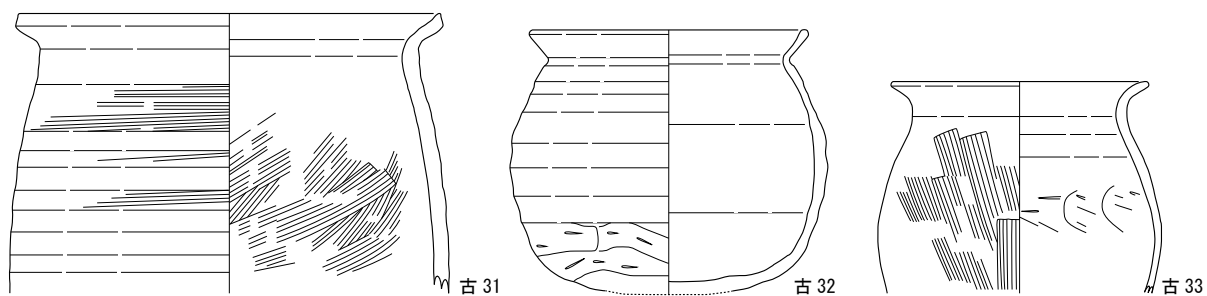
瀬戸・美濃焼 112-3は体部が直線的で口縁が直立する天目茶碗、112-4は筒型の志野皿である。

越前焼 115-1は鉄泥を施さない壺で、口縁を横へと引き伸ばす。112-5は水平な口縁下に沈線の巡る搦鉢で、搦目は摩滅で搦り減っている。115-2は内傾する口縁下に深い沈線の巡る搦鉢で、これらは17世紀初頭頃と時代的に古い様相を持つ。上記の瀬戸・美濃焼とほぼ同時期のものである。

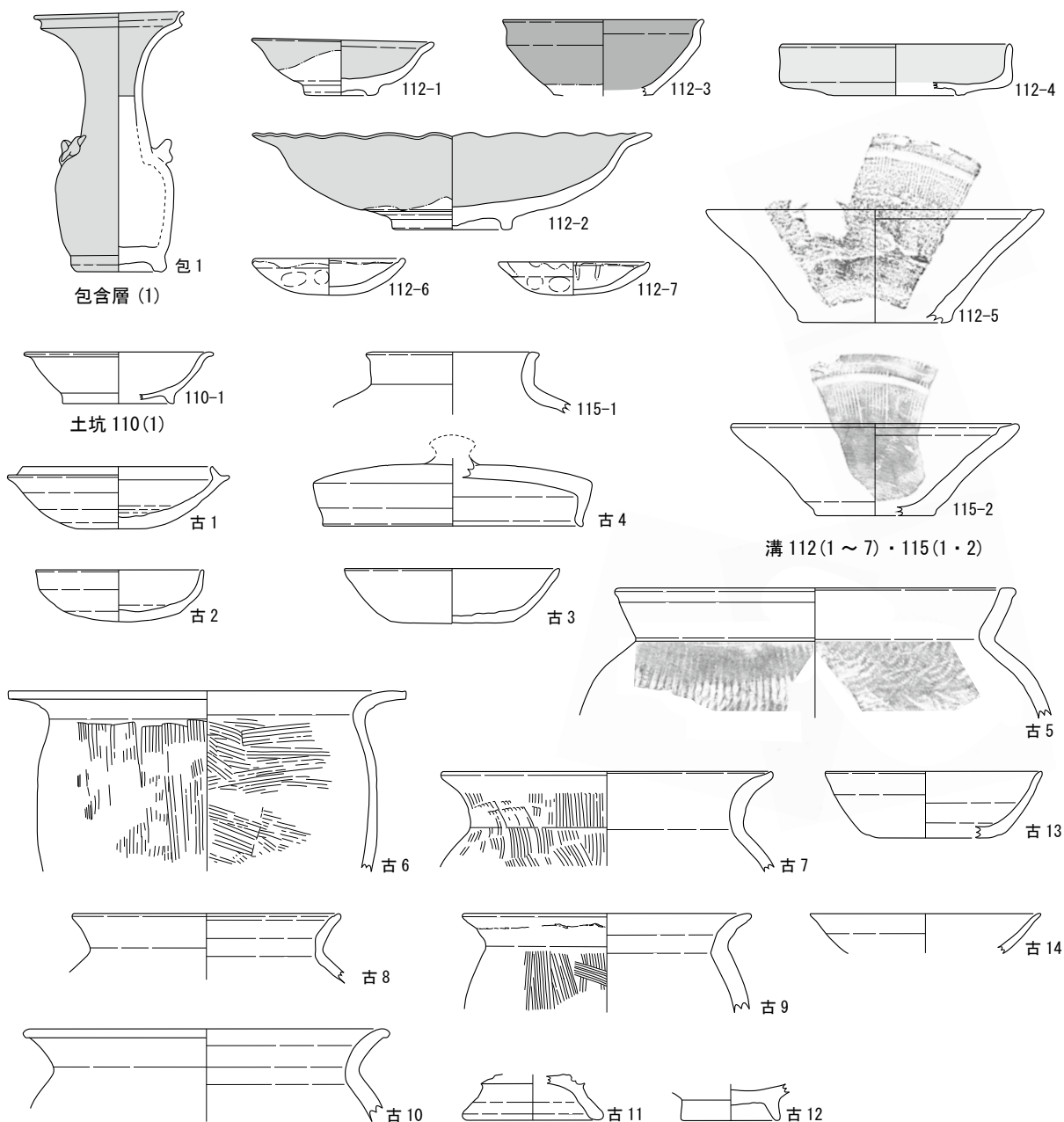
土師質土器 112-6・7はC系1の土師質皿で、口縁端部を摘み上げる古い様相を認める。なお土坑 110からは体部が外反する白磁皿のE群が出土している。



第8図 土器・陶磁器 A街区15-1 調査区⑧ (縮尺1/4)



A街区 15-1 調査区出土遺物 (古31 ~ 33)



A街区 16-1 調査区出土遺物 (古1 ~ 14)

第9図 土器・陶磁器 A街区 15-1 調査区⑨・B街区 16-1 調査区 (縮尺 1/4 1/6 : 112-1・115-2)

古代遺物（第9図）

須恵器 古1は坏H身、古2・3は坏A身である。古4は体部が屈曲し口縁に至る蓋で、短頸壺に伴うものである。口径の広い古5は甕で、焼成の甘い体部両面に叩き調整の痕がみられる。

土師器 古6はゆるく内湾する体部から斜めに開いて口縁へ至る甕で、端部に面を持つ。古7～10は古6より頸部の屈曲が強い甕で、古9は口縁外面に接合痕がある。黒色土器や緑釉陶器碗も認める。

第3節 C街区16-1調査区出土の土器・陶磁器

1) 表土・包含層出土遺物（第10図 第3表 写真図版第8）

伊万里 包1は葉文が緑、花文が赤色の色絵の八角小鉢である。包2は輪花状口縁の皿で、体部内面に瑞果文、見込に花文を描く。包3は見込を釉剥ぎする高台無釉の波佐見産の青磁皿である。

京・信楽焼 表1は半筒碗で、体部内面の段上に鉄釉で1条の沈線を施す。

産地不明品 表2は灰釉系の釉を施した坏、表3は釉上に鉄絵で草花文を描いた香炉である。

土師質土器 包4はG系の灯明受け皿、包5は坏で、丸みのある底部から外反して伸びる体部を持ち、口縁端部を摘み上げる。G系の土師質皿も認める。

2) 第1面遺構出土遺物（第10～12図 第3表 写真図版第8～10）

土坑1・2（第10・11図）複数が切り合う土坑で、18世紀後半～19世紀にまとまる遺物群である。

伊万里 1-1・2は前者は草花文とコンニャク印判の若松文、後者は窓内に人物と草花文を描く碗、1-3は見込に五弁花文を持つ広東碗である。1-4は菊散し文、2-1は梵字文を描く碗で18世紀後半以降に多い。腰部に花卉、外面に羽子板と羽根を描く1-5・6は紅皿であろう。整1-9は表に山水文を巡らす碗蓋である。2-2は段重蓋で表に牡丹唐草文を描く。

唐津焼 外内面に刷毛目を施す1-11は鉢で、見込は中央を除いて釉剥ぎする。

瀬戸・美濃焼 1-12は灰釉系の釉上に呉須を掛け流す碗、2-3は鉄絵で草文を描く深鉢である。

京・信楽焼 体部が湾曲する1-13は色絵碗で、灰釉系の釉上に緑と赤色で草花文を描く。体部には印がみられ、無釉の高台内に「上の」の墨書がみられる。

越前焼 1-14は轆轤成形で高台を持ち口縁がやや直立する播鉢、1-15・2-5は体部が内湾して立ち上がる鉢で、前者は外面に粗い刻線を巡らし、後者は肩部に円環状の貼り付け文を持つ。1-16・17は体部が直線的に伸びて口縁で屈曲する深鉢で、口縁上面に沈線が巡り底部が穿孔される。口縁部が垂直に屈曲する甕は沈線を認める外面に印花文と波状文と列点文を施し、藁灰釉を鉄釉の上に流し掛ける。

土師質土器 G系の土師質皿（1-19～24）や印銘の消失した焼塩壺（2-8）を認める。

土坑8・9・22・25（第11・12図）

伊万里 8-1は笹文を描く碗、8-2は外面に若松文を描く半筒碗、25-1は外面に菊花文を重ねて描く坏、22-1は見込を釉剥ぎする高台無釉の波佐見産の皿である。

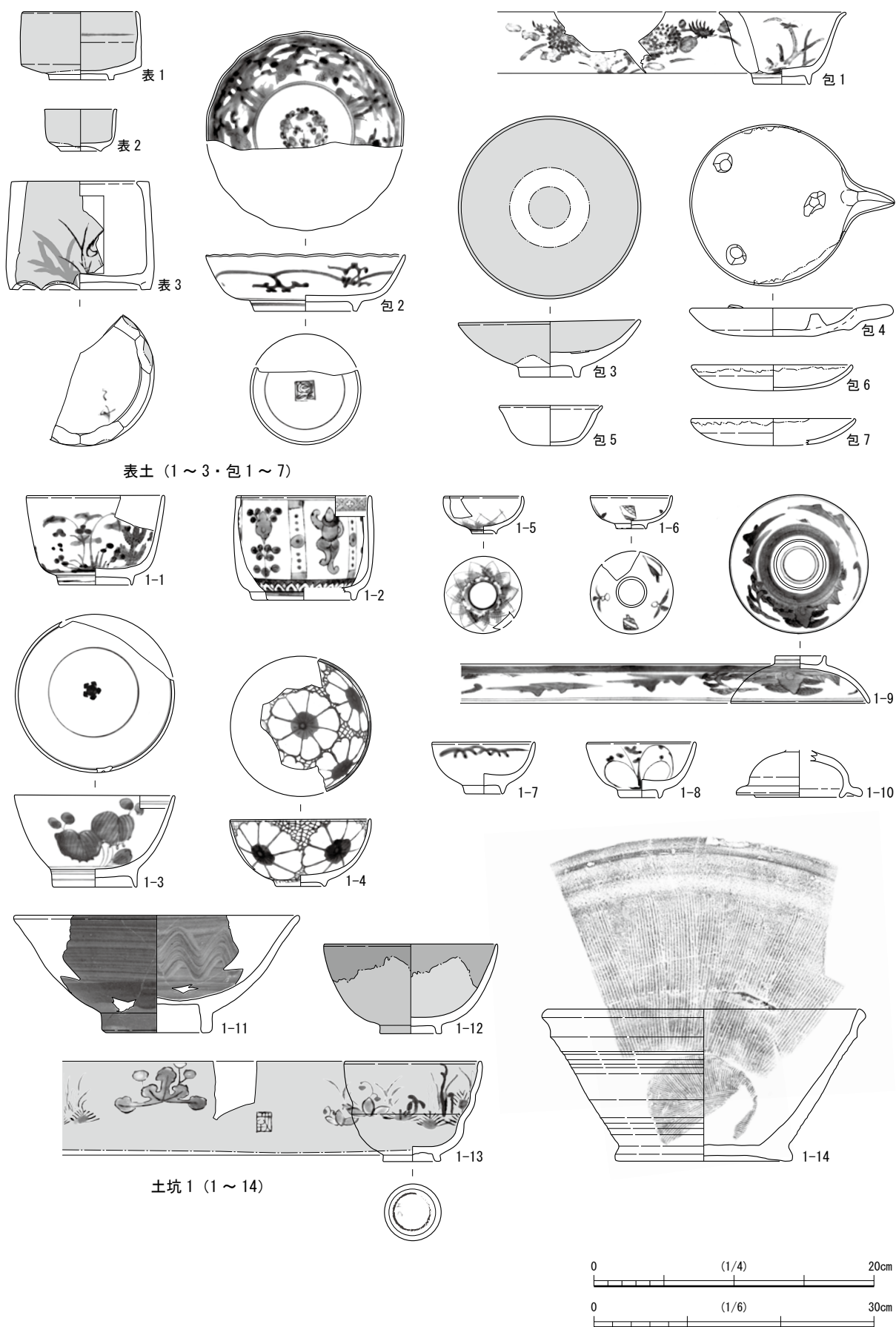
唐津焼 9-1の碗は彫唐津で刻文を持つ全面に灰釉系の釉を施す。漆継ぎされ見込に目痕が残る。

瀬戸・美濃焼 25-2は餌皿、25-3は内外面に灰釉系の釉を施す鉢で、半円形状の把手を認める。

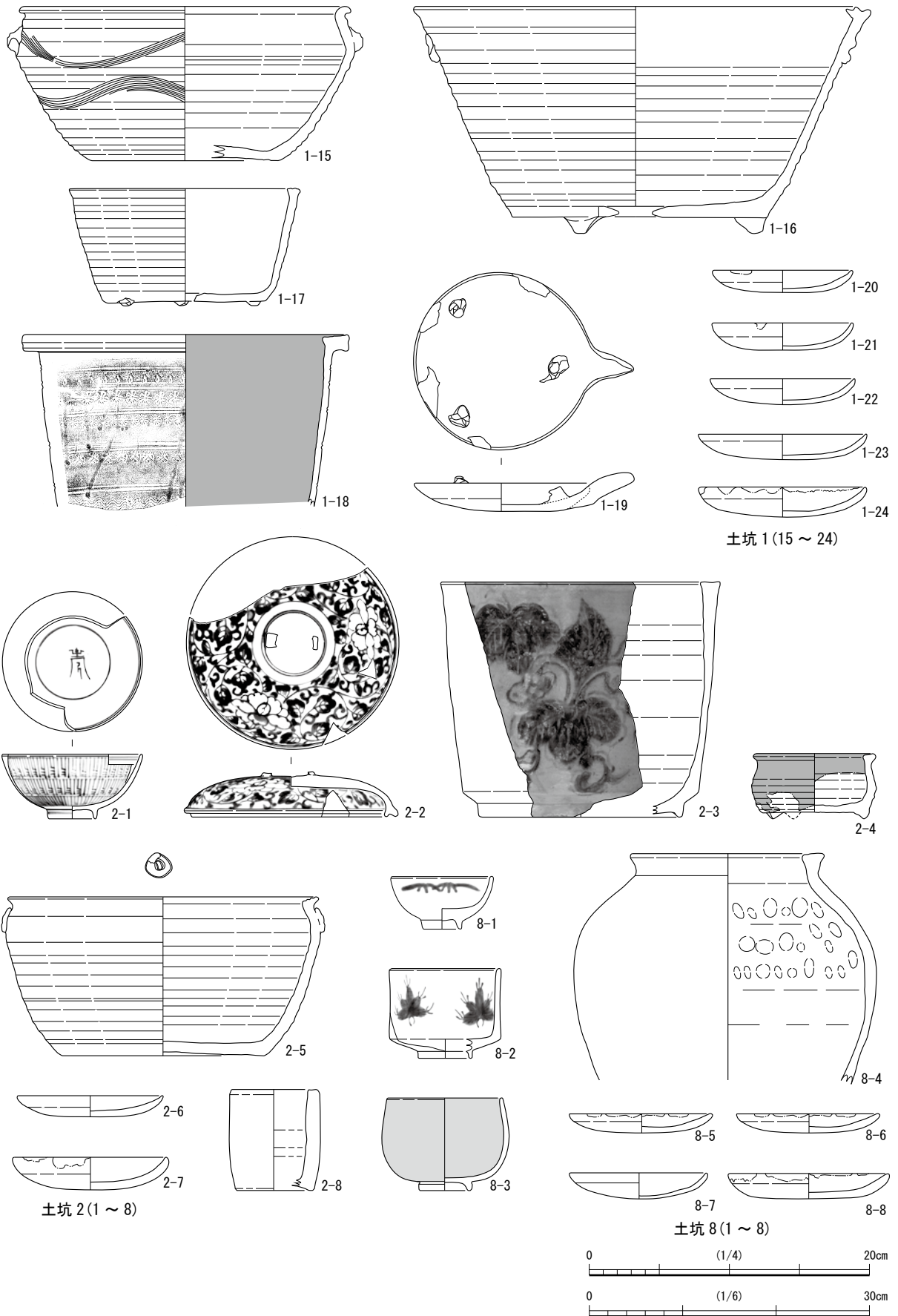
京・信楽焼 内外面に灰釉系の釉を施す8-3は、高台無釉の半球碗である。

越前焼 8-4は中甕、9-2は播鉢、25-6は底部を穿孔した深鉢で、19世紀前葉のものである。

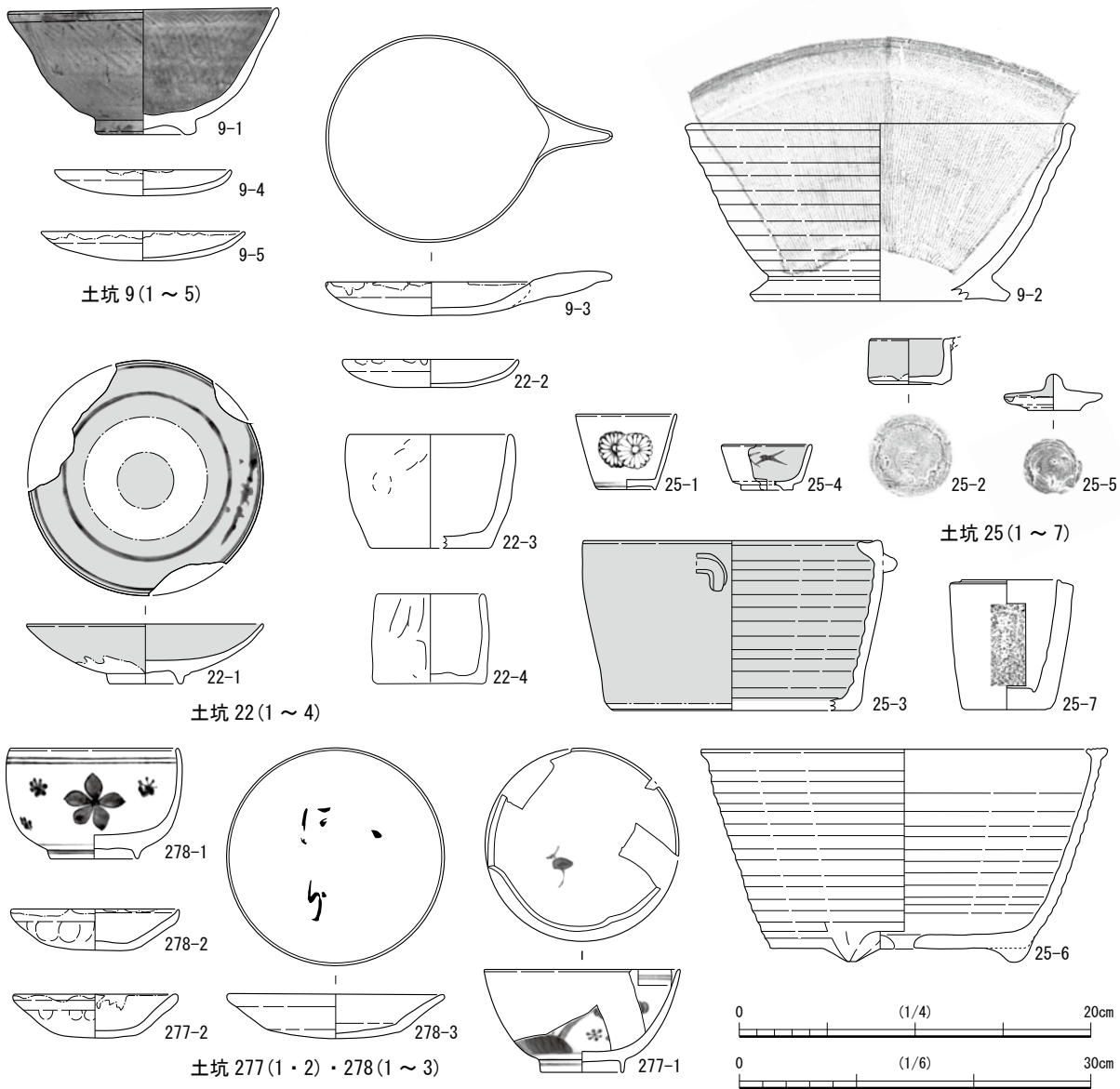
土師質土器 9-3は突起を持たないG系の灯明受け皿、25-7は摩耗した印を認める焼塩壺、22-3・4は手づくね成形の筒型土器で同器種であろう。



第10图 土器・陶磁器 C街区16-1 調査区① (縮尺1/4 1/6:1-14)



第11図 土器・陶磁器 C街区16-1調査区②(縮尺1/4 1/6 : 1-15 ~ 18・2-5・8-4)



第12図 土器・陶磁器 C街区16-1 調査区③(縮尺1/4 9-2・1/6:25-6)

土坑277・278 (第12図)

伊万里 278-1は外面に花散し文を描く碗、277-1は草花文を描く碗と思われる。

土師質土器 278-2はC系1、278-3はD系2の土師質皿で、見込に判読不明の墨書を認める。

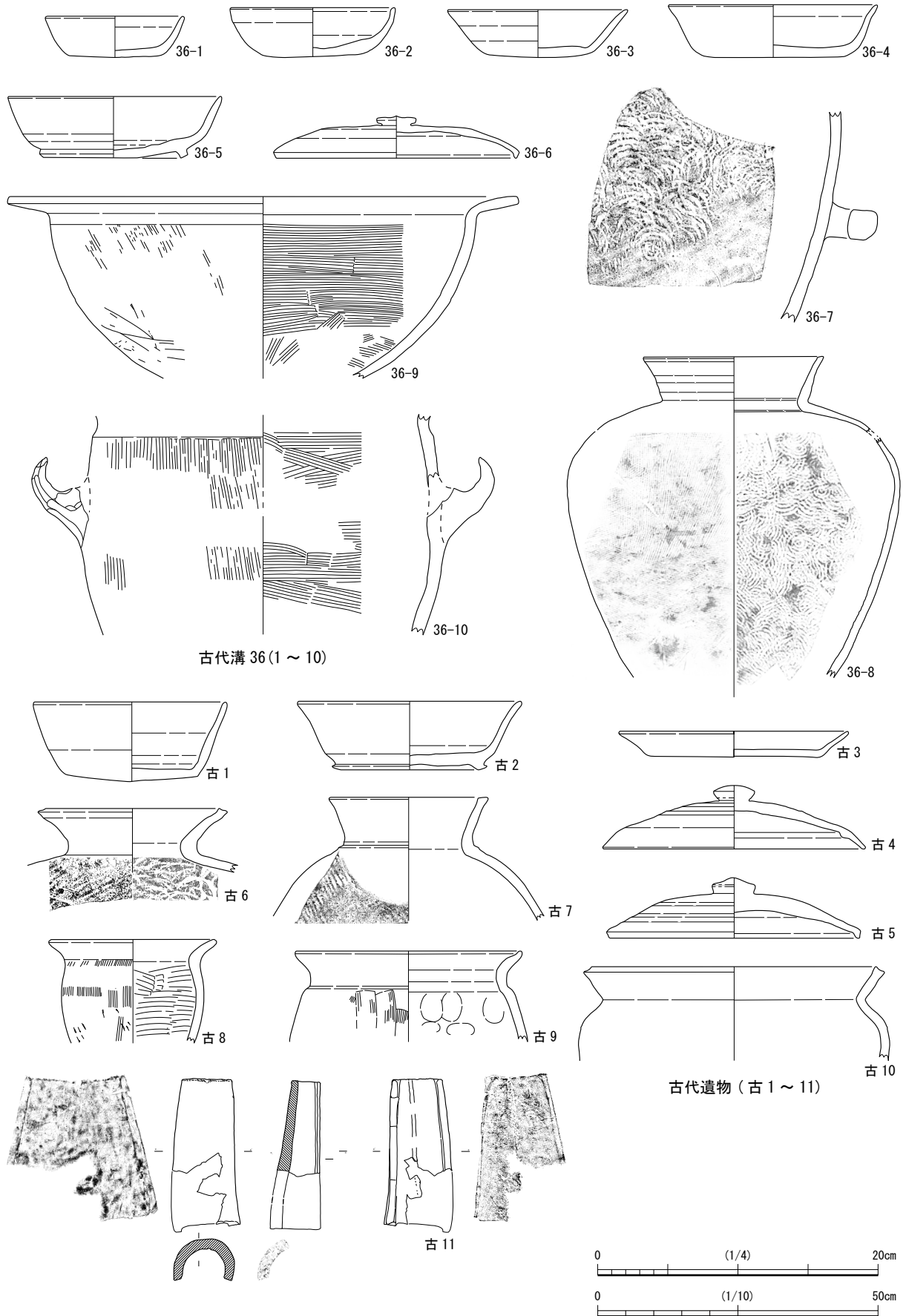
3) 古代遺物 (第13図 第3表 写真図版第10)

須恵器 36-1～4は坏A身、36-5は坏B身で外側に踏ん張り高台を貼り付ける。36-6は坏B蓋で、器高が低く扁平な摘みが付く。36-8は僅かに張った肩部から直線的に伸びる口縁を持つ中甕である。36-7は把手付きの甕である。同遺構以外には返りを持つ古4と返りを持たない古5の山笠状の坏B蓋が特徴的である。このほかに頸部の屈曲が強く肩部が張る古6、緩やかな体部を持つ古7の壺がある。

土師器 36-9は丸みを帯びる体部から斜めに開く幅広の口縁を持つ鍋、36-10は体部最大径の部分に把手が付く甕である。古8は小甕で内面の篋調整が粗い。古9は強いナデ調整で体部と頸部の境界が明瞭である。古10は肩部が張り、頸部が強く屈曲する甕である。

瓦 古11は丸瓦で内面端部に面を持ち布目痕がみられる。

第3節 C街区16-1調査区出土の土器・陶磁器



第13図 土器・陶磁器 C街区16-1調査区④(縮尺1/4 1/8 : 36-8 1/10 : 古11)

第4節 C街区 15-2 調査区出土の土器・陶磁器

1) 第1面遺構出土遺物(第14～16図 第4表 写真図版第11～13)

溝36(第14図)

伊万里 36-1は肩部が強く屈曲し直立する皿で、口縁外面に対になる草花文、見込に竜文を描く。36-2は皿で見込の圏線内に柳文を描く。なお前者の器面はやや青みを帯びる。

唐津焼 36-3は灰釉系の釉を施す皿である。強いナデにより体部内面に凌が巡る。

土師質土器 36-4・5のC系1、36-6・7のC系2、36-8・9のC系3がある。

土坑48・76・150、井戸56(第14図)

伊万里 48-1は碗で、見込の圏線内に芽荷文、高台内に「大明」銘を認める。48-2は皿で、内面に折り花文、見込に花文を描く。56-1は外面に緻密な花唐草文を描き、高台内に「渦福」銘を持つ。口縁に鋸歯文がある150-1の碗は、体部外面の鍋内に連続花文を描く。17世紀前半頃に認める特徴を有する。これらの遺構出土の伊万里には古い様相を認める。

産地不明品 56-2は鉄釉の短頸壺で、丸みのある体部に直立する口縁を持つ。腰部と内面は無釉で、器肌が茶褐色に良く焼き締まる。76-1は土瓶で、灰釉系の釉の上から銅緑釉を施し、無釉の底部外面に「大乙ひな」と記す。

土坑156・166(第14～16図) 廃棄土坑出土の18世紀後半以降の遺物群である。

伊万里 156-1・166-4は碗で、前者は外面に蓮池文、見込に鷺、後者は外面に矢羽根文を描く。156-2・3と160-5は見込に五弁花文を持つ半筒碗で、前者は輪宝繫文、後者は菊花文を描く。二重格子文の166-6も含めて湯呑碗である。湯呑碗より口径の広い166-1～3のうち1は外面に鼓と草花文、2は草花文、3は福壽文を、見込にそれぞれ草花文、昆虫文、扱花文を描く。116-8～11は碗蓋で、裏に四方櫛文を認める1と8はセット関係である。166-9は表に粗描唐草文、裏に麒麟、摘みに「大明成化年製」銘、166-10は表に芭蕉文と花文、裏に源氏香を描く。このほか裏に五弁花文を持つ青磁蓋、166-12のように表に唐草文を描く段重蓋も認める。156-4・166-7は蛇の目凹形高台を持つ皿で、前者は内面に亀甲文、見込に山水文、後者は内面と見込に笹文を描く。156-5は幅広の高台外面と口縁内面を除き青磁釉を施す香炉である。

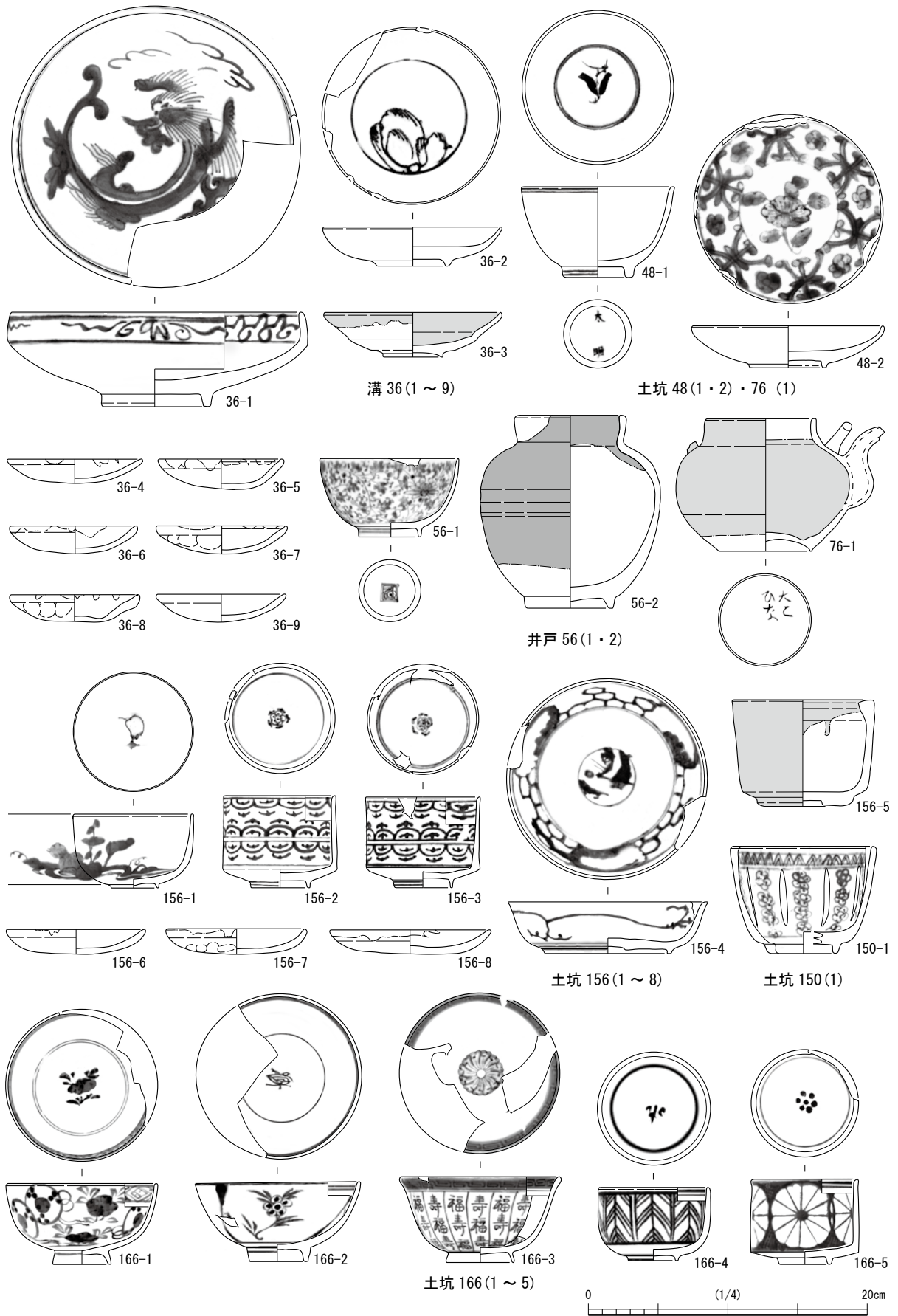
唐津焼 166-13は無釉の高い高台を持ち、内外面に刷毛目を施す碗である。166-14は灰釉系の釉を全面に施す呉器手碗で、17世紀後半頃のものである。

瀬戸・美濃焼 166-15の端反碗は外面に連弁文、見込に四葉文を描く近代のものである。116-16・17は体部が垂直に伸びる香炉で、前者は体部の下部と底部を削り高台を造りだす。屈曲部より上の体部外面、口縁内面に灰釉系の釉を施す。同形態の後者は無釉の底部に5脚を貼り付け、外面に草花文を描く。これらの香炉もほかの遺物と同時期のものであろう。

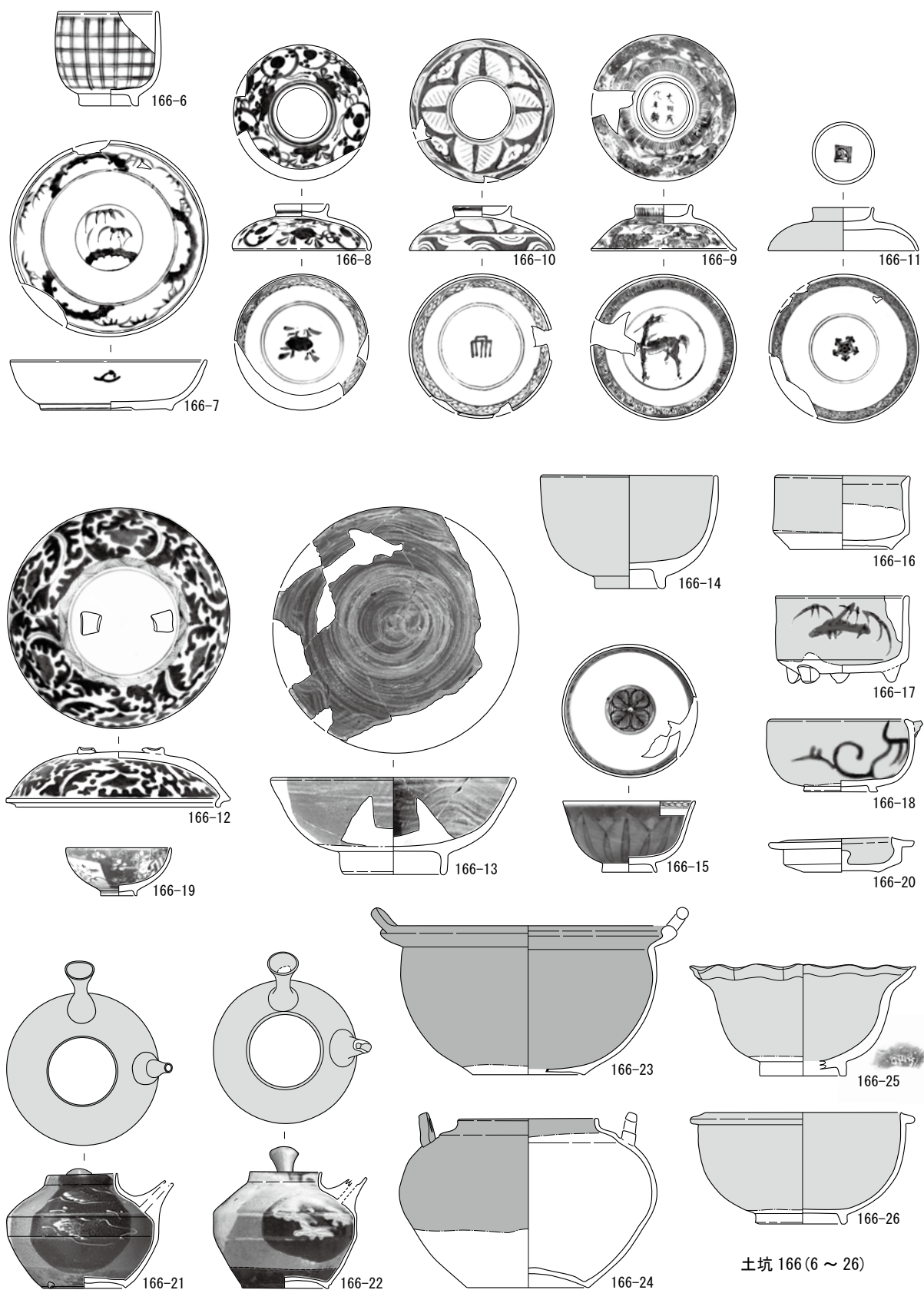
九谷焼 166-19は色絵碗で、扇型の窓内に同一意匠の秋草文を描く。

京・信楽焼 166-18は灰釉系の釉上に鉄絵を描く高台無釉の片口鉢で、見込に目痕が3つ残る。166-21・22は急須で灰釉系の釉上に白泥と鉄釉を施す。後者は鉄釉の昆虫文、白泥の瑞果文を認める。底面が無釉の両者は信楽窯の汽車土瓶と同様のものであろう。

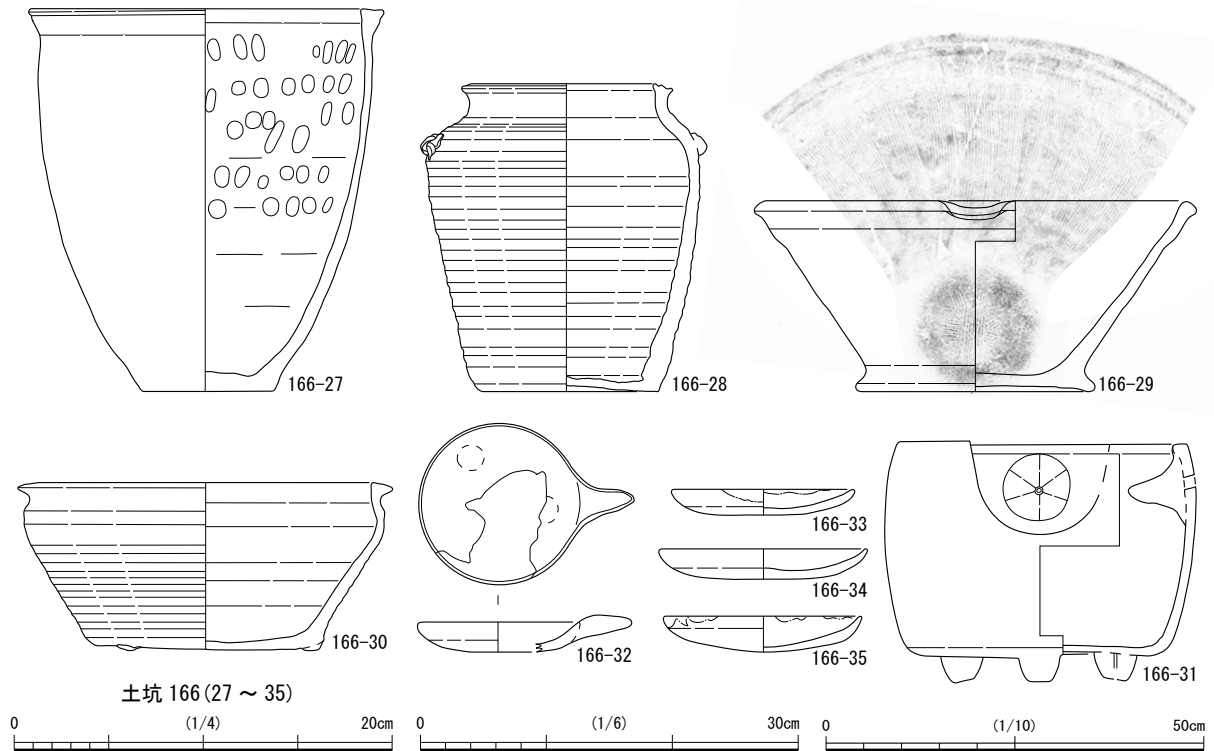
産地不明品 166-23は内外面に鉄釉を施す土鍋、166-24は腰部以下と内面が無釉の土瓶で、口縁下の段から一部分に灰釉を掛ける。166-25は鬘状口縁を持つ灰釉系の鉢で、「安居」印を腰部を持つ。166-26は鉄泥を施す高台以外に灰釉系の釉を施す鉢で、見込に目痕が3つ残る。



第14図 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑤(縮尺1/4)



第15图 土器・陶磁器 C街区15-2 調査区⑥(縮尺1/4)



第16図 土器・陶磁器 C街区 15-2 調査区⑦(縮尺 1/4 1/6 : 166-28 ~ 31 1/10 : 166-27)

越前焼 166-27 は口縁に最大径を持つねじたて成形の中甕で、口縁端部を僅かに横に引き出す。166-28 は口縁上面に2条の段が巡る轆轤成型の小甕で、肩部に撚り紐を表現した貼り付け文を認める。166-29 は貼り付け高台を持つ播鉢で体部から口縁に直線的に伸びる。166-30 の鉢は体部が内湾する。

土師質土器 156-6 ~ 8、166-32 ~ 35 はG系の土師質皿で、32 は受け部が剥離した受け皿である。

瓦質土器 166-31 は内面に受け部、底部に脚を3つ持つ風炉で、U字型の窓を認める体部、脚部中央に穿孔がある。

2) 整地土1 出土遺物 (第17図 第4表 写真図版第14)

伊万里 整1-1 は外面に草花文、高台内に銘を認める碗、整1-2 は内面に蝶を描く皿でくらわんか手である。整1-3 は蛇の目凹形高台を持つ稜花皿で、内面に芭蕉文、見込に萩と月を描く。白磁の碗蓋の整1-4 は、摘みの圏線内に銘を認める。草花文と芭蕉文が巡る高台無釉の瓶もある。

瀬戸・美濃焼 整1-6 は端反碗で、雲文内に竜文を描く。

京・信楽焼 高台無釉の灰釉系の整1-7・8の碗の后者は、見込に赤絵で葉文、鉄釉で湖畔を描く。

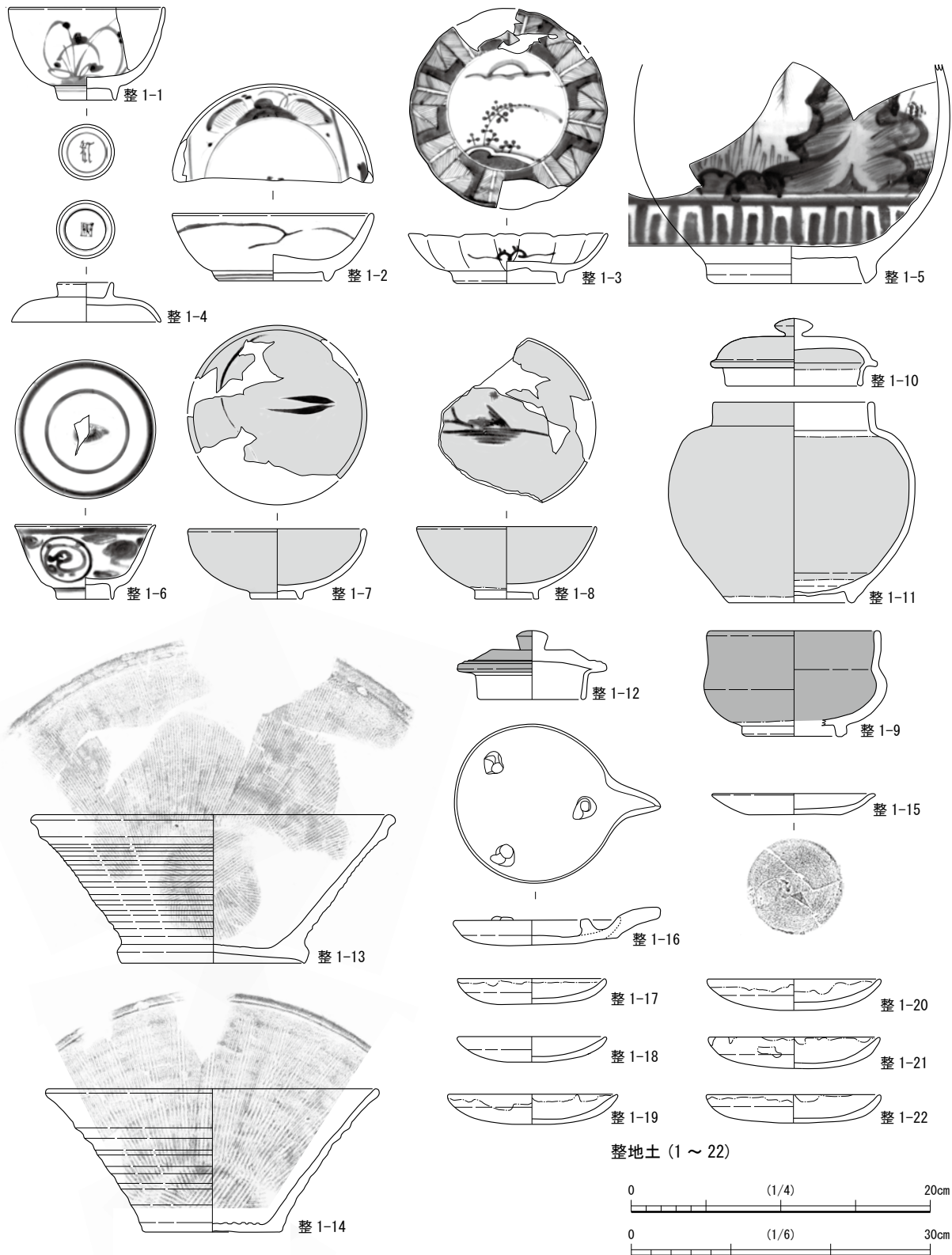
産地不明品 口縁内外、口縁内面と見込が無釉の整1-10・11 は短頸壺である。整1-12 は宝珠型の摘みを持つ土瓶蓋で、鉄釉を施す。このほか体部がやや窪む鉄釉碗がある。

越前焼 整1-13 は貼り付け高台、整1-14 は先細り丸みを帯びる口縁を持つ播鉢である。

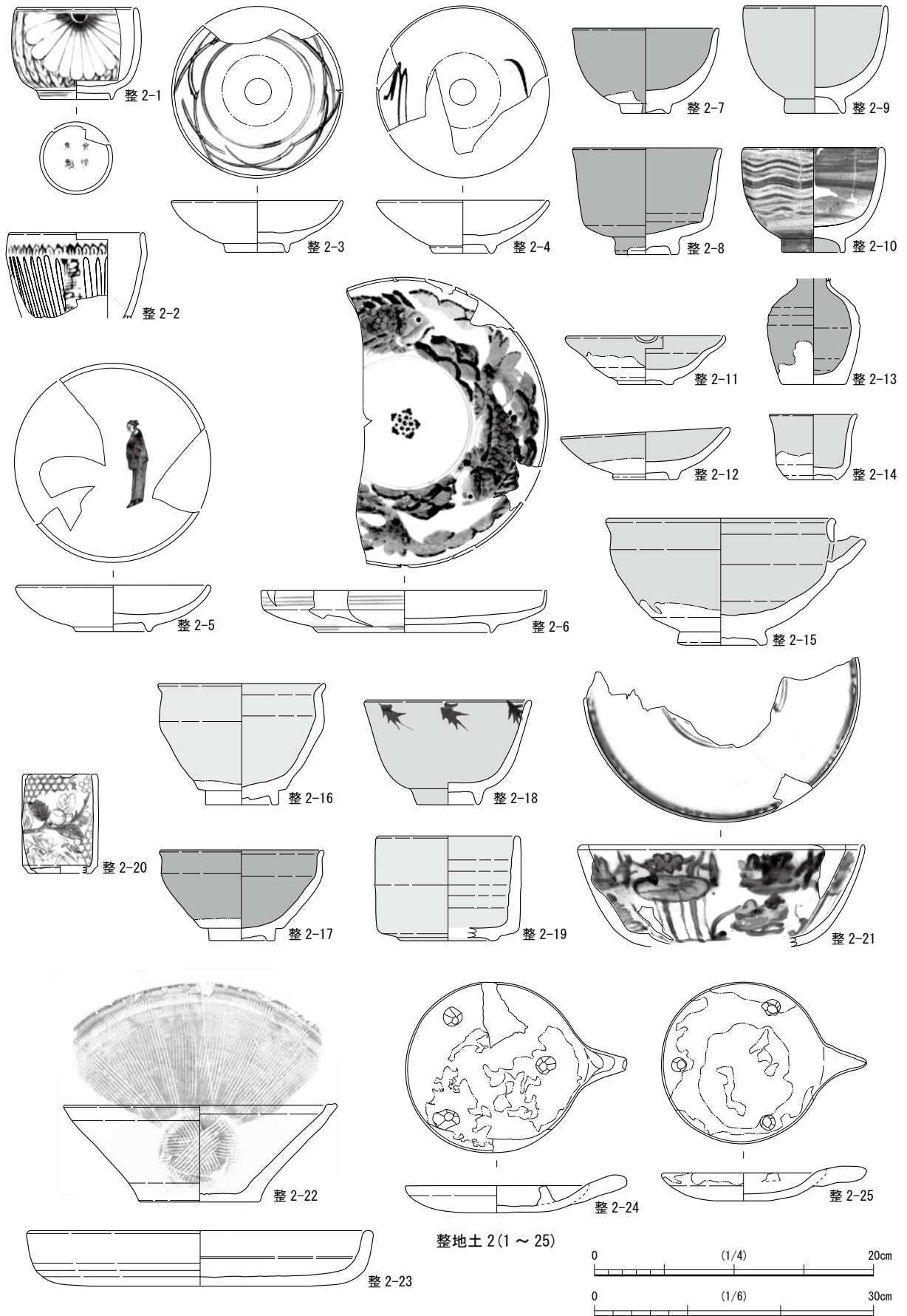
土師質土器 整1-16 はG系の灯明受け皿で、底部が平坦で体部が直線的な皿もみられる。

3) 整地土2 出土遺物 (第18・19図 第4表 写真図版第14・15)

伊万里 整2-1 は半菊と矢羽根文を外面に描き、高台内に「宣徳年製」銘を持つ。整2-2 は体部外面の鎬内に福寿文を認める。整2-3・4 は見込を釉剥ぎする皿で、前者は内面に桧垣文を描く。高台無釉の后者は波佐見産である。見込に人物文を描く整2-5、草魚文を描く整2-6の皿もある。整地土1 と異なり一時期古い様相を含む特徴を認める。



第17图 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑧(縮尺1/4 1/6: 整1-13・14)



第18図 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑨(縮尺1/4 1/6:整2-23)

唐津焼 整2-7は高台無釉の鉄釉碗、整2-8は腰部が屈曲する鉄釉の半筒碗、整2-9は灰釉系の呉器手碗、整2-10は刷毛目碗である。整2-11は窪みが3つある口縁を持つ灰釉系の灯明皿、整2-13は腰部以下無釉の鉄釉瓶、整2-15は高台無釉の灰釉の片口鉢で、口縁端部を横へ摘み出す。整2-14の坏も含めて17世紀後半に収まる。

瀬戸・美濃焼 整2-16は内外面に長石釉、整2-17は鉄釉の天目茶碗で高台は無釉である。整2-18は高台内面以外に灰釉系の釉を施し、口縁外面に鉄絵で草文を描く碗、整2-19は全面に長石釉を施す半筒碗である。

京・信楽焼 整2-20は色絵瓶で、灰釉系の釉の外面に金泥で瑞果文、緑色の笹文と松垣文を描く。

中国製品 外面にやや滲む蓮池水鳥文を描く整2-21は彰州窯の鉢で、貫入を認める。

越前焼 整2-22は水平な口縁下に不明瞭な段が巡る播鉢である。17世紀前半頃のものであろう。

土師質土器 整2-23は直立気味な体部に1条の沈線が巡る焙烙で、外面下方に回転削りを施す。整2-24・25はG系の灯明受け皿、整26～29はC系、30はD系で圏線を認める。整2-31～33はG系の土師質皿、整2-34は体部外面の指頭痕が顕著な焼塩壺である。

第4) 第2面遺構出土遺物 (第19図 第4表 写真図版第15・16)

石組水路 178 (第19図) 17世紀後半頃の遺物でまとまる遺物群である。

伊万里 178-1は外面に草花文を描く碗である。

唐津焼 178-2は口縁が強く外反する碗で、無釉の腰部に明瞭な回転削り痕を認める。178-3は高台を除くやや外反する体部全面に灰釉系の釉を施す呉器手碗である。178-4は胎土目積みの灰釉系の皿で、腰部以下は無釉である。178-5は見込屈曲部に段の巡る溝縁皿、178-6は口縁部を横に引き出す溝縁皿である。後者は外面に灰釉系の釉、内面に刷毛目を施して銅緑釉でオモダカを描く。

瀬戸・美濃焼 178-7は長石釉、178-8・9は鉄釉の天目茶碗で高台は無釉である。見込の釉を拭う178-10は灰釉皿で、高台内に窯道具の痕が残る。17世紀中頃に収まる。

越前焼 178-11はお歯黒壺で肩部に窯印を認める。178-12は強いナデを施すことで口縁が直立気味に伸びる播鉢で、上面に面を持つ。17世紀中頃に収まる。

土師質土器 178-13・14はC系2の土師質皿である。

土坑 177・262・299、石組溝 229・361 (第19図) 道路西側の区画溝出土の遺物も含む。

伊万里 177-1は六角皿で、見込の2重圏線内の上半分に花文を描く。

唐津焼 299-1は無釉の碁笥底の高台以外に灰釉系の釉を施す胎土積みの皿、262-1は成形後に口縁の四隅を変形する絵唐津四方向付で、段が巡る内面と見込に菖蒲文を描く。見込に釉が溜まる361-1は高台無釉の灰釉碗、361-2は腰部を斜めに削り、体部に灰釉を施す坏である。四方向付は伊万里が普及するまで瀬戸・美濃焼とともに多様された。

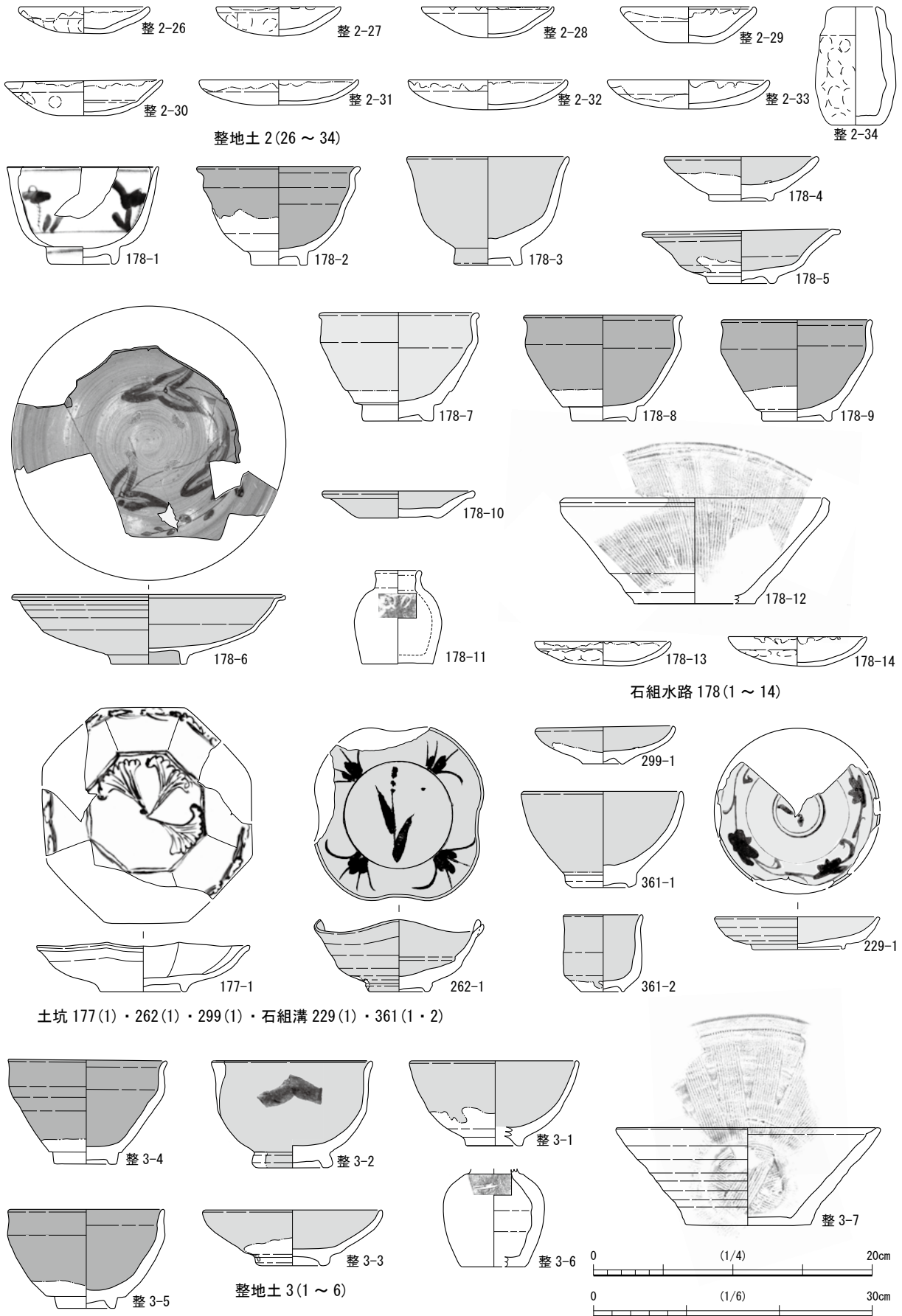
瀬戸・美濃焼 229-1は体部全面に長石釉を施す皿で、内面に鉄絵で唐草文を描く。

5) 整地土3出土遺物 (第19図 第4表 写真図版第16)

唐津焼 整3-2は口縁が外反する高台無釉の灰釉碗で、体部外面に鉄絵を認める。整3-1の灰釉碗のほか、胎土目積みの灰釉皿もある。

瀬戸・美濃焼 整3-4・5は鉄釉の天目茶碗で高台は無釉である。

越前焼 整3-6はお歯黒壺で、肩部に窯印を持ち、内面に鉄分が残る。整3-7は口縁が内傾する播鉢で口縁下に浅い段が巡る。



第19図 土器・陶磁器 C街区15-2調査区⑩(縮尺 1/4 1/6 : 178-6・12、整 3-6・7)

第5節 D街区 15-2 調査区上層出土の土器・陶磁器

1) 第1面遺構出土遺物(第20図 第5表 写真図版第17)

小穴106・土坑107(第20図)

土師質土器 見込に判読不明の墨書を記す106-1は土師質皿で、106-2・107-1ともC系1に属する。

石組井戸77・土蔵基礎81(第20図)

伊万里 77-1は碗蓋で表に山水文を描く。81-1はくらわんか手の碗で外面に梅枝文、81-2は大振りの碗で、外面に鶴と亀甲文、見込に円形松竹梅を描く。81-3は碗蓋で、表に牡丹文を描く。

瀬戸・美濃焼 77-2は高台無釉で型成形の輪花皿である。81-4は直立する口縁を持ち、底面を除き灰釉系の釉を施し見込に鉄絵で草花文を描く行灯皿である。81-5は灰釉系の釉を施す蓋で、表に鉄釉を2重圏線状に施す。蓋とセットになる81-6は筒型の鉢で、釉葉の施文は4と同様で見込に目痕が3つ残る。81-7は灰釉系の釉の上に草花文を描く鉢で、81-8は無釉の香炉である。

産地不明品 81-9は腰部以下と体部内面以外に灰釉系の釉を施す土瓶で、肩部に21条の沈線が巡る。81-10は玉縁口縁を持つ播鉢で、高台を除く外面に鉄釉、内面に鉄泥を施す。

越前焼 81-11は轆轤成型で鉄泥を垂らし掛ける小鉢で、直線的な体部を持つ浅鉢が伴う。

瓦質土器 81-13は松ぼっくり状の摘みと体部の3箇所を受け部を持つ七輪で、体部下半に火入れがある。81-14は焜炉で、前者と同じく3箇所を受け部を持つ。

2) 整地土1出土遺物(第20図 第5表 写真図版第17)

伊万里 整1-1・2は半筒碗で、前者は松枝文、後者は菊文と御所車文、四方櫛文を描く。

瀬戸・美濃焼 軟質の陶土を持つ整1-3は半筒碗で、鉄釉と藍釉を交互に施す。

第6節 D街区 15-2 調査区下層出土の土器・陶磁器

1) 表土(第21図 第6表 写真図版第18)

瀬戸・美濃焼 表1は全面に灰釉系の釉を施し、体部に草花状の文様を刻文する深鉢ある。高台無釉で見込に砂目痕が残る。

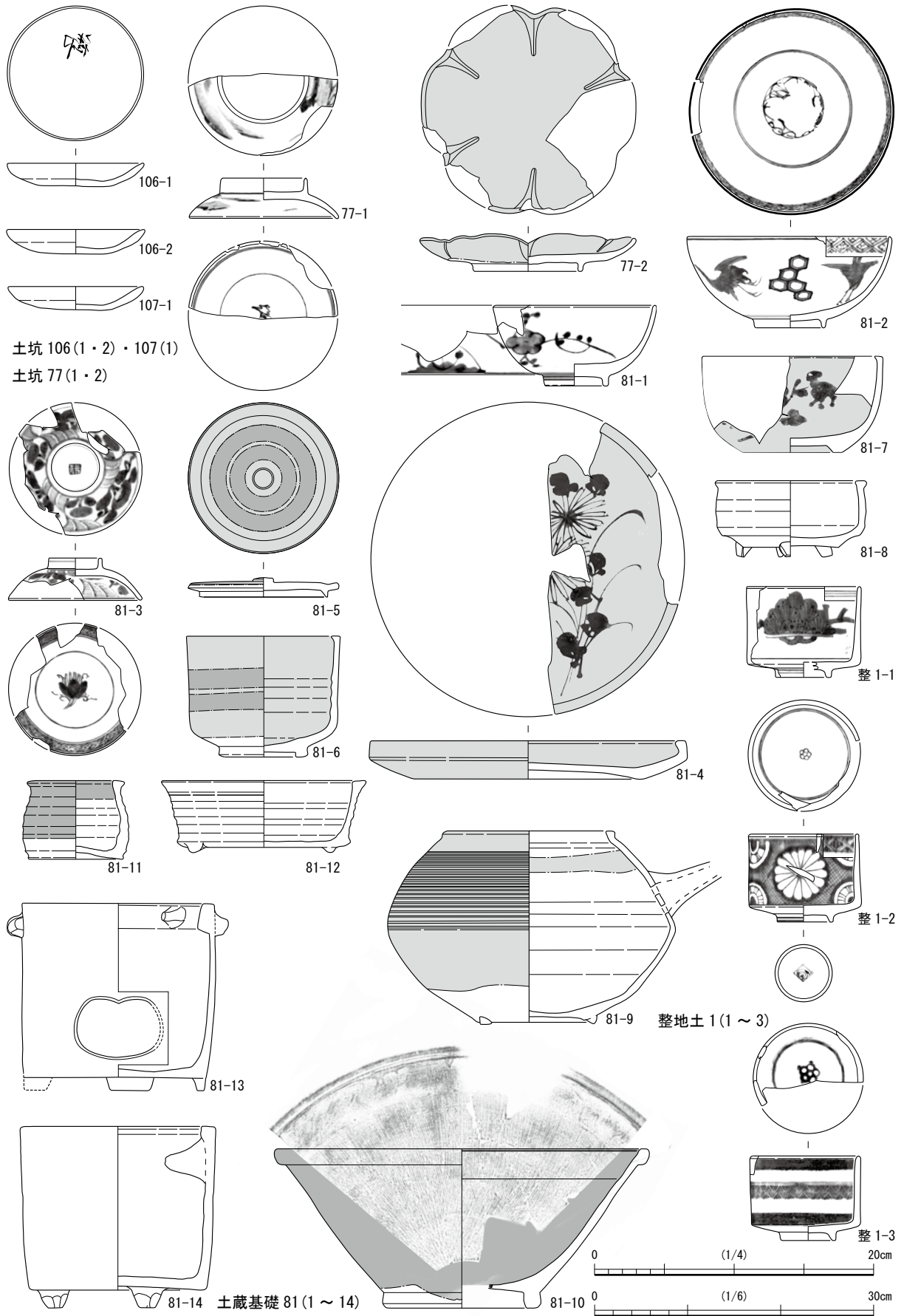
2) 整地土1・2出土遺物(第21・22図 第4表 写真図版第18・19)

整地土1・2出土遺物は39点図化した。

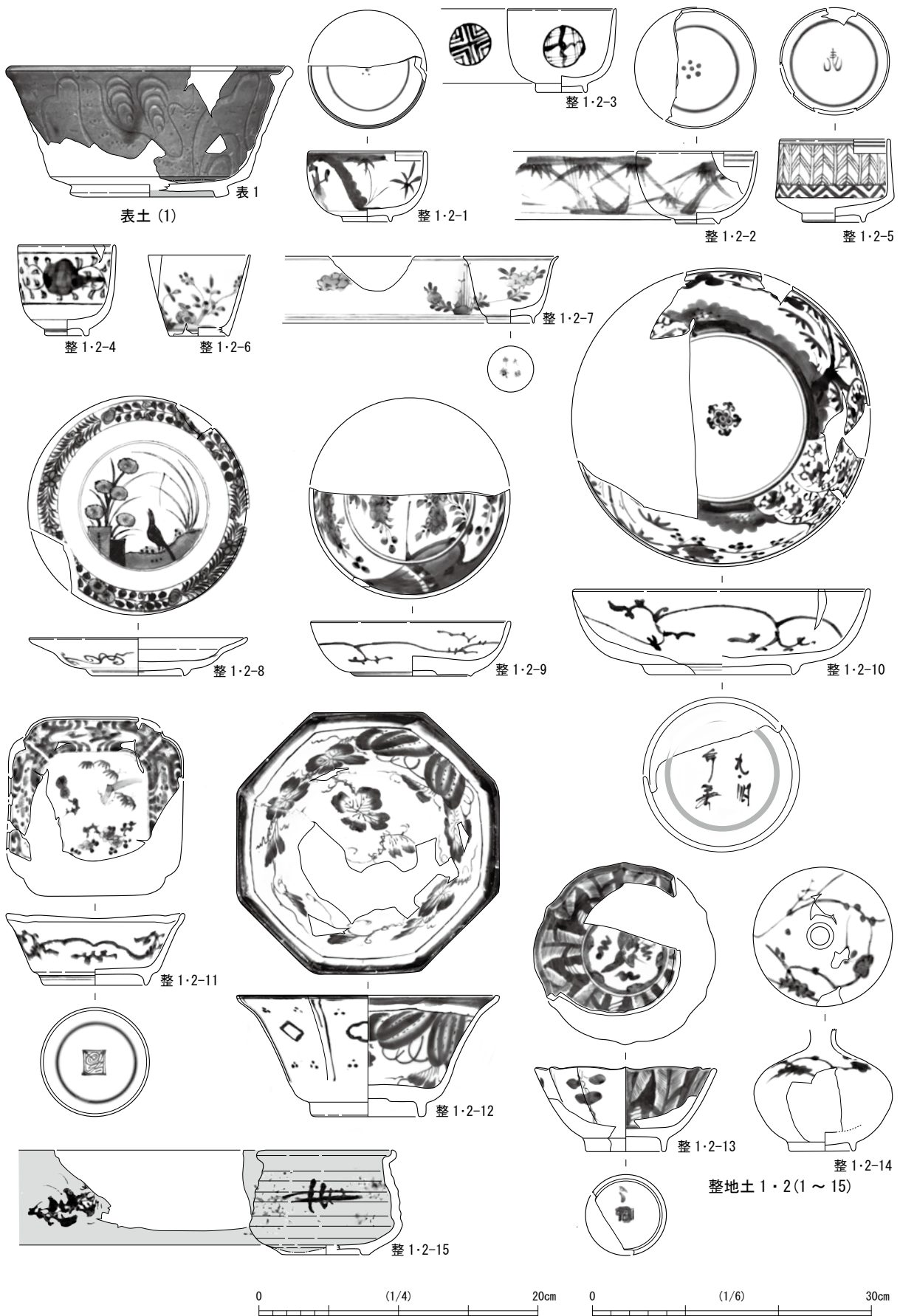
伊万里 1・2は見込に五曜星を持ち外面に竹林文、3は丸に格子文、4は牡丹唐草文を描く碗、5は外面に矢羽根文を描く半筒碗である。6は蕎麦猪口で外面に木花文、7は坏で外面に立花文を描き、高台内に「大明年製」銘を認める。8は屈曲する体部を持ち見込の筒内に花と鳥、9は蛇の目凹形高台を持つ皿で、見込に扇と草花文を描く。10は皿で、内面に松竹梅と唐草文、見込に五弁花文を描き、高台内に「大明年製」銘を認める。11は角鉢で、内面と見込に松竹梅を描き、高台内に「渦福」銘を持つ。12は清朝風八角鉢で、外面に幾何学文、内面にアケビ文を描く。輪花状口縁の13は鉢で、外面に草花文、内面に芭蕉文、見込に鶴を描き、印銘を持つ高台内に「うの」と赤色で記す。14は草花文を描く器高の低い瓶である。

瀬戸・美濃焼 15は陶胎染付の鉢で、成形痕が顕著な体部外面に草花文を描く。高台周辺の菱形状の無釉部分に印を入れる。灰釉系の端反碗の16・17は外面に白泥で梅枝文を描く。

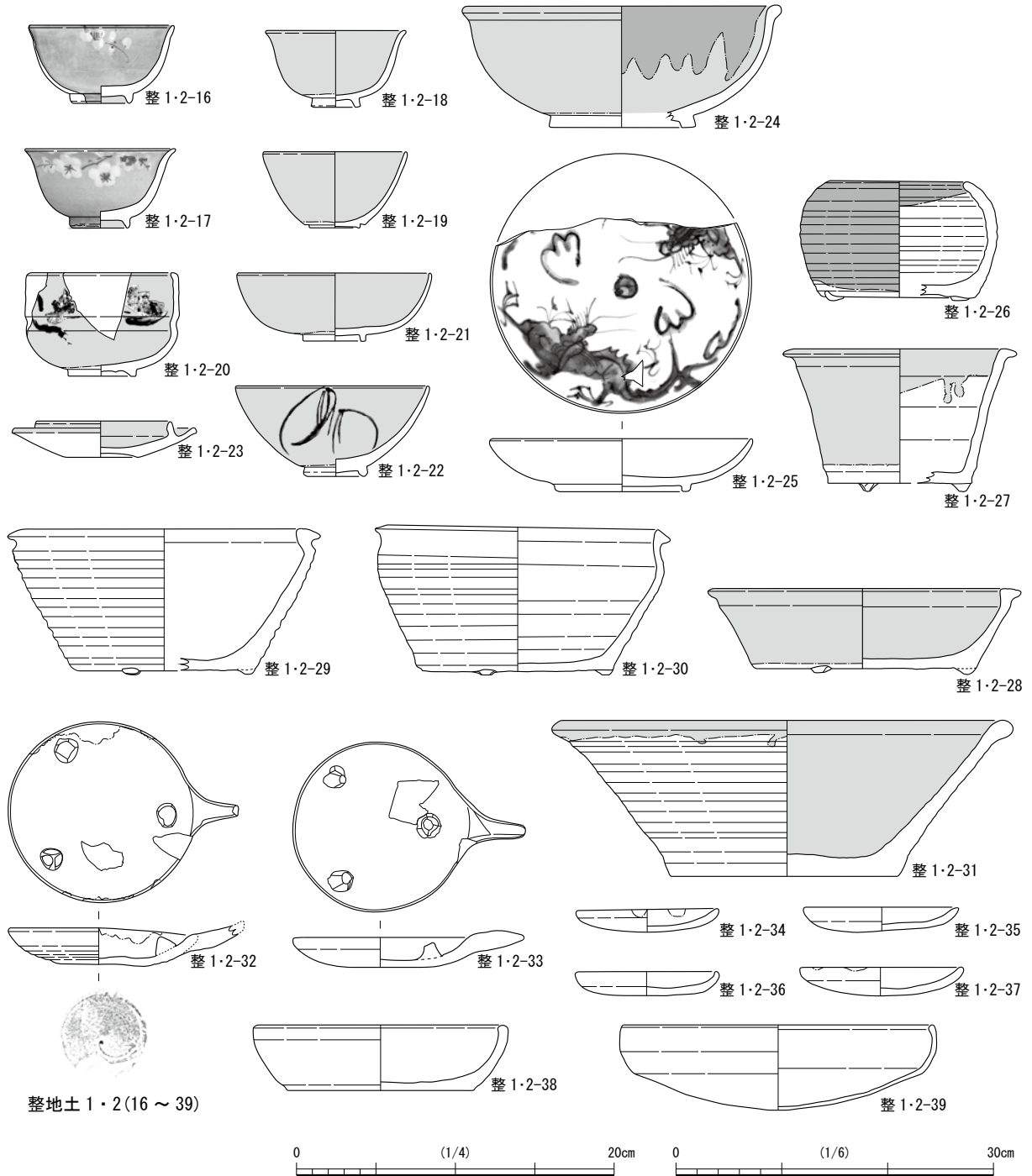
京・信楽焼 灰釉系の端反碗の18、体部が直線的な19の碗はともに高台が無釉である。20は高台無釉の色絵碗で、松枝文の松を緑、枝を黒色で描く。平碗に属する整21・22は、無釉の高台以外に灰



第20図 土器・陶磁器 D街区 15-2 調査区上層 (縮尺 1/4 1/6 : 81-10)



第21图 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層① (縮尺1/4 1/6:表1)



第22図 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層② (縮尺1/4 1/6: 整1・2-26~31・38・39)

釉系の釉を施し、後者は体部外面に柳文を描く。23は灰釉系の灯明皿である。

産地不明品 玉縁状口縁を持つ24は、内湾して伸びる体部内外面に灰釉系の釉を施した後、内面の一部に銅緑釉を掛ける鉢で、見込に目痕が3つ残る。

中国製品 25は彰州窯の皿で、砂高台内に粗く釉を塗り見込に竜文を描く。

越前焼 26は鉢で内湾する体部内外面に成形痕が顕著に残り、体部外面と口縁内面に鉄泥を垂らし掛ける。直線的な体部を持つ27は深鉢で、体部外面と口縁内面、28は浅鉢で全面に灰釉を施す。内湾気味に体部の伸びる29・30も鉢で、垂れ下がる口縁を持つ。玉縁状口縁の31は外面と体部内面に灰釉を施す大型の鉢である。31以外は底部に3脚を貼り付ける。

土師質土器 整32・33はG系の灯明受け皿で、前者は轆轤成型で底部に回転糸切り痕が残る。この手のものは既調査地では認めない。整34～37は同系の土師質皿、整38・39は焙烙である。焙烙は両者とも内湾気味の体部を持つが、後者は器厚が薄い。

3) 第3面遺構出土遺物 (第23・24図 第6表 写真図版第20・21)

土坑191・240 (第23図)

伊万里 191-1は瓶で窺彫りの体部に縞内に、唐草文と樹花文を描く。

唐津焼 240-1は成形痕が顕著で、体部内外に刷毛目を施す碗である。

土坑233 (第23図)

伊万里 233-1は碗で外面に山水文、233-2は皿で見込に扇面文を描く。233-3は幅の広い高台を持ち、内面が無釉の波佐見産の香炉で、外面に唐草文を描く。233-4は蛇の目凹形高台を持つ青磁鉢で、凹部に鏽奘を施し、見込に印花文を認める。17世紀後半のものである。

唐津焼 233-5は京風唐津碗で、灰釉系の釉を施す体部外面に鉄絵で山水文を描き、無釉の高台内に「清水」銘を持つ。

土師質土器 233-6～9は土師質皿で、6のB系のほかはC系1である。

土坑246・255・258・259 (第23図)

伊万里 246-1は外面に唐草文を描く波佐見産の碗、255-1は皿で見込に草花文を描く。

唐津焼 246-2・255-2～4、258-1・2は全面に灰釉系の釉を施す碗である。深く削る高台内を除き灰釉系の釉を施す259-1は呉器手碗で体部が凹む。259-2は京風唐津碗で、土坑233出土遺物と同じく高台内に印がある。17世紀後半頃にまとまる。

土師質土器 246-3・4、255-5・6はD系、ほかはB系の258-3を除きC系の土師質皿である。

土坑281 (第23・24図)

唐津焼 281-1は灰釉系の皿、281-2は灰釉系の坏で、底部に回転糸切り痕を残す。

瀬戸・美濃焼 281-3・4は、垂直気味に伸びる肩部に僅かに引き出す口縁が付く天目茶碗である。

中国製品 281-5は砂高台中央が無釉の彰州窯の皿で、内面に唐草文、見込に山水文と鳥文を描く。

その他 281-6は備前焼の瓶で、成形痕の顕著な内面は無釉である。

土坑278・279・305 (第24図)

瀬戸・美濃焼 278-1は薄い口縁を僅かに上に摘み上げる水注で、全面に鉄釉を施す。279-1は肩部に最大径を持つ高台無釉の天目茶碗である。

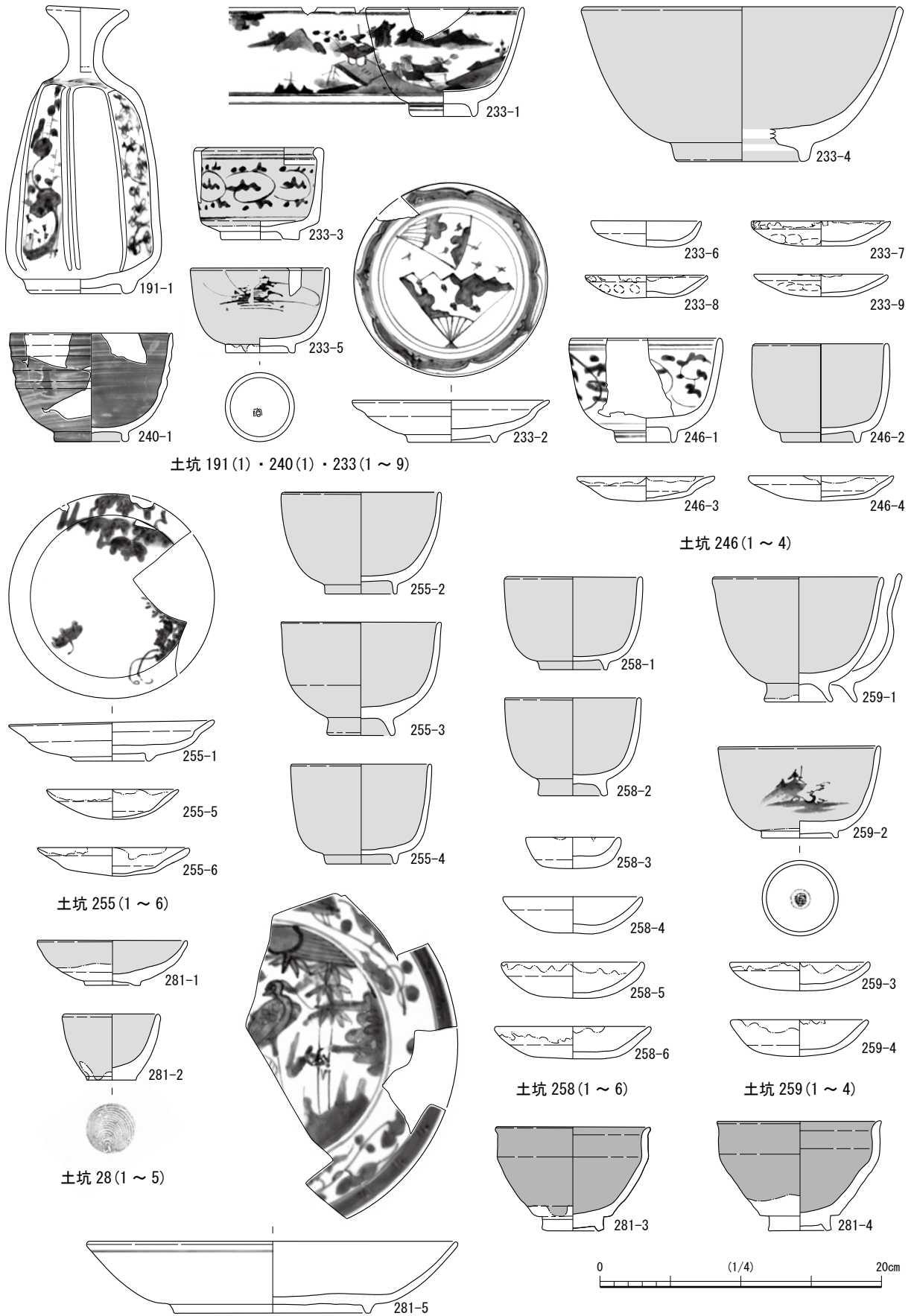
唐津焼 305-1は全面に灰釉系の釉を施す碗である。

中国産 357-1は見込を釉剥ぎする彰州窯の輪花皿で、兜布を持つ高台内面は無釉である。

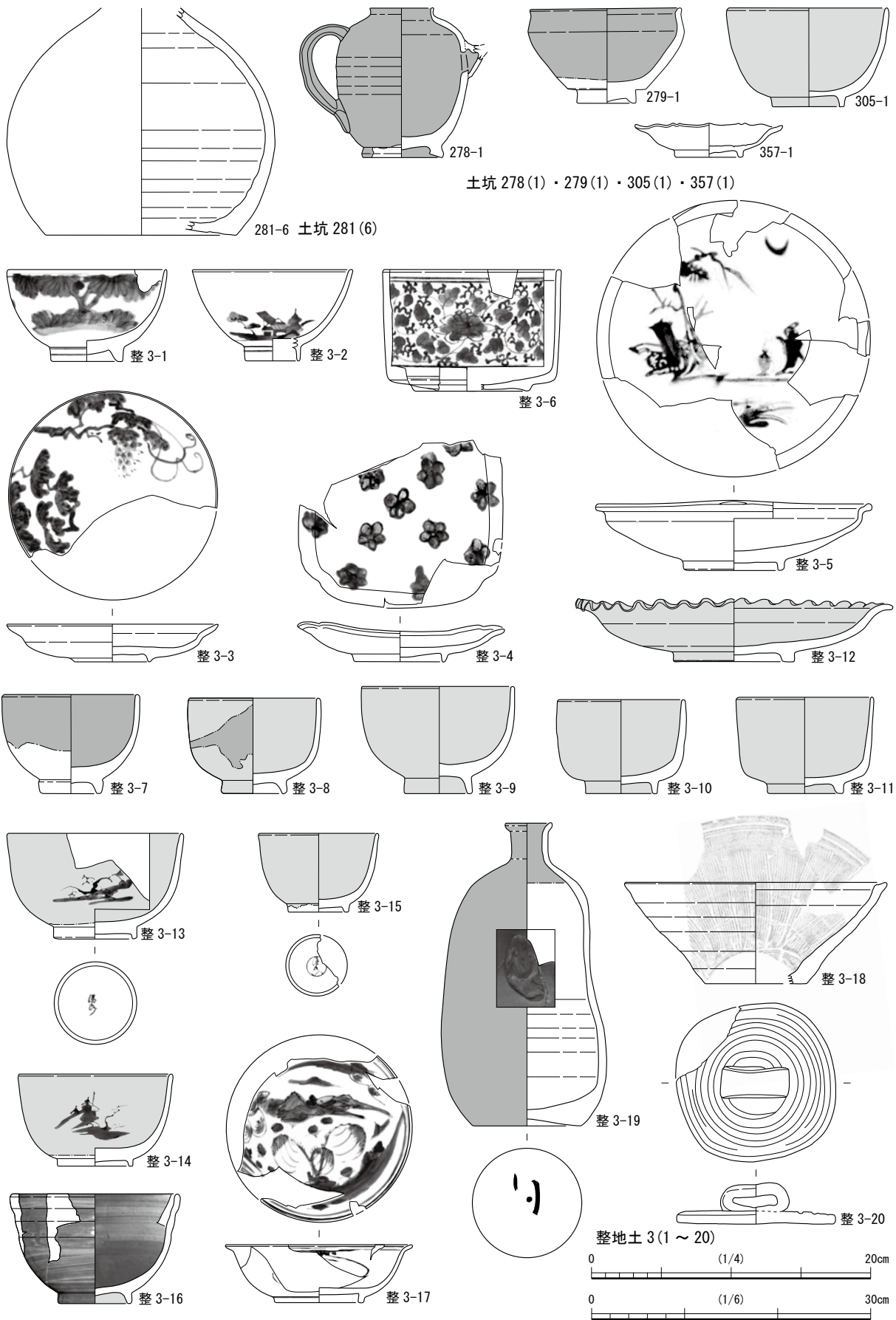
4) 整地土3出土遺物 (第24図 第6表 写真図版第21・22)

伊万里 整3-1は草木文、整3-2は山水文を描く碗である。整3-3は藤文を描く見込中央を釉剥ぎする皿、整3-4は成形後に四隅を糸切り細工する方形皿で見込に花文、整3-5は強く屈曲する口縁を持つ皿で、見込に山水文と人物文を描く。整3-6は口縁内面が無釉で直立する体部を持つ鉢で、外面に緻密な唐草文を描く。皿はいずれも17世紀前半に収まる。

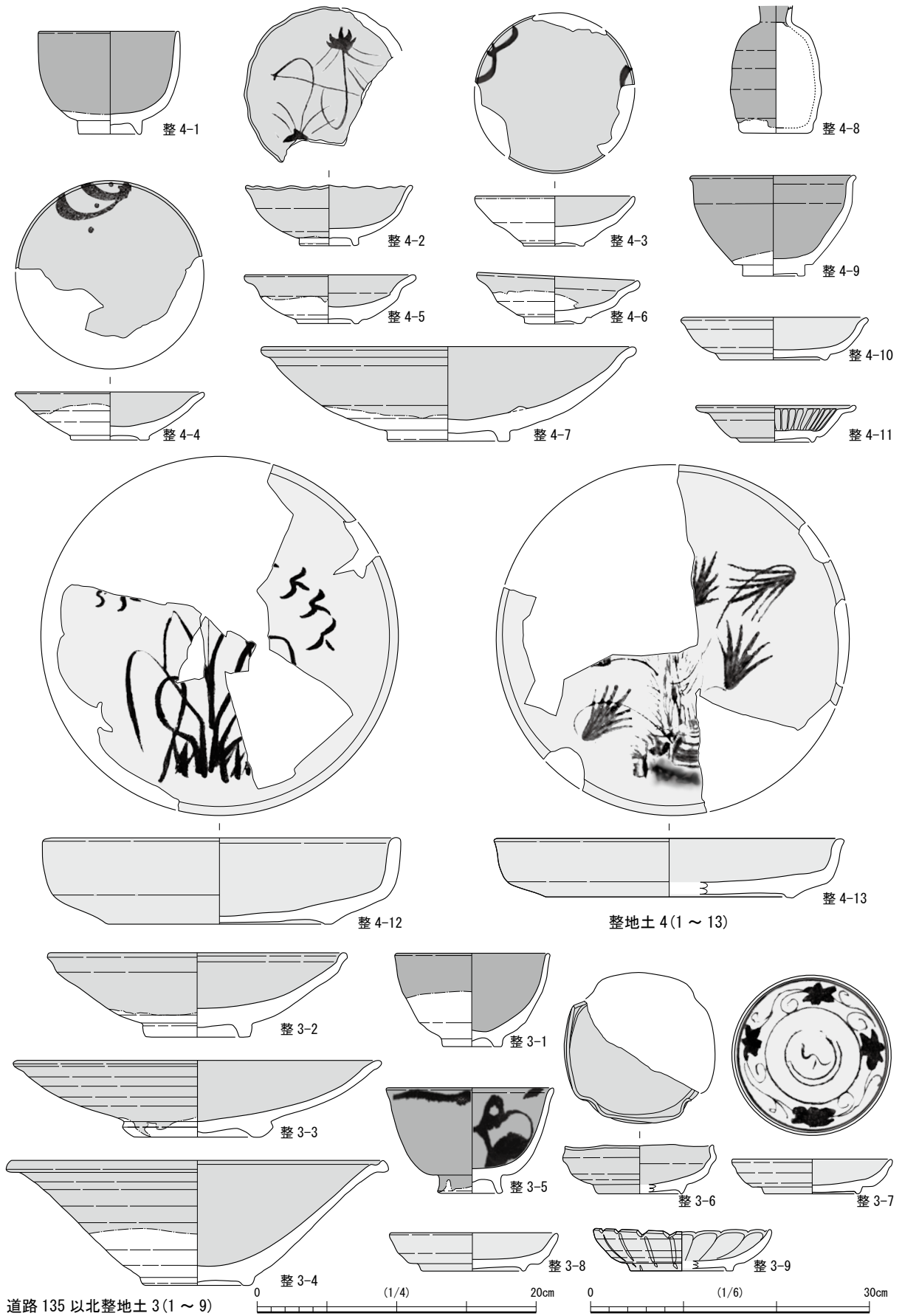
唐津焼 整3-7は高台無釉の鉄釉碗、整3-8～11は灰釉系の碗で、8には銅緑釉を掛ける。10は蛍手があり、11は口縁内面が無釉である。整3-13・14は京風唐津碗で、外面に山水文を鉄絵で描くが、前者は高台内に「清水」銘を持つ。このほか刷毛目碗、灰釉系の襷皿もある。



第23図 土器・陶磁器 D街区15-2調査区下層③ (縮尺1/4)



第24図 土器・陶磁器 D街区 15-2 調査区下層④ (縮尺 1/4 1/6 : 整 3-18)



第 25 図 土器・陶磁器 D街区 15-2 調査区下層⑤ (縮尺 1/4)

中国製品 整3-17は高台無釉の端反皿で、見込に山水文を描く。

越前焼 整3-18は内傾する口縁下方に段の巡らない播鉢である。

その他 整3-19は体部外面と口縁内面に鉄泥を施す備前焼の瓶で、轆轤成型後に体部を変形させ人物文を貼り付ける。整3-20はいびつな摘みを貼り付けた伊賀の水指の蓋で、上面に凹線が巡る。

4) 整地土4出土遺物(第25図 第6表 写真図版第22)

唐津焼 整4-1は高台無釉の鉄釉碗、整4-2は見込に鉄絵を施す輪花状口縁の灰釉系の皿、整4-3・4は簡略化した鉄絵を口縁内面に描く皿である。整4-5・6は灰釉の端反皿で、見込に胎土目痕のある大振りの灰釉皿もある。整4-8は鉄釉瓶である。

瀬戸・美濃焼 整4-9は天目茶碗、整4-11は体部内面を削ぎ、見込を釉剥ぎする皿である。整4-10は全面に長石釉を施す皿、整4-12・13はともに草花文を見込に描く志野の大皿である。

5) 道路135以北整地土3出土遺物(第25図 第6表 写真図版第22)

唐津焼 整3-1は腰部以下無釉の鉄釉碗、整3-2・3は高台無釉の灰釉系の皿で、見込に胎土目痕を認める。整3-4は溝縁口縁の鉢である。

瀬戸・美濃焼 高台以外に鉄釉を施す整3-5は碗で、体部内面に更に濃い鉄釉を施す。整3-6は四角が窪む方形皿、整3-7・8は長石釉を施す皿で、前者は内面に草花文を鉄絵で施す。整3-9は灰志野の菊皿である。

第7節 E街区15-2調査区出土の地区の土器・陶磁器

1) 第1・2遺構面出土遺物(第26・27図 第7表 写真図版第23)

井戸14(第26図)

伊万里 14-1は格子目を外面に描く端反碗で、崩れた花文を描く見込に目痕が残る。14-2は碗蓋で表に変形松枝文を描く。

越前焼 体部が直線的に伸びて口縁で屈曲する深鉢で、口縁上面に沈線が巡り底部が穿孔される。

井戸148(第26図)

伊万里 148-1は口縁が直立する小皿で、体部内面が無釉で外面に横線文を描く瓶もある。

土坑145(第27図)

唐津焼 145-1は碁笥底の唐津皿で、高台以外に灰釉系の釉を施す。

2) 整地土1出土遺物(第26図 第7表 写真図版第23)

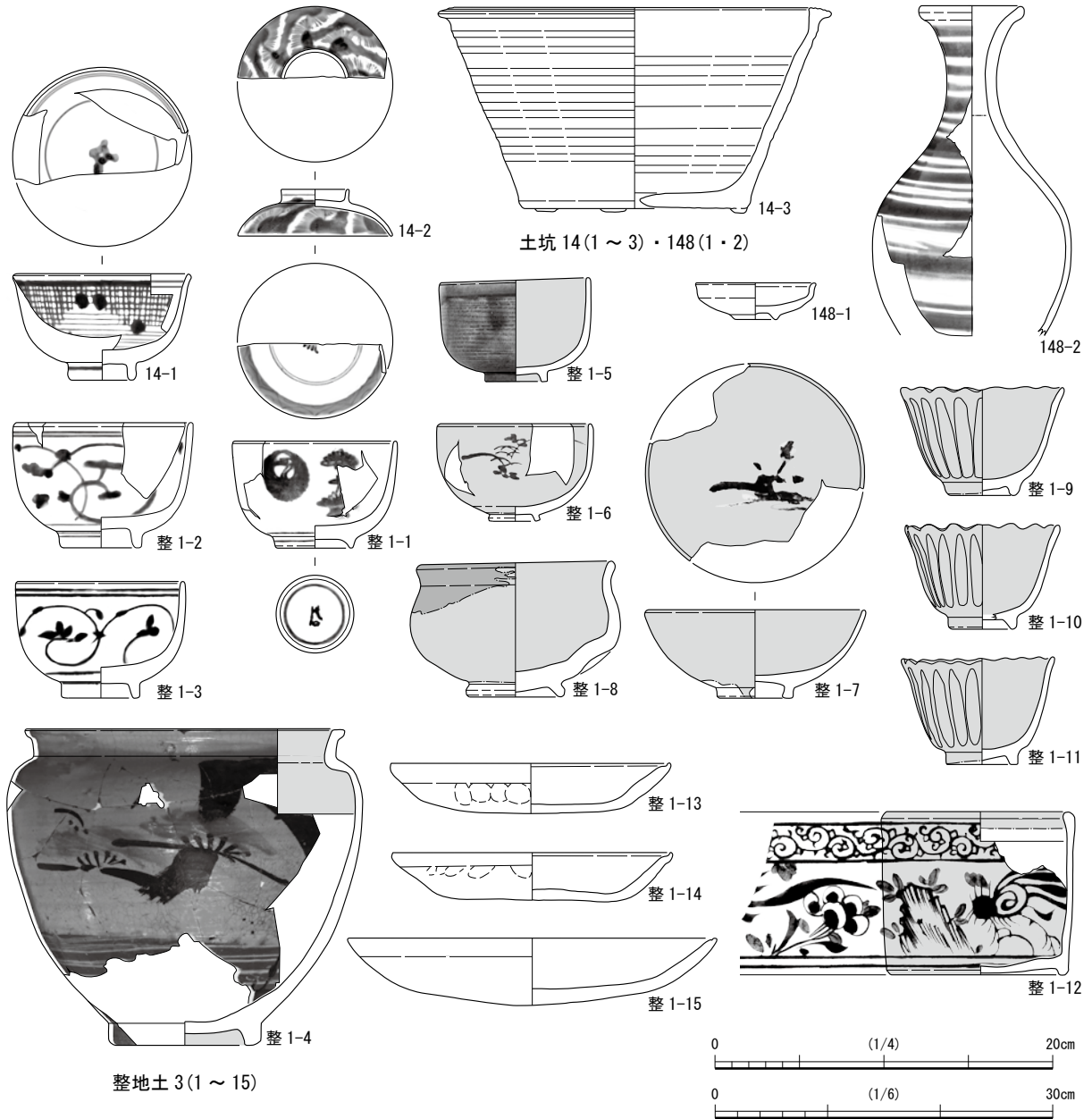
伊万里 整1-2・3は外面に唐草文を描く波佐見産の陶胎染付の碗、整1-1は外面にコンニャク印判で丸鶴文と松文を描く碗で、高台内に銘がある。

唐津焼 整1-4は体部外面下半に刷毛目、上半から口縁内面に白釉を施す甕で、白釉上面に鉄釉と銅緑釉で松栢を描く。高台内と体部内面に鉄泥を認める。

瀬戸・美濃焼 整1-5は灰釉系の碗で、体部外面に鎧手、体部内面と口縁外面に銅緑釉を施す。

京・信楽焼 灰釉系の碗の整1-6・7のうち前者は外面に草花文、後者は見込に河畔文を鉄絵で描く。整1-9～11は轆轤成形後に口縁を変形した高台無釉の青磁碗、整1-12は色絵の火入れで、口縁外面に唐草文、下半に鳳凰を描く。整1-8は灰釉系の釉の上に鉄釉と銅緑釉を掛ける碗である。

土師質土器 整1-13～15は大型のD系土師質皿で、口縁端部を摘み上げる前2者は体部が屈曲する。15は体部全体が丸みを帯びる。



第26図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区① (縮尺1/4 1/6 : 14-3・整1-4)

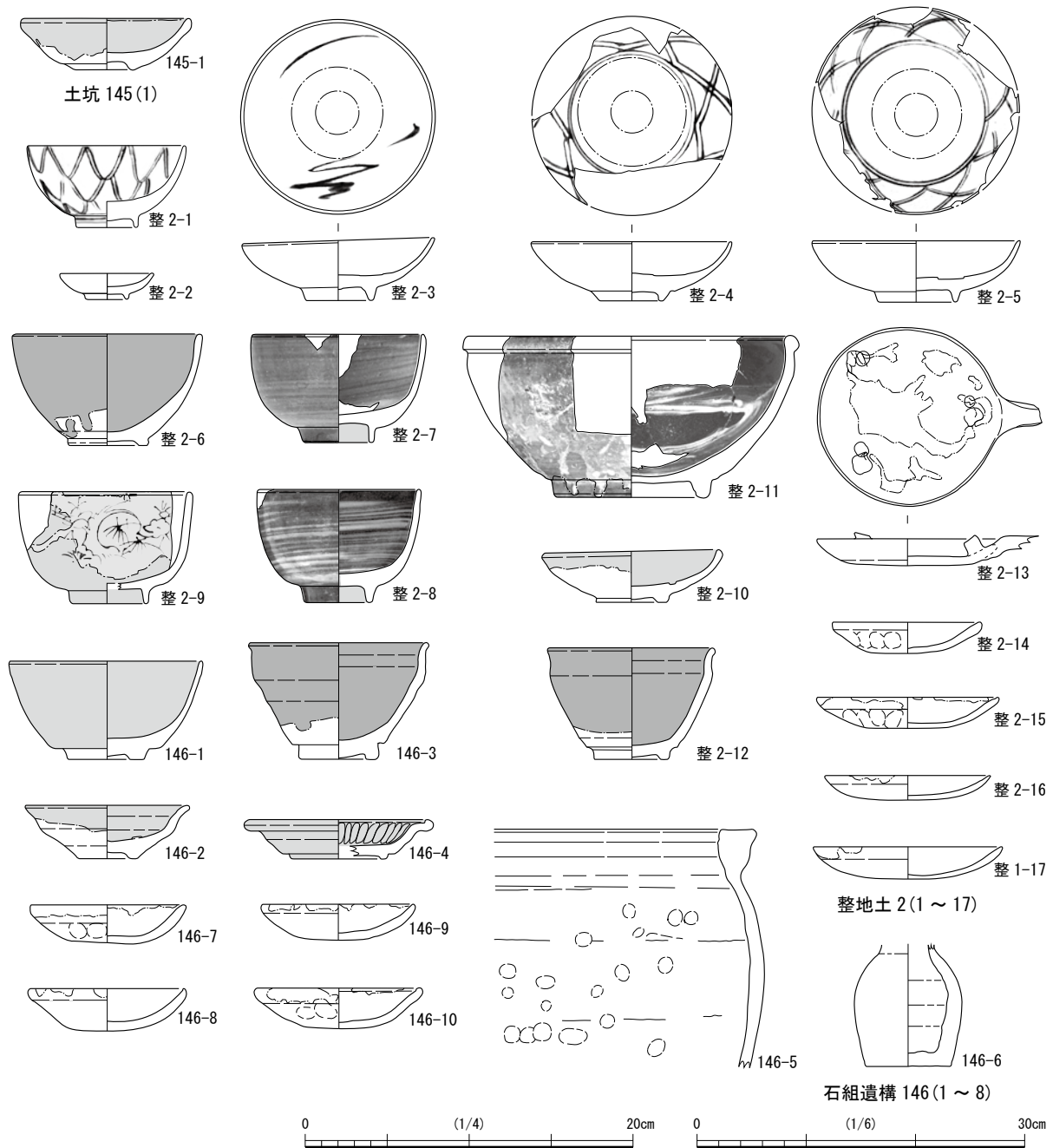
3) 整地土2出土遺物 (第27図 第7表 写真図版第24)

伊万里 整2-1は外面に二重網目文を描くくらわんか手の陶胎染付、整2-3~5は釉剥ぎした見込に、3は鉄絵、4・5は二重網目文を認める皿で、高台無釉の3は波佐見産である。整2-2は小皿で口縁の数箇所を緩く窪める。

唐津焼 整2-6は高台無釉の鉄釉碗、整2-7・8は刷毛目碗、整2-9は灰釉系の釉の上に白釉を掛ける碗で、外面に鉄絵を認める。整2-11は玉縁口縁を持つ高台無釉の鉢で、見込にランダムに刷毛目を施す。18世紀後半頃の鉢を除く碗は、17世紀後半のものである。

瀬戸・美濃焼 整2-12は高台無釉の天目茶碗である。

土師質土器 整2-13はG系の灯明受け皿、整2-16・17は同系、整2-14はC系1、整2-15はD系3である。



第27図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区② (縮尺1/4 1/6:146-5・6)

3) 第3遺構面出土遺物 (第27図 第7表 写真図版第24)

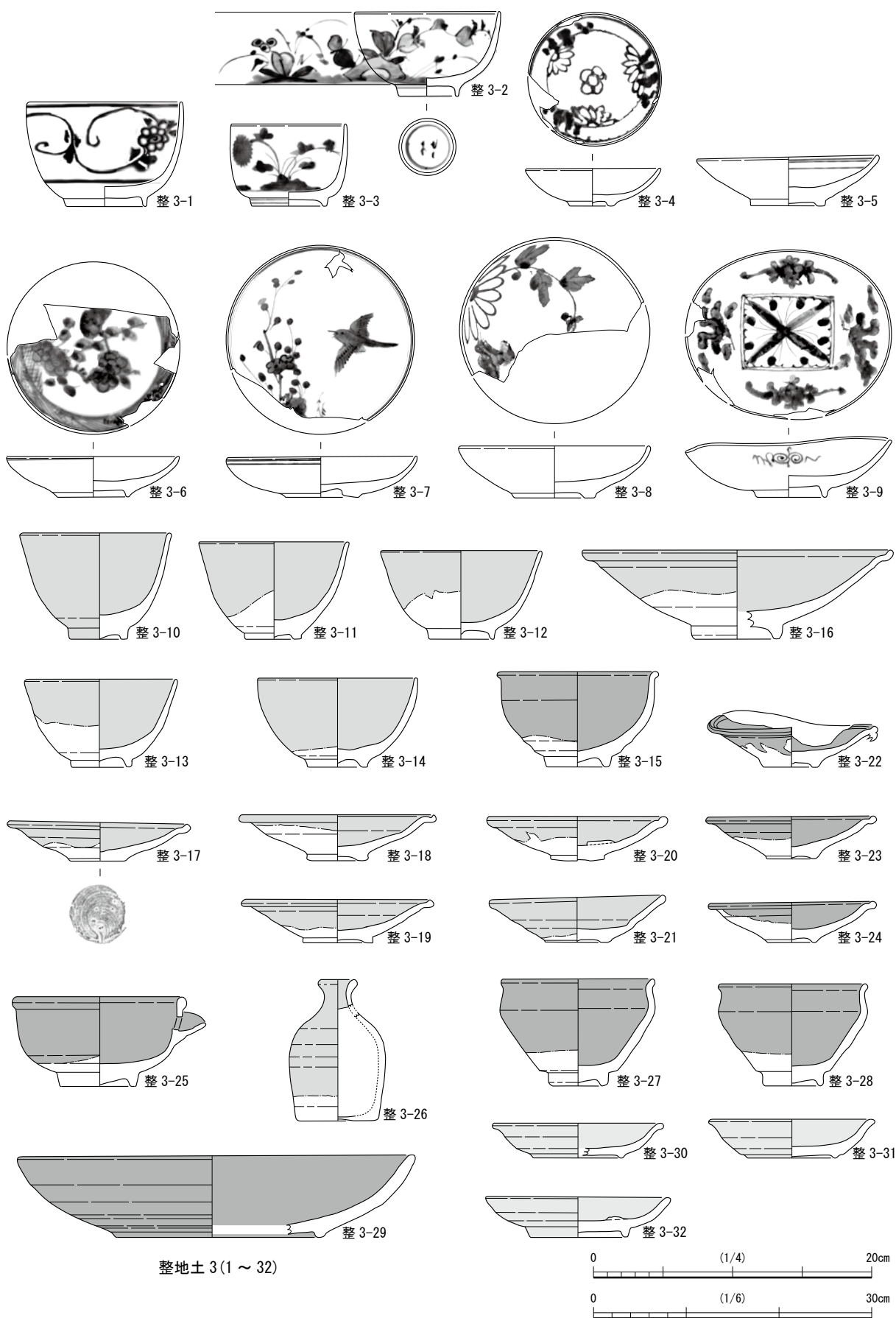
石積遺構146 (第27図)

唐津焼 146-1は高台無釉の灰釉碗、146-2は胎土目積みの口縁が反る灰釉皿である。

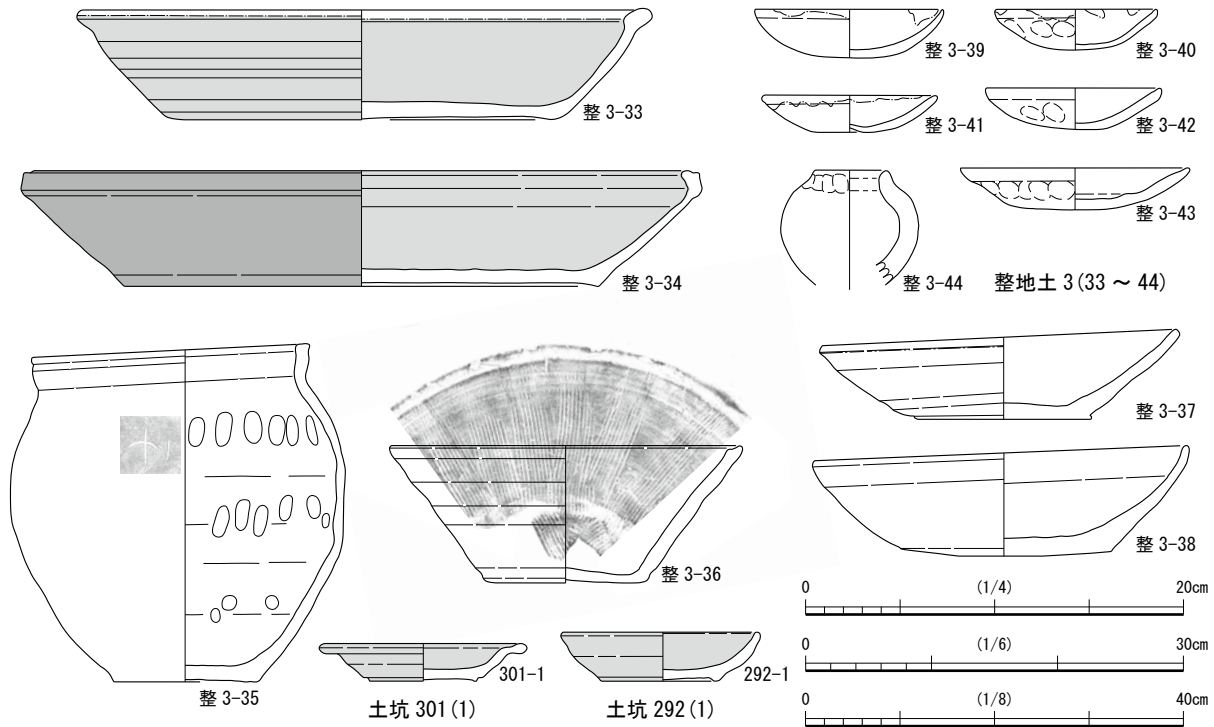
瀬戸・美濃焼 146-3は高台内に3箇所窯道具痕を残す天目茶碗、146-4は内面を削ぎ、見込が無釉の灰釉皿で、口縁を水平に横に引き出し端部を摘み上げる。

越前焼 146-5は大甕で、口縁外面の中央に明瞭な、口縁内面に不明瞭な段を認める。外面は全面に鉄泥を施すが、指頭圧痕が目立つ内面は頸部より上には施さない。146-6は外面に鉄釉を施すお歯黒壺で、肩部には残存部が少ないが傘型を呈すると思われる窯印を認める。大甕の年代から後者も17世紀中頃に位置付けられよう。

土師質土器 146-7~10は土師質皿で、全てC系1である。



第 28 図 土器・陶磁器 E街区 15-2 調査区③ (縮尺 1/4)



第29図 土器・陶磁器 E街区15-2調査区④ (縮尺1/4 1/6:整3-36~38 1/8:整3-35)

4) 整地土3出土遺物 (第28・29図 第7表 写真図版第25・26)

伊万里 整3-1は外面に唐草文、整3-2は外面に草花文、高台内に銘を描く、整3-3は外面に描く草花文のうち花文をコンニャク印判で施す碗である。整3-4は内面と見込に菊花文を描く小皿である。整3-5は二次被熱を受けた皿で、見込に3箇所砂目痕が残る。整3-7は蛇の目高台を持ち、見込に梅と鶯、整3-6は梅枝文、整3-8は菊花文を描く皿である。整3-9は楕円形の皿で、内面に草花文、見込に角花を描く。整3-2・4など新しいものもやや混じるが17世紀前半にまとまる。

唐津焼 整3-15は天目茶碗を模した鉄釉碗、整3-10~14は灰釉系の碗で、器高より口径の狭い10・11と標準の12~14がある。整3-16は溝縁口縁を持つ大振りの、整3-17~21は同形態の灰釉皿で、17は回転糸切り痕を認める。整3-22~24は鉄釉皿で、22は口縁が焼き歪み、口縁外面に他の個体の口縁部が溶着する。このほか玉縁口縁を持つ高台無釉の鉄釉鉢、灰釉を腰部以外と口縁内面に施す瓶がある。17世紀前半に収まる。

瀬戸・美濃焼 整3-27・28は高台無釉の天目茶碗、整3-29は大振りの全面施釉の鉄釉皿で、見込に線刻を施す。整3-30は全面、整3-31・32は高台内以外に長石釉を施す皿である。

中国製品 整3-33は玉縁状口縁の上面が無釉の鉢で、体部内外に灰釉系の釉を施す。整3-34は口縁外面と上面に面を持つ鉢で、口縁と体部外面に鉄釉、内面に灰釉を施す。釉の掛け方は粗い。共伴する伊万里や唐津焼の様相から17世紀前半に収まると思われる。

越前焼 整3-35は口縁外面に段が巡る甕で、肩部に傘型刻文を持つ。整3-36は口縁が内傾する搦鉢、整3-37・38は体部が直線的に伸びる浅鉢で、前者は体部内面、後者は体部内外面に鉄釉を施す。

土師質土器 整39~42はC系、43はD系の土師質皿、整3-43は丸い体部に口縁が付く壺である。

5) 第4遺構面出土遺物 (第29図 第7表 写真図版第26)

土坑292・301 (第29図)

瀬戸・美濃焼 292-1は見込を釉剥ぎする灰釉皿、301-1は全面施釉の灰釉皿である。

第8節 15-2 調査区石組水路2 出土の土器・陶磁器

1) 石組水路上層出土遺物 (第30図 第8表 写真図版第27)

伊万里 2-1は外面に一重網目文と魚文を描く碗で、17世紀後半のものである。このほか外面に草花文を描き見込を釉剥ぎする2-2やコンニャク印判で鶴松文を描く2-3、丸みのある体部外面に花散し文を描く2-4や松竹文を描く2-6の端反碗があり、これに2-7・8の波佐見産の碗や2-9～11の半筒碗が伴う。半筒碗は見込に五弁花文を持ち、それぞれ菊文、半菊文と亀甲文、宝珠連繫文を描く。2-12は蛇の目凹形高台を持つ皿で、見込に山水文を描く。外面に梅文を描く2-13の段重もある。17世紀後半の碗を除き、18世紀後半以降のものが多くを占める。

瀬戸・美濃焼 2-14・15は端反碗で、14は梅に福寿文、15は隸字体文を外面に描く。2-16の半筒碗は見込に五曜星を持ち、外面に菊文、2-17の筒型坏は外面に算木手文を描く。2-18は灰釉系の襷皿で、2-19の碁笥底の鉢は、灰釉系の釉を施す外面に鉄釉の沈線が2条巡る。18世紀後半以降のものである。

京・信楽焼 2-20は体部に透明釉を施す碗で、高台は無釉である。

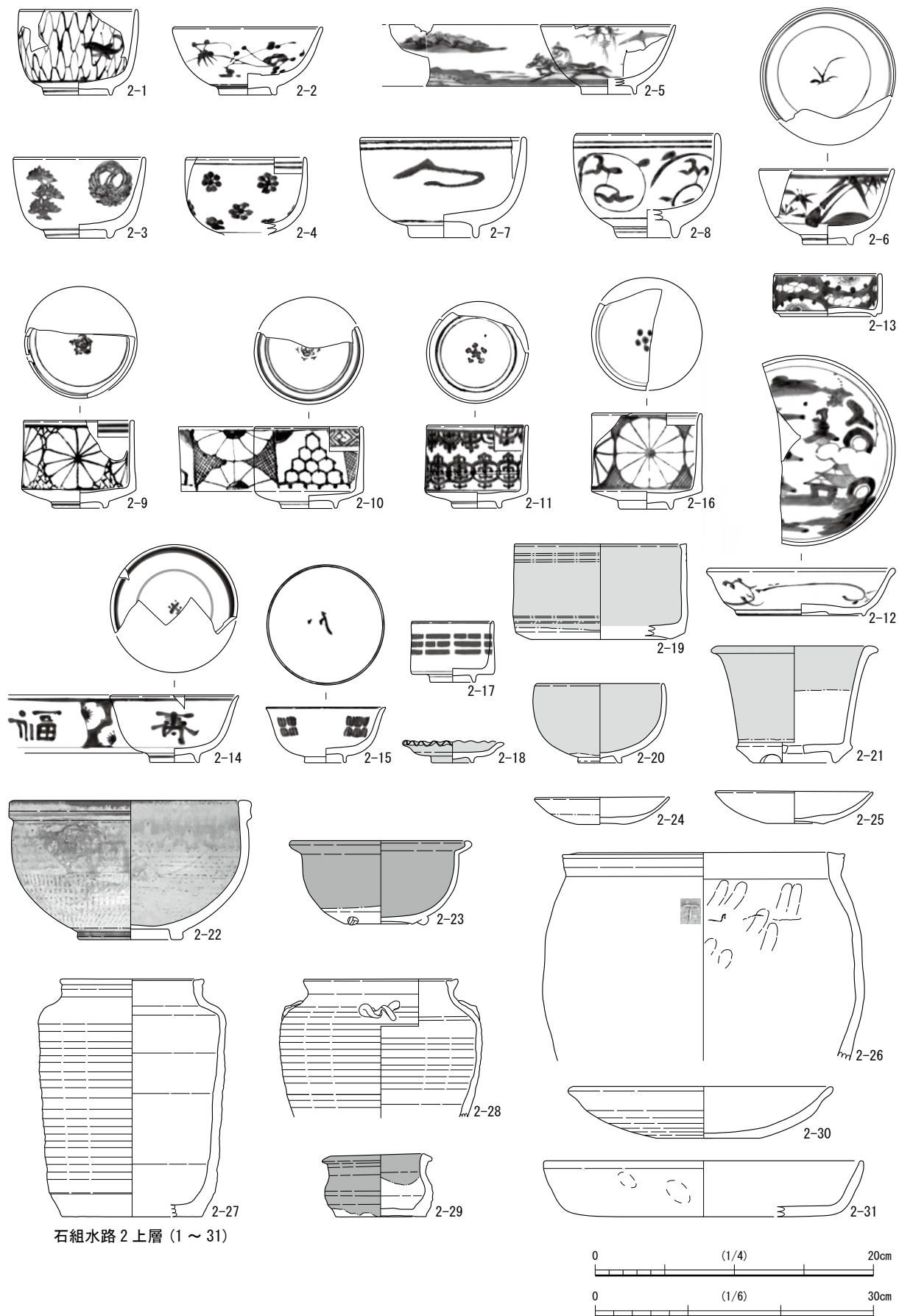
産地不明品 2-21は灰釉系の植木鉢で口縁に藁灰釉を施す。外面がやや窪む玉縁状口縁を持つ2-22鉢で、腰部の内外面に鎧手を持ち透明釉を掛ける。2-23は底部に3脚を貼り付けた鉄釉の土鍋、2-24・25は、腰部以下無釉の白磁皿である。

越前焼 2-26はねじたて成形の中甕で、肩部にTの窯印を持つ。轆轤成型の2-27・28の甕のうち後者は、丸みを帯びた肩部に撚り紐状の貼り付け文を持つ。18世紀末以降のものである。

土師質土器 2-30は轆轤成形の皿、2-31は底部が屈曲し垂直気味な体部を認める土師質皿である。ともに初見のもので共伴資料から18世紀末以降と考える。

2) 石組水路2 出土遺物 (第31～34図 第8表 写真図版第28～31)

伊万里 2-32は外面に山水文、2-33は屈曲する体部外面に花草文を描く碗で17世紀前半、高台無釉の2-34は青磁碗で、17世紀後半のものである。これに対し外面に唐草文を描く2-35や36のようにコンニャク印判で菊と葉を施す碗、見込を釉剥ぎする2-37や2-40の端反碗は上層出土遺物と同じ様相である。2-41～44は波佐見産の碗で、41は菊花文、42・43は草花文、44は山水文を外面に描く。2-45～53は17世紀前半頃の皿で、45は外面に柳文、見込に沢瀉、輪花状口縁の46は見込に菊花文、蛇の目凹形高台を持つ47は見込に吹墨の兔文、口縁を細かく刻んだ48は見込に草花文、49・50は内面に芙蓉手草花文を描く。内面に圈線が巡る51は見込に砂目痕を認める。小皿は52が型押し成形で輪花状口縁を持ち、53は見込に3匹の蝶を描く。2-54は高台裏に針支え痕があり、内面に波頭文、見込に山水文を描き、「渦福」銘を持つ。見込に五弁花文を認める2-56・57は、前者は内面に矢羽根文、後者は牡丹唐草文と竹文を描き、各々「大明年製」銘と「渦福」銘を認める。2-58・59は蛇の目凹形高台を持つ皿で、後者は内面と見込に松竹文を描く。見込に湖畔と舟を描く2-60は高台内に「大明年製」銘と針支え痕がある。2-61は見込を釉剥ぎする高台無釉の波佐見産の青磁皿である。2-62・63は坏で、後者は外面に萩、高台内に「大明年製」銘を描く。2-64は青磁の、65は雨降文を描く高台無釉仏飯器である。後者は高台内に文字を記す。2-66は端反鉢で、体部外面に市松文を交互に認める。同文様と交互して「幾」・「太」・「東」の文字があり、見込と高台内に印を認める。2-67は輪花状口縁を持つ型押し成形の薄手の白磁鉢で、内面と見込に型押しの菊花文がある。これは17世紀末～18世紀初頭頃のものである。2-68・69は高台が低めの瓶で、前者は外面に松竹梅、後者は草花文を描く。2-54～66は18世紀後半以降のものが多い。



石組水路 2 上層 (1 ~ 31)

第 30 図 15-2 調査区石組水路 2① (縮尺 1/4 1/6 : 2-26 ~ 29)

唐津焼 2-70・71は口縁が括れる天目茶碗を模した鉄釉碗、2-72は体部外面に墨書のある灰釉系の碗である。同じ碗には高台無釉の2-73と全面施釉の2-74～77があり、74は口縁外面に銅緑釉を施す呉器手碗である。灰釉系の釉を施す体部外面に山水文を鉄絵で描く2-78は京風唐津碗で、無釉の高台内に刻印を認める。2-79は口縁を薄く横に引き出す皿、不明瞭な凌が見込の屈曲部に巡る2-81は灰釉系の皿と思われる。2-80は高台無釉の大皿で、灰釉系の釉の上から鉄釉と銅緑釉を粗く掛ける。2-82は高台無釉の絵唐津で胎土目積み、2-83～88は溝縁口縁の灰釉皿で、83は皿が二重に、85は別個体の口縁部が溶着する。86・87は底面に回転糸切り痕を持つ鉄釉と灰釉皿である。2-89は高台無釉で灰釉を施す襲皿である。2-90・91は鉄泥を体部内面と高台以外に掛けた鉢で、後者は高台を一箇所括る。

瀬戸・美濃焼 2-92・93は高台無釉の天目茶碗で、後者は肩部に最大径を持つ。灰釉系の釉と鉄釉を掛け分ける2-94は腰鏝碗、高台無釉で外反する体部両面に銅緑釉を施す2-95の皿は見込に目痕が3つ残る。2-96～98は灰釉皿で、体部内面を削ぎ、見込を釉剥ぎするものもある。2-101・102は長石釉を施す皿で見込に笹文を鉄絵で描く。無釉の高台内に赤色で記号文を記すことからセット関係と思われる。2-103は輪花皿で体部内外面に銅緑釉を施す。内面と見込には陰刻の花文を認める。

京・信楽焼 2-99・100は灰釉系の碗で、前者は外面に緑色で葉文を描く。

中国製品 2-104は彰州窯の皿で、高台内に粗く釉薬を塗り、見込に鳳凰と草花文を描く。

越前焼 2-105は括れた口縁を持つ鉢で、体部上半に鉄泥を掛け垂らし掛け、底部に3脚を貼り付ける稀なものである。2-106・107は水平な口縁下に段のない播鉢である。

その他 2-109は備前焼の播鉢で、口縁外面に1条の沈線、内面には段が巡る。器厚は厚く堅く焼き締まる。2-106は括れた口縁下に凌の巡る播鉢で、腰部に回転ヘラ削りを施し、内外面に鉄泥を塗る。須佐唐津焼の系統と思われる。

土師質土器 2-111～127は土師質皿で、111はD系の灯明受け皿である。112～122はC系で、型作りのG系もある。2-110の鉢は体部に数条の沈線が巡り、口縁は内湾して内側に肥厚する。

第9節 15-2 調査区道路遺構出土の土器・陶磁器

遺構 32 (第35図 第9表 写真図版第32)

1) 第1砂

伊万里 32-1は見込に五弁花文を持つ半筒碗で、外面に菊文を描く。32-2は内面に草花文を描く皿、32-26は大振りの皿で内面に牡丹唐草文、高台内に「大明成化年製」銘を持つ。32-3は外面に蝶と牡丹を描く碗で、口縁内面を釉剥ぎする。

唐津焼 32-4は高台無釉の鉄釉碗、32-5・6は灰釉系の碗で、後者は体部外面に沈線が巡る。32-7は溝縁口縁の灰釉皿で、平底の無釉の底部外面に回転糸切り痕が残る。

瀬戸・美濃焼 32-8は餌皿、32-9は高台無釉の灰釉碗である。32-27の鉄釉四耳壺も伴う。

越前焼 32-10は外反して伸びる体部を持ち口縁を引き出す鉢で、体部外面に成形痕を顕著に認める。

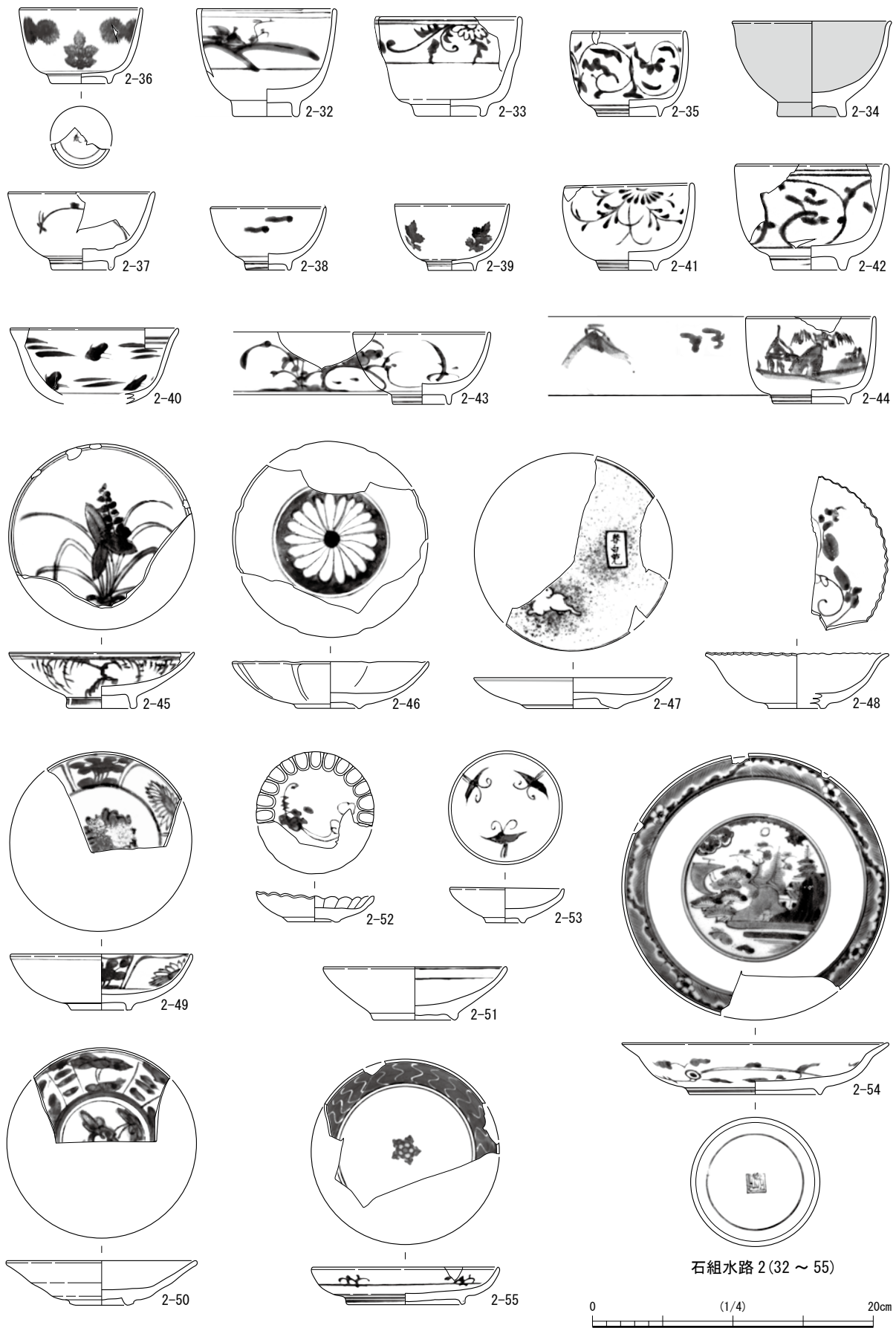
土師質土器 32-11・12はG系の灯明受け皿、13～15も同系の土師質皿である。

2) 第2砂

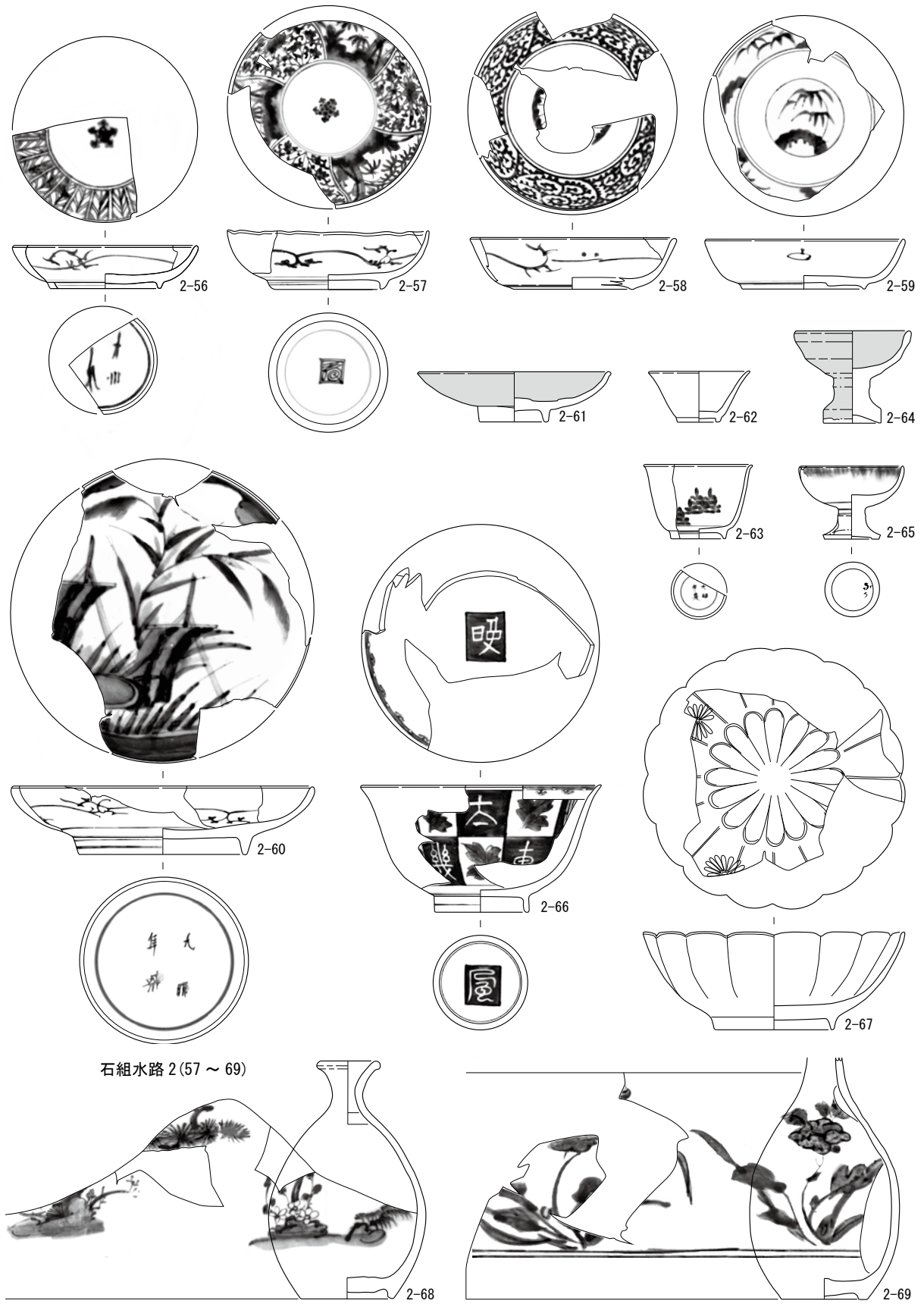
伊万里 32-16の外面に草花文を描く碗のほか、外面に雪文、見込に五弁花文を描く半筒碗がある。

瀬戸・美濃焼 32-18は高台無釉の天目茶碗である。

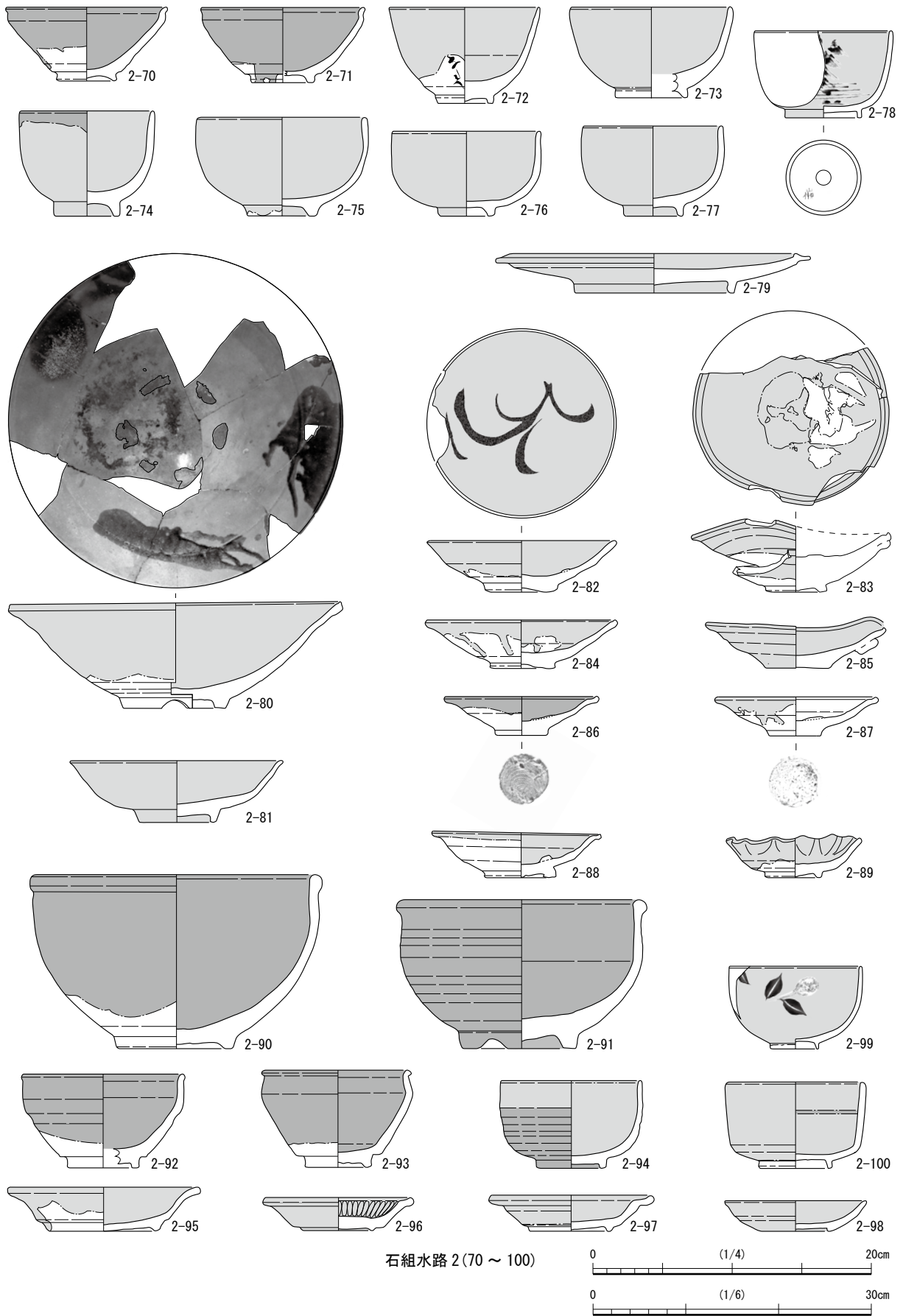
土師質土器 32-19～22はC系の土師質皿である。



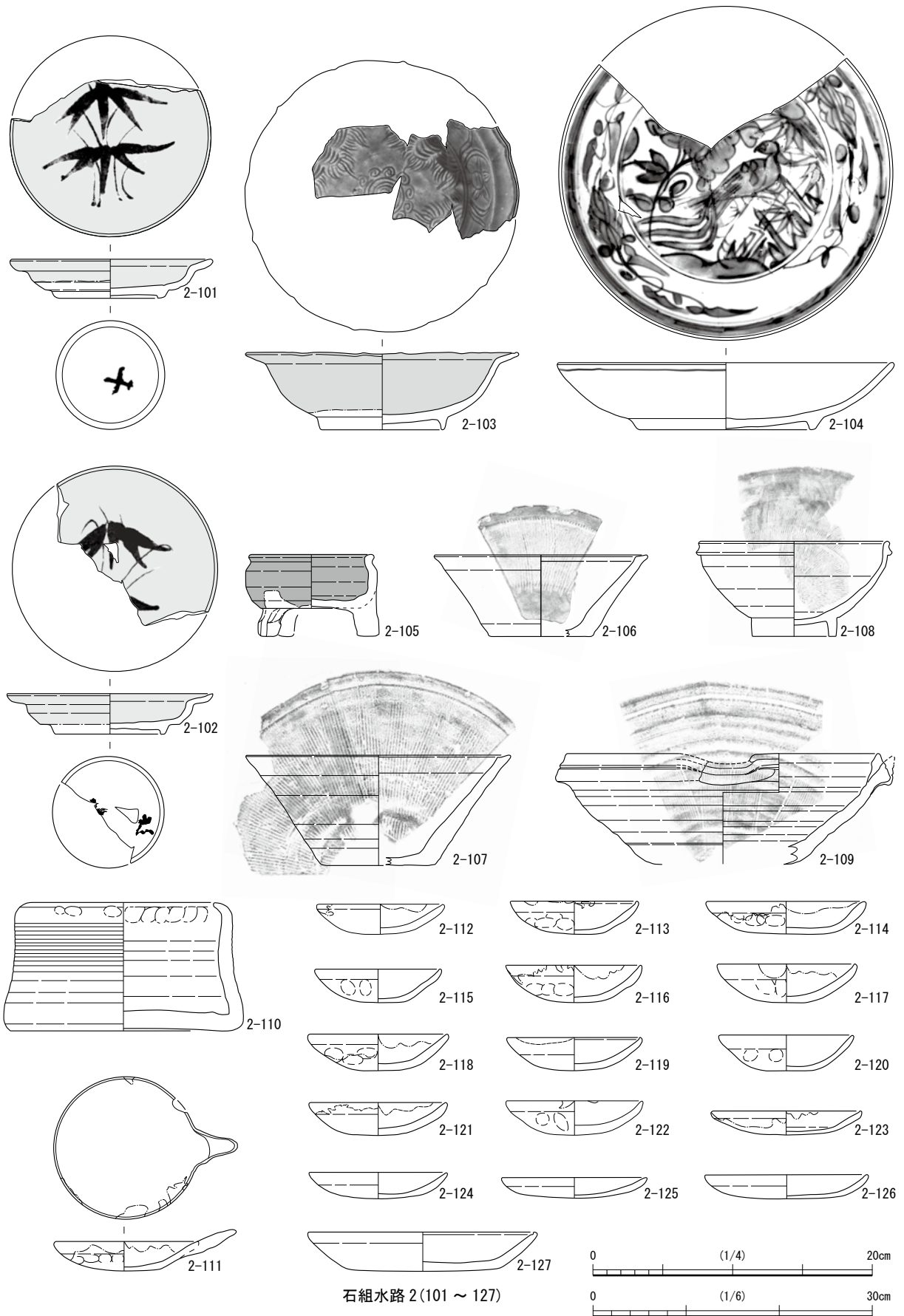
第31図 15-2 調査区石組水路② (縮尺 1/4)



第 32 図 15-2 調査区石組水路③ (縮尺 1/4)

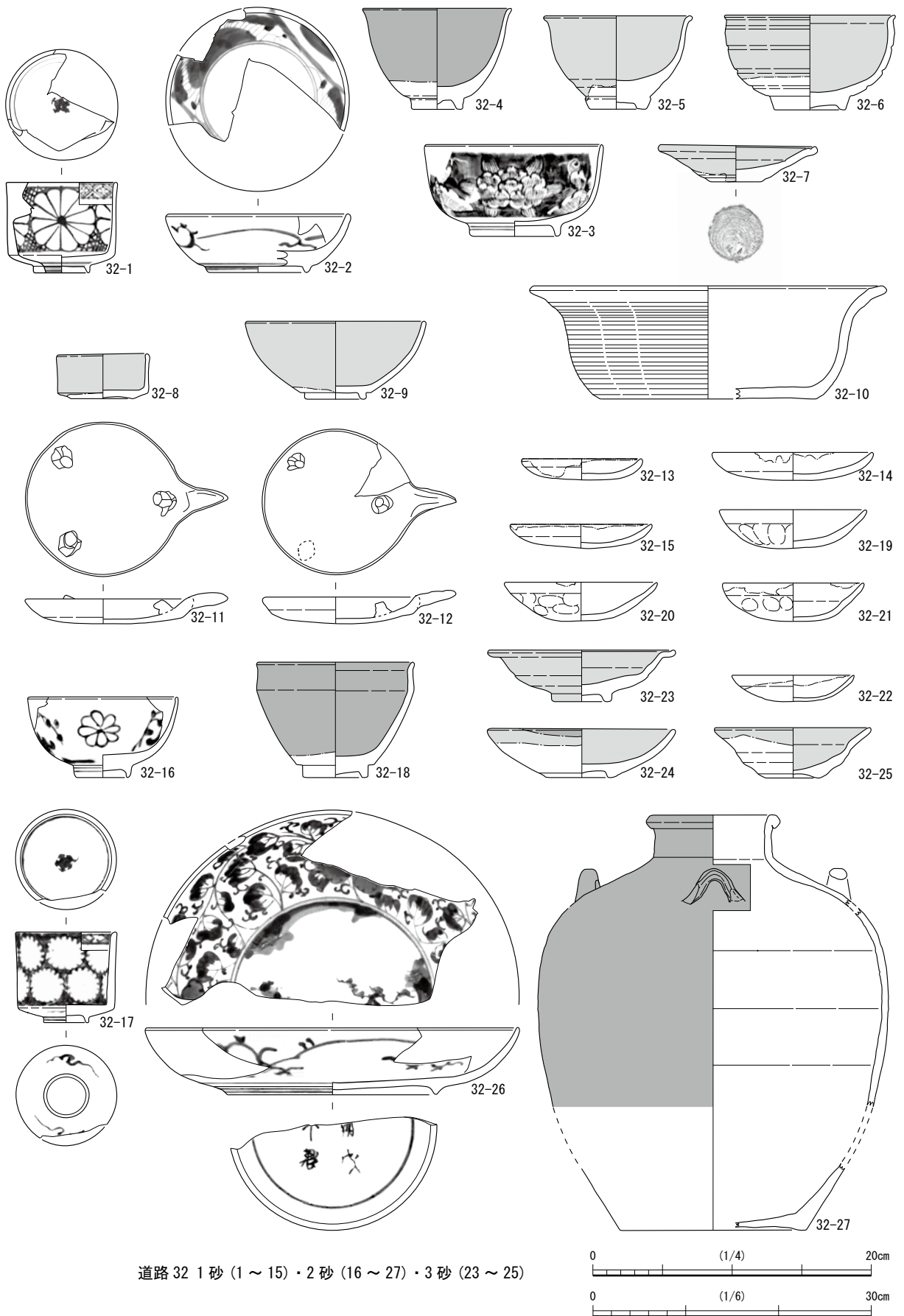


第 33 図 15-2 調査区石組水路 2④ (縮尺 1/4 1/6 : 2-80)



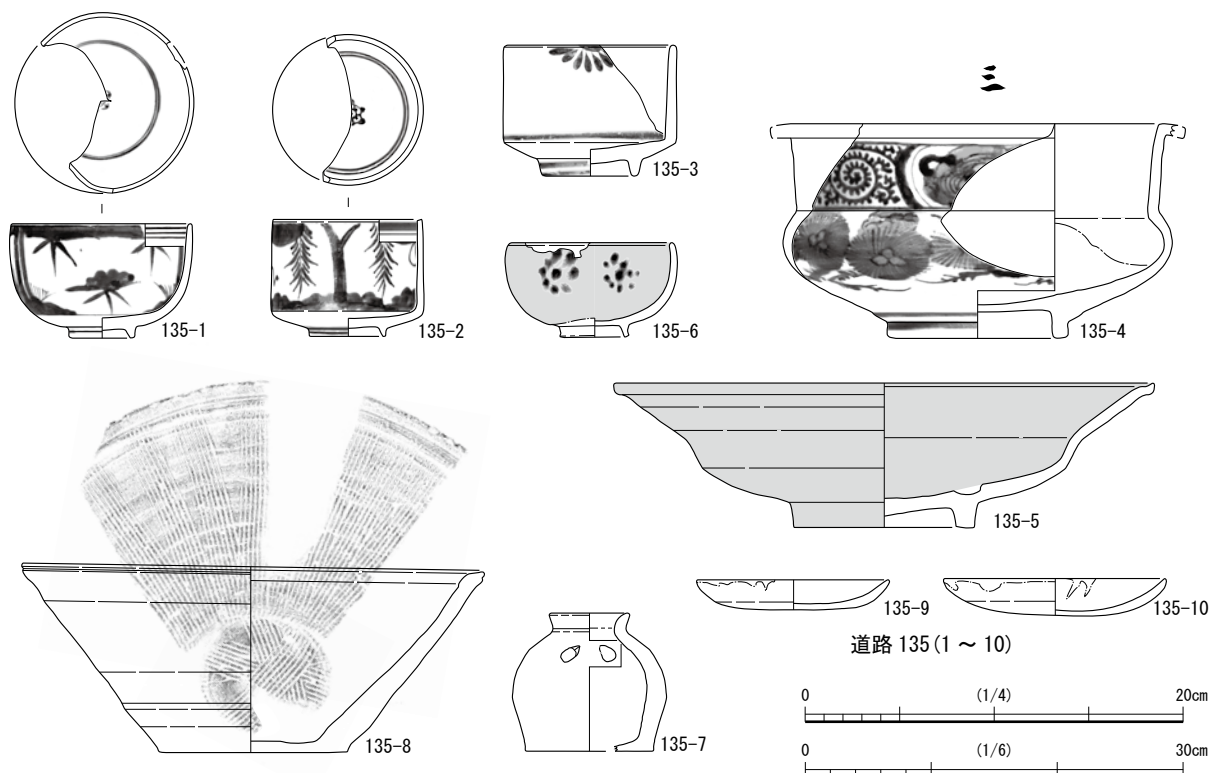
石組水路 2(101 ~ 127)

第 34 図 15-2 調査区石組水路 2⑤ (縮尺 1/4 1/6 : 2-105)



道路 32 1 砂 (1 ~ 15) ・ 2 砂 (16 ~ 27) ・ 3 砂 (23 ~ 25)

第 35 図 土器・陶磁器 15-2 調査区道路① (縮尺 1/4 1/6 : 32-10)



第36図 土器・陶磁器 15-2 調査区道路② (縮尺 1/4 1/6 : 135-8)

3) 第3・4砂

唐津焼 32-23は溝縁口縁、3-24は碁笥底で、32-25は体部が強く屈曲する灰釉系の皿である。

遺構 135 (第36図 第9表 写真図版第32)

伊万里 135-1は碗で外面に柳文を描く。135-2・3は波佐見産の陶胎染付の半筒碗で、前者は見込に五弁花文を持ち外面に柳文、後者は半菊文を描く。135-4は丸く張る腰部に垂直に伸びる頸部の付く香炉で、腰部内面は無釉である。外面に松枝文と蛸唐草文を描く。

唐津焼 135-5は全面に灰釉系の釉を施す溝縁口縁の大振り皿で、見込に胎土目痕が残る。

瀬戸・美濃焼 135-6は高台無釉の灰釉系の半球碗で、外面に九曜星を描く。

越前焼 135-7は肩部の把手を欠いたお歯黒壺で、内面に鉄分が残る。135-8は口縁下に不明瞭な沈線が巡る大振り皿で、G系の土師質皿がこれらに伴う

参考文献

大橋康二 1989 『考古学ライブラリー-肥前陶磁』 ニューサイエンス社

九州近世陶磁学会 2002 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念

瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『江戸時代の瀬戸窯』

瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 『江戸時代の美濃窯』

多治見市教育委員会 1993 『美濃窯の焼き物』

畑中英二 2003 『信楽焼の考古学的研究』 サンライズ出版

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 福井県埋蔵文化財調査報告第146集 『福井城跡 第2分冊 遺物』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 『越前焼総合調査事業報告』

第1章 土器・陶磁器

第1表 土器・陶磁器観察表 A街区15-1 調査区

表土・トレンチ (第1図 図版第1)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地			法量(cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器：釉・装飾		時期・備考
			口径	器高	底径	口径	器高	底径				
表1	D8	半球碗	肥前	8.2	4.7	3.2	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)窓内に草花文		V期	
表2	J5	端反碗	肥前	10.6	6.0	4.0	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)水草亀文 見)松竹梅文		V期	
表3	D9	坏	肥前	7.0	4.5	3.1	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)草花文		IV期	
表4	A9	匙	肥前	(5.3)	(5.3)	(9.1)	型成形		染付 外)笹文 内(唐草文)		IV期	
表5	J5	端反碗	瀬戸・美濃	8.8	4.3	3.5	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)福寿文		9小期	
表6	J6	端反碗	瀬戸・美濃	8.7	4.3	2.9	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)花文		9小期	
表7	J6	端反碗	瀬戸・美濃	8.8	5.0	3.0	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)流水文		9小期	
表8	J5	端反碗	瀬戸・美濃	(9.1)	4.9	(3.3)	ロクロ成形	削出し高台	染付 内・外)唐草文		9小期	
表9	G9	土師質皿	×	7.3	1.7	-	手づくね	口・内)狭みなデ	灰褐色		G系	
表10	J5	土師質皿	×	8.2	1.4	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色		G系	
表11	J5	土師質皿	○	9.9	1.6	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡灰色		G系	
表12	F10	人形	在地	-	5.3	5.1	型成形		淡灰色			
TR1	J6	碗	肥前	(14.0)	7.1	(4.8)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)草花文		IV期	
TR2	J6	平碗	肥前	14.5	5.3	5.3	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)輪宝繁文		IV-2期	
TR3	J6	紅皿	肥前	4.9	1.6	1.4	型成形		白磁 外)腰部無釉		V期	
TR4	I5/6	碗	京信	9.3	6.2	3.8	ロクロ成形	削出し高台	色絵 外)松竹文 高台部無釉		19世紀	
TR5	J6	平碗	京信	(12.8)	4.6	(4.9)	ロクロ成形	削出し高台	灰釉系 見)鉄絵 高台部無釉		19世紀	
TR6	J6	瓶	在地	1.4	3.7	2.6	ロクロ成形	糸切り高台	灰釉系 高台部無釉		幕末~近代	
TR7	J6	皿	在地	10.8	2.8	6.1	ロクロ成形	削出し高台	灰釉 内)花象嵌 高台部無釉		幕末~近代	

第1面遺構 (第2~5図 図版第1~4)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地			法量(cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器：釉・装飾		時期・備考
			口径	器高	底径	口径	器高	底径				
3-1	C7/8	碗	瀬戸・美濃	(10.2)	5.5	(3.5)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)唐草文+松竹梅文 見)寿文		9小期	
3-2	C8	皿	瀬戸・美濃	(11.2)	2.1	(6.0)	ロクロ成形	削出し高台	染付 内)草花文(型紙刷り)		近代	
3-3	C8	土瓶	在地	11.1	13.7	8.4	ロクロ成形	注口・耳貼付け	染付 外)草木文 体部内面・裏面無釉 腰部以下無釉		幕末~近代	
3-4	C8	羹	在地	(45.0)	-	-	ロクロ成形		内・外)鉄泥刷毛塗り・線掻き文		幕末~近代	
4-1	C8	鉢	瀬戸・美濃	(20.4)	8.7	(8.2)	ロクロ成形	削出し高台 口縁輪花状 身)目痕	灰釉系 高台部無釉		幕末~近代	
21-1	J5	坏	肥前	(5.2)	3.6	(2.4)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)網目文		V期	
21-2	J5	碗	肥前	8.5	4.0	3.2	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)若松文		IV期	
21-3	J5	播鉢	越前	37.1	14.4	14.2	ロクロ成形	片口	播目11条		VII-3期	
21-4	J5	土師質皿	○	8.2	1.5	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ	淡褐色		G系	
21-5	J5	土師質皿	○	9.7	1.7	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色		G系	
21-6	J5	土師質皿	×	12.3	2.1	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡灰色		G系	
22-1	J5	端反碗	瀬戸・美濃	9.5	4.7	4.0	ロクロ成形	削出し高台	染付 内・外)花唐草		10小期 銘	
22-2	J5	皿	○	10.0	1.7	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色		G系	
22-3	J5	皿	○	11.0	1.9	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色		G系	
28-1	D8	半球碗	肥前	8.4	5.5	3.6	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)稲東		V期	
28-2	D8	端反碗	肥前	(9.4)	5.6	(3.7)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)蝶文		V期	
28-3	D8	半球碗	肥前	8.2	5.5	3.5	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)宛文+果実文		V期	
28-4	D8	半筒碗	肥前	(7.9)	6.3	(4.0)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)青磁 内)四方襷文 見)五弁花文		IV期	
28-5	D8	碗蓋	肥前	10.2	3.0	5.3	ロクロ成形		染付 外)芭蕉文 見)鶯文		IV期	
28-6	D8	碗蓋	肥前	10.2	3.1	5.3	ロクロ成形		染付 外)芭蕉文 見)鶯文		IV期	
28-7	D8	碗蓋	肥前	8.3	2.7	3.6	ロクロ成形		染付 外)松文+家文+人物文 内)雷文+昆虫文		V期	
28-8	D8	端反碗	瀬戸・美濃	(9.2)	5.2	4.0	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)梅枝文 見)雀文		10小期	
28-9	D8	端反碗	瀬戸・美濃	8.3	4.4	3.3	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)花唐草+銀古文		10小期	
28-10	D8	端反碗	瀬戸・美濃	9.5	5.2	3.4	ロクロ成形	削出し高台	灰釉系 外)梅枝文		19世紀	
28-11	D8	碗	信楽	(8.5)	5.1	(4.0)	ロクロ成形	削出し高台 外)削り	灰釉系		19世紀	
28-12	D8	碗	信楽	8.5	5.2	3.9	ロクロ成形	削出し高台 外)削り	灰釉系		19世紀	
28-13	D8	碗	信楽	(8.5)	5.2	3.5	ロクロ成形	削出し高台 外)削り	灰釉系		19世紀	
28-14	D8	碗	信楽	8.3	5.0	3.9	ロクロ成形	削出し高台 外)削り	灰釉系		19世紀	
28-15	D8	碗	信楽	(8.5)	4.9	(3.3)	ロクロ成形	削出し高台 外)削り	灰釉系		19世紀	
28-16	D8	坏	在地	6.0	2.9	3.5	ロクロ成形		鉄釉 腰部以下無釉		幕末~近代	
28-17	D8	行平蓋	在地	13.6	3.1	3.8	ロクロ成形		灰釉系		幕末~近代	
28-18	D8	鉢	越前	35.4	19.0	20.0	ロクロ成形	脚貼付け	鉄泥刷毛塗り		VIII期 穿孔	
28-19	D8	鉢	越前	(34.0)	19.3	20.0	ロクロ成形	脚貼付け	鉄泥刷毛塗り		VIII期 穿孔	
28-20	D8	土師質受皿	○	11.6	1.8	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	黄褐色		G系受	
28-21	D8	土師質皿	×	9.7	1.9	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ	淡褐色		G系	
28-22	D8	土師質受皿	○	11.5	2.1	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け 底)板状痕	淡褐色		G系	
92-1	J6	土師質受皿	×	11.8	2.1	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け 底)板状痕	黄褐色		G系受	
92-2	J6	土師質皿	×	11.7	2.4	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け 底)板状痕	黄褐色		G系受	
92-3	J6	土師質皿	○	11.9	2.0	-	内型成形	口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡灰色		G系	
100-1	J6	匙	肥前	4.9	2.0	3.0	型成形		染付 内)唐草文		IV期	
100-2	J6	端反碗	瀬戸・美濃	8.1	4.1	3.0	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)隸字体文		10小期	
100-3	J6	蓋	在地	8.2	2.0	5.2	ロクロ成形	摘み貼付け	灰釉系 底部無釉		幕末~近代	
100-4	J6	鉢	越前	20.1	13.8	11.4	ロクロ成形		鉄泥垂らし掛け		VIII期 穿孔	
100-5	J6	鉢	越前	13.7	8.2	10.9	ロクロ成形	脚貼付け	鉄泥垂らし掛け		VIII期	
107-1	J6	碗	肥前	(10.4)	7.6	(4.4)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)山水文		II-2期	
107-2	J6	碗	肥前	(9.7)	7.6	(5.0)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)草花文		II-2期	
107-3	J6	碗	肥前	8.6	6.9	5.6	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)散し菊 内)菊文		III期	
107-4	J6	皿	唐津	12.6	3.2	4.5	ロクロ成形	回転糸切り 見)砂目痕	灰釉系 腰部以下無釉		II期	
107-5	J6	土師質皿	○	11.6	3.2	-	手づくね	口・内)回しナデ	淡灰色		C系2	
137-1	J6	香炉	肥前	(5.2)	3.9	4.6	ロクロ成形		染付 外)草花文 内・裏面無釉		IV期	
108-1	J6	碗	肥前	16.1	7.9	6.5	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)草花文 見)五弁花文		IV期	
108-2	J6	碗	肥前	10.1	4.8	3.9	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)山水楼閣文		IV期	
108-3	J6	半筒碗	肥前	(7.8)	6.2	(3.8)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)菊花文 内)四方襷文 見)五弁花文		IV期	
108-4	J6	皿	肥前	(18.6)	2.4	9.6	ロクロ成形	削出し高台	染付 見)風水文		II期	
108-5	J6	皿	肥前	(14.1)	4.8	(7.8)	ロクロ成形	蛇の目凹形高台	染付 内)草花文 見)牡丹文 裏)満福銘		V期	
108-6	J6	皿	肥前	14.4	4.0	7.8	ロクロ成形	削出し高台 口縁輪花状	染付 内)唐草文 見)五弁花文 裏)大明年製銘		IV期	
108-7	J6	蓋付鉢	肥前	(11.6)	(8.8)	(7.4)	ロクロ成形	削出し高台	染付 外)笹文 口縁内端部無釉		IV期	
108-8	J6	襷皿	瀬戸・美濃	21.6	4.5	8.2	ロクロ成形	削出し高台	灰釉系(貫入)		19世紀	
108-9	J6	水注	瀬戸・美濃	(4.7)	10.5	(5.2)	ロクロ成形	削出し高台 注口貼付け	鉄釉 体部内面無釉		19世紀	

第 1 章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
108-10	J6	鉢	瀬戸・美濃	15.3	9.6	6.9	ロクロ成形 削出し高台 外)削り	灰釉系(貫入) 腰部以下無釉	19世紀
108-11	J6	半球碗	京信	9.3	5.8	3.8	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	灰釉系 外)鉄絵:文様不明 高台部無釉	19世紀
108-12	J6	碗	京信	(8.4)	6.4	3.6	ロクロ成形 削出し高台	色絵 外)笹文・梅枝文 高台部無釉	19世紀
108-13	J6	甕	越前	(16.6)	13.0	-	ロクロ調整	灰釉	Ⅸ期
108-14	J5	甕	越前	(17.2)	(19.2)	-	ねじたて成形		Ⅵ期
108-15	J5	土師質皿	×	9.7	1.6	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	灰褐色	H系
108-16	J5	土師質皿	○	11.7	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
108-17	J5	火鉢	在地	(22.6)	(19.3)	(23.0)	粘土帯巻上	外)菊花・四菱印刻・列点文	19世紀
108-18	J5	風炉	在地	(18.6)	14.4	18.4	ロクロ成形 脚貼付け 体)へら磨き		19世紀
143-1	J6	土師質皿	○	9.8	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
143-2	J6	土師質皿	○	10.2	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
143-3	J6	土師質皿	○	10.3	1.8	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
134-1	J6	お歯黒壺	越前	(6.6)	12.3	(9.2)	ねじたて成形		Ⅵ期
123-1	I6	皿	肥前	(23.6)	4.1	(14.2)	ロクロ成形 削出し高台 裏)針支え	染付 内・見)牡丹唐草文	Ⅲ期
123-2	I6	皿	肥前	20.8	3.0	12.8	ロクロ成形 削出し高台 裏)針支え	染錦 外)草花文 内)宝相華文 見)雲竜文	Ⅱ期
123-3	I6	搦鉢	越前	(33.6)	14.4	(21.4)	ロクロ成形 高台貼付け	播目10条	Ⅷ-1期
5-1	E10	大皿	唐津	(32.6)	7.3	10.5	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉+白泥+銅緑釉+鉄絵 腰部以下無釉	Ⅱ期
5-2	F10	皿	瀬戸・美濃	(9.8)	2.3	(5.9)	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕 裏)輪トチ痕	灰釉	大濠Ⅴ期
5-3	F10	皿	×	8.9	2.0	-	手づくね 口・内)挟みナデ	淡橙色	C系2

整地土 1 (第6図 図版第5)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
整1-1	J6	碗	肥前	(8.3)	7.6	4.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)二重格子文 内・外)雷文 裏)印銘高台 裏面無釉	V期 焼継
整1-2	I6	碗	肥前	8.9	6.1	5.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)花蝶文	Ⅳ期
整1-3	I5/6	蕎麦猪口	肥前	(7.3)	5.7	(5.0)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)松竹梅	Ⅳ期
整1-4	I5/6	碗	唐津	9.9	5.6	4.4	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:山水文 高台部無釉	Ⅲ期
整1-5	J5/6	端反碗	瀬戸・美濃	(9.6)	4.3	(3.2)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)流水文	9小期
整1-6	J5/6	端反碗	瀬戸・美濃	(8.7)	4.8	(3.7)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	9小期
整1-7	J6	端反碗	瀬戸・美濃	9.5	5.5	3.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)山水文	9小期
整1-8	A6	腰錆碗	瀬戸・美濃	(8.9)	5.5	(3.2)	ロクロ成形 削出し高台	内・口)灰釉系 外)灰・鉄釉掛分け	9小期
整1-9	J6	端反碗	瀬戸・美濃	9.9	4.6	3.5	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)梅枝文	19世紀
整1-10	J5	半筒碗	京信	(9.1)	6.6	(4.3)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵 高台部無釉	幕末~近代
整1-11	J6	隅入角鉢	在地	(14.6)	6.4	(7.6)	ロクロ成形後変形 削出し高台	灰釉系 内・外)鉄絵:岩+秋草+文字 口)呉須	幕末~近代
整1-12	A6	蓋	在地	10.8	3.1	5.7	ロクロ成形 摘み貼付け	灰釉 外面無釉	19世紀
整1-13	A6	土鍋	在地	18.1	9.0	7.3	ロクロ成形 耳貼付け	鉄釉 底部無釉	19世紀
整1-14	J6	鉢	越前	36.9	24.7	23.0	ロクロ成形 脚貼付け	灰釉	Ⅸ期 穿孔
整1-15	I6	土師質受皿	×	10.5	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	灰褐色	G系受
整1-16	J6	土師質受皿	○	10.3	2.9	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	淡灰色	G系受
整1-17	I5	土師質皿	○	9.7	1.8	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
整1-18	J6	土師質皿	○	11.4	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
整1-19	J5/6	土師質皿	○	11.8	2.1	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡黄色	G系
整1-20	J6	土師質皿	○	11.6	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡黄色	G系
整1-21	J6	土師質皿	○	12.2	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
整1-22	A6	土師質皿	○	12.9	2.2	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
整1-23	J6	人形	在地	-	6.8	3.5	型作り	素焼き	

整地土 2 (第6図 図版第5・6)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
整2-1	I5	碗	肥前	6.4	2.4	2.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)松竹梅文	V期
整2-2	A6	坏	肥前	(9.4)	6.3	(5.0)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)雪輪文 口紅	Ⅳ期
整2-3	I6	鉢	越前	22.5	8.7	15.9	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥垂らし掛け	Ⅷ-1期
整2-4	J6	土師質受皿	×	9.2	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	淡灰色	G系受
整2-5	J6	土師質受皿	×	10.5	3.3	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	灰褐色	G系受
整2-6	I6	土師質皿	○	11.6	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡黄色	G系

整地土 4 (第7図 図版第6)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
整4-1	J5	碗	肥前	(15.8)	6.6	(5.8)	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)四方櫛文 見)梅枝文 裏)大明銘	Ⅲ期
整4-2	J5/6	鉢	唐津	(18.2)	8.3	(7.6)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 刷毛目 裏面無釉	V期
整4-3	I5/6	皿	唐津	(12.7)	3.7	(4.8)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 腰部以下無釉	Ⅱ期 漆継
整4-4	I6	碗	京信	9.5	6.7	4.4	ロクロ成形 削出し高台	色絵 外)葉文	19世紀
整4-5	I5	土師質皿	○	3.5	3.3	6.6	ロクロ成形 把手貼付け 回転系切り	赤褐色	17世紀
整4-6	J5	土師質皿	○	9.7	2.7	-	手づくね 口・内)回しナデ	淡灰色	C系2
整4-7	J5	土師質皿	○	11.0	2.9	-	手づくね 口・内)回しナデ	淡灰色	C系2
整4-8	J5	土師質皿	○	10.0	2.5	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	橙褐色	D系2
整4-9	J6	土師質皿	×	9.8	2.4	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	淡黄色	D系2

第2面遺構 (第7図 図版第6・7)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
226-1	I6	土師質受皿	×	10.4	1.8	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線 見)横ナデ 把手貼付け	赤褐色	D系受
226-2	I6	土師質受皿	○	10.4	2.0	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線 見)横ナデ 把手貼付け	赤褐色	D系受
226-3	I6	土師質皿	○	11.2	2.2	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	橙褐色	D系2
226-4	I6	土師質皿	○	11.0	1.7	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	淡灰色	D系2
226-5	I6	土師質皿	○	10.6	1.6	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	橙褐色	D系2
226-6	I6	土師質皿	○	11.0	1.6	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	赤褐色	D系2
226-7	I6	土師質皿	○	11.0	1.6	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	灰褐色	D系2
226-8	I6	土師質皿	○	10.9	1.7	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	橙褐色	D系2
230-1	I6	土師質皿	○	9.5	1.8	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	赤褐色	D系2
230-2	I6	土師質皿	○	11.0	2.0	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	赤褐色	D系2
230-3	I6	土師質皿	○	10.9	1.8	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圏線	赤褐色	D系2

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器・生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
230-4	I6	土師質皿	○	11.0	1.8	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	赤褐色	D系2
236-1	I6	壺	越前	11.5	20.8	11.6	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗り	VI-3期
227-1	I6	皿	肥前	(12.2)	2.9	4.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	II-2期
227-2	J6	碗	唐津	18.5	7.9	5.1	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	III期
245-1	J5/6	碗	肥前	(10.2)	-	-	ロクロ成形	染付 外)草花文	III期
245-2	J5/6	碗	肥前	(10.8)	7.4	(5.0)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	II-2期
245-3	J5/6	皿	肥前	(22.3)	6.5	(7.6)	ロクロ成形 削出し高台	染付 口)四方襷文 見)菊花文	III期
245-4	J5/6	土師質皿	○	7.9	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系3
245-5	J5/6	土師質皿	○	10.0	2.5	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系3
245-6	J5/6	土師質皿	○	9.6	2.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系3
245-7	J5/6	土師質皿	○	11.5	2.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系3
245-8	J5/6	土師質皿	○	11.3	3.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系2
245-9	J5/6	土師質皿	○	11.8	3.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系2
245-10	J5/6	土師質皿	○	11.2	2.8	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系2
245-11	J5/6	土師質皿	○	11.3	3.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1
259-1	I6	碗	唐津	(10.0)	7.1	5.1	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	III期
259-2	I6	土師質皿	○	10.9	1.8	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	赤褐色	D系2
259-3	I6	土師質皿	○	11.0	1.9	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	橙褐色	D系2
259-4	I6	土師質皿	○	11.5	1.6	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	淡灰色	D系2
259-5	I6	土師質皿	○	12.5	2.0	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	淡灰色	D系2

古代遺物 (第8・9図 図版第7)

遺物番号	地区	器種	種別	法量(cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
古1	B7	坏身	須恵器	8.3	4.0	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古2	F10	坏身	須恵器	8.9	3.5	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古3	E9	坏身	須恵器	12.2	3.4	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古4	E9	坏身	須恵器	12.0	3.4	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古5	E9	坏身	須恵器	13.7	3.3	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古6	E9	坏身	須恵器	13.9	3.4	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古7	E9	坏身	須恵器	(11.1)	4.9	8.0	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古8	E9	坏身	須恵器	13.6	4.0	10.0	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古9	D8	坏身	須恵器	(16.8)	5.4	(11.7)	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古10	F9	坏身	須恵器	14.2	4.6	7.5	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古11	F10	皿	須恵器	16.5	2.8	13.9	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古12	F10	皿	須恵器	17.9	2.6	14.4	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)不良 色調)淡灰色 胎土)緻密	
古13	B7	坏蓋	須恵器	8.3	4.3	4.9	体)回転ナデ 天)回転ヘラ削り	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古14	E9	坏蓋	須恵器	9.2	3.5	4.7	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古15	F9	坏蓋	須恵器	9.8	3.1	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古16	F9	坏蓋	須恵器	10.2	3.5	-	体)回転ナデ 天)回転ヘラ削り	焼成)不良 色調)淡灰色 胎土)緻密	
古17	E9	坏蓋	須恵器	12.2	3.2	-	体)回転ナデ 天)回転ヘラ削り	焼成)良好 色調)紫灰色 胎土)緻密	
古18	A7	坏蓋	須恵器	15.4	1.7	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古19	F10	壺	須恵器	14.0	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古20	E9	壺	須恵器	-	-	6.2	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古21	E9	壺	須恵器	-	-	4.7	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古22	F9	平瓶	須恵器	-	-	8.9	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古23	E9	甌	須恵器	(22.5)	16.5	(13.3)	体)回転ナデ 外)回転ヘラ削り	焼成)不良 色調)淡灰色 胎土)緻密	
古24	A7	耳皿	灰釉	-	-	(5.4)	体)ロクロ成形後変形	焼成)良好 色調)淡灰色 胎土)緻密	
古25	F9	皿	緑釉	(13.8)	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)黄緑色 胎土)緻密	
古26	F9	甕	土師器	(19.1)	-	-	外)縦刷毛 内)縦・横刷毛	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古27	B7	甕	土師器	(14.4)	-	-	外)縦刷毛 内)ヘラ削り	焼成)良好 色調)赤褐色 胎土)緻密	
古28	E9	甕	土師器	(18.2)	-	-	外)縦刷毛 内)ヘラ削り	焼成)良好 色調)赤褐色 胎土)緻密	
古29	C7	甕	土師器	(14.6)	-	-	外)縦刷毛 内)横刷毛	焼成)不良 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古30	E8	甕	土師器	(11.4)	7.6	5.0	外)横ナデ 内)横ナデ	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	外面煤付着
古31	F9	甕	土師器	(22.2)	-	-	外)横刷毛 内)縦刷毛	焼成)不良 色調)黄褐色 胎土)緻密	外面煤付着
古32	E9	甕	土師器	(14.4)	(13.8)	-	体)回転ナデ 外)ヘラ削り	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古33	A7	甕	土師器	(6.7)	-	-	外)縦刷毛 内)ヘラ削り	焼成)良好 色調)赤褐色 胎土)緻密	

第2表 土器・陶磁器観察表 B街区16-1調査区

包含層・第1面遺構 (第9図 図版第8)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器・生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
包1	H1	仏花瓶	肥前	8.8	15.6	5.0	ロクロ成形 耳貼付け	青磁 体部内面無釉	
112-1	G10	皿	唐津	10.8	3.4	4.2	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉 腰部以下無釉 兜布	II期
112-2	G10	甕	唐津	23.4	5.8	6.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉 兜布	II期
112-3	G10	天目茶碗	瀬戸・美濃	12.0	-	-	ロクロ成形	鉄釉 腰部以下無釉	大窯V
112-4	G10	皿	瀬戸・美濃	13.6	3.3	7.5	ロクロ成形 碁笥底	長石釉	大窯V
112-5	G10	播鉢	越前	30.3	10.3	13.0	ロクロ成形	播目9条	VI-1期
112-6	G10	土師質皿	○	8.8	2.2	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1
112-7	G10	土師質皿	○	8.9	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1
110-1	H10	端反皿	中国	11.2	3.1	6.6	ロクロ成形 削出し高台	白磁	E群
115-1	H10	壺	越前	14.5	-	-	ねじたて成形		VI-1期
115-2	H10	播鉢	越前	25.5	8.3	-	ロクロ成形	播目7条	VI-1期

古代遺物 (第9図 図版第8)

遺物番号	地区	器種	種別	法量(cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器・釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
古1	G10	坏身	須恵器	11.4	3.8	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古2	G10	坏身	須恵器	10.0	3.2	-	体)回転ナデ 外)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)暗褐色 胎土)緻密	
古3	H10	坏身	須恵器	12.8	3.3	-	体)回転ナデ 外)回転ヘラ切り	焼成)不良 色調)赤褐色 胎土)緻密	
古4	H1	壺蓋	須恵器	15.5	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古5	H1	甕	須恵器	23.6	-	-	外)叩き 内)叩き	焼成)不良 色調)淡黄色 胎土)緻密	
古6	G10	甕	土師器	23.8	-	-	外)縦刷毛 内)横刷毛	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古7	G10	甕	土師器	19.6	-	-	外)縦刷毛 内)横刷毛	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古8	G10	甕	土師器	16.0	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	種別	法量(cm)			成形・調整	土師質：胎土色調 陶磁器：釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
古9	G10	甕	土師器	17.1	-	-	外)縦刷毛 内)回転ナデ	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古10	G10	甕	土師器	21.2	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古11	G10	碗	土師器	-	-	8.0	体)回転ナデ	焼成)不良 色調)淡黄色 胎土)緻密	
古12	H10	碗	土師器	-	-	5.8	体)回転ナデ	焼成)不良 色調)淡黄色 胎土)緻密	
古13	G10	碗	土師器	12.9	4.0	6.6	体)回転ナデ	焼成)不良 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古14	G10	碗	黒色土器	13.8	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	

第3表 土器・陶磁器観察表 C街区①16-1調査区

表土・包含層(第10図 図版第8)

遺物番号	地区	器種	土師質：灯芯痕 陶磁器：生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質：胎土色調 陶磁器：釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
表1	D4	半筒碗	京信	8.0	4.8	4.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	19世紀
表2	H10	坏	在地	5.0	3.0	2.8	ロクロ成形 碁笥底	灰釉系 高台部無釉	19世紀
表3	D4	香炉	在地	(9.7)	7.8	-	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)草花文(鉄絵と白泥) 高台部無釉	19世紀
包1	C3	八角小鉢	肥前	8.9	5.1	3.9	ロクロ成形後型押し	色絵 外)草花文(赤・緑)	IV期
包2	D4	皿	肥前	14.2	3.9	7.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)瑞果文 見)花文 裏)渦福銘	IV期
包3	D4	皿	肥前	12.8	4.0	4.2	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	陶胎青磁 裏面無釉	V期
包4	C3	土師質受皿	○	14.5	2.2	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	灰褐色	G系受
包5	C4	土師質杯	×	7.4	2.9	-	手づくね	淡灰色	19世紀
包6	C3	土師質皿	○	11.4	1.8	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
包7	C3	土師質皿	○	11.7	1.9	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系

第1面遺構(第10〜12図 図版第8〜10)

遺物番号	地区	器種	土師質：灯芯痕 陶磁器：生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質：胎土色調 陶磁器：釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
1-1	D4	碗	肥前	9.6	6.4	5.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)杉文(コンニャク印判) 草花文	IV期
1-2	D4	碗	肥前	9.4	7.4	7.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)窓内に人物文+草花文	IV期
1-3	D4	広東碗	肥前	11.3	6.6	5.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文 見)五弁花文	V期
1-4	D4	碗	肥前	9.9	4.8	3.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 内・外)菊散し文	V期
1-5	D4	坏	肥前	5.5	2.6	1.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)芭蕉文	V期
1-6	D4	坏	肥前	5.7	2.3	2.0	ロクロ成形 削出し高台	赤絵 外)羽子板+羽根文	V期
1-7	D4	碗	肥前	7.3	3.7	2.6	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)笹文	IV期
1-8	D4	碗	肥前	7.7	4.0	2.9	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	IV期
1-9	D4	碗蓋	肥前	9.8	3.3	3.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)山水文	V期
1-10	D4	鉢蓋	肥前	8.8	3.3	-	ロクロ成形 削出し高台	白磁	近代
1-11	D4	鉢	唐津	20.1	8.3	7.3	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	刷毛目 高台部無釉	V期
1-12	D4	碗	瀬戸・美濃	12.4	6.5	4.4	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系+呉須	
1-13	D4	碗	京信	9.6	7.2	3.9	ロクロ成形 削出し高台	色絵(緑・赤)：草花文	印・墨書
1-14	D4	播鉢	越前	33.2	16.2	18.7	ロクロ成形 高台貼付け	播目9条	Ⅷ-2期
1-15	D4	鉢	越前	34.3	16.5	19.8	ロクロ成形 耳貼付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ期 穿孔
1-16	D4	鉢	越前	47.0	24.2	-	ロクロ成形 高台貼付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ期 穿孔
1-17	D4	鉢	越前	24.5	12.5	-	ロクロ成形 高台貼付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ期
1-18	D4	甕	在地	34.1	(18.4)	-	ロクロ成形	鉄泥流し掛け 外)白泥+印花+波状文+列点文	近代
1-19	D4	土師質受皿	○	15.6	2.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	淡灰色	G系受
1-20	D4	土師質皿	○	9.8	1.6	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
1-21	D4	土師質皿	×	10.4	1.9	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
1-22	D4	土師質皿	○	10.1	1.9	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
1-23	D4	土師質皿	×	12.0	1.9	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
1-24	D4	土師質皿	○	11.7	2.1	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
2-1	D4	碗	肥前	9.9	4.6	3.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)梵字文 見)寿文	V期
2-2	D4	段重蓋	肥前	13.7	-	-	ロクロ成形 摘み貼付け	染付 外)牡丹唐草文	IV期
2-3	D4	鉢	瀬戸・美濃	29.7	25.1	21.0	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄・呉須 底部無釉	19世紀
2-4	D4	鉢	越前	12.4	7.0	12	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥垂らし掛け	Ⅷ-1期
2-5	D4	鉢	越前	32.7	16.8	21.5	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ-1期
2-6	D4	土師質皿	×	10.2	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
2-7	D4	土師質皿	×	10.8	2.3	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
2-8	D4	焼塩壺	×	6.0	7.2	-	手づくね	灰褐色	
8-1	C4	碗	肥前	7.2	3.7	2.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)笹文	IV期
8-2	C4	半筒碗	肥前	7.8	6.4	3.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)若松文	IV期
8-3	C4	半球碗	京信	8.2	6.6	3.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	19世紀
8-4	C4	甕	越前	20.3	-	-	ねじたて成形 ロクロ調整	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ期
8-5	C4	土師質皿	○	9.8	1.3	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	灰褐色	G系
8-6	C4	土師質皿	○	10.2	1.6	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
8-7	C4	土師質皿	○	9.6	1.9	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡灰色	G系
8-8	C4	土師質皿	○	11.5	1.8	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
9-1	C4	碗	唐津	15.2	7.1	5.5	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	灰釉系 内・外)彫刻文	I期
9-2	C4	播鉢	越前	31.9	15.1	21.3	ロクロ成形 高台貼付け	播目12条	Ⅷ期
9-3	C4	土師質受皿	○	16.2	2.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	淡灰色	G系 受部無し
9-4	C4	土師質皿	○	10.0	1.3	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
9-5	C4	土師質皿	○	11.6	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
22-1	C4	皿	肥前	13.4	3.4	4.0	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	陶胎染付	V期
22-2	C4	土師質皿	○	10.0	1.6	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
22-3	C4	土師質壺	在地	9.2	6.5	6.6	手づくね	灰褐色	19世紀
22-4	C4	土師質壺	在地	6.0	5.1	5.9	手づくね	灰褐色	19世紀
25-1	D4	坏	肥前	5.7	4.3	3.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊花文	IV期
25-2	D4	餌耳	瀬戸・美濃	4.3	2.6	3.9	ロクロ成形 回転糸切り 耳貼付け	灰釉系 裏面無釉	19世紀
25-3	D4	鉢	瀬戸・美濃	25.2	14.5	20.5	ロクロ成形 耳貼付け	灰釉系	19世紀
25-4	D4	坏	在地	4.9	2.6	2.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵 高台部無釉	19世紀
25-5	D4	蓋	在地	5.6	2.1	2.9	ロクロ成形 回転糸切り 摘み貼付け	灰釉系 底部無釉	19世紀
25-6	D4	鉢	越前	34.1	18.1	21.7	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ期
25-7	D4	焼塩壺	在地	5.6	7.4	5	手づくね	灰褐色	印判
278-1	E5	碗	肥前	9.3	6.3	4.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)花散し文	IV期
278-2	E5	土師質皿	○	9.4	2.3	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1
278-3	E5	土師質皿	×	12.1	2.6	-	手づくね 口・内)挟みナデ 圈線	灰褐色	D系2 墨書
277-1	E5	碗	肥前	11.0	5.8	4.6	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	IV期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
277-2	E5	土師質皿	○	9.1	2.5	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2

古代遺物 (第13図 図版第10)

遺物番号	地区	器種	種別	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
36-1	C4	坏身	須恵器	9.6	2.9	6.5	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
36-2	A3	坏身	須恵器	11.7	3.5	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
36-3	C4	坏身	須恵器	12.8	3.4	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)淡灰色 胎土)緻密	
36-4	C4	坏身	須恵器	14.8	3.8	-	体)回転ナデ 外)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
36-5	A3	坏身	須恵器	15.1	4.4	9.8	体)回転ナデ 外)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
36-6	C4	坏蓋	須恵器	17.0	3.0	-	体)回転ナデ 外)ヘラ削り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
36-7	C4	甕	須恵器	-	-	-	外)叩き 内)叩き	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
36-8	B4	甕	須恵器	25.4	-	-	外)叩き 内)叩き	焼成)良好 色調)淡灰色 胎土)緻密	
36-9	C4	鍋	土師器	35.8	-	-	外)縦刷毛 内)横刷毛	焼成)良好 色調)淡灰色 胎土)緻密	
36-10	C3	甌	土師器	-	-	-	外)縦刷毛 内)横刷毛	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古1	E5	坏身	須恵器	13.4	5.7	-	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古2	D4	坏身	須恵器	15.8	4.9	9.8	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古3	E5	皿	須恵器	16.3	1.9	12.0	体)回転ナデ 底)回転ヘラ切り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古4	D4	坏蓋	須恵器	18.6	4.6	-	体)回転ナデ 外)回転ヘラ削り	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古5	E5	坏蓋	須恵器	17.7	4.4	-	体)回転ナデ 外)回転ヘラ削り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古6	D5	壺	須恵器	12.3	-	-	外)叩き 内)叩き	焼成)良好 色調)暗灰色 胎土)緻密	
古7	E6	壺	須恵器	11.0	-	-	外)叩き 内)叩き	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	
古8	E6	甕	土師器	11.6	-	-	外)縦刷毛 内)横刷毛	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古9	E6	甕	土師器	16.0	-	-	外)縦刷毛 内)ナデ	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古10	E5	甕	土師器	20.2	-	-	体)回転ナデ	焼成)良好 色調)黄褐色 胎土)緻密	
古11	C4	丸瓦	瓦	10.9	26.0	-	外)ナデ 内)叩き(布目) 端面面取り	焼成)良好 色調)灰褐色 胎土)緻密	

第4表 土器・陶磁器観察表 C街区② 15-2 調査区

第1遺構面 (第14~16図 図版第11~13)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
36-1	F6/7	皿	肥前	20.8	6.7	7.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文 見)竜文	Ⅱ期
36-2	F6/7	皿	肥前	12.6	2.8	5.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)柳文	Ⅱ期
36-3	F6/7	皿	唐津	(12.5)	3.2	4.1	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 腰部以下無釉	Ⅰ期
36-4	F6/7	土師質皿	×	9.6	1.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1
36-5	F6/7	土師質皿	○	8.8	2.1	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1
36-6	F6/7	土師質皿	○	8.9	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2
36-7	F6/7	土師質皿	○	9.2	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2
36-8	F6/7	土師質皿	○	9.2	1.9	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系3
36-9	F6/7	土師質皿	×	9.1	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系3
48-1	G8	碗	肥前	10.8	6.5	4.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)茗荷文 裏)大明銘	Ⅲ期
48-2	G8	皿	肥前	13.6	2.9	5.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)折り花文 見)花文	Ⅱ-2期
56-1	G6	碗	肥前	9.8	5.6	4.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)花唐草文 裏)渦福銘	Ⅳ期
56-2	G6	壺	在地	(7.8)	13.8	(6.0)	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 体部内面無釉 底部鉄鏝	19世紀
76-1	G5	土瓶	在地	7.7	9.5	6.5	ロクロ成形 注口・耳貼付け	灰釉系+銅緑釉 口縁内面・底部無釉	近代 墨書
156-1	J9	碗	肥前	8.5	5.3	3.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)蓮池文 見)鶯文	V期
156-2	J9	半筒碗	肥前	7.9	6.6	4.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 内・外)輪宝繁文 見)五弁花文	Ⅳ期
156-3	J9	半筒碗	肥前	8.0	6.4	4.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 内・外)輪宝繁文 見)五弁花文	Ⅳ期
156-4	J9	皿	肥前	14.2	3.7	9.0	ロクロ成形 蛇の目凹形高台	染付 内)亀甲文 見)山水文	V期
156-5	J9	香炉	肥前	9.9	7.6	5.6	ロクロ成形 削出し高台	青磁 体部内面・高台裏面無釉	V期
156-6	J9	土師質皿	○	9.9	1.8	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系 内側に樹脂
156-7	J9	土師質皿	○	9.8	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
156-8	J9	土師質皿	○	11.4	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
150-1	I7	碗	肥前	(10.1)	7.6	(4.7)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)縦線内に連続花文 鋸歯文	Ⅱ-1期
166-1	J8/9	碗	肥前	10.7	5.7	4.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)鼓+草花文 内)四方襷文 見)草花文	Ⅳ期 焼継
166-2	J8/9	碗	肥前	11.7	5.6	4.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文 見)昆虫文	Ⅳ期
166-3	J8/9	端反碗	肥前	11.4	6.1	4.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)福寿文 内・外)雷文 見)擬じ花文	V期
166-4	J8/9	半球碗	肥前	7.8	5.2	3.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)矢羽根文	Ⅳ期
166-5	J8/9	半筒碗	肥前	7.5	6.0	3.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊花文 見)五弁花文	Ⅳ期
166-6	J8/9	碗	肥前	(6.8)	6.5	3.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)二重格子文	V期
166-7	J8/9	皿	肥前	13.4	3.4	8.9	ロクロ成形 蛇の目凹形高台	染付 内・見)笹文	V期
166-8	J8/9	碗蓋	肥前	9.4	3.2	3.6	ロクロ成形	染付 外)鼓文+草花文 内)四方襷文 見)草花文	Ⅳ期
166-9	J8/9	碗蓋	肥前	9.8	3.1	3.8	ロクロ成形	染付 外)素描唐草文 内)雷文 見)麒麟文 裏)大明成化年製銘	V期
166-10	J8/9	碗蓋	肥前	9.9	3.0	4.0	ロクロ成形	染付 外)芭蕉文+花文 内)四方襷文 見)源氏香	V期
166-11	J8/9	碗蓋	肥前	10.3	3.0	4.3	ロクロ成形	外)青磁 内)染付 四方襷文 見)五弁花文	Ⅳ期
166-12	J8/9	段重蓋	肥前	15.3	-	13.8	ロクロ成形 取手貼付け	染付 外)唐草文	Ⅳ期
166-13	J8/9	碗	唐津	(16.5)	6.7	6.8	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	刷毛目 腰部以下無釉	V期
166-14	J8/9	碗	唐津	12.0	7.8	4.7	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
166-15	J8/9	端反碗	瀬戸	9.0	4.9	3.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)連弁文 見)四葉文	近代
166-16	J8/9	香炉	瀬戸・美濃	9.2	5.1	6.9	ロクロ成形 碁箱底	灰釉系 底部内外無釉	9小期
166-17	J8/9	香炉	瀬戸・美濃	9.1	6.0	-	ロクロ成形 脚貼付け	染付 外)松竹文 底部内外無釉	9小期
166-18	J8/9	片口鉢	京信	9.6	5.0	4.9	ロクロ成形 削出し高台 注口貼付け	灰釉系 外)鉄絵 高台部無釉	19世紀
166-19	J8/9	碗	九谷	7.2	3.3	2.4	ロクロ成形 削出し高台	色絵 外)扇面文+秋草文	19世紀
166-20	J8/9	土瓶蓋	在地	10.0	2.3	5.2	ロクロ成形 摘み貼付け	灰釉系 底部無釉	19世紀
166-21	J8/9	急須	京信	4.7	7.8	5.6	ロクロ成形 取手・注口貼付け	灰釉系+白泥+鉄釉+いっちゃん	幕末~近代
166-22	J8/9	急須	京信	4.8	8.0	5.9	ロクロ成形 取手・注口貼付け	灰釉系+白泥+瑠璃文+昆虫文	幕末~近代
166-23	J8/9	土鍋	在地	(19.5)	11.5	(7.7)	ロクロ成形 耳貼付け	鉄釉 腰部以下無釉	19世紀
166-24	J8/9	土瓶	在地	(9.4)	12.0	(8.2)	ロクロ成形 耳貼付け	鉄釉 体部内面無釉 腰部以下無釉	19世紀
166-25	J8/9	鉢	在地	15.4	7.6	5.8	ロクロ成形後変形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	19世紀 印
166-26	J8/9	鉢	在地	(15.2)	7.6	5.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部鉄泥	19世紀
166-27	J8/9	甕	越前	46.6	50.6	17.2	ねじて成形	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ期 窯印
166-28	J8/9	甕	越前	16.5	24.3	13.9	ロクロ成形 耳貼付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ期
166-29	J8/9	掃鉢	越前	33.4	15.1	18.4	ロクロ成形 高台貼付け	掃目 11条	Ⅶ期
166-30	J8/9	鉢	越前	29.7	13.2	18.0	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅶ期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整		土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
			口径	器高	底径						
166-31	J8/9	風炉	在地	22.7	19.3	18.0	ロクロ成形 体)	へら磨き 脚貼付け			19世紀
166-32	J8/9	土師質受皿	×	11.1	1.9	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	把手貼付け	橙褐色		G系受 受部破損
166-33	J8/9	土師質皿	○	9.5	1.3	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	底) 板状痕	灰褐色		G系
166-34	J8/9	土師質皿	×	10.9	1.6	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ		灰黄色		G系
166-35	J8/9	土師質皿	○	10.4	1.9	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ		灰黄色		G系

整地土1 (第17図 図版第14)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整		土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
			口径	器高	底径						
整1-1	I9	碗	肥前	10.4	6.2	3.8	ロクロ成形 削出し高台		染付 外) 草花文		IV期 銘
整1-2	B9	皿	肥前	(13.2)	4.5	(7.2)	ロクロ成形 削出し高台		染付 内) 蝶文		IV期
整1-3	A9	皿	肥前	13.2	3.4	7.1	ロクロ成形 蛇の目凹形高台 口縁輪花状		染付 内) 芭蕉文 見) 萩文+月文		V期
整1-4	A9	碗蓋	肥前	(3.6)	2.7	10.0	ロクロ成形		白磁 裏) 銘		近代
整1-5	G6	瓶	肥前	-	-	10.0	ロクロ成形 削出し高台		染付 外) 草花文+芭蕉文+櫛目文		IV期
整1-6	B9	端反碗	瀬戸・美濃	9.3	5.0	3.7	ロクロ成形 削出し高台		染付 外) 雲竜文		10小期
整1-7	B9	碗	京信	11.7	4.7	3.3	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系 見) 赤絵: 笹文 高台部無釉		19世紀
整1-8	I8	碗	京信	(12.0)	4.8	4.3	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系 見) 鉄絵: 河畔 高台部無釉		19世紀
整1-9	B9	碗	在地	(11.2)	6.9	(6.3)	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 高台部無釉		19世紀
整1-10	I8	蓋	在地	11.0	4.5	8.8	ロクロ成形 揃み貼付け		灰軸系 口縁内外面無釉		19世紀
整1-11	I8	壺	在地	10.5	13.4	8.1	ロクロ成形		灰軸系 口縁内面・底部内面無釉		19世紀
整1-12	J8	蓋	在地	10.0	4.6	6.9	ロクロ成形 揃み貼付け		鉄軸 口縁外面・体部内面無釉		19世紀
整1-13	H8	揃鉢	越前	35.4	14.8	18.2	ロクロ成形 高台貼付け		揃目11条		Ⅷ-2期
整1-14	J8	揃鉢	越前	33.0	14.1	13.3	ロクロ成形		揃目7条		Ⅷ-2期
整1-15	I7	土師質皿	×	10.7	1.4	-	ロクロ成形 底部平底		淡褐色		R系 墨書
整1-16	G7	土師質受皿	×	13.8	2.6	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ 把手貼付け 底) 板状痕		淡灰色		G系受
整1-17	A9	土師質皿	○	9.8	1.7	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	底) 板状痕	淡灰色		G系
整1-18	F7	土師質皿	×	10.0	1.7	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ		淡灰色		G系
整1-19	A9	土師質皿	○	11.2	2.0	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	底) 板状痕	灰褐色		G系
整1-20	G7	土師質皿	○	11.5	2.1	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ		灰褐色		G系
整1-21	H7	土師質皿	○	11.4	2.1	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ		灰褐色		G系
整1-22	H7	土師質皿	○	11.5	1.9	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	底) 板状痕	淡灰色		G系

整地土2 (第18・19図 図版第14・15)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整		土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
			口径	器高	底径						
整2-1	I8	碗	肥前	(8.5)	6.6	5.1	ロクロ成形 削出し高台		染付 外) 半菊文+矢羽根文 裏) 宣徳年製銘		V期
整2-2	H7	碗	肥前	9.4	-	-	ロクロ成形		染付 外) 縦縞内に福寿文		Ⅱ-1期
整2-3	J9	皿	肥前	12.0	3.7	4.4	ロクロ成形 削出し高台 見) 釉剥ぎ		染付 外) 二重網目文		IV期
整2-4	I8	皿	肥前	12.2	3.8	4.1	ロクロ成形 削出し高台 見) 釉剥ぎ		陶胎染付 外) 草花文		IV期
整2-5	I8	皿	肥前	(13.5)	3.3	5.2	ロクロ成形 削出し高台		染付 見) 人物文		Ⅱ-1期
整2-6	I8	皿	肥前	20.2	3.0	12.5	ロクロ成形 削出し高台		染付 見) 草魚文+五弁花文		IV期
整2-7	J9	碗	唐津	(10.5)	6.1	3.4	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 高台部無釉 兜布		Ⅱ期
整2-8	J9	半筒碗	唐津	(10.5)	7.5	4.5	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 高台部無釉 兜布		I期
整2-9	J8	碗	唐津	10.0	7.7	4.1	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系		Ⅲ期
整2-10	I8	碗	唐津	10.0	7.5	4.5	ロクロ成形 削出し高台		内・外) 刷毛目		Ⅲ期
整2-11	J9	皿	唐津	11.0	3.5	3.7	ロクロ成形後変形 削出し高台 見) 砂目痕		灰軸系 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整2-12	I8	皿	唐津	11.6	3.7	4.5	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系 腰部以下無釉		Ⅱ期
整2-13	J9	瓶	唐津	-	-	4.4	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 腰部以下無釉		I期
整2-14	H8	坏	唐津	6.0	4.7	3.4	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系		I期
整2-15	J8	片口鉢	唐津	(16.0)	9.1	6.3	ロクロ成形 削出し高台 注口貼付け		灰軸 腰部以下無釉		I期
整2-16	J9	天目茶碗	瀬戸・美濃	12.0	8.4	5.2	ロクロ成形 削出し高台		長石釉 高台鉄契		連房Ⅱ期
整2-17	J8	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.5)	6.4	4.5	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 腰部以下無釉		連房Ⅰ期
整2-18	J8	碗	瀬戸・美濃	(11.8)	7.5	(4.4)	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系 口縁鉄絵 裏面無釉		17世紀
整2-19	H8	半筒碗	瀬戸・美濃	(10.0)	7.5	(7.0)	ロクロ成形 削出し高台		志野釉		大窯V期
整2-20	J8	瓶	京信	(5.2)	7.1	(4.5)	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系 金泥: 瑞果文+笹文+椗垣文		19世紀
整2-21	I8	鉢	彰州窯	(20.2)	-	-	ロクロ成形		染付 外) 蓮池水鳥文		
整2-22	J8	揃鉢	越前	(29.1)	10.3	12.6	ロクロ成形		揃目9条		Ⅵ-1期
整2-23	A9	焙烙	在地	24.6	3.9	-	ロクロ成形 回転へら磨き				19世紀
整2-24	A9	土師質受皿	○	15.6	2.7	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	把手貼付け	灰褐色		G系受 油痕
整2-25	A9	土師質受皿	○	14.5	2.4	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ	把手貼付け	灰褐色		G系受 油痕
整2-26	J8	土師質皿	○	9.1	1.9	-	手づくね 口・見) 回しナデ		灰褐色		C系1
整2-27	I8	土師質皿	○	8.9	2.1	-	手づくね 口・見) 回しナデ		灰白色		C系2
整2-28	A9	土師質皿	○	9.4	2.2	-	手づくね 口・見) 回しナデ		灰褐色		C系2
整2-29	J8	土師質皿	○	9.6	2.5	-	手づくね 口・見) 回しナデ		灰褐色		C系2
整2-30	H7	土師質皿	○	11.3	2.5	-	手づくね 口・内) 挟みナデ 圏線		灰白色		D系2
整2-31	I8	土師質皿	○	11.3	1.8	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ 底) 板状痕		灰白色		G系
整2-32	I8	土師質皿	○	11.1	2.0	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ 底) 板状痕		淡灰色		G系
整2-33	A9	土師質皿	○	11.6	2.1	-	内型成形 口) 回しナデ 見) 横ナデ 底) 板状痕		淡灰色		G系
整2-34	J9	焼塩壺	-	3.0	8.4	-	手づくね 外) 指押え		淡灰色		

第2遺構面・整地土3 (第19図 図版第15・16)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整		土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
			口径	器高	底径						
178-1	A8/9	碗	肥前	(10.8)	7.0	4.7	ロクロ成形 削出し高台		染付 外) 草花文		Ⅱ-2期
178-2	A8/9	碗	唐津	11.5	7.1	4.0	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 腰部以下無釉 兜布		I期
178-3	A8/9	碗	唐津	(11.5)	7.8	4.6	ロクロ成形 削出し高台		灰軸系		Ⅱ期
178-4	A8/9	皿	唐津	(11.0)	3.3	4.5	ロクロ成形 削出し高台 見) 胎土目痕		灰軸系 腰部以下無釉		I期
178-5	A8/9	皿	唐津	14.0	3.9	4.6	ロクロ成形 削出し高台 見) 砂目痕		灰軸系 腰部以下無釉		Ⅱ期
178-6	A8/9	大皿	唐津	29.2	7.6	8.0	ロクロ成形 削出し高台 見) 砂目痕		灰軸系 内) 刷毛+オモダカ(銅緑釉)		I期
178-7	A8/9	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.2)	7.8	5.0	ロクロ成形 削出し高台		長石釉 腰部以下無釉		連房Ⅱ期
178-8	A8/9	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.2	7.6	4.5	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 腰部以下無釉		連房Ⅱ期
178-9	A8/9	天目茶碗	瀬戸・美濃	10.6	7.2	4.6	ロクロ成形 削出し高台		鉄軸 腰部以下無釉		連房Ⅱ期
178-10	A8/9	皿	瀬戸・美濃	10.8	1.9	5.6	ロクロ成形 削出し高台		灰軸 見) 無釉 裏) 輪下子痕		大窯V

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器：釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
178-11	A8/9	お蔭黒壺	越前	(4.7)	10.0	7.5	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗り	窯印
178-12	A8/9	掃鉢	越前	28.1	11.3	12.9	ロクロ成形	掃目 8条	VI-2期
178-13	A8/9	土師質皿	○	9.6	1.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰黄色	C系2
178-14	A8/9	土師質皿	○	9.8	2.1	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰黄色	C系2
177-1	J9	八角皿	肥前	15.2	3.5	6.0	ロクロ成形後変形 削出し高台	染付 見)花文	II-1期
262-1	A9	皿	唐津	12.2	5.2	4.4	ロクロ成形後変形 削出し高台	灰釉 内・見)絵唐津(菖蒲) 高台部無釉	II-1期
299-1	18	皿	唐津	9.7	2.6	2.8	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉系 腰部以下無釉 兜布	I期
361-1	J9	碗	唐津	11.4	6.9	4.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 高台部無釉 兜布	I期
361-2	J9	坏	唐津	5.5	5.5	3.2	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 高台部無釉 兜布	II期
229-1	J9/10	皿	瀬戸・美濃	11.7	2.3	6.4	ロクロ成形 削出し高台	長石釉 見)鉄絵:唐草文	連房I期
整3-1	J9	碗	唐津	(11.9)	6.1	(3.8)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 腰部以下無釉	II期
整3-2	A9	碗	唐津	(11.5)	7.6	5.1	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 外)鉄絵 腰部以下無釉	II期
整3-3	J9	皿	唐津	12.7	4.0	4.9	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉 腰部以下無釉	II期
整3-4	C10	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.2	7.6	4.3	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房I期
整3-5	J10	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.1	7.1	4.0	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房II期
整3-6	J9	お蔭黒壺	越前	4.7	(10.4)	(6.7)	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗り	壺内部 鉄分残存
整3-7	J9	掃鉢	越前	28.2	10.5	13.3	ロクロ成形	掃目 10条	VI-2期

第5表 土器・陶磁器観察表 D街区 15-2 調査区上層

第1面遺構(第20図 図版第17)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器：釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
106-1	B1	土師質皿	×	9.5	1.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰黄色 内側に金箔	C系1 墨書
106-2	B1	土師質皿	×	9.7	1.8	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰黄色 内側に金箔	C系1
107-1	B1	土師質皿	×	9.5	1.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰黄色 内側に金箔	C系1
77-1	B10	碗蓋	肥前	(6.0)	2.9	(10.6)	ロクロ成形	染付 外)山水文	V期
77-2	B10	輪花皿	瀬戸・美濃	(15.3)	2.7	7.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 高台部無釉	近代
81-1	B10	碗	肥前	11.6	5.7	4.4	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	染付 外)梅枝文	IV期
81-2	B1	碗	肥前	14.4	6.5	4.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)鶴+亀甲文 内)四方襷文 見)円形松竹梅文	V期
81-3	B10	碗蓋	肥前	(9.4)	3.0	3.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)牡丹文 見)草花文	V期 銘
81-4	B1	皿	瀬戸・美濃	(22.4)	2.7	(16.2)	ロクロ成形 碁筒底	灰釉系 外)鉄絵:草花文 裏面無釉	近代
81-5	B1	蓋	瀬戸・美濃	10.6	1.4	9.1	ロクロ成形 摘み貼付け	灰釉系+鉄釉(二重線) 内外面無釉	19世紀
81-6	B1	鉢	瀬戸・美濃	(10.8)	8.6	6.2	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	灰釉系+鉄釉(二重線) 高台部無釉	19世紀
81-7	C1	鉢	瀬戸・美濃	12.7	6.9	7.0	ロクロ成形 碁筒底	染付 外)花文 内)灰釉系	近代
81-8	B1	香炉	瀬戸・美濃	(10.6)	5.4	6.7	ロクロ成形 脚張付け	無釉	19世紀
81-9	B10	土瓶	在地	(11.8)	13.8	7.7	ロクロ成形 注口貼付け	灰釉系 体部内面無釉 腰部以下無釉	19世紀
81-10	B10	掃鉢	在地	(39.6)	17.1	(16.0)	ロクロ成形 削出し高台	外)鉄釉 内)鉄泥	近代
81-11	B1	裏	越前	8.4	8.4	9.8	ロクロ成形	鉄泥垂らし掛け	VIII-1期
81-12	C1	鉢	越前	21.8	7.7	(17.5)	ロクロ成形 脚張付け	鉄泥刷毛塗り	VIII-1期
81-13	B1	七輪	在地	20.4	20.0	19.4	ロクロ成形 鍋掛け・把手貼付け		幕末~
81-14	A10	焜炉	在地	20.5	19.6	-	ロクロ成形 鍋掛け・脚貼付け		幕末~
整1-1	B1	半筒碗	肥前	(8.0)	6.5	(3.9)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)松枝文	V期
整1-2	A10	半筒碗	肥前	7.7	6.3	3.9	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊文+御所車 内)四方襷文	V期
整1-3	B10	半筒碗	瀬戸・美濃	(7.7)	6.0	(3.8)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 鉄釉+藍釉	10小期

第6表 土器・陶磁器観察表 D街区 15-2 調査区下層

整地土1・2(第21・22図 図版第18・19)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質・胎土色調 陶磁器：釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
表土		鉢	瀬戸・美濃	29.6	14.1	(15.6)	ロクロ成形 削出し高台 身)砂目痕	灰釉 外)へら+刻文:草花文	10小期
整1-2-1	A1	半球碗	肥前	(8.3)	5.1	3.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)竹林文	V期
整1-2-2	A10	碗	肥前	(8.4)	5.2	3.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)竹林文 見)五曜星	IV期
整1-2-3	A10	碗	肥前	(7.7)	6.0	(3.4)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)丸内に格子	IV期
整1-2-4	A10	碗	肥前	6.8	6.5	2.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)牡丹唐草文	V期
整1-2-5	A10	半筒碗	肥前	7.7	6.0	4.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)矢羽根文	IV期
整1-2-6	B1	蕎麦猪口	肥前	(7.0)	5.8	4.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)木花文	IV期
整1-2-7	A1	坏	肥前	6.7	4.8	3.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)立花文 裏)大明年製銘	IV期
整1-2-8	B10	皿	肥前	15.5	2.7	6.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)草花文 見)筒内に花文と鳥	IV期
整1-2-9	B1	皿	肥前	(14.1)	3.9	(8.3)	ロクロ成形 蛇の目凹形高台	染付 内)扇に草花文	V期
整1-2-10	A10	皿	肥前	21.3	6.2	10.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)松竹梅+唐草文 見)五弁花文 裏)大明年製銘	灰釉
整1-2-11	A10	角鉢	肥前	(12.6)	5.1	7.2	ロクロ成形後変形 削出し高台	染付 内)松竹梅 見)松竹梅 裏)渦福銘	V期
整1-2-12	A10	鉢	肥前	18.4	8.7	(7.6)	ロクロ成形後変形 蛇の目凹形高台	染付 内)アケビ文 外)幾何学文	V期
整1-2-13	B1	鉢	肥前	(12.7)	6.0	5.5	ロクロ成形後変形 削出し高台	染付 外)草花文 内)芭蕉文 見)鶴	V期 裏面赤書
整1-2-14	B1	瓶	肥前	(1.9)	(8.8)	4.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)梅枝文	IV期
整1-2-15	A10	鉢	肥前	9.0	7.5	6.0	ロクロ成形後変形 碁筒底	陶胎染付 外)草花文 高台部無釉	V期 印
整1-2-16	A10	端反碗	瀬戸・美濃	9.0	4.9	3.5	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 梅枝文	19世紀
整1-2-17	B1	端反碗	瀬戸・美濃	9.3	5.0	3.4	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 梅枝文	19世紀
整1-2-18	A10	端反碗	京信	(8.6)	4.8	2.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	19世紀
整1-2-19	A10	碗	京信	(8.9)	4.8	(3.0)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	19世紀
整1-2-20	A10	碗	京信	(8.9)	6.5	4.2	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 色絵 外)松枝文 高台部無釉	19世紀
整1-2-21	B1	平碗	京信	(12.0)	4.3	3.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	19世紀
整1-2-22	A10	平碗	京信	12.0	5.7	(3.6)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系銅 外)柳文 高台部無釉	19世紀
整1-2-23	B10	灯明皿	在地	8.4	2.3	4.5	ロクロ成形 碁筒底	灰釉系 外面無釉	幕末~近代
整1-2-24	B1	鉢	在地	(19.4)	7.7	9.1	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	灰釉系+銅緑釉 高台部無釉	幕末~近代
整1-2-25	A10	皿	彰州窯	16.4	3.3	8.1	ロクロ成形 削出し高台 高台砂付	染付 見)竜文	
整1-2-26	B10	鉢	越前	(12.8)	11.3	(12.8)	ロクロ成形 脚貼付け	外)鉄泥垂らし掛け	IX期
整1-2-27	A10	鉢	越前	20.0	13.5	13.4	ロクロ成形 脚貼付け	外)灰釉垂らし掛け	IX期 穿孔
整1-2-28	B10	鉢	越前	29.3	8.1	20.3	ロクロ成形 脚貼付け	灰釉	IX期
整1-2-29	B10	鉢	越前	(29.5)	13.8	15.7	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥刷毛塗り	VIII-2期
整1-2-30	B1	鉢	越前	27.8	14.2	18.0	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥刷毛塗り	VIII-2期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
整1・2-31	B10	鉢	越前	41.5	14.7	21.3	ロクロ成形	外)鉄泥刷毛塗り 内)灰釉垂らし掛け	Ⅸ期
整1・2-32	B10	土師質受皿	○	(14.5)	2.5	-	ロクロ成形 回転糸切り 把手貼付け	灰褐色	R系受
整1・2-33	B1	土師質受皿	×	14.5	2.3	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	明灰色	G系受
整1・2-34	B1	土師質皿	○	8.7	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系
整1・2-35	B10	土師質皿	×	9.6	1.6	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡黄色	G系
整1・2-36	B1	土師質皿	○	8.7	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
整1・2-37	A1	土師質皿	×	10.1	1.8	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系
整1・2-38	B1	焙烙	在地	(23.1)	6.2	17.3	ロクロ成形 素焼き	橙褐色	
整1・2-39	B1	焙烙	在地	29.4	8.0	15.6	ロクロ成形 素焼き	赤褐色	

第3面遺構(第23・24図 図版第20・21)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
191-1	B1/10	瓶	肥前	5.4	(20.5)	6.9	ロクロ成形 削出し高台 縦縞	染付 外)縦縞内に唐草文+樹花文	Ⅱ-1期
240-1	B10	碗	唐津	11.4	7.7	4.9	ロクロ成形 削出し高台	刷毛目	Ⅲ期
233-1	B10	碗	肥前	10.9	7.7	4.4	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)山水文	Ⅳ期
233-2	B10	皿	肥前	13.8	3.0	6.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)扇面	Ⅱ-1期
233-3	B10	香炉	肥前	8.6	6.6	5.4	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)唐草文 内・高台部無釉	Ⅴ期
233-4	B10	鉢	肥前	(22.3)	(11.0)	(9.0)	ロクロ成形 蛇の目凹高台	青磁 見)印花 裏)鉄夾	Ⅲ期
233-5	B10	碗	唐津	9.6	6.0	4.8	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:山水文 高台部無釉 裏)清水銘	Ⅲ期
233-6	B10	土師質皿	○	7.7	1.9	-	手づくね	灰褐色	B系
233-7	B10	土師質皿	○	9.7	1.8	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1
233-8	B10	土師質皿	○	8.6	1.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰黄色	C系1
233-9	B10	土師質皿	○	9.4	1.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1
246-1	A1	碗	肥前	10.5	7.4	4.2	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)唐草文	Ⅴ期
246-2	B1	碗	唐津	9.4	7.0	5.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅳ期
246-3	B1	土師質皿	○	9.6	1.8	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	淡灰褐色	D系2
246-4	B1	土師質皿	○	10.1	1.8	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	灰橙褐色	D系2
255-1	B1	皿	肥前	14.5	2.9	5.2	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)草花文	Ⅱ-1期
255-2	B1	碗	唐津	11.1	7.2	5.0	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
255-3	B1	碗	唐津	11.2	8.1	4.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
255-4	B1	碗	唐津	9.8	7.1	4.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅳ期
255-5	B1	土師質皿	○	9.2	2.1	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	D系1
255-6	B1	土師質皿	○	10.6	2.0	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	灰褐色	D系1
258-1	B1	碗	唐津	9.4	6.6	4.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
258-2	B1	碗	唐津	9.5	7.0	4.5	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
258-3	B1	土師質皿	○	6.5	2.2	-	手づくね	淡褐色	B系
258-4	B1	土師質皿	○	9.8	2.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1
258-5	B1	土師質皿	○	9.8	2.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1
258-6	B1	土師質皿	×	10.9	2.3	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	灰褐色	C系1
259-1	B1	碗	唐津	12.0	8.8	4.8	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台裏無釉	Ⅳ期
259-2	B1	碗	唐津	11.2	6.5	5.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:山水文 高台部無釉 裏)清水銘	Ⅲ期
259-3	B1	土師質皿	○	9.7	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	Ⅲ期
259-4	B1	土師質皿	○	9.5	2.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2
281-1	B10	皿	唐津	10.5	3.2	3.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 腰部以下無釉	Ⅱ期
281-2	B10	坏	唐津	6.7	4.7	3.5	ロクロ成形 回転糸切り	灰釉系 腰部以下無釉	Ⅱ期
281-3	B10	天目茶碗	瀬戸・美濃	10.8	7.4	3.6	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房Ⅱ期
281-4	B10	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.5	7.8	4.3	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房Ⅱ期
281-5	B10	皿	彰州窯	26.1	5.1	13.9	ロクロ成形 削出し高台 高台砂付	染付 内)唐草文 見)山水文+鳥文	
281-6	A10	瓶	備前	-	-	13.6	ロクロ成形	外)鉄泥刷毛塗り	
278-1	B1/10	水柱	瀬戸・美濃	4.5	10.7	5.6	ロクロ成形 注口・持ち手貼付け	鉄釉	
279-1	B1/10	天目茶碗	瀬戸・美濃	10.6	6.8	4.1	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房Ⅱ期
305-1	B1	碗	唐津	11.3	7.1	5	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期
357-1	B10	皿	中国	10.4	2.4	4.6	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	白磁 高台部無釉 兜布	

整地土3(第24図 図版第21・22)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考	
				口径	器高	底径				
整3-1	A10	碗	肥前	(11.3)	6.6	4.9	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草本文	Ⅲ期	
整3-2	B1	碗	肥前	(11.3)	(6.5)	(3.7)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)山水文	Ⅲ期	
整3-3	B1	皿	肥前	15.0	2.7	5.3	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	染付 見)藤文	Ⅱ-2期	
整3-4	B1	皿	肥前	(14.7)	2.9	6.4	ロクロ成形後糸切り細工	削出し高台	染付 内)花文	Ⅱ-2期
整3-5	A10	皿	肥前	(19.3)	5.0	6.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)山水文+人物文	Ⅱ-2期	
整3-6	B1	蓋付鉢	肥前	(12.5)	(8.7)	(7.9)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)牡丹唐草文 口縁内部無釉	Ⅲ期	
整3-7	B1	碗	唐津	9.5	7.1	4.1	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	Ⅲ期	
整3-8	B10	碗	唐津	9.2	6.8	4.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系+銅緑釉	Ⅲ期	
整3-9	B1	碗	唐津	10.7	7.7	4.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期	
整3-10	A10	碗	唐津	8.9	6.7	4.9	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期	
整3-11	A1	碗	唐津	9.5	6.9	5.2	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 口縁内端部無釉	Ⅲ期	
整3-12	B10	鉢	唐津	22.7	4.6	8.6	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉系	Ⅰ期	
整3-13	B1	碗	唐津	12.4	7.6	5.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:山水文 高台部無釉 裏)清水銘	Ⅲ期	
整3-14	B1	碗	唐津	10.9	6.6	5.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:山水文 高台部無釉	Ⅲ期	
整3-15	B1	碗	唐津	(8.4)	5.6	4.2	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉 裏)清水銘	Ⅲ期	
整3-16	B10	碗	唐津	11.8	7.9	4.9	ロクロ成形 削出し高台	刷毛目	Ⅲ期	
整3-17	A10	端反皿	中国	(13.4)	4.2	6.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)山水文 高台裏無釉		
整3-18	B10	搗鉢	越前	(27.8)	10.9	10.8	ロクロ成形	搗目10条	Ⅵ-3期	
整3-19	A10	瓶	備前	3.1	21.7	7.8	ロクロ成形後胴部変形 人物文貼付け		墨書	
整3-20	A10	水指蓋	伊賀	-	3.0	11.4	手づくね 手持貼付け			

整地土4(第25図 図版第22)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾	時期・備考
				口径	器高	底径			
整4-1	A10	碗	唐津	(9.9)	7.4	4.4	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	Ⅱ期
整4-2	B10	皿	唐津	(11.8)	4.3	4.1	ロクロ成形後変形 削出し高台	灰釉系 見)鉄絵:草花文 高台部無釉 兜布	Ⅰ期
整4-3	B10	皿	唐津	11.3	3.6	4.3	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉系 内)鉄絵 腰部以下無釉	Ⅰ期
整4-4	B10	皿	唐津	13.3	3.4	5.5	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉系 内)鉄絵 腰部以下無釉	Ⅰ期
整4-5	B1	皿	唐津	12.1	3.5	4.3	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉系 口縁鉄釉 腰部以下無釉	Ⅰ期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
整4-6	B1	皿	唐津	11.4	3.7	4.0	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉 腰部以下無釉	II期	
整4-7	A10	皿	唐津	(26.4)	6.8	(8.4)	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉 腰部以下無釉	I期	
整4-8	B1	瓶	唐津	-	-	4.6	ロクロ成形	鉄釉 底部無釉	I期	
整4-9	B1	天目茶碗	瀬戸・美濃	11.5	7.2	4.4	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房II期	
整4-10	B10	皿	瀬戸・美濃	13.0	3.1	7.6	ロクロ成形 削出し高台 裏)輪下チ痕	長石釉	大窯V	
整4-11	A1	皿	瀬戸・美濃	(11.3)	2.6	5.2	ロクロ成形 削出し高台 裏)輪下チ痕	灰釉 見)無釉	連房I期	
整4-12	B1/10	皿	瀬戸・美濃	(25.3)	6.2	(16.1)	ロクロ成形 削出し高台 碁笥底	長石釉 見)草花文	大窯V	
整4-13	A10	皿	瀬戸・美濃	(24.6)	4.2	(17.7)	ロクロ成形 削出し高台 碁笥底	長石釉 見)草花文	大窯V	

D街区 15-2 調査区上層 整地土3 (第25図 図版第22)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
整3-1	A/J10	碗	唐津	(10.8)	6.7	4.1	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉 兜布	I期	
整3-2	J10	皿	唐津	21.3	6.0	7.4	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉 腰部以下無釉	I期	
整3-3	A/J10	皿	唐津	26.2	5.5	8.9	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉 高台部無釉	I期	
整3-4	J10	鉢	唐津	(39.9)	13.4	(11.2)	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉 見込、腰部以下無釉	II期	
整3-5	J10	碗	瀬戸・美濃	(11.8)	7.5	(4.5)	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉流し分け 高台部無釉	連房II期	
整3-6	J10	皿	瀬戸・美濃	(10.5)	3.5	(5.9)	ロクロ成形後変形 削出し高台	灰釉+銅緑釉	連房I期	
整3-7	A/J10	皿	瀬戸・美濃	11.3	2.5	6.7	ロクロ成形 削出し高台	長石釉 見)鉄絵:唐草文	連房I期	
整3-8	J10	丸皿	瀬戸・美濃	12.0	2.7	7.3	ロクロ成形 貼付け高台 見)目痕	灰志野	大窯IV期	
整3-9	J10	菊皿	瀬戸・美濃	12.6	3.0	7.0	ロクロ成形後変形 貼付け高台	灰志野	大窯IV期	

第7表 土器・陶磁器観察表 E街区 15-2 調査区

第1面遺構 (第26図 図版第23)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
14-1	C1	端反碗	肥前	10.1	6.3	3.6	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	染付 外)格子文 見)五弁花文	V期 銘	
14-2	C2	碗蓋	肥前	9.0	2.8	3.9	ロクロ成形	染付 外)変形松枝文	V期	
14-3	C1	鉢	越前	31.5	18.1	19.4	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥刷毛塗)	Ⅷ-2期	
148-2	C1	瓶	肥前	6.0	-	-	ロクロ成形	染付 外)横線文 体部内面無釉	V期	

整地土1 (第26図 図版第23)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
整1-1	B/C1	碗	肥前	9.5	6.3	4.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)鶴丸+松(コンニャク印判) 裏)銘	IV期	
整1-2	C1	碗	肥前	(10.3)	7.4	4.5	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)唐草文	V期	
整1-3	C1	碗	肥前	9.8	6.9	4.2	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)唐草文	V期	
整1-4	C10	甕	唐津	28.1	28.1	12.4	ロクロ成形 削出し高台	外)白釉に銅緑釉、鉄釉で松栢 刷毛目 体部内面・高台部鉄泥	III期	
整1-5	C1	碗	瀬戸・美濃	8.7	6.0	3.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鏡手 内)銅緑釉	8小期	
整1-6	B/C1	碗	京信	8.9	5.8	3.0	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:草花文 高台部無釉	19世紀	
整1-7	C1	碗	京信	12.7	5.2	4.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 見)鉄絵:河畔文 高台部無釉	19世紀	
整1-8	D1	碗	京信	11.2	7.9	(5.4)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系+鉄釉+銅緑釉	19世紀	
整1-9	C1	碗	京信	9.3	6.5	3.9	ロクロ成形後変形 削出し高台 綫文	外)青磁 内)白磁 裏面無釉	19世紀	
整1-10	B/C1	碗	京信	8.9	6.2	3.7	ロクロ成形後変形 削出し高台 綫文	外)青磁 内)白磁 裏面無釉	19世紀	
整1-11	B/C1	碗	京信	8.9	6.3	4.2	ロクロ成形後変形 削出し高台 綫文	外)青磁 内)白磁 裏面無釉	19世紀	
整1-12	C1	火入	京信	(10.7)	9.7	10.2	ロクロ成形 削出し高台	赤絵 外)唐草文+鳳凰文 体部内面・裏面無釉	19世紀	
整1-13	C1	土師質皿	×	16.5	3.0	-	手づくね 口・内)狭みなデ	淡灰色	D系大	
整1-14	C1	土師質皿	×	16.5	2.9	-	手づくね 口・内)狭みなデ	灰黄色	D系大	
整1-15	C1	土師質皿	○	21.7	3.9	-	手づくね 口・内)狭みなデ	淡灰色	D系大	

第2面遺構面・整地土2 (第27図 図版第23・24)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
145-1	C1	皿	唐津	10	3.1	3.5	ロクロ成形 削出し高台 碁笥底	灰釉系 口縁鉄釉	II期	
整2-1	C1	碗	肥前	9.5	5.0	3.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)二重網目文	IV期	
整2-2	C1	皿	肥前	5.5	1.6	2.4	ロクロ成形 削出し高台	白磁	II期	
整2-3	C1	皿	肥前	11.7	3.6	4.0	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	陶胎染付 高台部無釉	IV期	
整2-4	C1	皿	肥前	12.0	3.6	3.8	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	陶胎染付 見)二重網目文	V期	
整2-5	C1	皿	肥前	12.5	3.7	4.6	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	陶胎染付 見)二重網目文	V期	
整2-6	C1	碗	唐津	11.1	6.8	4.7	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	II期	
整2-7	C1	碗	唐津	10.2	6.6	4.1	ロクロ成形 削出し高台	刷毛目	III期	
整2-8	C1	碗	唐津	(9.6)	6.9	3.8	ロクロ成形 削出し高台	刷毛目	III期	
整2-9	C1	碗	唐津	(10.2)	7.0	(4.4)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系+白釉 外)鉄絵	III期	
整2-10	C1	皿	唐津	10.5	3.1	4.2	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉系 内)鉄絵 腰部以下無釉 兜布	I期	
整2-11	C1	鉢	唐津	(19.6)	9.8	9.0	ロクロ成形 削出し高台	刷毛目 高台部無釉	IV期	
整2-12	C1	天目茶碗	瀬戸美濃	(9.9)	6.8	4.4	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房I期	
整2-13	C1	土師質受皿	○	(13.4)	2.1	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け	淡灰色	G系受油痕	
整2-14	C1	土師質皿	×	9.0	1.9	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1	
整2-15	C10	土師質皿	○	11.0	2.0	-	手づくね 口・内)狭みなデ	淡灰色	D系3	
整2-16	C1	土師質皿	○	10.0	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	黄褐色	G系	
整2-17	B/C1	土師質皿	○	11.4	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡黄色	G系	

第3面遺構 (第27図 図版第24)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕 陶磁器:生産地	法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調 陶磁器:釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
146-1	C1	碗	唐津	(11.7)	6.0	4.5	ロクロ成形 削出し高台	灰釉 高台部無釉 兜布	I期	
146-2	C1	皿	唐津	9.8	3.3	3.3	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉 高台部無釉	I期	
146-3	C1	天目茶碗	瀬戸・美濃	(10.7)	7.1	4.5	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房I期	
146-4	C1	皿	瀬戸・美濃	10.8	2.4	5.5	ロクロ成形 削出し高台 見)無釉	灰釉	連房I期	
146-5	C1	甕	越前	-	-	-	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗)	Ⅵ-2期	
146-6	C1	お歯黒壺	越前	-	-	7.5	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗)	Ⅵ-3期	
146-7	C1	土師質皿	○	9.3	2.4	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1	
146-8	C1	土師質皿	○	9.4	2.5	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1	

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕		法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調		時期・備考
			陶磁器:生産地	陶磁器:生産地	口径	器高	底径		陶磁器:釉・装飾	陶磁器:釉・装飾	
146-9	C1	土師質皿	○		9.2	2.1	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色		C系1
146-10	C1	土師質皿	○		10.0	2.5	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色		C系1

整地土3・第4面遺構(第28・29図 図版第25・26)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕		法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調		時期・備考
			陶磁器:生産地	陶磁器:生産地	口径	器高	底径		陶磁器:釉・装飾	陶磁器:釉・装飾	
整3-1	C1	碗	肥前		10.9	7.5	5.6	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)唐草文		Ⅲ期
整3-2	C10	碗	肥前		10.3	6.1	4.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文		Ⅲ期 銘
整3-3	C1	碗	肥前		8.1	5.9	5.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文(コンニャク印判)		Ⅳ期
整3-4	C1	皿	肥前		9.5	2.7	3.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 内・見)菊花文		Ⅱ-1期
整3-5	C1	皿	肥前		12.9	3.5	5.1	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	染付		Ⅱ-1期
整3-6	C1	皿	肥前	(12.3)	2.9	5.0	5.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)梅枝文		Ⅱ-1期
整3-7	C1	皿	肥前		13.5	2.9	5.1	ロクロ成形 蛇の目高台	染付 見)梅文+鶯文		Ⅱ-1期
整3-8	C1	皿	肥前		13.5	3.7	5.6	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)半菊文		Ⅱ-2期 磁器化不良
整3-9	C1	皿	肥前		14.6	3.9	4.8	ロクロ成形後変形 削出し高台	染付 内)花文 見)角花文		Ⅱ期
整3-10	C1	碗	唐津		10.5	7.6	3.9	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整3-11	C1	碗	唐津		10.6	7.0	3.9	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 腰部以下無釉		Ⅰ期
整3-12	C1	碗	唐津		11.4	6.4	4.5	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 腰部以下無釉		Ⅱ期
整3-13	C1	碗	唐津		10.6	6.3	4.1	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 腰部以下無釉		Ⅱ期
整3-14	C1	碗	唐津		11.2	6.4	4.1	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 高台部無釉 兜布		Ⅱ期
整3-15	C1	碗	唐津		11.0	6.8	4.3	ロクロ成形 削出し高台	鉄軸 高台部無釉		Ⅱ期
整3-16	C1	皿	唐津		22.0	6.4	6.0	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 腰部以下無釉		Ⅱ期
整3-17	C1	皿	唐津		12.8	2.8	3.8	ロクロ成形 回転糸切り 見)砂目痕	灰軸 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整3-18	C10	皿	唐津	(13.9)	3.3	4.2	4.2	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰軸 腰部以下無釉		Ⅱ期
整3-19	C1	皿	唐津		13.2	3.1	4.9	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰軸 腰部以下無釉		Ⅱ期
整3-20	D1	皿	唐津		12.5	3.2	3.9	ロクロ成形 回転糸切り 見)砂目痕	灰軸 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整3-21	C1	皿	唐津		12.2	3.2	4.4	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰軸 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整3-22	D1	皿	唐津		11.3	3.3	3.7	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	鉄軸 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整3-23	C1	皿	唐津		11.8	3.0	3.3	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	鉄軸 腰部以下無釉 兜布		Ⅱ期
整3-24	C1	皿	唐津		11.6	2.9	3.4	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	鉄軸 腰部以下無釉		Ⅱ期
整3-25	C1	片口鉢	唐津		11.8	6.4	5.3	ロクロ成形 削出し高台	鉄軸 腰部以下無釉 兜布		Ⅰ期
整3-26	D1	瓶	唐津		2.4	-	5.0	ロクロ成形	灰軸 腰部以下鉄燻		Ⅰ期
整3-27	C1	天目茶碗	瀬戸・美濃		10.8	7.7	3.7	ロクロ成形 削出し高台	鉄軸 腰部以下無釉		連房Ⅰ期
整3-28	C1	天目茶碗	瀬戸・美濃		10.4	7.3	4.0	ロクロ成形 削出し高台	鉄軸 腰部以下無釉		連房Ⅰ期
整3-29	C1	鉢	瀬戸・美濃		28.2	5.9	14.5	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	鉄軸 見)線刻		大窯Ⅳ期
整3-30	C1	皿	瀬戸・美濃	(12.0)	2.5	(6.3)	(6.3)	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	長石釉		大窯Ⅴ期
整3-31	C1	皿	瀬戸・美濃		11.3	2.8	6.2	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	長石釉(貫入)		大窯Ⅳ期
整3-32	C1	皿	瀬戸・美濃		12.9	2.9	6.9	ロクロ成形 削出し高台	長石釉 高台部無釉		大窯Ⅴ期
整3-33	C1	鉢	中国		29.6	5.8	19.3	ロクロ成形	灰軸系		
整3-34	C1	鉢	中国		34.5	6.1	24.9	ロクロ成形	外)鉄軸 内)灰軸		
整3-35	C10	甕	越前		29.0	35.8	15.1	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗り		Ⅵ期 窯印
整3-36	C1	播鉢	越前		27.6	10.7	12.4	ロクロ成形	播目10条		Ⅵ-2期
整3-37	C1	鉢	越前		28.0	6.5	13.6	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り		17世紀
整3-38	C1	鉢	越前		29.5	8.7	16.6	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り		17世紀
整3-39	C10	土師質皿	○		9.9	2.5	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色		C系1
整3-40	C1	土師質皿	○		8.5	2.1	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色		C系1
整3-41	C1	土師質皿	○		9.0	2.0	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色		C系1
整3-42	C1	土師質皿	○		9.2	2.2	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色		C系2
整3-43	D1	土師質皿	×		12.1	2.3	-	手づくね 口・見)回しナデ 圏線	淡黄色		D1類
整3-44	B1	土師質壺	在地		3.7	-	-	手づくね	橙褐色		
292-1	C1	皿	瀬戸・美濃		10.2	2.6	6.1	ロクロ成形 削出し高台 裏)輪ド子痕	灰軸		大窯Ⅳ期
301-1	C1	皿	瀬戸・美濃		10.3	2.0	5.6	ロクロ成形 削出し高台 見)無釉	灰軸		連房Ⅰ期

第8表 土器・陶磁器観察表 石組溝

石組水路2上層(第30図 図版第27)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕		法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調		時期・備考
			陶磁器:生産地	陶磁器:生産地	口径	器高	底径		陶磁器:釉・装飾	陶磁器:釉・装飾	
2-1	C10	碗	肥前		8.3	6.2	4.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外))一重網目文+魚文		Ⅲ期
2-2	B/C10	碗	肥前		10.7	4.9	4	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	染付 外)草花文		Ⅳ期
2-3	C1	碗	肥前		(9.3)	5.8	(4.5)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)松鶴丸(コンニャク印判)		Ⅳ期
2-4	C10	碗	肥前		(8.5)	(5.6)	-	ロクロ成形	染付 外)花散し文		Ⅳ期
2-5	B1	端反碗	肥前		9.6	5.0	(3.8)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)騎馬人物文		Ⅴ期
2-6	B1	端反碗	肥前		9.6	5.4	3.6	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	陶胎染付 外)松竹文		Ⅴ期
2-7	C10	碗	肥前		11.7	7.2	4.7	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)文様不明		Ⅴ期
2-8	B1	碗	肥前		10.1	7.4	4.2	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)唐草文		Ⅴ期
2-9	C10	半筒碗	肥前		7.8	6.3	3.6	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊文 見)五弁花文		Ⅳ期
2-10	C10	半筒碗	肥前		7.6	5.8	3.9	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)半菊文+亀甲文 内)四方襷文 見)五弁花文		Ⅴ期
2-11	C10	半筒碗	肥前		7.1	5.9	3.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 内・外)宝珠連繫文 見)五弁花文		Ⅴ期
2-12	C10	皿	肥前		13.3	3.4	9.0	ロクロ成形 蛇の目凹形高台	染付 見)山水文		Ⅴ期
2-13	B1	段重	肥前		7.6	3.0	6.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)梅文		Ⅴ期
2-14	C10	端反碗	瀬戸・美濃		9.1	4.8	3.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)梅文+福寿文		10小期
2-15	B1	端反碗	瀬戸・美濃		8.5	3.9	2.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)隸字体文		10小期
2-16	C10	半筒碗	瀬戸・美濃	(7.8)	6.9	3.8	3.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊花文 見)五曜星		9期
2-17	B1	環	瀬戸・美濃		5.7	4.3	3.1	ロクロ成形 削出し高台	染付系 外)算木手文		Ⅳ期
2-18	C10	鉢皿	瀬戸・美濃		7.0	1.6	2.9	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系(貫入)		連房Ⅰ期
2-19	C1	鉢	瀬戸・美濃		12.2	6.8	9.9	ロクロ成形 碁笥底	灰軸系		19世紀
2-20	C10	碗	京信		9.0	5.7	3.1	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 高台部無釉		19世紀
2-21	B1	植木鉢	在地		11.5	8.4	-	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系+薬灰軸 体部内面・高台部無釉		近代
2-22	B1	鉢	在地		17.0	10.0	7.3	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 内・外)鏡手風 高台部無釉		墨書
2-23	C10	土鍋	在地		12.8	6.0	4.8	ロクロ成形 脚貼付け	鉄軸 底部無釉		19世紀
2-24	C1	皿	在地		9.5	1.9	3.2	ロクロ成形 碁笥底	白磁 腰部以下無釉葉		近代
2-25	B1	皿	在地		11.0	2.3	4.0	ロクロ成形 碁笥底	白磁 腰部以下無釉葉		近代
2-26	C10	甕	越前		26.7	-	-	ねじたて成形	鉄泥刷毛塗り		Ⅵ期 窯印
2-27	C10	甕	越前		15.3	25.5	(14.8)	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り		Ⅶ-2期

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質：胎土色調 陶磁器：釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
2-28	C10	甕	越前	16.2	-	-	ロクロ成形 耳貼付け	鉄泥刷毛塗り	Ⅷ-2期	
2-29	C10	甕	越前	9.8	6.7	9.5	ロクロ成形	鉄泥垂らし掛け	Ⅷ-2期	
2-30	B1	土師質皿	×	18.6	3.7	-	ロクロ成形	淡灰色	R系大	
2-31	B1	土師質皿	×	22.9	4.0	-	手づくね 口・内)狭みなデ	淡灰色	K系大	

石組水路2 (第31～34図 図版第28～31)

遺物番号	地区	器種	土師質・灯芯痕 陶磁器：生産地	法量 (cm)			成形・調整	土師質：胎土色調 陶磁器：釉・装飾		時期・備考
				口径	器高	底径				
2-32	C10	碗	肥前	9.8	7.6	4.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)山水文	Ⅱ-2期	
2-33	B1	碗	肥前	10.0	7.0	4.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草水文	Ⅱ-2期	
2-34	C1	碗	肥前	(11.1)	6.8	4.7	ロクロ成形 削出し高台	青磁	Ⅲ期	
2-35	C10	碗	肥前	8.0	6.0	4.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)唐草文	Ⅳ期	
2-36	C10	碗	肥前	8.6	5.4	4.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊文+葉文(コンニャク印判)	Ⅳ期	
2-37	B1	碗	肥前	10.3	5.5	4.1	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	染付 外)草花文	V期	
2-38	B1	碗	肥前	8.1	4.5	3.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)文様不明	Ⅳ期	
2-39	B1	碗	肥前	8.1	4.7	3.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草木文(コンニャク印判)	Ⅳ期	
2-40	C1	端反碗	肥前	11.8	(5.4)	-	ロクロ成形	染付 外)草花文	V期	
2-41	C1	碗	肥前	9.0	6.1	4.1	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)菊花文	V期	
2-42	C10	碗	肥前	10.7	7.5	5.0	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)草花文	波佐見	
2-43	B1	碗	肥前	9.7	5.1	4.0	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)草花文	Ⅳ-1期	
2-44	C10	碗	肥前	9.0	6.3	5.2	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)山水文	V期	
2-45	C1	酒杯	肥前	13.1	4.0	4.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)柳文 見)沢湯文	Ⅱ-1期	
2-46	C1	皿	肥前	13.9	3.3	4.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)菊花文	Ⅱ-1期	
2-47	C1	皿	肥前	14.0	2.1	6.4	ロクロ成形 蛇の目状高台	染付 見)兎(吹墨)	Ⅱ-1期	
2-48	C1	皿	肥前	(12.9)	4.0	(3.9)	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)草花文	Ⅱ-2期	
2-49	C10	皿	肥前	(12.8)	3.9	(4.2)	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)芙蓉手草花文 見)菊花	Ⅱ-2期	
2-50	C1	皿	肥前	13.5	3.1	4.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)芙蓉手草花文 見)草花文	Ⅱ-2期	
2-51	C10	皿	肥前	12.8	6.0	4.8	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	染付	灰釉	
2-52	C10	皿	肥前	8.3	2.2	3.5	ロクロ成形後型押し 削出し高台	染付 見)草花文	Ⅱ-2期	
2-53	C10	皿	肥前	8	2.5	2.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 見)蝶文	Ⅱ期	
2-54	B1	皿	肥前	18.8	3.7	9.2	ロクロ成形 削出し高台 針支え	染付 内)波頭文 見)山水文 裏)渦福銘	Ⅲ期	
2-55	B1	皿	肥前	(13.1)	2.6	8.3	ロクロ成形 削出し高台 針支え	染付 見)墨吹き 見)五弁花文(コンニャク印判)	Ⅳ期	
2-56	C1	皿	肥前	(12.8)	3.0	(7.6)	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)矢羽根文 見)五弁花文(コンニャク印判) 裏)大明年製銘	Ⅳ期	
2-57	B1	皿	肥前	14.0	4.1	7.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)牡丹唐草文+竹文 見)五弁花文 裏)渦福銘	Ⅳ期	
2-58	C10	皿	肥前	14.0	3.6	8.2	ロクロ成形 蛇の目凹形高台	染付 内)蛸唐草	V期	
2-59	B1	皿	肥前	13.7	3.4	8.5	ロクロ成形 蛇の目凹形高台	染付 見)松竹文	V期	
2-60	C10	皿	肥前	(21.0)	4.7	11.6	ロクロ成形 削出し高台 針支え	染付 見)湖畔の舟 裏)大明年製銘	Ⅳ期	
2-61	C10	皿	肥前	13.3	3.5	4.7	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	陶胎磁器 青磁	V期	
2-62	B1	坏	肥前	7.0	3.5	2.9	ロクロ成形 削出し高台	白磁	Ⅲ期	
2-63	B1	坏	肥前	7.5	5.1	3.7	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)萩 裏)大明年製銘	Ⅳ期	
2-64	B1	仏飯器	肥前	8.0	6.4	4.0	ロクロ成形 碁筒底	青磁 高台裏面無釉	Ⅱ期	
2-65	C10	仏飯器	肥前	7.1	5.0	3.7	ロクロ成形 碁筒底	染付 外)雨降り文 高台部無釉	Ⅳ期 墨書	
2-66	B1	端反鉢	肥前	16.6	8.8	6.5	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)市松文 見)裏(文字)	V期	
2-67	C10	鉢	肥前	18.2	6.8	8.1	ロクロ成形後型押し 口縁輪花状	白磁 内)菊花文(印)	Ⅳ期	
2-68	C10	瓶	肥前	4.1	16.5	6.4	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)松竹梅	Ⅱ-2期	
2-69	B1	瓶	肥前	-	-	5.9	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	Ⅱ-2期	
2-70	C10	天目茶碗	唐津	11.4	5.3	4.0	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	I期	
2-71	B1	天目茶碗	唐津	11.6	5.4	4.4	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	I期	
2-72	C1	碗	唐津	10.7	6.9	3.8	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉 兜布	Ⅱ期 墨書	
2-73	B1	碗	唐津	11.5	6.5	(5.0)	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	I期	
2-74	B1	碗	唐津	9.5	7.5	4.5	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系+銅緑釉	Ⅲ期	
2-75	B1	碗	唐津	11.9	7.0	4.8	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系(貫入)	Ⅲ期	
2-76	C1	碗	唐津	10.5	6.1	3.6	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系(貫入)	Ⅲ期	
2-77	C10	碗	唐津	(9.9)	6.4	4.1	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系(貫入)	Ⅲ期	
2-78	B1	碗	唐津	9.7	6.2	5.4	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)鉄絵:山水文 高台部無釉	Ⅲ期 銘印	
2-79	B1	皿	唐津	20.5	2.8	11.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅱ期	
2-80	B1	皿	唐津	35.2	11.4	11.0	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉系+銅緑釉+鉄釉掛け 高台部無釉	Ⅱ期	
2-81	C10	皿	唐津	15.2	4.4	5.2	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系	Ⅲ期	
2-82	B1	皿	唐津	13.3	3.7	4.5	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰釉 鉄絵:(草文) 腰部以下無釉	I期	
2-83	B1	皿	唐津	14.0	5.2	4.3	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉 腰部以下無釉	Ⅱ期 溶着	
2-84	B1	皿	唐津	13.5	3.5	4.7	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉 腰部以下無釉	Ⅱ期	
2-85	B1	皿	唐津	12.7	3.6	4.4	ロクロ成形 回転糸切り 見)砂目痕	灰釉	Ⅱ期 溶着	
2-86	C1	皿	唐津	10.9	2.8	3.4	ロクロ成形 回転糸切り 見)砂目痕	鉄釉 腰部以下無釉	Ⅱ期	
2-87	C1	皿	唐津	11.4	2.8	3.5	ロクロ成形 回転糸切り 見)砂目痕	灰釉 腰部以下無釉	Ⅱ期	
2-88	C10	皿	唐津	12.0	3.3	4.9	ロクロ成形 削出し高台 見)砂目痕	灰釉 腰部以下無釉 兜布	Ⅱ期	
2-89	B1	襷皿	唐津	9.7	2.8	3.8	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	灰釉 高台部無釉	I期	
2-90	B1	鉢	唐津	20.3	12.5	8.0	ロクロ成形 削出し高台	鉄泥垂らし掛け 腰部以下無釉	I期	
2-91	C10	鉢	唐津	16.8	10.7	8.0	ロクロ成形 削出し高台	鉄泥 腰部以下無釉 兜布	I期	
2-92	C1	天目茶碗	瀬戸・美濃	(11.5)	6.7	(4.9)	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房Ⅱ期	
2-93	B1	天目茶碗	瀬戸・美濃	10.2	6.9	4.7	ロクロ成形 削出し高台	鉄釉 腰部以下無釉	連房Ⅱ期	
2-94	C10	腰鎗碗	瀬戸・美濃	10.0	6.3	4.5	ロクロ成形 削出し高台	内・口縁)灰釉系 外)灰・鉄釉掛分け	9小期	
2-95	B1	皿	瀬戸・美濃	13.6	3.1	7.6	ロクロ成形 削出し高台 見)目痕	銅緑釉 腰部以下無釉	連房Ⅰ期	
2-96	C1	皿	瀬戸・美濃	11.5	2.6	5.7	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	灰釉	連房Ⅰ期	
2-97	C10	皿	瀬戸・美濃	10.4	2.3	4.9	ロクロ成形 削出し高台 見)釉剥ぎ	灰釉	連房Ⅰ期	
2-98	C1	皿	瀬戸・美濃	(10.1)	2.1	(4.8)	ロクロ成形 碁筒底	灰釉	大窯V期	
2-99	C10	碗	京信	(9.4)	5.9	3.3	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 外)椿文+緑葉 高台部無釉	19世紀	
2-100	B1	半筒碗	京信	9.8	6.2	5.1	ロクロ成形 削出し高台	灰釉系 高台部無釉	19世紀	
2-101	C1	皿	瀬戸・美濃	14.6	2.9	7.7	ロクロ成形 削出し高台	長石釉 見)鉄絵:笹文 高台部無釉	連房Ⅰ期 裏面赤字	
2-102	C1	皿	瀬戸・美濃	14.3	2.8	7.4	ロクロ成形 削出し高台	長石釉 見)鉄絵:笹文 高台部無釉	連房Ⅰ期 裏面赤字	
2-103	B1	稜花鉢	瀬戸・美濃	19.3	5.5	8.6	ロクロ成形後型押し 削出し高台	銅緑釉 内)線状凹花文 高台部無釉	連房Ⅰ期	
2-104	B1	皿	中国	23.9	4.8	12.5	ロクロ成形 削出し高台 砂高台	染付 見)鳳凰+草花文	彰州窯	
2-105	B1	鉢	越前	12.8	8.7	10.6	ロクロ成形 脚貼付け	鉄泥垂らし掛け	Ⅵ期	
2-106	C10	播鉢	越前	28.2	11.9	12.1	ロクロ成形	播目9条	Ⅵ-2期	
2-107	C1	播鉢	越前	22.6	8.8	10.7	ロクロ成形	播目9条	Ⅵ-1期	

第1章 土器・陶磁器

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕		法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調		時期・備考
			陶磁器:生産地	陶磁器:生産地	口径	器高	底径		陶磁器:釉・装飾	陶磁器:釉・装飾	
2-108	B1	掃鉢	須佐唐津		20.0	10.2	8.8	ロクロ成形 削出し高台	描目11条 鉄泥刷毛塗り		
2-109	C1	掃鉢	備前		33.2	-	-	ロクロ成形	描目14条		
2-110	C10	土師質鉢	在地		13.0	9.2	15.5	ロクロ成形	体部外面上半に複数沈線		
2-111	C1	土師質受皿	○		12.8	2.9	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線 把手貼付け	灰黄色	D系2	
2-112	C10	土師質皿	○		8.9	2.1	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1	
2-113	C1	土師質皿	○		9.0	2.3	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系1	
2-114	C1	土師質皿	○		11.2	2.3	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系1	
2-115	C1	土師質皿	×		8.9	2.4	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2	
2-116	C10	土師質皿	○		9.6	2.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2	
2-117	C1	土師質皿	○		9.8	2.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2	
2-118	C1	土師質皿	○		9.8	2.6	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2	
2-119	B1	土師質皿	○		9.5	2.3	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系3	
2-120	C1	土師質皿	○		9.4	2.5	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系3	
2-121	C1	土師質皿	○		9.7	2.3	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2	
2-122	B1	土師質皿	○		9.6	2.4	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系3	
2-123	C1	土師質皿	○		10.6	1.7	-	手づくね 口・内)狭みナデ 圏線	灰黄色	D系2	
2-124	B1	土師質皿	×		9.8	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系	
2-125	C1	土師質皿	×		10.3	1.4	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	灰黄色	G系	
2-126	C1	土師質皿	×		11.5	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰黄色	G系	
2-127	B1	土師質皿	×		16.0	2.8	-	手づくね 口・内)狭みナデ	淡灰色	D系	

第9表 土器・陶磁器観察表 道路

道路32 (第35図 図版第32)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕		法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調		時期・備考
			陶磁器:生産地	陶磁器:生産地	口径	器高	底径		陶磁器:釉・装飾	陶磁器:釉・装飾	
32-1	J9	半筒碗	肥前		(7.8)	6.5	(4.0)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)菊文 内)四方禪文 見)五弁花文	IV期	
32-2	J9	皿	肥前		13.0	4.2	7.0	ロクロ成形 削出し高台	染付 内)草花文	IV期	
32-3	B10	鉢	肥前		(12.6)	6.6	6.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)蝶文+牡丹文 口縁内軸剥ぎ	IV期	
32-4	J9	碗	唐津		(10.6)	7.3	3.6	ロクロ成形 削出し高台	鉄軸 腰部以下無軸 兜布	II期	
32-5	C10	碗	唐津		10.4	6.7	3.9	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 腰部以下無軸	II期	
32-6	C10	碗	唐津		12.0	6.8	5.0	ロクロ成形後沈線 削出し高台	灰軸系 腰部以下無軸	II期	
32-7	C10	皿	唐津		11.2	2.6	3.6	ロクロ成形 底)回転糸切り 見)砂目痕	灰軸系 腰部以下無軸	II期	
32-8	A9	餌耳	瀬戸・美濃		6.4	3.2	4.4	ロクロ成形 碁笥底	灰軸系 底部外面無軸	19世紀	
32-9	A9	碗	瀬戸・美濃		(12.8)	5.6	(4.2)	ロクロ成形 削出し高台	灰軸 高台部無軸	大室I期	
32-10	A10	鉢	越前		37.3	12.2	23.2	ロクロ成形	鉄泥刷毛塗り	IX期	
32-11	A9	土師質受皿	×		14.5	2.2	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け 底)板状痕	淡灰色	G系受	
32-12	A9	土師質受皿	×		13.6	2.3	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 把手貼付け 底)板状痕	淡灰色	G系受	
32-13	A9	土師質皿	○		8.5	1.5	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系	
32-14	B10	土師質皿	○		11.5	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	淡灰色	G系	
32-15	A10	土師質皿	○		10.0	1.7	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ	灰褐色	G系	
32-16	C10	碗	肥前		10.6	5.8	3.6	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)草花文	IV期	
32-17	C10	半筒碗	肥前		(7.2)	6.5	3.1	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)雪文 内)四方禪文 見)五弁花文	IV期	
32-18	J9	天目茶碗	瀬戸・美濃		(11.2)	8.3	4.5	ロクロ成形 削出し高台	鉄軸 腰部以下無軸	連房I期	
32-19	J9	土師質皿	×		10.4	2.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	灰褐色	C系2	
32-20	J9	土師質皿	○		10.8	2.8	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系3	
32-21	J9	土師質皿	○		10.0	2.7	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系2	
32-22	A10	土師質皿	○		8.7	1.9	-	手づくね 口・見)回しナデ	淡灰色	C系2	
32-23	B10	皿	唐津		(13.3)	3.7	4.0	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系	II期	
32-24	B10	皿	唐津		13.2	3.5	4.8	ロクロ成形 碁笥底 見)胎土目	灰軸系 口縁部外面鉄軸 腰部以下無軸	I期	
32-25	A9	皿	唐津		(11.2)	3.6	(3.8)	ロクロ成形 碁笥底	灰軸系 腰部以下無軸	I期	
32-26	C10	皿	肥前		(26.8)	4.8	(15.0)	ロクロ成形 削出し高台 針支え	染付 内)牡丹唐草文 裏)大明成化年製銘	IV期	
32-27	J9	四耳壺	瀬戸・美濃		13.0	-	19.4	ロクロ成形 耳貼付け	鉄泥垂らし掛け		

道路135 (第36図 図版第32)

遺物番号	地区	器種	土師質:灯芯痕		法量(cm)			成形・調整	土師質:胎土色調		時期・備考
			陶磁器:生産地	陶磁器:生産地	口径	器高	底径		陶磁器:釉・装飾	陶磁器:釉・装飾	
135-1	A10	碗	肥前		(9.4)	6.1	(3.1)	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)竹林葉 見)五弁花文	V期	
135-2	A10	半筒碗	肥前		7.8	6.2	3.8	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)柳文 見)五弁花文	IV期	
135-3	A10	半筒碗	肥前		8.8	7.0	4.6	ロクロ成形 削出し高台	陶胎染付 外)半菊文	IV期	
135-4	A10	香炉	肥前		-	11.3	9.3	ロクロ成形 削出し高台	染付 外)松枝文+蜻唐草	V期	
135-5	A10	皿	唐津		28.4	7.7	9.5	ロクロ成形 削出し高台 見)胎土目痕	灰軸系	I期	
135-6	A10	半球碗	瀬戸・美濃		8.4	5.0	3.6	ロクロ成形 削出し高台	灰軸系 外)九曜星 高台部無軸	第11小期	
135-7	A10	お歯黒壺	越前		6.0	11.0	9.9	ねじたて成形 耳貼付け	鉄泥垂らし掛け	鉄分残る	
135-8	A10	掃鉢	越前		36.5	14.7	14.6	ロクロ成形	描目8条	VI-2期	
135-9	A10	土師質鉢	○		10.1	1.6	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	淡褐色	G系	
135-10	A10	土師質皿	○		11.7	2.0	-	内型成形 口)回しナデ 見)横ナデ 底)板状痕	橙褐色	G系	

備考の時期区分は以下の文献に依る。

伊万里・唐津：九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の福年』九州近世陶磁学会10周年記念

瀬戸：瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『江戸時代の瀬戸窯』

瀬戸：瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 『江戸時代の美濃窯』

越前焼：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報6 『越前焼総合調査事業報告』

土師質皿：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 福井県教育庁埋蔵文化財調査報告第143集

第2章 瓦

今回の調査区では瓦の出土量が少なく、出土した瓦の残存状況も悪かった。このため、軒瓦については文様の残りが悪く、詳細な形式分類ができないものも含めて図化した。軒瓦の形式分類は『福井県埋蔵文化財調査報告第173集 福井城跡 -JR北陸線外2線連続立体交差事業に伴う調査-』（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2021年刊行）によっている。

軒丸瓦（第37図1～3 第10表 写真図版第33）すべて赤瓦の古段階にあたるもので、瓦当文様から37-1はB右12cに分類できる。他は残りが悪いため確定はできないが、ともに巴は右巻きで、37-2は珠文が12個ある可能性が高い。釉薬は瓦当面のみに掛かり、37-1は褐色、37-2は暗赤褐色、37-3は灰褐色を呈する。37-1には自然釉も掛かり、丸瓦部凹面には針金引きの痕跡と細かい布目が残る。

軒平瓦（第37図4～7 第11表 写真図版第33）37-4のみいぶし瓦古段階にあたるもので、他は赤瓦古段階にあたるものである。37-4はA2cに分類でき、他は残りが悪いため確定はできないが、B2の文様に分類できる。37-4は瓦当上縁の中央部を丸く仕上げている。釉薬は瓦当面や平瓦部凹面に掛かり、37-5は灰褐色、37-6は暗灰黄色、37-7は暗赤褐色を呈する。

軒棧瓦（第37図8・9 第11表 写真図版第33）すべて赤瓦の新段階にあたるものである。37-8は中心飾りに橋文を持つもので、37-9は残りが悪いため確定はできないが、いわゆる「大坂式」の文様となる可能性が高い。37-8は赤褐色、37-9は暗赤褐色の釉薬が掛かるが、前者は瓦当裏面が無施釉なのに対して、後者は全面に施釉している。

丸瓦（第37図10 第12表 写真図版第33）いぶし瓦で凸面には工具によるナデ痕跡が残る。凹面には布目のほかに、工具による幅1.0cmほどのタタキ痕跡が残る。

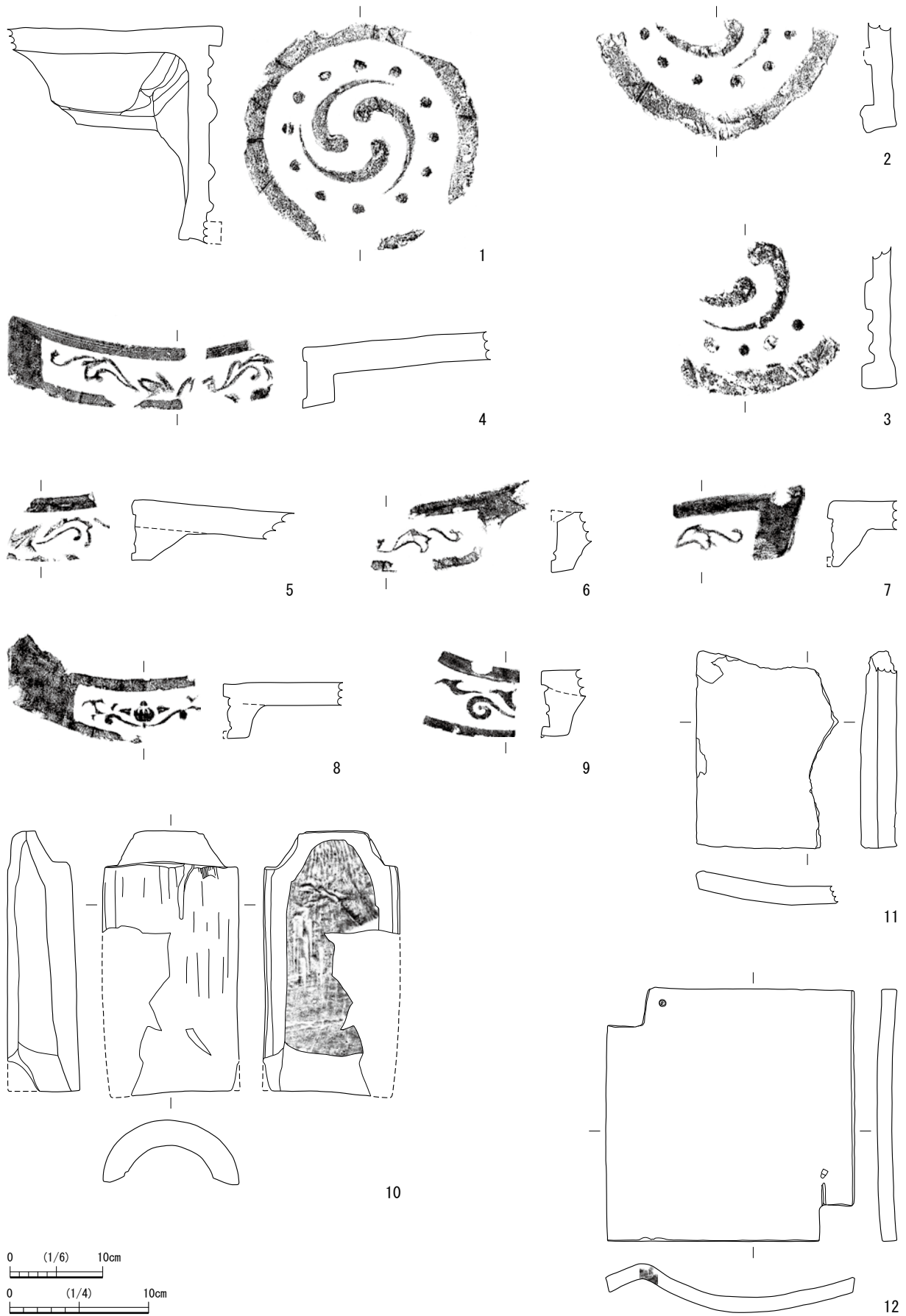
平瓦（第37図11 第13表 写真図版第33）赤瓦古段階にあたるもので、凹面と端面に明褐色の釉薬が掛かっている。側縁は上端部を丸く仕上げている。

棧瓦（第37図12 第13表 写真図版第33）赤瓦新段階にあたるもので、暗赤褐色の釉薬が全面にかかっている。針金孔を1つ持つほか、切り欠き部に工具が当たった線刻状の痕跡が残っている。また、端面に「上」を○で囲む刻印を持つ。

その他の瓦（第38図1・2 第14表 写真図版第33）38-1は面戸瓦（鯉面戸）で未施釉であるが、焼成の状態から赤瓦新段階にあたるものと考えられる。38-2は凸帯で文様を描いている飾板と想定しているが、元の姿は不明である。赤褐色の釉薬が表面にのみ薄く掛かる。

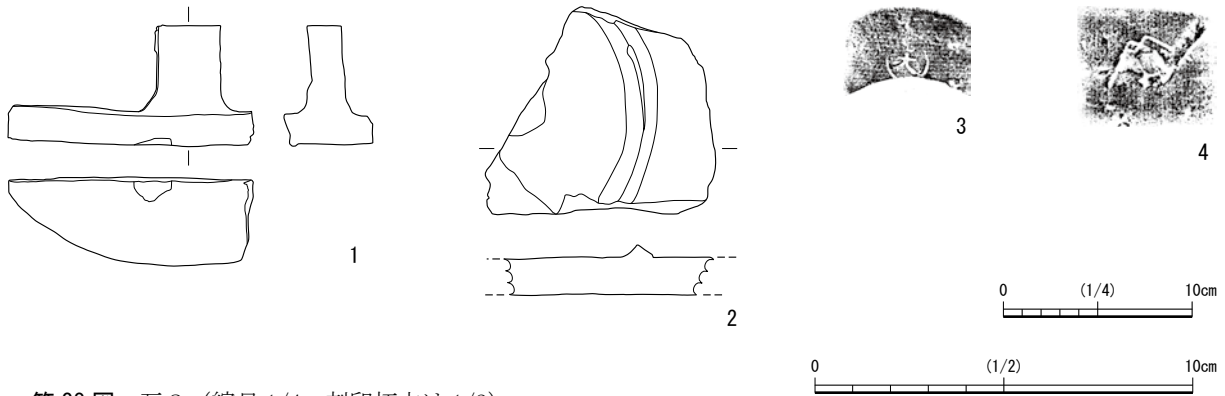
刻印 残りが悪く図化しなかった瓦に、「大」を○で囲む刻印（第38図3）と、山形に「上」を組み合わせた刻印（第38図4）を持つものがあつた。ともに赤瓦新段階にあたる。

出土状況 今回の調査区のうち、FKJ15-1・16-1は瓦の出土量がとくに少なく、製作年代が17世紀と想定されるいぶし瓦や赤瓦の古段階にあたるものは、ほとんど出土していない。また、FKJ15-2も瓦の出土量は少なく、その多くが整地土からの出土である。瓦をまとめて廃棄した遺構等は確認できなかった。このような状況から、今回の調査区付近には近世前半に瓦をふいた建築物があつた可能性は低いと考えている。



0 (1/6) 10cm
 0 (1/4) 10cm

第37图 瓦1 (縮尺1/4 1/6:10)



第38図 瓦2 (縮尺1/4 刻印拓本は1/2)

第10表 軒丸瓦観察表

図面番号	挿図番号	種別	型式	施釉箇所	法量 (cm)				文様			出土地点		出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号	
					外径	文様区径	珠文径	丸瓦部厚	巴の巻き	巴の形態	珠文数	地区	遺構番号			層位
37	1	赤瓦古段階	軒丸瓦	瓦当面 丸瓦部凸面	15.6	12.6	1.0	1.8	右	c	12	A8	152-178		~18C中	カ1
37	2	赤瓦古段階	軒丸瓦	瓦当面	(17.0)	(13.4)	1.0	-	右	c	12?	I9	152-104		~18C後半	カ2
37	3	赤瓦古段階	軒丸瓦	瓦当面	(16.8)	(13.2)	0.9	-	右	-	-	I8		152-整地土2		カ3

第11表 軒平瓦・軒棧瓦観察表

図面番号	挿図番号	種別	型式	施釉箇所	法量 (cm)				文様		出土地点			出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
					最大幅	瓦当高	文様区高	平瓦部厚	中心飾	唐草数	地区	遺構番号	層位		
37	4	いぶし瓦古段階	軒平瓦	—	(20.0)	4.3	2.7	2.0	2類	2	B10		152-整地土3		カ4
37	5	赤瓦古段階	軒平瓦	瓦当部 平瓦部凹面	(12.6)	4.3	2.7	2.0	2類	3	I8		152-整地土2		カ5
37	6	赤瓦古段階	軒平瓦	瓦当部 平瓦部凹面	(12.7)	(4.5)	2.7	-	2類	2	J10		151-TR19		カ6
37	7	赤瓦古段階	軒平瓦	瓦当部 平瓦部凹面	(4.4)	4.7	2.6	1.9	—	2	J-A5		151-排水溝		カ7
37	8	赤瓦新段階	軒棧瓦	瓦当部 平瓦部凹面	(14.2)	4.0	2.3	1.6	橋文	2	D1		152-撓乱		カ8
37	9	赤瓦新段階	軒棧瓦	全面	(7.0)	4.7	2.9	1.9	—	2	D4	161-25		19C	カ9

第12表 丸瓦観察表

図面番号	挿図番号	種別	型式	施釉箇所	法量 (cm)						出土地点		出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
					玉縁幅	玉縁長	丸瓦部高	丸瓦部厚	丸瓦部幅	全長	地区	遺構番号		
37	10	いぶし瓦	丸瓦	—	11.7	3.3	7.8	2.7	14.7	(28.6)	A10 152-236 C10 152-369・236	B1 152-2 ほか	17C~近代	カ10・11

第13表 平瓦・棧瓦観察表

図面番号	挿図番号	種別	型式	施釉箇所	法量 (cm)			刻印	出土地点			出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
					最大幅	全長	平瓦厚		地区	遺構番号	層位		
37	11	赤瓦古段階	平瓦	凹面 端面	(15.3)	(21.3)	2.1	—	A8		152-排水溝		カ12
37	12	赤瓦新段階	棧瓦	全面	26.8	27.2	1.5	丸に上	B1	152-108		19C	カ13

第14表 面戸瓦・飾板観察表

図面番号	挿図番号	種別	型式	施釉箇所	法量 (cm)				出土地点			出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号
					最大幅	全高	奥行	最大厚	地区	遺構番号	層位		
38	1	赤瓦新段階	面戸瓦	—	(13.0)	4.7	6.4		B10		152-整地土3		カ14
38	2	赤瓦古段階	飾板	表面	(12.2)	(11.0)		2.6	G-F7		152-撓乱		カ15

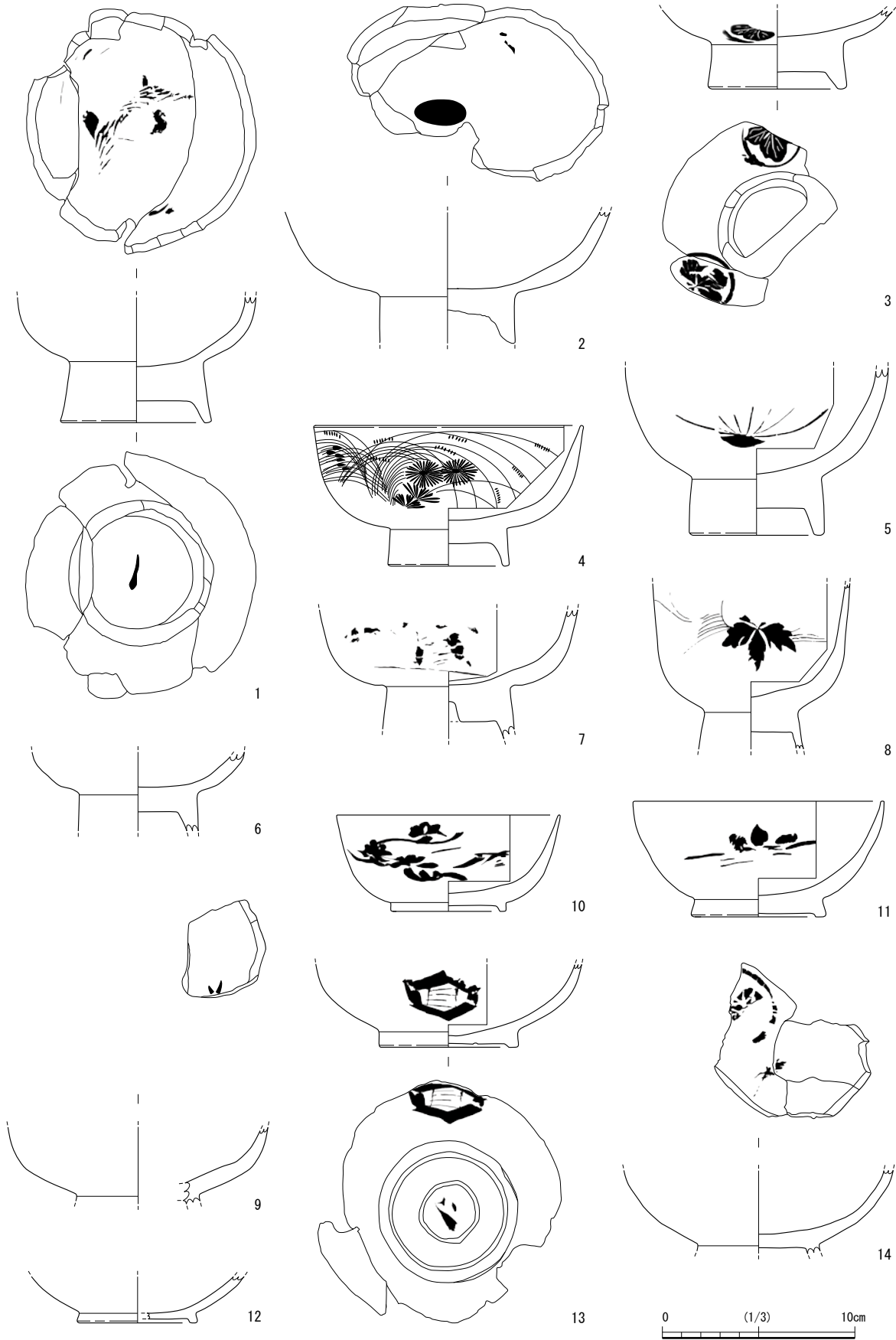
第3章 木製品

木製品は2,441点出土した。このうち、比較的残存状態の良い231点を図化し、150点の写真を掲載した。製品の分類はこれまでの福井城跡の報告に基づくとともに、他の近世遺跡での分類を参照して行なった。掲載した出土遺物のうち、下駄には足裏の圧痕がみられる個体が13点あり、それぞれ男女と子どもに分けて計測値を第15表に示した。出土数の4割を占める箸は668点あり、特徴のある形状のものや漆塗箸等34本を掲載した。また計測可能な資料187本は計測値をグラフ化し、第16表に示した。各器種の樹種については、同定結果を第6章第4節に記載した。以下、各器種の木製品の概要を表面観察・分類・自然科学分析結果等を用いて報告する。

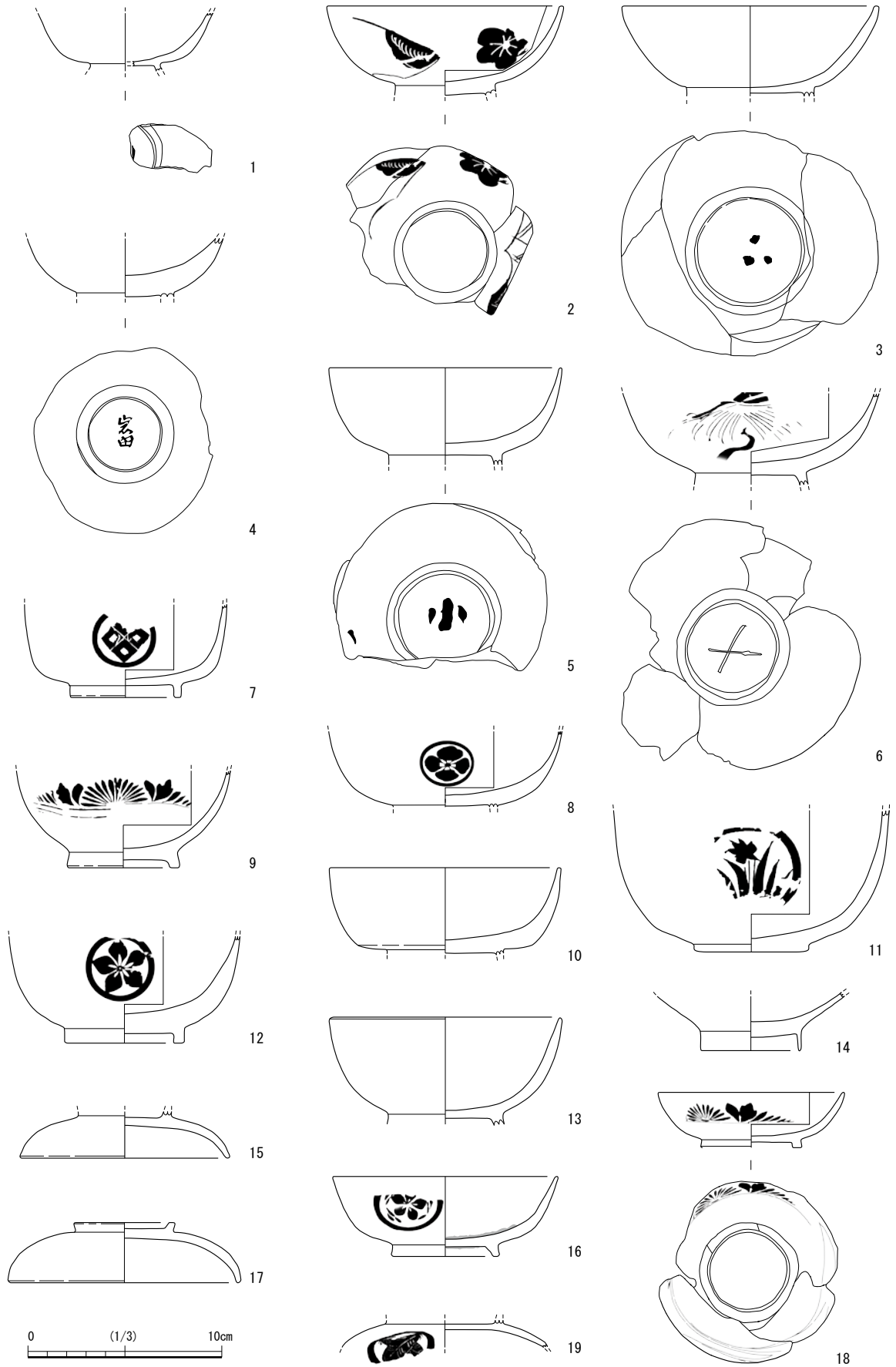
漆器⁽¹⁾(第39～41図 第17表 写真図版第34～36) 39-1～8は飯椀である。39-1は高台裏に「一」と漆文字が書かれ、3または4個重ねて収納できる重椀系の「イチノワン」の印と推定する。見込に「夫婦松」が描かれる。破損部には鶴亀等が配され、鶴亀松竹を組合せた地方色の強い蓬萊文であったと思われる。39-2は見込に漆絵の痕跡が認められる。残存部の体部径と底部厚から大型の椀と思われる。39-3はいわゆる「三ツ紋」系の椀で、外面の三方に均等に桐紋が配される。ただし、紋様が高台部から離れていないため腰高の可能性もある。39-4は、菊と薄を取り合わせた「秋草文」が精緻に描かれる。樹種はブナよりも上等なトチノキ⁽²⁾である。39-5は残りが悪く、漆絵は扇の河骨部を確認するのみである。39-6は比較的薄め高台厚を持つ。39-7の漆絵は蓬萊文の一部で、松か竹が描かれたと推測する。39-8の器形は壺椀に近似するが、同椀の典型的な加飾は桶等の箍を写した「カツラ」と呼ばれる無文の隆帯である。そのため蔦文様が全周に巡り、「カツラ」のない8は飯椀とした。

39-9～14、40-1～3・5～9・12・13は汁椀に分類した。39-9は内面に漆絵の痕跡のある体部片である。39-10の漆絵は、蓬萊文に似た松文様と考える。塗膜分析で銀の成分が検出された。下地は柿渋を用いた渋下地で、用材はブナであることから廉価な製品の部類に入る。39-12は残りが悪いものの高台が極めて低いことから、蓋もしくは重椀の「サンノワン・シノワン」の可能性もある。39-13は「亀甲に三段梯子」が描かれる。高台裏に「上」と漆文字が書かれ、周りを線刻の圏線で囲む。用材は安価なブナで、文様の精緻さも欠ける。口径が14cm以上と推定され、大型の重椀系の「ニノワン」とした。39-14は39-13と同程度の法量を持つと思われるが、高台径がやや小さい。40-1は高台裏に漆文字の痕跡がある。40-2には「破れ地紙」を表現したと考えられる扇面と梅の取り合わせが描かれる。ただし、描かれた2ヶ所の扇面のうちの一方の左端下方に交差する線描が7本みられるため、紋帳にはない文様の可能性が高い。40-3は高台裏に「∴」、40-5は「小」と漆で印が書かれる。どちらも所有者や収納の順番等を表すと考えられる。40-6は他の文様は破損によりみられないが、蓬萊文を構成する松と思われる。高台裏に「×」の線刻がある。40-7は腰部が張り出す腰椀に近い器形である。高台が低く、重椀系の一文字腰椀A⁽³⁾の可能性もある。40-8の紋様からも塗膜分析で39-10と同様、銀の成分が検出された。40-9は「半菊」と葉・流水文様が全周に巡る。40-12はやや体部の厚い椀である。「桔梗」の紋が正面ではなく、左に少々傾いて描かれる。

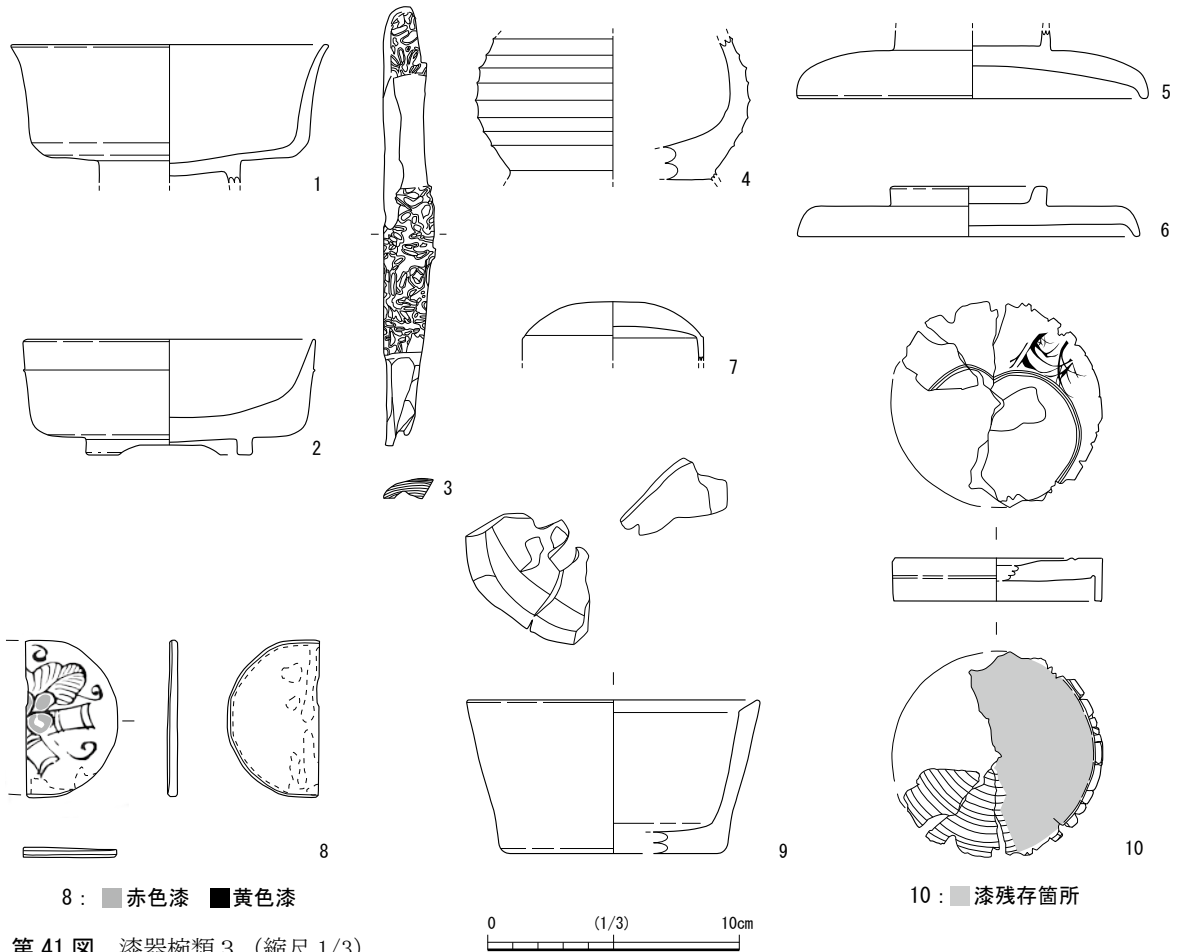
40-4は高台裏に「岩田」と漆文字が書かれる。40-10は一文字腰椀Aである。40-25は元々は飯椀だが、高台を削り杓子等に再利用した可能性⁽⁴⁾がある。柄を入れる穿孔は破損のため確認できなかった。40-16は汁椀とも蓋ともみえる器形で、漆が内面に多く、高台裏に少量付着している。漆塗りパレット



第39図 漆器碗類1 (縮尺1/3)



第40図 漆器碗類 2 (縮尺 1/3)

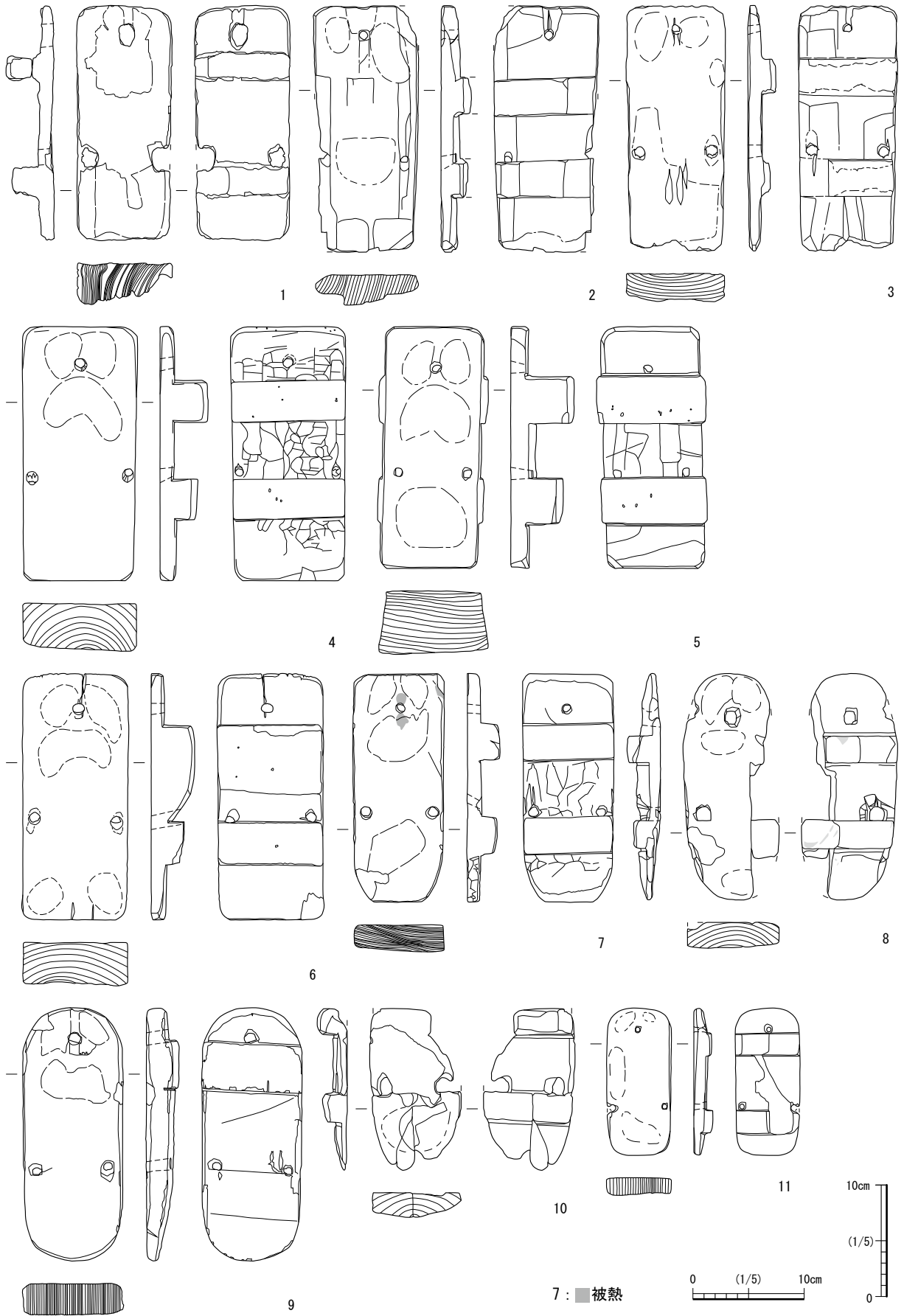


第41図 漆器碗類3 (縮尺1/3)

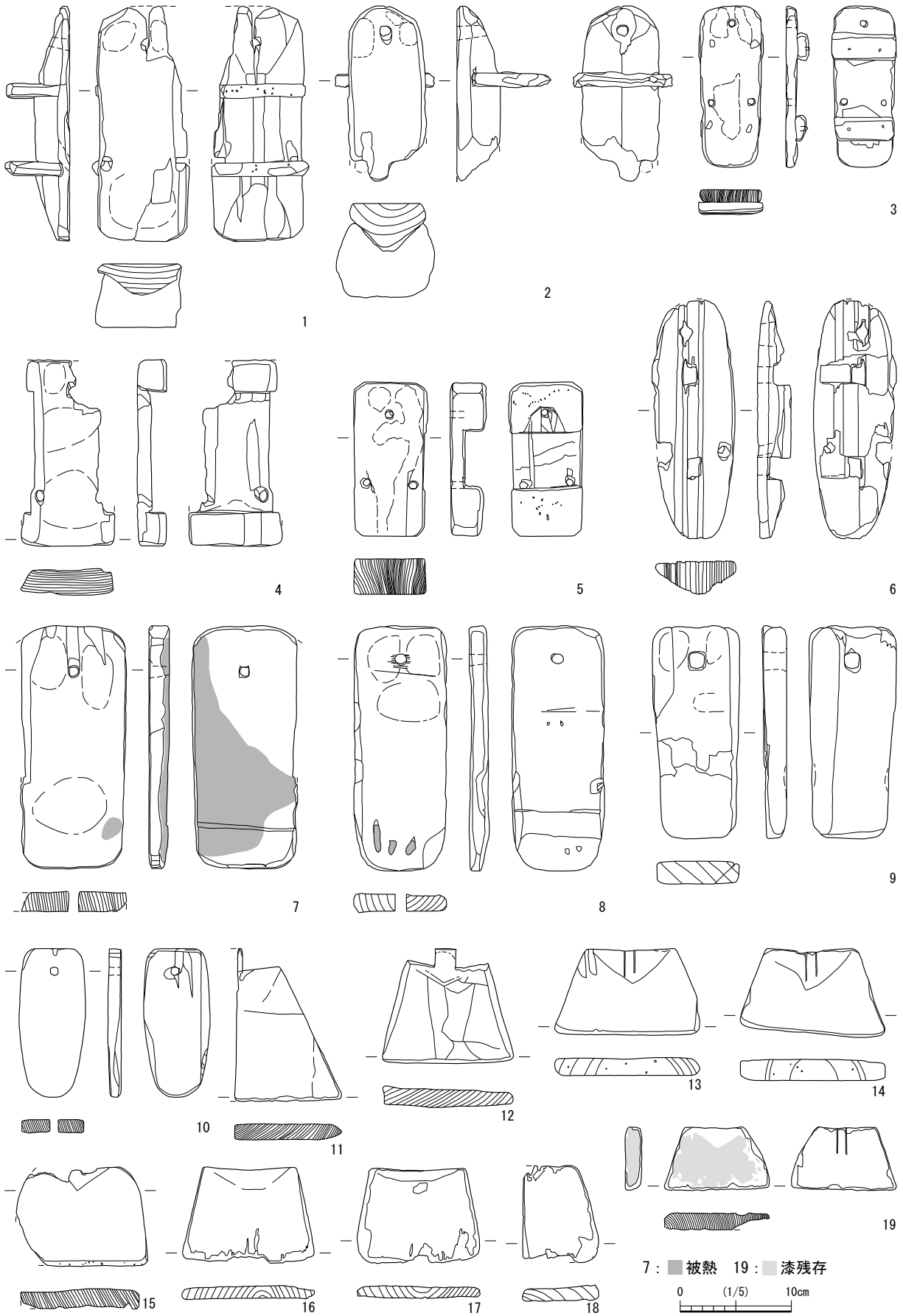
として使用されたと考えられる。40-15・17は共に碗蓋であるが、40-15の用材はトチノキ、40-17はケヤキであり、中品・上品の部類に入ると思われる。41-3は刀子状の部材で、下地2層の上に透明漆1層と朱漆を重ねる。下地には地の粉を用いる。加飾は上塗りと色の異なる下地の色を研ぎ出す唐塗⁽⁵⁾である。41-4は筋加工と僅かに高台痕がある容器の体部である。41-8は、中央に赤色漆で果実または花が描かれた丸板である。一節竹⁽⁶⁾に葉と蔦を取り合わせたと考えられる。41-9は上面に別の材の接着痕がある。装飾的で上品の部類に入ると思われる。

註

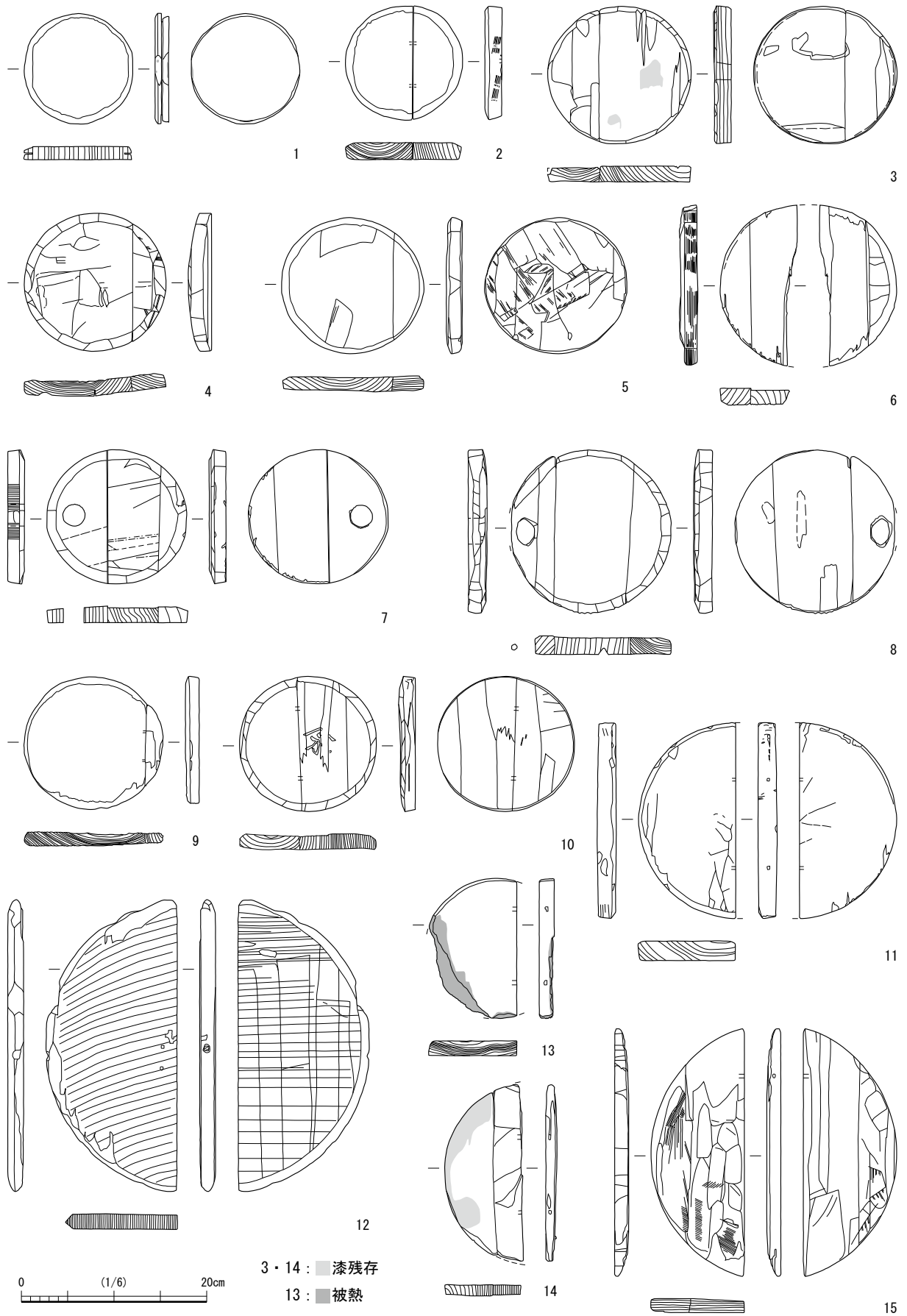
- 1 漆器碗類の分類は第7章第4節で詳述する。
- 2 北野信彦 2005 「第1章 生産技術からみた近世出土漆器」『近世出土漆器の研究』吉川弘文館 p21
- 3 一文字腰碗とは腰部に一本の稜線がある碗で、高台付根より体部稜線が上にあるAと、稜線がほぼ同じのBがある。中井さや 著 2000『小石川牛天神下 第三分冊』第9章第4節では一文字腰碗A・Bは重ね碗として結論づけられる。
- 4 南洋一郎 「漆碗・皿に関する二・三の問題」『朝倉氏遺跡資料館紀要 1986』 p37
- 5 唐塗は東北地方の高度な技法とされる。18世紀の中頃には、唐塗は模倣不可能な技術であったという記述が宝暦八年(1758)に商人によって書かれた『津軽見聞録』にある。
- 6 一節竹は、室町時代の一節竹^{ひとよどり}という一節だけで33cm前後あったとされる笛から文様に用いられた。竹の節を模した形に葉をつけたものが図案化される。



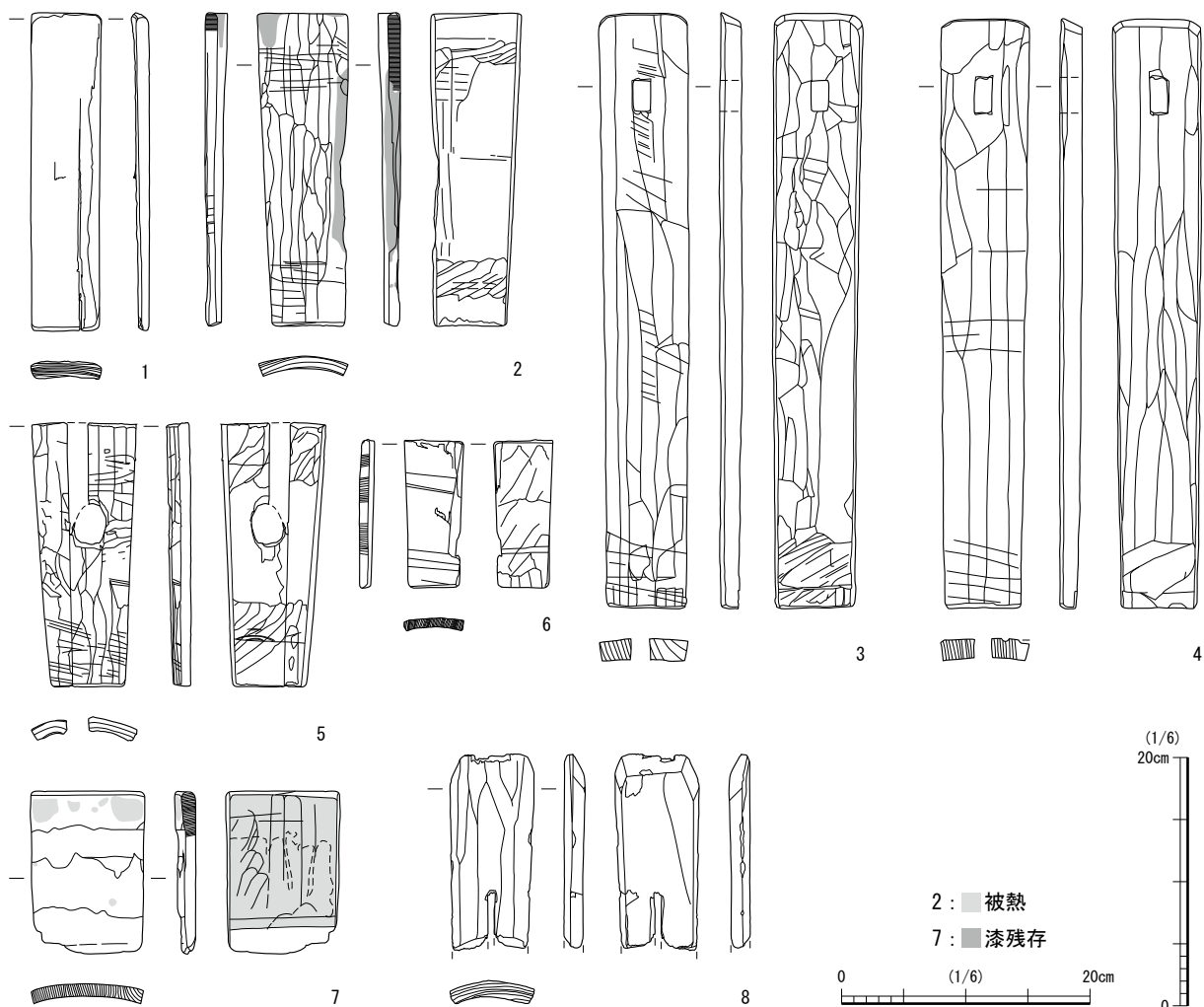
第42図 下駄1 (縮尺1/5)



第43図 下駄2 (縮尺 1/5)



第44図 桶・樽1 (縮尺1/6)



第45図 桶・樽2 (縮尺1/6)

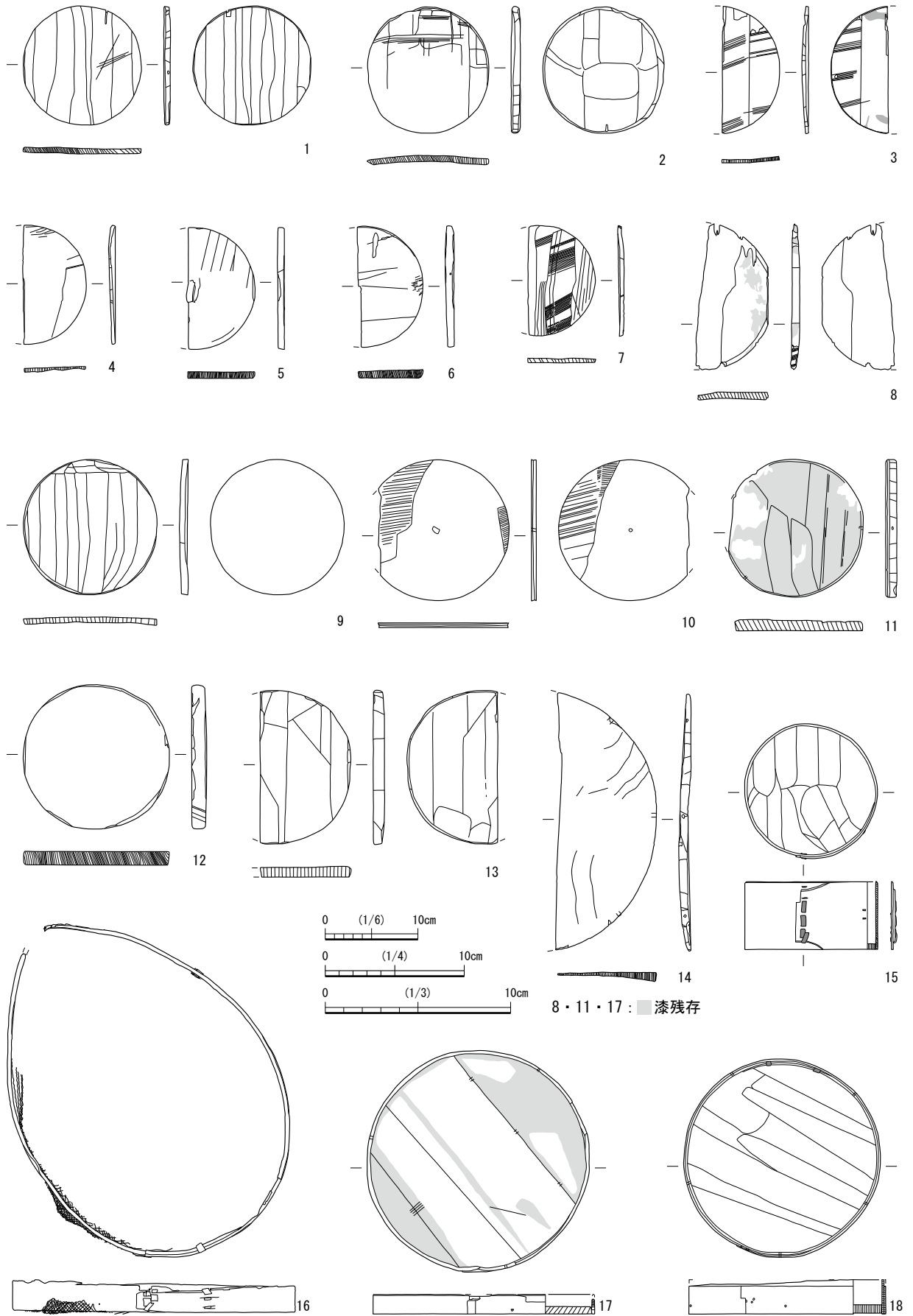
下駄 (第42・43図 第18表 写真図版第37・38・84) 42-1 ~ 11と43-5は一木造りの連歯下駄で、43-6は差歯による露卯下駄、43-1・2は陰卯下駄である。43-7~10は裏にわら草履を敷いて履く雪国特有の雪下駄(無眼下駄)である。例外として連歯の形になるよう歯を鉄釘で打ち付けた43-3がある。それぞれ角型を男性用、丸型を女性用、小型のものを子ども用と推定する。42-6は両足で履いた痕跡があるが、歯裏の摩耗痕から主に右足で履いたとみられ、台裏は極めて厚い前歯と後歯の境が無い。43-8は表面踵部に3ヶ所の傷があり、おがくずを詰めて補修されている。またX線写真で下駄の中央に鉄釘が確認された(写真図版第84)。42-11・43-3・5の子ども用の下駄は、成人用と比較して足裏の圧痕が強くみられた。

桶・樽 (第44・45図 第19表 写真図版第39) 桶・樽は蓋板5点、底板9点、側板8点がある。蓋板は桶が蓋を伴わないため樽材としたが、底板は区別できない。蓋板・底板は製材方法の別から、単材型と複合型のものに分けられる。側板は用途から液体を通しにくい板目材を樽材、水分を通す柃目材

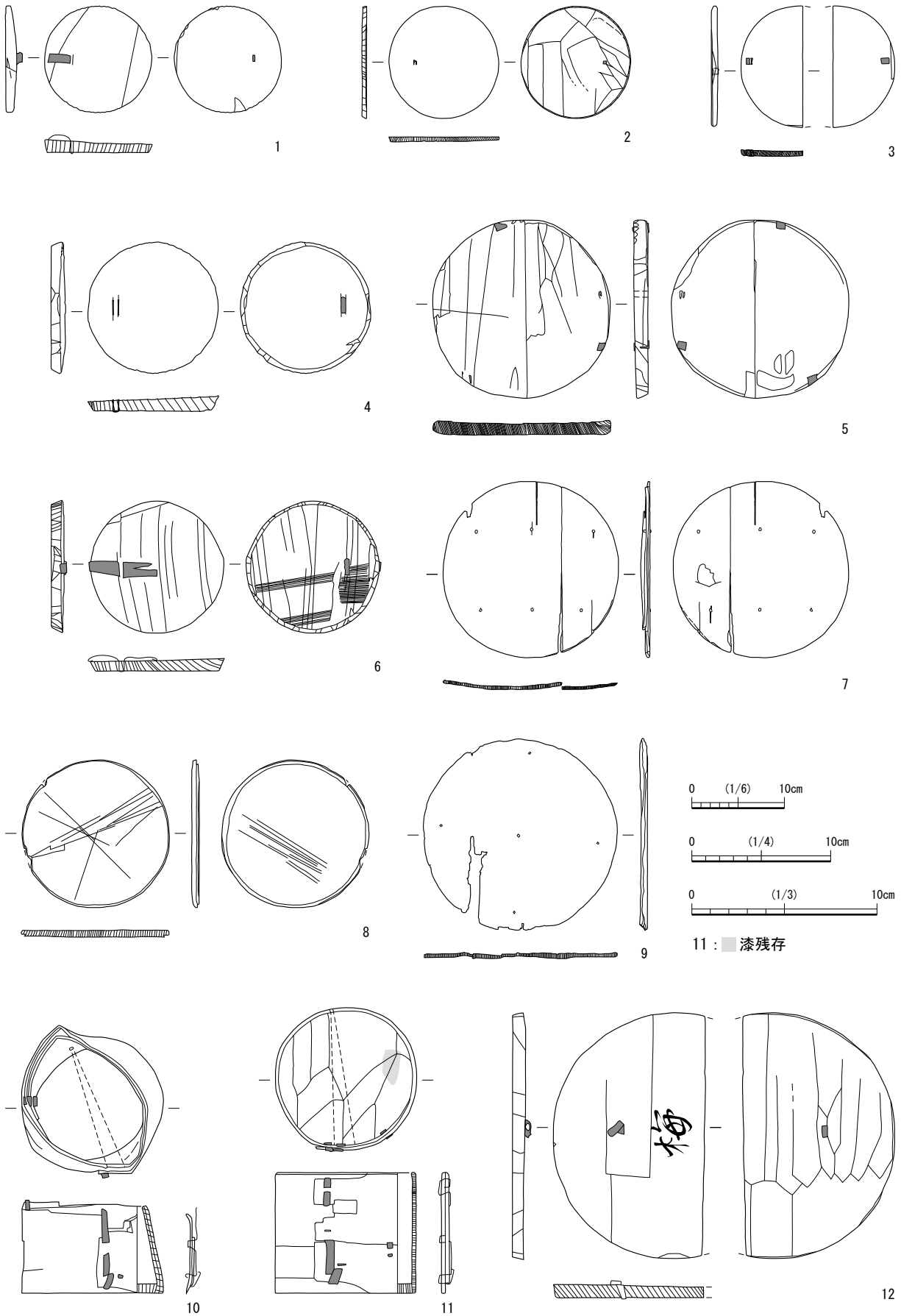
第15表 下駄圧痕計測表

図版番号	足の圧痕の長径 (cm)	下駄のサイズ	消費した性別or年代	1文2.4cm
第42図1	20.8	21.0	成人男性用	8.75文
第42図6	20.6	22.1	成人男性用	9.2文
第42図3	20.5	22.0	成人男性用	9.16文
第42図8	19.7	20.3	成人女性用	8.45文
第42図5	18.6	21.7	成人男性用	9.04文
第43図1	18.6	(21.1)	成人男性用	8.79文
第42図7	18.0	20.5	成人男性用	8.54文
第43図7	17.9	21.8	成人男性用	9.08文
第42図2	15.0	22.1	成人男性用	9.2文
第43図4	14.8	16.2	成人男性用	6.75文
第43図5	13.2	13.8	子ども用	5.75文
第42図11	11.9	13.2	子ども用	5.5文
第43図3	11.8	14.4	子ども用	6文
成人男性用のみの平均	18.3	20.9	成人男性用	8.72文

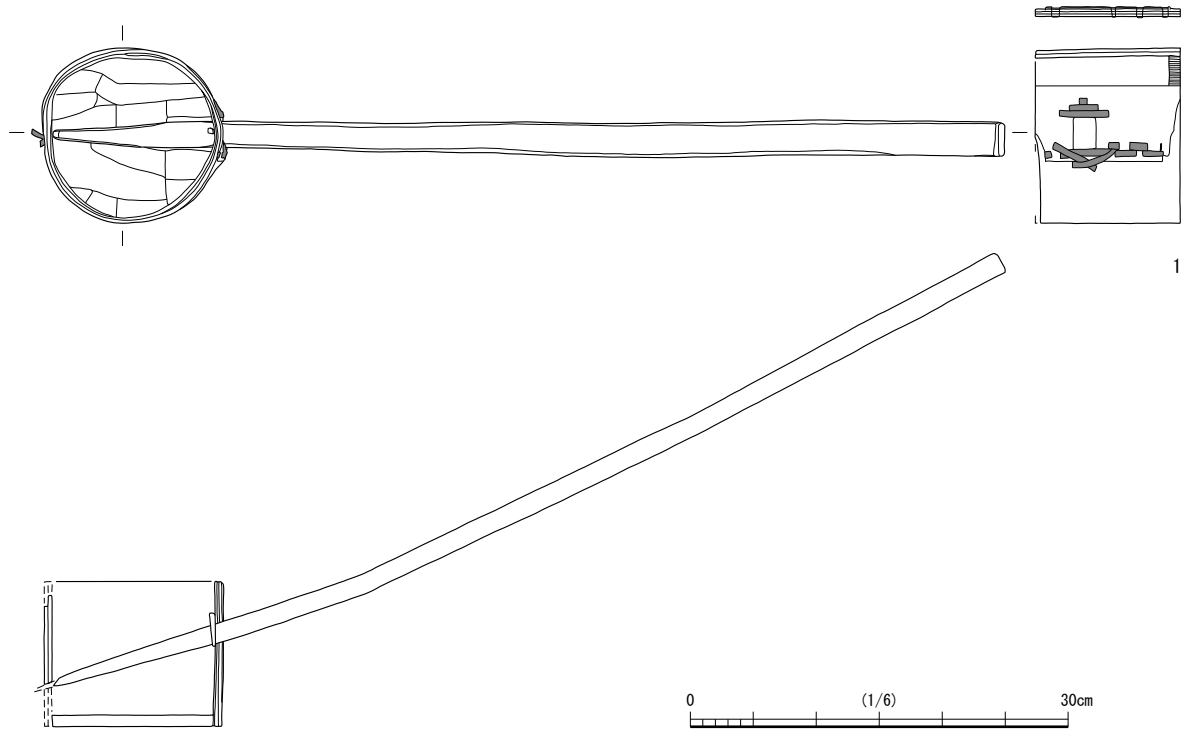
第3章 木製品



第46図 曲物1 (縮尺 1/3 : 10 ~ 13 1/4 : 9 1/6 : 1 ~ 8・14 ~ 18)



第47図 曲物2 (縮尺 1/3 : 10 ~ 12 1/4 : 4 ~ 6 1/6 : 1・2・3・7 ~ 9)



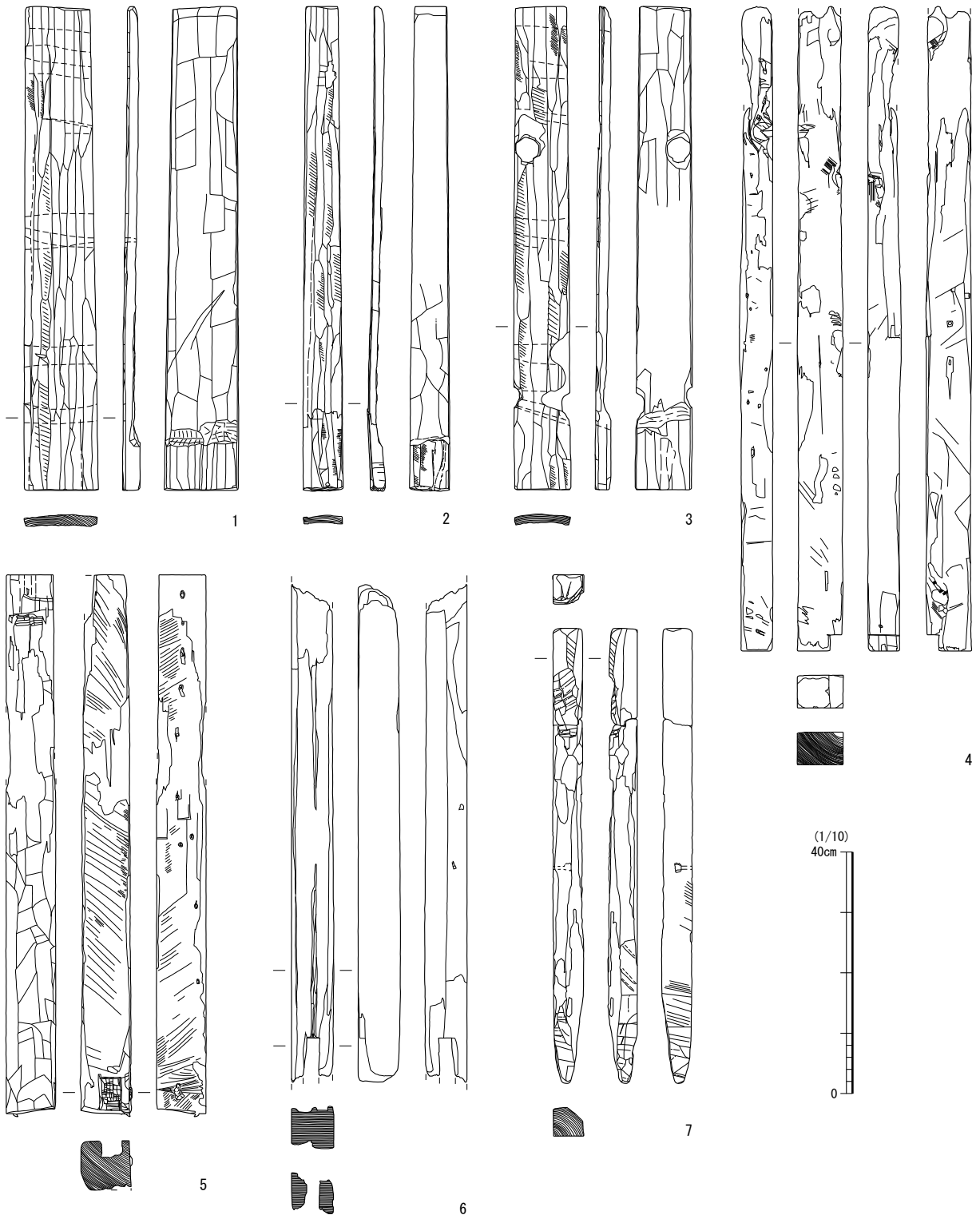
第48図 曲物・柄杓（縮尺1/6）

を桶材と分類したが詳細は不明である。

44-1は単材型で側面に1cmの溝がある。44-2～15は複合型で木釘によって接合されていた痕跡がある。木釘は44-12が1本、44-2・9～11・13～15が2本、その他は接合面が固く、木釘の本数を確認できない。複合型は接合したどちらか一方に芯材近くの板目材が用いられる割合が高く、14点中11点が板目材である。そのため、残る柁目材の3点のうち44-12・14は接合する材が欠失しているが、欠失した材が板目材であった可能性もある。

45-1・2・5・8は板目材である。45-2は外面上部にタガ痕が2本以上みられるため樽だと思われる。45-5は栓孔のある材の左方に半損した材が接合する。側板の内面下部は底板を嵌めるために削っている。45-8は把手孔があることから桶の可能性もあり、木取りと器種が一致しないことを示す。45-3・4・6・7は柁目材である。45-3・4は把手を通す孔があり、同一桶の向かい合う側板だと考える。45-6・7には側面に銚等^{せん}によって調整された痕がみえる。

曲物(第46～48図 第20表 写真図版第39・40) 側板が残存かつ状態の良いものを曲物と分類し、把手の樹皮がある46-3・10、47-1～9・12を蓋、それ以外の46-1・2・4～9・11～14を底板とした。47-7・9は木釘の痕から、把手となる材が付いていた事が分かる。46-16は側板のみで残りは悪いが、金網付きの曲物で篩と推定した。2枚の側板が金網を下から1cmほど挟みこんでいる。また側板の上端を一定間隔で樹皮綴じし、強度を上げたと考えられる。47-10・11と48-1は柄杓で、47-10・11は柄部が欠損している。どちらも側板に2～3mmの小穴を空けて柄先を安定させたと思われる。48-1は柄に木釘が残存していたが、側板の柄先があたる部分から下と柄先が欠損している。樹種は同定された9点中、ヒノキ科アスナロ属4点、ヒノキ科ヒノキ属3点、スギが2点である。ヒノキは曲物に最も多く用いられる樹種である。綴じ皮はヤマザクラまたはカバの樹皮である。



第49図 建築材1 (縮尺1/10)

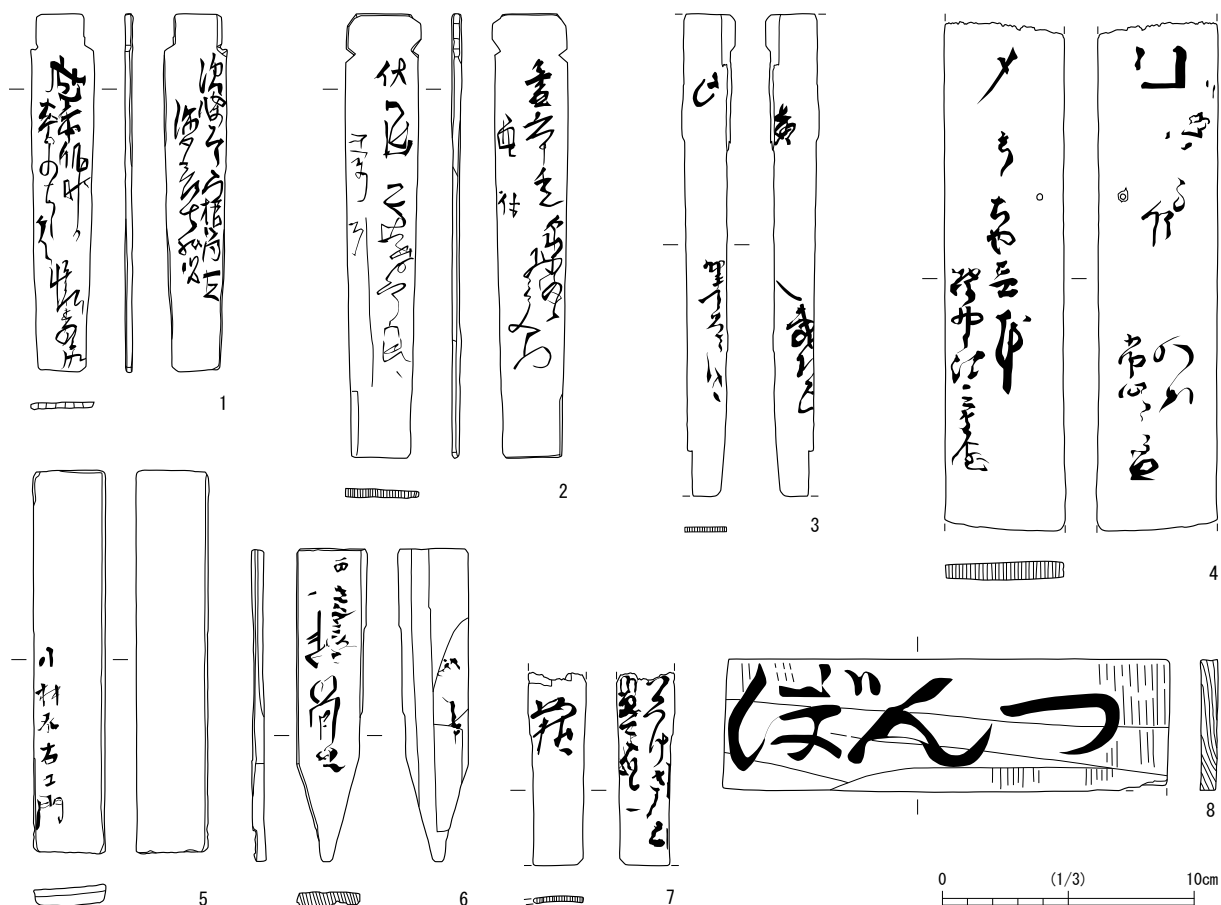


第50図 建築材2 (縮尺 1/10)

建築材 (第49・50図 第21表 写真図版第41) 井戸桶材・建築部材・井戸杵材・杭・井戸材がある。49-1～3は同一井戸桶材である。49-3は下部側面に抉りがあり、木札として転用されたと考えられる。49-4～6、50-1・2は同一遺構出土のものである。出土した152-147の上層はゴミ穴で、下層には桶組み井戸がある。49-6が井戸杵、その他の建築材が井戸小屋に関連する遺物の可能性があるが断定はできない。49-7の杭は中央にL字状の貫通孔がある。

墨書 (第51図 第21表 写真図版第41) 1～5・7は人名関連の文字資料である。1の表は「須崎三郎右衛門様御内/□□彦七様□□」と読める。彦七については不詳だが、須崎邸に居住した人物だとみられる。裏は「越前福井□□ □□□□ /□らのはし□□」で、進物等の付札と推測する。2は表が「此□□□須崎三郎エ門様へ/□□□よりまいる」、裏が「亥六月七日 □□□^{より} /□□□左衛門/□□□町□兵衛」で、これも進物の付札である。「須崎三郎右衛門」は江戸時代前期の札所奉行に同名が確認されるほか、近世を通じて福井藩士として名がみられる。1の出土地点は須崎邸を挟んで北隣にあたるが、広範囲に及ぶ攪乱のために移動したと考えられる。2の出土地点は須崎邸にあたることから、1と2の人名は同一人物かその家系の人物であろう。3の表は判読不能だが、裏は「武」と「町」の2文字のみ判読できる。4は表に「メ □ちや壺本/福井□茶屋」、裏に「越前福井/細田□ □様御内/□ □」と書かれ、細田邸に居住する者へ茶屋から届け物の付札だったと窺える。なお福井城下には「細田」という藩士はいない。5には桶の所有者らしき人名「小林□右エ門」が書かれる。福井藩士として「小林又右衛門」が元禄から嘉永年間に、「小林八郎左衛門」が安永から慶応年間にみられ、どちらかが該当する可能性がある。6は差札で、劣化のため判読不能である。7は表が「□門様」、裏が「□□けさん来/□□^{なきるべくそろ}可被成候」と読め、内容は不明だが表に書かれた人物に関わる指示だと思われる。

箸 (第52図 第23表 写真図版第42) 1～10は両端の太さがほぼ均一な寸胴箸である。11～18は両口箸、19～27が片口箸である。いずれも平均的な個体となかでも短い個体、長い個体を図化した。19・20は断面が正方形を呈し、未塗装の箸としては精緻である。28～32は特殊な形状で、28は他のものより太く、29は長く先端に向かって緩やかに湾曲する。30は片端が被熱し、31・32は片端が扁平である。33・34は漆塗箸で、34は3分の1より下が緑色漆、上が赤色漆で塗分けしている。

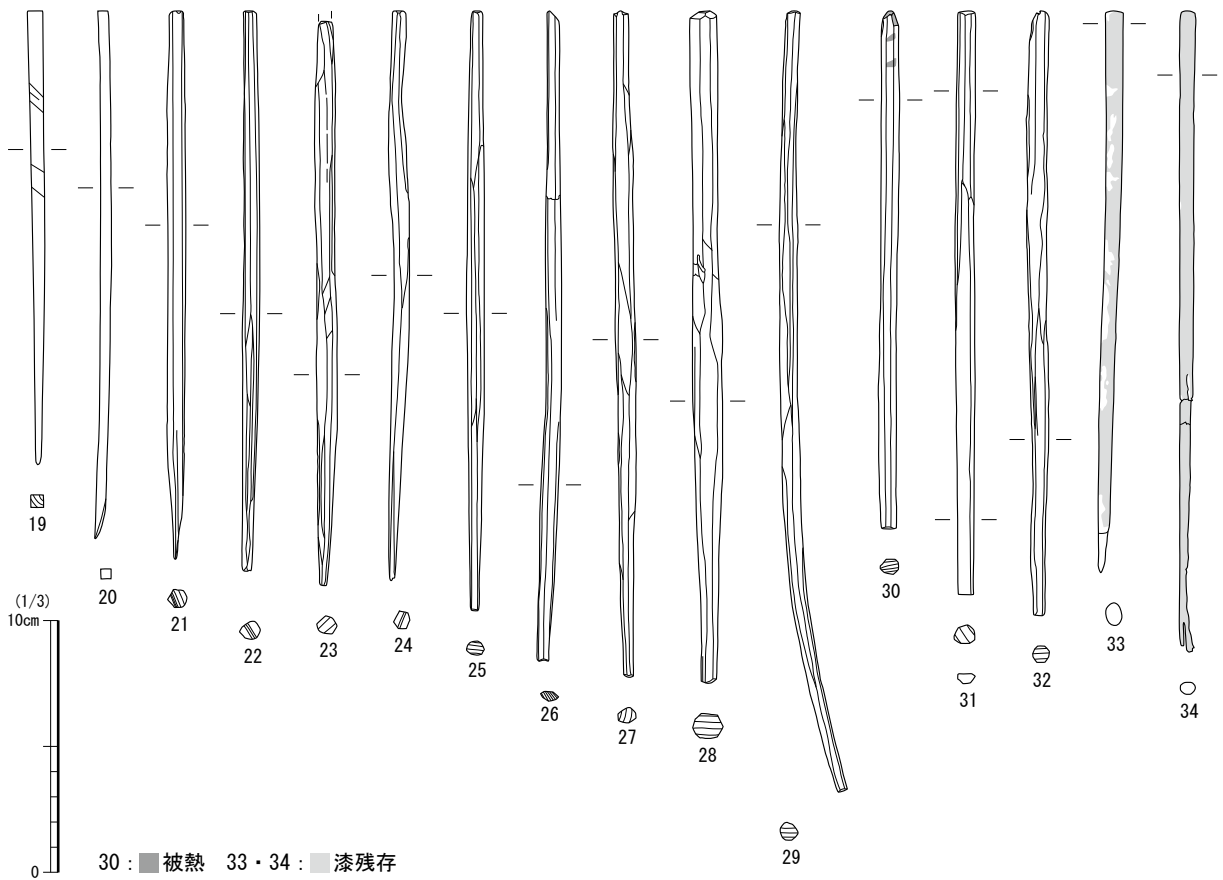
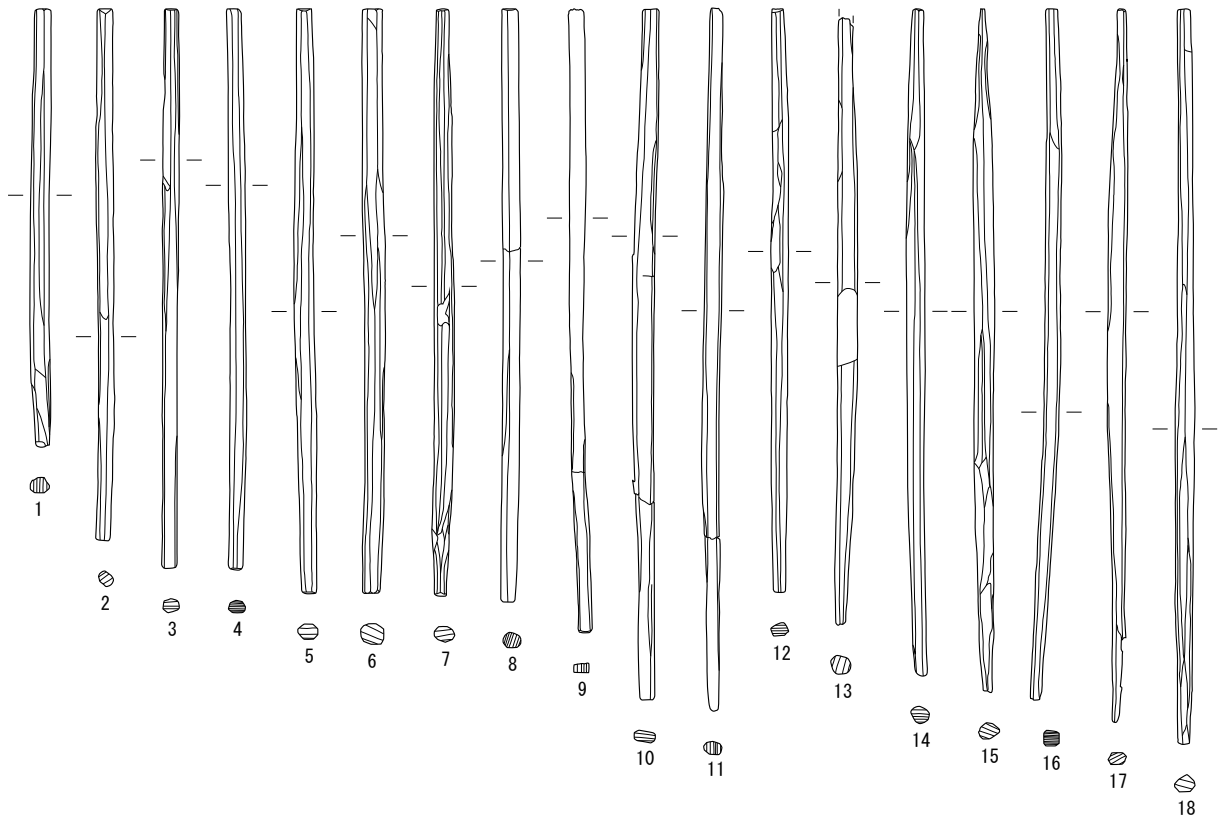


第51図 墨書 (縮尺 1/3)

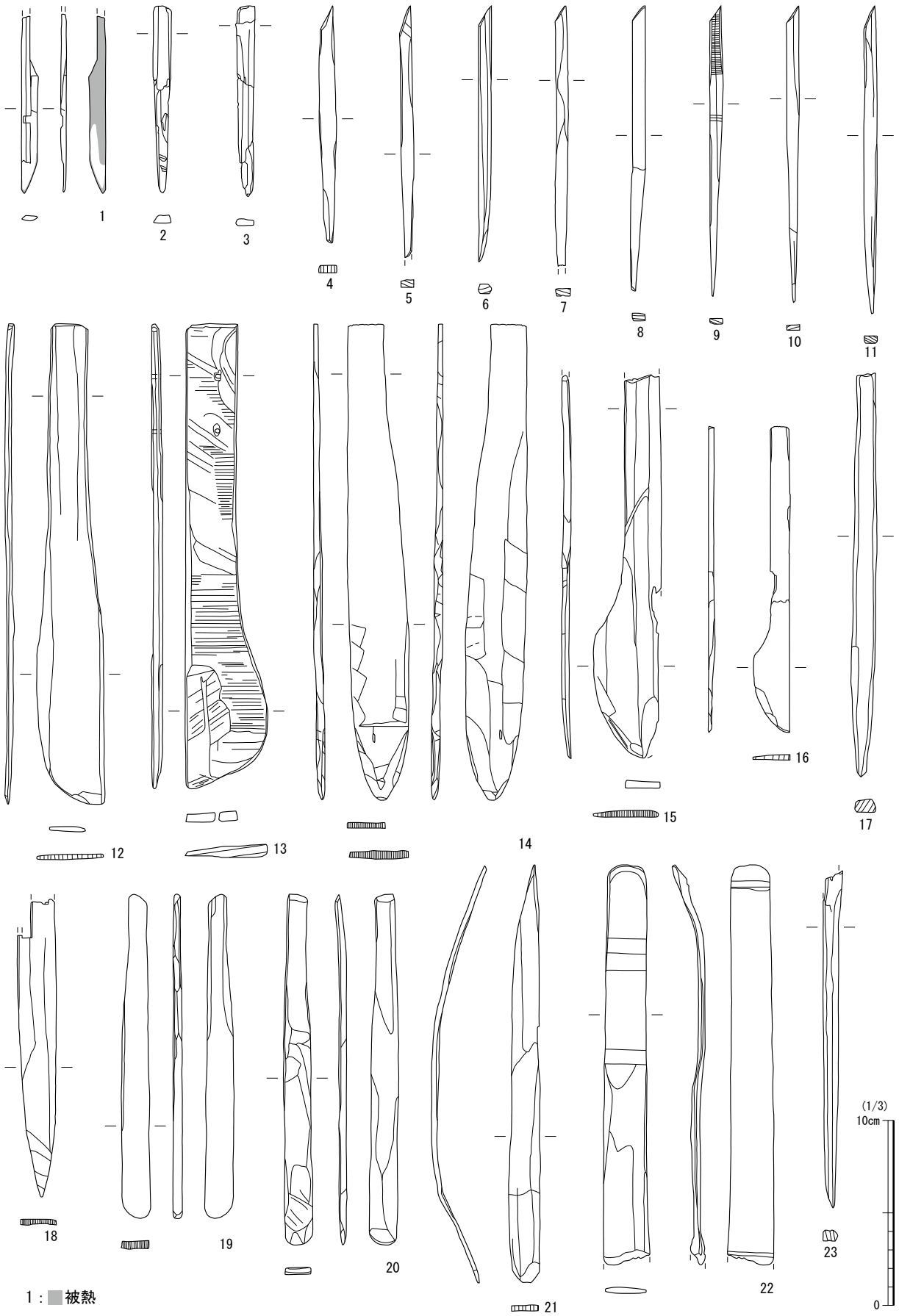
楊枝・切匙類 (第53図 第24表 写真図版第42) 1～11は楊枝である。1・2は竹製で、1は柄部が欠損している。12～16は切匙である。13は柄に2ヶ所貫通孔がある。刃部側面が鎬状に厚くなっており、刃も厚みがある。使用痕は認められない。14は使用痕が両側面にわずかにみられる。その他の12・15・16の切匙は刃部に使用痕がある。17・19～21は匙の一種でそれぞれ先端に摩耗痕がある。18・23は串で、18は扁平で破損部に長方形の孔が開いていたと思われる。19は竹製のヘラで、表裏面に使用した痕跡はなく、側面が摩耗している。

杓子類 (第54図 第25表 写真図版第43) 1はヘラで持ち手には釘穴が2ヶ所あり、全周が摩耗している。2は出土時点では「高野□□ □」と判読できる陰刻がみられた。形は撥型で角が摩耗しており、柄部には漆が塗られていた。6は庖丁の柄である。持ち手に2条の溝が入っており、中子が残る(写真図版84)。5・11・12は灯明台で、5と11に被熱痕、11には漆がみられる。8～10・13は紡錘車で半損もしくは一部破損している。

栓 (第55図 第26表 写真図版第43) 栓は19点出土し、17点完形のものがある。木取りは17のみ芯のある丸木である。他は全て丸木を木口面からみて、中心から4等分ないし6等分した「みかん割削出し」である。平均的な長さは5cm前後で、直径は3～3.5cmである。15は上端面中央に深さ2cmの小孔がある。側面には三日月形の痕が2ヶ所みられた。17は直径6cmと大きく、また加工が粗く、上端部は水平に整えていない。

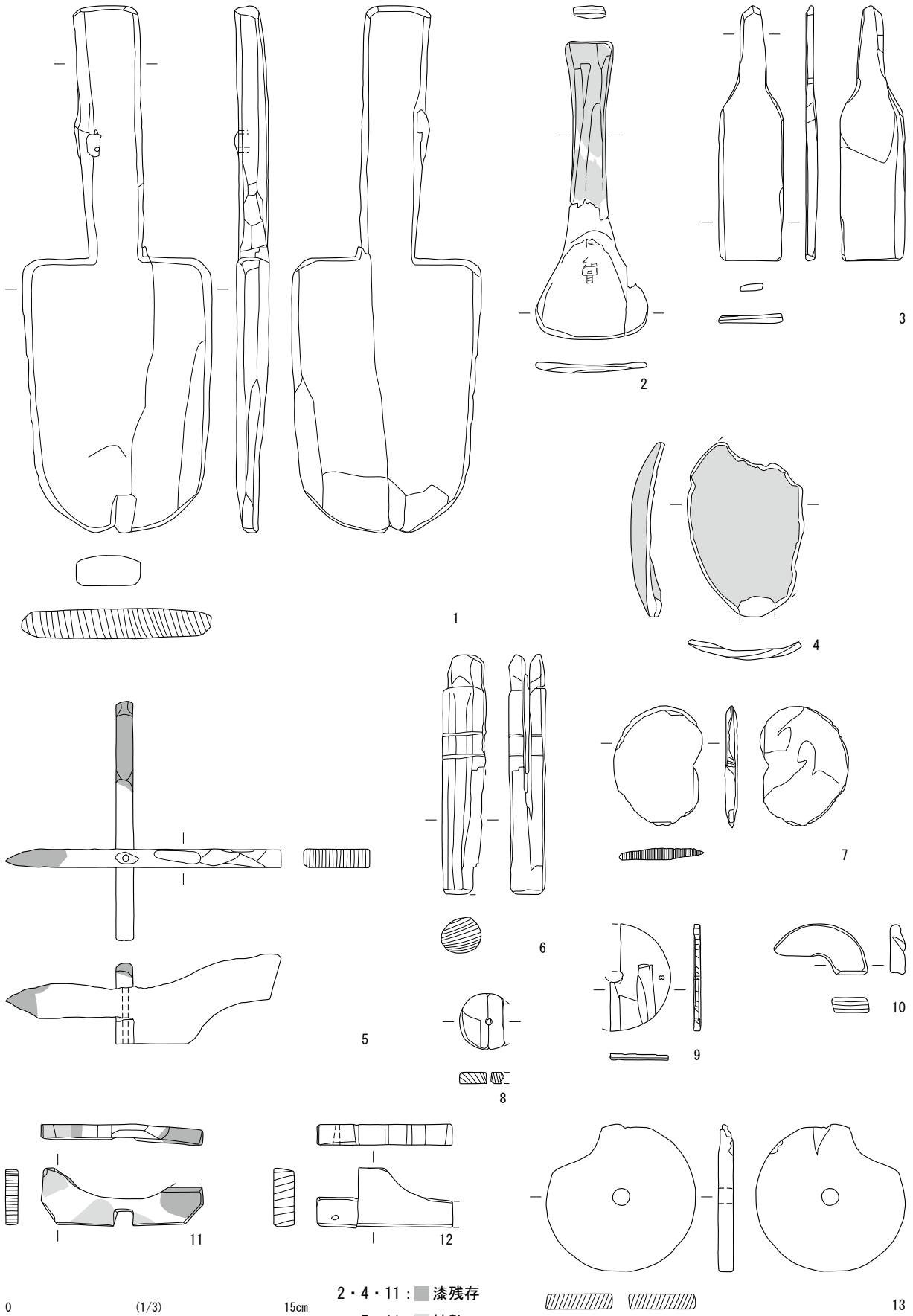


第52図 箸 (縮尺1/3)

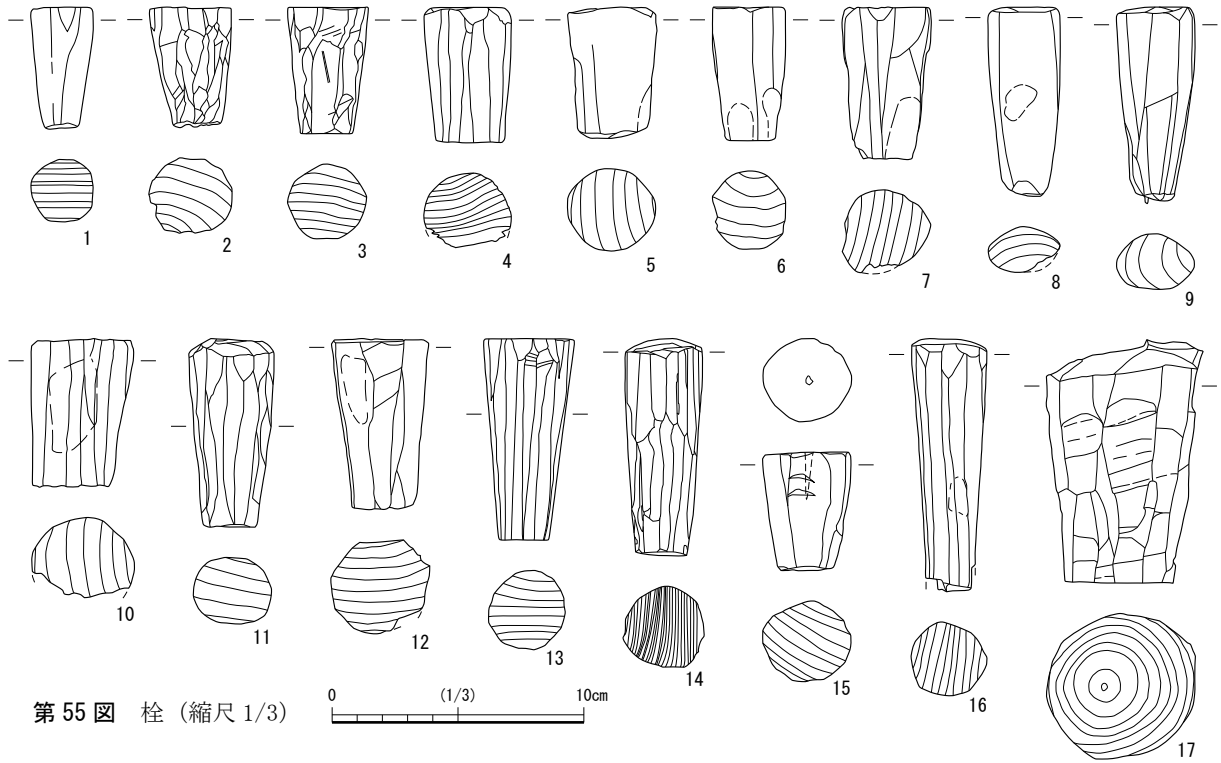


1 : ■被熱

第 53 図 楊枝・切匙類 (縮尺 1/3)



第54図 杓子等 (縮尺 1/3)



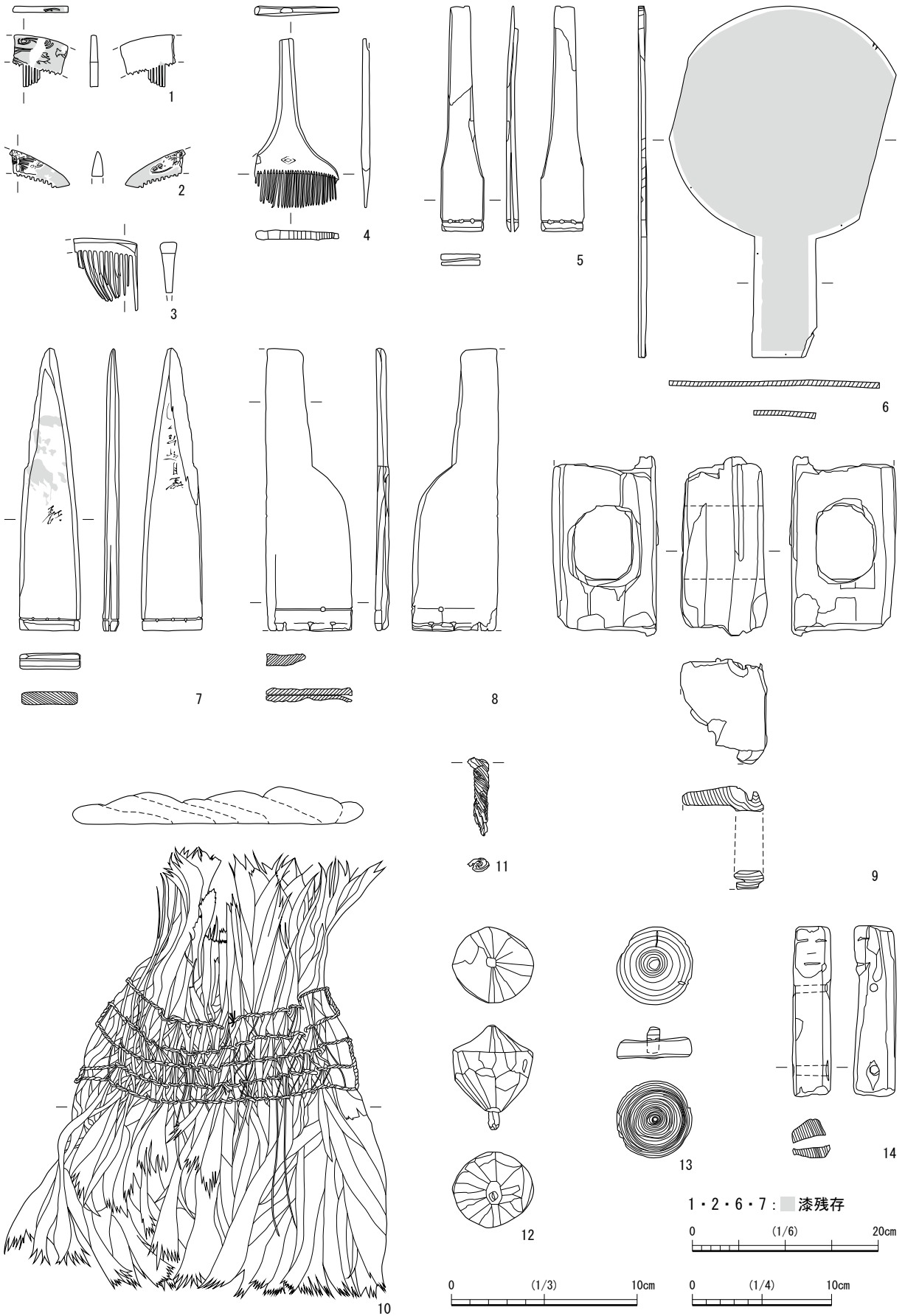
第55図 櫛 (縮尺 1/3)

櫛・刷毛・独楽・その他 (第56図 第27表 写真図版第44) 1～4は櫛である。1・2は髪を掻き上げる鬢櫛で、1には0.45cmの厚さの背に文様が入られ、表面に飛翔する鳥や瑞雲がみられる。2は両面とも蝶の文様で、表裏で上下の向きが変わる。3は梳き櫛の中でも荒櫛の部類に入る。4は毛筋立てで、日本髪の鬢や髷の筋目を整えるのに用いる。櫛の両面に入れ子菱の焼印が入り所有者を表す。

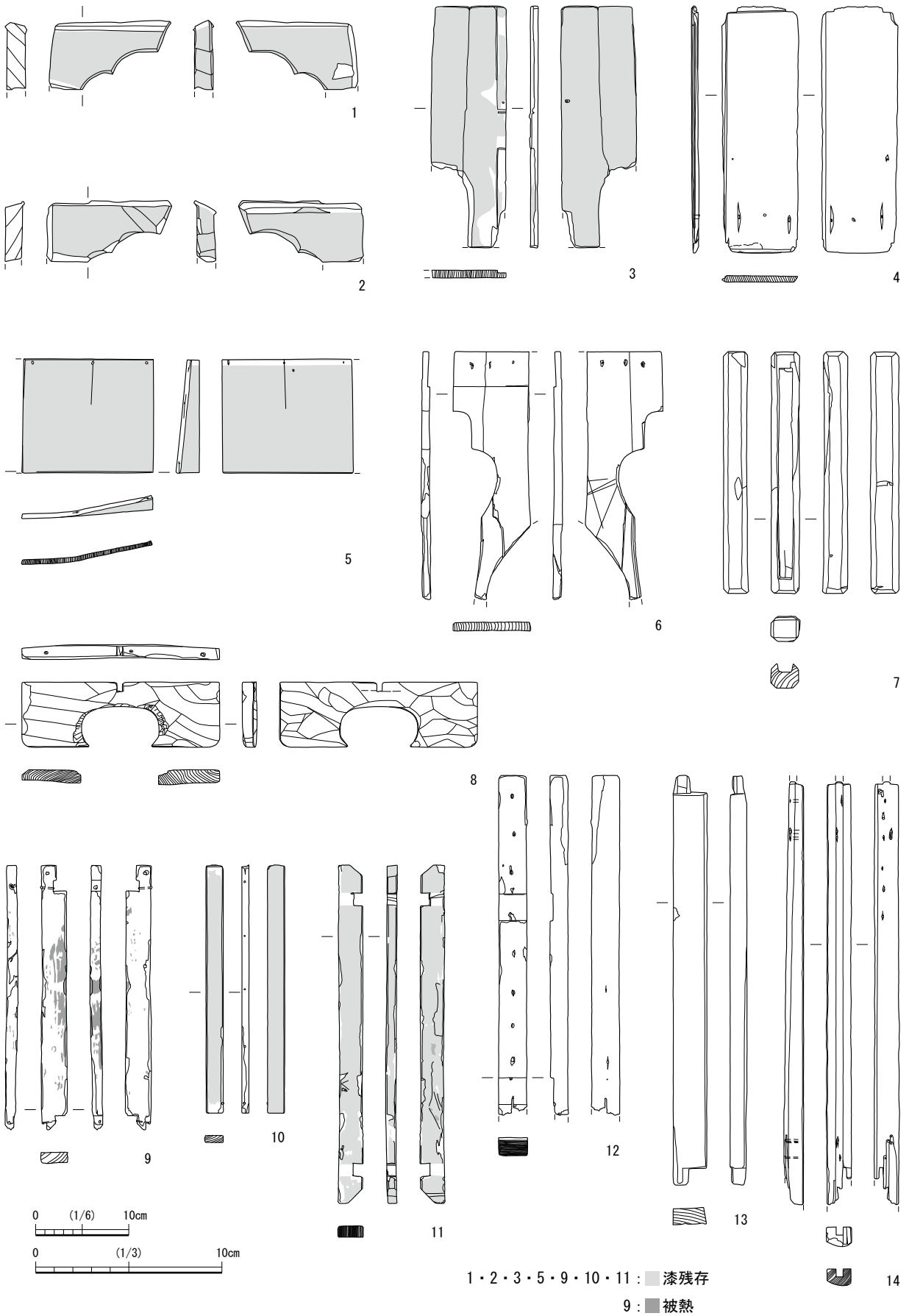
5・7・8は平刷毛で、5・7は毛を留める孔が1列、8は2列である。7には両面に墨書で所有者名が書き込まれる。出土遺構 152-166 の位置は、享和3年(1803)の城下絵図に描かれた「望月」邸の位置にあたる。6は側板を留める木釘孔と漆の接着痕がみられ、柄鏡箱の底板と思われる。9は上下水道の竹管を延伸するための継ぎ手である。10は棕櫚製の箒で、穂の折れ防止のための小編みが5列残る。棕櫚箒は現代でも使用されており、繊維を精製する前に箒にする「皮」と精製した後に箒にする「鬼毛」がある。この箒は棕櫚の樹皮を解して使用しており「鬼毛」といえる。11は生漆をろ過する際に用いた漉し紙である。紙が破れ漆で硬化した状態で出土した。漆の漉し紙は、これまでの福井城跡の発掘調査でも数点認められる。

12と13は独楽である。12は紐を巻いて用いる鉄芯独楽で、5mm角の芯を嵌める。13は手で回す捻り独楽で、径7.5mmの木製の軸を上部に嵌める。下部先端が尖る形状だったと考えられるが、全体が被熱し変形している。14は手足を差し込むための貫通孔2ヶ所あり、輪郭ははっきりしないものの顔の表現があるため、簡易的な人形となるものとみられる。

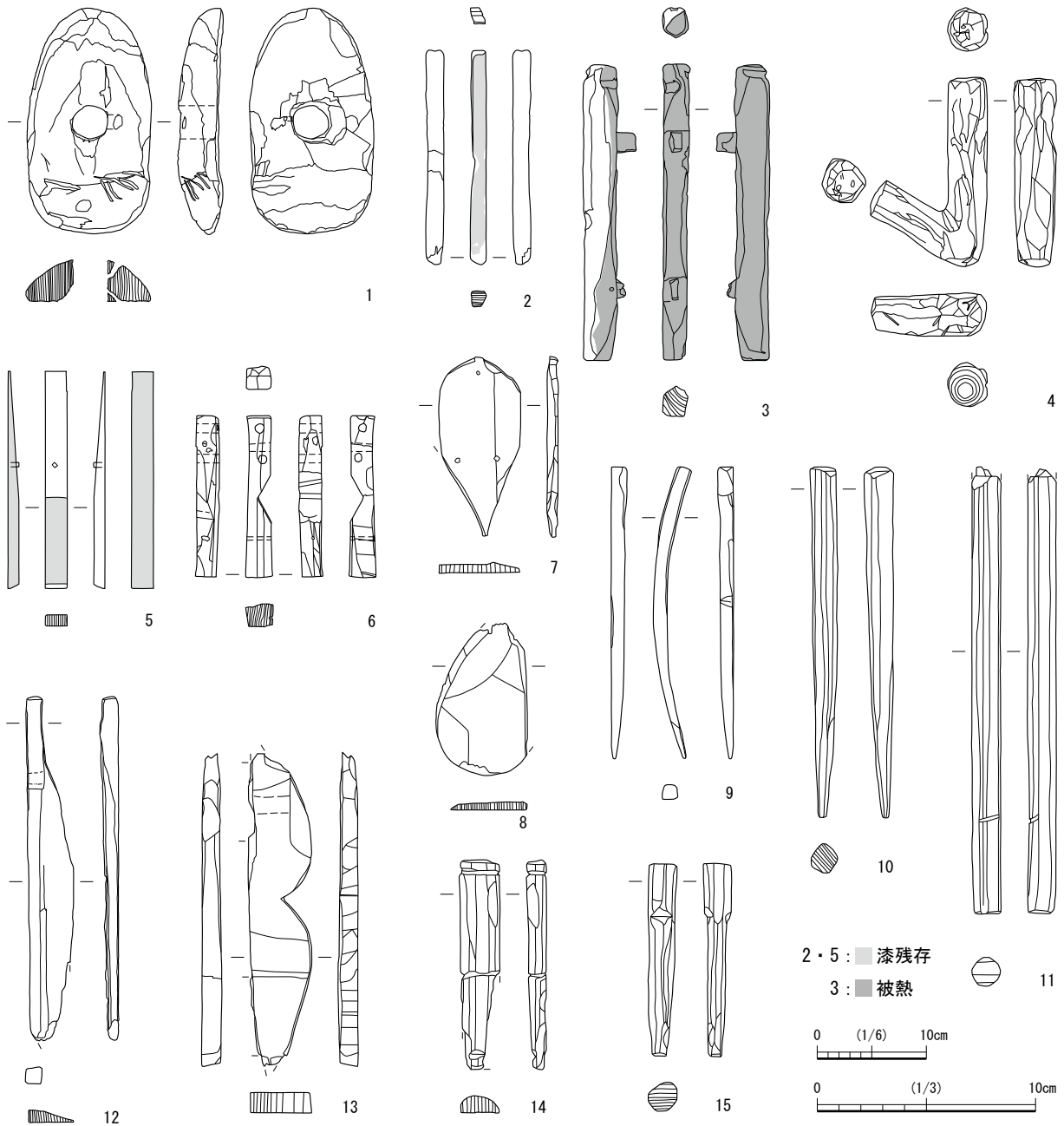
指物等 (第57図 第26表 写真図版第45) 1・2・8は折敷の脚で1・2は上面に漆の接着痕がある。8は天板との接着に柄穴1ヶ所、木釘3本を用いる。3は木釘孔が1ヶ所ある全面漆塗の板材である。4は箱物の一辺である。鉄釘が1本残存し、木釘孔が3ヶ所ある。6は装飾的な抉りがあり、上部に柄穴が1ヶ所と木釘が3本ある。7は長さ22.8cm、幅1.2cm、深さ約0.9cmを測る容器である。9・11・13は曲物・桶等の把手の可能性がある。



第56図 櫛・刷毛・独楽・その他 (縮尺 1/3: 1~5・7・8・11~14 1/4: 10 1/6: 6・9)



第57図 指物等 (縮尺 1/3 : 1・2・13 1/6 : 3~12・14)



第58図 部材 (縮尺 1/3 : 2・4～11・13～15 1/6 : 1・3・12)

部材 (第58図 第26表 写真図版第45) 1は半球状となる楕円形を呈し、中心に直径3cmほどの孔がある。その孔の片側内壁には別の2つの小孔が、部材の表裏両側から斜めに貫き通される。部材の平らな側から孔に棒状の柄を差し込んだとみられ、使用時に支点になる孔の縁が摩耗している。4は自在鉤で両端に浅い孔が2ヶ所ずつみられる。5は先細りの板に木釘が打たれている。木釘から1.5cmは漆がなく、残る6cmの部分に別材を組み合わせていたと想定する。6は角柱状だが、一側面の中央をV字形に切りこむ。貫通した小孔が3ヶ所、埋まったまま両端の切られた木釘が2ヶ所残存する。8は形状から、煎茶の茶匙の可能性が考えられる。側面が斜めに摩耗する。14は円柱を半裁したような形状で、上部と中央に筋状の切り込みがある。庖丁の柄の一部だろうか。

第17表 漆器碗類観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	分類	法量 (cm)				樹種	付着物	漆			施文		備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No.			
			遺構番号	地区	層位			口径	高台径	高台高	全高			内	外	高台	文様	体部				内面/高台		
39	1	碗	151-5	E10 F10	-	横	A	飯碗	(12.4)	7.8	3.15	(6.5)	ブナ属	有	黒	黒	-	赤	夫婦松	高:「-」	-	~18C後	5-15-13	
39	2	碗	151-5	E10	-	横	A	飯碗	(17.0)	(7.0)	(2.4)	(6.0)	ブナ属	-	黒	黒	-	赤	-	判別不可	-	~18C後	5-21-10	
39	3	碗	152-360	B10	-	横	A	飯碗	(12.0)	7.2	2.3	(4.1)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	丸に桐2	-	-	~17C中	木494	
39	4	碗	152-36	F6 F7	-	横	A	飯碗	14.0	6.2	1.9	7.3	トチノキ	-	茶	茶	-	金	秋草文(菊に薄)	-	-	18C前	木123	
39	5	碗	152-301	C1	-	横	A	飯碗	(13.6)	7.0	2.9	(8.7)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	河骨文	-	-	-	木466	
39	6	碗	161-125	H1	-	横	A	飯碗	(11.0)	6.2	1.9	(4.1)	ブナ属	-	赤	黒	-	-	無文	-	-	近世	木951	
39	7	碗	152-355	J9	-	横	A	飯碗	(13.4)	(6.8)	(2.7)	(6.7)	ブナ属	-	赤	黒	-	-	判別不可	-	-	-	木490	
39	8	碗	152-36	F6 F7	-	横	A	飯碗	(10.2)	(5.4)	(1.9)	(8.6)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	蔦文様	-	-	18C前~	木122	
39	9	碗	151-102	D8 E8	-	横	B4	汁碗	(13.4)	(6.4)	(0.4)	(4.0)	トチノキ	-	黒	黒	-	赤	判別不可	-	-	17C	102-2-3	
39	10	碗	152-166	J8 J9	-	横	B1	汁碗	11.6	6.0	0.45	5.0	ブナ属	-	赤	黒	-	金	松文様	-	-	18C後~	木285	
39	11	碗	152-292	C1	-	横	B1	汁碗	13.0	7.0	0.85	6.0	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	判別不可	-	-	17C前	木450	
39	12	碗	151-東側排水溝	E10	-	横	D2	汁碗	(11.0)	6.2	0.5	(2.4)	-	-	赤	赤	-	-	無文	-	-	-	東側排水溝-14-2	
39	13	碗	151-5	F10	-	横	B3	汁碗	(13.8)	7.2	0.8	(4.3)	ブナ属	-	赤	黒	-	-	亀甲に三段梯子	高:「上」「O」線刻	-	~18C後	5-17-1	
39	14	碗	151-102	D8 E8	-	横	B1	汁碗	(14.0)	(6.4)	(0.4)	(4.3)	トチノキ	-	黒	黒	-	赤	判別不可	-	-	17C	102-3-3	
40	1	碗	151-28	D8	-	横	B4	汁碗	(9.0)	(3.8)	(0.4)	(3.0)	トチノキ	-	赤	黒	金	-	-	高:不明	-	18C後~	28-2-15	
40	2	碗	152-352	B10 C10	-	横	B1	汁碗	12.2	(5.2)	(0.5)	(4.6)	トチノキ	-	赤	黒	-	赤	扇面(破れ地紙)2・梅1	-	-	16C後	木477	
40	3	碗	152-239	J9	-	横	B1	汁碗	12.2	(6.6)	(0.45)	(4.65)	ブナ属	-	黒	黒	-	赤	無文	高:「:」	-	~17C中	木355	
40	4	碗	152-165	J9	-	横	C	飯碗	(10.2)	(5.0)	(0.2)	(3.0)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	無文	高:「岩田」	-	18C後~	木228	
40	5	碗	152-166	J8 J9	-	横	B1	汁碗	12.0	(5.8)	(0.5)	(5.0)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	判別不可	高:「小」	-	18C後~	木243	
40	6	碗	161-包含層	H1	-	横	B1	汁碗	(13.2)	(5.8)	(0.7)	(4.8)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	笠松文様	高:「+」線刻	-	-	木959	
40	7	碗	152-166	J8 J9	-	横	B1	汁碗	(10.4)	5.8	0.6	(4.8)	トチノキ	-	赤	黒	-	赤	丸に隅立四ツ目	-	-	18C後~	木280	
40	8	碗	152-166	J8 J9	-	横	B1	汁碗	(12.0)	(5.4)	(0.1)	(3.9)	トチノキ	-	赤	黒	-	金	丸に花菱	-	-	18C後~	木245	
40	9	碗	152-259	B1	(下)	横	B1	汁碗	(11.0)	5.8	0.8	(5.1)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	流水菊	-	-	-	木406	
40	10	碗	152-整地土1	G6	-	横	F	一文字腰碗A	12.0	(6.0)	(0.3)	(4.5)	-	-	黒	黒	-	赤	無文	-	-	-	木582	
40	11	碗	152-246	B1	-	横	C	飯碗	(14.2)	(6.0)	(0.4)	(7.3)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	丸に立ち杜若3	-	高台裏削平	18C~	木384	
40	12	碗	152-166	J8 J9	-	横	B1	汁碗	(11.8)	6.2	0.75	(5.5)	ブナ属	-	赤	黒	-	金	丸に桔梗	-	-	18C後~	木235	
40	13	碗	152-2	B1	北側裏込め土	横	B1	汁碗	12.0	(6.0)	(0.6)	(5.5)	-	-	赤	黒	赤	-	-	-	-	17C~近代	木34	
40	14	盃	152-2	C10	上層	横	H	盃	(9.6)	(5.2)	(1.0)	(2.7)	ケヤキ	-	-	-	赤	-	無文	-	-	18C後~近代	木74	
40	15	蓋	161-112	G10	-	横	D2	蓋	10.8	(4.8)	(0.2)	(2.4)	トチノキ	-	赤	赤	黒	-	無文	-	-	17C	木955	
40	16	碗	152-48	G8	-	横	B2	蓋	11.6	5.6	0.6	4.1	トチノキ	有	黒	黒	-	赤	丸に五爪	-	-	18C後~	木139	
40	17	蓋	152-178	I9	-	横	D2	蓋	12.0	5.2	0.5	3.1	ケヤキ	-	黒	黒	-	金	無文	-	-	壺蓋蓋か	~18C中	木294
40	18	碗	152-259	B1	(下)	横	D2	汁碗小	9.6	5.2	0.4	2.9	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	流水菊矢羽文様	-	-	18C	木405	
40	19	蓋	161-25	D4	-	横	D1	蓋	(10.6)	(6.0)	(0.2)	(1.4)	ブナ属	-	赤	黒	-	赤	丸に違い丁字	-	-	19C	木953	
41	1	碗	161-112	C10	-	横	E	端反碗	12.6	(5.6)	(0.9)	(5.5)	ブナ属	-	黒	黒	-	-	無文	-	端反碗	17C	木954	
41	2	碗	151-100	J6	TR19 5層	横	F	平碗	11.6	6.6	0.6	4.6	ケヤキ	-	黒	赤	-	-	無文	-	カツラ有	18C後~	100-20-4	
41	3	部材	152-165	J9	-	板目	H	刀子状	17.4	-	0.9	2.1	モクレン属	-	下地:黒色漆・上塗:赤色漆	・空目模様		-	-	-	18C後~	木230		
41	4	容器	151-表土中	D8	-	縦	H	容器	(9.2)	(8.2)	(0.45)	(5.8)	モクレン属	-	黒	黒	-	-	-	-	刳り段加工	-	表土中-1	
41	5	蓋	152-166	J8 J9	-	横	F	平碗蓋	14.0	(6.2)	(0.8)	(2.7)	トチノキ	-	黒	黒	-	-	無文	-	-	18C後~	木279	
41	6	蓋	152-166	J8 J9	-	横	F	腰碗蓋	13.6	6.2	0.8	2.0	ブナ属	-	黒	黒	-	-	無文	-	平碗	18C後~	木239	
41	7	合子蓋	152-整地土3	J9	-	横	H	合子蓋	7.2	-	-	(2.5)	ブナ属	-	赤	黒	-	-	無文	-	-	-	木686	
41	8	丸板	152-367	J9	-	板目	H	容器蓋	(6.2)	-	(0.4)	(3.6)	ヒノキ	-	黒	黒	-	赤	-	-	花:弁柄葉菱:金	16C後	木507	
41	9	刳物	151-5	E10	-	丸木	H	鉢	11.6	9.0	-	6.1	モクレン属	-	黒	黒	-	-	無文	-	-	~18C後	5-20-3	
41	10	合子蓋	152-108	B1	2層	縦	H	合子蓋	8.2	-	-	1.7	ハンノキ	-	黒	黒	-	銀	薄文様(秋草文)	表面ハート型接合痕	19C	木163		

第18表 下駄観察表

図版番号	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)					備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No.
			遺構番号	地区	層位		長さ	台幅歯幅	台厚歯厚	高さ歯高さ	鼻緒幅			
42	1	連南下駄	152-48	G8	-	台:榎目歯:榎目	21.0	8.5 8.5	(1.4) (2.4)	(4.3) 前(3.1)後(2.4)	a/b:(6.2)/(10.9)	-	18C後半~	木136
42	2	連南下駄	-	H1	161-包含層	台:榎目歯:榎目	22.1	(9.2) (9.0)	(1.7) (3.4)	(2.7) (1.0)	a/b7.0/11.0	-	-	木324
42	3	連南下駄	-	H10	161-表土	板目	22.0	8.9 8.9	1.2 前3.2後3.2	2.5 1.3	a/b6.4/11.2	-	-	木323
42	4	連南下駄	161-129	H1	-	台:板目	22.8	10.3 10.2	1.5 3.6	4.3 3.0	a/b8.6/10.1	-	-	木307
42	5	連南下駄	161-132	H1	-	台:板目歯:板目	21.7	8.5 9.8	1.6 4.3	5.7 4.1	a/b6.0/9.5	-	近世	木475
42	6	連南下駄	-	H1	161-包含層	台:板目	22.1	9.5 9.5	1.4 6.3	3.9 2.5	a/b7.4/10.0	-	-	木322

第3章 木製品

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)					備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		長さ	台幅 幅	台厚 厚	高さ 高さ	鼻緒幅			
42	7	連菌下駄	152-301	C1	-	台:板目 菌:板目	20.5	8.2 8.2	1.3 前 3.3 後 3.3	2.9 前 1.6 後 1.4	a/b: (5.9) / (9.5)	一部炭化	-	木 463
42	8	連菌下駄	152-146	C1	-	台:板目	20.3	(7.2) (8.3)	(2.15) (2.5)	(3.0) (0.85)	-	菌裏付着物	~17C 中	木 173
42	9	連菌下駄	152-146	C1	-	台:板目 菌:板目	22.7	9.1 9.1	2.0 4.2	2.9 0.9	a/b:6.1/11.5	-	~17C 中	木 167
42	10	連菌下駄	151-102	D8 E8	26層	板目	(14.5)	8.0 8.0	1.3 2.5	2.7 1.4	-	-	17C	102-8-1
42	11	連菌下駄	-	J9	152- 整地土3	台:板目	13.2	5.8 (5.8)	(1.3) (2.0)	(1.7) (0.4)	a/b:4.7/7.0	子ども用	-	木 689
43	1	陰卵下駄	151- 近代造成土	B7	3層	板目	(21.1)	(8.2) (8.8)	(3.2) (1.2)	前 (5.8) 後 (2.6)	-	-	-	近代造成土 34-2
43	2	陰卵下駄	151-28	D8	台:2層 菌:1層	板目	(15.7)	6.9 (8.9)	3.9 (1.3)	(8.4) (4.5)	-	-	18C 後半~	台28-9-1 菌28-8-3
43	3	下駄 打付	152-32	J9	第4砂利 面下盛土	台:板目 菌:板目	14.4	5.4 5.8	1.0 前 2.3 後 2.1	2.0 1.0	-	子ども用 鉄釘4	17C 前半~	木 113
43	4	連菌下駄	151-5	E10	-	板目	16.7	(6.7) (8.4)	(1.2) (3.0)	2.6 (1.4)	a/b:5.5/9.5	-	~18C 後半	5-20-2
43	5	削り下駄	152-2	B1	水路埋土 (下層)	板目	13.8	6.3 6.7	1.3 前 4.5 後 4.2	3.3 前 2.0 後 1.6	a/b:4.3/6.2	子ども用	17C ~	木 27
43	6	露卵下駄	152-48	G8	-	板目	(21.4)	7.2	3.0	-	a/b:(5.2) / (11.2)	-	18C 後半~	木 137
43	7	雪下駄	-	C1 (西)	152- 整地土5	板目	21.8	(9.4)	1.8	1.8	-	一部炭化有	-	木 711
43	8	雪下駄	-	J8	152- 整地土3	板目	22.0	8.3	1.7	1.8	-	おがくずを 詰めた穴3	-	木 703
43	9	雪下駄	152-299	I8	-	追板目	19.1	7.8	2.2	2.2	-	-	~17C 中	木 453
43	10	雪下駄	-	J9	152- 整地土3	追板目	13.3	5.95	1.2	-	-	子ども用	-	木 685
43	11	露卵下駄菌	151-28	D8	上層	板目	-	(9.6)	1.4	13.7	-	-	18C 後半~	28-5-3
43	12	露卵下駄菌	-	H1	151-包含層	板目	-	11.75	2.0	10.3	-	-	-	木 329
43	13	陰卵下駄菌	152-166	J8-9	-	板目	-	13.0	1.6	7.8	-	ホゾ穴2	18C 後半~	木 263
43	14	陰卵下駄菌	152-166	J8-9	-	板目	-	12.7	1.9	8.0	-	ホゾ穴2	18C 後半~	木 264
43	15	露卵下駄菌	151-111	H1	-	板目	-	11.4	2.0	8.9	-	-	近世	木 401
43	16	陰卵下駄菌	151-3	C7-8	-	板目	-	11.8	1.3	(8.5)	-	-	~17C	3-1-2
43	17	陰卵下駄菌	151-3	C7-8	-	板目	-	11.0	1.0	8.4	-	-	~近代	3-1-3
43	18	陰卵下駄菌	151-28	D8	上層	板目	-	(6.8)	1.3	(8.7)	-	-	18C 後半~	28-5-2
43	19	陰卵下駄菌	151-28	D8	2層	板目	-	9.4	1.5	5.7	-	表側面黒色漆・裏面ホゾ穴2	18C 後半~	28-9-2

第19表 桶・樽観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	最大厚			
44	1	桶 底板	151-近代 造成土	B7	3層	板目	11.9	-	-	1.5	側面ホゾ加工有・ホゾ深さ1cm ホゾ幅0.1cm・表裏面細石多量	-	近代造成土 34-1
44	2	桶 底板	151-28	D8	2層	板目/板目	12.3	-	-	1.8	木釘2	18C 後半~	28-9-3
44	3	桶 蓋	151-204	J6	-	板目/追板目	(15.45)	-	左から厚1.5/1.9	2材で接合	18C	204-2-2	
44	4	桶 底板	152-166	J8-9	-	板目	14.9	-	-	1.6/1.6	2材で接合	18C 後半~	木 233
44	5	桶 蓋	152-攪乱17	A9	-	板目/板目	15.3	-	-	1.7/1.7	2材で接合	-	木 529
44	6	桶 底板	151-28	D8	上層	追板目	17.7	-	左から厚1.8/1.6	-	-	18C 後半~	28-5-4
44	7	桶 蓋	151-28	D8	-	板目/追板目/追板目	14.5	-	左から厚1.8/1.6/1.7	栓穴有・3材で接合	-	18C 後半~	28-2-2
44	8	桶 蓋	152-166	J8-9	-	追板目/板目/板目	17.6	-	左から厚1.8/1.9/2.0	栓穴有・3材で接合	-	18C 後半~	木 253
44	9	桶 底板	151-100	J6	TR19-5層	板目/板目	14.9	-	-	1.5/1.5	2材で接合・木釘2	18C 後半~	100-11-1
44	10	桶 蓋	152-182	A9	-	板目/板目	14.7	-	-	1.6/1.6	木釘2・焼印「Λ」の下に「永」	近代	木 329
44	11	桶 底板	151-28	D8	-	板目	21.1	-	-	2.1	木釘穴2	18C 後半~	28-3-6
44	12	桶 底板	152-181	C2	-	板目	(32.0)	-	-	(1.7)	木釘1	18C	木 326
44	13	桶 底板	151-3	C7-8	-	板目	15.1	-	-	1.6	一部炭化・木釘1・木釘穴1	近代	3-9-2
44	14	桶 底板	151-北側 排水溝	G10 F10	-	板目	(20.0)	(19.0)	-	(1.2)	片面黒色漆残存・木釘1・木釘穴1	-	北側排水溝 4-1
44	15	桶 底板	152-146	C1	整地土3	板目	(28.0)	-	-	(1.5)	釘穴2・2点接合	18C 中~	木 176
45	1	桶 側板	152-32	I9	第3砂利 面下盛土	板目	-	25.6	5.7	1.4	-	17C 前半~	木 105
45	2	桶 側板	152-2	B1	上層1段目	板目	-	25.2	-	1.8	一部炭化・外面タガ圧痕有	18C 後半~近代	木 7
45	3	桶 側板	152-166	J8-9	-	板目	-	47.95	7.1	1.8	外面タガ圧痕有・把手用の孔有	18C 後半~	木 303
45	4	桶 側板	152-166	J8-9	-	板目	-	47.45	7.1	1.8	外面タガ圧痕有・把手用の孔有	18C 後半~	木 304
45	5	桶 側板	152-166	J8-9	-	板目	-	21.2	8.4	1.1	栓孔・同一桶の隣合う2材	18C 後半~	木 296
45	6	桶 側板	152-32	I9	第4砂利 面下盛土	板目	-	11.9	4.8	0.9	2点接合	17C 前半~	木 107
45	7	桶 側板	151-28	D8	下層	板目	-	13.1	9.2	1.7	外:赤色漆・内:黒色漆有	18C 後半~	28-6-2
45	8	桶 側板	152-166	J8-9	-	板目	-	15.8	6.8	1.4	孔有	18C 後半~	木 234

第20表 曲物観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No	
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	底板厚				高さ
46	1	曲物 底板	152-299	I8	-	板目	12.8	-	-	0.6	-	木釘1	~17C 中	木 457
46	2	曲物 底板	152-259	B1	(下)	板目	13.5	-	-	1.0	-	木釘1	17C ~	木 398
46	3	曲物 蓋	152-攪乱15	A9	-	板目	(13.9)	-	-	0.4	-	一部炭化・墨書判読不可	-	木 527
46	4	曲物 底板	152-2	C10	-	板目	(12.8)	-	-	0.4	-	-	17C ~近代	木 78
46	5	曲物 底板	152-146	C1	-	板目	(13.2)	-	-	0.75	-	-	~17C 中	木 192
46	6	曲物 底板	152-146	C1	-	板目	(13.2)	-	-	0.95	-	中央穿孔有	~17C 中	木 168
46	7	曲物 底板	152-攪乱 20西 TR	J9	-	板目	(11.9)	-	-	0.5	-	工具刃幅約27cm	-	木 530
46	8	曲物 底板	151-TR19	J6	1層	板目	(16.0)	-	-	(0.8)	-	黒色漆	-	TR19-1-1
46	9	曲物 底板	152-355	J9	-	板目	9.7	-	-	0.5	-	-	-	木 491
46	10	曲物 蓋	152-182	A9	-	板目	(7.6)	-	-	0.25	-	鉄釘穴1	近代	木 335

第3章 木製品

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)					備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No.
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	底板厚	高さ			
46	11	曲物 底板	-	H1	161- 包含層	柀目	7.4	-	-	0.6	-	両面に黒色漆・木釘3	-	木 349
46	12	曲物 底板	161-129	H1	-	柀目	7.85	-	-	0.8	-	-	-	木 311
46	13	曲物 底板	161-110	H2	-	柀目	8.3	-	-	0.6	-	-	17C	木 881
46	14	曲物 底板	152-2	C10	水路埋土	柀目	(28.8)	-	-	1.0	-	木釘穴3 (うち木釘残2)	17C~近代	木 99
46	15	曲物	161-117	-	-	柀目	14.5	-	-	0.6	7.3	樹皮綴じ2 (両樹皮幅0.5cm)・側板厚0.2	17C	木 948
46	16	曲物	151-100	J6	下層	柀目	-	-	-	-	(3.3)	金網残存・樹皮綴じ外側3・内側木釘穴3 樹皮綴じ外側3・内側2・側板厚0.5cm	18C後半~	100-5 w 4-1
46	17	曲物	152-166	J8-9	-	柀目	24.0	-	-	0.8	2.1	側板厚さ0.5cm・側板木釘3cm・底板木釘3cm	18C後半~	木 284
46	18	曲物	161-117	-	-	柀目	21.3	-	-	0.9	(3.7)	樹皮綴じ内側2 (樹皮幅0.7cm/0.5cm)木釘 穴8 (内外側貫通4・外側4)・内側板0.25cm 外側板0.2cm	17C	木 946
47	1	曲物 蓋	152-2	C10	上層	柀目	5.8	-	-	0.7	-	樹皮綴じ1 (樹皮幅0.45cm)	18C後~近代	木 72
47	2	曲物 蓋	161-111	H1	-	板目	12.1	-	-	0.5	-	樹皮綴じ1 (樹皮幅0.3cm)	近世	木 431
47	3	曲物 蓋	-	C1	152- 整地土3	柀目	(13.1)	-	-	0.7	-	樹皮綴じ1(樹皮幅0.65cm)	-	木 656
47	4	曲物 蓋	152-182	A9	-	柀目	9.4	-	-	1.1	-	樹皮綴じ1 (樹皮幅1.0cm)	近代	木 331
47	5	曲物 蓋	152-269	A10	-	柀目	12.9	-	-	1.0	-	樹皮綴じ3・貫通した切れ込み2 (樹皮幅0.4 cm/0.5cm/0.6cm)	~17C中	木 417
47	6	曲物 蓋	152-182	A9	-	追柀目	9.6	-	-	0.9	-	樹皮綴じ1 (樹皮幅1.1cm)	近代	木 332
47	7	曲物 蓋	161-125	H1	-	柀目	19.0	-	-	0.45	-	木釘6	近世	木 489
47	8	曲物 蓋	-	J8	152- 整地土3	柀目	15.9	-	-	0.8	-	側面段々き・両面刃物痕有	-	木 694
47	9	曲物 蓋	161-277	E5	-	柀目	(20.9)	-	-	0.6	-	木釘5・十字に把手痕	-	木 893
47	10	柄杓	152-291	C1	-	底/側 柀目	(7.5)	-	-	0.5	5.0	側板厚さ0.2cm・全面黒色漆・底板木釘3	17C前半	木 447
47	11	柄杓	152-2	B1	-	底/側 柀目	7.6	-	-	0.5	6.5	側板厚さ0.3cm・全面黒色漆	17C~近代	木 13
47	12	曲物 蓋	161-129	H1	-	柀目	13.3	-	-	0.7	-	樹皮綴じ1・墨書「梅()」	-	木 313
48	1	柄杓	161-117	H1	-	底/側 柀目	14.3	-	-	0.9	11.5	側板:厚さ0.3cm柄:長さ(75.5cm)幅2.7cm 厚さ1.8cm	17C	木 982

第21表 建築材観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No.
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚			
49	1	井戸桶材	151-3	C7-8	掘方表込め	板目	80.1	12.2	2.9	表面タガ痕有	18C後半~	3-15-1
49	2	井戸桶材	151-3	C7-8	-	板目	80.2	6.6	2.5	-	18C後半~	3-4-4
49	3	木札	151-3	C7-8	-	板目	80.0	9.3	2.6	貫通孔1・表面タガ痕有・両側面に挟り有	18C後半~	3-1-6
49	4	建築部材	152-147	C2	-	追柀目	106.7	7.6	5.5	鉄釘9・釘穴8・木釘1・段々き	18C	木 524
49	5	建築部材	152-147	C2	-	追柀目	89.7	8.0	8.2	鉄釘2・釘穴8・ホソ穴1	18C	木 520
49	6	井戸枳材	152-147	C2	-	板目	(82.4)	7.0	7.0	ホソ1	18C	木 519
49	7	杭	152-2	C1	上層(1段目)	追柀目	75.3	(5.0)	(4.85)	貫通孔1	18C後半~近代	木 39
50	1	建築部材	152-147	C2	-	丸木削出し	(157.6)	7.9	6.6	ホソ穴7 (うち小孔4)・鉄釘1・釘穴11	18C	木 514
50	2	井戸材	152-147	C2	-	丸木	120.4	7.75	6.4	樹皮残存	18C	木 521

第22表 墨書観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			墨書		出土遺構の主な遺物の時期	木製品No.
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚	表面	裏面		
51	1	墨書 札	161-290	E5	-	柀目	14.2	2.5	0.3	須崎三郎右衛門様御内/ ■■■■■■■■■■七株■■■■	越前福井■■■■■■■■■■/ ■■ちのはし■■■■	近世	木 979
51	2	墨書 札	161-129	H1	-	柀目	17.65	3.0	0.4	此■■■■■■須崎三郎エ門様へ/ ■■■■■■よりまいる	亥六月七日 ■■■■■ ■■■■左衛門/ ■■■■町■■■■兵衛	-	木 978
51	3	墨書 札	161-117	H1	-	柀目	(19.2)	(2.1)	-	[] [] / []	[]武[]/■■町■■■■や	17C	木 851
51	4	墨書 札	161-117	H1	-	柀目	(20.2)	(4.8)	-	■ちやち本/福井■■茶屋	越前福井/細田[]様御内/[]	17C	木 567
51	5	墨書 桶側板	151	I8	整地土1	板目	15.2	2.9	0.7	小林■■右エ門 (実測時判読)	-	-	木 592
51	6	墨書 札	152-166	J8-J9	-	柀目	12.4	(2.8)	(0.5)	判読不能	判読不能	18C後半~	木 282
51	7	墨書 札	161-129	H1	-	柀目	(7.7)	(2.3)	-	[]門様	■■けさん来/■■■可被成候	-	木 308
51	8	墨書 札	151-28	D8	下層	板目	17.75	5.3	0.7	つんば	-	18C後半~	28-6-3

■:1文字判読不能 []:字数不明判読不能 /:改行

第23表 箸観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			法量 (cm)		備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No.	
			遺構番号	地区	層位	最大長	最大幅				
52	1	箸	161-129	H1	-	-	17.4	0.75	-	-	木 196
52	2	箸	152-2	C10	-	-	21.1	0.7	-	17C~近代	木 90
52	3	箸	152-259	B1	-	下	22.2	0.7	-	18C	木 401
52	4	箸	152-2	C10	-	-	22.25	0.7	-	17C~近代	木 89
52	5	箸	161-29	H1	-	-	23.2	0.8	-	-	木 204
52	6	箸	161-129	H1	-	-	23.2	0.9	-	-	木 210
52	7	箸	161-129	H1	-	-	23.3	0.8	-	-	木 216
52	8	箸	152-2	C10	-	-	23.55	0.7	-	17C~近代	木 83
52	9	箸	152-2	B1	-	水路埋土	24.8	0.7	-	17C~近代	木 23
52	10	箸	152-291	C1	-	-	27.4	0.9	-	17C前半	木 436
52	11	箸	-	C1	-	152-整地土3	27.9	0.7	-	-	木 663
52	12	箸	161-129	H1	-	-	23.1	0.7	-	-	木 162
52	13	箸	151-5	F10-G10	-	-	(24.1)	0.8	-	~18C後半	5-1-1
52	14	箸	152-146	C1	-	-	26.5	0.7	-	~17C中	木 179
52	15	箸	152-291	C1	-	-	27.1	0.9	-	17C前半	木 445
52	16	箸	152-299	I8	-	-	27.4	0.7	-	~17C中	木 454
52	17	箸	-	C1	-	152-整地土3	28.3	0.8	-	-	木 662
52	18	箸	161-277	E5	-	-	29.2	0.8	-	-	木 923
52	19	箸	152-32	B10	-	152-第2砂利面下盛土	18.0	0.5	四角	17C前半~	木 101

第3章 木製品

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			法量 (cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位	最大長	最大幅	最大厚			
52	20	竹箸	152-2	B1	水路埋土	20.9	0.4	-	四角	17C～近代	木 21
52	21	箸	161-125	H1	-	21.8	0.75	-	-	近世	木 471
52	22	箸	161-111	H1	-	22.2	0.7	-	-	近世	木 421
52	23	箸	151-102	D8・E8	19層	(22.4)	0.8	-	-	17C	102-7-1
52	24	箸	161-129	H1	-	22.6	0.7	-	-	-	木 203
52	25	箸	152-104	I9	-	23.8	0.7	-	-	～18C後半	木 154
52	26	箸	152-291	C1	-	25.8	0.7	-	-	17C前半	木 426
52	27	箸	151-5	E10	-	26.4	0.8	-	-	～18C後半	5-21-2
52	28	箸	151-5	F10	-	26.7	1.2	-	太い	～18C後半	5-9-1
52	29	箸	151-5	E10・F10	-	31.0	0.7	-	長い	～18C後半	5-15-4
52	30	箸	161-129	H1	-	(20.55)	0.7	-	片端炭化	-	木 150
52	31	箸	161-129	H1	-	23.2	0.8	-	片端扁平	-	木 172
52	32	箸	152-2	B1	水路埋土	24.0	0.85	-	片端扁平	17C～近代	木 22
52	33	塗箸	152-焼土だまり	J8	-	22.3	0.7	-	赤色漆	-	木 512
52	34	竹塗箸	152-166	J8・9	-	25.4	0.6	-	赤色・緑色漆の塗り分け	18C後半～	木 286

第24表 楊枝・切匙類観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚			
53	1	竹ペラ	151-108	J5	16層以下	-	(9.6)	(0.9)	(0.3)	一部炭化	18C後半～	108-21-3
53	2	竹楊枝	152-166	J8-9	-	-	10.1	1.0	0.4	-	18C後半～	木 275
53	3	楊枝	152-南北 TR	C1 (西)・D1	-	-	10.2	1.1	0.35	-	-	木 569
53	4	楊枝	151-TR3	D9	-	榫目	12.8	0.95	0.4	-	-	TR3 石垣東 2-4
53	5	楊枝	161-129	H1	-	-	13.6	0.7	0.4	-	-	木 310
53	6	楊枝	161-129	H1	-	-	13.8	0.7	0.5	-	-	木 90
53	7	楊枝	161-129	H1	-	-	(14.0)	0.8	0.4	-	-	木 94
53	8	楊枝	161-129	H1	-	-	15.4	0.7	0.4	-	-	木 91
53	9	楊枝	161-129	H1	-	-	15.7	0.7	0.3	-	-	木 92
53	10	楊枝	161-129	H1	-	-	16.0	0.7	0.25	-	-	木 93
53	11	楊枝	161-129	H1	-	-	16.6	0.7	0.4	-	-	木 95
53	12	切匙	161-125	H1	-	榫目	25.9	3.6	0.3	-	-	木 492
53	13	切匙	161-111	H1	-	板目	25.1	4.5	0.7	貫通孔 2・刃部の方が厚い	近世	木 410
53	14	切匙状木製品	161-129	H1	-	榫目	25.7	3.2	0.5	貫通孔 1	-	木 55
53	15	切匙	161-117	H1	-	榫目	(20.6)	(3.5)	(0.5)	-	-	17C～
53	16	切匙	152-2	C1	-	榫目	16.5	2.0	0.35	柄幅 1.05cm	17C～近代	木 47
53	17	匙	-	C1 (西)	152-整地土 5	榫目	21.8	1.3	0.7	両側面摩擦・先端摩擦	-	木 712
53	18	串	161-117	H1	-	榫目	(16.1)	(2.1)	(0.3)	ホゾ穴有	17C～	木 836
53	19	匙	151-28	D8	1層	榫目	17.5	1.6	0.5	-	18C後半～	28-8-5
53	19	竹ペラ	151-28	D8	5層以下	-	(21.6)	(2.5)	(0.8)	-	18C後半～	28-12-19
53	20	匙	152-2	C1	裏込め土	板目	18.9	1.6	0.4	-	17C～近代	木 57
53	21	匙	152-148	C1	152-整地土 3	榫目	22.5	1.7	0.3	-	-	木 205
53	23	串	152-2	B1	北側裏込め土	追榫目	18.2	0.9	0.6	-	17C～近代	木 33

第25表 杓子等観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)				備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅	最大厚			
54	1	ヘラ	-	C1	152-整地土 3	榫目	28.1	10.1	1.7	釘穴 2	-	木 637	
54	2	杓子	152-2	C1	上層 1 段目	板目	15.9	6.0	-	陰刻「高野」 (文字数不明)	18C後半～近代	木 36	
54	3	ヘラ	152-2	C1	-	板目	13.55	3.5	0.6	-	17C～近代	木 51	
54	4	杓子	152-367	J9	-	板目	(9.3)	(6.1)	-	全面黒色漆	16C後半	木 508	
54	5	灯明台	151-117	H1	-	榫目	(14.7)	(12.8)	(3.6)	一部炭化有・貫通孔各1	17C	木 819・木 820	
54	6	庵丁柄	152-182	A9	-	丸木削出し	12.8	(2.3)	(2.0)	ミノ 2・ホゾ 1・刃の一部残存	近代	木 513	
54	7	茶匙	161-278	E5	-	榫目	6.4	4.5	0.6	-	-	木 909	
54	8	紡錘車	161-112	G10	-	榫目	3.0	3.0	(2.4)	0.6	-	17C	
54	9	紡錘車	-	C1 西	152-整地土 5	板目	(5.7)	5.7	3.1	0.4	貫通孔 1・端部穿孔 1	-	木 721
54	10	紡錘車	151-100	J6	下層	板目	(5.5)	(2.7)	(5.0)	(0.8)	貫通孔 1	18C後半～	100-7-1
54	11	灯明台	-	C1・D1	151-南北 TR-9	榫目	8.7	(3.0)	(0.7)	一部炭化有・付着物有	-	木 568	
54	12	灯明台	-	C1	151-整地土 3	榫目	(7.3)	3.1	1.1	木釘 1	-	木 636	
54	13	紡錘車	151-28	D8	-	榫目	8.0	(7.9)	8.0	(0.8)	貫通孔 1	18C後半～	28-3-3

第26表 栓観察表

図版種別	挿図番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺構の主な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚			
55	1	栓	152-2	C1	上層 1 段目	みかん割削出し	4.8	2.5	-	-	18C後半～近代	木 35
55	2	栓	152-2	B1・C1	裏込め 2	みかん割削出し	4.8	3.3	-	-	17C～近代	木 1
55	3	栓	152-2	C10	上層 2 段目	みかん割削出し	5.0	3.2	-	-	18C後半～近代	木 75
55	4	栓	152-166	J8・J9	-	みかん割削出し	5.35	3.5	-	-	18C後半～	木 254
55	5	栓	151-4	C8	-	みかん割削出し	5.2	3.5	3.3	-	～近代	4-4-1
55	6	栓	151-3	C7・C8	-	みかん割削出し	5.3	2.9	3.1	-	～近代	3-17-1
55	7	栓	151-近代造成土	C7	ゴミ層 2	みかん割削出し	6.0	3.5	(3.3)	-	-	近代造成土 27-1
55	8	栓	151-26	C8	4層	みかん割削出し	7.5	2.85	1.8	-	～18C後半	26-9-1
55	9	栓	151-26	C8	4層	みかん割削出し	7.8	3.1	2.2	-	～18C後半	26-9-2
55	10	栓	152-166	J8-9	-	みかん割削出し	5.9	(4.1)	-	-	18C後半～	木 255
55	11	栓	152-146	C1	-	みかん割削出し	7.5	3.4	-	-	～17C中	木 191
55	12	栓	152-104	I9	-	みかん割削出し	6.8	3.9	-	-	～18C後半	木 156
55	13	栓	152-2	B1	上層 1 段目	みかん割削出し	8.0	3.6	-	-	18C後半～近代	木 4
55	14	栓	161-117	H1	-	みかん割削出し	8.6	3.05	3.2	-	17C	木 568
55	15	栓	152-108	B1	2層	みかん割削出し	4.7	3.5	-	穿孔 1 (深さ 2.0cm)	19C	木 161
55	16	栓	152-289	C1	-	みかん割削出し	10.0	3.0	-	長い	-	木 423
55	17	栓	152-82	H7	井戸枠内 1 層	丸木	9.6	6.0	-	特大・粗い加工	～近代	木 152

第27表 櫛・刷毛・独楽・その他観察表

図版 種別	挿図 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			墨書 / 焼印	備考	出土遺構の主 な遺物の時期	木製品No	
			遺構番号	地区	層位		直径	最大長	最大幅					最大厚
56	1	櫛	152-2	C1	-	-	(2.8)	(2.9)	0.45	金(黄)文様有	黒色漆・歯6	17C～近代	木41	
56	2	櫛	152-2	C1	上層(1段目)	-	(1.3)	(3.2)	0.6	金箔絵「蝶」(表裏で文様上下逆)	-	18C後～近代	木40	
56	3	櫛	152-194	C1	-	-	3.6	(3.4)	0.95	-	歯11	～17C中	木336	
56	4	櫛	152-2	B1	上層(1段目)	榫目	-	9.1	(4.5)	0.5	「入れ子菱」	歯部中央高1.8cm・歯31 柄幅0.75cm・両面焼印	18C後～近代	木3
56	5	刷毛	152-東壁	J8-9	152-法面	榫目	-	12.15	2.3	0.6	-	毛留穴3	-	木733
56	6	漆塗柄鏡箱	152-166	J8-9	-	榫目	-	37.8	(22.7)	(0.9)	-	木釘4	18C後～	木232
56	7	刷毛	152-166	J8-9	-	追榫目	-	(15.2)	3.25	0.85	望月八郎左エ門	毛留穴3・両面墨書	18C後～	木287
56	8	刷毛	161-117	H1	-	追榫目	-	15.2	(4.6)	(0.8)	-	毛留穴上1・下3	17C	木822
56	9	竹管継手	152-135	A1	152-整地土3	みかん割削出し	-	(19.3)	(9.3)	(11.3)	-	道路下の造成土より検出	～17C中	木164
56	10	箆	161-117	H1	-	-	-	≒32.0	≒27.4	≒2.6	-	小編み縄4列残・胴部欠損	17C	木980
56	11	漆塗り紙	151-近世 造成土IV	J5	TR12:22層	-	≒0.8	(4.2)	-	-	-	赤色漆浸透	-	近世造成IV 25-1
56	12	独楽	152-2	C10	-	丸木削出し	4.0	-	4.3	5.6	-	軸孔径0.5cm・金属製軸	17C～近代	木77
56	13	独楽	151-108	J6	15層	-	4.2	-	-	1.7	炭化・つまみ上部径0.75cm・下部径0.6cm	18C後～	108-16-1	
56	14	人形	-	19	152-整地土2	みかん割削出し	-	9.2	2.1	2.25	-	手足用の貫通孔2	-	木600

第28表 指物等観察表

図版 番号	挿図 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺構の主 な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚			
57	1	折敷 脚	151-28	D8	下層	追榫目	(3.6)	(6.2)	(1.0)	全面黒色漆	18C後～	28-6-1
57	2	折敷 脚	151-28	D8	-	追榫目	(3.2)	(6.6)	(1.0)	全面黒色漆	18C後～	28-7-3
57	3	指物部材	151-3	C7-C8	-	榫目	26.0	(8.0)	(0.8)	表面:黒色漆・裏面:赤色漆・鉄釘1	～近代	3-9-13-14
57	4	指物部材	151-28	D8	上層	榫目	(26.6)	(8.2)	0.8	鉄釘1・木釘穴3・箱物	18C後～	28-5-1
57	5	指物部材	161-111	H1	-	榫目	12.3	14.1	0.5	赤色漆・木釘穴8・接着痕有	近世	木400
57	6	指物部材	151-TR3	D9	-	榫目	(26.7)	(8.1)	1.0	木釘穴3・ホゾ1	-	TR3-2-1
57	7	角材	151-28	D8	-	追榫目	26.0	3.0	2.7	側面貫通孔1	18C後～	28-2-6
57	8	指物部材	161-125	H1	-	板目	7.0	21.2	1.6	木釘3・ホゾ穴1	近世	木877
57	9	指物部材	151-3	C7-C8	-	榫目	28.4	2.8	1.2	炭化物付着・一部炭化・木釘2・貫通孔1・ホゾ穴2	18C後～	3-9-5
57	10	角材	161-117	H1	-	板目	26.7	1.85	0.75	表裏黒色漆・木釘穴3・木釘2	17C	木576
57	11	指物 把手	152-259	B1	下層(土壘3面)	榫目	36.4	2.7	1.2	ホゾ穴幅1.4cm・全面黒漆・ホゾ穴2	18C	木400
57	12	角材	151-28	D8	-	榫目	(36.6)	3.1	1.9	ホゾ穴2・穿孔11(うち貫通2)	18C後～	28-2-10
57	13	指物部材	-	C1	152-整地土5	板目	22.05	1.8	0.9	ホゾ穴2	-	木713
57	14	角材	151-28	D8	5層以下	榫目	(45.5)	(2.7)	(2.1)	釘穴13(うち木釘3)・障子の棧(框)か	18C後～	28-12-2

第29表 部材観察表

図版 番号	挿図 番号	器種	出土地点			木取り	法量 (cm)			備考	出土遺構の主 な遺物の時期	木製品No
			遺構番号	地区	層位		最大長	最大幅	最大厚			
58	1	不明部材	152-149	C1	-	榫目	20.6	11.2	4.1	楕円半球状・貫通孔3・中央孔周辺 柄等による摩耗痕	18C	木213
58	2	不明部材	151-102	D8-E8	26層	榫目	(9.8)	0.7	0.8	両側黒色漆有・中央挟り有	17C	102-8-3
58	3	不明部材	151-TR12	15-16-J6	-	榫目	(27.0)	(4.7)	2.2	全体炭化・ホゾ穴2・ホゾ穴3・木釘1	-	TR12-3-1
58	4	不明部材	152-整地土5	C1(西)	-	丸木	8.6	1.8	2.0	釘穴端部各2・自在鉤か	-	木709
58	5	不明部材	161-117	H1	-	榫目	9.9	1.0	0.5	楔状・木釘1・表一部裏全面黒色漆	17C	木814
58	6	不明部材	152-2	C1	-	榫目	7.4	1.2	1.0	貫通孔3・木釘2	17C～近代	木45
58	7	不明部材	152-2	B1	-	榫目	8.2	(3.7)	0.5	釘穴3	17C～近代	木724
58	8	不明品	161-111	H1	-	榫目	6.8	(4.2)	-	杓文字か	近世	木418
58	9	角材	152-2	C10	-	-	13.3	0.7	0.7	-	17C～近代	木94
58	10	不明部材	152-2北側	C1	裏込土	みかん割削出し	16.0	1.2	1.3	-	17C～近代	木62
58	11	棒材	152-166	J8-9	-	丸木削出し	(20.4)	1.3	1.3	-	18C後～	木273
58	12	刀形	152-2	C10	-	榫目	(31.4)	(4.1)	1.7	-	17C～近代	木95
58	13	不明部材	152-2	C10	上層	榫目	(14.3)	(2.9)	(0.9)	-	18C後～近代	木73
58	14	不明部材	152-2	C1	埋土	榫目	9.6	1.9	(0.9)	ホゾ穴3・庖丁柄か	17C～近代	木70
58	15	不明部材	152-224	J9-10-A10	-	みかん割削出し	8.8	直径	1.3	栓か	～17C中	木347

第4章 石製品

石製品は、発掘調査で確認したもののうち約490点を採取した。そのうち状態の良好なもの168点(うち基石14点は写真図版に掲載)を図示した。多種多様の製品のほとんどが笏谷石とみられる凝灰岩により作られているが、ごく一部にその他の石材が適宜使用されている。以下、容器類、暖房・調理具等、日用品・その他(硯、砥石等)、石瓦・建材、石塔類の項目に分けて詳述する。

1 容器類(第59～63図 第30表 写真図版第46)

容器類は、表面を平鑿で平滑に仕上げるものや丸鑿もしくは鶴嘴状の工具痕を残すものがあり、そのうち体部立ち上がり直線的で体部長が底部の短辺や径の半分程度までのものを盤(第59・60図)、体部長が底部短辺や径の半分を超えるものを槽(第61図)、体部立ち上がり緩やかに内湾するもの等を鉢(第62図1～7)とした。盤・槽の平面形は、おもに方形・円形系だが、洲浜形や扇面形等の特殊な形状になるものもある。これら容器類は、多くが一隅のみの破片となっており、分類の困難なものが多い。このほか、全体的に粗い成形のものや容器形のは容器状製品(第63図)とした。

盤(59-1～7、60-1～3) ほとんどが小片となるが、平面形は方形(59-1・2・4～6)、円形(60-1～3)、洲浜形とみられるもの等(59-3・7)があり、概ね3もしくは4か所に脚が付く。脚の形状は様々だが、体部外面に隙間なく連続する筋状工具痕による簾状装飾を施すもの(59-1～3・5)は、脚を体部とは区別して立体的で多様な形状に削り出している。体部外面と一連となる脚(59-6・7、60-2・3)は、小さく装飾性が少ない。そのうち体部表面を平滑に仕上げるもの(59-7、60-2)には、表面の脚付根あたりに底面の位置にあわせた罫書き線が残る。

比較的残りが良いのは円形(60-1～3)の方で、いずれも破片が足りないものの全容が窺える。60-1・2は底部中央以外の表面を平刃の工具により平滑に仕上げるが、60-3は平刃の工具による粗加工のみである。60-1は、内面のほぼ全体が煤けており、最終的にひで鉢として使用されたことが窺える。60-2は体部の一部が肥厚するが、機能は不明である。

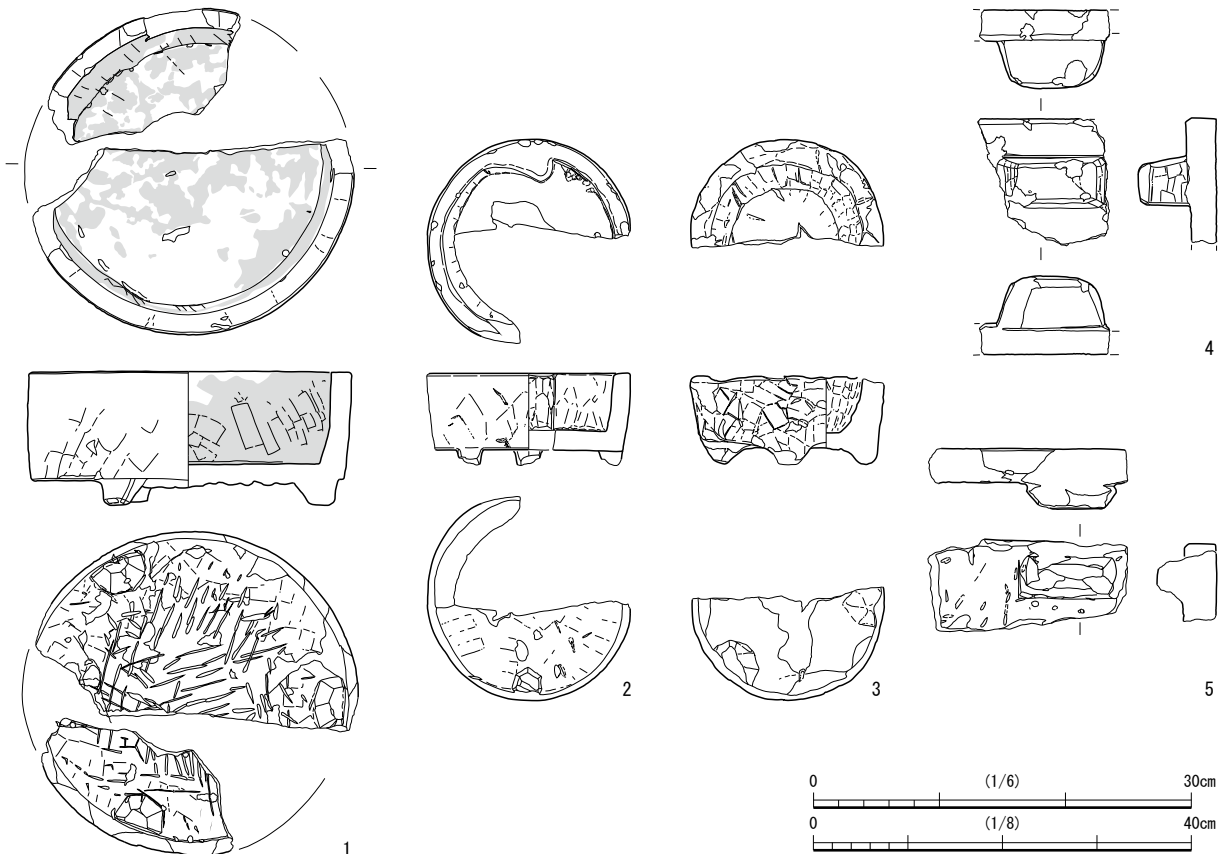
槽(61-1～10) ほとんどが小片であり、全容の窺えるものが少ない。平面形は、長方形または方形(1・2・4・6～9)が多く、ほかに扇面形(3・5)、円形(10)がある。また、ほとんどに脚が付く、体部外面と一連の脚と区別された脚があるが、どちらも小さく装飾性が少ない。

体部はいずれも平滑に仕上げられるが、8のみ各面の縁1.5cm程が平滑で、その内側をやや彫り窪めて簾状装飾が施される。8には一隅部分の口縁破片が残存しており、口縁の平滑部分が隅で交差するように外面に突起が付く。底のある容器ではあるが、外面の装飾と隅の突起から笏谷石製の井桁石を組んだ状態を模したようである。4・5は体部内面に仕切りが付く。4は長方形の一隅を肥厚し、仕切りを付けて、扇面形の別区画を設ける。5は仕切られた区画部分しか残存しないが、本体の形状が扇面形だったようである。このような仕切りのある槽形容器は一定量出土するものの用途が不明瞭であるが、煙草盆としての利用が想像される。9は外面に把手が削り出される。残存部分は少ないが、両小口に把手が付く、体部がやや厚めの槽形容器である。なお、60-4・5も体部外面に削り出された把手であり、口縁部しか残存しないため盤・槽の区別が出来ない。61-10は平面形が円形で、60-1・2とほぼ同様なつくりであるが、体部長が底面の半径を超える。

鉢(62-1～7) 体部が緩やかに内湾しつつ立ち上がるもの(1・3・5～7)のほか、直立気味に立ち上がるもの(2・4)がある。なお、1～4は大型品である。1は方形の各隅を面取り状に削り、



第59図 容器類①[盤] (縮尺1/6)



第60図 容器類②[円形盤・把手] (縮尺 1/6 1/8 : 1)

平面形が八角形のようになる。体部立ち上がりは急で、中程から口縁部まではほぼ直立となる。体部の内外は平滑に仕上げられ、外面から一連となる脚が付く。3は台付鉢だが、体部が欠損し残存しない。底部内面の状況から、体部は緩やかに立ち上がったものとみられる。台は底径約31cm・高さ約11cmで、外面は面取りされて平滑に仕上げられる。面取りの幅は約5cm(小)・約7cm(中)・約9cm(大)があり、中・大・中・小・中・大・中…と並ぶことから、大・小各3面と中6面が交互に配置されて一周したものと復元される。台の内面は比較的粗成形のままで筋状工具痕が残る。

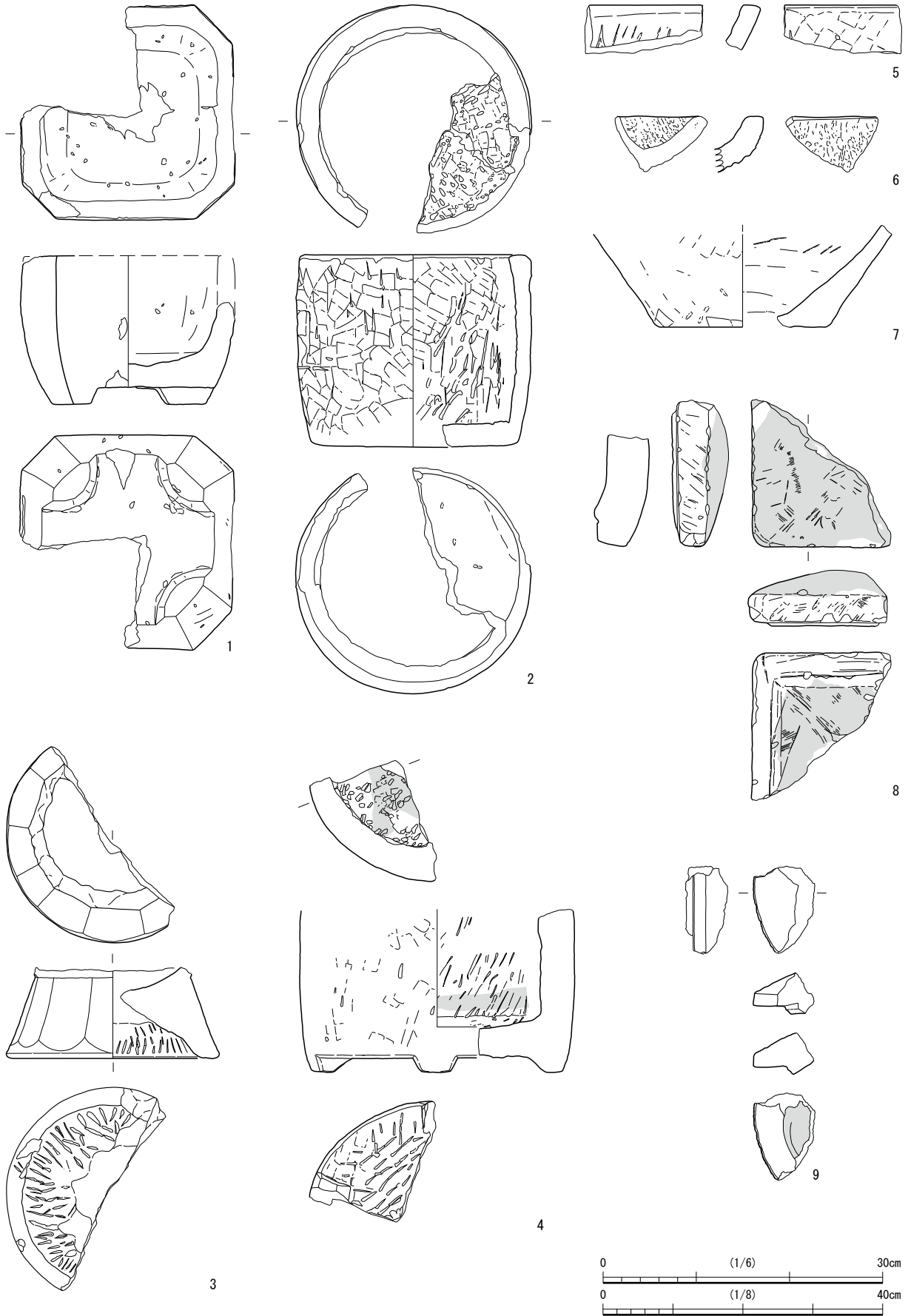
5・6は口縁端部の破片である。5は内外とも平滑に仕上げられており、内面には鶴嘴状工具痕が残るが、摺り目として付けた可能性もある。6は花崗岩製であり、内外に成形時の工具痕が残るが、口縁端面は平滑に仕上げられる。7は底部から体部にかけての破片であり、底径約18.5cmに復元される。内外とも平滑に仕上げられる。底面に円孔の痕跡が残るため、植木鉢に転用したことが考えられる。

2は多くの破片が足りないが全容が窺える。体部・底部とも外面は平滑に仕上げるが、内面は鶴嘴状工具痕が残る粗い成形となる。脚は確認されないが、底部の失われた部分に3つ脚があった可能性がある。4は底部から体部にかけての破片である。体部外面は平滑に仕上げるが、内面と底部は鶴嘴状工具痕が残る粗い成形である。体部外面と一連となる脚が付く。

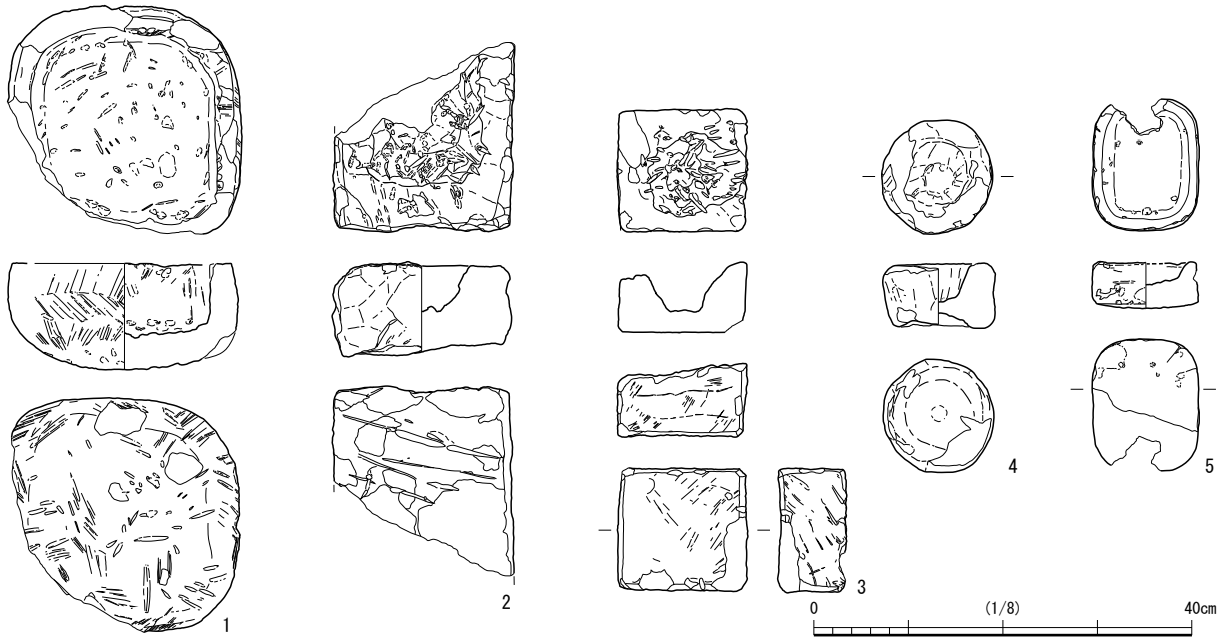
容器状製品(63-1~5) いずれも容器形ではあるが、すべてが容器としての機能を果たしたかは疑わしい。1・3~5は表面を平滑に仕上げるが、2はやや成形が粗い。1は平面形が隅丸方形の鉢形で、内外面とも平滑に仕上げている。2・3は平面形が方形でやや偏平な石材の広い一面を粗く窪ませたものである。窪みの内側は鶴嘴状工具痕が残る。底面は平底となる。4は平面形が円形で、上



第 61 図 容器類③[槽] (縮尺 1/6)



第 62 図 容器類④[鉢・蓋] (縮尺 1/8 : 1 ~ 4 1/6 : 5 ~ 9)



第 63 図 容器類⑤[容器状製品] (縮尺 1/8)

面から彫り窪ませるとともに、底面もやや浅めに窪ませる。5は平面形が隅丸長方形で、上面から同形に浅く彫り込む。底面は彫り込まず平底となる。

2 暖房・調理具等 (第 64～68 図 第 31 表 写真図版第 46・47)

暖房・調理具等として、行火、温石、風炉、竈、鍋掛重り、石臼、井戸関連遺物等を挙げた。

行火 (64-1～7) 蓋と身からなる行火で、バンドコと呼ばれる。楕円型 (1～3・5・6) と D 型 (4・7) が確認された。楕円型は平面形が楕円形で、体部がやや内湾気味に直立する。D型は平面形がD形で体部正面が平面となる。蓋 (1～4) はいずれも全体に平滑にするが、内側になる面の仕上げがやや粗い。身 (5～7) も外面は概ね平滑に仕上げ、体部内面はやや粗い仕上げだが、底部内面は仕上げが粗く鶴嘴状の工具痕が残る。楕円型・D型とも体部正面に長方形の煙出しもしくは内部確認用の孔が窓のように並ぶ。また、ともに身の上部は開口しており、返しを削り出した蓋が付属する。ただし、今回はセット関係となるものは確認されていない。楕円型は平底の中央を緩やかに窪ませており、底の縁全体が接地する。D型は正面の縁のみ底面の中央と同じように削り、正面以外の縁が接地して脚のように見える。

行火に似た形状の小形品 (64-9～11) と方形の蓋破片 (64-8) がある。小形品は楕円型行火の縮小形で、蓋 (9)・身 (10・11) とも装飾がない。蓋 (9) はより小型で、表面の仕上げにやや粗さが残る。身 (10・11) は内面にやや工具痕が残るが、全体に精緻で平滑に仕上げられている。方形の蓋破片 (8) は、約 1/3 程度の破片だと思われるが、全体に丁寧に平滑に仕上げられており、上面の周縁に沿うように蔓の延びる植物の模様が線刻される。煙出し孔の存在は不明だが、失われた中央部に開口した可能性はある。8・10・11 は、淡青緑色の良質な笏谷石で作られており、これまでに確認された類例 (第 146 集 福井城跡-JR 福井駅地点- 第 173 図 1～8、第 173 集 福井城跡-えちぜん鉄道地点- 第 85 図 5～8 等) から、行火ではなく香炉と捉えておきたい。蓋 (9) は実用的な寸法でなく、精製品でもないため、玩具的なミニチュア品の可能性が考えられる。

この他、やや大型の蓋 (66-1、62-8・9) がある。66-1 は一辺 11cm 以上のおそらく長方形で、



第 64 図 行火・香炉 (縮尺 1/6 : 1 ~ 7 1/4 : 8 ~ 11)

上面に3.5cm×5cm以上の煙出し孔があり、上面の隅には稜線が通る。62-8は一辺14cm以上の方形で、上面隅に稜が立たない。62-9は小片だが、円形で復元径約30cmとみられる。いずれも全体に平滑に仕上げられており、下面には行火の蓋と同様な返しが削り出される。また、返しの内側を中心に煤が付着しており、火鉢や火消し壺のようなものの蓋になることが考えられる。

温石 (66-2) 上部の大半を欠き、下端部のみの破片である。

風炉 (66-5) 円形の脚が付いた底部から体部にかけての破片であり、全容は不明である。内外とも平撃で仕上げているが、体部外面には連続する筋状工具痕による簾状装飾が施される。

竈 (66-3) 釜輪と焚口上部の破片である。釜輪の復元径が22cmの小型の移動式竈である。

鍋掛重り (66-4) 自在鉤等に吊った鍋のバランスをとるため、鍋の縁にかける重りである。猿の手の形状をしていることからサルと呼ばれる。

石臼 (65-1～7) 挽臼(1～6)と搗き臼とみられるもの(7)がある。1～3は粉挽臼上臼の破片である。いずれも使い込んで変形するが、特に3は磨り減っている。1は8分画7～8溝、2は8分画11～13溝で、3は播り目がほぼ消えている。4は粉挽臼下臼の破片である。播り目は8分画9溝である。5・6は茶臼下臼の破片である。5は播り面の破片であり、6は周縁の受け部の破片とみられる。7の搗き臼は、口縁部外形約40cm・内径約32cm、残存高約18cmで、体部下半を欠く。体部はやや内傾して直線的に立ち上がる。口縁部周辺や内面は、一部に鶴嘴状工具痕が残るものの概ね平滑に仕上げられる。しかし、外面は粗い成形で全体に鶴嘴状工具痕を残す。

流し (第67図) 現代の洗面台のような形状の製品で、流し部分の背後に方形の別区画が付属する。流しと方形部の間には高さ2cmほどの仕切りがあるが、仕切りの中ほど幅約5cmを削り落として、流し部分の水がすべて流れるように加工してあった。仕切り上方には、両側に板などを落とし込むための幅2cm前後の溝が彫られており、もともとは流し部分に水等を溜めることができたようだ。方形部の背後には6.0cm×7.5cmの排水孔が開く。また、方形部上端の、流し側から向かって左約3/5の部分が2.5～4.0cmほど低くなっており、仕切り付近にみられたのと同様な溝が彫られる。上澄みのみの排出を可能とする構造となっていたように思われるが、溝をどのように利用するのか判断しかねる。全体的に鶴嘴状工具痕の残る粗い成形であるが、流し部分の内面と口縁部周縁のみ平滑に仕上げる。ただし、平滑に仕上げた部分でも、粗成形時の鶴嘴状工具痕がまばらに残る。

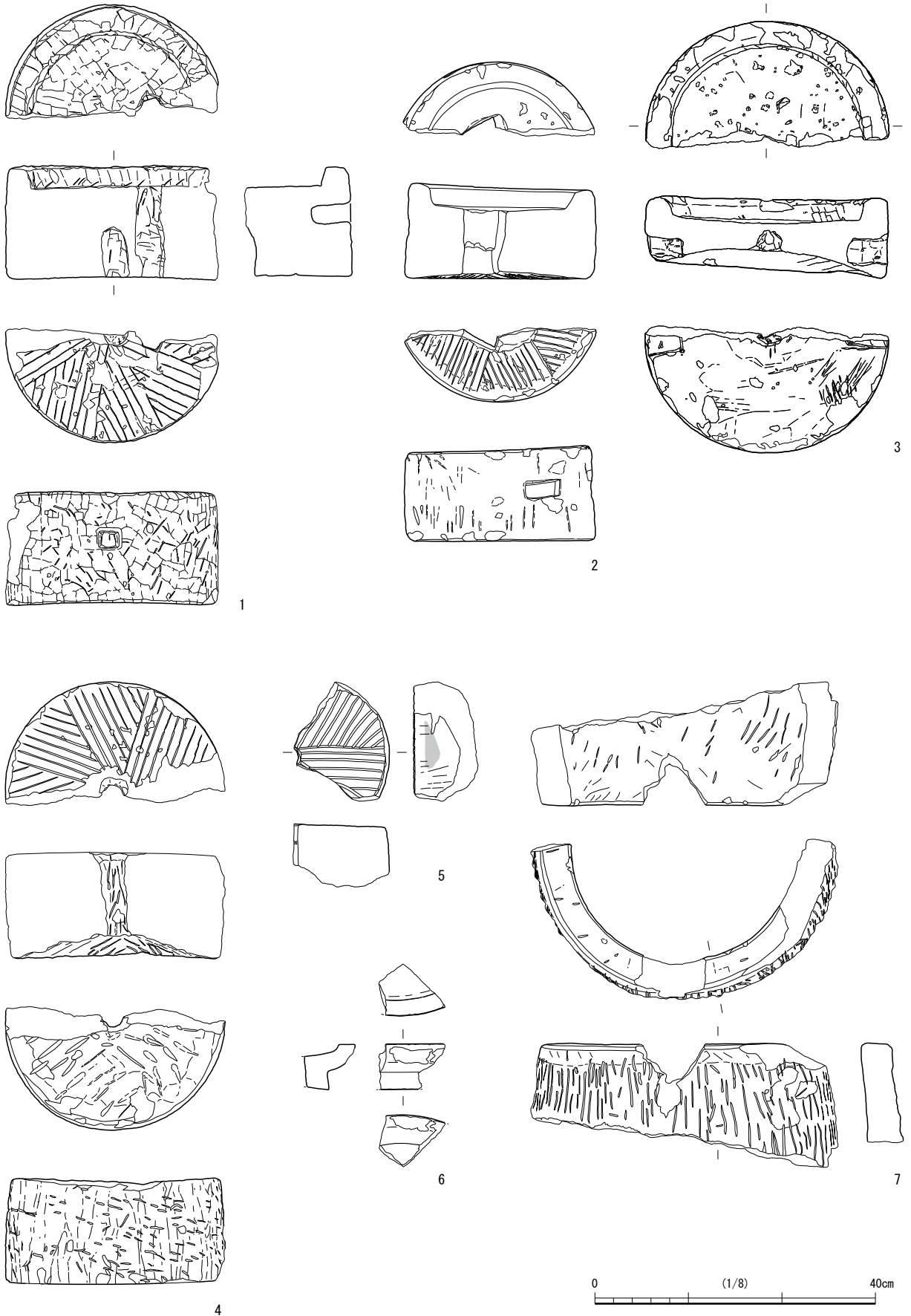
井戸関連遺物 (68-1～4) 1・2は井戸上部構造の井桁石である。井桁石は、木の角材を井桁状に組んで二段重ねにしたような通有の意匠であり、4枚を四角く組み合わせて使用する。角材が交差したような突起が両側につくものと、突起の付かないものの各2枚からなる。1は突起部分のみの破片であり、2は突起の付かないものの完形品である。

3・4は円形に削り貫いた井戸側の破片であり、上端に印籠継状の継ぎ手が削り出される。外面はやや粗い成形で、継ぎ手や内面は平滑に仕上げられる。継ぎ手の突起部分は、3が小口の外面側、4が内面側に付く。ただし、4は破損後に再加工されており、継ぎ手の突起部分の大半を削り取っている。使用目的は不明ながら、継ぎ手部分の削り方から縄等の先端に括り付けて重石のようにしたことが考えられる。

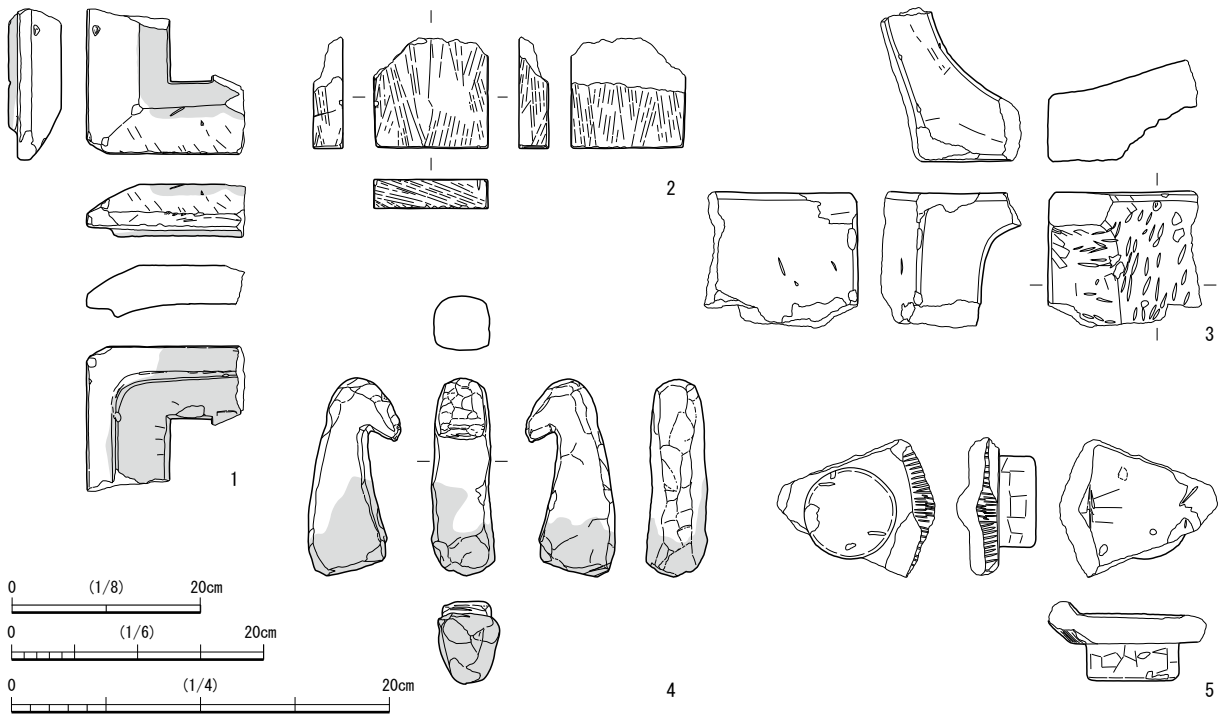
3 日用品・その他 (第69～73図 第32・33表 写真図版第47・48)

硯、砥石、重石・重り、甕蓋、手水鉢、基石等を日用品・その他の製品として括る。

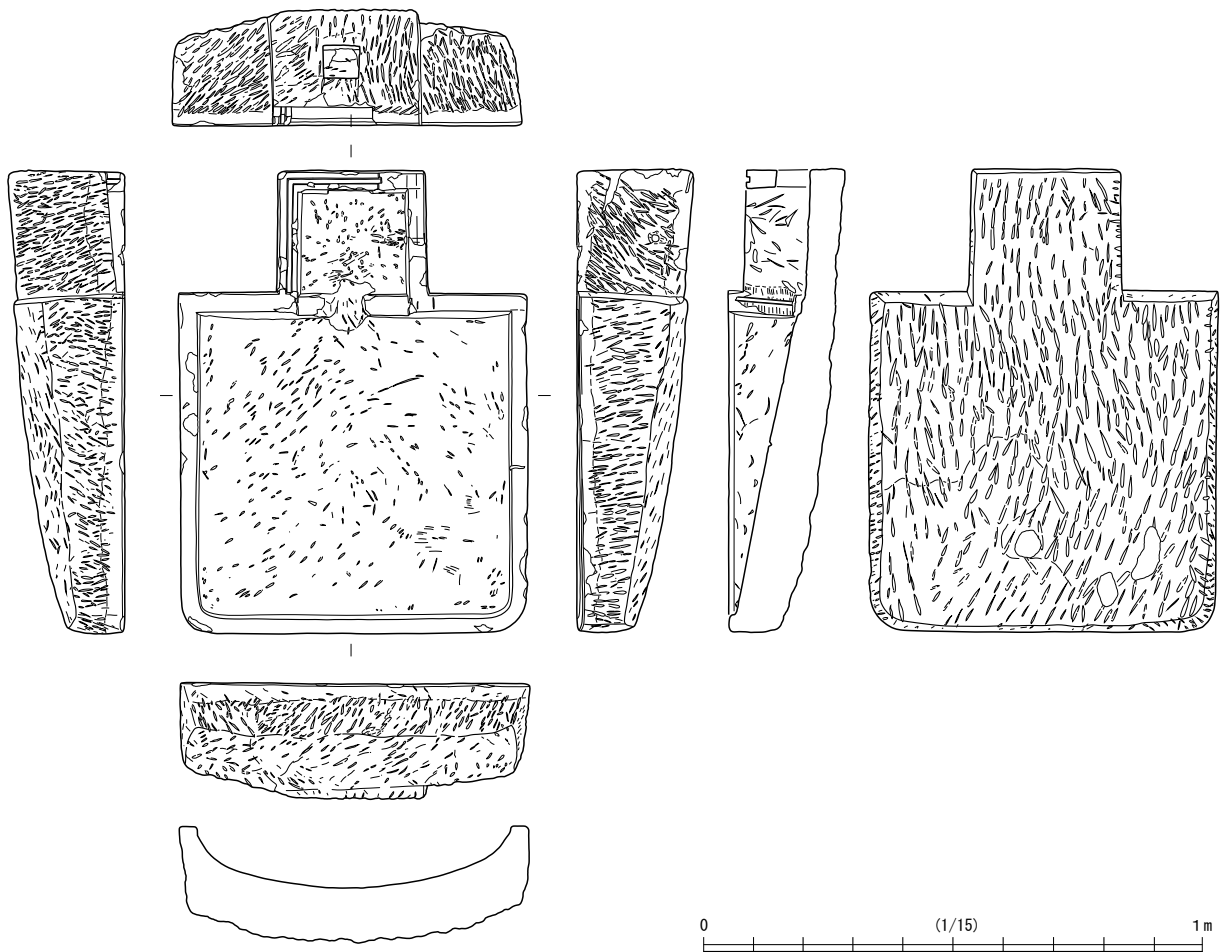
硯 (69-1～13) いずれも長方硯であり、四隅が角張るが、7のみ四隅が円くなる。墨池と陸を囲



第 65 図 石臼 (縮尺 1/8)



第 66 図 暖房・調理具 [温石・竈・鍋掛重り・風炉等] (縮尺 1/6 : 1・5 1/4 : 2・4 1/8 : 3)



第 67 図 流し (縮尺 1/15)

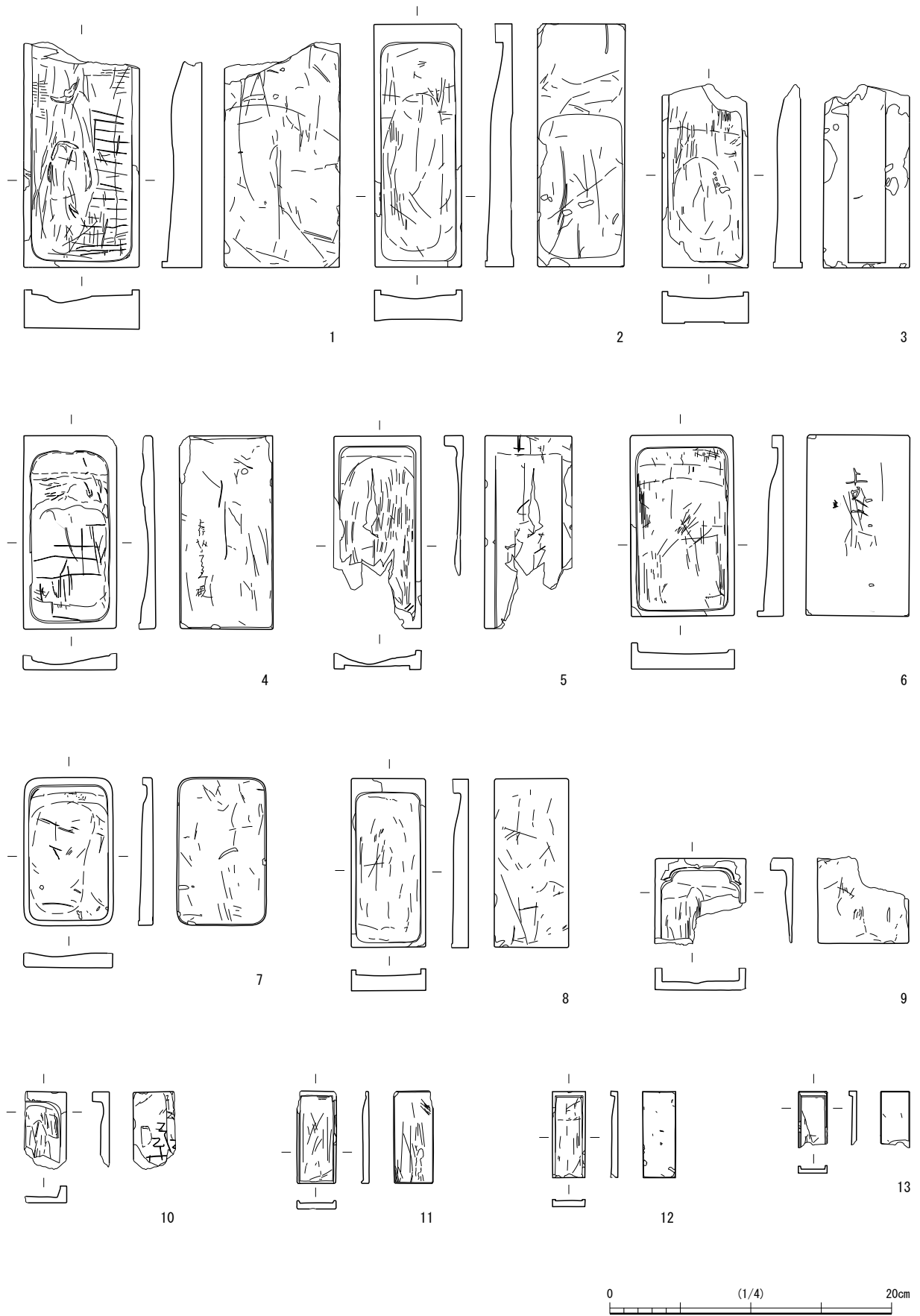


第 68 図 井戸関連遺物（縮尺 1/12 1/15 : 2）

む縁の内側の形状は、概ね隅丸長方形で、小型品（11・12・13）が長方形となる。その他、9は墨池付近の破片であるが、縁内側の形状が木瓜形ようになる。硯背は概ね平らだが、2・3・5には窪みや段差がある。2は硯背下半に隅丸長方形の緩やかな窪みが、3は硯背中央に縦長の長方形の浅い段差があり、5は硯背の両硯側の縁8mm前後を残して墨池側から緩やかに窪んで陸側へ抜けて硯側に段差が付く。完形のものの長さは17.3～6.2cmでやや大型のものから小型品までである。そのうち、破損品の復元値を含めて、長さは13cm後半代にややまとまる。幅は8.4～2cmまであり、そのうち6.2～6.5cmのものが多く、掲載した硯の約半数が該当する。最小となる13は、一部欠損し、4cm以上×2cmである。

また、4・6には文字が、10には文字あるいは記号が線刻されている。4は硯背左下に判読困難な文字列の下に「硯」と線刻されており、所有者の氏名だと思われる。6は硯背中央に「上□□」とあり、左隣に小さく「高（はしごだか）」の上半が線刻されることから、おそらく「上高島（嶋）」だとみられ、近江の高島石をさした後刻である。10は1/4以下の破片であり、「乙」または「そ」が複数といくつかの交差する線がみえるが、線刻の全容は不明である。

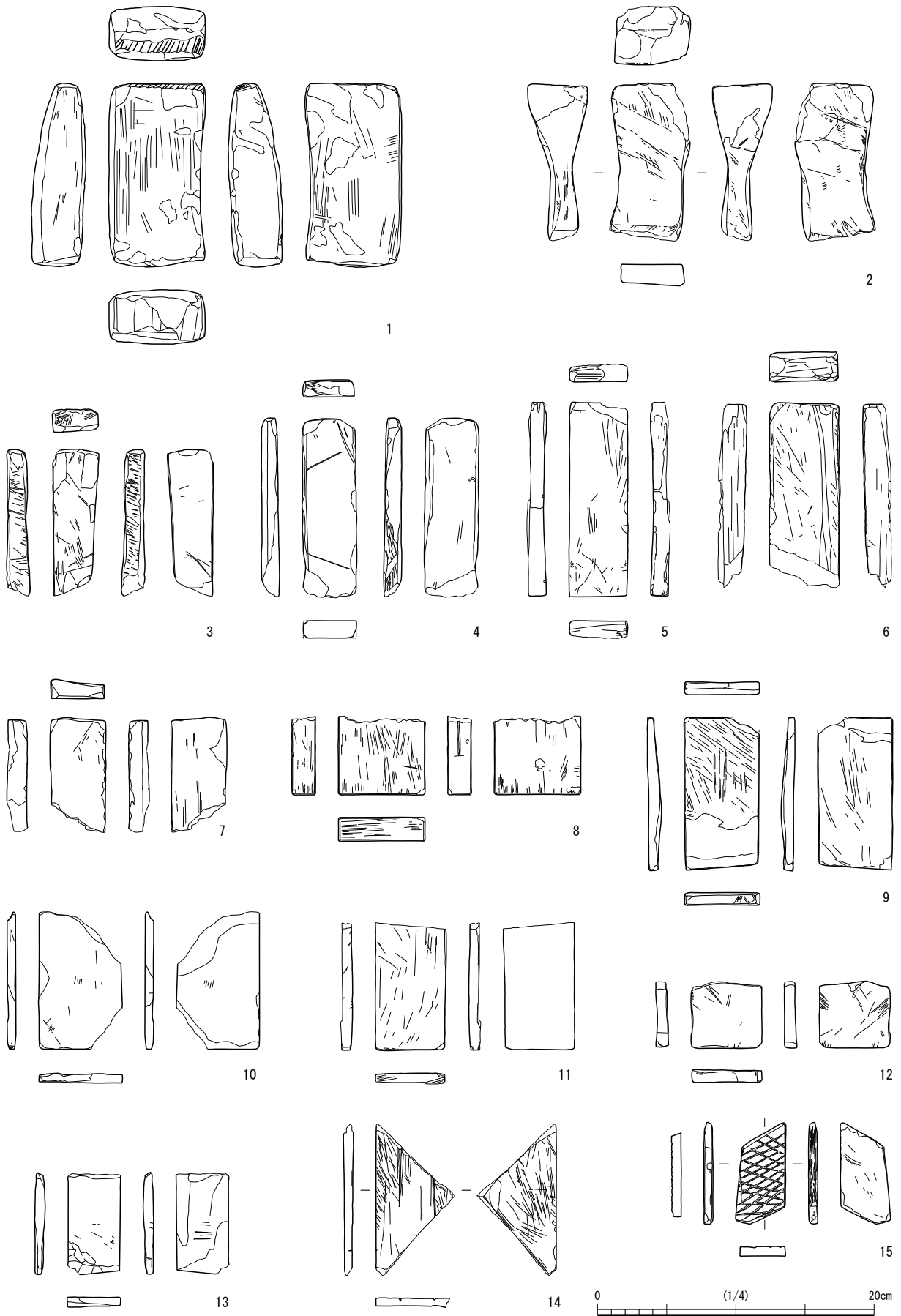
砥石（70-1～11・71-1～15・72-1～7） 砥石は、断面形が方形に近いもの（70-1・4・5）、断面形の短辺と長辺の長さの比が1：2以上の扁平なもの（71-3～15・72-1・2・4～6）、両者



第 69 図 硯 (縮尺 1/4)



第70図 砥石①(縮尺 1/4)



第71図 砥石②(縮尺1/4)

の間の断面形が長方形になるもの（70-2・3・6～9・11、71-1・2、72-3）、断面形が台形となるもの（70-10）等がある。平面形は概ね棒状か板状であるが、使用により変形するものも多い。71-2は小口形状すなわち元の断面形が方形に近い長方形であるが、研ぎ耗して中央部が扁平な断面形となっている。72-1・2・4～6は使用により小型化したものである。また、70-5や70-9の小口、71-14には筋状の研ぎ跡が付き、71-15は片面に格子状の線刻が入る。そのほか、72-7はやや形を整えた自然石で、そのまま土間等に据えて使用したとみられる大型品である。

重石・重り（73-1～7） やや扁平な円形で中央に孔を穿つもの等を重石とした（1～6）。表面はおもに平鑿でやや粗く仕上げるが、1は全体に平滑な仕上げで、2は鶴嘴状工具による粗い成形である。4は整った形状で方形孔が開く。5は石製丸瓦の再加工作品とみられる。6は中央孔がなく、周縁に筋状工具痕が残る。このほか、7は短い方柱形で、中央を少し抉る形状となる。組紐等の制作に使用する重り玉（槌の子）とみられる。

円盤型製品（73-8・9） 円盤形の用途不明品である。8は笏谷石製である。9は粘板岩製硯の陸から落潮にかけての破片を加工したものであり、中央に円孔が開く。どちらも表面を平滑に仕上げしており、周縁には細かな工具痕が残る。

甕蓋（73-11） 復元径39cm・厚さ6cmで、甕の蓋として利用されたと考えられる。全体に平鑿で仕上げられるが、粗成形時の鶴嘴状工具痕も一部残る。

手水鉢（73-12） 口縁部付近の破片である。口縁端部を印籠継状に削り出し、突出部分を玉縁状に整形する。残存する体部は内傾しており、おそらく全体の形状は球体に近い形が想像される。体部外面は鶴嘴状工具痕が覆い、内面は平滑に仕上げられるが粗成形時の鶴嘴状工具痕が残る。

碁石（写真図版第48 碁石1～14） 形状は真円に近いもの（10・11）もあるが、一部に歪な部分を残すものや歪なものが多い。真円に近い10・11は径2.15cm、厚さ4～5mmである。おもに粘板岩製の黒石であるが、色調の違うものや石材の異なるものがある。3は色調が黒いが、安山岩製のものである。11は色調が淡く、12～14は淡黄灰色～淡灰色であり、白石の代用とされた可能性がある。

4 石瓦（第74図 第34表 写真図版第49）

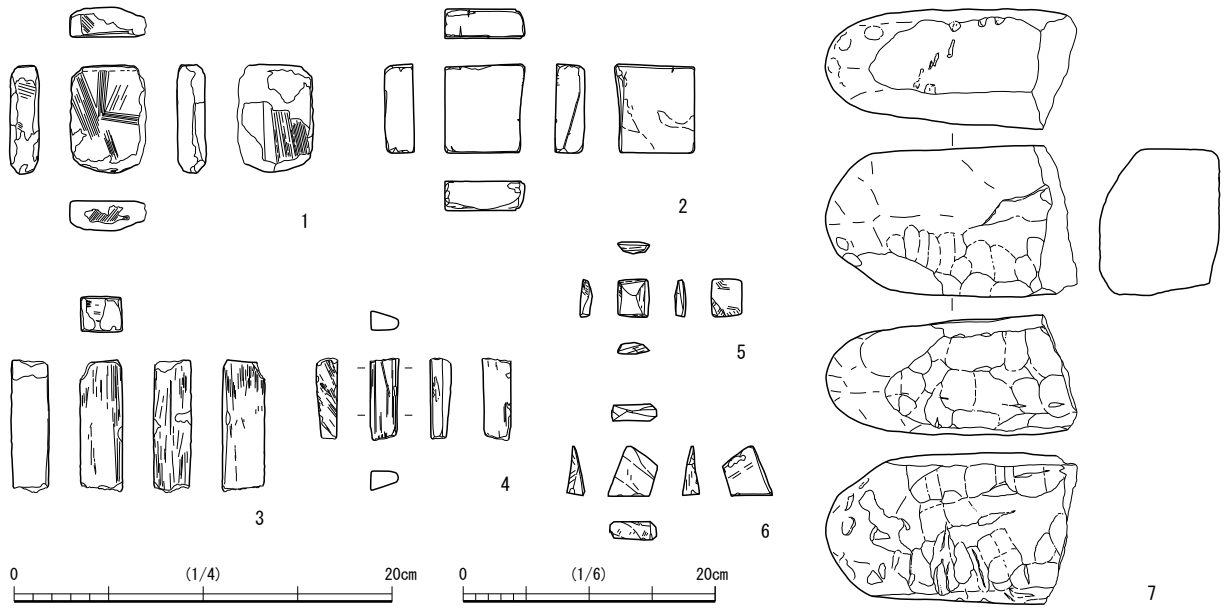
石瓦は、軒丸瓦（74-1）、丸瓦（74-2～4）、棟瓦（74-5～8）、その他の瓦（74-9・10）がある。いずれも表面を平刃の工具により平滑に仕上げるが、一部に鶴嘴状工具痕が残存する。下面の彫り込み部分はおもに粗成形のまま、内側全体に鶴嘴状工具痕が残る。

軒丸瓦（74-1） 棟側の連結部を欠くが、釘掛孔の痕跡が認められる。瓦当は無紋で、本体に対してやや鋭角気味に付く。

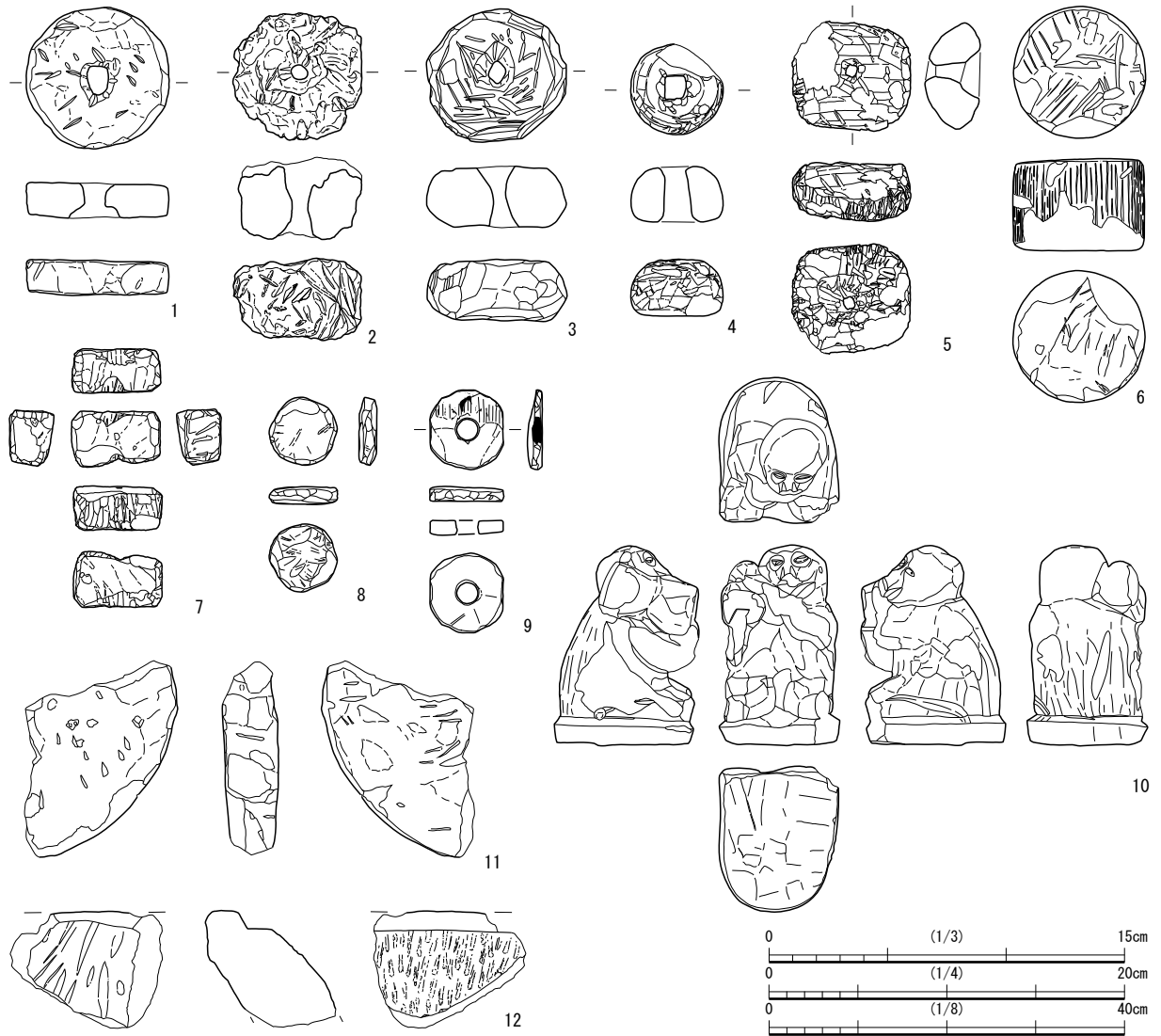
丸瓦（74-2～4） いずれも棟側の連結部付近の破片であり、瓦当の欠損した軒丸瓦との区別がつかない。しかし、下面に釘掛孔を持つ4は、軒丸瓦の一部だった可能性がある。連結突起の形状は、上面が比較的平らなもの（2）と上面中央に稜が付き山形になるもの（4）がある。

なお、軒丸瓦を含む丸瓦の幅は、12.6cm（4寸1分）、14.0～14.8cm（4寸6分～4寸9分）がある。

棟瓦（74-5～8） 5～7は角型、8は丸型で、角型には上面中央に稜が付く有稜式（7）と上面が滑らかな無稜式（5・6）がある。また、棟瓦は両側が連結部となるが、連結突起が上面側に削り出すのをオス側、連結面を削り込み突起が下面側となるのをメス側とする。5はメス側を欠き、オス側の連結突起も欠く。下面の彫り込み内に、平らに削り込んだ部分があり、他の建築部材等に組み合わせて固定したことが考えられる。6は、おそらくオス側を欠いた破片を、棟止瓦として加工したも



第72図 砥石③(縮尺 1/4 1/6 : 7)



第73図 日用品・その他 (縮尺 1/8 : 1~7・11 1/4 : 8・9・12 1/3 : 10)



第74図 石瓦 (縮尺 1/10)

のとみられる。破断面を平刃の工具により平らに仕上げている。7はオス側を欠く。左側側面を削り、上面角を丸く加工している。8は両連結部を平らに加工しており、側面に方形孔を穿つために、下面からも彫り窪めている。再加工して瓦以外の用途に使用したと考えられるが、用途不明である。

その他の瓦(74-9・10) 9は鳥衾の瓦当部分の破片とみられる。ただし、丸瓦等の連結突起を削り、再加工したもののようなものである。10は鬼板もしくは棟止瓦の破片とみられる。正面は、傷だらけとなるが、本来は無紋のようである。背面には棟石に連結するための柄穴状の削り込みがある。

5 建材 (第75・76図 第34表 写真図版第49)

建材は、礎石(75-1~6)、敷居石(75-7)、石樋(76-1・2)等がある。そのうち、再加工品を含む礎石等の比較的小さな製品は概ね全体を平滑に仕上げているが、石樋等の大型品は使用時に露出して目につくところは平滑に仕上げるが、見えない部分は粗い成形のままとなる。

礎石(75-1~6) 2・5は、もともと礎石や束石として製作されたものと思われる。3もその可能性があると思われるが、柄穴の位置が中央にない。1は破損した石製の丸瓦か棟瓦を再加工したようである。4は礎石の可能性はあるが、用途不明である。6も本来の用途は不明だが、柄穴を穿ち礎石として再利用したようである。

石樋(76-1・2) 石樋は、外面が概ね粗い成形で、ほぼ全体に鶴嘴状工具痕が残る。内面にも鶴嘴状工具痕が残るが、体部外面の口縁部付近から内側は表面を平滑に仕上げている。

用途不明品(75-7・8 76-3・4) 75-7は、その形状から敷居石としたが、用途不明品である。類似するものに大安禅寺の千畳敷と呼ばれる歴代福井藩主墓所の門にみられる敷居があるが、その溝は1条である。75-8は、正面と上端は平刃の工具で平滑に仕上げるが、背面の仕上げはやや粗い。正面に5条以上の筋彫りがあり、筋彫り内を黒漆状のもので着色する。元の形状や寸法が不明だが、本丸石垣の土塀のように、建物等の腰板として使用したのかもしれない。76-3は、扁平な長方形で片側に継ぎ手があり、同様なものを組み合わせたと考えられる。76-4は、石製平瓦の形状であり、寸法比も同様である。ただし、約1.5倍の寸法であり、通常の製品とは異なる。

6 石塔類 (第77図 第35表 写真図版第49)

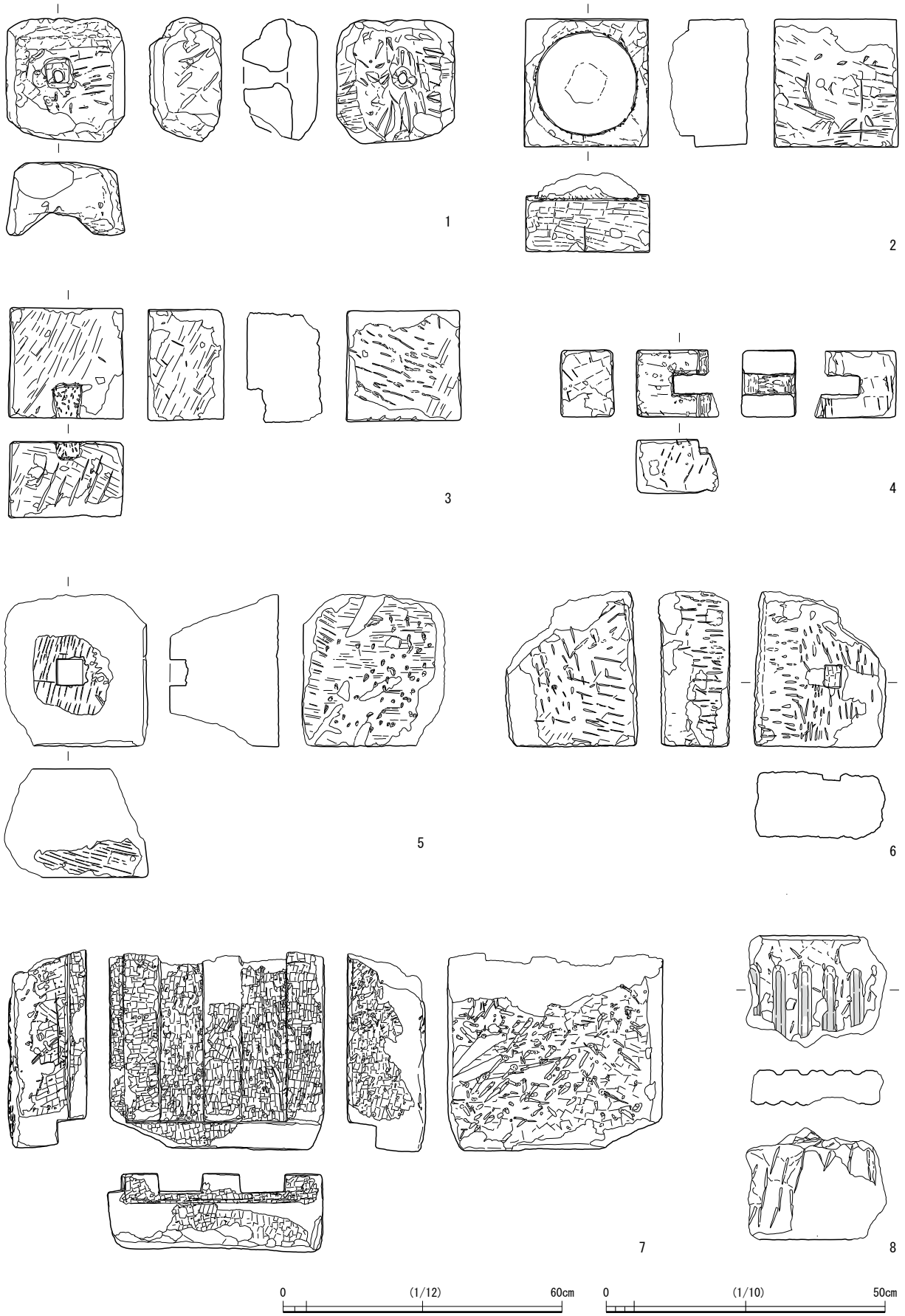
五輪塔や灯籠の一部とみられる破片、石仏、狛犬がある。

石塔類(77-1~4) 五輪塔各部(1~3)と、小型の基礎(4)がある。1・2は空風輪であり、ともに梵字や月輪は見られない。1は平刃の工具による整形痕が残る。2は全体に残存状態が悪い。3は大半を欠くが、正面に「地」の線刻文字が見え、地輪だと判断される。「地」の下の文字は破損のため不明である。左には「五月四日」と線刻される。上面から中ほどに及ぶ内削りがある。4は正面に横長の長方形を彫り込み、その中央を縦方向の2条の筋彫りで分割する。それ以外の装飾はない。

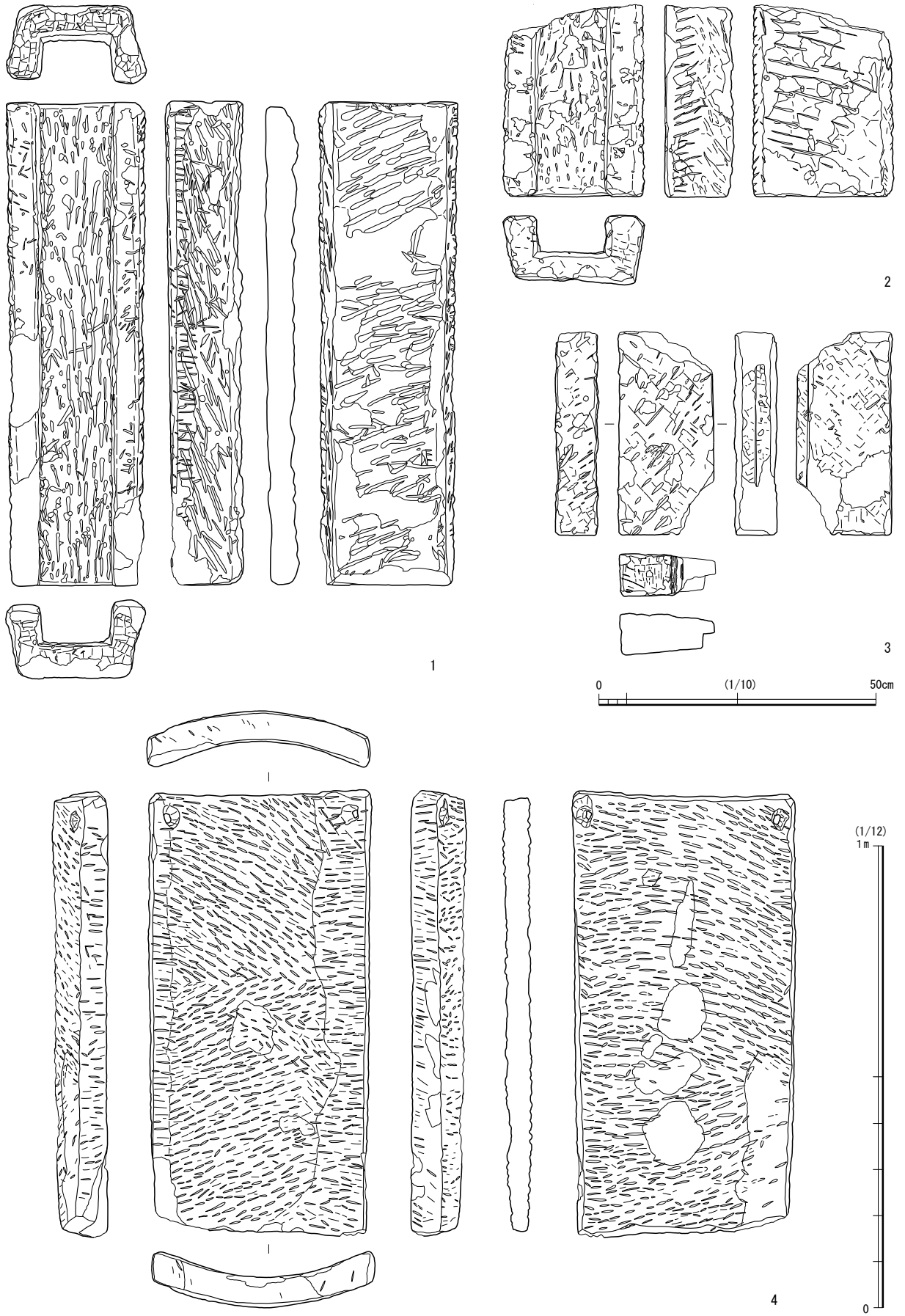
灯籠(77-5・6) 5は四角形の笠で、中央に円孔が貫通する。6はやや歪な円形の笠で、頂部に円形の隆起がある。ともに全体を平滑に仕上げるが、6は周縁に簾状装飾が施される。

狛犬(77-7) 小型の狛犬である。最小限の削り込みで手足や顔を表現する。髪の毛の表現はない。

石仏(77-8・9) 8は蓮華座に立つ地藏菩薩が浮き彫りされる。右手に錫杖を持つ。左手は胸の前に伸ばすが、手首から先を欠く。おそらく掌に宝珠を載せていたと思われる。光背は円く筋彫りされる。右に「道□(圓カ)禅門」、左に「天文九年庚子五月朔日(1540年)」と線刻される。9は、8と同様な石仏の破片とみられる。大部分を欠くため不明瞭だが、浮き彫りされた仏の足元から蓮華座にかけての部位となるようである。右には「回」のような線刻が見えるが判読できない。



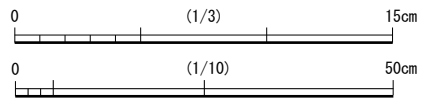
第75図 建材 [礎石・敷居石等] (縮尺 1/10 1/12 : 7)



第76図 建材 [石樋等] (縮尺 1/10 1/12 : 4)



第77図 石塔類 [石仏・狛犬等] (縮尺 1/10 1/3 : 7)



第4章 石製品

第30表 容器類観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	出土地点			計測値 (cm)				(g) 重	備考	出土遺構の主 な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	縦	横	高	厚				
59	1	盤	J8		152-整地土2	(12.8)	(15.8)	14.0	3.0	1602	方形 脚付 外面籬状装飾		S152-327
59	2	盤	15・6・J5		151-表土	(12.0)	(14.0)	(9.0)	1.7	740	方形 脚付 外面籬状装飾		S151-43
59	3	盤	C1	152-5	上面	(15.8)	(16.9)	9.8	3.7	1327	円形? 脚付 外面籬状装飾	18C後半~	S152-36
59	4	盤	C1	152-2		(7.1)	(7.5)		2.1	148	方形 脚付 外面籬状装飾	17C~近代	S152-52
59	5	盤	A6		151-表土	(9.4)	(8.4)	(9.2)	2.0	454	方形 脚付 外面籬状装飾		S151-42
59	6	盤	A9		152-整地土2	(7.6)	(10.3)	(6.2)	2.6	287	脚付		S152-56
59	7	盤	J8		152-整地土1	(20.0)	(24.8)	10.5	3.0	2994	洲浜形 脚付		S152-229
						口径	底径	高	厚	重			
60	1	盤	C10	152-32	第3砂利面下	(34.5)	(33.1)	14.2	2.1	5162	円形 脚付	17C前~	S152-274・275
60	2	盤	B10		152-整地土5	(16.2)	(14.9)	7.4	1.5	674	円形 脚付 内側に突出部		S152-29
60	3	盤	B10	152-77		(15.2)	(14.0)	7.0	1.8	553	円形 脚付	18C後半~	S152-54
						縦・奥行	横・幅	高	厚	重			
60	4	把手	B9		攪乱	(10.1)	(10.3)	(6.4)	(2.25)	491	槽? 方形		S152-41
60	5	把手	J6	151-107	3層	(7.3)	(15.7)		2.65	518	盤? 方形	18C後~	S151-63
61	1	槽	D8	151-28		24.2	(19.5)	14.1		3550	方形 脚付	18C後~	S151-45
61	2	槽	B10		152-整地土4	(11.2)	(15.0)	12.4	2.6	1035	方形 脚付	17C前半	S152-31
61	3	槽	A9		152-整地土2	(7.6)	(9.0)	8.4	1.2	232	方形 脚付		S152-55
61	4	槽	I8		152-整地土2	(7.5)	(10.9)	5.85	1.6	320	方形 脚付 仕切りあり		S152-49
61	5	槽	I8		152-整地土2	(6.7)	(6.7)	(3.6)	1.8	94	方形 脚付 仕切りあり		S152-53
61	6	槽			151-排水溝	(6.75)	(9.5)	8.45	2.0	213	方形 脚付		S151-41
61	7	槽	J8		152-整地土2	(6.6)	10.2	4.8	1.0	193	方形 脚付		S152-325
61	8	槽	A6		151-TR17	(13.1)	(19.2)	(5.2)	1.5	481	井桁石形 籬状装飾		S151-35・ 39・53
61	9	槽	A10		152-整地土1	(11.7)	(10.7)	10.7	1.8	497	方形 把手付		S152-27
						口径	底径	高	厚	重			
61	10	槽	D8	151-28	5層	(19.9)	(17.5)	10.5	1.9	945	円形 脚付	18C後~	S151-48
						縦・奥行	横・幅	高	厚	重			
62	1	鉢	C8		151-表土	30.2	30.4	21.2	3.0	9450	方形 (八角形) 脚付		S151-107
						口径	底径	高	厚	重			
62	2	鉢	C7・8	151-3		33.7	(29.5)	(27.4)	3.2	7067	円形 寸胴形	~近代	S151-46・47 ・119・121
62	3	鉢	C8		151-表土		(30.4)	(12.8)	4.0	4800	台付鉢 台のみ		S151-139
62	4	鉢	C1	152-38			(39.3)	(23.3)	4.1	3650	円形 寸胴形	18C後~	S152-230
						縦・奥行	横・幅	高	厚	重			
62	5	鉢	B1	152-2	下層	(5.2)	(12.2)		1.9	203	口縁のみ	17C~近代	S152-220
62	6	鉢	-		151-TR18 12	(5.9)	(9.9)		2.5	228	口縁から体部		S151-86
						口径	底径	高	厚	重			
62	7	鉢	B1	152-2			(17.8)	(10.9)	5.0	1184	植木鉢に転用	17C~近代	S152-40
						縦・奥行	横・幅	高	厚	重			
63	1	容器状 製品	J8		152-整地土2	18.1	18.5	8.4	2.5	1480	隅丸方形		S152-324
63	2	容器状 製品	A10		152-整地土2	(15.0)	13.7	6.9	3.5	1425	長方形		S152-39
63	3	容器状 製品	C1		152-表土	10.2	9.7	5.7	3.0	707	方形		S152-45
						口径	底径	高	厚	重			
63	4	容器状 製品	C4	161-20		7.5	7.0	5.0	2.5	363	円形 下面内刳	~18C後	S161-16
						縦・奥行	横・幅	高	厚	重			
63	5	容器状 製品	B10	152-281		(10.4)	8.4	3.7	1.8	303	隅丸長方形 (楕円形)	17C前	S152-329

第31表 暖房・調理具等観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	出土地点			計測値 (cm)				(g) 重	備考	出土遺構の主 な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	縦	横	高	厚				
64	1	行火 (蓋)	J9	152-32	第3砂利面下	(18.8)	(15.1)	(3.7)	2.5	1083.0	O型 返し付	17C前~	S152-242
64	2	行火 (蓋)	J10	152-277		16.2	20.8	4.5	3.3	1324.0	O型 返し付	~18C前	S152-238
64	3	行火 (蓋)	C1	152-292		16.9	(19.2)	3.7	2.5	1043.0	O型 返し付	17C前	S152-443
64	4	行火 (蓋)	E-F10	151-5		11.95	14.05		3.3	519.0	D型 返し付	~18C中	S151-127
64	5	行火 (身)	J8		152-攪乱	19.5	24.6	14.6	(2.4)	3470.0	O型		S152-265
64	6	行火 (身)	-		151-整地土	(1.8)	(13.3)	(6.05)		152.0	O型 煙出・灯り見部分		S151-52
64	7	行火 (身)	C1		152-整地土3	15.9	19.5	(12.6)	(2.6)	1942.0	D型		S152-442
64	8	香炉 (蓋)	C1	152-2		9.1	6.2	2.3	2.2	148.19	方形 線刻文様 (蔓系植物)	上層: 18後~ 下層: 17C~	S152-87
64	9	香炉 (蓋)	D4		161-表土	4	4.65	1.7	(1.1)	23.84	小型 O型行火形 ミニチュア品		S161-15
64	10	香炉 (身)	J8・9	152-166		6.7	7.9	3.85	0.8	205.31	小型 O型行火形	18C後半~	S152-57
64	11	香炉 (身)	C8		151-TR10	6.3	7.8	(3.15)	(0.6)	130.09	小型 O型行火形		S151-125
66	1	蓋	B1	152-2	上層	(12.6)	(11.5)	4.2	2.7	506.0	方形 煙出し・返し付	18後~近代	S152-272
62	8	蓋	C7		151-整地土	15.5	14.8		6.3	1073.0	方形 返し付		S151-57
62	9	蓋	A6		151-攪乱1	9.4	6.6	(4.5)	2.5	196.0	円形 返し付 復元径約30cm		S151-85
66	2	温石			151-整地土	(5.85)	6.05		1.55	114.41	下部破片		S151-21
66	3	竈	J5		151-排水溝	(15.4)	(13.6)	(14.1)	6.0	2605.0	釜輪~焚口破片		S151-69
66	4	鍋掛重り	A9		152-整地土2		3.25	10.5	4.0	139.49	サル		S152-306

第4章 石製品

図面番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値 (cm)				(g)	備考	出土遺構の主な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	縦	横	高	厚				
66	5	容器 (風炉)	-		151-TR5 3層	12.5	11.0	6.3		555.0	外面籬状装飾		S151-40
65	1	粉挽臼	J10		152-整地土 3	(16.2)	(30.5)	16.4		10500.0	上白 軸孔・物入・把手孔 8分割7~8溝	17C 後半	S152-77
65	2	粉挽臼	G6		152-攪乱	(10.5)	(27.2)	13.7		5436.0	上白 物入・把手孔 8分割 11~13溝 花崗閃緑岩		S152-76
65	3	粉挽臼	D8	151-28		(18.2)	34.7	11.7		6213.0	上白 軸孔・把手孔2	18C 後半~	S151-135
65	4	粉挽臼	B10	152-319		(17.6)	31.3	15.1		6300.0	下白 8分画9溝	17C 前	S152-75
65	5	茶臼	-		151-TR18 17層	(17.1)	(13.7)	(9.3)		2565.0	下白 軸孔 石英閃緑岩		S151-138
65	6	茶臼	I8		152-整地土 2	8.9	5.5	(6.6)	2.4	347.7	下白 受部のみ		S152-80
65	7	搗き臼	C1	152-86	152-整地土 2		(41.0)	(17.5)	5.1	6300.0	口縁付近破片	18C 後半~	S152-70・71
67		流し	C1	152-42		92.0	69.4	23.2	7.5	12045.0	流し 浄水区画付	18C 後半~	S152-303
68	1	井桁石	J6		151-TR19 2層	(10.4)	(18.1)		(9.1)	1854.0	突起部分のみ		S151-140
68	2	井桁石	C8	151-3	井戸石組内	37.0	92.2		10.0	52500.0	突起部分のない側 完形		S151-153
68	3	井戸側	C1		152-整地土 1	(19.6)	(34.2)		7.5	5300.0	円形列り貫き式 印籠接ぎ柄 接合部に漆喰残存		S152-73
68	4	井戸側	J5		151-排水溝	(22.2)	52.2		8.6	9900.0	円形列り貫き式 印籠接ぎ柄 再加工品		S151-103

第32表 硯・砥石観察表

図面番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値 (cm)			(g)	備考	出土遺構の主な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高・厚				
69	1	硯	J6		表土	(15.9)	8.2	2.81	593.0			S151-111
69	2	硯	J8・9	152-166		17.25	6.15	2.2	402.5		18C 後半~	S152-187
69	3	硯	A10		152-整地土 3	(13.0)	6.12	2.19	276.44		17C 後半	S152-186
69	4	硯	C1		152-整地土 3	13.75	6.65	1.35	172.7	線刻 (文字) 判読困難 所有者氏名	17C 後半	S152-188
69	5	硯	C1		152-整地土 3	13.6	6.17	1.37	102.93		17C 後半	S152-185
69	6	硯	J9	152-157		12.88	7.3	1.84	266.11	線刻 (文字) 「上□□ (高嶋カ)」	18C 後半~	S152-406
69	7	硯	G・H7	152-154		10.52	6.33	(1.1)	132.23		18C 後半~	S152-407
69	8	硯	I6	151-121		12.0	5.29	1.54	157.87		18C 中~	S151-110
69	9	硯	J9		152-整地土 2	(6.15)	6.45	1.7	61.06			S152-194
69	10	硯	J9		152-整地土 3	(5.5)	(2.98)	1.2	24.88	線刻 (文字または記号) 「乙」または「そ」など	17C 後半	S152-196
69	11	硯	C8		151-TR10	6.6	2.8	0.6	19.78			S151-24
69	12	硯	A10		152-整地土 5	6.11	2.34	0.5	16.26			S152-191
69	13	硯	D4	161-1		(4.0)	2.05	0.5	6.22		19C	S161-12
70	1	砥石	F9		古代以降の堆積土	15.7	3.2	2.7	217.0			S151-7
70	2	砥石	A10	152-236		14.2	5.2	4.5	525.0		近代	S152-353
70	3	砥石	B10		152-整地土 5	20.9	4.5	3.4	342.0			S152-30
70	4	砥石	J9		152-整地土 3	5.0	11.8	3.8	355.0		17C 後半	S152-118
70	5	砥石		地点不明		(10.18)	7.5	6.9	745.0			S152-126
70	6	砥石	A6・7		表土	(10.0)	4.4	3.8	251.0			S151-10
70	7	砥石	C3		包含層	9.9	3.85	3.25	157.98	角柱状		S161-1
70	8	砥石			151-TR18 32層	8.9	2.7	1.8	86.0			S151-147
70	9	砥石	C1		152-整地土 3	(9.7)	4.65	3.7	288.0	角柱状	17C 後半	S152-124
70	10	砥石	C1	152-68		(9.8)	4.4	2.8	113.84		18C 後半~	S152-97
70	11	砥石	A9	152-266		(9.2)	3.73	2.47	133.0		~17C 中	S152-113
71	1	砥石	J10		152-整地土 3	13.25	6.9	3.9	587.0		17C 後半	S152-127
71	2	砥石	J10		152-整地土 3	11.3	5.8	4.3	254.0		17C 後半	S152-123
71	3	砥石	B1		152-整地土 4	(10.55)	3.3	1.7	87.59		17C 前半	S152-379
71	4	砥石	I9	152-32	第3砂利面下	12.9	3.9	1.25	120.56		17C 前~	S152-395
71	5	砥石	A10		152-整地土 3	14.1	4.2	1.3	136.47		17C 後半	S152-101
71	6	砥石	J9		152-整地土 2	(13.3)	5.1	2.0	246.12	板状		S152-125
71	7	砥石	B1		152-整地土 4	(8.3)	4.0	1.4	74.79		17C 前半	S152-362
71	8	砥石	J 8・9	152-166		5.7	6.25	1.7	108.0	板状	18C 後半~	S152-21
71	9	砥石	J9		152-整地土 3	11.0	5.3	0.85	100.0	板状	17C 後半	S152-109
71	10	砥石	B1		152-整地土 4	(9.9)	6.0	0.7	70.91		17C 前半	S152-378
71	11	砥石	J10		152-整地土 3	(9.2)	5.1	0.8	72.12		17C 後半	S152-100
71	12	砥石	J6		表土	(4.8)	5.1	0.8	43.67			S151-13
71	13	砥石	I9		152-整地土 2	(7.3)	3.8	0.8	43.0	板状		S152-106
71	14	砥石	B1		152-整地土 1	10.9	5.7	0.7	42.83	板状 筋砥石		S152-105
71	15	砥石	B1	152-305	黒色層	7.2	3.5	0.68	27.98	板状 線刻文様	~17C 中	S152-405
72	1	砥石	J9	152-210		5.7	4.0	1.5	52.61		~17C 中	S152-392
72	2	砥石	C1	(151-2)	攪乱	4.7	4.25	1.55	67.74			S152-453
72	3	砥石	B10	152-281		(6.9)	2.2	1.9	60.0	角柱状	17C 前	S152-122
72	4	砥石	E 5		攪乱	(4.3)	(1.5)	1.1	10.29	板状		S161-4
72	5	砥石	I9	152-32	第2砂利面下	2.0	1.65	0.65	2.15		17C 前~	S152-134
72	6	砥石	I8		152-整地土 2	(2.63)	2.58	0.9	5.36			S152-153
72	7	砥石	F9・10	151-300		(19.9)	12.0	9.5	3038.0	大型 ほぼ自然石のまま	~17C 中	S151-134

第33表 日用品・その他観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	出土地点			計測値 (cm)				(g) 重	備考	出土遺構の主 な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高	厚				
73	1	重石	G7		152-整地土1	16.0	15.9	3.8		1319.0	環状		S152-296
73	2	重石	C1		152-整地土2	14.4	14.5	9.2		1881.0	環状		S152-293
73	3	重石	B10		152-整地土5	16.1	15.1	6.8		2075.0	環状		S152-292
73	4	重石	A10	152-135	第3砂利面下	10.2	10.2	6.1		636.0	半球形 方形孔	~18C中	S152-309
73	5	重石	I8		152-整地土2	13.3	12.3	6.6		1083.0	石瓦から転用		S152-278
73	6	重石	J8	152-364		14.8	14.8	10.2		3333.0	低い円柱形		S152-297
73	7	槌の子	B10	152-2	上層	10.0	6.3	5.0		480.0	重り玉	18C後~近代	S152-298
73	8	不明品	C8		表土	3.8	3.8		1.0	16.73	円盤状		S151-112
73	9	不明品	-		151-整地土	4.1	4.3		0.8	21.61	円盤状 円孔 靱を改変		S151-145
73	10	人形	E10	151-5		5.9	5.1	8.2		237.16	鼓をうつ猿	~18C中	S151-31
73	11	蓋	C8	151-3	石組内5層以下	(22.4)	(17.1)		6.3	2350.0	1/4程度	~近代	S151-61
73	12	手水鉢	D8	151-28		(8.5)	(6.5)	(7.0)	4.5	251.0	口縁部破片	18C後~	S151-33
図版第3	1	碁石	D8	151-101		2.14	2.19		0.4	2.81	粘板岩 黒	17C~18C前	S151-28
図版第3	2	碁石	B7	151-7	11層	2.1	2.4		0.6	5.24	粘板岩 黒	18C~	S151-113
図版第3	3	碁石	B7	151-7	11層	2.08	2.33		0.88	6.24	安山岩 (黒)	18C~	S151-114
図版第3	4	碁石	J6	151-106		1.68	1.98		0.61	3.08	粘板岩 黒	18C後~	S151-116
図版第3	5	碁石	D1		152-整地土2	2.38	1.99		0.59	4.14	粘板岩 黒		S152-179
図版第3	6	碁石	C1		152-整地土3	1.8	2.4		0.6	4.34	粘板岩 黒	17C後半	S152-181
図版第3	7	碁石	J10	152-277		2.1	2.2		0.5	4.52	粘板岩 黒	17C	S152-302
図版第3	8	碁石	B10	152-236		2.2	2.2		0.6	5.27	粘板岩 黒	18C後~	S152-435
図版第3	9	碁石	A10		152-整地土3	2.16	1.88		0.48	3.00	粘板岩 黒	17C後半	S152-180
図版第3	10	碁石	H10		表土	2.16	2.18		0.52	3.90	粘板岩 黒		S161-14
図版第3	11	碁石	B1・10	152-3		2.13	2.2		0.42	3.21	- (白)	~近代	S152-454'
図版第3	12	碁石	D9		表土	2.22	2.05		0.51	3.65	凝灰岩 (白)		S151-115
図版第3	13	碁石	D1		攪乱	2.3	2.51		0.41	4.01	流紋岩 (白)		S152-178
図版第3	14	碁石	J9	152-288		1.7	2.0		0.75	3.61	花崗岩 (白)	(古代)	S152-436

第34表 石瓦・建材等観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	出土地点			計測値 (cm)				(g) 重	備考	出土遺構の主 な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	長・縦	幅・横	高・奥行					
74	1	軒丸瓦	B10		152-整地土1	(47.6)	14.0	13.5	7750		連結部欠損		S152-277-285
74	2	丸瓦			排土	(28.8)	14.8	11.0	4093		軒側欠損		S152-289
74	3	丸瓦	C10		攪乱	(24.4)	12.6	(9.2)	2664		両端欠損		S152-287
74	4	丸瓦	I5		151-排水溝	(19.4)	14.4	13.4	3770		軒側欠損		S151-1
74	5	棟瓦	C7・8	151-3		(38.0)	15.6	(11.8)	8350		角型無様式 両端欠損	~近代	S151-3
74	6	棟瓦	E8		151-整地土	(20.3)	13.2	9.0	2534		角型無様式 雄側欠損		S151-2
74	7	棟瓦	B10	152-81	152-整地土2	18.0	12.8	9.0	2738		角型有様式	18C後半~	S152-290
74	8	棟瓦	E9		152-TR7	34.7	22.2	15.6	18450		丸型 転用重石?		S151-106
74	9	烏衾	C10	152-2		(16.8)	14.8	8.8	1743		連結部欠損	17C~近代	S152-281
74	10	鬼板	D・E8		表土	(18.8)	(14.4)	9.1	1875		無紋		S151-64
75	1	礎石・東石	B1	152-108	上面	22.2	21.4	13.0	6048		棟瓦から転用	19C	S152-291
75	2	礎石・東石	C1	152-2	上層	22.9	22.2	14.2	10300		方形 上部半球形	18C後~近代	S152-69
75	3	礎石・東石	B1	152-2	上層	20.4	19.9	13.7	10008		方形 柄穴	18C後~近代	S152-60
75	4	礎石・東石	I5・I6・J5		表土	(14.7)	12.0	9.7	2207		転用品?		S151-65
75	5	礎石・東石	C1	152-2	上層	(27.2)	(25.6)	19.5	15600		方形 柄穴	18C後~近代	S152-68
75	6	礎石・東石	B10	152-3		(27.8)	23.6	12.8	11387		方形 柄穴 転用品	18C後半~	S152-81
75	7	敷居石			表土	(42.6)	46.4	17.1	42750		溝2条 大半欠損?		S152-304
75	8	不明製品	B1	152-81	152-整地土2	(20.0)	(25.1)	6.4	4726		腰板・壁石?	18C後半~	S152-83
76	1	石樋	C8		表土	87.4	25.1	14.4	27750				S151-152
76	2	石樋	C7・8	151-3		(34.5)	25.5	12.5	11000			18C後半~	S151-62
76	3	不明製品	E・F9		攪乱	(36.7)	17.2	7.8	6129		印籠接ぎ状のホソ		S151-136
76	4	不明製品	C8		表土	96.6	48.4	12.1	46250		平瓦形 1.5倍大		S151-154

第35表 石塔・灯籠等観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	出土地点			計測値 (cm)				(g) 重	備考	出土遺構の主 な遺物の時期	石番号
			地区	遺構番号	層位	縦・奥行	横・幅	高・厚					
77	1	空風輪	C10	152-2	水路埋土	最大径 15.7		24.6	5123			17C~近代	S152-85
77	2	空風輪	C10	152-2	北側裏込	最大径 17.4		(21.48)	4525			17C~近代	S152-84
77	3	地輪	A・J6	151-160	151-TR1-6層	21.1	(12.8)	17.4	6277		「地□□」「五月四日」	18C~	S151-59
77	4	基礎	B7		151-整地土	8.5	9.1	6.7	870		方形の彫り込みと2条の線刻		S151-58
77	5	灯籠(笠)	A10		152-攪乱	17.0	17.2	5.1	1960		方形 円孔 小型		S152-86
77	6	灯籠(笠)	C8	151-3	石組内7層目	(20.0)	32.5	6.1	4043		歪な円形 頂部隆起	~近代	S151-118
77	7	狛犬	J・A10	(152-223南)	152-整地土3~4	6.5	4.1	8.2	150		小型 表現省略	~17C中	S152-177
77	8	石仏	C10	152-184		14.0	24.0	63.0	49450		地藏「道□(圓か)禪門」 「天文九年庚子五月朔日」 (1540年)	18C	S152-305
77	9	石仏	E10	151-33		(17.1)	(16.5)	(6.2)	2032		地藏足元~蓮華座か	17C	S151-68

第5章 金属製品

金属製品は、発掘調査で確認したもののうち約760点を採取した。そのうち状態の良好なもの278点を図示した。以下、金属製品を武器武具類、生産具類、日用品、調度品・その他、銭貨の5つの項目に分ける。その他、鑄造関連遺物も節を分けてここで扱う。

第1節 金属製品

1 武器武具類 (第78図 第36表 写真図版第50)

刀装具〔縁(78-1)、切羽(78-2~4・11)、鉏(78-5~7)、鏑(78-8~10・12)、小柄小刀(78-13~18)〕、小札(78-19)、鏃(78-20)、弾丸(78-21~26)を図示した。

刀装具(78-1~18) 縁(1)は、周りに1条の沈線が巡る。切羽(2~4)は、いずれも周縁に「こきざみ」が施される。11は鉛製のミニチュアであるが、あるいは鏑を模した可能性もある。鉏(5~7)は、いずれも一重鉏だが形状や厚さがそれぞれ異なる。5は厚さ1mmと薄く、片側の貝先と刃方を欠く。残る貝先の表面には複数の直線による菱形が連続して線刻される。6は呑込みと呼ばれる関のあたる切り欠き部分がない。7は厚さ3mmと厚めで、両側の貝先表面にそれぞれ1条の太めの沈線が彫られる。鏑(8~10・12)は、8が透鏑で小柄穴のみ開き、9が丸形で茎穴の両側に大きな楕円形の穴が開く。10は丸形の太刀鏑で無紋であるが、鑿様の工具で切断されており、鉄素材として再利用されたと考えられる。12は木瓜形鏑を模した鉛製のミニチュアである。筭穴とみられる猪目形の穴が開く。表にS形模様4つ、裏に連続する粒状の隆起が鑄出される。小柄小刀(13~18)は、14・17以外刀身を失い小柄のみとなる。13は表面が薄く剥離し、模様が不明である。14は研ぎ耗した刃部が錆びつつ辛うじて残る。小柄は対角線で区切った三角形の中に蔓を持つ植物を彫り出し、周囲を魚々子で埋める。15は小柄両端に猪目形の透かしのある銚金具、中央に花卉5枚の花が浮き彫りにされ、花の両側には蔓が表現されていた痕跡が残る。16は状態が悪いが蔓状の線刻が残る。17の小柄には、波や渦の見られる水辺表現に、3匹の蟹と肩に柄の長い3本刃の鍬を担ぐ人(あるいは猿)、持ち手付の容器や波模様等を配置し、すき間に魚々子を充填する。18はほぼ全面に横線が削り出されるが、等間隔に3カ所まで2条ずつ太くなる。その太い横線で区切られた一区画は無紋となり、蚯蚓意匠にみえる。無紋の区画にある円内の模様は五三桐紋のようである。

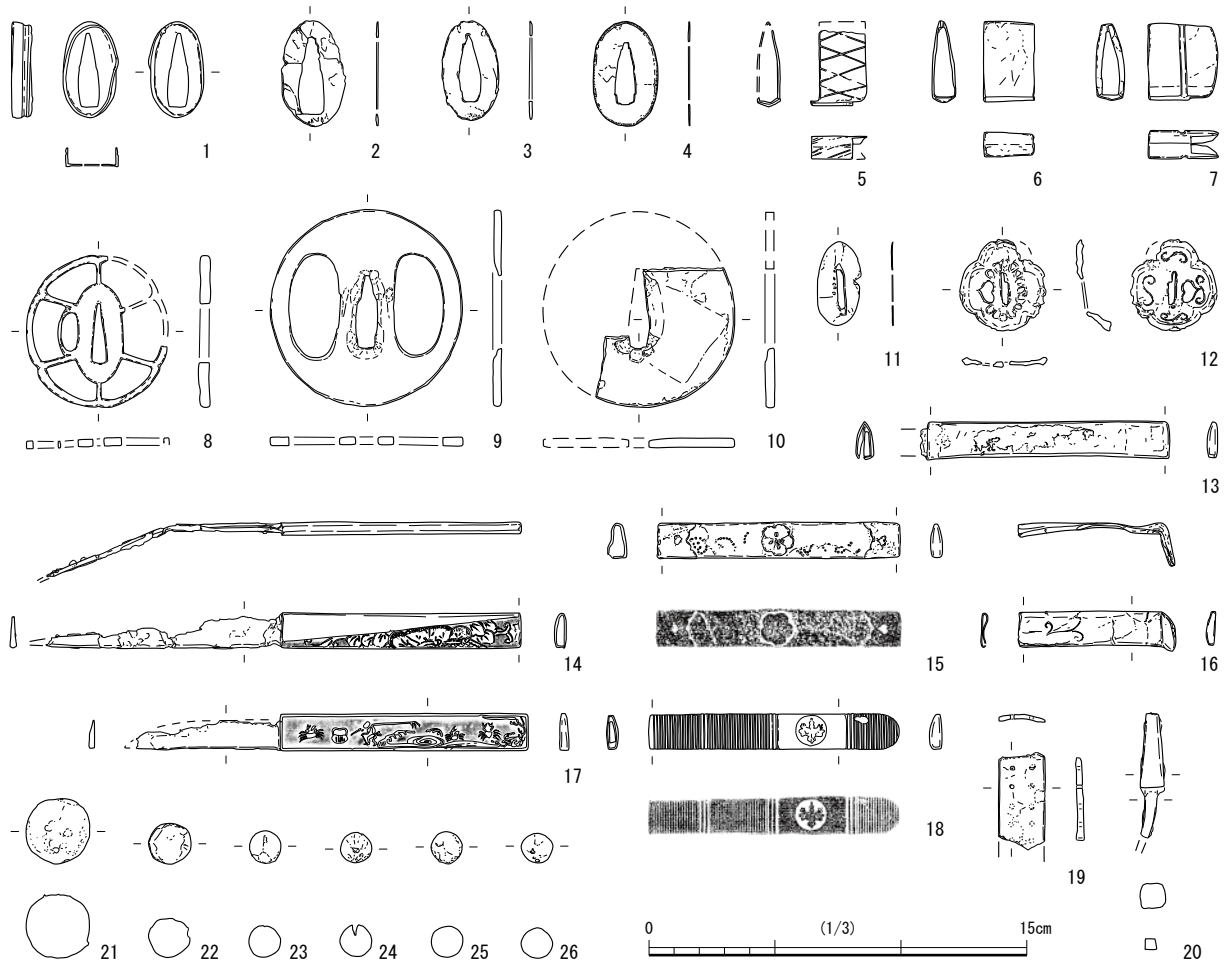
小札(78-19) 半分欠損した甲冑の部品である。

鏃(78-20) 盾割の鏃である。茎を欠損する。

弾丸(78-21~26) 22が鉄製である以外は鉛製で概ね球形である。21が径約2.6cm、22が径約1.7cm、その他は径1.25cm前後であり、21が口径三十匁の大筒、22が口径八匁、他が口径四匁でこれらは中筒の弾丸になるとみられる。重さは、21が二十四匁である他は概ね二匁五分~二匁八分だが、26だけ二匁二分八厘と軽い。

2 生産具類 (第79・80図 第37表 写真図版第51・52)

生産具類として、工具類〔巻頭釘(大巻釘)(79-1~35)、頭巻釘(小巻釘)(79-36~40)、折れ合釘(79-43)、環状釘(79-44~46)、皆折釘(79-47~49)、金槌(79-50)、鋸(79-51~55)、鑿(80-1・2)、小刀(80-3)、錐(80-4)、鑪(80-5)、吊鈎(80-6~9)、鋸(80-14~17)、楔矢(80-19・20)〕、農具類〔鋤先金具(80-10~12)、斧(80-18)、手鋤(80-13)〕、漁具〔錘(80-



第78図 武器武具（縮尺1/3）

21・22)、籜（80-23）等を図示した。

釘（79-1～49） 卷頭釘（大卷釘）（79-1～35）、頭卷釘（小卷釘）（79-36～40）、折れ合釘（79-43）、環状釘（79-44～46）、皆折釘（79-47～49）があり、この他に頭部が欠損し周りに木質が付着する41・42がある。なお、頭幅と身幅の比率が2.5：1以上のものを卷頭釘とし、これより頭幅の比率差が小さいものを頭卷釘とした。卷頭釘・頭卷釘は上端を団扇状に薄く平らに成形し、それを巻くようにして頭とする。43は両先端の合釘であり、胴部が106度に折れる。環状釘は、素材の鉄を折り曲げて合わせて身とし、折り曲げた部分を頭として環状に成形する。46は成形後さらに胴部をひねって固定する。皆折釘（貝折釘・替折釘）は身の上端を大きく折り曲げて頭とする。47～49はいずれも全長10cmを超える。

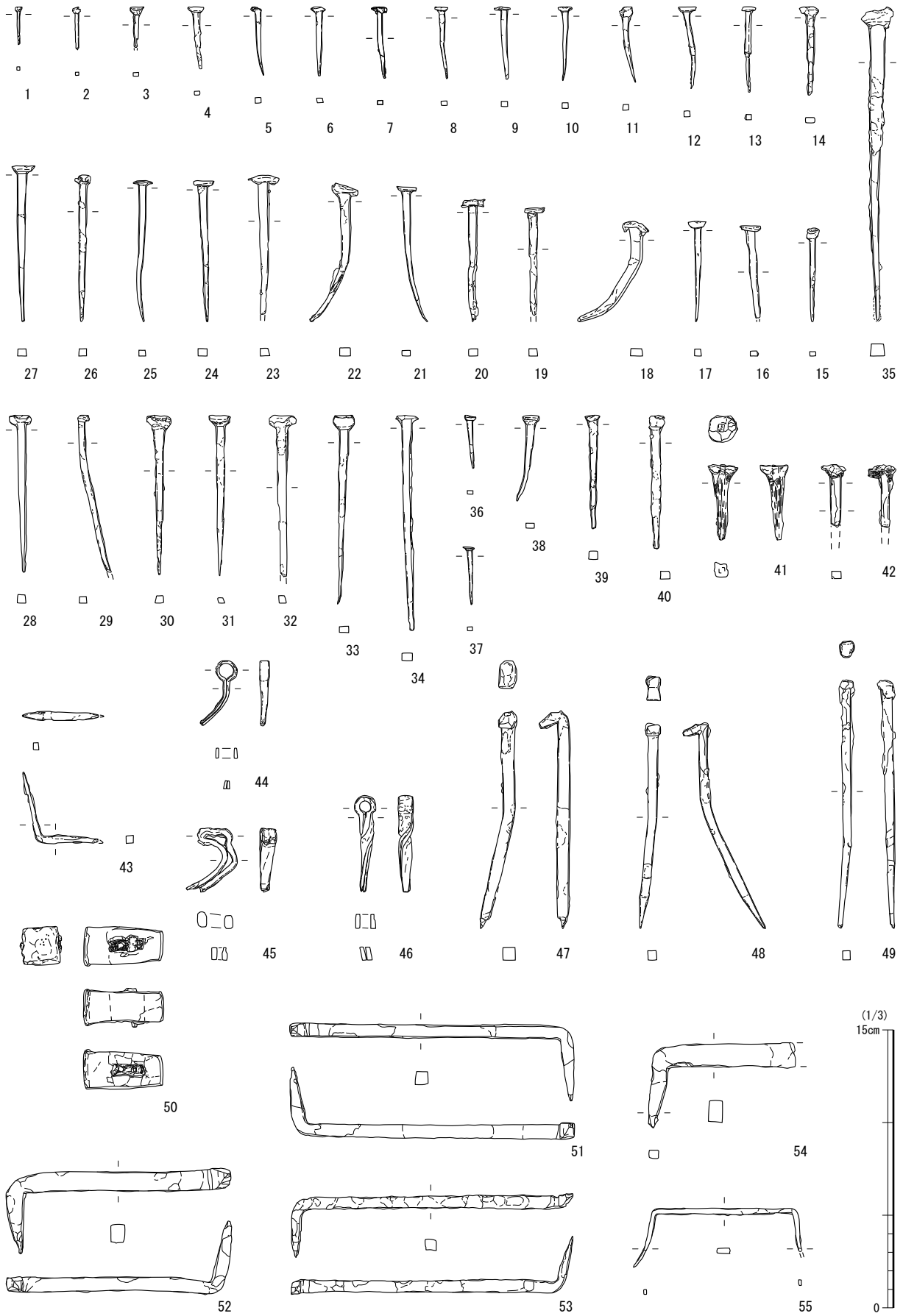
金槌（79-50） 四角玄翁であり、片側が平らでやや広い。柄を欠くが、槌の穴に木質と楔が残る。

鋨（79-51～55） 51～54は断面形が四角い角鋨だが、55は偏平な断面形である。また、51～53は両刃部の向きが異なる手違鋨で、長さの割に胴部が細い。

鑿（80-1・2） 1は幅三分の平刃の追入鑿である。2は角柱の先端を斜めにして幅約一分五厘の刃部を形成する追入鑿または向持鑿である。ともに柄を欠失する。

小刀（80-3） 研ぎ耗のため刃部が茎より短くなる。柄等は残存しない。

錐（80-4） 断面形が四角形となる四つ目錐である。柄は残存しない。



第79図 工具類 (縮尺1/3)

鑢 (80-5) 断面形が菱形の複目鑢で、木工用とみられる。

吊鉤 (80-6～9) 6～8は鉤が1本で上端を環状に曲げるが、6・7は鉤と反対側に曲げ、8は鉤とは直角方向に曲げる。9は3本鉤で、環状部は欠損する。

鋌 (80-14～17) 14・15は頭部が半球形の丸頭鋌、16・17は頭部が円形の平頭鋌である。

楔矢 (80-19・20) 19は先端がやや細くなり薄くなる短冊状の短い鉄板である。20は先端が広がり薄くなるが、頭部が角柱に近い。形状の違いから、19はいわゆる楔であり、20は割矢だとみられる。

鋤先金具 (80-10～12) 鋤あるいは鋤の刃先金具である。10はほぼ完形だが、11は木部に接続する片側部分のみ、12はやや幅の広い刃部のみ破片である。

斧 (80-18) 片刃で、分厚く重い。薪割斧である。

手鋤 (80-13) 刃部先端と茎先端を欠き、目釘孔は不明である。

錘 (80-21・22) 円筒形の鉄製錘である。2点とも同一遺構から出土した。

簪 (80-23) 先端が2つに分かれ、それぞれに逆刺が付く。茎は扁平で目釘孔が一つ開く。

3 日用品 (第81～84図 第38～40表 写真図版第50・53～55・57)

日用品として、煙管 (81-1～32)、迷子札 (82)、簪 (83-1～5)、耳かき (83-6)、毛垂 (83-7)、毛抜き (83-8)、鋏 (83-9)、紡錘車 (83-10)、針 (83-11・12)、指貫状金具 (83-13・14)、庖丁 (83-15～19)、分銅・重り (83-20～24)、針金状製品 (83-25～27・85-21)、棒状製品 (83-28～30・85-17)、鉄鍋・鉄瓶 (84-1～7)、杓子 (84-8・13)、火箸 (84-9～11)、火打金 (84-12)、匙 (84-14～17)、薬研 (84-18)、十能 (84-19) を図示した。

煙管 (81-1～32) 概ね雁首と吸口が別個に出土したが、15・16は一緒に出土しており、同一個体を形成したものとみられる。ただし、意匠に統一感がないため、二個一製品だったことが考えられる。32は延べ煙管である。

雁首 (81-1～15) 火皿接合の補強帯があるもの (1～3・5・7)、肩部が付くもの (1～5)、補強帯と肩の両者を備えるもの (1～3・5) があるが、大半は両者を欠く。12・13は別材による肩部は付かないが、叩き出して肩部状に成形する。15は肩部に竹の節のような圈線が巡る。脂返し部分の形状は、大きく湾曲するもの (1～3・5～8)、直線的に伸びて火皿につながるもの (4・9～15)、火皿付近で屈曲するもの (10・13～15) に分かれる。

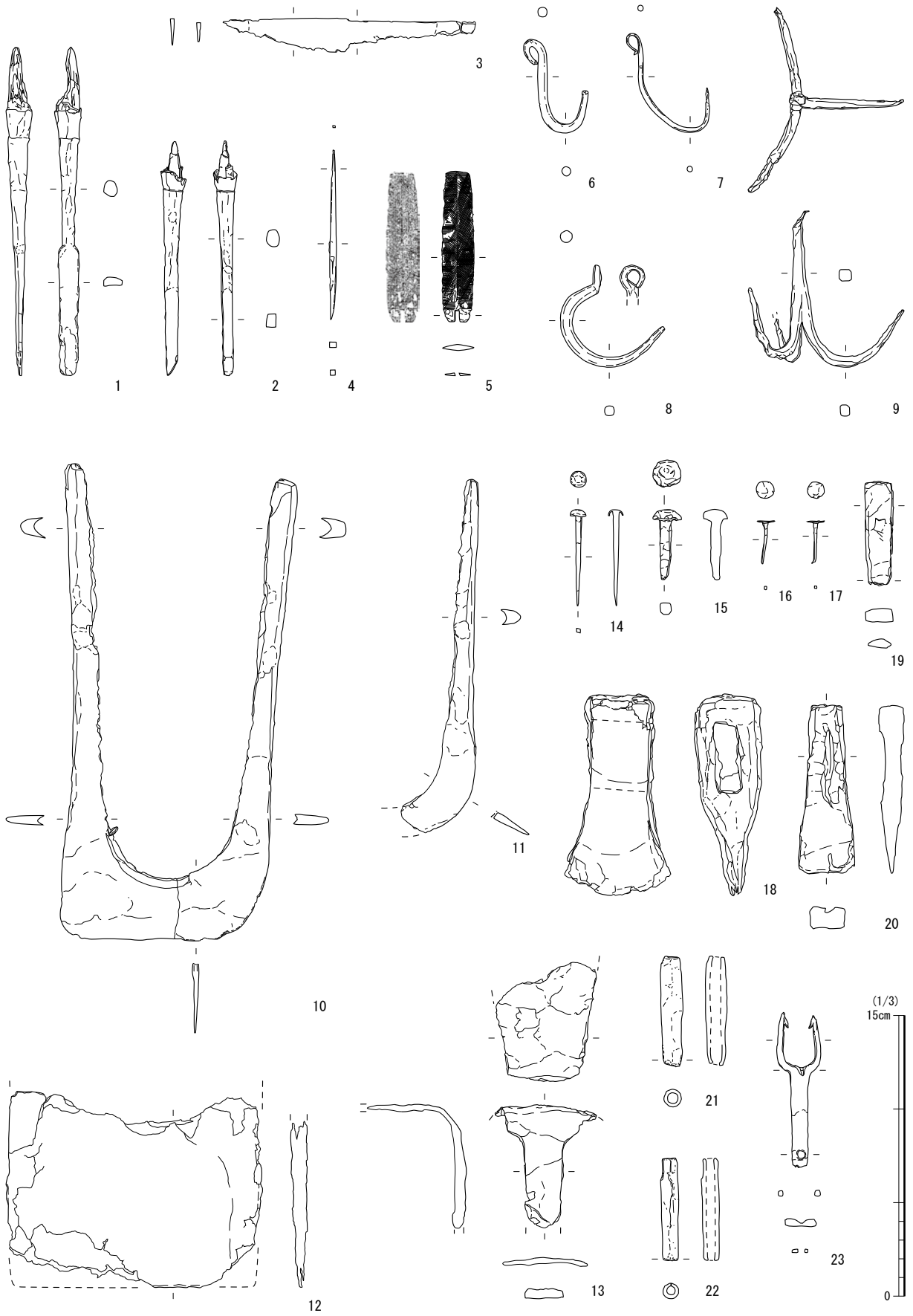
吸口 (81-16～31) ほとんどに胴部が付かず、胴部が付くのは17・18のみである。20・21は叩き出して胴部状に成形する。狭義の吸口部分の形状は、先端の膨らむもの (16・21・22・29) と、先に向かい窄まるもの (17～20・23～28・30・31) に分かれる。

延べ煙管 (81-32) 火皿を欠く。首から吸口まで一体的に成形される。肩～胴部の下面に、細い短冊状の銅板を環状にして接着しているが、土圧により潰れている。

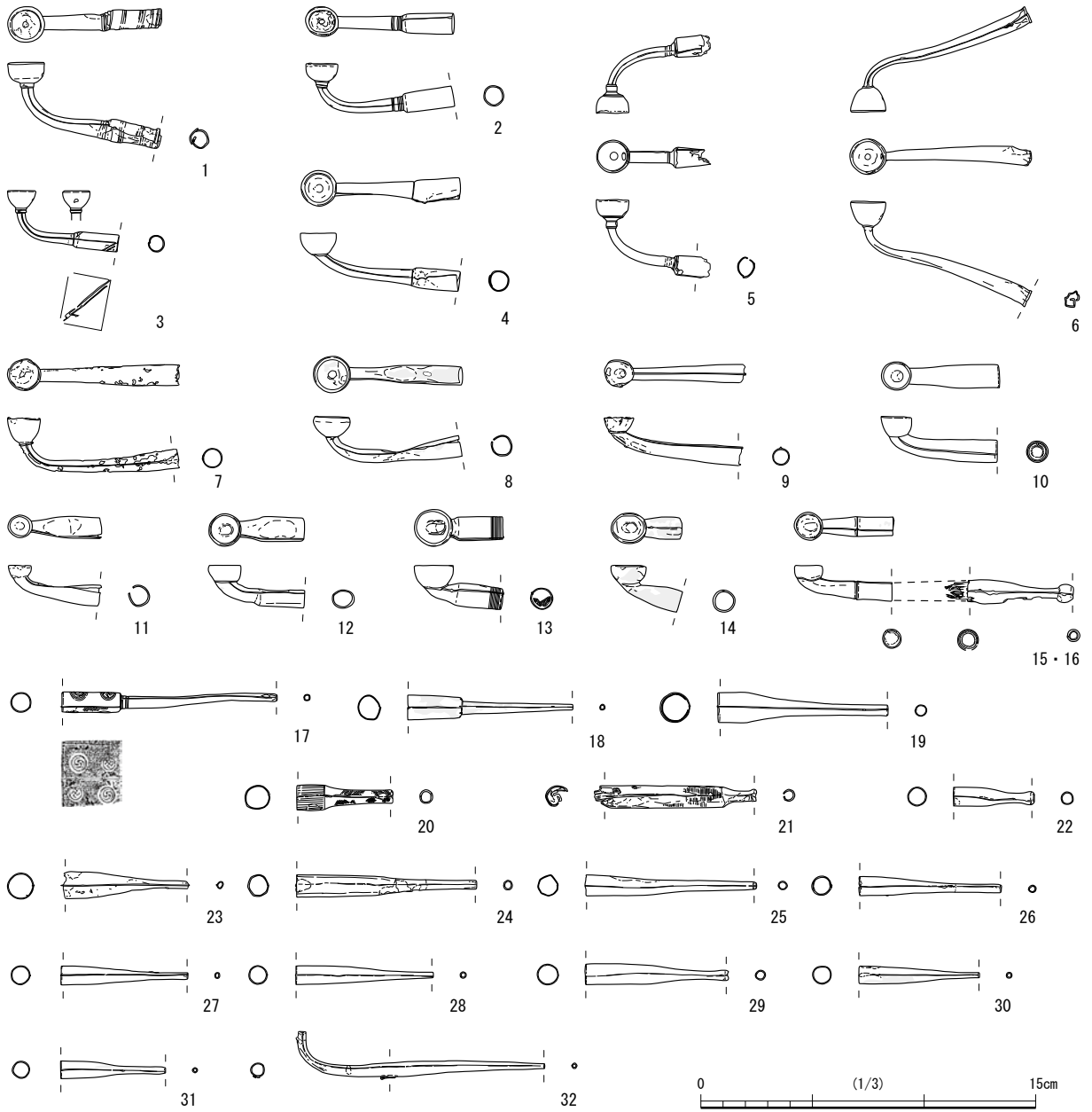
迷子札 (82) 楕円形で上部の円孔に、太さ約1.5mmの針金による径約0.8mmの輪を通す。札の表に「村尾眞兵衛 豊三郎」、裏に松の下を疾走する猪が蹴彫される。天保年間 (1831～45) の城下絵図には小道具町の調査地付近に「ムラヲ」邸が記され、慶応年間 (1865～68) の絵図には「村尾豊三郎」と記される。慶応年間の村尾家当主が迷子札の本人かどうか明らかにし得ないものの可能性は高い。

簪 (83-1～5) いずれも二本足の玉簪であるが、飾玉を失う。3～5は肩が張らず緩やかに両足へ繋がる。

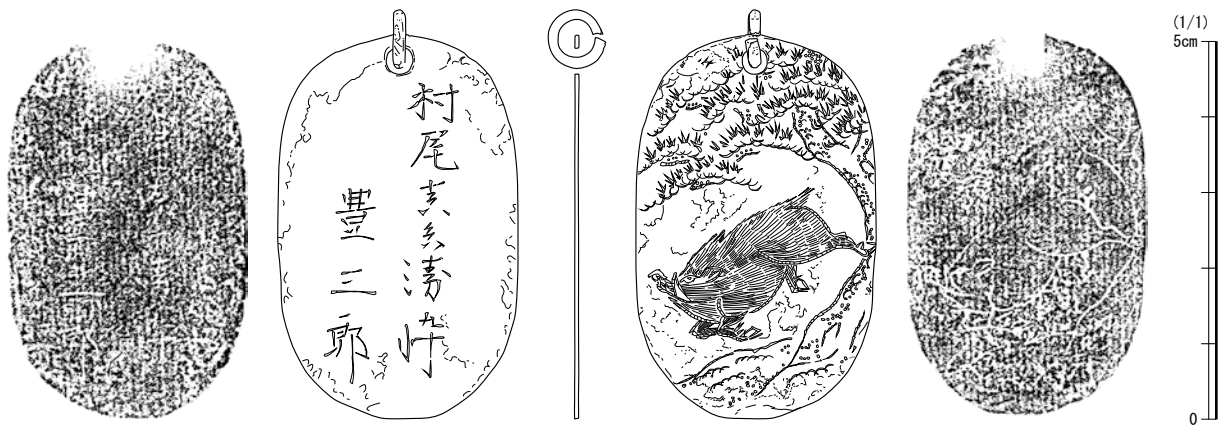
耳搔き (83-6) 茶匙をそのまま縮小したような形状で、竹節状の意匠がなされる。



第80図 工具・農具・漁具等 (縮尺1/3)



第 81 図 煙管 (縮尺 1/3)



第 82 図 迷子札 (縮尺 1/1)

毛垂 (83-7) 刃部に「八」と線刻される。

毛抜き (83-8) 残存状況が悪く、片側先端が欠損し、残る側も先端の形状が不明瞭である。

鋏 (83-9) 残存状況が悪く、片側の刃部しか残存しない。

紡錘車 (83-10) 紡輪は薄く、やや球状に湾曲する。紡茎 (紡軸) は下半を欠損する。

針 (83-11・12) 11は縫い針で、頭部に孔が開く。12は待針で、薄い鉄板を巻いて頭を形成する。

指貫状金具 (83-13・14) 13は両端を細くした細長い銅板を指輪状に丸める。表面には多くの円形の窪みが整然と並ぶ。14は残存状況が悪く、指輪状の形が残るのみで詳細は不明。

庖丁 (83-15～19) いずれも出刃系の庖丁。18のみ柄が残る。

分銅・重り (83-20～24) 20は細長い円錐形で上部に円孔がある。底部付近に鉄片を埋め込み、重さを調整する。21・22は扁平な鉛材を捻ったり巻いたりして細長い形にする。23は歪な円形で偏平につぶれる。24は扁平な円形で中央に円孔があり、2か所に切り込みが入る。それぞれの重さは、20が三匁六分七厘一毛、21は一匁四分一厘八毛、22は九分三厘八毛、23は一匁四分一厘八毛、24は二匁四分二厘九毛、25は九分三厘八毛となる。

針金状製品 (83-25～27・85-21) 25は断面円形で、片側の方へ向かい次第に細くなる。26は断面円形で太さが均一である。二つに折り曲げて縊り合わせており、径1.5～2.0cmの環ができる。27は断面円形だが、片側の端は扁平で先端が緩く曲がって耳搔き状になる。85-21は断面が太めの円形で両端が尖り、折り曲げて錠状にしている。

棒状製品 (83-28～30・85-17) 28は片側半分がやや偏平で、もう半分が断面円形となる、先端が尖る。29は断面方形で直線的に延びるが、両端が欠損する。30は断面長方形で先端が尖る本体と、断面円形で片側が尖る部分が、丁字形に溶接される。85-17は片側が扁平な舌状で、もう片側は尖る。

鉄鍋・鉄瓶 (84-1～7) 検出された鑄造製の鍋もしくは瓶の破片のうち、1・2は蓋の破片で、2個体分確認された。3・4は鍋の口縁付近の破片、5は脚の付く鍋の底部片だとみられる。6・7は鉄瓶の口縁部から肩部にかけての破片である。

杓子 (84-8・13) 8は柄と掬う部分が別材であり、鋏でとめる。13は一体的に成形される。

火箸 (84-9～11) 9・10は特に装飾がないが、10は頭部の装飾が欠失した可能性がある。11は先端を欠損するが、上部は捻りを加えた意匠で、頭部を環状にして円環を掲げる。

火打金 (84-12) 板に火打金を差し込む板付き型で、関東型とも言われる。刃部の半分程を欠く。

匙 (84-14～17) 薬匙 (14・15)、灰匙 (16・17) がある。14はつぼが角の丸い三角形に近い形状で、先が平らになる。柄はやや偏平で、柄尻がやや丸みを帯びる。15はつぼが楕円形で、柄の断面形は楕円形に近いが、柄尻では扁平で先端がやや曲がり耳搔き状になる。柄が大きく屈曲するが、土圧によるものと思われる。16は柄を装着する袋状の部分に鋏でとめたつぼの一部が僅かに残存する。17はつぼと袋部が一体的に成形される。銅板を折り曲げて袋部を形成し、柄を目釘で止める。

薬研 (84-18) 鉄製の薬研車である。鑄造品で劣化が激しい。

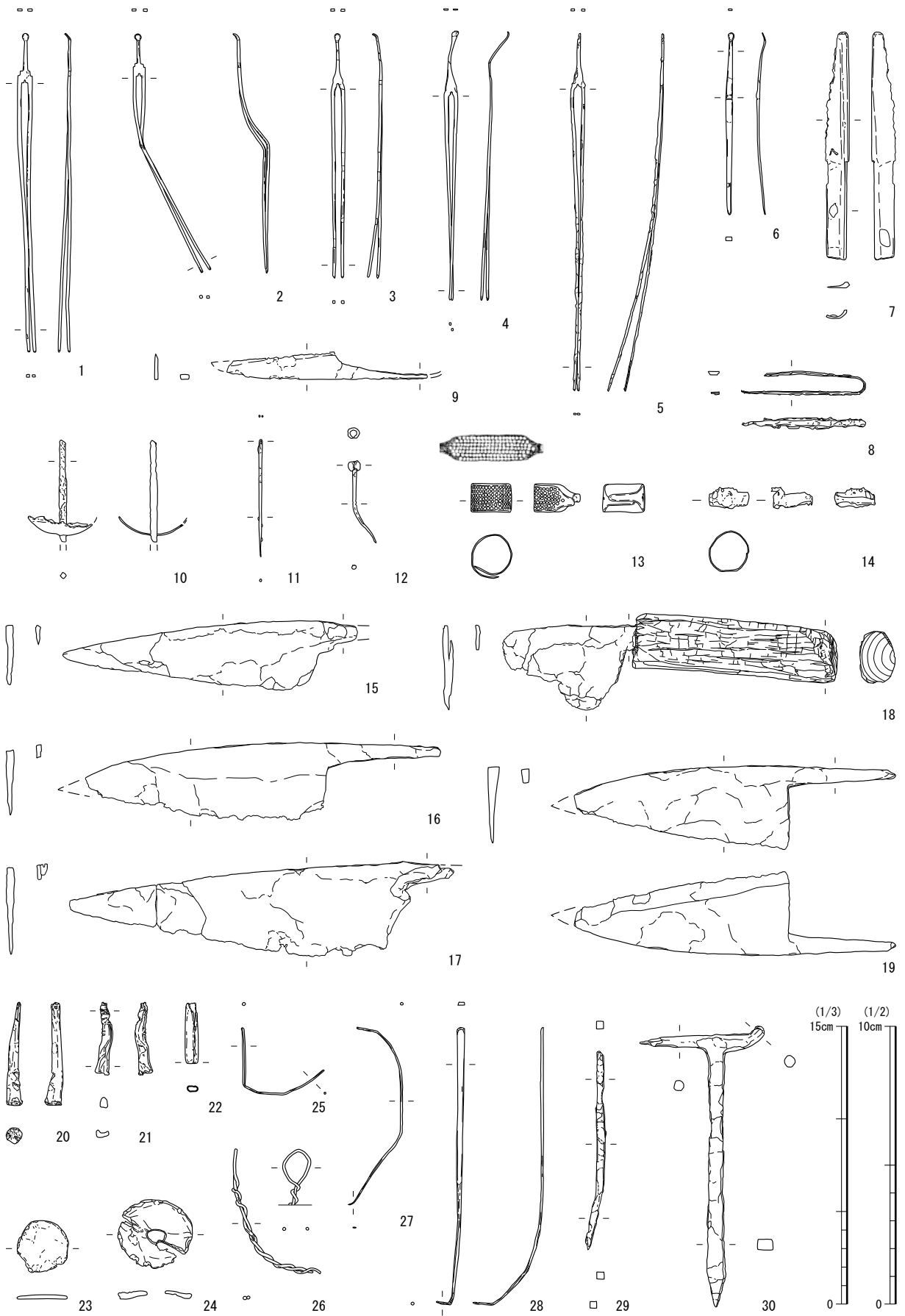
十能 (84-19) 木製の柄が付く柄杓形の木柄十能とみられる。

4 調度品・その他 (第85図 第41表 写真図版第50・51・54)

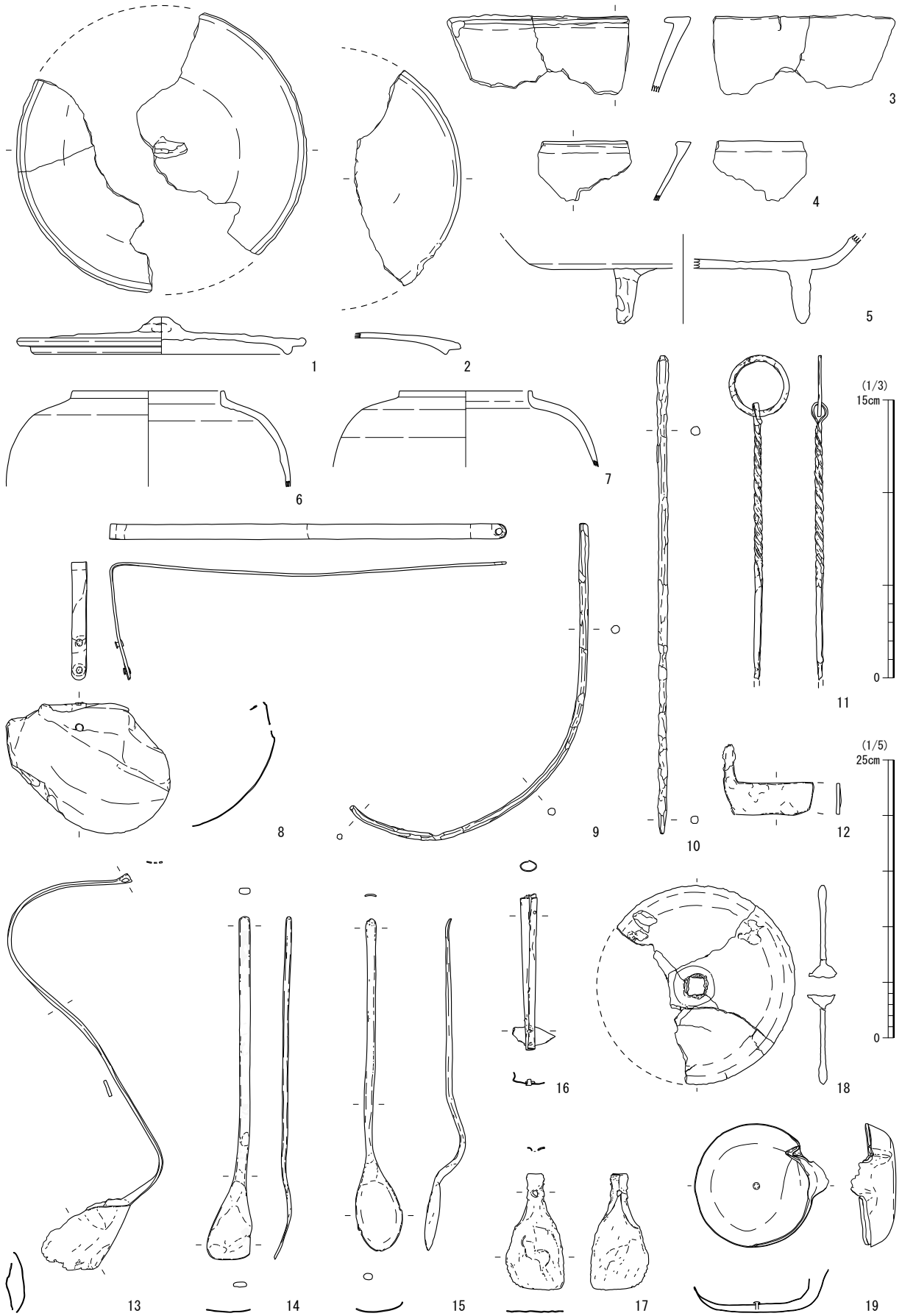
調度品・その他として、引手金具類 (85-1～6)、座金 (85-7・8)、錠付鍔金具 (85-9・10)、錠前 (85-11)、鍔金具 (85-12～14・16・18・20)、額受金具 (85-15)、焼印 (85-19) 等を図示した。

引手金具類 (85-1～6) 引手金具 (1～4)、襖引手金具 (5)、環付金具 (6) がある。1・2

第1節 金属製品



第 83 図 日用品 [簪・針・指貫状製品・庖丁・分銅等] (縮尺 1/3 1/2 : 11・12)



第84図 日用品〔鉄鍋・鉄瓶・火箸・匙等〕(縮尺 1/3 1/5 : 18・19)

は一体型で鉛製の鑄造品である。3・4は引手本体と環状釘、座金とで形成される。環付金具（6）は形状が似るためここに含めた。環と環状釘、花（菊）形の座金からなる。襖引手金具（5）は楕円形の本体の周りに木瓜形の縁が付く。本体には花（牡丹カ）と蝶、縁には蔓草植物の意匠がある。

座金（85-7・8）どちらも花（菊）を模しているが、7は花卉形で半肉のなつくりで、8は円盤形の表面に線刻で表現される。7は、環付金具（6）の座金と同形であり、同一遺構出土であるため、対となる製品を形成したことが考えられる。

錠付鍔金具（85-9・10）錠前の機能がある鍔金具である。9は菊座金を嵌めた可動式のつまみが付く。10は扁平な箱状で、細く扁平な竿状の木部先端に取り付けられたとみられる。

錠前（85-11）残存部分から施錠した状態のようである。

鍔金具（85-12～14・16・18・20）12・13は方形に近い団扇形の扁平な金具である。13には柄の一部が残存するが、12には欠損して破断面のみ残る。12・13とも方形部の片面に、縦方向の浅い筋彫りが複数入る。13の残存する柄の形状によると、後に曲がった可能性はあるが、筋彫りのある面とは反対側にやや屈曲して直線的に伸びていたようである。その形状から香道具の灰押えである可能性があるものの、筋彫りが浅くて機能的でない。そのため用途不明ながら鍔金具として扱った。14は蝶番の片側であり、表面に三つ巴の周囲に連珠文が巡る模様が14点打刻される。16は残存状態が悪いが本来の外形は花卉状に連弧が巡るようである。表面に装飾はないが、片面中央に細い銅板を鎮止めする。18は箆筒等の角を保護する金具である。20は火炎形あるいは水煙形の不明金具である。

額受金具（85-15）受け部は断面が扁平な長方形でくの字に屈曲する。先端は釘状となる。

焼印（85-19）「神二文字屋」とみえる。

5 銭貨（第86図 第42表 写真図版第56）

銭貨は鑄付いたものを含めて106点を提示した。銭文の内訳は、寛永通寶（1～49）、乾元重寶（50）、唐國通寶（51）、開元通寶（52・53）、淳化元寶（54）、咸平元寶（55・56）、祥符元寶（57・58）、祥符通寶（59）、天禧通寶（60～64）、天聖元寶（65・66）、明道元寶（67）、景祐元寶（68）、皇宋通寶（69～73）、治平元寶（74）、熙寧元寶（75）、元豊通寶（76～81）、元祐通寶（82～84）、紹聖元寶（85～88）、元符通寶（89）、聖宋元寶（90～92）、洪武通寶（93・94）、永樂通寶（95～98）、慶長通寶（99）の23種があり、その他に雁首銭（104～106）がある。また、2枚以上の銭貨が鑄び固まったもの（100～103）がある。

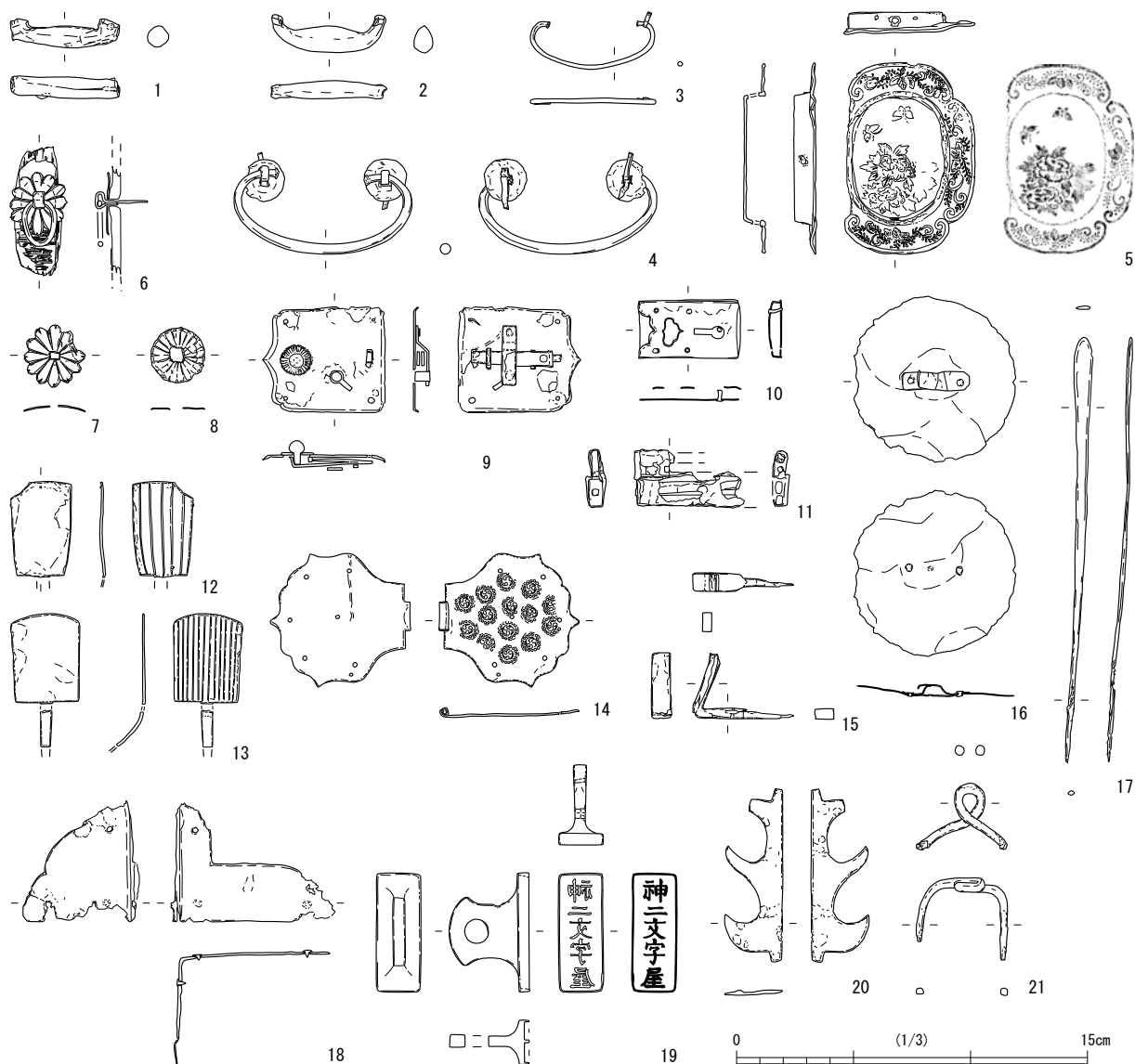
国内鑄造銭は慶長通寶（99）と寛永通寶（1～49）がある。寛永通寶の内訳は、古寛永29点（1～29）、文銭3点（30～32）、新寛永17点（33～49）である。新寛永は43・44に「元」、45に「佐」の背文がある。また、46～49は鉄製のいわゆる鉄一文銭である。

渡来銭は中国銭が占める。乾元重寶（50）は唐、唐國通寶（51）・開元通寶（52・53）は南唐、洪武通寶（93・94）・永樂通寶（95～98）は明である。それら以外は、いずれも北宋銭である。

鑄び固まった銭貨はもともと銭縉の状態だったと思われる。このうち102・103は同一地点から出土しており、もとは一連だったようである。雁首銭（104～106）は、煙管雁首の火皿を薄く潰したものの。

第2節 鑄造関連遺物（第87～90図 第43表 写真図版第57・58）

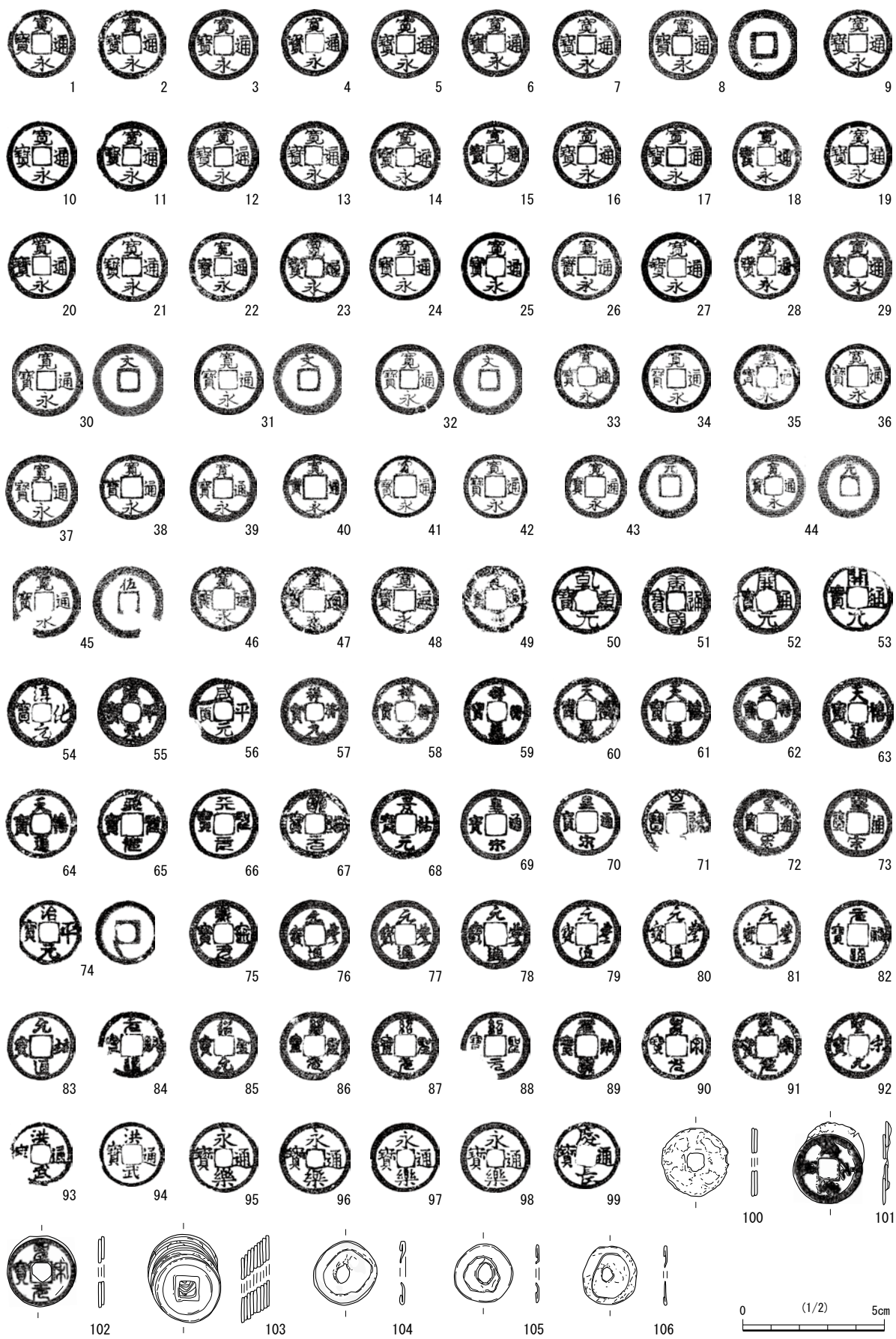
鑄造関連遺物は、発掘調査で118点を採取したうち、比較的状态の良好なもの等64点を提示した。取瓶・埴塙16点（87）、羽口7点（88）、鑄型4点（89）、鉍滓または溶け固まった金属33点（90-1～33）、鑄造素材4点（90-34～37）である。



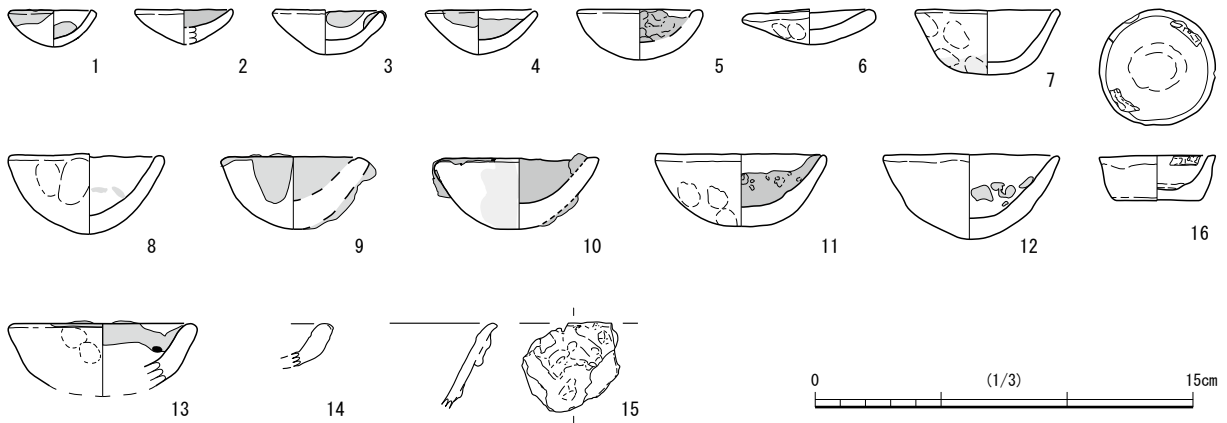
第85図 調度品・その他〔引手金具・銚金具・焼印等〕(縮尺1/3)

取瓶・坩堝 (87-1~16) 図示した16点のうち完形は8点である。これらは、手づくねの椀型(1~14)、型成形で器高の低い寸胴の桶型(16)がある。その他、鉾の付着した鉄製椀の口縁部(15)があるが、あるいは鑄造素材の可能性もある。取瓶・坩堝としたが形態に差がなく、被熱具合も同様である。このうち9・10はやや口径が大きく鉾の付着量が多い。椀型の口径はばらつきがあるが、完形品では3.3cm(1)、4.0~4.6cm(2~4・16)、5.0~5.5cm(5~7・9)、6cm前後(8・10)、6.7~6.8cm(11~13)とある程度まとまり、いくつかの規格に区分されそうである。

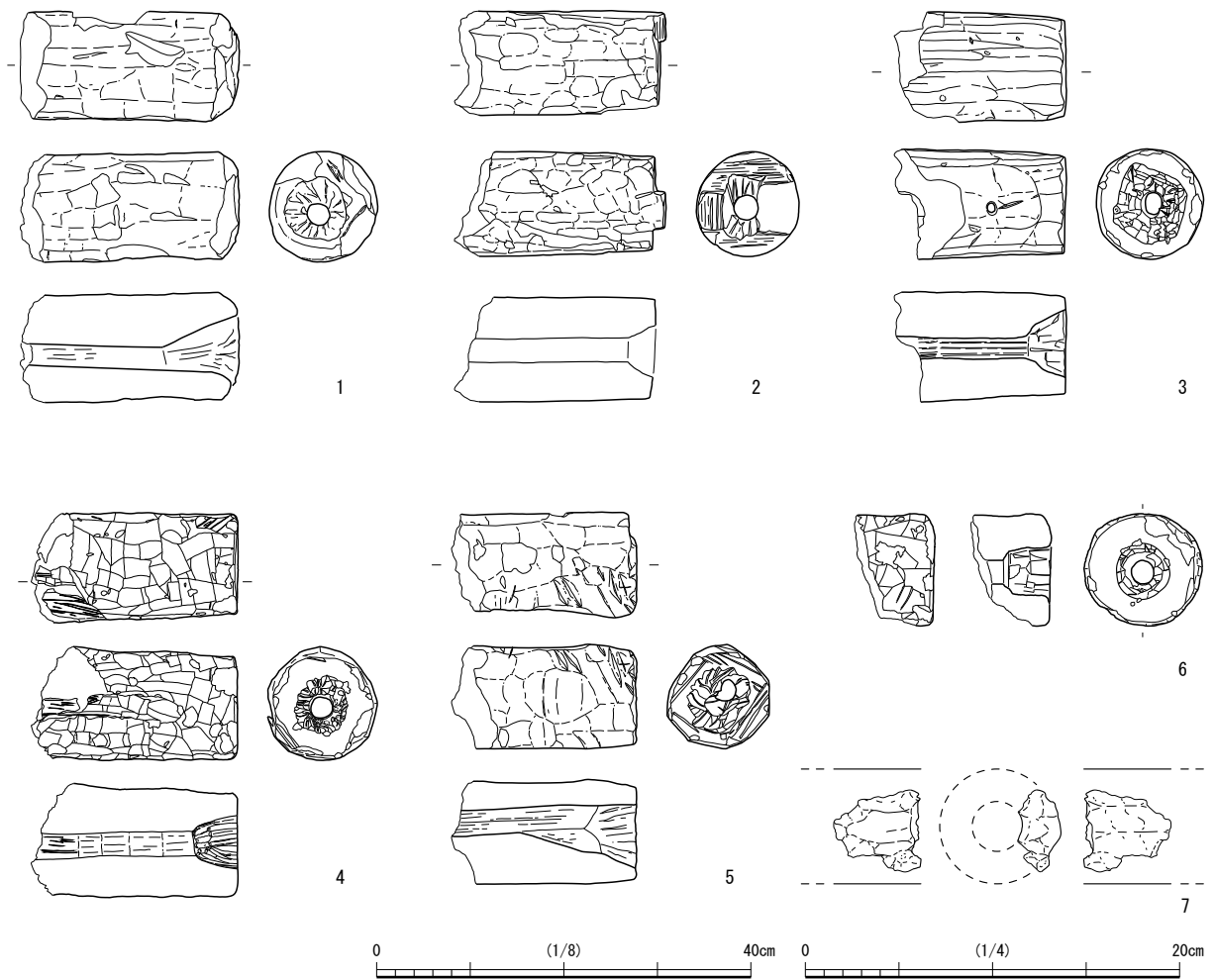
羽口(88-1~7) 笏谷石製(1~6)と土製(7)があるが、いずれも被熱により変色する。笏谷石製のものは概ね同様な寸法で、いずれも表面を平刃の工具によって粗く成形され、中心に断面円形の送風孔が穿たれる。小口の状況はそれぞれ少しずつ異なり、とくに2は一部に角張った突起を持つ。3は送風孔の小口部分を略方形に広げており、6は同様の部分を円形に広げて彫り込む。5は小口の送風孔周囲が四角く削り出される。また、制作中に送風孔を穿ち損じたのか、4は外面に送風孔と同様に彫り込んだ跡が残り、5は概ねまっすぐ抜ける送風孔の他にやや食い違う同様の孔が穿たれてい



第86図 錢貨 (縮尺 1/2)



第87図 鑄造関連遺物〔取瓶・坩堝〕（縮尺1/3）



第88図 鑄造関連遺物〔羽口〕（縮尺1/8 1/4：7）

る。7は小片だが外面に面取りが確認され、断面形が多角形となるようである。笏谷石製の羽口と比べると非常に小さい。

鑄型（89-1～4） いずれも引手金具の鑄型とみられる。対になるものはない。2・3は二つの面に鑄型が彫り込まれる。また、いずれも湯口のほかに、棒状のものを当てた彫り込みがある。

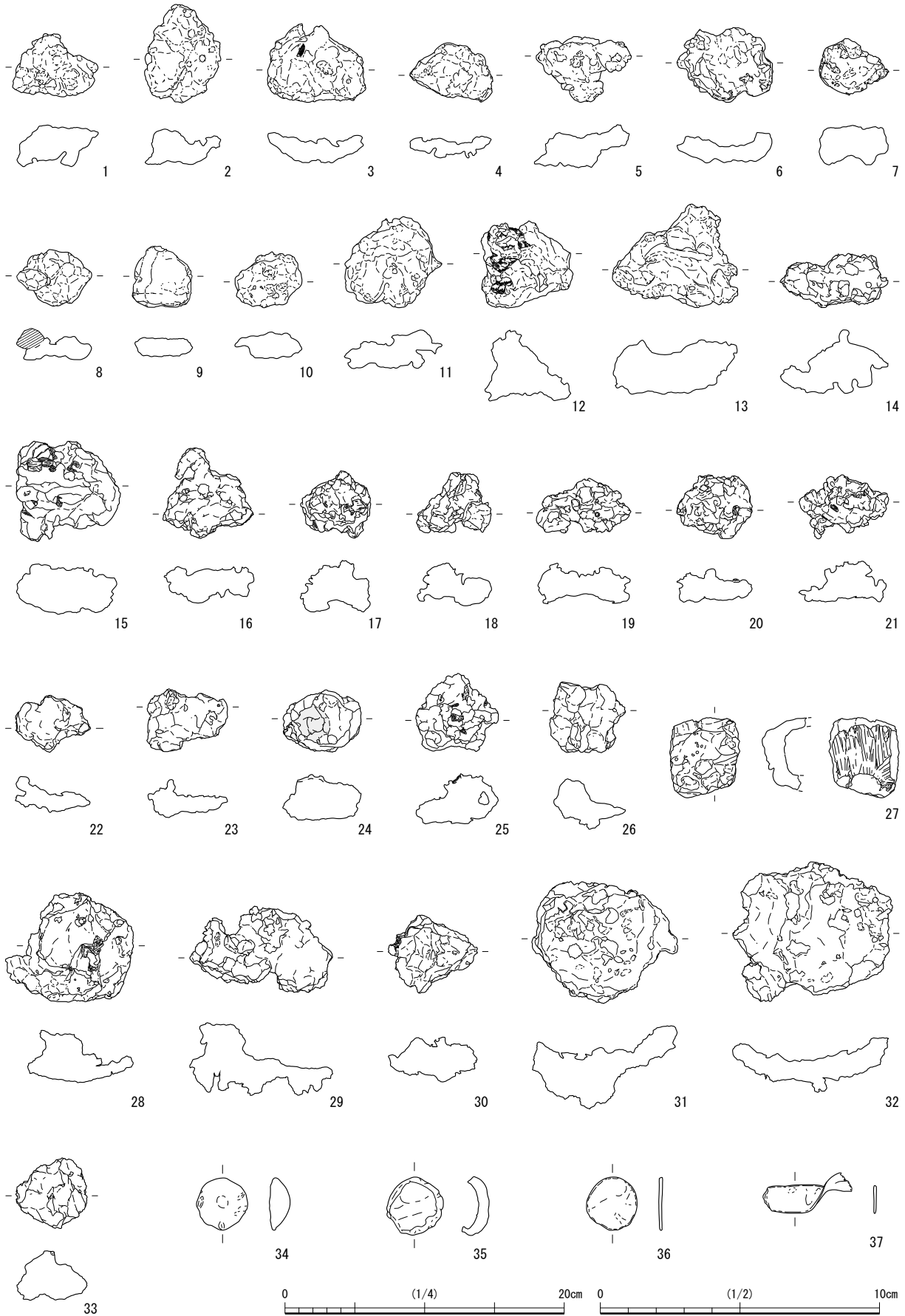


第 89 図 鑄造関連遺物〔鑄型〕（縮尺 1/3）

1 はもともと硯であり、四分の一程度に切断した破片を加工して制作している。型の裏側には、硯背（硯陰）の縁を巡る脚の形状が残り、刻まれた名前などの文字列が残る。中央の大きな文字の列は傷等と同化しており判読困難だが、その左下には小さめの文字で「玉村屋□（老カ）松」と読める。硯として使用された時の持ち主であろう。二面に型を彫りこむ 2・3 はともに小口が長方形でやや厚めの直方体であるが、2 は対向する広い面に型が彫られ、3 は対向する狭い面に型が彫られる。3 の場合、対になる鑄型は薄いものだったと思われる。4 は砥石を改変して鑄型としたようである。型を固定するためなのか、3 つの円孔が穿たれており、そのうちの 1 つだけが貫通する。

鋳滓等（90-1～33） 金属精錬時や鑄物製造の工程で発生する廃棄物である。大きさや形状が様々であり、いくつか碗形のようになるものがある。また、27 は棒状のものから剥離したような形状であり、内面には繊維状のものを巻き付けた痕跡が残る。

鑄造素材（90-34～37） いずれも鉛とみられるが、さまざまな形状である。34 は半球状、35 は円盤形の中央を押さえて縁が盛り上がった形状、36 は円盤形、37 は扁平で細長い形で端を捻った形状である。なお、いずれも比重が軽くなっているが、なかでも 37 は重く不純物が少ないようである。そのため、流通する鉛地金の切れ端である可能性がある。



第90図 铸造関連遺物〔鉍滓・素材〕(縮尺 1/4 1/2 : 34 ~ 37)

第36表 武器武具観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	属性	出土地点			計測値										備考	出土遺構の主 な遺物の時期	金属 番号
				地区	遺構番号	層位	cm							g					
							縦	横	孔縦	孔横	最大厚	奥行	重さ						
78	1	緑	銅	A10	152-整地土3		3.8	2.1	2.9	0.8	0.1	0.75		7.44		17C 後半	152-16		
78	2	切羽	銅	B1	152-246		4.2	2.5	3.1	1.0	0.1			3.65		18C ~	152-6		
78	3	切羽	銅	A10	152-整地土1		3.95	2.2	2.6	0.85	0.1			5.94			152-7		
78	4	切羽	銅	J10	152-整地土2		4.15	2.5	2.45	0.8	0.05			4.01	こきざみあり		152-8		
78	5	鍮	銅	J5	151-22		(3.0)	0.9	2.2	0.1				4.79	鍮金 表面線刻	18C 後~	151-17		
78	6	鍮	銅	B1	152-東西 TR		3.2	1.0	2.0	0.2				8.63			152-18		
78	7	鍮	銅	A10	152-整地土3		3.05	1.1	2.7	0.3				25.18		17C 後半	152-19		
78	8	鍮	鉄	I8	152-228		6.0	(5.5)	2.35	0.5	0.4			23.61		~ 18C	152-4		
78	9	鍮	銅	J9	152-整地土2		7.6	-	2.85	0.8	0.35			79.25	5/6 残存		152-3		
78	10	鍮	銅	I9	152-178		(5.5)	(5.0)	(3.0)	(0.7)	0.4			64.47	1/3 残存	~ 18C 中	152-1		
78	11	切羽	銅	J5	151-108	18層	3.3	1.7	1.55	0.25	0.025			0.51	ミニチュア	18C 後~	151-5		
78	12	鍮	鉛	B9	152-攪乱15		3.6	(3.35)	1.3	0.3	0.3			14.2	ミニチュア		152-2		
78	13	小柄 小刀	刃部鉄 柄部銅	H7	152-整地土1		(9.9)	-	-	-	9.6	1.45	0.4	31.31	小柄のみ 表面剥離		152-10		
78	14	小柄 小刀	銅	B1	152-2	水路 埋土	18.88	9.25	1.2	0.3	9.5	1.4	0.5	36.02	植物柄の背景に魚々子	17C ~ 近代	152-11		
78	15	小柄 小刀	銅	C10	152-2	南側 裏込土	-	-	-	-	9.65	1.4	0.5	24.06	小柄のみ 一部剥離 一部鍮金残る 点々で一部 蔓草模様か描かれる	17C ~	152-13		
78	16	小柄 小刀	銅	F10	151-5		-	-	-	-	6.25	1.4	0.3	5.47	小柄のみ	~ 18C 中	151-9		
78	17	小柄 小刀	刃部鉄 柄部銅	C1	152-2	水路 埋土	15.55	5.7	1.1	0.2	9.85	1.45	0.4	34.18	鍮金 痕と蟹の意匠 背景に魚々子	17C ~ 近代	152-12		
78	18	小柄 小刀	銅	B1	152-整地土4		-	-	-	-	9.95	1.4	0.5	23.89	五三桐の紋	17C 前半	152-14		
78	19	小札	鉄	J6	151-227	3層以下	(3.3)	1.8	0.2					2.94		17C ~ 18C 前	151-26		
78	20	鍮	鉄	J9	152-32	第1砂利面 下盛土	5.0	2.95	1.0	1.0	0.45	0.4		11.63	盾割鍮	17C 前~	152-15		
78	21	彈丸	鉛	B1	152-整地土4		2.55	2.5						89.7		17C 前半	152-25		
78	22	彈丸	鉄	E9	151-表土	攪乱	1.65	1.6						10.05			151-23		
78	23	彈丸	鉛	I5-I6	151-排水溝		1.3	1.25						10.45			151-22		
78	24	彈丸	鉛	J6	151-108	11層	1.25	1.25						9.63		18C 後~	151-20		
78	25	彈丸	鉛	A9	152-311		1.25	1.2						10.09		-	152-24		
78	26	彈丸	鉛	D9	151-表土		1.25	1.2						8.54			151-21		

第37表 生産具類観察表

図面 番号	挿図 番号	種別	属性	出土地点			計測値										備考	出土遺構の主 な遺物の時期	金属 番号
				地区	遺構番号	層位	cm							g					
							全長	幅	厚	頭高	頭幅			重さ					
79	1	釘	鉄	J6	151-100	1層	2.02	0.18	0.18	(0.35)	0.25				0.24	巻頭釘	18C 後~	151-26	
79	2	釘	鉄	J5	151-108	13層	2.3	0.2	0.18	(0.48)	0.35				0.31	巻頭釘	18C 後~	151-13	
79	3	釘	鉄	J8-9	152-166		2.2	0.3	0.2	0.4	0.7				0.49	巻頭釘 先欠	18C 後半~	152-43	
79	4	釘	鉄	B10-1	152-191		3.35	0.3	0.2	0.3	0.8				0.7	巻頭釘	17C 後	152-42	
79	5	釘	鉄	J5	151-108	13層	3.68	0.3	0.3	(0.6)	0.3				1.08	巻頭釘	18C 後~	151-11	
79	6	釘	鉄	J5	151-108	32層	3.7	0.3	0.25	(0.8)	0.3				1.06	巻頭釘 頭欠	18C 後~	151-33	
79	7	釘	鉄	C1	152-2	水路埋土	3.85	0.4	0.2	0.4	(0.8)				1.27	巻頭釘	17C ~ 近代	152-47	
79	8	釘	鉄	J5	151-108	29層以下	3.9	0.3	0.25	0.7	0.25				0.75	巻頭釘	18C 後~	151-10	
79	9	釘	鉄	J5	151-108	14層	3.9	0.35	0.25	0.9	0.2				1.95	巻頭釘	18C 後~	151-31	
79	10	釘	鉄	J5	151-108	29 ~ 33層	4.95	0.3	0.3	0.1	0.2				1.14	巻頭釘	18C 後~	151-38	
79	11	釘	鉄	C2	152-表土		4.07	0.3	0.3	0.55	(0.7)				1.16	巻頭釘		152-17	
79	12	釘	鉄	J5	151-108	14層	4.4	0.3	0.3	1.0	0.3				1.4	巻頭釘	18C 後~	151-32	
79	13	釘	鉄	C2	152-東壁	整地土5下	4.6	0.35	0.3	0.25	(0.7)				1.18	巻頭釘		152-40	
79	14	釘	鉄	F10	151-5		4.75	0.5	0.3	1.05	0.4				2.11	巻頭釘	~ 18C 中	151-24	
79	27	釘	鉄	J5	151-108	6層以下	8.4	0.5	0.4	1.2	0.4				7.65	巻頭釘	18C 後~	151-28	
79	26	釘	鉄	B9	152-32	第1砂利面 下盛土	7.9	0.45	0.4	0.5	0.9				4.78	巻頭釘	17C 前~	152-19	
79	25	釘	鉄	J5	151-108	6層以下	7.6	0.4	0.35	1.05	0.2				5.28	巻頭釘	18C 後~	151-29	
79	24	釘	鉄	J6	151-107	3層	7.6	0.5	0.4	1.1	0.3				5.1	巻頭釘	18C 後~	151-27	
79	23	釘	鉄	A9	152-32	第1砂利面 下盛土	7.53	0.5	0.4	0.5	1.6				8.22	巻頭釘 先欠	17C 前~	152-45	
79	22	釘	鉄	I6	151-226		7.5	0.6	0.45	(1.9)	0.6				5.63	巻頭釘 先端折	17C ~ 18C 前	151-35	
79	21	釘	鉄	J5	151-108	13層	7.3	0.45	0.3	1.1	0.3				4.24	巻頭釘	18C 後~	151-30	
79	20	釘	鉄	C8	151-3	井戸内10層	6.6	0.5	0.4	1.3	0.35				5.24	巻頭釘	~ 近代	151-23	
79	19	釘	鉄	A9	152-32	第1砂利面 下盛土	5.75	0.5	0.4	0.3	1.05				4.7	巻頭釘 先欠	17C 前~	152-44	
79	18	釘	鉄	J6	151-197		(5.4)	0.65	0.4	1.4	0.3				8.08	巻頭釘	~ 18 中	151-34	
79	17	釘	鉄	J5	151-108	29 ~ 33層	5.4	0.4	0.38	0.95	0.35				2.84	巻頭釘	18C 後~	151-39	
79	16	釘	鉄	A9	152-263		5.0	0.4	0.28	0.3	1.1				3.29	巻頭釘	~ 17C 中	152-41	
79	15	釘	鉄	D4	161-4-1		5.05	0.3	0.2	(0.7)	(0.2)				1.62	巻頭釘	18C 後~	161-48	
79	35	釘	鉄	C1	152-2	水路埋土	16.9	0.8	0.63	(1.0)	(1.7)				27.61	巻頭釘	17C ~ 近代	152-20	
79	28	釘	鉄	-	151-整地土1	TR18 12層	8.45	0.45	0.45	1.2	(0.4)				5.82	巻頭釘		151-36	
79	29	釘	鉄	B1	152-81 内部	整地土2	8.5	0.4	0.35	(0.4)	(0.6)				5.3	巻頭釘 先欠	18C 後半~	152-16	

第5章 金属製品

図面 番号	挿図 番号	種別	属性	出土地点			計測値								備考	出土遺構の主 な遺物の時期	金属 番号
				地区	遺構番号	層位	cm						g				
79	30	釘	鉄	C1	152-2	水路埋土	8.6	0.4	0.4	0.8	(1.3)			5.04	巻頭釘	17C～近代	152-21
79	31	釘	鉄	J9	152-235		8.65	0.45	0.3	0.6	1.11			4.73	巻頭釘	17C前	152-18
79	32	釘	鉄	C10	152-2	水路埋土	8.7	0.5	0.4	0.7	1.4			8.35	巻頭釘 先欠	17C～近代	152-46
79	33	釘	鉄	F10	151-5		10.2	0.5	0.35	0.9	1.15			5.98	巻頭釘	～18C中	151-14
79	34	釘	鉄	D9	151-23		11.6	0.55	0.4	1.2	0.4			10.98	巻頭釘 頭欠	～17C	151-25
79	36	釘	鉄	J5	151-108	13層	2.85	0.3	0.2	0.6	0.3			0.54	頭巻釘	18C後～	151-12
79	37	釘	鉄	J5	151-108	29～33層	3.1	0.28	0.2	0.6	0.2			0.59	頭巻釘	18C後～	151-15
79	38	釘	鉄	-	151-整地土1	TR18 12層	4.6	0.45	0.25	0.9	0.35			1.52	頭巻釘		151-37
79	39	釘	鉄		151-排土中		6.1	0.5	0.45	0.8	0.4			4.21	頭巻釘		151-9
79	40	釘	鉄	D4	161-4-1		7.15	0.5	0.4	(0.8)	(0.8)			5.88	頭巻釘	18C後～	161-22
							全長	幅	厚	頭高	頭幅						
79	41	釘	鉄	B1	152-整地土3		4.05	0.8	0.8	(0.1)	(0.35)			3.89	木質・座金残る 頭欠	17C後半	152-57
79	42	釘	鉄	A10	152-整地土3		(3.4)	0.6	0.5	0.8	1.3			2.56	先欠 木質残る	17C後半	152-58
							高	奥行	幅	最大厚							
79	43	釘	鉄	A10	152-32	第1砂利面 下盛土	4.35	(4.1)	0.45	0.5				3.62	折れ合釘 先欠	17C前～	152-55
							全長	幅	厚	頭径	頭幅						
79	44	釘	鉄	I5-J5-J6	151-表土		3.5	0.4	0.4	1.1	0.5			4.06	環状釘		151-52
79	45	釘	鉄	-	151-整地土1	TR18 12層	3.3	0.75	0.65	(1.0)	0.8			8.61	環状釘		151-53
79	46	釘	鉄	A9	152-226		5.2	0.55	0.7	1.0	0.8			8.37	環状釘 ひねり	～17C中	152-54
							全長	幅	厚	頭高	頭径						
79	47	釘	鉄	C10	152-2南側	整地土2	10.3	0.6	0.6	0.8	1.3			23.57	皆折釘 先欠		152-49
79	48	釘	鉄	G6	152-攪乱		11.0	0.5	0.5	0.6	1.3			18.73	皆折釘		152-50
79	49	釘	鉄	C1	152-146		13.4	0.4	0.5	(0.5)	(0.9)			17.43	皆折釘	～17C中	152-51
							長	最大幅	高								
79	50	金槌	鉄	J6	151-137		2.3	2.1	2.0					74.4	木質残る	18C後～	151-7
							全長	全高	体部高	体部厚							
79	51	鏝	鉄	C10	152-2	上層	15.4	4.1	0.7	0.6				60.47	手違鏝	18後～近代	152-3
79	52	鏝	鉄	C10	152-2	上層	12.1	4.1	1.0	0.75				62.87	手違鏝	18後～近代	152-4
79	53	鏝	鉄	C10	152-2	上層	15.2	3.2	0.6	0.6				41.76	手違鏝	18後～近代	152-2
79	54	鏝	鉄	B1	152-81内部	整地土2	(7.9)	4.3	1.17	0.8				48.89	角鏝 半欠	18C後半～	152-5
79	55	鏝	鉄	J8	152-238		7.8	3.2	0.3	0.7				10.59		～17C中	152-6
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	体部長	体部径	茎部長				
80	1	鑿	鉄	B1	152-81内部	整地土2	17.5	6.95	1.0	0.4	7.1	0.85	(3.35)	42.43	柄の木質残る	18C後半～	152-67
80	2	鑿	鉄	B10	152-整地土2		(12.5)	4.7	0.5	0.7	5.1	0.85	2.65	31.08	柄の木質残る		152-68
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚				
80	3	小刀	鉄	C10	152-整地土3		(13.5)	6.75	1.8	0.2	6.7	1.0	0.2	12.32	先端欠	17C後半	152-60
							全長	最大幅	最大厚								
80	4	錐	鉄	J5	151-108	13層	9.05	0.35	0.3					3.98	錐 刃部のみ	18C後～	151-8
							全長	幅	最大厚								
80	5	鏟	鉄	J5	151-108	28層	8.05	1.7	0.3					13.9		18C後～	151-75
							高	幅	径	環部径							
80	6	鈎鈎	銅	I5-I6-J6	151-TR12		5.0	2.7	0.5	1.15				13.39			151-65
80	7	鈎鈎	銅	A9	152-32	第1砂利面下 盛土	5.3	3.8	0.3	0.8				4.77		17C前～	152-66
80	8	鈎鈎	鉄	I1	161-110		5.5	5.6	0.6	1.3				17.51		18C	161-337
							高	最大幅	体部長	体部径	爪部長	爪部径					
80	9	鈎状 製品	鉄	J6	151-整地土1		(8.3)	10.0	5.9	0.7	5.45	0.6		42.01			151-1
							縦	横	厚	最大幅	最大厚						
80	10	鋤先	鉄	J6	151-TR19	2層	25.5	10.8	0.35	12.3	1.1			234.0			151-79
80	11	鋤先	鉄	D8	151-28	3層	(18.9)	-	(0.4)	(3.2)	(0.8)			73.87		18C後～	151-78
80	12	鋤先	鉄	J10	152-整地土3		(10.5)	13.6	0.8					188.0	刃部のみ	17C後半	152-76
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚				
80	13	手鋸	鉄	E9	151-道路I上 層造成土		6.6	(3.9)	(5.2)	0.3	4.6	2.1	0.5	53.59	1/2残存		151-77
							全長	幅	厚	頭高	頭径						
80	14	鋸	銅	D8	151-TR4		5.1	0.2	0.2	0.35	0.85			2.87	丸頭鋸		151-71
80	15	鋸	鉄	B10	152-81内部	整地土2	3.75	0.6	0.6	0.55	1.5			7.44	丸頭鋸	18C後半～	152-72
80	16	鋸	銅	J6	151-100	1層	2.3	0.1	0.15	-	0.95			0.68	平頭鋸	18C後～	151-69
80	17	鋸	銅	J6	151-100	1層	2.25	0.15	0.15	-	0.9			0.59	平頭鋸	18C後～	151-70
							全長	幅	厚	刃部長	刃部幅	刃部厚					
80	18	斧	鉄	B10	152-整地土4		10.7	3.7	3.6	5.2	(5.7)	2.9		372.0		17C前半	152-80
							全長	最大幅	厚								
80	19	楔	鉄	I5	151-整地土1	南側排水溝 2 層	5.6	1.5	0.7					20.79			151-59
80	20	矢	鉄	J9	152-整地土2		9.0	3.0	1.2					102.41			152-64
							全長	径									
80	21	錘	鉄	-	151-259	-	5.8	1.1						19.25		～18C前	151-82
80	22	錘	鉄	-	151-259	-	5.5	0.9						16.76		～18C前	151-83
							全長	最大幅	刃部長	刃部径	茎部長	茎部幅	茎部厚				
80	23	箱	鉄	C3	161-包含層		8.3	2.0	2.7	0.3	5.1	0.85	0.2	13.07	目釘孔1		161-81

第38表 煙管観察表

図面番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値							備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号
				地区	遺構番号	層位	cm									
							全長	高	肩部径	火皿径	火皿高	肩部長	重さ			
81	1	雁首	銅	I9	152-32 東側	152-整地土 3	6.9	3.85	0.9	1.65	0.9	2.45	6.39	肩付 補強帯付	17C 後半	152-18
81	2	雁首	銅	J9	152-261		6.65	2.35	0.9	1.4	0.8	2.3	8.1	肩付 補強帯付 火皿孔	～17C 中	152-17
81	3	雁首	銅	B1	152-整地土 5		5.0	2.75	0.75	1.25	0.8	1.95	5.04	鍍金 象嵌 火皿孔?		152-21
81	4	雁首	銅	B1	152-2	底面	7.18	2.6	0.9	1.6	0.9	2.1	8.18	肩付 一部鍍金あり	17C	152-11
81	5	雁首	銅	I8	152-228		5.1	3.5	0.9	1.5	0.9	1.5	4.1	肩付 補強帯付 火皿孔	～18C	152-16
81	6	雁首	銅	B1	152-2	水路埋土	8.12	4.7	0.8	1.6	1.0	-	8.48	火皿孔	17C～近代	152-12
81	7	雁首	銅	B10	152-整地土 3		7.7	2.45	0.85	1.5	1.1	-	5.47		17C 後半	152-20
81	8	雁首	銅	C1	152-2	水路埋土	6.7	2.08	0.9	1.65	0.9	-	7.76	鍍金	17C～近代	152-13
81	9	雁首	銅	J5	151-攪乱 5		6.3	2.2	0.8	1.3	0.7	-	5.16			151-7
81	10	雁首	銅	B7	151-整地土	砂層	5.2	2.05	0.95	0.8	0.9	-	10.0	羅字一部残存		151-8
81	11	雁首	銅	J8・J9	152-166		4.2	1.8	0.95	1.05	0.55	-	3.94		18C 後半～	152-15
81	12	雁首	銅	B1	152-整地土 3		4.3	1.89	1.0	1.45	0.7	-	7.69	一部鍍金	17C 後半	152-19
81	13	雁首	銅	A6	151-TR17		3.95	1.95	0.95	1.75	1.0	-	6.39	羅字一部残存		151-9
81	14	雁首	銅	B1	152-2		3.2	2.1	0.96	1.6	0.8	-	4.93		17C～近代	152-10
81	15	雁首	銅	C1	152-43		4.35	1.6	0.9	1.25	0.6	1.6	4.9	肩付 M29 とセット	18C 後半～	152-14
							全長	胴側径	口側径	胴部長						
81	16	吸口	銅	C1	152-43		4.75	1.0	0.5	-			4.18	胴なし 羅字一部残存 M14 とセット	18C 後半～	152-29
81	17	吸口	銅	B1	152-整地土 5		9.6	0.9	0.25	2.6			6.63	卍と三巴模様陰刻		152-37
81	18	吸口	銅	A9	152-263		7.4	1.1	0.25	2.4			6.89	胴付 鍍金	～17C 中	152-31
81	19	吸口	銅	J6	151-表土		7.65	1.4	0.5	-			9.03	鍍金 羅字一部残存		151-25
81	20	吸口	銅	B1	152-整地土 2		4.3	1.1	0.55	1.3			5.96			152-34
81	21	吸口	銅	I5・I6・J5	151-表土		7.25	0.9	0.55	-			10.1	鍍金 羅字一部残存		151-26
81	22	吸口	銅	C7	151-整地土	ゴミ層 1	3.6	0.85	0.55	-			2.7			151-24
81	23	吸口	銅	J6 TR12 西	151-整地土 2	TR12 4 層	5.75	1.15	0.3	-			3.93	鍍金		151-23
81	24	吸口	銅	D1	152-整地土 2		8.75	1.0	0.4	-			6.82	胴部八角形		152-35
81	25	吸口	銅	G8	152-48		7.7	0.95	0.35	-			4.53		18C 後半～	152-30
81	26	吸口	銅	C1	152-整地土 1		6.5	0.85	0.3	-			4.77	羅字一部残存		152-33
81	27	吸口	銅	H7	152-表土	整地土 1	5.7	0.85	0.25	-			3.56			152-32
81	28	吸口	銅	C1	152-2		6.15	0.8	0.25	-			5.21		17C～近代	152-28
81	29	吸口	銅	C1	152-2		6.4	0.9	0.45	-			5.85	鍍金	17C～近代	152-27
81	30	吸口	銅	J5	151-108	6 層以下	5.4	0.8	0.3	-			3.75	鍍金	18C 後～	151-22
81	31	吸口	銅	B1	152-整地土 4		4.7	0.75	0.2	-			2.97	鍍金	17C 前半	152-36
							全長	胴側径	口側径	胴部長	高					
81	32	延煙管	銅	I9	152-整地土 2		11.1	-	0.2	-	(2.0)		6.46	火皿欠 鍍金		152-38

第39表 日用品（簪・庖丁・迷子札等）観察表

図面番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値							備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号
				83	遺構番号	層位	cm									
							全長	肩幅	厚	脚長	脚幅	脚厚	重さ			
83	1	簪	銅	-	151-整地土 1	TR18 12 層	17.2	0.9	0.1	14.5	0.15	0.15	7.6			151-1
83	2	簪	銅	C7	151-整地土	ゴミ層 1	12.9	0.6	0.15	10.6	0.15	0.1	4.99			151-2
83	3	簪	銅	B1	152-2	上層	13.2	0.7	0.15	10.5	0.15	0.15	4.93	玉飾欠	18 後～近代	152-3
83	4	簪	銅	J9	152-攪乱 20		14.5	0.7	0.08	11.2	0.1	0.15	3.62	玉飾欠		152-4
83	5	簪	銅	B10	152-整地土 3		19.3	0.7	0.15	16.5	0.15	0.05	5.83	鍍金	17C 後半	152-5
							全長	最大幅	最大厚							
83	6	耳かき	銅	C1	152-2	水路埋土	9.8	0.35	0.2				2.86	茶匙形意匠	17C～近代	152-6
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚						
								柄部長	柄部幅	柄部厚						
83	7	毛垂	鉄	B8・C7・C8	151-表土		12.2	6.95	1.2	0.3			14.8	刃部銘有 「八」		151-12
								5.25	1.15	0.15						
							全長	最大幅	最大厚							
83	8	毛抜き	銅	J6 TR18 東	151-整地土 2	TR18 16 層	6.8	0.6	0.18				3.89			151-40
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	握厚					
83	9	鋏	鉄	G6	152-整地土 1		(10.8)	5.6	1.4	0.2	0.45		11.94			152-41
							高	軸径	受部径	受部厚						
83	10	紡錘車	鉄	F10	151-5		(5.5)	0.3	(3.7)	0.1			7.69		～18C 中	151-37
							全長	径	頭部径	孔部径						
83	11	針	鉄	A9	152-263		4.2	0.1	-	0.04			0.08	縫針	～17C 中	152-20
83	12	針	銅	C1	152-31		(2.9)	1.2	0.4	-			0.58	待針	(18C 後半～)	152-19
							径	幅	厚							
83	13	指貫状製品	銅	B8・C7・C8	151-表土		1.4	1.0	0.05				2.21			151-40
83	14	指貫状製品	銅	J6	151-107	3 層	1.4	0.7	0.025				0.61		18C 後～	151-39
							全長	刃部長	刃部幅	刃部厚						
								茎部長	茎部幅	茎部厚						
83	15	庖丁	鉄	B1	152-2	上層	(15.9)	(13.2)	0.37	0.4			51.53		18 後～近代	152-55
								(2.1)	0.95	0.25						
83	16	庖丁	鉄	I9	152-32	第1砂利面 下盛土	(19.2)	12.9	(4.2)	(0.4)			90.34	出刃	17C 前～	152-52
								0.6	0.7	0.25						
83	17	庖丁	鉄	J6 TR19 東	151-整地土 1	TR19 4 層	(20.7)	(17.1)	4.7	0.4			84.93	出刃		151-54
								(2.2)	0.85	0.6						
83	18	庖丁	鉄	C8	151-4	4 層	(18.1)	-	(4.5)	0.45			46.35	把手木片残る	～近代	151-51
								11.0	2.9	1.9						
83	19	庖丁	鉄	I9	152-整地土 1		(17.4)	(11.5)	4.4	0.65			81.33	出刃		152-53
								5.8	0.8	0.4						
							全長	径								
83	20	錘	鉛	J6	151-197		5.55	0.85					13.77	分銅	～18 中	151-2
83	21	錘	鉛	C2	152-181		3.9	0.55～0.7					5.32		18C	152-58

第5章 金属製品

図面番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号	
				地区	遺構番号	層位	cm									
83	22	錘	鉛	J6	151-107	3層	3.25	0.7					3.52	筒状製品 素材?	18C後～	151-1
83	23	錘	鉛	A10	152-整地土3		2.7	-	0.2				9.11		17C後半	152-4
83	24	錘	鉛	A9	152-整地土2		4.0	(1.0)	0.35				3.52			152-3
							全長	最大幅	最大厚							
83	25	針金状製品	銅	C8	151-3	井戸内7層目	(3.6)	4.45	0.15				0.8		～近代	151-23
83	26	針金状製品	鉄	J5	151-108	29層以下	(6.7)	4.8	0.17				2.69		18C後～	151-22
83	27	針状製品	鉄	J6	151-100	1層	9.6	2.7	0.12				0.96		18C後～	151-21
83	28	針状製品	鉄	F10	151-184		14.95	0.4	0.13				4.97		17C	151-24
							全長	最大幅	最大厚							
83	29	不明	鉄	-	151-整地土4	TR12 12層	10.7	0.4	0.4				8.81	棒状製品	18C～	151-73
							長	最大幅	厚							
83	30	不明	鉄	A10	152-整地土3		14.7	6.7	0.6				56.41		17C後半	152-74
							札部長	札部幅	札部厚	環部径	環部太					
82		迷子札	銅	I6	151-表土		5.05	3.15	0.5	0.75	0.15		8.13	表線画「松と猪」 裏「村尾眞兵衛伴 豊三郎」		151-39

第40表 日用品（鍋・火箸・匙等）観察表

図面番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号	
				地区	遺構番号	層位	cm									
84	1	蓋	鉄	C1	152-2	上層	8.25	(15.6)	2.0				154.01	鋳造品 43と同一 紐あり	18後～近代	152-42
84	1	蓋	鉄	C1	152-2	水路埋土	4.4	(15.6)	(1.2)				101.01	鋳造品 42と同一	17C～近代	152-43
84	2	蓋	鉄	C1	152-2	水路埋土	5.7	(14.2)	(1.15)				89.34	鋳造品 1/4 残存	17C～近代	152-44
							口径	底径	高							
84	3	鍋	鉄	F9	151-道路1 上層造成土		(48.2)	-	(4.1)				86.03	鋳造品		151-17
84	4	鍋	鉄	C8	151-3	井戸組内	(42.2)	-	(3.2)				10.5	鋳造品	～近代	151-16
84	5	鍋	鉄	H8	152-表土	整地土1	-	(16.6)	(4.8)				140.82	鋳造品 脚3本		152-18
							口径	胴径	高							
84	6	鉄瓶	鉄	A10	152-整地土1		(8.2)	(15.4)	(5.2)				41.25	鋳造品		152-34
84	7	鉄瓶	鉄	I6	151-123	1層	(7.2)	(14.3)	(4.1)				36.92	鋳造品	18C中～	151-15
							杓部径	杓部厚	柄部長	柄部幅	柄部厚					
84	8	杓	銅	B1	152-2		(9.4)	0.05	27.7	0.8	0.15		44.58		17C～近代	152-14
							全長	幅	厚	環状径	環状厚					
84	9	火箸	鉄	J6	151-TR5		26.8	0.5	0.5	-	-		23.0			151-33
84	10	火箸	鉄	H7	152-79		25.8	0.65	0.6	-	-		30.11		～近代	152-31
84	11	火箸	鉄	J6	151-TR5	2層	(14.9)	0.45	0.45	3.3	0.2		15.63			151-32
							高	横	最大厚							
84	12	火打金	鉄	C1	152-整地土3		3.8	(4.8)	0.2				11.56		17C後半	152-25
							全長	匙部幅	匙部厚	柄部長	柄部幅	柄部厚				
84	13	匙	銅	C1	152-整地土3		19.1	1.7	0.05	(17.0)	0.9	0.15	33.7	柄先端に円孔	17C後半	152-48
84	14	匙	真鍮	C1	152-2	上層	18.5	2.35	0.025	14.2	0.6	0.35	20.14	薬匙 鍍金	18後～近代	152-50
84	15	匙	銅	D2	152-北掘乱		17.9	2.5	0.05	(14.1)	0.6	0.1	16.49	薬匙		152-49
84	16	匙	銅	B1	152-2	水路埋土	(8.4)	2.3	0.05	(8.2)	-	-	4.91	袋状柄付き	17C～近代	152-46
84	17	匙	銅	J8	152-表土	整地土1	6.28	3.05	0.05	-	-	-	6.36	袋状匙		152-47
							径	孔径	厚							
84	18	薬研	鉄	J9	152-整地土2		17.9	1.9	0.7				291.03	鋳造品 3/4 残存		152-57
							長径	短径	全高	器高						
84	19	十能	銅	G6	152-表土	整地土1	(11.8)	11.1	(4.1)	2.7			98.74			152-13

第41表 調度品・その他観察表

図面番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号	
				地区	遺構番号	層位	cm									
85	1	引手金具	鉛	J10	152-整地土3		1.2	4.65	0.9				24.29	穿孔あり	17C後半	152-28
85	2	引手金具	鉛	B10	152-整地土3		1.6	4.9	0.7				23.49	穿孔あり	17C後半	152-29
85	3	引手金具	銅	C8	151-3	石組内5層以下	2.1	5.32	0.2				2.35		～近代	151-26
85	4	引手金具	銅	J5	151-108	20層	4.3	7.6	0.45				17.93		18C後～	151-27
							縦	横	奥行							
85	5	襪引手金具	鉛	I8	152-表土	整地土1	8.2	5.5	0.75				45.57	植物・蝶等の模様		152-30
							最大径	厚	鍍長径	鍍短径						
85	6	環付金具	銅	J6	151-100	2層	2.65	0.05	2.0	1.5			6.93	鉄状金具・菊座金	18C後～	151-61
							最大径	最大厚								
85	7	座金	銅	J6	151-100	2層	2.6	0.5					2.25	菊座金	18C後～	151-62
85	8	座金	銅	J8	152-213		2.3	0.02					0.98	菊座金	～17C中	152-63
							縦	横	最大厚	厚						
85	9	鍍金具	鉄	J5	151-108	6層以下	4.5	5.2	0.65	0.1			14.58	鍍付鍍金具	18C後～	151-5
85	10	鍍金具	銅	I9	152-表土	整地土1	2.5	4.3	0.55	-			8.34	鍍付鍍金具		152-10
							全長	全高	最大厚							
85	11	錠前	鉄	J8	152-206		(4.7)	2.4	0.9				10.57		～17C中	152-56
							縦	横	厚							
85	12	鍍金具	銅	J5	151-108	6層以下	(4.1)	2.6	0.1				6.33	鍍金	18C後～	151-6
85	13	鍍金具	銅	J5	151-108	6層以下	(5.7)	2.9	0.1				6.64	鍍金	18C後～	151-7
85	14	鍍金具	鉄	I9	152-表土	整地土1	5.6	5.95	0.1				10.36	三巴の周囲に連珠紋		152-8
							高	奥行	幅	最大厚						
85	15	額受金具	鉄	-	151-整地土1		2.8	4.3	0.9	0.5			6.28			151-56

第5章 金属製品

図面番号	挿図番号	種別	属性	出土地点			計測値						備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号	
				地区	遺構番号	層位	cm									
							径	高	厚			g				
85	16	鋳金具	銅	B1	152-2	裏込土	7.0	(0.5)	0.05				18.41	外形花卉状蓋状製品	17C ~	152-45
85	17	棒状製品	鉄	I5-16	151-排水溝(南)		18.19	0.8	0.12	0.2			6.41	平棒状		151-35
85	18	鋳金具	鉄	B1	152-整地土3		(5.0)	-	(6.6)	0.15	4.6	18.8			17C後半	152-9
85	19	焼印	銅	C1	152-攪乱37		縦	横	厚	高			58.33	「神二文字屋」		152-38
85	20	鋳金具	鉄	J5	151-108	13層	7.45	2.45	0.2				6.8		18C後~	151-11
85	21	針金状製品	鉄	J9	152-32	第4砂利面下盛土	3.5	3.7	0.3	1.3	2.9	8.34	鏝状製品 両端尖る	17C前~	152-36	

第42表 銭貨観察表

図面番号	挿図番号	銭文	初鑄年	材質	出土地点			計測値				備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号
					地区	遺構番号	層位	mm						
								径	内区径	孔径	重さ			
86	1	寛永通寶	1636	銅	-	151-整地土1	TR5 1層	2.42	1.96	0.59	2.36	古寛永		151-10
86	2	寛永通寶	1636	銅	C8	151-TR10		2.5	1.95	0.52	2.96	古寛永		151-11
86	3	寛永通寶	1636	銅	G9	151-表土		2.5	1.97	0.53	3.51	古寛永		151-12
86	4	寛永通寶	1636	銅	C1	152-2	水路埋土	2.37	1.89	0.55	3.37	古寛永	17C~近代	152-13
86	5	寛永通寶	1636	銅	C10	152-2	水路埋土	2.43	1.94	0.54	3.38	古寛永	17C~近代	152-14
86	6	寛永通寶	1636	銅	C10	152-2	水路埋土	2.42	1.92	0.54	2.95	古寛永	17C~近代	152-15
86	7	寛永通寶	1636	銅	B1	152-2	底面	2.45	1.95	0.51	3.6	古寛永 下星?	17C	152-16
86	8	寛永通寶	1636	銅	B1	152-2	底面	2.52	1.95	0.59	3.5	古寛永	17C	152-17
86	9	寛永通寶	1636	銅	B1	152-2	底面	2.46	1.95	0.5	4.38	古寛永	17C	152-18
86	10	寛永通寶	1636	銅	B10	152-81下	整地土2	2.46	2.01	0.48	3.66	古寛永	18C後半~	152-19
86	11	寛永通寶	1636	銅	B10	152-81下	整地土2	2.48	1.93	0.51	3.06	古寛永	18C後半~	152-20
86	12	寛永通寶	1636	銅	B10	152-81下	整地土2	2.5	1.95	0.53	3.01	古寛永	18C後半~	152-21
86	13	寛永通寶	1636	銅	B10・1	152-191		2.46	1.89	0.52	2.65	古寛永	17C後	152-22
86	14	寛永通寶	1636	銅	B1	152-255		2.48	1.98	0.54	2.89	古寛永	17C後	152-23
86	15	寛永通寶	1636	銅	I9	152-表土	整地土1	2.35	1.85	0.51	2.87	古寛永		152-24
86	16	寛永通寶	1636	銅	I8	152-表土	整地土1	2.43	1.92	0.48	3.71	古寛永		152-25
86	17	寛永通寶	1636	銅	J9	152-整地土2		2.5	1.97	0.51	3.24	古寛永		152-26
86	18	寛永通寶	1636	銅	B10	152-整地土2		2.5	2.0	0.5	3.61	古寛永		152-27
86	19	寛永通寶	1636	銅	B10	152-整地土2		2.42	1.95	0.54	2.6	古寛永		152-28
86	20	寛永通寶	1636	銅	B10	152-整地土2		2.37	1.92	0.51	2.64	古寛永		152-29
86	21	寛永通寶	1636	銅	J10	152-整地土3		2.5	2.05	0.53	3.27	古寛永	17C後半	152-30
86	22	寛永通寶	1636	銅	J10	152-整地土3		2.45	1.92	0.53	4.11	古寛永	17C後半	152-31
86	23	寛永通寶	1636	銅	J10	152-整地土3		2.49	1.98	0.53	3.1	古寛永	17C後半	152-32
86	24	寛永通寶	1636	銅	C1	152-整地土3		2.45	2.01	0.54	2.82	古寛永	17C後半	152-33
86	25	寛永通寶	1636	銅	A9	152-攪乱21		2.43	1.95	0.51	2.24	古寛永		152-34
86	26	寛永通寶	1636	銅	C1	152-表土		2.46	1.99	0.53	2.98	古寛永		152-35
86	27	寛永通寶	1636	銅	D2	152-表土		2.47	1.95	0.55	3.18	古寛永		152-36
86	28	寛永通寶	1636	銅	D4	161-4-1		2.37	1.85	0.53	1.65	古寛永	18C後~	161-37
86	29	寛永通寶	1636	銅	G10	161-112-4		2.46	1.94	0.56	3.34	古寛永	17C	161-38
86	30	寛永通寶	1668	銅	C1	152-2	水路埋土	2.58	2.1	0.55	3.13	文銭	17C~近代	152-45
86	31	寛永通寶	1668	銅	J9	152-165		2.53	2.1	0.57	3.59	文銭	18C後半~	152-47
86	32	寛永通寶	1668	銅	C1	152-整地土1		2.51	1.97	0.57	2.58	文銭		152-50
86	33	寛永通寶	1697	銅	-	151-整地土1		2.32	1.83	0.56	2.02	新寛永		151-40
86	34	寛永通寶	1697	銅	B7	151-整地土	砂層	2.45	1.93	0.58	2.98	新寛永		151-42
86	35	寛永通寶	1697	銅	C1	152-2	水路埋土	2.32	1.79	0.66	2.17	新寛永	17C~近代	152-43
86	36	寛永通寶	1697	銅	B1	152-2	水路埋土	2.3	1.86	0.6	2.64	新寛永	17C~近代	152-44
86	37	寛永通寶	1697	銅	G7	152-表土	整地土1	2.58	2.01	0.57	2.86	新寛永		152-48
86	38	寛永通寶	1697	銅	F7	152-整地土1		2.29	1.85	0.65	2.08	新寛永		152-49
86	39	寛永通寶	1697	銅	A10	152-整地土2		2.4	1.85	0.58	2.88	新寛永		152-51
86	40	寛永通寶	1697	銅	B10	152-整地土2		2.25	1.82	0.7	2.14	新寛永		152-52
86	41	寛永通寶	1697	銅	J9	152-攪乱20西TR		2.2	1.82	0.63	2.3	新寛永		152-54
86	42	寛永通寶	1697	銅	H7	152-西側排水溝		2.28	1.87	0.63	2.18	新寛永		152-55
86	43	寛永通寶	1697	銅	J6	151-137		2.25	1.73	0.62	1.63	新寛永 背「元」	18C後~	151-39
86	44	寛永通寶	1697	銅	B10	152-整地土4		2.25	1.66	0.52	2.18	新寛永 背「元」	17C	152-53
86	45	寛永通寶	1697	銅	J6	151-整地土1	TR19 4層	2.54	1.92	0.57	1.85	新寛永 背「佐」		151-41
86	46	寛永通寶	1739	鉄	J6	151-100	1層	2.34	1.82	0.59	2.24	鉄一文銭	18C後~	151-7
86	47	寛永通寶	1739	鉄	J6	151-100	1層	2.45	1.92	0.66	2.63	鉄一文銭	18C後~	151-8
86	48	寛永通寶	1739	鉄	J6	151-100	1層	2.43	1.92	0.56	2.85	鉄一文銭	18C後~	151-9
86	49	寛永通寶	1739	鉄	C1	152-2	水路埋土	2.42	1.9	0.63	1.77	鉄一文銭	17C~近代	152-46
86	50	寛永通寶	758	銅	D8	151-224		2.44	2.03	0.6	2.54	当十銭	17C	151-102
86	51	唐國通寶	959	鉄	B10	152-281		2.44	1.94	0.55	2.64	篆書	17C前	152-97
86	52	開元通寶	960	銅	I9	152-32	第3砂利面下盛土	2.41	1.94	0.62	2.04	真書	17C前~	152-5
86	53	開元通寶	960	銅	A1	152-整地土3		2.44	2.04	0.62	2.5	真書	17C後半	152-6
86	54	淳化元寶	990	銅	J6	151-100	6層	2.44	1.92	0.6	2.12	行書	18C後~	151-78
86	55	咸平元寶	998	銅	C10	152-2	水路埋土	2.45	1.84	0.6	3.46	真書	17C~近代	152-99
86	56	咸平元寶	998	銅	B10	152-整地土3		2.41	1.81	0.52	2.12		17C後半	152-100
86	57	祥符元寶	1009	銅	F10	151-5		2.4	1.79	0.48	2.83		~18C中	151-79
86	58	祥符元寶	1009	銅	J9	152-整地土3	整地土3	2.36	1.83	0.6	2.32		17C後半	152-81
86	59	祥符元寶	1009	銅	I9	152-整地土2	整地土2	2.4	1.88	0.49	2.75			152-80
86	60	天禧通寶	1017	銅	D8	151-224		2.32	1.82	0.58	2.3		17C	151-92
86	61	天禧通寶	1017	銅	J9	152-32	第2砂利面下盛土	2.42	1.89	0.66	3.0		17C前~	152-93
86	62	天禧通寶	1017	銅	I9	152-178		2.38	1.77	0.62	2.69		~18C中	152-94
86	63	天禧通寶	1017	銅	D1	152-整地土3		2.5	1.91	0.63	2.68		17C後半	152-95
86	64	天禧通寶	1017	銅	H7	152-攪乱26		2.45	2.03	0.62	2.29			152-96
86	65	天聖元寶	1023	銅	J8-9	152-166		2.49	1.97	0.66	3.02	篆書	18C後半~	152-90

第5章 金属製品

図面番号	挿図番号	銭文	初鑄年	材質	出土地点			計測値				備考	出土遺構の主な遺物の時期	金属番号
					地区	遺構番号	層位	mm		g				
								口径	高		厚			
86	66	天聖元寶	1023	銅	A10	152-135 南側	整地土 3	2.46	1.98	0.64	3.18	篆書		152-91
86	67	明通元寶	1032	銅	A9	152-整地土 2	整地土 2	2.45	1.91	0.62	2.5	篆書		152-98
86	68	景祐元寶	1034	銅	J10	152-整地土 3		2.47	1.88	0.64	2.87	真書	17C 後半	152-58
86	69	皇宋通寶	1038	銅	C1	152-2	水路埋土	2.5	1.86	0.66	3.0	真書	17C ~ 近代	152-72
86	70	皇宋通寶	1038	銅	J8	152-204		2.32	1.87	0.67	2.03	真書	~ 17C 中	152-73
86	71	皇宋通寶	1038	銅	J9	152-整地土 2		2.42	1.95	0.65	1.62	篆書		152-74
86	72	皇宋通寶	1038	銅	J8	152-整地土 2		2.38	1.67	0.61	2.82	真書		152-75
86	73	皇宋通寶	1038	銅	A10	152-整地土 2		2.42	1.85	0.64	2.8	真書		152-76
86	74	治平元寶	1064	銅	E9	151-道路 1 下層		2.28	1.86	0.59	2.61	真書	背下月	151-77
86	75	熙寧元寶	1068	銅	D1	152-北掘乱		2.39	1.87	0.64	2.52	篆書		152-101
86	76	元豊通寶	1078	銅	C1	152-2	水路埋土	2.49	1.82	0.69	3.28	行書	17C ~ 近代	152-60
86	77	元豊通寶	1078	銅	J10	152-整地土 3		2.44	1.88	0.66	3.01	行書	17C 後半	152-62
86	78	元豊通寶	1078	銅	C1	152-整地土 3		2.45	1.92	0.73	2.96	行書	17C 後半	152-63
86	79	元豊通寶	1078	銅	J・A10	152-223 南	整地土 3 ~ 4	2.41	1.9	0.66	3.44	行書		152-64
86	80	元豊通寶	1078	銅	J9	152-掘乱 20	西 TR	2.36	1.86	0.66	2.84	行書		152-65
86	81	元豊通寶	1078	銅	G10	161-包含層		2.42	1.85	0.5	3.53	行書		161-66
86	82	元祐通寶	1086	銅	C10	152-2	水路埋土	2.42	1.9	0.66	3.43	篆書	17C ~ 近代	152-67
86	83	元祐通寶	1086	銅	B1	152-2	底面	2.43	2.03	0.64	3.76	行書	17C	152-68
86	84	元祐通寶	1086	銅	A10	152-整地土 2		2.36	1.85	0.67	1.75	篆書		152-69
86	85	紹聖元寶	1094	銅	B10	152-333		2.44	1.8	0.68	2.78	行書		152-82
86	86	紹聖元寶	1094	銅	B1	152-整地土 2	整地土 2	2.42	1.85	0.69	3.4	篆書		152-83
86	87	紹聖元寶	1094	銅	J9	152-整地土 3	整地土 3	2.43	1.84	0.69	3.02	篆書	17C 後半	152-84
86	88	紹聖元寶	1094	銅	A10	152-整地土 4	整地土 4	2.41	1.88	0.63	2.18	篆書	17C 前半	152-85
86	89	元符通寶	1098	銅	D2	152-掘乱		2.42	1.94	0.65	2.85	篆書		152-59
86	90	聖宋元寶	1101	銅	J9	152-32	第 2 砂利面下盛土	2.41	1.95	0.65	2.09	篆書	17C 前 ~	152-86
86	91	聖宋元寶	1101	銅	C1	152-整地土 3	整地土 3	2.44	1.91	0.66	2.97	篆書	17C 後半	152-87
86	92	聖宋元寶	1101	銅	D1	152-整地土 3	整地土 3	2.37	1.83	0.69	2.64	行書	17C 後半	152-88
86	93	洪武通寶	1368	銅	D8	151-224		2.21	1.87	0.59	1.58		~ 17C 中	151-70
86	94	洪武通寶	1368	銅	C8	151-TR10		2.27	1.91	0.59	1.51			151-71
86	95	永樂通寶	1408	銅	D2	152-1	底面	2.49	2.06	0.53	3.15		18C 後半 ~	152-1
86	96	永樂通寶	1408	銅	J8	152-295		2.54	2.03	0.48	2.79		~ 17C 中	152-2
86	97	永樂通寶	1408	銅	J9	152-表土	整地土 1	2.46	2.0	0.48	2.29			152-3
86	98	永樂通寶	1408	銅	J9	152-整地土 3		2.49	2.03	0.48	3.25		17C 後半	152-4
86	99	慶長通寶	1596-1615	銅	J9	152-整地土 3		2.33	1.97	0.63	1.85		17C 後半	152-57
86	100	錢緡	1697	銅	A10	152-整地土 5		2.39	1.85	0.54	4.67	2 枚銹着		152-56
86	101	錢緡	1078	銅	D1	152-整地土 2		2.45	1.87	0.65	4.47	行書 2 枚銹着		152-61
86	102	錢緡	1101	銅	J・A10	152-223 南	整地土 3 ~ 4	2.41	2.02	0.63	6.29	篆書 2 枚銹着		152-89
86	103	錢緡		銅	J・A10	152-223 南	整地土 3 ~ 4	2.34	1.8	0.57	29.88	9 枚銹着 両面とも裏		152-103
86	104	雁首銭		銅	J5	151-108	6 層以下	2.25	1.55	0.7	2.76	一部鍍金	18C 後 ~	151-104
86	105	雁首銭		銅	C1	152-2	水路埋土	2.05	1.25	0.7	2.18		17C ~ 近代	152-105
86	106	雁首銭		銅	B1	152-2	水路埋土	2.1	1.55	0.4	1.79		17C ~ 近代	152-106

第 43 表 鑄造関連遺物観察表

図面番号	挿図番号	種別	出土地点			計測値				備考	出土遺構の主な遺物の時期	遺物番号	
			地区	遺構番号	層位	cm		g					
						口径	高		厚				重さ
87	1	取瓶・埴塼	C1	152-291		3.3	1.5	0.35		8.64		17C 前	T-18
87	2	取瓶・埴塼	C1	152-整地土 3		(3.8)	1.4	0.7		7.28		17C 後半	T-23
87	3	取瓶・埴塼	B1	152-2		4.2	1.8	0.6		19.6		17C ~ 近代	T-13
87	4	取瓶・埴塼	D1	152-整地土 2		4.4	1.9	0.7		18.25			T-20
87	5	取瓶・埴塼	J9	152-205		(5.0)	2.2	0.9		19.88		~ 17C 中	T-17
87	6	取瓶・埴塼	C1	152-2	上層	(4.8)	1.4	0.7		14.44	152-4-4-C13・152-2-12-C13 接合	18 後 ~ 近代	T-14
87	7	取瓶・埴塼	B1	152-2	上層	(5.5)	2.6	0.5		10.2		18 後 ~ 近代	T-12
87	8	取瓶・埴塼	B10	152-整地土 3		6.0	3.2	0.8		46.49		17C 後半	T-22
87	9	取瓶・埴塼	C2	152-整地土 3		5.2	3.0	1.3		67.48		17C 後半	T-24
87	10	取瓶・埴塼	B1	152-整地土 3		6.2	3.0	1.1		70.84		17C 後半	T-25
87	11	取瓶・埴塼	C1	152-2		(6.8)	2.9	0.8		28.6		17C ~ 近代	T-15
87	12	取瓶・埴塼	B1	152-整地土 3		6.8	3.4	0.9		62.76		17C 後半	T-21
87	13	取瓶・埴塼	C1	152-整地土 2		-	3.0	1.0		12.74			T-19
87	14	取瓶・埴塼	E5	161-包含層 III		-	(1.7)	7.5		2.78	残存率 6 分の 1 外面溶着物 手づくね 碗形		T161-37
87	15	取瓶	J6	151-整地土 2	TR18 17 層	-	(3.4)	0.4		13.30	鉄碗口縁片に付着		T151-9
87	16	取瓶	C1	152-2		4.6	1.8	0.4		27.21	型づくり	17C ~ 近代	T-16
						長	径						
88	1	羽口	B10	152-233		(23.4)	11.8			118.0		~ 18C	T-6
88	2	羽口	J9	152-整地土 2		(22.6)	11.2			2808.0	外面に送風孔上の溝あり		T-9
88	3	羽口	J9	152-整地土 2		(18.4)	11.8			2130.0			T-10
88	4	羽口	J9	152-整地土 2		(22.1)	11.8				端面に突起あり		T-8
88	5	羽口	J9	152-210		(21.2)	11.0			2309.0		~ 17C 中	T-5
88	6	羽口	J9	152-整地土 3		(8.0)	11.8			10.99		17C 後半	T-7
88	7	土製羽口	D5	161-382-1		(3.4)	(4.5)			12.13	被熱変色	古代	T161-36
						縦	横	厚					
89	1	鑄型	B1	152-2	上層	3.9	11.9	2.0		204.23	引手金具	18 後 ~ 近代	T-1
89	2	鑄型	G7	152-整地土 1		2.4	4.5	6.6		162.41	引手金具		T-2
89	3	鑄型	D4	161-1		3.7	6.2	2.6		103.82	引手金具	19C	T-3
89	4	鑄型	D4	161-4		4.2	5.7	0.9		48.09	引手金具	18C 後 ~	T-4
						縦	横	厚					
90	1	鉾滓	H1	161-271		5.8	4.4	2.5		63.14		古墳 ~ 古代	T161-1
90	2	鉾滓	E5	161-337		7.0	5.4	2.3		76.3		近世	T161-2
90	3	鉾滓	H1	161-包含層 III		5.6	6.85	1.7		85.24	碗形 炭を含む		T161-3
90	4	鉾滓	H1	161-包含層 III		3.9	5.8	0.9		40.8			T161-4
90	5	鉾滓	F9	151-105	下層	6.8	4.7	2.4		55.29		17C	T151-5

第5章 金属製品

図面 番号	挿図 番号	種別	出土地点			計測値				備考	出土遺構の主な 遺物の時期	遺物 番号	
			地区	遺構番号	層位	cm			g				
90	6	鉍滓	F10	151-130		6.8	5.2	1.6		79.45		18C 後～	T151-6
90	7	鉍滓	F9	151-281		5.0	4.0	2.2		50.92			T151-7
90	8	鉍滓	-	151-整地土 5	TR19 20 層	5.35	4.0	2.25		40.25			T151-10
90	9	鉍滓	D8	151-包含層		4.3	4.0	1.3		52.46			T151-11
90	10	鉍滓	E9	151-古代以降の堆積 土		4.8	3.8	1.8		40.55			T151-12
90	11	鉍滓	D8	151-古代以降の堆積 土		6.9	6.4	2.7		100.97			T151-13
90	12	鉍滓	J9	152-32	第2砂利面 下盛土	6.0	6.1	4.5		158.38	炭を含む	17C 前～	T152-14
90	13	鉍滓	J9	152-158		7.3	8.85	3.75		270.0		18C	T152-15
90	14	鉍滓	J9	152-158		7.7	3.6	4.5		104.38		18C	T152-16
90	15	鉍滓	J8-9	152-206		7.2	7.2	3.3		156.26	炭を含む	～17C 中	T152-24
90	16	鉍滓	J9	152-158		6.4	6.4	2.4		98.61		18C	T152-17
90	17	鉍滓	B10-1	152-191		5.0	4.5	3.2		83.38	炭を含む	17C 後	T152-18
90	18	鉍滓	B10-1	152-191		5.3	4.3	2.5		64.66		17C 後	T152-19
90	19	鉍滓	J8	152-205		6.6	3.9	2.7		59.39		～17C 中	T152-20
90	20	鉍滓	J8	152-205		5.4	4.5	2.2		53.22	炭を含む	～17C 中	T152-21
90	21	鉍滓	J8	152-205		6.2	4.0	2.6		65.87	炭を含む	～17C 中	T152-22
90	22	鉍滓	J8-9	152-206		5.3	4.0	2.2		44.37		～17C 中	T152-25
90	23	鉍滓	J8-9	152-206		5.7	4.5	2.7		62.19		～17C 中	T152-26
90	24	鉍滓	B1	152-255		5.6	4.4	3.3		117.91	鉄滓	17C 後	T152-27
90	25	鉍滓	B10	152-281		5.9	5.3	3.6		85.81	炭を含む	17C 前	T152-28
90	26	鉍滓	J9	152-整地土 2		5.1	5.0	2.9		76.02	椀形		T152-29
90	27	鉍滓	J8-9	152-206		5.5	5.0	1.6		29.66	羽口等から剥がれたものか	～17C 中	T152-23
90	28	鉍滓	J9	152-整地土 2		9.0	7.8	3.4		192.0	炭を含む		T152-30
90	29	鉍滓	J8	152-整地土 3		10.25	5.6	5.0		115.55		17C 後半	T152-31
90	30	鉍滓	J9	152-整地土 3		6.4	5.6	3.2		106.61	炭を含む	17C 後半	T152-32
90	31	鉍滓	J-A10	152-整地土 3～4		10.4	8.6	3.9		382.0		17C	T152-33
90	32	鉍滓	J-A10	152-整地土 3～4		11.2	9.5	2.45		378.0		17C	T152-34
90	33	鉍滓	B10	152-整地土 4		5.0	5.0	3.5		66.47	鉄滓	17C 前半	T152-35
						縦	横	厚					
90	34	鋳造素材	A7	151-攪乱 2		1.8	1.85	0.75		11.75	鉛		T151-39
90	35	鋳造素材	I6	151-整地土 2	南側排水溝	-	2.0	0.4		11.09	鉛		T151-8
90	36	鋳造素材	C7	151-攪乱 40		1.8	1.9	0.1		2.68	鉛		T151-40
90	37	鋳造素材	J8	152-213		(3.2)	1.0	0.1		3.05	鉛	～17C 中	T152-38

第6章 自然科学分析

本章では、本調査で出土した遺物の自然科学分析（素材同定）、自然遺物の同定（大型植物遺体、貝類・動物骨）、土壌分析、木製品の樹種同定と塗膜分析結果について報告する。

第1節 素材同定

1) 試料と方法

試料は、土坑 151-19 と廃棄土坑 151-28 から出土した縄が4点と、井戸 151-108 から出土した縄が2点の合計6点である。

方法は、まず肉眼と実体顕微鏡で試料を観察し、樹脂包埋試料として一部を採取した。樹脂包埋は、アセトンの上昇系列で脱水処理を行なった後、エポキシ樹脂に包埋した。樹脂包埋試料はマイクロトームを用いて切片を作製し、プレパラートに封入した。プレパラートは光学顕微鏡下で観察し、現生標本と比較して同定を行った。プレパラートは、パレオ・ラボに保管されている。

2) 結果

同定の結果、151-19 と 151-28 出土の縄はシュロの葉鞘繊維、151-108 出土の縄はイネの稈と、アサの韌皮繊維であった。結果を第44表に示す。

第44表 素材同定結果

試料 No.	遺構名	遺物 No.	グリッド	層	遺物	遺物幅	素材	備考
1	151-19	1	B6	-	縄	0.6cm	シュロ（葉鞘繊維）	-
2	151-19	2	B6	-	縄	0.6cm	シュロ（葉鞘繊維）	-
3	151-19	6	B6	-	縄	0.8cm	シュロ（葉鞘繊維）	-
4	151-28	12	D8	5層以下	縄	2.2cm	シュロ（葉鞘繊維）	-
5	151-108	31	J5	20層	縄	0.6cm	イネ（稈）	炭化
6	151-108	36	J5	29・30層	縄	0.3cm	アサ（韌皮繊維）	炭化

次に、素材植物の特徴と同定根拠を示す。また、代表的な試料の写真と光学顕微鏡写真を図版第59に示す。

シュロ *Trachycarpus fortunei* (Hook.) H.Wendl. ヤシ科 図版第59-1（遺物 No. 1）、2（遺物 No. 2）、3（遺物 No. 6）、4（遺物 No.12）

繊維状遺物の断面は円形～楕円形で、直径は0.3～0.5mm程度である。断面を構成している細胞は繊維細胞で、厚壁で細胞間隙なく密集している。繊維細胞は太いものでは1本の維管束とそれを帽子状に取り囲む大きな繊維細胞束からなり、細いものでは維管束はなく繊維細胞のみからなる。

イネ *Oryza sativa* L. イネ科 図版第59-5（遺物 No.31）

柔細胞と維管束で構成される単子葉類の稈である。維管束は一对の道管と、それと直行する原生木部間隙と師部で形成される。維管束は表皮直下の厚壁細胞にみられる。中心にみられる空隙は、つぶれて扁平になっている。つぶれた形状について、人為か自然かの判断は難しい。以上の特徴から、イネの稈と同定した。

アサ *Cannabis sativa* L. アサ科 図版第 59 - 6 (遺物 No.36)

素材の断面は楕円形～多角形で、直径6～12 μ mの細胞が数10個ほど密集している。炭化しているため、細胞内の組織は壊れて空洞化している。繊維細胞の塊が断面で扁平な楕円形～多角形になる可能性のある植物としては、アサ、シナノキ属、ニレ属が挙げられる。しかし、シナノキ属、ニレ属では繊維細胞塊に必ず柔組織や篩管要素等が混在し、また幅広い放射組織に分断されるなどして繊維細胞のみからなる素材を得るのは難しい。アサは韌皮部を剥がし取り、表皮、皮層等を取り除いてテープ状にし、それを敲く、揉むなどして柔軟にすると細く裂け、ほぼ繊維細胞のみからなる塊となる。本試料は炭化しているため組織が観察できたのはほんの一部分だが、大きさの揃った細胞が密集して楕円形～多角形の塊となっており、現生アサの縄製品と極めて良く一致する。出土遺物の繊維細胞径は6～12 μ mで、現生アサ繊維が8～18 μ m程度であるのに較べて一回り小さい。また、出土遺物では細胞壁が薄く、細胞内腔が大きい。このような現生アサとの違いは、炭化によって収縮し、細胞壁がやせ細った結果であると考えられる。以上から、本試料の素材はアサであると判断した。

3) 考察

151-19 出土の縄(遺物 No. 1・2・6)と 151-28 出土の縄(遺物 No.12)は、シュロの葉鞘繊維であった。シュロは西南日本に生育する植物であり、福井県域には自生しない。しかし、近世には縄等の製品として、福井城下に流通していたと思われる。新宿区の若葉三丁目遺跡や南元町遺跡などでもシュロの縄や束子が確認されている(小林他 2015)。シュロの葉鞘の繊維は丈夫で水はけがよく腐りにくいため、現代でも束子や縄の素材として利用されている。

151-108 出土の縄(遺物 No.31)は、イネの稈であった。稲藁の分析事例はまだ少ないが、稲作地帯では一般的に利用されていたと考えられる。

151-108 出土の縄(遺物 No.36)は、アサの韌皮繊維であった。アサ(*Cannabis sativa* L.)は、アサ科アサ属の一年生草本である。中央アジアが原産とされ、日本列島では縄文時代早期にアサの果実が確認されている(工藤・一木 2014)。江戸時代から昭和初期にかけては全国的に栽培・利用されていた(篠崎 2014)。福井城下でも栽培されていたか、製品が流通で持ち込まれたと考えられる。

引用・参考文献

- 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男 2015 「南元町遺跡第3次調査出土繊維製品等の素材植物」国際文化財株式会社編『南元町遺跡Ⅲ』住友不動産 pp.248-254
- 工藤雄一郎・一木絵里 2014 「縄文時代のアサ出土例集成」工藤雄一郎編『国立歴史民俗博物館研究報告 第187集 縄文時代の人と植物の関係史』国立歴史民俗博物館 pp.425-440
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫 1989 『日本の野生植物 木本Ⅱ』平凡社 p.288
- 篠崎茂雄 2014 「アサ利用の民俗学的研究」工藤雄一郎編『国立歴史民俗博物館研究報告 第187集 縄文時代の人と植物の関係史』国立歴史民俗博物館 pp.405-420

第2節 自然遺物

1 大型植物遺体

1) 試料

試料は、15-1 調査区で井戸・溝・廃棄土坑・土坑等から出土した種実遺体 38 点と葉遺体 2 点の計 40 点、15-2 調査区で水路・井戸・土坑から採取された 12 試料 28 点である。

各試料の詳細は第 45 表に示す。

2) 分析方法

試料を肉眼および（双眼）実体顕微鏡下で観察する。

3) 結果

(1) 大型植物遺体の出土状況

同定結果を第 45 表に、15-1 調査区については大型植物遺体の出土状況を第 46 表と以下に示す。

種実試料

木本 11 分類群（イチヨウ、マツ属複雑管束亜属、オニグルミ、ヒメグルミ、クヌギ節（クヌギ?）、クリ、ウメ、スモモ、モモ、サンショウ、カキノキ）の種実 195 個と、草本 11 分類群（イネ、エノコログサ属、カナムグラ、アカザ属、ヒユ属、クサネム、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、ニホンカボチャ近似種、ナス）の種実 1,587 個の、計 1,782 個が同定された。その他、1 個（廃棄土坑 151-28 5 層以下）は部位および分類群が不明、1 個（TR17）は不明で虫類の蛹の可能性がある。1 個（溝 151-6 8 層）は種実ではなく虫えいで、ナラメイガフシに似る。

栽培種は、イチヨウの種子が 3 個（廃棄土坑 151-28・103、151-整地土 1）、ウメの果実・核が 1 個（土坑 151-26）、核が 15 個（溝 151-6、土坑 151-26、廃棄土坑 151-28、151-整地土 1）、スモモの果実・核が 3 個（廃棄土坑 151-28）、核が 29 個（廃棄土坑 151-28・100、151-整地土 1・2、151-近代造成土、攪乱 12）、モモの核が 24 個（溝 151-6・23、土坑 151-26、廃棄土坑 151-28・100・204、攪乱 12）、種子が 1 個（溝 151-6）、カキノキの種子が 6 個（廃棄土坑 151-28）、イネの穎が 3 個（溝 151-5）、雑草メロン型の種子が 55 個（溝 151-5、土坑 151-26）、炭化種子が 1 個（土坑 151-26）、マクワ・シロウリ型の種子が 175 個（溝 151-5、土坑 151-26）、炭化種子が 5 個（土坑 151-26）、メロン類の果実・種子が 3 個（溝 151-5）、種子が 600 個（溝 151-5、土坑 151-26）、ニホンカボチャ近似種の種子が 727 個（井戸 151-4、土坑 151-26、廃棄土坑 151-100・204、151-整地土 1）、果柄が 11 個（廃棄土坑 151-28）、ナスの種子が 1 個（土坑 151-26）の、計 1,663 個が確認された。栽培種が大型植物遺体群全体の 93% を占める。栽培種は、メロン類（マクワ・シロウリ型、雑草メロン型）が最も多く、ニホンカボチャ近似種が次ぐ。

その他の分類群は、木本は、常緑針葉樹で高木になるマツ属複雑管束亜属の球果が 38 個（廃棄土坑 151-28・385、151-整地土 1）、種鱗が 22 個（廃棄土坑 151-28）、種子が 1 個（廃棄土坑 151-28）と落葉広葉樹で高木になるオニグルミの核が 4 個（土坑 151-26、廃棄土坑 151-28・103）、ヒメグルミの核が 1 個（廃棄土坑 151-100）、クヌギ節（クヌギ?）の果実が 1 個（廃棄土坑 151-28）、クリの果実が 43 個（廃棄土坑 151-28）、低木のサンショウの種子が 3 個（土坑 151-26）の、計 113 個が確認された。

草本は、中生植物のエノコログサ属の果実が 1 個（土坑 151-26）、カナムグラの核が 1 個（廃棄土坑 151-106）、アカザ属の種子が 1 個（溝 151-5）、ヒユ属の果胞・種子が 1 個（溝 151-5）、種子が 1 個（土坑 151-26）、湿生植物のクサネムの果実が 1 個（溝 151-5）の、計 6 個が確認された。

葉試料

常緑針葉樹のスギの枝・葉が、廃棄土坑 151-204 の9層から5個、廃棄土坑 151-259 から2個、落葉広葉樹のクリの葉が廃棄土坑 151-28 の5層以下から1個の、計8個が確認された。

(2) 主な大型植物遺体の記載

大型植物遺体各分類群の写真を図版第 60・61 に、主な分類群の計測結果等を第 47～49 表、第 91 図、第 92 図に示して同定根拠とする。大型植物遺体の保存状態は良好で、土坑 151-26 より出土したウメと廃棄土坑 151-28 より出土したスモモには核表面に果実が残る状況が確認された。また土坑 151-26 より出土したオニグルミ1個と雑草メロン型1個、マクワ・シロウリ型5個には炭化が認められた。その他、廃棄土坑 151-100 より出土したヒメグルミの核には頂部と基部に欠損がみられ、打撃痕の可能性はある。

以下、調査区ごとに形態的特徴等を述べる。

FKJ15-1 調査区 (栽培種)

イチヨウ *Ginkgo biloba* L. 種子 イチヨウ科イチヨウ属 種子は灰褐色。完形ならば広楕円形で頂部から基部にかけて2本の稜があり、両端は短く尖る。種皮は堅く、表面は粗面。破片の最大は約 1/3 個分で、残存長 17.26mm、残存幅 17.72mm、半分厚 6.80mmを測る (廃棄土坑 151-103; 図版第 60-1)。

ウメ *Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc. 果実・核バラ科サクラ属 核(内果皮)は淡灰褐色、果実(外果皮・中果皮)は暗灰褐色。長さ 14.4～19.4mm、幅 11.6～15.4mm、厚さ 10.0～13.7mmのレンズ状広楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で丸い臍点がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮表面には円形の小凹点が分布する。土坑 151-26 出土核には表面に果皮(外果皮+中果皮)の一部が残る状態が確認された(図版第 60-12)。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 果実・核バラ科サクラ属 核(内果皮)は淡灰褐色、果実(外果皮・中果皮)は灰褐色。長さ 12.1～17.0mm、幅 9.9～12.8mm、厚さ 7.5～9.3mmのレンズ状広楕円体。内果皮表面は、ウメよりも平滑でごく浅い凹みが不規則にみられる。廃棄土坑 151-28 出土核には表面に果皮(外果皮+中果皮)の一部が残る状態が確認された(図版第 60-11)。

モモ *Prunus persica* Batsch 核・種子バラ科サクラ属 核(内果皮)は灰褐色。長さ 24.9～31.1mm、幅 15.9～22.2mm、厚さ 12.7～17.4mmのやや偏平な広楕円体で頂部が尖る。内果皮表面には縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、粗い皺状にみえる(図版第 60-13・14)。151-28 出土核の腹面にはネズミ類による食痕と考えられる円形の孔がある(図版第 60-14)。内面には種子1個が入る長さ 18.1mm、幅 11.1mmの広卵状の窪みがある(図版第 60-15)。溝 151-6 出土核とともに出土した種子は暗灰褐色で長さ 15.2mm、幅 8.6mmの偏平な卵形を呈す。

カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子カキノキ科カキノキ属 種子は黒褐色。完形ならば偏平な非対称倒広卵体。種子には縦に1周する稜があり、背面は丸みを帯び、腹面は直線状。腹面基部に1mm程度の楕円形の孔がやや突出する。種皮は薄く硬く、表面は粗面。151-28 出土種子は全て破片で、計1個体未満である。破片の最大は約 1/4 個分で残存長 14.98mm、同幅 12.28mmを測る(図版第 60-17)。

イネ *Oryza sativa* L. 穎イネ科イネ属 穎は淡灰褐色で、完形ならば長さ 6.0～7.5mm、幅 3.0～4.0mm、厚さ 2.0mm程のやや偏平な長楕円体。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲穂を構成する。穎は柔らかく表面には顆粒状突起が縦列する。出土穎(基部)は残存長 3.24mmを測る(図版第 60-21)。

メロン類 *Cucumis melo* L. 果実・種子 ウリ科キュウリ属 種子は淡～灰褐色、炭化種子は暗灰褐色～黒色。扁平な狭倒皮針体を呈し、基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面には縦長の細胞が配列する（図版第 60-24・25、第 61-31）。一部の表面に果肉が残る状況も確認された（図版第 60-25）。

状態良好な一部の出土種子を対象とした計測値（付表省略）のうち、土坑 151-26 の 3 層出土種子は長さが 4.95～8.06（平均 6.65 ± 0.50 ）mm（標本数 102）、幅が 2.53～3.85（平均 3.22 ± 0.23 ）mm（標本数 102）、厚さが 0.38～1.85（平均 1.32 ± 0.32 ）mm（標本数 25）で、88 個が藤下（1984）の基準による中粒のマクワ・シロウリ型（長さ 6.10-8.09mm）、14 個が小粒の雑草メロン型（長さ 6.09mm以下）に該当する。一方、溝 151-5 出土種子は、長さが最小 4.78～最大 7.38（平均 $6.16 \pm$ 標準偏差 0.47）mm（標本数 100）、幅が 2.25～3.38（平均 2.78 ± 0.22 ）（標本数 100）、厚さが 1.17～1.91（平均 1.45 ± 0.21 mm）（標本数 10）で、38 個が雑草メロン型、62 個がマクワ・シロウリ型に該当し、溝 151-5 出土種子群よりも小型の傾向を示す（第 91 図、第 47 表）。

ニホンカボチャ近似種 *Cucurbita cf. moschata* Duch. 種子・果柄 ウリ科カボチャ属 種子は灰褐色。扁平な倒卵体で基部は突出し発芽孔がある。両面全周に走る縁は明瞭で、段差があり薄くなる。種皮表面は粗面で縁付近に褐色の毛がある（図版第 61-27・29・30）。廃棄土坑 151-100 出土種子の一部には、複数種子が密着した塊状が確認され、果実（ウリ状果）の配列を留めている（図版第 61-27）。

状態良好な一部の出土種子を対象とした計測値（付表省略）のうち、廃棄土坑 151-100 出土種子は、長さが最小 13.94～最大 17.44（平均 $15.95 \pm$ 標準偏差 0.79）mm（標本数 100）、幅が 7.47～9.79（平均 9.01 ± 0.46 ）mm（標本数 100）、厚さが 0.80～1.54（平均 1.15 ± 0.25 ）mm（標本数 10）、廃棄土坑 151-100 2・3 層出土種子は、長さが 11.51～15.06（平均 14.10 ± 0.87 ）mm（標本数 28）、幅が 6.67～7.73（平均 7.35 ± 0.29 ）mm（標本数 28）、厚さが 0.65～1.35（平均 0.92 ± 0.17 ）mm（標本数 18）、151-整地土 1 出土種子は、長さが 11.90～14.47（平均 13.49 ± 0.46 ）mm（標本数 100）、幅が 6.47～8.27（平均 7.37 ± 0.38 ）mm（標本数 100）、厚さが 1.18～1.78（平均 1.56 ± 0.17 ）mm（標本数 10）であった。151-100 出土種子群が最も大きく（図版第 61-29）、151-整地土 1（図版第 61-30）および 151-100 2・3 層などの出土種子群と違いが認められた（第 48 表、第 92 図）。

果柄は灰褐色で木質。残存長 21.1～69.4mm、最大径 31.2～46.1mmの五角錐状。上下面観は五角形を呈す。側面には 5 本の縦溝があり、基部は広がりやや膨れて果実につく。廃棄土坑 151-28 出土果柄は頂部が切形か斜切形を呈するものが多く、鋭利な刃物等で切断された痕跡と考えられる（図版第 61-28）。

カボチャ（属）は栽培のために持ち込まれた渡来種で、日本で栽培しているカボチャは 16 世紀に渡来したニホンカボチャ、19 世紀に渡来したセイヨウカボチャ（*C. maxima* Duch.）、それより更に後れて渡来したペポカボチャ（*C. pepo* L.）の 3 種がある。ただし、山形県遊佐町小山崎遺跡からは縄文時代前期前葉の年代値（ $5,578 \pm 24y$ BP）が得られたカボチャ近似種の種子が出土しており（吉川 2015）、渡来時期には議論の余地が残る。今回の出土果柄は、果柄が丸いセイヨウカボチャと区別される。ペポカボチャとは基部は広がらない点で概ね区別されるが、現生標本観察の結果、基部が広がるペポカボチャも確認されたため、現段階では厳密な識別は困難である。以上のことから出土果柄・種子はニホンカボチャ近似種としている。

ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科ナス属 種子は灰褐色で長さ 3.04mm、幅 3.51mm、厚さ 0.84 mm程度の扁平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し括れた部分に臍がある。表面には微細な星形状網目模様が臍から同心円状に発達する（図版第 61-32）。

第2節 自然遺物

第45表 大型植物遺体同定結果

試料	番号	遺構名	遺構の性格	遺物 No.	グリッド	層	枝番	分類群	部位	状態	個数	写真番号		
種実	1	151-4	土坑	2	C8		-	ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	2	-	
	2	151-5	溝	8	F10	8層	-	雑草メロン型	種子	完形	液浸	38	24	
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	液浸	62	-	
								メロン類	果実・種子	完形	液浸	3	25	
								メロン類	種子	完形	液浸	381	-	
								メロン類	種子	完形未満	液浸	96	-	
								メロン類	種子	破片	液浸	17	-	
								イネ	穎(基部)	破片	液浸	1	21	
								イネ	穎	破片	液浸	2	-	
								アカザ属	種子	完形	液浸	1	18	
								ヒユ属	果胞・種子	完形	液浸	1	20	
	3	151-6	溝	4	D9	8層	1	ウメ	核	破片	乾燥	1	-	
								モモ	核	完形	乾燥	3	-	
	4	151-6	溝	6	D9	8層	-	種実ではない	虫えい	完形	乾燥	1	5	
								モモ	核	半分	乾燥	2	15	
	5	151-6	溝	9	D9	8層	2	モモ	種子	完形未満	乾燥	1	-	
								モモ	核	破片	乾燥	1	-	
	-	151-23	井戸石材 抜き取り穴	4	D9	1層	-	モモ	核	破片	乾燥	1	-	
	6	151-26	土坑	5	C8	4層	-	雑草メロン型	種子	完形	液浸	3	-	
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	液浸	25	-	
								メロン類	種子	完形未満	液浸	9	-	
								メロン類	種子	破片	液浸	8	-	
								雑草メロン型	種子	完形	液浸	14	-	
	7	151-26	土坑	2	C8	3層	1	雑草メロン型	種子	完形	炭化	液浸	1	-
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	炭化	液浸	4	31
								マクワ・シロウリ型	種子	完形未満	炭化	液浸	1	-
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	液浸	83	-	
								メロン類	種子	完形	液浸	4	-	
								メロン類	種子	完形未満	液浸	42	-	
								メロン類	種子	破片	液浸	40	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	破片	液浸	1	-	
								エノコログサ属	果実	完形未満	液浸	1	22	
								ヒユ属	種子	完形	液浸	1	19	
							2	サンショウ	種子	完形	液浸	2	16	
								サンショウ	種子	完形未満	液浸	1	-	
								メロン類	種子	破片	液浸	1	-	
								ナス	種子	完形	液浸	1	32	
								オニグルミ	核	半分	炭化	乾燥	1	-
								モモ	核	完形	乾燥	4	13	
								ウメ	果実・核	完形	乾燥	1	12	
								ウメ	核	完形	乾燥	2	-	
								マクワ・シロウリ型	種子	完形	液浸	5	-	
								メロン類	種子	完形未満	液浸	1	-	
	8	151-26	土坑	3	C8	3層	-	メロン類	種子	破片	液浸	1	-	
								マツ属複維管束亜属	球果	完形	液浸	1	-	
	9	151-26	土坑	3	C8	3層	-	マツ属複維管束亜属	球果	完形未満	液浸	4	-	
								マツ属複維管束亜属	種鱗	破片	液浸	9	-	
10	151-28	廃棄土坑	3	D8	先行トレンチ	-	ウメ	核	完形未満	食痕	液浸	1	-	
							スモモ	核	破片	液浸	1	-		
11	151-28	廃棄土坑	5	D8	上層(1~4層)	-	マツ属複維管束亜属	球果	完形	乾燥	1	-		
							マツ属複維管束亜属	球果	完形未満	液浸	2	-		
12	151-28	廃棄土坑	5	D8	上層(1~4層)	-	ニホンカボチャ近似種	果柄	破片	液浸	2	-		
							カキノキ	種子	破片	液浸	6	17		
13	151-28	廃棄土坑	6	D8	下層(5層以下)	-	ウメ	果実	破片	乾燥	1	-		
							クリ	果実	破片	乾燥	1	-		
14	151-28	廃棄土坑	6	D8	下層(5層以下)	-	クリ	果実	破片	乾燥	1	-		
							モモ	核	半分	乾燥	2	-		
15	151-28	廃棄土坑	7	D8	下層(5層以下)	1	マツ属複維管束亜属	球果	完形	乾燥	3	-		
							モモ	核	完形未満	食痕	乾燥	1	-	
16	151-28	廃棄土坑	8	D8	1層	2	モモ	核	破片	乾燥	1	-		
							ウメ	核	完形未満	食痕	乾燥	1	-	
17	151-28	廃棄土坑	8	D8	1層	3	スモモ	核	完形	乾燥	1	-		
							スモモ	核	半分	乾燥	1	-		
18	151-28	廃棄土坑	8	D8	1層	-	イチョウ	種子	破片	液浸	1	-		
							クスギ節(クスギ?)	果実	完形未満	液浸	1	8		
19	151-28	廃棄土坑	9	D8	2層	1	ニホンカボチャ近似種	果柄	破片	液浸	1	-		
							オニグルミ	核	半分	乾燥	1	9		
20	151-28	廃棄土坑	9	D8	2層	-	モモ	核	破片	乾燥	1	-		
							ウメ	核	完形未満	乾燥	2	-		
21	151-28	廃棄土坑	12	D8	5層以下	2	ウメ	核	破片	乾燥	1	-		
							ウメ	核	破片	乾燥	1	-		
22	151-28	廃棄土坑	12	D8	5層以下	3	ニホンカボチャ近似種	果柄	破片	液浸	7	28		
							マツ属複維管束亜属	球果	完形	液浸	8	2		
							マツ属複維管束亜属	球果	完形未満	液浸	7	-		
							マツ属複維管束亜属	種鱗	破片	液浸	10	-		
							マツ属複維管束亜属	種子	完形	液浸	1	3		
							マツ属複維管束亜属	種鱗	破片	液浸	3	-		
							クリ	果実	完形未満	液浸	1	7		
							クリ	果実	破片	液浸	40	-		
							不明		完形	液浸	1	-		
							ニホンカボチャ近似種	果柄	破片	液浸	1	-		

第6章 自然科学分析

試料	番号	遺構名	遺構の性格	遺物 No.	グリッド	層	枝番	分類群	部位	状態	個数	写真番号		
種実	21	151-28	廃棄土坑	12	D8	5層以下	4	ウメ	核	半分	乾燥	1	-	
								スモモ	果実・核	完形	乾燥	2	11	
								スモモ	果実・核	半分	乾燥	1	-	
								スモモ	核	完形	乾燥	1	-	
							スモモ	核	半分	乾燥	2	-		
	22	151-100	廃棄土坑	5	J6	下層(4層以下)	1	スモモ	核	完形	乾燥	1	-	
								2	モモ	核	破片	乾燥	1	-
	23	151-100	廃棄土坑	2	J6		-	ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	100	29	
								ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	30	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	完形未満	液浸	66	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	破片	液浸	19	-	
	24	151-100	廃棄土坑	19	J6	2・3層	-	ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	20	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	7	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	塊状	液浸	6	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	完形未満	液浸	23	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	破片	液浸	5	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	11	-	
	25	151-100	廃棄土坑	18	J6	2・3層	-	ニホンカボチャ近似種	種子	塊状	液浸	10	27	
								ニホンカボチャ近似種	種子	完形未満	液浸	7	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	破片	液浸	9	-	
								ニホンカボチャ近似種	種子	破片	液浸	1	6	
	26	151-100	廃棄土坑	20	J6	4層	1	ヒメグルミ	核	破片	乾燥	1	-	
								2	スモモ	核	破片	乾燥	1	-
	27	151-103	廃棄土坑	1	J6	2・3層	-	オニグルミ	核	破片	乾燥	2	-	
	28	151-103	廃棄土坑	2	J6	5層	-	イチヨウ	種子	破片	乾燥	1	1	
	29	151-整地土1			6	J6	TR19 4層	1	マツ属複雑管束亜属	球果	完形	乾燥	2	-
									2	イチヨウ	種子	破片	乾燥	1
								3	ウメ	核	半分	乾燥	1	-
									ウメ	核	破片	乾燥	5	-
									スモモ	核	半分	乾燥	2	-
	30	151-106	廃棄土坑	3	J6	6層	-	カナムグラ	核	完形	水浸	1	23	
	31	151-204	廃棄土坑	1	J6		1	モモ	核	完形未満	食痕	乾燥	1	14
								2	ニホンカボチャ近似種	種子	完形	乾燥	1	-
	32	151-385	廃棄土坑	1	D8		-	マツ属複雑管束亜属	球果	完形	液浸	2	-	
							-	マツ属複雑管束亜属	球果	完形未満	液浸	10	-	
	33	151-整地土2			13	J6	TR12 5層	-	スモモ	核	破片	乾燥	1	-
	34	151-近代造成土			22	C7		-	スモモ	核	完形	乾燥	1	-
35	151-整地土1			125	J6	-	ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	100	30		
							ニホンカボチャ近似種	種子	完形	液浸	253	-		
							ニホンカボチャ近似種	種子	塊状	液浸	4	-		
							ニホンカボチャ近似種	種子	完形未満	液浸	37	-		
							ニホンカボチャ近似種	種子	破片	液浸	16	-		
36	TR17			2	A6	-	不明(虫類の蛹?)		完形	液浸	1	-		
37	攪乱12			2	E9	1	スモモ	核	完形	乾燥	14	-		
							2	スモモ	核	破片	乾燥	3	-	
							3	モモ	核	完形	乾燥	2	-	
								モモ	核	半分	乾燥	1	-	
1	151-204	土坑		5	J6	9層	-	スギ	枝・葉	破片	乾燥	5	4	
2	151-259	廃棄土坑		15	I6		-	スギ	枝・葉	破片	乾燥	2	-	
21	151-28	廃棄土坑		12	D8	5層以下	1	クリ	葉	破片	液浸	1	10	
合計											1793	-		

試料	番号	遺構名	遺構の性格	遺物 No.	グリッド	層	枝番	分類群	部位	状態	個数	写真番号		
種実	-	152-2	石組水路	5	C10		-	トウガン	種子	完形		1	-	
				13	C1		-	メロン仲間	種子	完形	液浸	1	-	
				16	B1		-	メロン仲間	種子	完形	液浸	5	42・43	
				18	B1		-	メロン仲間	種子	完形	液浸	1	-	
				21	C10		-	メロン仲間	種子	完形	液浸	1	41	
	-	152-5	土坑		2	C1	-	カキノキ	種子	完形未満	液浸	1	39	
	-	152-150	土坑		1	I7	-	ヒメグルミ	核	半分	乾燥	1	-	
	-	152-257	石組井戸		3	B1	-	チャノキ近似種	種子	完形	乾燥	1	38	
	-	152-259	土坑		1	B1	-	トウガン	種子	完形	液浸	1	-	
	-	152-整地土1			1	G6		-	ニホンカボチャ	種子	完形	液浸	7	44・45
								-	モモ	核	半分	乾燥	3	33
								-	ウメ	核	半分	乾燥	2	34
								-	スモモ	核	完形未満	乾燥	1	35
								-	ヒメグルミ	核	破片	乾燥	1	36
								-	オニグルミ	核	半分	乾燥	1	37
-	152-整地土2			11	B1	-	トウガン	種子	完形	液浸	1	40		
合計											29	-		

第2節 自然遺物

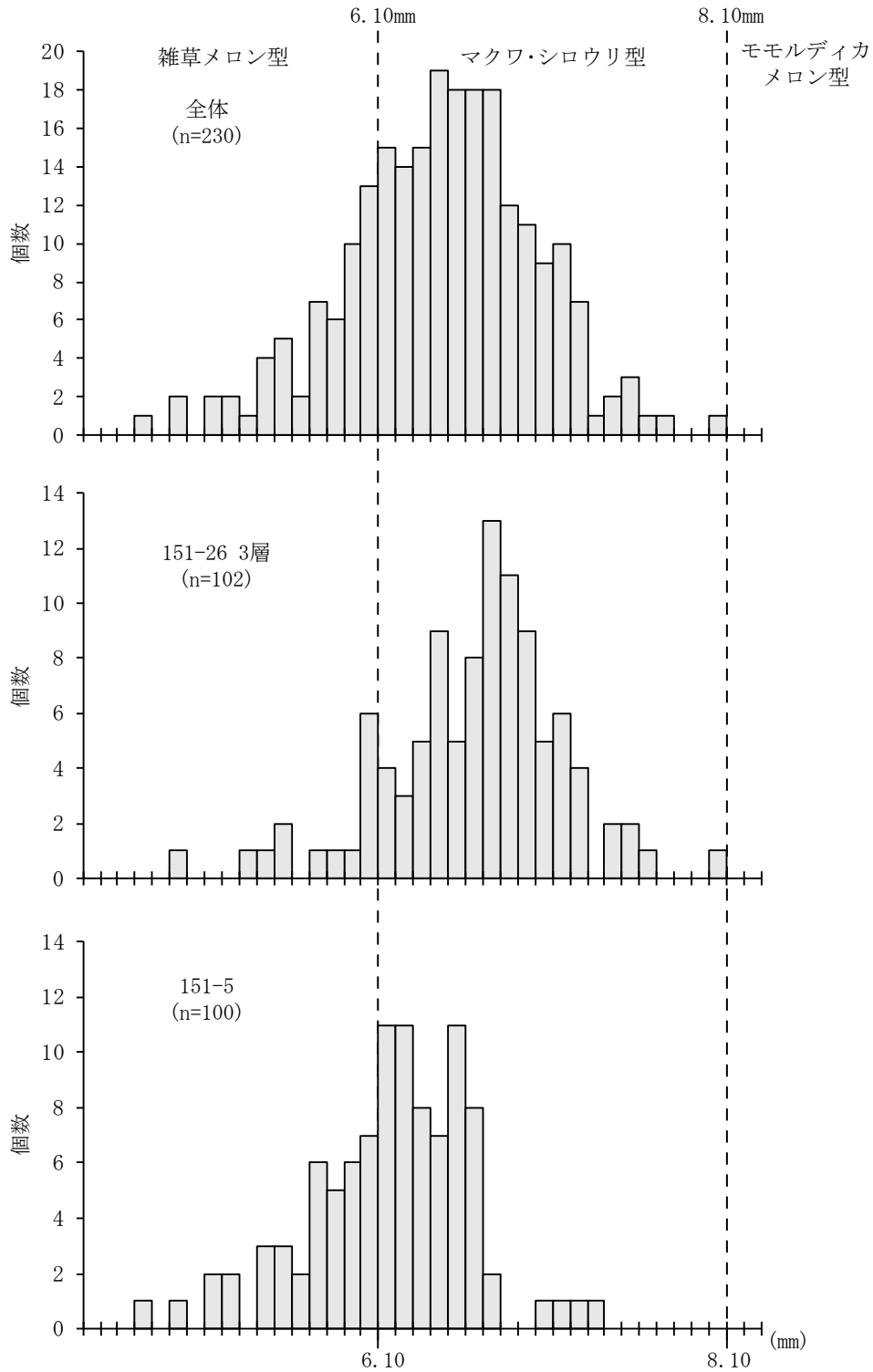
第46表 大型植物遺体出土状況

分類群	部位	151-4	151-5	151-6	151-23	151-26	151-28				151-100			151-103	151-106	151-204	151-259	151-385	151-整地土1 造成土	151-整地土2	TR17	掘乱 12	合計	
		C8	F10	D9	D9	C8	先行 トレンチ	1層	2層	上層 (1~4層)	下層 (5層以下)	2・3層	4層	下層 (4層以下)	J6	J6	J6	I6	D8	J6	C7	J6		A6
栽培種	種子	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	3
ウスマ	果実・核	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
スモモ	核	-	1	-	2	-	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	15
モモ	果実・核	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
モモ	核	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	29
カキノキ	種子	-	6	1	4	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
イネ	核	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ニホンカボチャ近似種	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
イネ	穎	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
雑草メロン型	果柄	-	-	-	-	-	-	1	7	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11
雑草メロン型	種子	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	727
雑草メロン型	炭化種子	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
雑草メロン型	炭化種子	-	38	-	14	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	55
雑草メロン型	炭化種子	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5
雑草メロン型	炭化種子	-	62	-	88	25	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	175
メロン類	種子	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
メロン類	果実・種子	-	494	-	89	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	600
ナス	種子	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
その他の木本																								
マツ属後維管束亜属	球果	-	-	-	-	-	5	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	12	-	-	-	-	38
マツ属後維管束亜属	種鱗	-	-	-	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22
マツ属後維管束亜属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	枝・葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7
マツ属後維管束亜属	炭化核	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	炭化核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
マツ属後維管束亜属	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	炭化核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	果実	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	クリ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	41	-	-	-	-	-	-	-	-	-	43
マツ属後維管束亜属	葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
マツ属後維管束亜属	種子	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
その他の草本																								
エノコログサ属	果実	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
エノコログサ属	核	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
エノコログサ属	カナムグラ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカザ属	種子	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカザ属	果実	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒユ属	果実・種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒユ属	種子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
クサネム	果実	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
栽培種		2	600	8	1	206	45	2	7	11	2	8	10	215	98	1	2	2	12	9	1	1	21	1663
その他の木本		-	-	-	4	-	-	14	4	1	1	2	71	-	-	2	5	2	12	-	-	-	-	121
その他の草本		-	3	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6
合計		2	603	8	1	212	45	16	11	12	3	10	81	215	98	2	5	2	12	410	1	1	21	1790

注) その他(虫えい、不明等)は除く。

第47表 メロン類種子の計測値

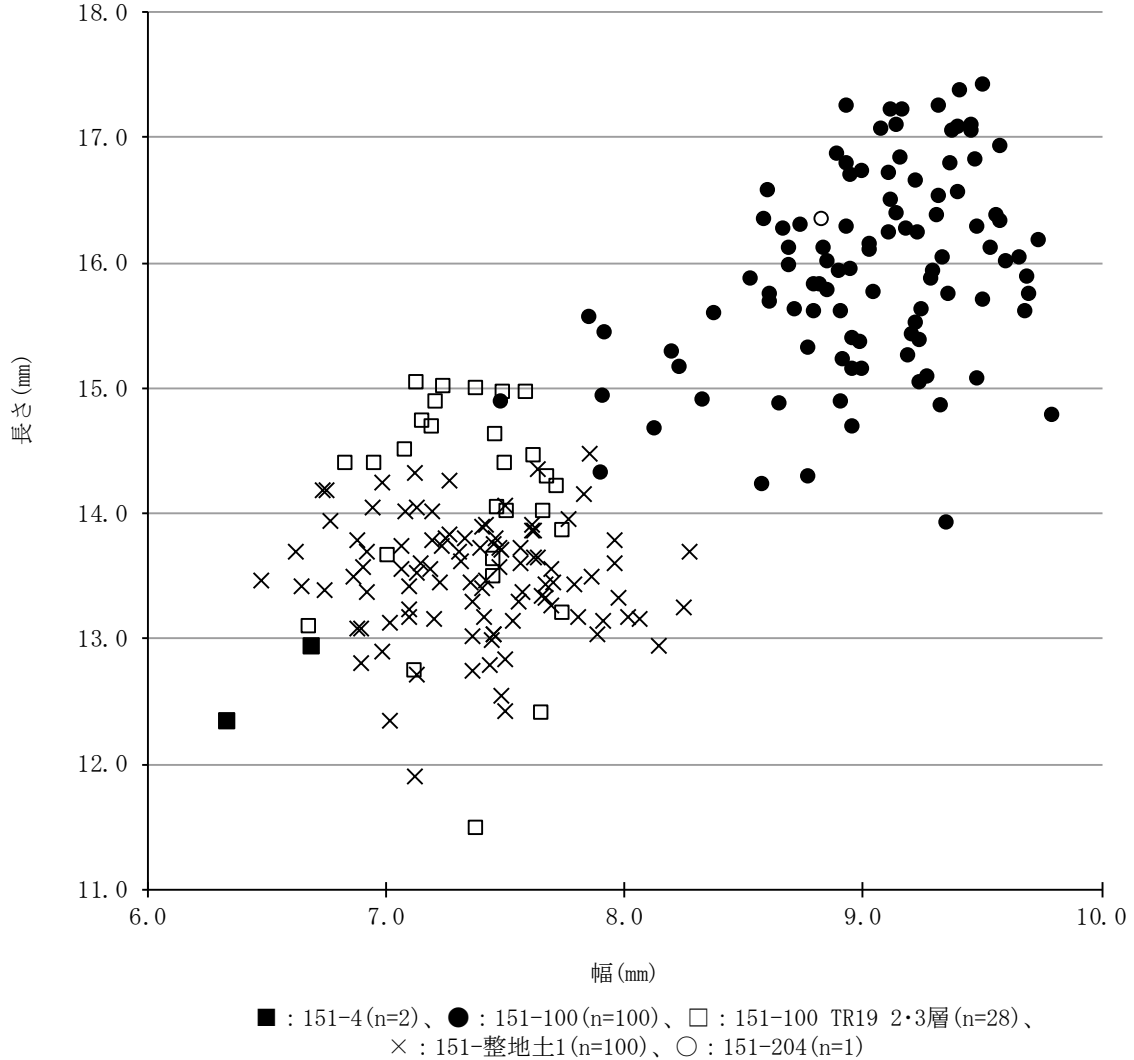
番号	遺構・層	長さ (mm)				幅 (mm)				厚さ (mm)			
		標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差
2	151-5	100	4.78	7.38	6.16 ± 0.47	100	2.25	3.38	2.78 ± 0.22	10	1.17	1.91	1.45 ± 0.21
7-9	151-26 3層	102	4.95	8.06	6.65 ± 0.50	102	2.53	3.85	3.22 ± 0.23	25	0.38	1.85	1.32 ± 0.32
6	151-26 4層	28	5.91	7.72	6.77 ± 0.45	28	2.94	3.71	3.22 ± 0.18	8	1.23	1.92	1.51 ± 0.23
	全て	230	4.78	8.06	6.45 ± 0.54	230	2.25	3.85	3.03 ± 0.31	43	0.38	1.92	1.38 ± 0.29



第91図 メロン類種子の大きさ

第48表 ニホンカボチャ近似種種子の計測値

番号	遺構・層	長さ (mm)				幅 (mm)				厚さ (mm)			
		標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差	標本数	最小	最大	平均 ± 標準偏差
23	151-100	100	13.94	17.44	15.95 ± 0.79	100	7.47	9.79	9.01 ± 0.46	10	0.80	1.54	1.15 ± 0.25
24・25	151-100 2・3層	28	11.51	15.06	14.10 ± 0.87	28	6.67	7.73	7.35 ± 0.29	18	0.65	1.35	0.92 ± 0.17
35	151-整地土1	100	11.90	14.47	13.49 ± 0.46	100	6.47	8.27	7.37 ± 0.38	10	1.18	1.78	1.56 ± 0.17
	全て	231	11.51	17.44	14.63 ± 1.36	231	6.33	9.79	8.08 ± 0.92	41	0.65	3.03	1.22 ± 0.46



第92図 ニホンカボチャ近似種種子の大きさ

FKJ15-2 調査区

モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科 褐色で完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端には大きな着点があり、表面に不規則な深い皺がある。また、片側の側面には縫合線に沿って深い溝が入る。高さ 26.9mm、幅 17.1mm、残存厚 6.6mm (図版第 61-33)。

ウメ *Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese 核 バラ科 褐色で完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は卵円形。表面全体に不規則で深い小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。高さ 14.6mm、幅 12.9mm、残存厚 5.5mm (図版第 61-34)。

スモモ *Prunus salicina* Lindl. 核 バラ科 茶褐色で上面観はやや扁平な両凸レンズ形、側面観は紡錘形。両側には縫合線があり浅い溝が入る。表面は平滑。残存高 14.6mm、残存幅 11.5mm、厚さ 8.7mm

(図版第 61-35)。

ヒメグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *cordiformis* (Makino) Kitam. 核 クルミ科 淡褐色で、完形ならば上面観は楕円形、側面観は先端が尖る広卵形。外面中央にやや深い溝が走るが、それ以外は表面が平滑な点でオニグルミとは異なる。明瞭な縫合線がある。高さ 32.2mm、幅 28.2mm、残存厚 12.2mm (図版第 61-36)。

オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 核 クルミ科 淡褐色で、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。溝や凹凸の間に微細な皺がある。内部は二室に分かれる。高さ 29.1mm、幅 26.2mm、残存厚 13.4mm (図版第 61-37)。

チャノキ近似種 c.f. *Camellia sinensis* (L.) Kuntze 種子 ツバキ科 褐色で、背・腹面観は楕円形、側面観は半円形、上面観は扇形。扇形の上面観から、果実に 3 個程度入っていた種子の一つと推定される。形態からはツバキ科の中でもチャノキに似るが、着点やその周囲の窪みなどの特徴的な部分は残存していない。また現生チャノキ種子よりもやや扁平である。長さ 14.9mm、幅 15.0mm、厚さ 10.9mm (図版第 61-38)。

カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科 黒褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状の皺がみられる。明らかに大型の果実とみられる種子をカキノキとした。高 17.8mm、幅 12.1mm (図版第 61-39)。

トウガン *Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn. 種子 ウリ科 赤褐色で倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり中央部は窪む。長さ 10.4mm、幅 6.3mm (図版第 61-40)。

第 49 表 152-2 出土メロン仲間種子の大きさ

地区	長さ	幅
C1	7.4	3.2
B1	7.1	3.5
	8.2	3.4
	6.7	3.2
	6.2	3.0
	8.0	3.5
	6.6	3.1
C10	9.8	4.4
	6.5	2.8
最小	6.2	2.8
最大	9.8	4.4
平均	7.4	3.3
標準偏差	1.1	0.5

(単位: mm)

メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科 赤褐色で上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭でやや厚みがある。藤下 (1984) は、種子の大きさからおおむね次の 3 群に分けられるとしている。長さ 6.0mm 以下の雑草メロン型、長さ 6.1 ~ 8.0mm のマクワウリ・シロウリ型、長さ 8.1mm 以上のモモルディカメロン型である。今回、石組水路 152-2 から出土した 9 点の大きさは長さ 6.2 ~ 9.8 (平均 7.4 ± 1.1) mm、幅 2.8 ~ 4.4 (平均 3.3 ± 0.5) mm で、マクワウリ・シロウリ型 ~ モモルディカメロン型の大きさであった。(第 49 表、図版第 61-41 ~ 43)。

ニホンカボチャ *Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir. 種子 ウリ科 赤褐色で、上面観は扁平、側面観は肩が張る長倒卵形。周縁を毛が取り囲むが残存していない。長さ 13.3mm、幅 8.5mm (図版第 61-44) と長さ 14.5mm、幅 7.6mm (図版第 61-45)。

4) 考察

FKJ15-1 調査区 17 世紀 ~ 19 世紀の各遺構より出土した大型植物遺体には、栽培種のイチヨウ、ウメ、スモモ、モモ、カキノキ、イネ、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、メロン類、ニホンカボチャ近似種、ナスが確認され、栽培種が大型植物遺体群全体の 9 割超を占める組成を示した。当時利用された植物質食料と示唆され、遺構内への投棄などの人為的行為に由来する可能性がある。

特筆すべき事項として、土坑 151-26 の3層から出土したウメ、廃棄土坑 151-28 の5層以下から出土したスモモ、溝 151-5 から出土したメロン類の一部は、果皮や果肉が残る状態であった。これらの果実は腐りやすいため、加工しない限り長期保存は困難である。堆積物中に残りにくい果実が出土した状況を考慮すると、短期間での埋積や埋積後の嫌気的環境の継続などの要因が想定されよう。出土状況と人為的行為に関する詳細な検討が望まれる。

今回最も多く確認された果菜類のメロン類は、溝 151-5 と土坑 151-26 より出土し、土坑 151-26 出土種子の一部には炭化が確認された。炭化種子は、何らかの人為的行為により火を受けたと推測される。

出土種子の一部の大きさを検討した結果、マクワ・シロウリ型が全体の約3/4を占める組成を示した。中世以降はマクワ・シロウリ型が大半を占める傾向（藤下 1992 など）を支持する結果と言える。一方、溝 151-5 では雑草メロン型が高率（38%）を占め、遺構間における種子群の大きさの違いも認められた。

食用にならない雑草メロン型は、マクワウリやシロウリの未成熟果実等の個体変異による可能性のほかに、他の用途の可能性が挙げられる。例えば、雑草メロンを供物とする風習が各地に残り、現在でも栽培されている地域がある（藤下 2004）。遺跡出土のメロン類種子計測事例の蓄積により、雑草メロン型の用途を検討する必要がある。

メロン類に次いで多産したニホンカボチャ近似種は、多量の種子とともに果柄が確認された。果柄は廃棄土坑 151-28 より出土し、頂部が鋭利な刃物等により切断されたと考えられる痕跡がみられた。この切断痕は、収穫具を反映している可能性が高い。種子は、主に廃棄土坑 151-100 と 151-整地土 1 より多産し、果実の配列を留めた塊状種子もみられた。種ごと剥り抜いた状態で廃棄された食料残渣に由来する可能性が高い。

出土種子の一部の大きさを検討した結果、廃棄土坑 151-100 出土種子群の大きさが最も大きく、151-整地土 1 中の出土種子群や廃棄土坑 151-100 の2・3層出土種子群とは区別される傾向が認められた。これらの要因として果実の大きさや系統等に由来する可能性が挙げられる。今後、DNA 分析等による解明が期待される。

栽培種を除いた分類群は、木本のマツ属複雑管束亜属、スギ、オニグルミ、ヒメグルミ、クヌギ節（クヌギ?）、クリ、サンショウ、草本のエノコログサ属、カナムグラ、アカザ属、ヒユ属、クサネムが確認された。木本は全て有用樹であることから、植栽の可能性も含めて周辺に生育していたと考えられる。特に廃棄土坑 151-28 の5層以下より出土したクリは、果実の他に葉を伴うことから、ごく近辺に生育していた可能性が高い。草本は人里植物主体で、周辺の草地に生育していたと考えられる。湿生植物のクサネムを含むことから湿った場所の存在も示唆される。

利用の可能性は、土坑 151-26 より出土したオニグルミの炭化核、廃棄土坑 151-100 より出土した打撃痕の可能性のあるヒメグルミ、廃棄土坑 151-28 より出土したクリが挙げられ、いずれもほぼ破片の状態である。これらの堅果類は食用のために利用されたと考えられる。

FKJ15-2 調査区 モモやウメ、スモモの核、カキノキの種子は、果肉を食べた後に捨てられた可能性がある。モモは食利用以外にも、観賞用や薬用、呪術用、祭祀用等さまざまな目的で利用されるため（那須 2015）、食べる以外の何らかの用途に用いられた後、溝や廃棄土坑に堆積した可能性もある。畑作物としては、トウガンやメロン仲間（マクワウリ・シロウリ型～モモルディカメロン型）、ニホンカボチャが得られており、食べられない部位である種実が水路や廃棄土坑等に廃棄された可能性が考えられる。ヒメグルミやオニグルミの核には打撃痕がみられないため、自然に半分に分かれた可能性が高い。チャノ

キの出土例としては、新潟県細池寺道上遺跡の近世のチャノキ種子等がある（バンドリ・佐々木 2018）。

引用・参考文献

- 藤下典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 同朋舎 pp.638-654
- 藤下典之 1992 「出土種子からみた古代日本のメロンの仲間－その種類、渡来、伝播、利用について－」『考古学ジャーナル 354』ニュー・サイエンス社 pp.7-13
- 藤下典之 2004 「メロン 海をわたった華花 ヒョウタンからアサガオまで」国立歴史民俗博物館 pp.56-60
- 石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会 p.328
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2010 『日本植物種子図鑑（2010年改訂版）』東北大学出版会 p.678
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文 2012 『ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632種－』誠文堂新光社 p.272
- 吉川純子 2015 「植物遺体」『小山崎遺跡発掘調査報告書－総括編－』遊佐町埋蔵文化財調査報告書第10集 遊佐町教育委員会 pp.162-165
- バンドリ スダルシャン・佐々木由香 2018 「細池寺道上遺跡から出土した大型植物遺体」『新潟市文化財センター編 細池寺道上遺跡Ⅶ 第46次調査』新潟市教育委員会 pp.90-98
- 那須浩郎 2015 「古代のモモ」『BIOSTORY』22 pp.58-61
- 米倉浩司・梶田 忠 2003- 「BG Plants 和名－学名インデックス (YList)」 <http://ylist.info>

2 貝類遺体

1) 試料と方法

試料は各遺構および包含層から採取されている。貝類遺体の点数は 15-1 調査区で 449 点、15-2 調査区で 305 点、16-1 調査区で 93 点の、合計 847 点であった。

試料の観察は肉眼で行い、標本との比較により同定した。

最小個体数の算出は、腹足綱（巻貝）はほぼ完存と殻軸が 1/2 以上が残存する個体の合計数とした。それらが無い遺構では蓋を数えた。蓋も無く、破片だけの遺構では複数片があっても 1 と数えた。二枚貝綱は、左右殻の数の多い方を最小個体数とし、左右不明の場合は複数の破片であっても 1 として算出した。

2) 結果と考察

同定結果を第 50 表、最少個体数を第 51 表に示す（図版第 62）。

同定されたのは、腹足綱でミミガイ科、メガイアワビ、クロアワビ、サザエ、オオタニシ、ウミニナ、アカニシの 7 分類群、斧足綱（二枚貝綱）でフネガイ科、イタボガキ科、シジミ属、サルボウガイ、イタヤガイ、ホタテガイ、ハマグリ、コタマガイ、ミルクイの 9 分類群の、計 16 分類群である。

なお、15-1 調査区のシジミ属はマシジミあるいはヤマトシジミと思われる。アワビ属にはトコブシ、クロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビ等複数種があり、破片のため絞り込めない。また、イタボガキ科は、マガキやイワガキ等が含まれるが、いずれも殻頂部を欠損する破片となっており、種の同定には至らなかった。

FKJ15-1 調査区 遺構ごとのサザエの最小個体数は、井戸 151-3 で 1 個体、溝 151-5 で 22 個体、道路側溝 151-6 で 31 個体、土坑 151-23 で 1 個体である。全ての遺構から出土したサザエの最小個体数を合計すると 55 個体である。

その他の貝類の最小個体数は、アワビ属が廃棄土坑 151-102 で 1 個体、オオタニシが 151-5 で 1 個体、

第2節 自然遺物

第50表 貝類同定結果

遺構	層	地区	取上 番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考	遺構	層	地区	取上 番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考															
151-3		C7-8	2	シジミ属	殻	右	完存、 殻皮付き	1	1個体	152-210		J9	2a	サザエ	蓋	-	ほぼ完存	1																
			10	サザエ	蓋	-	破片	1	1個体				2b	腹足綱	殻	-	破片	1																
151-5		F10	4	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	2	2個体	152-226		A9	2a	コタマガイ	殻	左	殻頂部	1																
			8	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	3	3個体				2b	シジミ属	殻	右	ほぼ完存	1																
					殻	-	破片	6	フジツボ付着				2c	腹足綱	殻	-	破片	3																
			9	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	2	2個体				152-291		C1	1a	シジミ属	殻	左	殻頂部	1	被熱												
					殻	-	破片	5								1b	斧足綱	殻	不明	破片	9	被熱												
			10	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1	1個体							2a	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1													
							破片	1					2b	腹足綱	殻	-	破片	4																
			11	サザエ	殻軸	-	破片	2					2c	斧足綱	殻	不明	破片	1																
					ハマグリ?	殻	不明	破片	2				表面溶解	152-352		B-C10	1	サザエ	殻軸	-	1/2残	1												
			12	不明貝類	殻	不明	破片	1					152-367					J9	1	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1										
			13	サザエ	殻軸	-	破片	1	1個体										152-373		J8-9	1a	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1							
			16	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	2	2個体				1b	腹足綱	殻軸	-	破片	3																
			18	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1	1個体				152- 整地土 1		遺構 精査	G7	1a	サザエ	蓋	-	ほぼ完存	1												
					殻	-	破片	1									1b	腹足綱	殻	-	破片	1												
			20	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1	1個体				G9				1a	ハマグリ	殻	左	完存	1	殻長30mm、 殻高25.5mm											
21	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	8	8個体	1b	斧足綱	殻	不明	破片	1																						
		オオタニシ	殻	-	半欠	1	1個体	表土下			D2	1	斧足綱	殻	不明	破片	2																	
22	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1	1個体	F6					1	イタボガキ科	殻	不明	破片	1																	
151-6	下層	D9	5	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	2	2個体	152- 整地土 1		遺構 精査	G6	2	ホタテガイ	殻	左	破片	2															
					殻軸	-	破片	4								表土下	C2	2a	シジミ属	殻	右	完存	1	殻長25.6mm、 殻高23.2mm										
					蓋	-	完存	1																	2b	ミミガイ科	殻	-	破片	1				
					殻	-	破片	2					D2				2a	シジミ属	殻	左右	ほぼ完存	2	L殻長192mm、 殻高18.9mm R残存値 殻長 31mm、殻高 31.1mm											
					螺塔	-	破片	19	2個体、フジツボ付着															表土直下				2b	ハマグリ	殻	右	殻頂部	1	
					殻軸	-	1/2以上残	27	27個体																									
					殻軸	-	破片	63					表土下					2a	シジミ属	殻	右	ほぼ完存	1	殻長28.7mm、 殻高27.6mm										
					蓋	-	ほぼ完存	18																	2c	サザエ	蓋	-	完存	1				
					殻	-	破片	205	フジツボ付着				B1					2a	ハマグリ	殻	左右	殻頂部	2											
					ハマグリ	殻	左	殻頂部	1																1個体	2b	シジミ属	殻	不明	破片	2			
					螺塔	-	破片	3					C2					2a	ハマグリ	殻	左	殻頂部	2											
					殻軸	-	破片	9																	2b	シジミ属	殻	不明	破片	7				
					蓋	-	ほぼ完存	1					B1					2a	ハマグリ	殻	左右	殻頂部	2											
					殻	-	破片	18	フジツボ付着																2b	シジミ属	殻	不明	破片	2				
							殻	-	破片				1	1個体	C2																			
				殻	-	破片	3		3	ハマグリ	殻	左	殻頂部	1																				
151-23		D9	13	サザエ	殻軸	-	破片	1	1個体	遺構 精査			I9	6	サルボウガイ	殻	左	ほぼ完存	1	放射肋30本														
151-28	上層	D8	5	シジミ属	殻皮	不明	殻頂欠く	12	6個体、殻無し																7	サルボウガイ	殻	右	ほぼ完存	1	放射肋31本			
151-102		D-E8	8	アワビ属	殻	-	ほぼ完存	1	1個体、表面溶解、マガリアワビあるいはメガイアワビ	遺構 精査			D1	1a	ウミナナ	殻	-	ほぼ完存	1															
152-1		D2	5	斧足綱	殻	不明	破片	1													81内			B1	1	斧足綱	殻	右	殻頂部	1				
152-2	1段目石 列裏込	C1	9a	ハマグリ	殻	右	ほぼ完存	1		遺構 精査			D1	2	斧足綱	殻	不明	破片	1															
			9b	ハマグリ	殻	不明	破片	8													B1	7a	ハマグリ	殻	左右	腹縁破損	4	左3、右1 R殻長51.7mm						
			B1	18	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1																					7b	斧足綱	殻	不明	破片
	裏込土	C1	31	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	4					B10	6	ハマグリ	殻	不明	破片	1															
				34a	サザエ	殻軸	-	破片	2													81内			B1	7c	シジミ属	殻	左・ 不明	ほぼ完存	2	殻長17.5mm、 殻高15.9mm		
			34b	腹足綱	螺塔	-	破片	1		I9				8	イタボガキ科	殻	不明	破片	2															
152-32	第4砂 利面下 盛土	J9	11a	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1													81内			B1	11a	ハマグリ	殻	左右	殻頂部	5	左3、右2			
			11b	ハマグリ	殻	不明	破片	1		11b	斧足綱	殻	不明	破片	48																			
			12	斧足綱	殻	-	破片	1									C1															1a	ハマグリ	殻
152-32下		J9	15	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1		81下				1b	斧足綱	殻					不明	破片	10											
152-35		I7	1	ハマグリ	殻	不明	破片	2									152- 整地土 3																	
152-79		H7	1a	サザエ	蓋	-	1/2残	1																										
			1b	斧足綱	殻	不明	破片	1																J8										
152-81下	整地土 2	B1	1a	斧足綱	殻	不明	破片	1																										
				1b	斧足綱	殻	不明	破片	1												4a													
152-146		C1	4a	サザエ	殻軸	-	1/2残	23																										
			4b	サザエ	殻軸	-	破片	2												4														
			4c	サザエ	螺塔	-	破片	2																						5a				
152-148		C1	3	サザエ	殻軸	-	1/2以上残	1																										
			7	サザエ	殻軸	-	1/2残	1												5b														
			9	クロアワビ	殻	-	ほぼ完存	1	殻長113.1mm																					8a				
			11a	サザエ	殻軸	-	1/2残	1												8b														
		11b	メガイアワビ	殻	-	破片	8	外唇縁張出、 殻高扁平																										

遺構	層	地区	取上番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考	遺構	層	地区	取上番号	分類群	部位	左右	状態	数量	備考
152- 整地土3		C1	9a	サザエ	殻軸	-	1/2 以上残	1		161- 117		H1	1d	ミミガイ科	殻	-	破片	10	
			9b	アカニシ	殻軸	-	1/2 残	1					1e	サザエ	蓋	-	完存	1	
			13a	サザエ	殻軸	-	1/2 残	1					1f	ミミガイ科	殻	-	破片	2	
			13b	サザエ	殻軸	-	破片	1					1g	イタボガキ科	殻	左	殻頂部	1	
			20a	シジミ属	殻	右	殻頂部	1	被熱				2a	サザエ	蓋	-	完存	1	
			20b	オオタニシ	殻	-	破片	2	くびれ弱く、 弱い螺肋				2b	サザエ	殻	-	殻頂部	1	
			21a	斧足綱	殻	不明	破片	1					2c	ミミガイ科	殻	-	破片	2	
			21b	イタボガキ科	殻	不明	破片	1					2d	イタボガキ科	殻	左	殻頂部	1	
25	サザエ	殻軸	-	1/2 残	2		2e	シジミ属	殻	右	殻頂部	3							
152- 整地土4		C1	1	サザエ	殻軸	-	1/2 残	1		2f	シジミ属	殻	左	殻頂部	1				
152- 整地土5	東壁	C1	1	斧足綱	殻	不明	破片	1		2g	斧足綱	殻	不明	破片	1				
		C2	1	イタボガキ科	殻	不明	破片	2		2h	腹足綱	殻	-	破片	1				
		C1	2	斧足綱	殻	不明	破片	2		2i	腹足綱	殻	-	破片	1				
161- 112		G10	1a	サザエ	殻軸	-	1/2 以上残	8		161- 126		H1	1a	ミルカイ	殻	左	破片	1	
			1b	サザエ	蓋	-	ほぼ完存	1					1b	フネガイ科	殻	左	破片	4	
			1c	イタボガキ科	殻	左・不明	ほぼ完存	2					2a	ミルカイ	殻	左右	腹縁欠	2	
			2a	サザエ	殻軸	-	1/2 以上残	2					2b	フネガイ科	殻	不明	破片	3	
			2b	サザエ	蓋	-	ほぼ完存	3					3a	シジミ属	殻	左右	ほぼ完存	4	L:殻長25.6mm R1:殻長25.8mm 殻高25.7mm R2:殻長24.6mm R3:殻長19.8mm
			2c	サザエ	殻	-	破片	19					3b	ミミガイ科	殻		破片	1	
			2d	斧足綱	殻	不明	破片	2					3c	腹足綱	殻軸		破片	1	
			4	サザエ	殻軸	-	1/2 残	3											
161- 117		H1	1a	サザエ	蓋	-	完存	1											
			1b	ミミガイ科	殻	-	破片	9											
			1c	シジミ属	殻	右	殻頂部	1											

シジミ属が 151-3 で 1 個体と 151-28 で 6 個体の計 7 個体、ハマグリが 151-6 で 1 個体である。

FKJ15-2 調査区 最小個体数で見ると、15-2 調査区で最も多く出土したのは、サザエ (48 個体)、次いでハマグリ (15 個体)、シジミ属 (7 個体) となる。サザエは各遺構と整地土から出土しており、特に石積遺構 152-146 では 23 個体分がまとまって出土している。ハマグリとシジミ属も各遺構と整地土で出土しているが、整地土からの出土が多い傾向にある。

FKJ16-1 調査区 最小個体数はサザエ (16 個体)、次いでシジミ属 (7 個体)、イタボガキ科 (3 個体) となる。

イタヤガイには、内面から外面方向の 2 つの穿孔が認められた。ふくらみの強い右殻に穿孔があったため、柄を付けて貝杓子として利用したと思われる。

第 51 表 出土貝類の最小個体数

調査区	遺構名	メガイアワビ	クロアワビ	アワビ属	ミミガイ科	サザエ	オオタニシ	ウミニナ	アカニシ	腹足綱の一種	サルボウガイ	フネガイ科	イタヤガイ	ホタテガイ	イタボガキ科	シジミ属	ハマグリ	コタマガイ	ミルカイ	斧足綱の一種	
15-1	3					1										1					
	5					22	1														
	6					31											1				
	23					1															
	28															1					
15-2	102			1																	
	1																				1
	2					5				1							1				
	32					1				1							1				
	32 下					1															
	35																1				
	79					1															1
	81 下																				1
	146					23															
	148	1	1			3															
	210					1				1											
	226									1						1		1			
	291					1				1						1					1
	352					1															
	367					1															
373					1				1												
整地土 1				1	2				1	1			1	1	3	3				1	
整地土 2					1		1						1	1		6				1	
整地土 3					5	1		2	1			1	1	2	3					1	
整地土 4					1																
整地土 5															1					1	
16-1	112					13									1						1
	117				1	3				1					2	4					1
	126				1					1	1				3					1	1
	合計				1	1	1	3	119	2	1	2	10	1	1	1	2	7	16	16	1

出土した貝類を生息域でみると、サザエやメガイアワビ、クロアワビは岩礁に生息し、サザエは内湾および外海の岩礁域、アワビ類は外海の岩礁域に生息する。クロアワビは潮間帯から水深20mほどの浅い岩礁、メガイアワビは水深5～30mの岩礁に生息する。ハマグリは内湾の砂泥底、アカニシは内湾泥底に生息する。海産貝類は、いずれも沿岸部に生息する貝類が中心であり、貝の採取活動が沿岸部の水深の浅い海域で行われたと考えられる。また、海における採取活動だけではなく、淡水に生息するオオタニシも出土したことから、遺跡周辺の淡水域の利用が想定される。

これらの貝類はいずれも食用となり、イタヤガイを除いて、殻に人為的な加工の痕跡は認められなかったため、食材として利用された後に殻が廃棄されたと考えられる。

3 動物遺存体

1) 試料

試料は、15-1、15-2、16-1 調査区の溝、道路側溝、井戸材抜き取り坑、土坑、近代造成土、水路埋土と裏込土、井戸枠内、整地土等から出土した動物遺存体 179 点である。

2) 方法

試料を肉眼と（双眼）実体顕微鏡で観察し、形態的特徴と現生標本との対比によって同定を行った。

3) 結果

同定結果および詳細を第52表に示す。また主要な分類群を写真で示す（図版第63～65）。

同定されたのは魚類がブリ属 (*Seriola*)、タイ科 (*Sparidae*)、チダイ (*Eynniss tumifrons*)、マダイ (*Pagrus major*)、シイラ属 (*Coryphaena*)、硬骨魚綱 (*Perciformes*) の6分類群、爬虫類がスッポン (*Pelodiscus sinensis*) の1分類群、鳥類がサギ科 (*Ardeidae*)、ウ科 (*Phalacrocoracidae*)、カモ科 (*Anatidae*)、キジ科 (*Phasianidae*)、ニワトリ (*Gallus gallus domesticus*)、鳥綱 (*Aves*) の6分類群、哺乳類がヒト (*Homo sapiens*)、キツネ (*Vulpes vulpes*)、ニホンザル (*Macaca fuscata*)、ネズミ科 (*Muridae*)、イヌ (*Canis lupus familiaris*)、ネコ (*Felis silvestris catus*)、ウマ (*Equus caballus*)、イルカ類 (*Odontoceti fam. indet.*)、ニホンジカ (*Cervus nippon*)、ウシ (*Bos taurus*)、哺乳綱 (*Mammalia*) の11分類群であった。

4) 考察

FKJ15-1 調査区 解体痕や刀傷などが見られる試料は無かったため、動物の解体などについては不明である。

ブリ属とタイ科は、いずれも海産魚類であり、おそらく海産と見られる腹足綱（巻貝）も見られ、海岸部で採取された魚類や貝類が、福井城下に持ち込まれ消費されたと考えられる。なおタイ科の尾椎など一部の魚骨は焼けていた。

イヌには成獣だけでなく幼獣が見られた。人による飼育下で繁殖していたと思われる。

キツネは、野生の個体が狩猟により捕獲された可能性が考えられる。

その他にイヌの可能性のある左上腕骨があったが、近位端も遠位端も剥落しており、骨端線の癒合が完了しておらず、成長途中の幼獣であったと考えられる。

FKJ15-2・16-1 調査区 硬骨魚綱はいずれも海産魚類であり、上顎骨、鰓蓋骨等の頭部および椎骨が出土している。またマダイ等には切断された解体痕が観察された。他に海産物はイルカ類があり、切断痕が椎体の縁に見られることから椎骨と椎骨の間を狙って切断されていることがわかる。マダイ、チダイ等のタイ科は沿岸の岩礁域に生息し、ブリ属は季節性の回遊魚で底曳網や刺網などの網漁で漁

獲される。シイラ属は外洋の表層に生息するシイラと考えられる。16、17世紀に日本海で始まったシイラ漬け漁⁽¹⁾によってシイラは日本海側の夏の風物詩となっていたが、本遺跡の試料は椎骨2点のみの出土のため、網漁の混獲の可能性も考えられる。また、イルカ類も網漁の混獲による漁獲と考えられる。そのため、シイラやイルカ類はマダイ等のタイ科に比べると流通量が少なく、食卓に並ぶ比率は低かったと考えられる。

爬虫類はスッポンの肋骨板や腹骨板のみの出土である。スッポンは河川の流れが緩やかな中・下流域や池、湖沼などに生息し、古くは滋養強壮に効くとされる高級なもので、江戸時代には主に西日本で食されていた。なおスッポンは日本各地から出土しており、福井県全域でも生息している。ただし一般家庭では料理が困難であった。

鳥類はサギ科、ウ科、カモ科と浅い海域、河川、池沼などの海辺、河辺の湿潤地を好むものの出土ばかりであり、狩猟によって獲得されたと考えられる。また、海辺や河辺の他にカモ科には水田で蒞跡の落ち穂を食すものもあり、より人里に近い場所で獲得された種もいると考えられる。キジ科は山地から平地の林、農耕地、河川敷などの明るい草地に生息するが、キジ科のなかで家畜化されたものがニワトリである。本報告のニワトリは骨端部が癒合している成鳥であり、現代のように若鶏の消費はせず、場合によっては鶏卵も利用されたと考えられる。カモ科やキジ科に腱を外す切創や関節を外す切断痕が観察されることもあり、鳥類は食用目的で持ち込まれたものであったことがわかる。

哺乳類は野生動物としてニホンザル、ネズミ科、ニホンジカがみられる。ニホンザル、ニホンジカは資源豊かな山野に生息する。特にニホンザルは広葉樹林を好み、森林から狩猟により獲得されたものと考えられる。ネズミ科は森林のほかに河原の土手や田畑の斜面、建物内など人里やその近隣に生息する。ネズミ科は近隣に生息していたものが石組水路 152-2 で死んだものと考えられる。ニホンジカは鹿角、中手骨、中足骨等が骨角器としてよく利用されるが、本遺跡での出土は橈骨のみであり、食物残渣と考えられる。家禽、家畜としてはイヌ、ネコ、ウマ、ウシがみられる。イヌは古くから飼育されるが、一方で市中には野犬もいたと考えられる。なお、水路 152-2 よりイヌの頭蓋骨と下顎骨の同一個体の5体、下顎骨のみのもの3体、計8体分の出土があった。いずれも同様の解体痕がみられ、頭部を露出させるために頭蓋骨の上部や左右の顎関節を切断している（図版第 65）。近世の例だが、明石城武家屋敷の裏庭から側頭部に穿孔し脳を利用したと思われるイヌの頭蓋骨の出土例があり、食用としたと考えられており、本遺跡の試料も脳を利用するための解体痕と考えられる。ネコは奈良時代頃に中国から輸入されたとされ、平安時代に愛玩動物として『枕草子』等に登場する。江戸時代初期まではネコは少なく貴重な動物だったと考えられる。ウマやウシは腱や皮を外す解体痕や鋸跡などの加工痕がみられ、生きている間は乗馬、荷物の牽引などに使役され、最終的には解体され、骨、角の他に皮や肉を細工物の材料や食用として利用されたと考えられる。なおウシは角のみの出土で全形を留めるものがほとんどだが、鋸による帯状の切れ込みが認められる（図版第 63-17）。これはウシの角の皮（角鞘）を切り開いて板状にして細工物に利用した痕跡と考えられ、16世紀、戦国期になって一般化するようになった可能性が高いと言われている（松井 2005）。また、非常に高価であったタイマイの甲羅を用いた鼈甲の代用品として、ウシの角鞘を用いた牛甲の素材を採取した末に投棄されたものの可能性もある⁽²⁾。なお、同様の痕跡を持つウシの角は、近世初頭の堺環濠都市遺跡等からも出土している。ヒトは上腕骨、脛骨のみの出土である。脛骨は保存状態が良く、骨の厚みや稜の状態から、比較的華奢な印象を受ける女性のものであると考えられる。

第2節 自然遺物

第52表 動物遺存体同定結果

調査区	遺構	遺物 No.	地区	層位	分類群	部位	部分	左右	個数	備考		
15-1	5	2	F10		哺乳綱	脛骨	遠位端～骨幹	右	1	中型		
		9	F10		イヌ	大腿骨	完存	左	1			
					イヌ?	上腕骨	骨幹	左	1	両骨端未癒合、幼獣		
		12	F10		イヌ	下顎骨	ほぼ完存	右	1	第1～3後臼歯未萌出、幼獣		
					キツネ	下顎骨	ほぼ完存	左	1			
		18	F10		キツネ	下顎骨	ほぼ完存	右	1			
					哺乳綱	肩甲骨	ほぼ完存	左	1	中型		
	21	E10			ヒト	頭蓋骨	側頭骨	左	1			
	6	4		8層	ヒト?	不明	破片	不明	1	焼		
					腹足綱	殻	破片	-	1			
	23	4	D9	1層	ブリ属	尾椎	ほぼ完存	-	1			
	26	2	C8	3層	タイ科	尾椎	椎体	-	1	焼		
					硬骨魚綱	椎骨	椎体	-	1	焼		
						硬骨魚綱	不明	破片	不明	1	焼	
		近代造成土	4	B7	砂層	イヌ	下顎骨	ほぼ完存	右	1		
	24	C7	ゴミ層2	鳥綱	尺骨	遠位端～骨幹	左	1				
	22	C7	ゴミ層1	タイ科	尾椎	椎体	-	1				
-	-	J5・A5・A6	表探	ウシ?	大腿骨	骨幹	左	1				
15-2	2	1	C1-C10	裏込土	マダイ	上後頭骨	ほぼ完形	-	1			
	2	2	B1	上層(1段目)	イヌ	下顎骨	ほぼ完形	左	1			
	2	6	B1	下層	タイ科	主鰓蓋骨	半形	右	1	前頭骨を切断か(解体痕)		
					タイ科	主上顎骨	完形	左	1			
					ブリ属	主鰓蓋骨	ほぼ完形	右	1			
					硬骨魚綱	不明	破片	-	1			
					スッポン	肋骨板	完形	右	1			
					スッポン	中腹骨板	完形	右	1			
					スッポン	肋骨板	ほぼ完形	左	2	左2、右1		
					スッポン	肋骨板	ほぼ完形	右	1			
					イヌ	寛骨	腸骨	右	1	外側に切り傷、後位、腸骨中間を切断(解体痕)		
					ウマ	肩甲骨	近位端	左	1	鋸による擦り切りによる切断(加工痕)		
	ウマ	脛骨	近位端	右	1	腱を外す傷痕(解体痕)、鋸の擦り切りによる切断(加工痕)						
	2	10	C10		不明哺乳類	不明	破片	-	1	加工		
	2	12	C10		ブリ属	椎骨	尾椎	-	1			
	2	13	C10	スッポン	内腹骨板	完形	-	1				
				スッポン	肋骨板	半形	右	1				
				ヒト	脛骨	ほぼ完形	右	1				
	2	13	C1	硬骨魚綱	前鰓蓋骨	破片	-	1				
				硬骨魚綱	血管棘	完形	-	1				
				硬骨魚綱	棘状突起	破片	-	3				
				ウシ	頭蓋骨	角	-	1	鋸による擦り切り、鋸による切れ込みなど(加工痕)			
	2	14	C1	硬骨魚綱	棘状突起	完形	-	1				
				硬骨魚綱	血管棘	破片	-	2				
				スッポン	肋骨板	完形	左	1				
				スッポン	肋骨板	完形	右	1				
				スッポン	下腹骨板	完形	左	2	2個体			
				キジ科	烏口骨	完形	左	1	ニワトリ?			
				鳥類	不明	破片	-	1				
				ネズミ科	頭蓋骨	破片	-	1	3つに分解			
				ニホンザル	下顎骨	ほぼ完形	右	1				
				ネコ	尺骨	完形	左	1				
				ウシ	頭蓋骨	角	右	2	2個体、大きい個体に刃物で叩いた傷痕(加工痕)			
				ウマ	脛骨	遠位	右	1				
				2	14	C1	埋土	スッポン	肋骨板	ほぼ完形	左	1
2				15	B1		ブリ属	歯骨	ほぼ完形	左	1	
				ネコ	肩甲骨	完形	右	1	未癒合			
2	15	C1		イノシシ/ニホンジカ	肋骨	完形	右	1	近位後位に細い刃物痕(解体痕)			
2	16	B1	底面	スッポン	肋骨板	ほぼ完形	左	1				
				ウシ	頭蓋骨	角	左	2	2個体、両方に鋸による擦り切り痕(加工痕)、大きく残る方には頭蓋骨から叩き切りで切断した痕跡(解体痕)			
2	16	B1		硬骨魚綱	鰓蓋骨	破片	-	2	切断の解体痕			
2	18		タイ科	口蓋骨	半形	右	1					
			タイ科	椎骨	腹椎	-	1					
			マダイ	前頭骨	半形	右	1					
			スッポン	内腹骨板	完形	-	1					
			イヌ	上腕骨	近位-遠位	左	1	未癒合				
			ネコ	腓骨	近位端-遠位	右	1	遠位未癒合				
2	18	B1		スッポン	肋骨板	完形	左	2				
				スッポン	下腹骨板	ほぼ完形	右	1				
2	21	C10	水路埋土	イヌ	脛骨	近位-遠位端	-	1				
2	21	B1	裏込土	小型哺乳類	中手/中足骨	完形	-	1				
2	22	C1	水路埋土	スッポン	肋骨番	完形	右	1				
				イヌ	頭蓋骨	後頭部欠損	-	2	2個体のイヌの頭蓋骨と下顎骨。頭蓋骨では大きく残る個体は後頭部に、小さい方は前頭部に切断の解体痕あり。下顎骨はいずれも後位外側が切断され、関節突起、角突起を欠く			
				イヌ	下顎骨	ほぼ完形	左	2				
				イヌ	下顎骨	ほぼ完形	右	2				
				ウシ	頭蓋骨	角	-	1	加工により細片にしたもの			

第6章 自然科学分析

調査区	遺構	遺物 No.	地区	層位	分類群	部位	部分	左右	個数	備考
15-2	2	23	C1	水路埋土	イス	上顎骨	後頭部欠損	-	1	頭蓋骨1個体、下顎骨2個体のイス。頭蓋骨は後頭部を切断した解体痕、下顎骨はいずれも後位外側が切断され、関節突起、角突起を欠く。下顎骨(右)と遺物No.30下顎骨(左)は同一個体
					イス	下顎骨	ほぼ完形	左	1	
					イス	下顎骨	ほぼ完形	右	2	
	2	24	C1	裏込土	ネコ	上腕骨	完形	右	1	
	2	29	C1	埋土	タイ科	椎骨	腹椎	-	1	木片2
					マダイ	前上顎骨	ほぼ完形	左	1	
					ブリ属	歯骨	半形	左	1	
					硬骨魚綱	鰓蓋骨	破片	-	2	
					硬骨魚綱	血管棘	破片	-	3	
					硬骨魚綱	棘状突起	破片	-	4	
					硬骨魚綱	不明	破片	-	10	
	イス	遊離歯	犬歯	-	1					
	ウマ	大腿骨	近位	右	1	前位骨体に解体痕				
	2	29	B1	水路埋土	スッポン	中腹骨板	ほぼ完形	右	1	
	2	30	B1	水路埋土	スッポン	肋骨板	完形	左	1	
					イス	頭蓋骨	後頭部欠損	-	2	頭蓋骨2個体、下顎骨4個体のイス。頭蓋骨は2個体とも眉間のあたりから後ろにかけて切断、残存の少ない個体は右上顎歯根が露出する程度の範囲まで切断される。下顎骨はいずれも後位外側が切断され、関節突起、角突起を欠く。うち下顎骨(左)1点は、遺物No.23下顎骨(右)と同一個体
					イス	下顎骨	ほぼ完形	左	4	
					イス	下顎骨	ほぼ完形	右	4	
	ウ科	上腕骨	近位端-遠位	左	1					
	2	32	B1	裏込土	鳥類	肋骨	破片	-	1	
	2	34	B1		ウシ	頭蓋骨	角	-	1	鋸の切れ込みによる加工痕、横引き鋸か
	20	5	C1	整地土2	サギ科	鳥口骨	肩端-骨体	左	1	
	32	10	I9	第3砂利面下盛土	硬骨魚綱	不明	破片	-	1	
					ニワトリ	上腕骨	近位-遠位	左	1	
	32	12	J9	第4砂利面下盛土	ニワトリ	脛足根骨	完形	左	1	
	43	3	C1		カモ科	脛足根骨	完形	左	1	マガンクラス
	82	1	H7	井戸枠内1層	イス	上腕骨	近位-遠位	右	1	未融合
	146	1	C1		イス	脛骨	近位-遠位	右	1	未融合、骨幹内側に解体痕
	146	2	C1		タイ科	上擬鎖骨	完形	左	1	
	146	4	C1		チダイ	前頭骨	ほぼ完形	-	1	
	178	9	I9		シイラ属	椎骨	尾椎	-	1	
	178	9	I9		キジ科	鳥口骨	完形	右	1	ニワトリ? 遠位端に切断痕(解体痕)
	281	2	B10		硬骨魚綱	血管棘	半形	-	1	
	281	4	B10		ブリ属	椎骨	半形	-	1	
	291	2	C1		硬骨魚綱	不明	破片	-	1	
	352	2	B10・C10		ウ科	尺骨	完形	右	1	
					ニワトリ	脛足根骨	近位-遠位端	左	1	
					ネコ	脛骨	近位-遠位端	左	1	
	367	1	J9		イス	中足骨	ほぼ完形	右	4	第2-第5で同一個体、遠位未融合。
					イス	趾骨	基節骨	-	1	
イス					大腿骨	近位-遠位	左	1	未融合	
小型哺乳類					大腿骨	骨幹	左	1		
373	1	J8・J9		イルカ類	椎骨	椎体	-	1	前位左側に切断(解体痕)	
整地土1	2	D2		シイラ属	椎骨	尾椎	-	1		
				硬骨魚綱	不明	破片	-	1		
整地土1	9	C1		マダイ	前上顎骨	ほぼ完形	右	1		
整地土2	10	A10		ブリ属	歯骨	破片	左	1		
整地土2	12	C1		ブリ属	前上顎骨	完形	右	1		
整地土3	1	A9		哺乳類	脛骨	骨幹	-	1	ニホンジカ?、ぎざぎざ割れ、加工?解体?	
整地土3	1	I9		硬骨魚綱	棘状突起	ほぼ完形	-	1	被熱白色変化	
整地土3	9	C10		タイ科	上後頭骨	完形	-	1		
整地土3	19	C1		カモ科	上腕骨	近位-遠位端	左	1	遠位端に関節を外すための切傷(解体痕)	
				カモ科	尺骨	近位端-骨幹	左	1		近位端に関節をはずすための切断(解体痕)
16-1	112	1	G10		イス	肩甲骨	一部欠損	左	1	
	112	4	G10		イス	頭蓋骨	破片	-	2	
					イス	肋骨	ほぼ完形	-	1	
	116	2	H10		ニホンジカ	橈骨	骨幹	左	1	
	117	1	H1		タイ科	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
					タイ科	主鰓蓋骨	ほぼ完形	右	1	
					タイ科	間鰓蓋骨	破片	-	1	
					硬骨魚綱	不明	破片	-	1	
	117	2	H1		タイ科	上舌骨+基舌骨	完形	右	1	
					マダイ	主上顎骨	ほぼ完形	左	1	前位内側に切断痕、前頭部切断か(解体痕)
					硬骨魚綱	血管棘	完形	-	2	
					ヒト	上腕骨	骨幹	-	1	

5) まとめ

出土した動物骨のうちヒトを除きいずれも食用となる動物であるが、ネズミ科は出土地点で死亡したものと考えられた。その他の動物は食用とされ調理や解体の過程で不要となった部位を投棄した残渣であった。また、イヌは脳を食用として複数体頭部を解体し投棄している。なおウマ、ウシは食用とされたほか、皮革や骨角器等に利用され、不要部位を投棄したものと考えられる。ほとんどの動物骨が出土した石組水路 152-2 は屋敷境溝であり、日常的な食物残渣の他にウシやウマを皮革や細工物に利用した端材や不要部位を廃棄する水路にも用いられ、加工を行う工人が近隣で活動していた可能性を示す。

註

- 1 シイラ漬け漁：浮遊物に集まる習性を利用して竹を束ねて沖合に浮かべ、シイラが集まったところで網で漁獲する漁法。16、17世紀に日本海ではじまり、シイラが夏の代表魚となるようになった。
- 2 正徳2年(1712年)成立の『和漢三才図会』にウシの利用方法についての記述に「入りて角を用いるに、煮て柔らかくし、堅に破り拵けて、徐々に踏み押さえ、狭まればすなわち、煮て拵け、板のごとし。櫛に挽き、黒き文に染めて琢(みが)きて、玳瑁(たいまい)と偽る。」とある。牛の角鞘から櫛を作り偽龜甲を作っていたことがわかる。

引用・参考文献

- 阿部永 1994 『日本の哺乳類』 東海大学出版会 p.195
- 松井章 1992 「明石城武家屋敷出土の動物遺存体」『明石市明石城武家屋敷跡-山陽電鉄連続立体交差事業に伴う発掘調査報告所-兵庫県文化財調査報告』 兵庫県教育委員会 pp.132-140
- 松井章 2000 「斃牛馬利用の動物考古学的考察-特に牛角の利用について」『動物考古学』14 動物考古学研究会 pp.11-22
- 松井章 2005 「考古学から見た動物と日本人の歴史」『周縁文化と身分制』 思文閣出版 pp.187-239
- 望月賢二 2005 『魚と貝の事典』 魚類文化研究会 p.433

第3節 土壌分析

1 はじめに

福井城跡 15-1 調査区は、JR 北陸本線東側に隣接している。調査区北半部に南北にのびる砂利敷道路が確認され、17世紀前葉と中葉、それ以降で屋敷境の変化に対応して溝や土坑等の遺構が検出された。15-1 調査区は福井市豊島に位置する。城郭存続時には「城ノ橋」と呼ばれる外曲輪にあたり、主に武家屋敷が建ち並んでいた小道具町と呼ばれる辺りである。遺跡からは砂利敷道路、溝、土杭、柱穴等が検出された。試料となる 151-26 は土坑、151-28・102・204・259 は廃棄土坑、151-108 は素掘り井戸である。なお、素掘り井戸 151-108 は深さが2mを越え、廃絶後には廃棄土坑として利用された。これらの遺構で採取された堆積土について分析を行い、植生、環境、食性の復原を行う。

2 試料

分析試料は、15-1 調査区より出土した素掘り井戸、土坑、廃棄土坑より採取された試料で、詳細は第53表に記す。

3 花粉分析

1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に適用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物等を対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉等の

植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。しかし風媒花や虫媒花等の散布能力の差で、庭園などの狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど陸上の堆積物が分析に適さないわけではない。

第53表 分析試料一覧表

No	遺構名	グリッド	層位	土色・土質	花粉	大型植物遺体	微細遺物	遺構	時代	
1	151-28	D8	1層	オリーブ黒色粘質土	○	○		廃棄土坑	18～19世紀	
2			2層東半	黒色砂質土	○	○				
			2層西半	黒色砂質土	○					
3			3・4層	黒色有機質・黒褐色砂質土	○	○				
4			5層以下東半	オリーブ黒色砂質土	○	○				
			5層以下西半	オリーブ黒色砂質土	○					
5	151-102	E8	19層中央	黒色粘質土	○		○	廃棄土坑	18～19世紀	
6			26層下層	黒色粘質土	○		○			
7	151-26	C8	4層西端種集中	黒褐色粘質土	○	○		土坑	17世紀	
8			4層東側	黒褐色粘質土	○	○				
9			3層	黒色有機質層	○	○				
			3層(黒色土)	黒色有機質層	○					
10	151-204	J6	8層上	灰黄褐色砂質土	○	○		廃棄土坑	17世紀	
			8層袋	灰黄褐色砂質土	○					
11			9層上層	黒褐色砂質土	○		○			
12			9層下層	黒褐色砂質土	○		○			
13	151-108	J5	18層	黒色粘質土	○		○	素掘り井戸(廃棄土坑)	17世紀	
14			20層	黒褐色粘質土	○		○			
15			23層	黒色粘質土	○		○			
16			27層	黒色粘質土	○		○			
17			31層	黒色粘質土	○		○			
18			33層	黒色粘質土	○		○			
19			34層・35層	黒色粘質土	○		○			
20	151-259	I6	13層	黒褐色粘質土	○	○		廃棄土坑	17世紀	
21			14層	黒色粘質土	○	○				
計					25	12	9			

2) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- (1) 試料から1cm³を採量
- (2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- (4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- (5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- (6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- (7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加え染色した後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- (8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と比べて同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

3) 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 30、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 31、シダ植物孢子 2 形態の計 69 である。これらの学名と和名および粒数を表に示し（第 54 表）、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復原するために、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図に示す（第 93 図～第 98 図）。なお、200 個未満であっても 100 個以上計数できた試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（図版第 66、67）。同時に寄生虫卵についても検鏡した結果、7 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉 モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、トチノキ、ブドウ属、ツバキ属、グミ属、ツツジ科、カキノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、スイカズラ属

樹木花粉と草本花粉を含むもの クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

草本花粉 ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ユリ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ヒルガオ、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

シダ植物孢子 単条溝孢子、三条溝孢子

寄生虫卵 回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵-異形吸虫類卵、日本海裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵、不明虫卵

以下にこれらの特徴を示す。

回虫 *Ascaris lumbricoides* 回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60 \mu\text{m}$ あり、楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18 日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

鞭虫 *Trichuris trichiura* 卵の大きさは $50 \times 30 \mu\text{m}$ のレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は 3～6 週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。鞭虫は世界に広く分布し、現在では、特に熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。

肝吸虫 *Clonorchis sinensis* 卵の大きさはおよそ $30 \times 16 \mu\text{m}$ のなすび型で一端に陣笠状の小蓋を有する。卵殻の表面には亀甲状の紋理を認める。糞便とともに外界に出た虫卵は、水中で第 1 中間宿主のメタニシに食べられ、セルカリアになり水中に遊出し、第 2 中間宿主のモツゴ、モロコ、コイ、フ

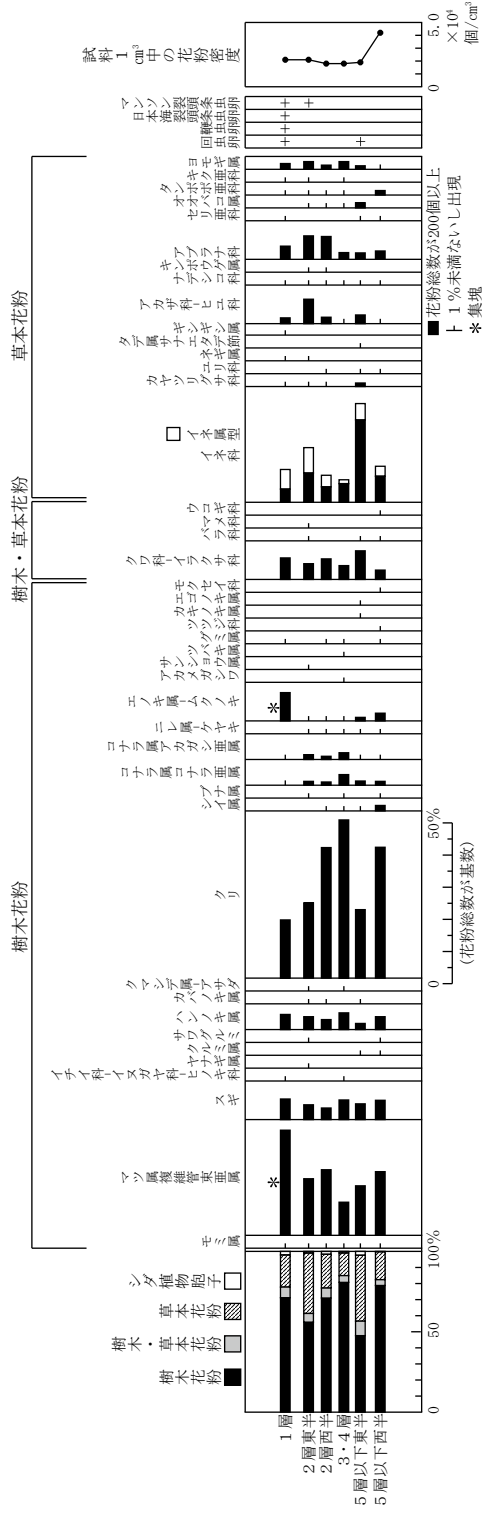
第54表 花粉分析結果

学名	和名	分類群										151-259													
		151-28		151-102		151-26		151-108		34-35層															
		1層	2層	2層	3・4層	5層	5層	19層	3層	3層	4層	4層	8層	8層	9層	9層	18層	20層	23層	27層	31層	33層	34-35層	13層	14層
		東半	西半	東半	西半	以下	以下	中央	黒色	黒色	西側	東側	東側	上層	下層										
Arboreal pollen	樹木花粉																								
<i>Abies</i>	モミ属	1	1	1	3	1	1							1	1	1								2	1
<i>Tsuga</i>	ツガ属							1																	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属 擬維管束亜属	112*	58	80	34	57	83	2	3															44	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	22	15	14	20	18	25	1	1															17	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	1	2																					1	
<i>Salix</i>	ヤナギ属																								1
<i>Juglans</i>	クルミ属																								2
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サウワグミ	1	13	12	17	7	17	1	2															1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	1	1	1	1	1																	5	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	2																						1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	62	77	159	162	79	171	10	1															1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ																								3
<i>Castanopsis</i>	シイ属																								11
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	1	1	1	1	1																	2	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属 コナラ亜属	2	4	4	11	5	5	10	8	2	1	2	3	8	17	16	22	2	3	3	3	3	5	3	5
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属 アカガシ亜属	2	5	4	7	3	3	2	6	1	1	3	11	7	15	6		1	1	1	1	1	1	1	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	2	1	1	2	3																			
<i>Celtis-Platanthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ	30*	3	3	2	4	10																	2	
<i>Malilus japonicus</i>	アケメカシワ																								1
<i>Zanthoxylum</i>	サンシヨウ属	1																							1
<i>Ilex</i>	モチノキ属																								1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ																								1
<i>Fitis</i>	フトウ属																								1
<i>Camellia</i>	ツハキ属																								1
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	1	1	2																					1
Ericaceae	ツツジ科																								1
<i>Diospyros</i>	カキノキ属																								2
<i>Syrax</i>	エゴノキ属																								1
Oleaceae	モクセイ科																								3
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属																								3
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																								
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	23	16	25	14	33	12	1	6	8	8	3	13	42	43	62	73	2	11	7	3	3	9	19	27
Saxifragaceae	ユキノシタ科																								2
Rosaceae	バラ科	1																							1
Leguminosae	マメ科	1																							2
Araliaceae	ウコギ科																								1
<i>Sambucus-tiburnum</i>	ニワトコ属-ガマスミ属																								1
Nonarboreal pollen	草本花粉																								
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属																								1
<i>Alisma</i>	サシオモダカ属																								1
Gramineae	イネ科	14	30	19	19	95	34	93	121	26	12	20	54	60	77	50	91	25	22	6	18	17	14	16	274
<i>Oryza type</i>	イネ属型	21	26	14	4	19	13	252	236	88	55	55	159	123	91	49	42	4	16	7	12	6	14	13	53
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1	1	1	4																		74	
<i>Monochoria</i>	ミスアオイ属																								1
Liliaceae	ユリ科																								1
<i>Allium</i>	ネギ属	2	1	3	3	3	3																	1	
<i>Polygonum</i>	タデ属																								1
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属 ナエタデ節	1																							1
<i>Rumex</i>	キンギン属																								1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	6	25	8	2	10	1	4	14	9	25	46	7	15	6	21	2	15	3	7	4	5	15	7	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アザミ科-ヒユ科																								13

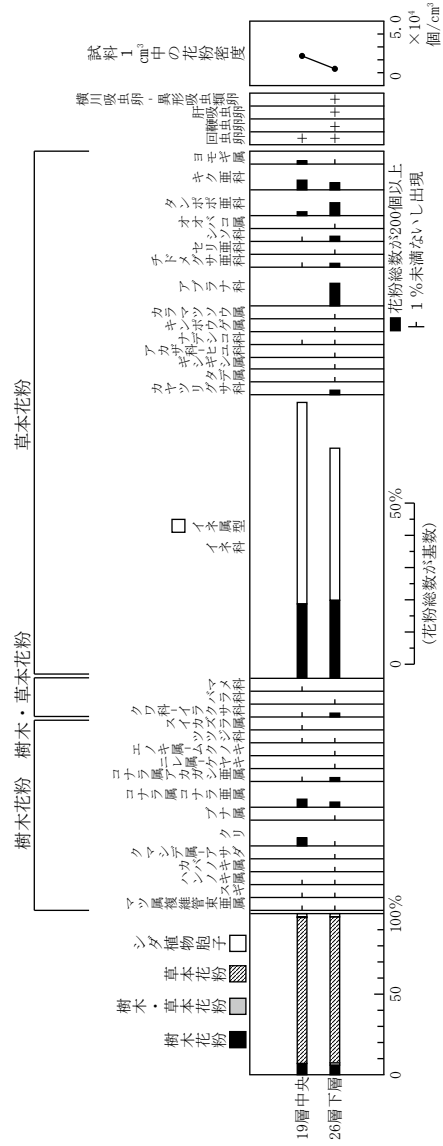
第3節 土壤分析

学名	和名	151-28										151-102				151-26				151-204				151-108				151-259	
		1層	2層	3・4層	5層	5層	19層	26層	3層	4層	4層	8層	8層	9層	9層	18層	20層	23層	27層	31層	33層	34・35層	13層	14層					
Caryophyllaceae	ナデシコ科																												
Ranuncul	キンボウゲ属																												
Thalictrum	カラマツソウ属																												
Cruciferae	アブラナ科																												
Impatiens	ツリフネソウ属																												
Halonigis-Myriophyllum	アリノトウグサ属 - フサモ属																												
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科																												
Apioidae	セリ亜科																												
Caryosegia japonica	ヒルガオ																												
Labiateae	シソ科																												
Solanaceae	ナス科																												
Plantago	オオハコ属																												
Valerianaceae	オミナエン科																												
Lactucoideae	タンポポ亜科																												
Asteroidae	キク亜科																												
Xanthium	オナモミ属																												
Artemisia	ヨモギ属																												
Carthamus tinctorius	ヘニナ																												
Fern spore	シダ植物胞子																												
Monolate type spore	単条溝胞子																												
Trilate type spore	三条溝胞子																												
Arboreal pollen	樹木花粉																												
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																												
Nonarboreal pollen	草本花粉																												
Total pollen	花粉総数																												
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度																												
Unknown pollen	未同定花粉																												
Fern spore	シダ植物胞子																												
Helminth eggs	寄生虫卵																												
Ascaris (lumbricoides)	回虫卵																												
Trichouris (trichuara)	鞭虫卵																												
Clonorchis sinensis	肝吸虫卵																												
Meqanimus yokogawai-Heterophyes	横川吸虫卵 - 異形吸虫卵																												
Diphyllobothrium nihonkaiense	日本海裂頭条虫卵																												
Diphyllobothrium mansoni	マンソン裂頭条虫卵																												
Unknown eggs	不明虫卵																												
Total	計																												
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度																												
Stone cell	石細胞																												
Digestion rimeins	明らかでない消化残渣																												
Charcoal - woods fragments	微細炭化物・微細木片																												
微細植物遺体 (Charcoal - woods fragments)	(×10 ⁵)																												
未分解遺体片																													
分解遺体片																													
炭化遺体片 (微炭炭)																													

*: 集塊



第93図 151-28における花粉ダイアグラム



第94図 151-102における花粉ダイアグラム

ナ、タナゴに侵入してメタセルカリアとなり、魚肉とともにヒトに摂取され感染する。肝吸虫はアジア地域に広く分布し、中国、日本、ベトナム、韓国に多い。日本では岡山県南部、琵琶湖沿岸、八郎潟、利根川流域などが流行地として知られている。

横川吸虫-異形吸虫類 *Metagonimus yokogawai* - *Heterophyes* 卵はおよそ $27 \times 17 \mu\text{m}$ で、短楕円形または卵形。一端に小蓋を有するが、卵殻との境がほとんど突出せずスムーズである。卵殻表面は平滑で紋理はみられない。日本各地でみられる横川吸虫や、瀬戸内海沿岸に多く、その他海に近い地域にかなり広く見られる有害異形吸虫は、中間宿主が異なるだけで発育史をはじめ形態なども良く似ている。横川吸虫はアユ、有害異形吸虫はボラ等の生食により魚肉とともにヒトに摂取され感染する。遺跡においては、小蓋がとれたり、堆積環境や薬品処理などにより横川吸虫卵と有害異形吸虫卵の区別はつきにくく、異形吸虫類とする。

日本海裂頭条虫 *Diphyllobothrium nihonkaiense* 卵の大きさは $66 \sim 75 \times 45 \sim 53 \mu\text{m}$ で楕円形。卵殻はやや厚く小蓋がある。ケンミジンコ類等の第1中間宿主を経て、第2中間宿主のマスやサケ等の生食によって感染する。特に日本においては淡水河川から出て海洋を廻遊し最後に生まれた河川に戻る *Oncorhynchus* 属（サクラマス）のような魚類が第2中間宿主となり、プレロセルコイドが筋肉内だけに分布する特徴を持つ。日本海裂頭条虫は北海道や本州の北半分に多いが、その他の地方にも散在する。

マンソン裂頭条虫 *Diphyllobothrium mansonii* 終宿主はイヌ科、ネコ科の動物で、ヒトは第2中間宿主や待機宿主となる。ヒトへの感染は第1中間宿主のケンミジンコのいる生水や第2中間宿主（主にニワトリ、カモ、ブタ、イノシシ、カエル、ヘビ等）、終宿主の生食などによる。卵の大きさは $70 \times 35 \mu\text{m}$ で、両端がややとがり左右非対称で一端に小蓋がある。

不明虫卵 Unknown eggs 卵の大きさはマンソン裂頭条虫卵よりやや大きく卵殻は薄く、淡黄色。一端に小蓋がある。卵の最大幅は、小蓋側に寄る。

(2) 花粉群集（寄生虫卵を含む）の特徴

遺構ごとに花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

151-28 D8 グリッド（1層、2層東半、2層西半、3・4層、5層以下東半・西半）（第93図）

概ね樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、5層から2層はクリが高率に出現し、次いでマツ属複維管束亜属が多く、スギ、ハンノキ属が伴われる。他にコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が低率に出現する。1層になるとマツ属複維管束亜属の出現率が高くなりクリ、スギ、ハンノキ属の他にエノキ属-ムクノキが伴われる。草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）を主にアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が出現する。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科も比較的多い。回虫卵、鞭虫卵、日本海裂頭条虫卵、マンソン裂頭条虫卵がわずかに検出される。

151-102 E8 グリッド（19層中央、26層下層）（第94図）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、イネ属型、イネ科の草本が卓越する。他にキク亜科、タンポポ亜科、アブラナ科等が低率に伴われる。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ等が出現する。下部の26層下層では、回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵-異形吸虫類卵が 1 cm^2 中に 6.0×10^2 個出現し、19層中央では鞭虫卵がわずかに検出される。

151-26 C8 グリッド（4層西端種集中、4層東側、3層と同黒色土）（第95図）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高く、アブラナ科が高率に出現し、イネ属型、イネ科、アカザ科-ヒユ科がこれに次ぐ。他にソバ属、ベニバナが出現する。樹木・草本花粉では、クワ科-イ

ラクサ科、樹木花粉のクリが低率に出現する。また寄生虫卵の密度が極めて高く、1 cm³中に 1.7×10^4 個から 5.0×10^4 個検出される。その内訳は肝吸虫卵が多く、回虫卵、鞭虫卵、3層では特に日本海裂頭条虫卵が多く、横川吸虫卵-異形吸虫類卵と続く。マンソン裂頭条虫卵、不明虫卵もみられ、消化残渣も認められる。

151-204 J6 グリッド (8層上、8層袋、9層上層・下層) (第96図)

9層では下層で樹木花粉が33%、草本花粉が47%、樹木・草本花粉が15%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)の出現率が高く、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が伴われる。樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科の出現率は比較的高い。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギを主にコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、クリ、シイ属、コナラ属アカガシ亜属が出現する。9層上層になると樹木花粉が47%を占めるようになり、マツ属複維管束亜属、スギが増加する。8層になると草本花粉が50%以上を占めるようになりイネ科(イネ属型を含む)が増加する。いずれの試料からも寄生虫卵が検出され、9層では回虫卵、鞭虫卵や石細胞が検出される。8層では回虫卵、肝吸虫卵、日本海裂頭条虫卵が検出され、9層よりやや密度が高くなる。

151-108 J5 グリッド (18層、20層、23層、27層、31層、33層、34層・35層) (第97図)

各層準とも花粉密度が低く、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。下部の34・35層では、樹木花粉が36%、草本花粉が45%を占める。草本花粉では、イネ科(イネ属型を含む)、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属を主にクリ、コナラ属コナラ亜属が低率に出現し、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が出現する。23層から33層は密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、34・35層に出現した分類群が継続してみられる。20層では草本花粉が56%を占めるようになりイネ科(イネ属型を含む)が増加する。18層では密度が極めて低くなり、花粉はほとんど検出されない。下位の34・35層では回虫卵がわずかに検出されるが、他では寄生虫卵は検出されなかった。

151-259 I6 グリッド (13層、14層) (第98図)

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、70%以上を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が高率に出現し、ヨモギ属、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科が伴う。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属を主にシイ属、ハンノキ属、スギが低率に出現し、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が出現する。寄生虫卵は検出されなかった。

4) 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの遺構ごとに花粉群集の特徴から植生および環境の復原を行う。

151-28 D8 グリッド (1層、2層東半、2層西半、3・4層、5層以下東半・西半) (第93図)

樹木花粉の占める割合が高く、周囲に樹木が多かったと推定される。特にクリは層位により出現率が大きく変化し、虫媒花植物であるため近接して生育していたとみなされる。クリは比較的乾燥地を好み、早期に二次林を形成する樹木である。マツ属複維管束亜属は地域的に分布し、比較的高率であることから庭木として植栽されていた可能性も考えられる。また、比較的多いハンノキ属は、湿地林を形成するハンノキが含まれるが、ここでは河辺林や端境林、畦などに植えられ周辺に生育していたと考えられる。イネ科にはイネ属型が伴い、栽培植物を多く含むアブラナ科は耕地雑草のアカザ科-ヒユ科を伴って出現することから、周辺に水田や畑の分布が示唆される。また、クワ科-イラクサ科は、栽培植物のクワ類が含まれるため栽培が行われた可能性もあるが、人里や荒地に生育するカラムシや

カナムグラ等の草本が遺構の周囲に生育していたと考えられる。

わずかに寄生虫卵が検出され、その密度は生活汚染程度で、汚染源となる生活域が近隣にあったと推定される。

151-102 E8 グリッド (19層中央、26層下層) (第94図)

ほとんどが草本花粉で占められ、イネ属型の出現率が高く、分析途中にもイネ類が多数確認されることから、この土坑がイネの貯蔵に使われたか、廃棄場されたと思われる。イネ花粉は籾内に残存するため出現率が高いものと考えられる。他に出現するアブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科等は土坑の周囲に生育していたとみなされる。下部の26層下層では肝吸虫卵を主に1cm²中に6.0×10²個の寄生虫卵が検出され、汚水が流れ込むかまたは糞便も投棄される遺構であったと推定される。

151-26 C8 グリッド (4層西端種集中、4層東側、3層、3層黒色土) (第95図)

出現する花粉はほとんど草本花粉で占められる。出現率が高いアブラナ科は、多くの栽培植物が含まれイネ属型、ソバ属も食用になる栽培植物である。寄生虫卵が極めて多く消化残渣もみられるため、糞便が投棄されたか便所遺構の可能性もある。アカザ科-ヒユ科もやや多く、ベニバナも検出された。いずれも食用や薬用になる植物かそれを含む分類群である。アカザ科の花穂は近世まで寄生虫の薬として煎じて用いられており、ベニバナは現在まで紅花として薬用として使われていて、平安時代以降の各時期の糞便堆積、便所遺構で検出されている。いずれも食用にならず、薬用と考えられる。

回虫卵、鞭虫卵は中間宿主を必要とせず、汚染された野菜や野草、生水を摂取したり、調理器具から感染する。日本海裂頭条虫はマスやサケの生食により感染し、肝吸虫、横川吸虫を含む異形吸虫類は、コイ科やアユ等の淡水魚の生食や不完全調理の摂食で感染する。微量に出現するマンソン裂頭条虫は、鳥類や小型の哺乳類等の摂食で感染する。当時はマスやサケ、コイ科やアユ等の淡水魚と、鳥類や小動物、花芽を含むアブラナ等の野菜、コメ、ソバを食していたことが示唆される。アカザ科-ヒユ科、ベニバナも薬用としての利用が推定される。

151-204 J6 グリッド (8層上、8層袋、9層上層・下層) (第96図)

8層と9層で花粉の出現傾向に大きな差はなく、同一の群集と考えられる。周辺にはスギ林、マツ属複維管束亜属の針葉樹、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、クリ、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキなどの落葉広葉樹と、シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹が生育する。イネ属型がカヤツリグサ科、ミズアオイ属等の水田雑草を伴い出現することから水田の分布が示唆され、8層の時期になるとイネ科に伴われるイネ属型の割合が高く、水田が拡大したと考えられる。栽培植物を多く含むアブラナ科やソバ属が畑雑草のアカザ科-ヒユ科等を伴い出現し畑の分布も示唆される。クワ科-イラクサ科から、畑の周囲に生育するカナムグラやカラムシ等の草本やクワの栽培も考えられる。

9層では、回虫卵、鞭虫卵がわずかに検出され、8層では、日本海裂頭条虫卵、肝吸虫卵、回虫卵がやや多く検出される。生活汚染の影響を受けたか、人糞施肥の影響や人糞の投棄が考えられる。

151-108 J5 グリッド (18層、20層、23層、27層、31層、33層、34層・35層) (第97図)

下部の34・35層の時期には、マツ属複維管束亜属の出現率が高く、近隣にニヨウマツ(マツ属複維管束亜属)が分布し、周辺にはクリ、コナラ属コナラ亜属の落葉樹が生育する。堆積地周囲にはイネ属型がサジオモダカ属、カヤツリグサ科等の水田雑草を伴って出現することから水田の分布が示唆される。33層から23層では花粉密度が極めて低く、花粉等の有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く花粉が集積しなかったと考えられる。しかし、わず

かに検出される花粉は34・35層の出現傾向を踏襲する。

20層の時期には、下部の34・35層の出現傾向とほとんど変わらない。近隣にマツ属複維管束亜属が分布し、周辺にはハンノキ属、コナラ属コナラ亜属の落葉樹が生育していたと考えられ、水田の分布も示唆される。18層の時期には密度が極めて低くなり、花粉等の有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったか、堆積速度が速く花粉が集積しなかったと考えられる。34・35層で回虫卵がわずかに検出された。生活汚染程度で近接して生活域が分布していたと思われる。また、他の土坑と比較して炭化遺体片（微粒炭）が多く含まれる。

151-259 I6グリッド（13層、14層）（第98図）

13層、14層ともに大きな変化は認められない。イネ属型が水田雑草を含むイネ科、カヤツリグサ科等とともに出現し水田の分布が示唆される。また土坑の周囲は、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、クワ科-イラクサ科の草本等の比較的乾燥した環境を好む草本が生育する陽当たりの良い乾燥した環境であったとみなされる。近隣にはマツ属複維管束亜属が分布し、やや遠方にはスギ林が分布する。周辺にハンノキ属、シイ属が孤立木として生育する。

4 大型植物遺体同定

1) 原理

大型植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。なお骨は部位や破片によるが、動物種を特定でき、その利用を調べることができる。

2) 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- (1) 各試料 2000cm³から 500cm³に水を加え放置し、泥化
- (2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.5mmの篩で水洗選別
- (3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3) 結果

分析の結果、種実類、葉に加え、動物骨が検出されたので合わせて同定を行った。

(1) 種実

樹木 18、草本 32 の計 50 分類群が同定される。学名、和名および粒数を表（第 55 表）およびダイアグラム（第 99 図～第 102 図）に示し、主要な分類群を写真に示す（図版第 68・69）。以下に分類群を列挙するとともに形態的特徴を記載する。

樹木

カヤ *Torreya nucifera* S.et Z. 種子 イチイ科 茶褐色で長卵形を呈す。表面には縦方向の隆起が走る。断面は円形である（図版第 68-1）。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don 種子 スギ科 茶褐色で長楕円形を呈し、狭い側翼がある（図版第 68-2）。

クリ *Castanea crenata* S.et Z 果皮 ブナ科 堅果は三角状扁円形を呈す。一側面は円みがあり

反対面は平らな形が多い。両面とも円みがある（図版第 68-3）。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科 茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い（図版第 68-4）。

ウメ *Prunus mume* S.et Z 核 バラ科 茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面に小孔が散在する（図版第 68-5）。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科 黄褐色から黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある（図版第 68-6）。

スモモ *Prunus salicina* Lindley 核 バラ科 淡褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には不明瞭で微細な凸凹がある。断面は扁平である（図版第 68-7）。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科 淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面に大きな網目模様がある（図版第 68-8）。

サンショウ *Zanthoxylum piperitum* DC. 種子 ミカン科 黒色で楕円形を呈し、側面に短いへそがある。表面には網目模様がある（図版第 68-9）。

サンショウ属 *Zanthoxylum* 種子 ミカン科 黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落した破片のため、属レベルの同定までである（図版第 68-10）。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科 黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する（図版第 68-11）。

モチノキ *Ilex integra* Thunb. 種子 モチノキ科 種子は浅赤黄色で、楕円形を呈し、V字状の溝があり、縁は鋭く光沢はない。鋭い隆条や凹凸が多く粗面である（図版第 68-12）。

カエデ属 *Acer* 果実 カエデ科 茶褐色で楕円形を呈す。翼は残存していない。果皮には弱い縦線が走る。断面は扁平である（図版第 68-13）。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. 種子 ツバキ科 種子は黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある（図版第 68-14）。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. 種子 ツバキ科 種子は心臓形を呈する。背面は長楕円状、狭三角形など種々な形があるが、いずれの形もへその方に薄い。へそを中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる（図版第 68-15）。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* 種子 クマツヅラ科 淡褐白色で楕円形や狭楕円形を呈し、側面は三日月形で背面は丸みがあり、腹面方向に湾曲する。腹面の縁は薄く一段高く隆起し、その中央にへそがある。背面は平滑で、腹面は粗面（図版第 68-16）。

クサギ *Clerodendrum trichotomum* Thunb. 核 クマツヅラ科 暗褐色で、倒卵形を呈す。断面は三日月形。腹部の一端には発芽口があり、背面の表面には大きな網目状の模様がある（図版第 68-17）。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 スイカズラ科 黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある（図版第 68-18）。

草本

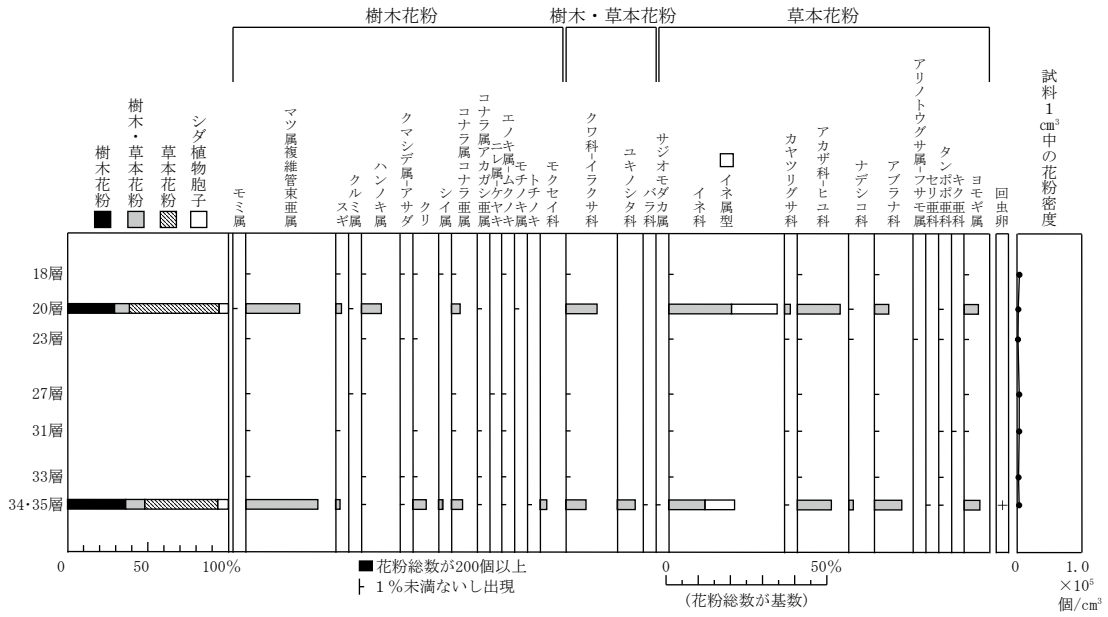
オモダカ属 *Sagittaria* 果実 オモダカ科 淡褐色～黄褐色で歪んだ倒卵形を呈す。周囲は翼状部が傷んでおり、その概形が判別できないため、属レベルの同定に留める（図版第 68-19）。

イネ *Oryza sativa* L. 穎・果実 イネ科 穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった（図版第 68-20）。

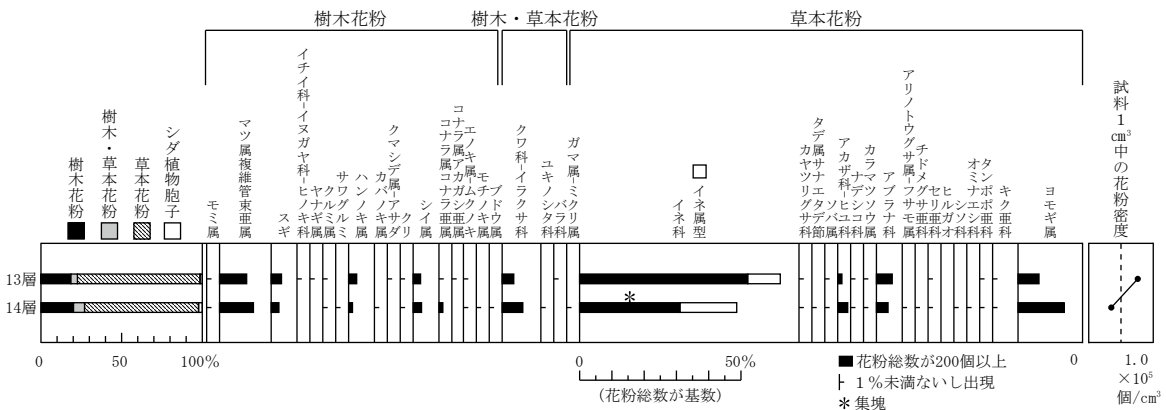
第3節 土壤分析

第55表 大型植物遺体(種実) 同定結果

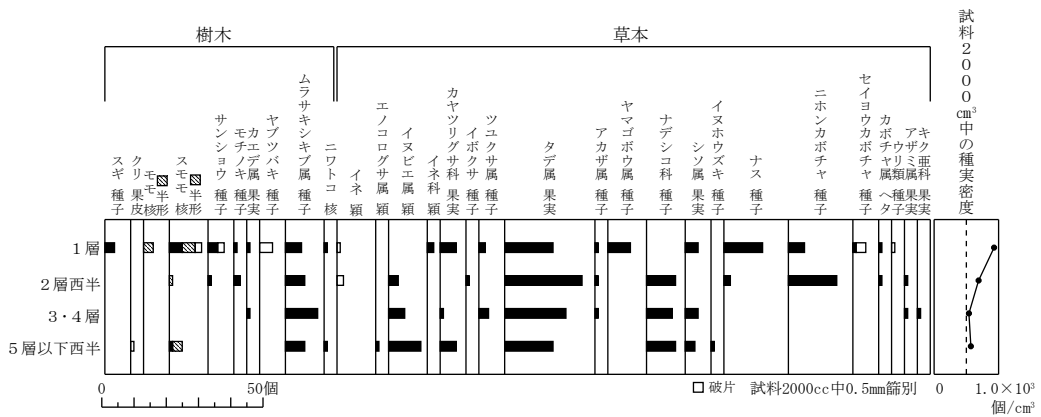
分類群	学名	和名	部位	1	2	3	4	9	7	8	10	11	12	20	21					
				1層	2層 西半	3・4層	5層 以下 西半	3層	4層 西端 集中	4層 東側	8層	9層 上層	9層 下層	13層	14層					
Arbor	樹木																			
	<i>Torreya nucifera</i> S. et Z.	カヤ	種子(破片)																	
	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ	種子	3												2	1			
	<i>Castanea crenata</i> S. et Z.	クリ	果皮(破片)				1													
	<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマグワ	種子					23	138	39							2			
	<i>Prunus mume</i> S. et Z.	ウメ	核						1	1										
	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核(半形)	3																
	<i>Prunus salicina</i> Lindley	スモモ	核	4																
			核(半形)	4	1															
			核(破片)	2																
	<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核					5	56	66	1									
	<i>Zanthoxylum piperitum</i> DC.	サンショウ	種子	3	1					3	22	14								
			種子(破片)	2																
	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	種子(破片)											1						
	<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.	アカメガシワ	種子												1					
			種子(破片)												3					
	<i>Ilex integra</i> Thunb.	モチノキ	種子	1	2															
	<i>Acer</i>	カエデ属	果実	1					1											
	<i>Camellia japonica</i> L.	ヤブツバキ	種子(破片)	4																
	<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ヒサカキ	種子					1				2	1	1	1					
	<i>Callicarpa</i>	ムラサキシキブ属	種子	5	6	10	6													
<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.	クサギ	核																		
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex graedn	ニワトコ	核	1					1						1	1					
Herb	草本																			
	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	果実					1												
	<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎												3					
	<i>Oryza sativa</i> L.		穎(破片)	1	2					1	2	16			5	14	23			
	<i>Oryza sativa</i> L.		炭化果実(破片)						1											
	<i>Setaria Beauv.</i>	エノコログサ属	穎					1							1					
	<i>Setaria italica</i> Beauv.	アワ	炭化果実						1											
	<i>Echinochloa Beauv.</i>	イヌビエ属	穎			3	5	10				3								
	Gramineae	イネ科	穎	2												39	1			
	<i>Scirpus</i>	ホタルイ属	果実						1											
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	5			1	5			2					1	1			
	<i>Carex</i>	スゲ属	果実												1					
	<i>Aneilema keisak</i> Hassk.	イボクサ	種子			1														
	<i>Commelina</i>	ツユクサ属	種子	2					3											
	<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	カナムグラ	種子(破片)												1					
	<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	ソバ	果実(破片)												2	12				
	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	15	24	19	15													
	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1	1	1				10	31	19			1	1	1			
	<i>Mollugo pentaphylla</i> L.	ザクロソウ	種子						1							1				
	<i>Phytolacca</i>	ヤマゴボウ属	種子	7																
	Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子			9	8	9	1	2	1	76	5	28	3	6				
	<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子						2				1	1	5					
	<i>Haloragis micrantha</i> R. Br.	アリノトウグサ	果実												1					
	Cruciferae	アブラナ科	種子											1						
	<i>Perilla</i>	シソ属	果実	4			4	3						1	2					
	<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子						1				1							
	<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	12	2					17	12	12	1							
	<i>Sesamum indicum</i> L.	ゴマ	種子(破片)						11							14				
	<i>Cucurbita moschata</i> Duch.	ニホンカボチャ	種子	5	15								1							
	<i>Cucurbita maxima</i>	セイヨウカボチャ	種子	1																
			種子(破片)	3																
	<i>Cucurbita moschata</i> Duch.	カボチャ属	ヘタ	1	1															
	<i>Cucumis melo</i> L.	ウリ類	種子						340	1078	210									
			種子(破片)	1					214	730	95									
		種子(細片)						(+++)	(+++)	(+++)										
<i>Melothria japonica</i> Maxim.	スズメウリ	種子											1							
<i>Cirsium</i>	アザミ属	果実			1	1														
Asteroidaeae	キク亜科	果実					1													
Total	合計		93	69	54	56	627	2079	460	103	11	102	36	58						
Bud	芽		15	1	5	2					2	1								
bone	骨 or 菌						(+)	(+)	(+)				(+)							
	貝類	シジミ殻皮					14													
	虫瘤		39	12	2	1					3									
	昆虫	(細片)			7	6				7	4	76	9	7	31	37				
	材	(細片)											(+++)							
	葉		(+)	(++)	(+++)	(+++)			(+)	(+)										
	水洗選別量	(cc)	2000	2000	2000	2000	500	500	500	500	500	500	500	1000	1000					



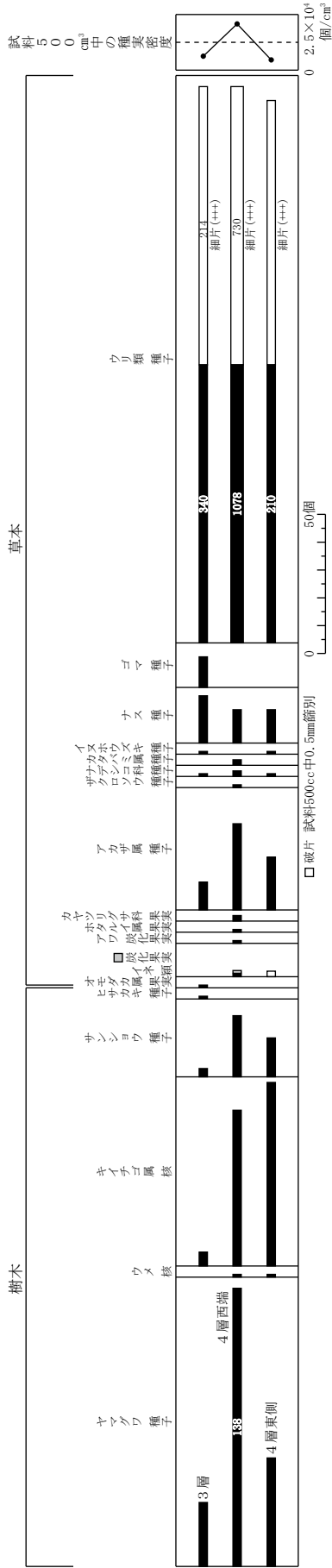
第97図 151-108における花粉ダイアグラム



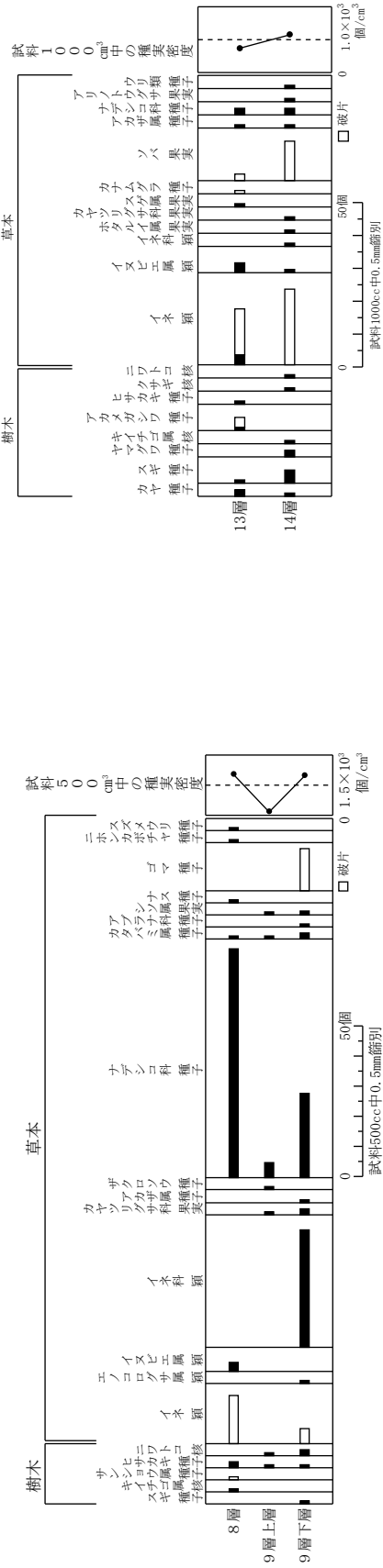
第98図 151-259における花粉ダイアグラム



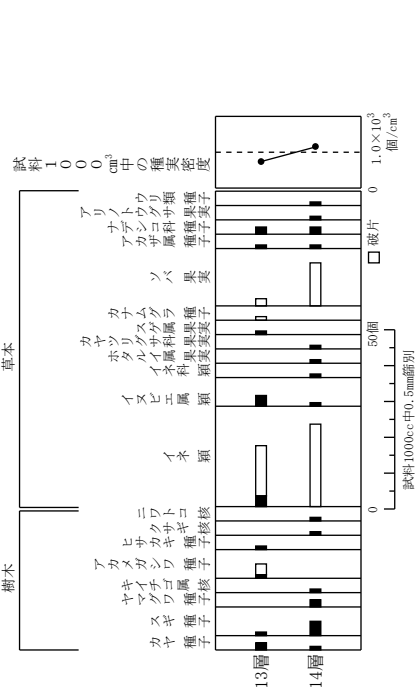
第99図 151-28における大型植物遺体（種実）ダイアグラム



第100図 151-26における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム



第101図 151-204における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム



第102図 151-259における大型植物遺体 (種実) ダイアグラム

エノコログサ属 *Setaria* 穎 イネ科 穎は茶褐色で、楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある（図版第 68-22）。

アワ *Setaria italica* Beauv. 果実 イネ科 炭化しており黒色で楕円形を呈す。胚の部分が窪む（図版第 68-23）。

イヌビエ属 *Echinochloa* 穎 イネ科 茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な縦方向の模様がある（図版第 68-24）。

イネ科 Gramineae 穎 穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである（図版第 68-25）。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科 黒褐色でやや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両面凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4～8本の針状の付属物を持つ（図版第 68-26）。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実 黄褐色で倒卵形を呈し、断面は扁平である。茶褐色で倒卵形を呈し、断面は三角形である（図版第 69-27）。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科 茶褐色で倒卵形で扁平である。果皮は柔らかい（図版第 69-28）。

イボクサ *Aneilema Keisak* Hassk. 種子 ツユクサ科 黒褐色～黒色で楕円形を呈す。腹部には「一」文字状のへそがあり、側面に窪んだ発芽孔がある（図版第 69-29）。

ツユクサ属 *Commelina* 種子 ツユクサ科 茶褐色で楕円形を呈し、一端は切形である。表面には「一」字状のへそがあり、切形の端まで達する。一側面に窪んだ発芽孔がある（図版第 69-30）。

カナムグラ *Humulus japonicus* Sieb. et Zucc. 種子 クワ科 黒色で円形を呈し、断面形は両凸レンズ状である。側面には心形を呈するへそがある（図版第 69-31）。

ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科 黒褐色で卵形を呈す。表面には縞状の模様がある。断面は三角形である（図版第 69-32）。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科 黒褐色で卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。茶褐色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で表面は粗い（図版第 69-33）。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科 黒色で光沢があり、円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る（図版第 69-34）。

ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科 黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある（図版第 69-35）。

ヤマゴボウ属 *Phytolacca* 種子 ヤマゴボウ科 黒色で扁平楕円形を呈す。一端に窪みがあり、ここから褐色の突起が出る。表面には光沢があり滑らかである（図版第 69-36）。

ナデシコ科 Caryophyllaceae 種子 黒色で円形を呈し側面にへそがある。表面には突起がある（図版第 69-37）。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科 茶褐色で楕円形を呈し上端が尖る。両面に横方向に6～8本の隆起が走る（図版第 69-38）。

アリノトウグサ *Haloragis micrantha* R. Br. 果実 アリノトウグサ科 淡褐色で卵形を呈す。表面には6～7本の縦方向の稜がはしる（図版第 69-39）。

アブラナ科 Cruciferae 種子 茶褐色で楕円形を呈し下端にへそがある。表面には長方形の網目があ

る（図版第 69-40）。

シソ属 *Perilla* 果実 シソ科 茶褐色で、球形を呈し下端にへそがある。表面に大きい網目模様がある（図版第 69-41）。

イヌホウズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科 黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端に窪んだへそがある。表面には網目模様がある（図版第 69-42）。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科 黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端に窪んだへそがある。表面には網目模様がある（図版第 69-43）。

ゴマ *Sesamum indicum* L. 種子 ゴマ科 黒褐色で楕円形を呈し、上端がやや尖る。表面には微細な網目模様がある（図版第 69-44）。

ニホンカボチャ *Cucurbita moschata* Duch. 種子 ウリ科 茶褐色で扁平楕円形を呈し、周縁部はやや肥厚する。肥厚した表面は繊維状である（図版第 69-45）。

セイヨウカボチャ *Cucurbita maxima* 種子 ウリ科 黄褐色で扁平楕円形を呈し、全体的にやや肥厚する（図版第 69-46）。

カボチャ属 *Cucurbita* ヘタ ウリ科 ニホンカボチャ、あるいはセイヨウカボチャのヘタである（図版第 69-47）。

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科 淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、上端は「ハ」の字状に窪む（図版第 69-48・49）。

スズメウリ *Melothria japonica* Maxim. 種子 ウリ科 黄褐色で卵形を呈す。表面はやや粗い（図版第 69-50）。

アザミ属 *Cirsium* 果実 キク科 茶褐色で倒三角状鈍菱形。やや扁平を呈し、片側は直線上で相対する一方の上部付近はやや曲線状を呈す。突起状の花柱基部が残る（図版第 69-51）。

キク亜科 *Asteroideae* 果実 キク科 茶褐色で楕円形を呈し、両端は切形となる。表面には縦方向に 8 本程の筋が走る（図版第 69-52）。

（2）葉遺体

同定された学名、和名、部位および点数を表に示し（第 56 表）、主要な分類群を写真（図版第 70）に示す。

第 56 表 151-28 における大型植物遺体（葉）同定結果

遺構 / 層位	結果 (学名 / 和名)		部位	個数	備考	
151-28	2 層	<i>Juniperus</i>	ビャクシン属	枝葉	一括 (+)	
		unknown fragments	不明 破片	葉片		
	3・4 層	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	葉	一括 (+)	
		unknown fragments	不明破片	葉 (細片)		
	5 層以下	<i>Quercus acuta-sessilifolia</i>	アカガシ-ツクバネガシ	葉 (破片)	2	
		<i>Cinnamomum</i>	クスノキ属	葉 (破片)	1	
		<i>Lindera</i> A	クロモジ属 A	葉 (破片)	7	
		<i>Lindera</i> B	クロモジ属 B	葉 (破片)	12	
		<i>Nandina domestica</i>	ナンテン	葉	1	
		<i>Fern</i>	シダ植物	葉 (破片)	2	
	unknown A	不明 A	葉 (破片)	10		
	unknown fragments	不明破片	葉 (細片)	(+)		

(3) 動物遺存体

同定された学名、和名、および部位を下記表に示し、和名および粒数を表に示す(第57表)。主要な分類群を写真に示す(図版第71)。他に検出された部位または細片のため同定はできない不明な椎骨尾椎、椎骨腹椎、骨片ではボラ科?、タイ科?、カマス科?、トビウオ科?、不明椎骨細片、不明骨細片が検出された。

表 種名

硬骨魚綱 Osteichthyes

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

サケ属の一種 *Oncorhynchus* sp. 遊離歯

アユ科 Plecoglossidae

アユ *Plecoglossus altivelis* 椎骨腹椎、尾椎

スズキ目 Percidae

サバ科 Scombridae

サバ属の一種 *Scomber* sp. 椎骨腹椎

第57表 大型植物遺体(動物遺存体)同定結果

遺構名	グリッド	層位	種類	部位	部分	個数
151-26	C8	3層	アユ	椎骨	腹椎	1
			不明	椎骨		(+)
			不明	不明		(+)
151-26	C8	4層西端種集中	アユ	椎骨	腹椎	13
					尾椎	31
			サバ属	椎骨	腹椎	1
			サケ属	遊離歯		1
			ボラ科?	椎骨	尾椎	1
			タイ科?	椎骨	尾椎	1
			カマス科?	椎骨	腹椎?	1
			不明	椎骨		(+++)
不明	不明		(++)			
151-26	C8	4層東側	アユ	椎骨	腹椎	5
					尾椎	2
			トビウオ科?	椎骨	尾椎	1
			不明	椎骨		(+)
			不明	不明		(++)
151-204	J6	9層上層	不明	歯		1

(4) 貝類

同定された学名、和名および部位を下記表に示す。

表 種名

斧足綱 Bivalvia

マルスダレガイ目 Veneroida

シジミ科 Corbiculidae 殻皮

4) 遺体群の特徴

(1) 151-28(廃棄土坑)(第99図)

1層 樹木種実ではスギ3点、モモ半形3点、スモモ4点、半形4点、破片2点、サンショウ3点、破片2点、モチノキ1点、カエデ属1点、ヤブツバキ破片4点、ムラサキシキブ属5点、ニワトコ1点、

草本種実ではイネ穎破片1点、イネ科2点、カヤツリグサ科5点、ツユクサ属2点、タデ属15点、アカザ属1点、ヤマゴボウ属7点、シソ属4点、ナス12点、ニホンカボチャ5点、セイヨウカボチャ1点、破片3点、カボチャ属ヘタ1点、ウリ類破片1点が検出され、他には芽15点、虫瘤（虫えい）39点、葉（+）が検出された。

2層 樹木種実のスモモ半形1点、サンショウ1点、モチノキ2点、ムラサキシキブ属6点、草本種実のイネ穎破片2点、イヌビエ属3点、イボクサ1点、タデ属24点、アカザ属1点、ナデシコ科9点、ナス2点、ニホンカボチャ15点、カボチャ属ヘタ1点、アザミ属1点が検出され、他には芽1点、貝類のシジミ科殻皮14点、虫瘤（虫えい）12点、昆虫細片7点、ビャクシン属の枝葉1点が検出された。

3・4層 樹木種実のカエデ属1点、ムラサキシキブ属10点、草本種実のイヌビエ属5点、カヤツリグサ科1点、ツユクサ属3点、タデ属19点、アカザ属1点、ナデシコ科8点、シソ属4点、アザミ属1点、キク亜科1点が検出され、他には芽5点、虫瘤（虫えい）2点、昆虫細片6点、マツ属複雑管束亜属の葉一括がみられた。

5層以下西半 樹木種実のクリ破片1点、スモモ1点、半形3点、ムラサキシキブ属6点、ニワトコ1点、草本種実のエノコログサ属1点、イヌビエ属10点、カヤツリグサ科5点、タデ属15点、ナデシコ科9点、シソ属3点、イヌホウズキ1点が検出され、他には芽2点、虫瘤（虫えい）1点、アカガシ-ツクバネガシ2点、クスノキ属1点、クロモジ属A7点、クロモジ属B12点、ナンテン1点、シダ植物（二回羽状複葉）の葉2点が検出された。

（2）151-26（土坑）（第100図）

3層 樹木種実のヤマグワ23点、キイチゴ属5点、サンショウ3点、ヒサカキ1点、草本種実のオモダカ属1点、アカザ属10点、ナデシコ科1点、イヌホウズキ1点、ナス17点、ゴマ破片11点、ウリ類340点、破片214点、細片（+++）、その他にアユ椎骨腹椎1点、不明椎骨細片（+）、不明骨細片（+）が検出された。

4層西端 樹木種実のヤマグワ138点、ウメ1点、キイチゴ属56点、サンショウ22点、草本種実のイネ穎破片1点、炭化果実破片1点、アワ炭化果実1点、ホタルイ属1点、カヤツリグサ科2点、アカザ属31点、ザクロソウ1点、ナデシコ科2点、カタバミ属2点、ナス12点、ウリ類1078点、破片730点、細片（+++）、その他にアユ椎骨腹椎13点、尾椎31点、サバ属椎骨腹椎1点、サケ属遊離歯1点、また同定には至らないがボラ科？椎骨尾椎1点、タイ科？椎骨尾椎1点、カマス科？椎骨腹椎？1点、不明椎骨細片（+++）、虫瘤（虫えい）3点、昆虫細片7点、葉（+）が検出された。

4層東側 樹木種実のヤマグワ39点、ウメ1点、キイチゴ属66点、サンショウ14点、草本種実のイネ穎破片2点、アカザ属19点、ナデシコ科1点、イヌホウズキ1点、ナス12点、ウリ類210点、破片95点、細片（+++）、他には芽2点、アユ椎骨腹椎5点、尾椎2点、また同定には至らないがトビウオ科？椎骨尾椎1点、不明椎骨細片（++）、不明骨細片（+）、昆虫細片4点、葉（+）が検出された。

（3）151-204（廃棄土坑）（第101図）

8層 樹木種実のキイチゴ属1点、サンショウ属1点、ヒサカキ2点、草本種実のイネ穎破片16点、イヌビエ属3点、ナデシコ科76点、カタバミ属1点、ナス1点、ニホンカボチャ1点、スズメウリ1点、その他に芽1点、昆虫細片76点、木材細片（+++）が検出された。

9層上層 樹木種実のヒサカキ1点、ニワトコ1点、草本種実のカヤツリグサ科1点、ザクロソウ1点、ナデシコ科5点、カタバミ属1点、シソ属1点、他には不明歯1点、昆虫細片9点が検出された。

9層下層 樹木種実のスギ1点、ヒサカキ1点、ニワトコ2点、草本種実のイネ類破片5点、エノコログサ属1点、イネ科39点、カヤツリグサ科2点、アカザ属1点、ナデシコ科28点、カタバミ属5点、アブラナ科1点、シソ属2点、ゴマ破片14点が検出され、他には昆虫細片7点が検出された。

(4) 151-259 (廃棄土坑) (第102図)

13層 樹木種実のカヤ2点、スギ1点、アカメガシワ1点、破片3点、ヒサカキ1点、草本種実のイネ類3点、破片14点、イヌビエ属3点、スゲ属1点、カナムグラ破片1点、ソバ破片2点、アカザ属1点、ナデシコ科3点が検出され、他に昆虫細片31点、木材細片(++)が検出された。

14層 樹木種実のカヤ1点、スギ4点、ヤマグワ2点、キイチゴ属1点、クサギ1点、ニワトコ1点、草本種実のイネ類破片23点、イヌビエ属1点、イネ科1点、ホタルイ属1点、カヤツリグサ科1点、ソバ破片12点、アカザ属1点、ナデシコ科6点、アリノトウグサ1点、ウリ類1点、その他に芽2点、昆虫細片37点が検出された。

5) 結果と考察

15-1 調査区における大型植物遺体同定の結果、種実には樹木種実のカヤ、スギ、クリ、ヤマグワ、ウメ、モモ、スモモ、キイチゴ属、サンショウ、サンショウ属、アカメガシワ、モチノキ、カエデ属、ヤブツバキ、ヒサカキ、ムラサキシキブ属、クサギ、ニワトコ、草本種実のオモダカ属、イネ、エノコログサ属、アワ、イヌビエ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、スゲ属、イボクサ、ツユクサ属、カナムグラ、ソバ、タデ属、アカザ属、ザクロソウ、ヤマゴボウ属、ナデシコ科、カタバミ属、アリノトウグサ、アブラナ科、シソ属、イヌホウズキ、ナス、ゴマ、ニホンカボチャ、セイヨウカボチャ、カボチャ属、ウリ類、スズメウリ、アザミ属、キク亜科が検出され、その他には魚骨のアユ、サバ属、サケ属、明らかな同定はできないがボラ科?、タイ科?、カマス科?、トビウオ科?が検出された。また、葉遺体では、ビャクシン属とマツ属複雑管束亜属(ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ)がまとまって一括で検出され、植栽されていた可能性ももたれる。その他にはシジミ科、芽、昆虫片も検出された。

(1) 151-28 (廃棄土坑) (第99図)

草本種実が樹木種実より多く、タデ属、イヌビエ属、ナデシコ科等が多く、他にアカザ属、ナデシコ科、ヤマゴボウ属、イヌホウズキ、シソ属、アザミ属、キク亜科、ツユクサ属が検出された。いずれも人里植物ないし畑作雑草であり日当たりの良い乾燥地周辺に生育していたと考えられる。樹木種実ではムラサキシキブ属が多い。検出自体が珍しく、自然状態では集積されない遺構内であることから、ある程度の量が観賞用に植栽されていたとみなされる。1層と2層西半では、草本種実には栽培植物のナス、ニホンカボチャがやや多くなり、セイヨウカボチャ、ウリ類、イネが伴う。樹木種実ではモモ、スモモ、サンショウが検出され、食用となる種実類が投棄されたと考えられる。草本は他にアカザ属、ヤマゴボウ属、イヌホウズキ、シソ属、アザミ属、キク亜科等の人里植物ないし畑作雑草が同定され、周囲はこれらが生育する、日当たりの良い乾燥地であったと推定される。

(2) 151-26 (土坑) (第100図)

草本種実では、ウリ類種子が極めて多く、他にゴマ、ナス、少ないがイネ、アワと栽培植物が多いという特徴をもつ。他にアカザ属も多い。樹木種実ではヤマグワ、キイチゴ属、サンショウと特定の食用になる種類が多く、ウメも検出された。魚類骨・歯ではアユが多く、サケ属とサバ属が続き、151-26の遺体群は食用になる動植物で大部分が構成される。花粉群集と寄生虫卵の結果を合わせ、本遺構の堆積物が糞便であり、糞便が投棄された土坑か便所遺構であることが示唆される。畑作物として

ウリ類、ゴマ、ナス、アワ、果実としてヤマグワ、キイチゴ属、ウメを利用していたと考えられる。またアカザ属は、薬用になり、寄生虫症の駆虫薬として利用された可能性も考えられる。サンショウは実山椒が香辛料として用いられたと推定される。

魚類ではアユが多く、サケ属とサバ属が食べられていたと考えられる。アユは河川下流域で産卵し、成長すると遡上する。またサケ属は海を回遊し、産卵のために河川を遡上する。いずれにしても、旬となる初夏や秋に漁獲し食べられたと推測される。少ないが、ホタルイ属の水生植物や、アカザ属、ザクロソウ、ナデシコ科、カタバミ属、イヌホウズキの人里植物ないし畑作雑草が遺構周辺に生育していたと考えられる。

(3) 151-204 (廃棄土坑) (第101図)

下部から9層下層ではイネ科、ナデシコ科、9層上層では少ないがナデシコ科、8層ではナデシコ科が多く検出された。いずれも周囲はイネ科やナデシコ科の生育する日当たりのよい乾燥地であったことが示唆される。また9層下層はイネとゴマ、8層ではイネが多く、利用された食用植物の残滓が投棄されたと考えられる。エノコログサ属、イヌビエ属、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ属、カタバミ属、アブラナ科、シソ属、スズメウリは人里植物ないし畑作雑草で日当たりの良い乾燥地に生育する。シソ属は有用植物でもあり、周辺に生育していたと考えられる。また、栽培植物であるナス、ゴマ、ニホンカボチャが同定された。樹木種実には少ないが、スギ、キイチゴ属、サンショウ属、ニワトコが検出され、少なからず周辺に生育していたとみられる。なお、9層上層では、種類不明の菌1点が出土している。

(4) 151-259 (廃棄土坑) (第102図)

草本種実が多く、栽培植物であるイネ、ソバが多く、利用されて投棄されている。他に栽培植物はウリ類が検出された。草本種実のイヌビエ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科は水生植物であり、沼沢地や流れの緩やかな水路、湿地や溪流沿い、水田、川端に生育する。また、アリノトウグサも山野の湿地などに生育する。カナムグラは原野や路傍、河原などの荒地に生育する。樹木種実には少ない。カヤは山地に認められる。ヤマグワは温帯に広く分布する落葉高木で、流路沿いなどを好み、スギは温帯に広く分布し、特に中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。キイチゴ属、アカメガシワ、ニワトコは山野、山地の林縁に生育し、二次林種でもある。ヒサカキは温暖に広く分布し、種実には染料になる有用植物である。クサギは林縁や川岸など日当たりの良い場所に生育する。

5 微細遺物分析

1) 原理

種実や木材は炭化しても、比較的よく構造が保存されるため同定することができる。種子や果実の特徴としては種まで同定できるものが多く、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。木材は概ね属レベルの同定が可能であり、微小遺体と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生やその利用を検討することができる。骨は部位や破片によるが、動物種を特定でき、その利用を調べることができる。試料は一覧表に示す。

2) 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- (1) 試料 1000cm³に水を加え放置し、泥化
- (2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別

(3) 検出された種実には双眼実顕微鏡下で観察して同定し、同定可能な比較的大きな炭化材片(約1.5cm程度)は割り折りして新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の断面をだし、落射顕微鏡によって50~1000倍で観察し同定した。いずれも計数を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級など分類群で示した。

3) 結果

(1) 分類群

分析の結果、種実類と炭化材が検出された。

種実 樹木2分類群、草本16分類群の計18分類群が同定される。学名、和名および粒数を表に示し(第58表)、主要な分類群を写真に示す(図版第72)。1000cm中の種実数をダイアグラムに示す(第103図)。以下に同定根拠となる形態的特徴を示す。大型植物遺体で記載した分類群は省く。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. **炭化果実** イネ科 炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく胚と胚乳とが接する輪郭線は山形である(図版第72-7・8)。

ムギ類(オオムギ-コムギ) *Hordeum-Triticum* **果実** イネ科 オオムギもしくはコムギと思われるが、胚が欠落し鑑別できないためムギ類とした。

スゲ属 *Carex* **果実** カヤツリグサ科 黒色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい(図版第72-9)。

キランソウ属 *Ajuga* **果実** シソ科 卵形や狭卵形で側面は横狭卵形を呈す。着点は広卵形や広楕円形で、腹面的一端(卵の細い方)から中央までを占め幅広い隆条状の縁で囲まれる。大型の網目模様がある(図版第72-15)。

炭化材 炭化材は159点、17分類群が同定された。学名、和名を第58表、第104図に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群を写真に示す(図版第73~75)。なお試料は1.5cm以上の炭化材を堆積物より検出した。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. **イチイ科** 仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に1~4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬かつ弾性が強く水湿にも耐える。保存性が高く、加工が容易で割裂し易く、表面の仕上がりが良好で光沢が出る材で、弓等に用いられる(図版第73-1)。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* **マツ科** 仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やか箇所があり垂直樹脂道がみられる。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の特徴からマツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類)に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木であり、材はいずれも水湿によく耐え腐りにくく、建築材のなかでも水湿の影響がある柱、礎板等に用いられる材である(図版第73-2)。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don **スギ科** 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉

樹材である。早材から晩材への移行はやや急で晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具に至るまで幅広く用いられる（図版第73-3）。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞がみられる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高く、加工工作が容易な上、建築材はもとより板材や小さな器具に至るまで幅広く用いられる。またヒノキないしヒノキ科の木材は大きな材がとれる良材であり、律令期以降に流通する材である（図版第73-4）。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は単列の異性放射組織型である。以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は耐朽・保存性は低く、切削・加工が容易で柔軟性に富む材で、建築、器具等に用いられる（図版第73-5）。

サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc クルミ科 大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合し、全体としてやや放射方向に配列する傾向を示して、まばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が接線状に1列配列し、波状を示す。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で1～2細胞幅で細い。以上の特徴からサワグルミに同定される。サワグルミは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で高さ30m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性は低いが、軽軟な材で、加工性は良いが質感が悪く、建材にはあまり利用されない。しかし軽軟さがキリに似ていることから山桐と呼ばれ、古くからキリの代用として下駄等にも使用されてきた（図版第73-6）。

ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科 小型で丸い道管が放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～30本ぐらいである。放射組織は、平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。以上の特徴からハンノキ属に同定される。ハンノキ属にはハンノキ、ヤシヤブシ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。材は耐朽・保存性、切削・加工性ともに中庸な材で、挽物の器、杓子等の器具に利用されることが多い（図版第74-1）。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。材は重硬で耐朽性が高く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木

等広く用いられる（図版第74-2）。

ブナ属 *Fagus* ブナ科 小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られ、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属にはブナイヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材の強さ、切削・加工性は中庸で、弾性と従曲性に富む材である。また、縄文時代以降から現在まで木材の性状から伝統的に木地に用いられる材である（図版第74-3）。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織でなる複合放射組織である。以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み建築材としても用いられる。ナラ類は建築材だけではなく火持ちの良い薪炭材としても重宝される。ここでは同定数が比較的多いが、福井における中近世のコナラ属コナラ節の報告数は少なく、報告例としては一乗谷朝倉氏遺跡の鋏がある（図版第74-4）。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して円形か接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らむものがある。幅は1～7細胞幅である。以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3m程に達する。材は概して強く強靱で従曲性に富み、耐朽・保存性は高く水湿にもよく耐え、建築、家具、器具、船、土木等に用いられる。なお、縄文時代以降現在まで、伝統的に木地に用いられる材である（図版第74-5）。

ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。直立細胞に大きく膨れているものがあり結晶細胞がみられる。以上の特徴からツバキ属に同定される。ツバキ属にはヤブツバキ、サザンカ等があり、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靱で、耐朽性が高く堅硬な良材だが切削・加工は困難である。建築、器具、楽器、船、彫刻等に用いられる（図版第74-6）。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも認める。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。以上の特徴からサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱かつ堅硬であるため、建築、器具等に用い

られる（図版第75-1）。

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキ等があり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で通常高さ10m、径30cmである。材は概して強さ中庸で、杭や農具柄等に利用されることがあるが、福井では一乗谷朝倉氏遺跡からヒサカキ属の横櫛の報告例がある。また、サカキの少ない地域ではその代替品として祭事に利用される場合がある（図版第75-2）。

カキノキ属 *Diospyros* カキノキ科 中型の道管が単独および放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の壁は厚い。軸方向柔細胞は周囲状および接線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔、放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。接線断面ではいずれの放射組織も高さがほぼ同じで、層階状に配列し、リップルマークを呈する。以上の特徴からカキノキ属に同定される。カキノキ属にはトキワガキ、ヤマガキ、マメガキ等があり、本州の西部から、四国、九州に分布する。落葉の高木で通常高さ20m、径1mぐらいに達する。材は概して堅硬な材といえ、建築および器具等に用いられる（図版第75-3）。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、主に2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。以上の特徴からエゴノキ属に同定される。エゴノキ属にはエゴノキ、ハクウンボク等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で高さ10m、径30cmである。材はやや堅硬であるが切削、加工は容易で、器具、旋作、薪炭等に用いられる（図版第75-4）。

タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科 基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は本部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。放射断面と接線断面では柔細胞および維管束、維管束鞘が桿軸方向に配列している。以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。材は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え割裂性に富み、また細工が容易であるため、様々な素材として利用される。タケ亜科ではマダケ、ハチク、ヤダケが古くから日本にあり、モウソウチクが庭木として17世紀後半または18世紀前半に日本本土へ植栽され、現在では工芸品にも利用されている。ハチク、ヤダケは茶杓等の器具や矢等の武具にも利用されることがあり、マダケは弓道の弓のほか茶筌や茶杓等の工芸品、垂木、土壁の建築材にも利用される（図版第75-5）。

（2）遺体群集の特徴

151-102（廃棄土坑）（第103図）

19層中央 種実では草本のイネ類破片603点、細片(+++)が極めて多い。イヌビエ属4点、スゲ属1点、アカザ属1点、カタバミ属1点、キランソウ属1点、キク亜科1点が検出され、その他に芽1点、昆虫片6点、葉片(+++)が確認された。

第58表 微細遺物分析結果

分類群		部位	151-102		151-108						
学名	和名		19層中央	26層下層	18層	20層	23層	27層	31層	33層	34-35層
Arbor	樹木		1								
<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマグワ	種子	1								
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex graedn	ニワトコ	核			6						
Herb	草本										
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎 穎 (破片) (細片)	603 (+++)	556 (+++)	2 6	1		8	8	110	126
<i>Setaria</i> Beauv.	エノコログサ属	穎			3						1
<i>Echinochloa</i> Beauv.	イヌビエ属	穎	4		25				1	1	1
<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	炭化果実			8	1					
<i>Hordeum - Triticum</i>	ムギ類	炭化果実(破片)				1					
Gramineae	イネ科	穎							1		1
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	1				1	1			
<i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	ソバ	果実(破片)						18		18	27
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	1								
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1			1					
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	2		1						
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	1	2							
<i>Ajuga</i>	キランソウ属	果実	1								
<i>Perilla</i>	シソ属	果実			2	2					
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子									1
Asterioideae	キク亜科	果実	1	2							
Total	合計		612	564	47	7	1	27	10	129	162
分類群			151-102		151-108						
学名	和名		19層中央	26層下層	18層	20層	23層	27層	31層	33層	34-35層
Charcoal	炭化材										
<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ				1				1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属				9	1	4		6	3	3
<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ				1		7			2	9
<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ				4	6	16	9	8	9	3
<i>Salix</i>	ヤナギ属						1		1		
<i>Pterocarya rhoilii</i> Sieb. et Zucc.	サワグルミ								1	1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属								1		
<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ		1						1		
<i>Fagus</i>	ブナ属								1		
<i>Quercus</i> sect. <i>Primus</i>	コナラ属コナラ節						2		6	8	2
<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ						1				
<i>Camellia</i>	ツバキ属									1	
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ				2						
<i>Eurya</i>	ヒサカキ属						2		2	4	3
<i>Diospyros</i>	カキノキ属						1				
<i>Styrax</i>	エゴノキ属				1						
Bambusoideae	タケ亜科				4	2	4	2	1		1
Total	合計		0	0	23	9	38	11	29	28	21
Bud	芽		1	2	1						
	昆虫	(細片)	6	5	4	5	2				4
	炭化材	(細片)			(+++)	(++)	(+++)	(+++)	(+++)	(+++)	(+++)
	葉		(+++)								
	なわ?				(+)	(+)					
	土器瓦器	(破片)			(+)						
	水洗選別量	(cc)	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000
	備考				ムギ類 漆付き材 未成熟 細片有						

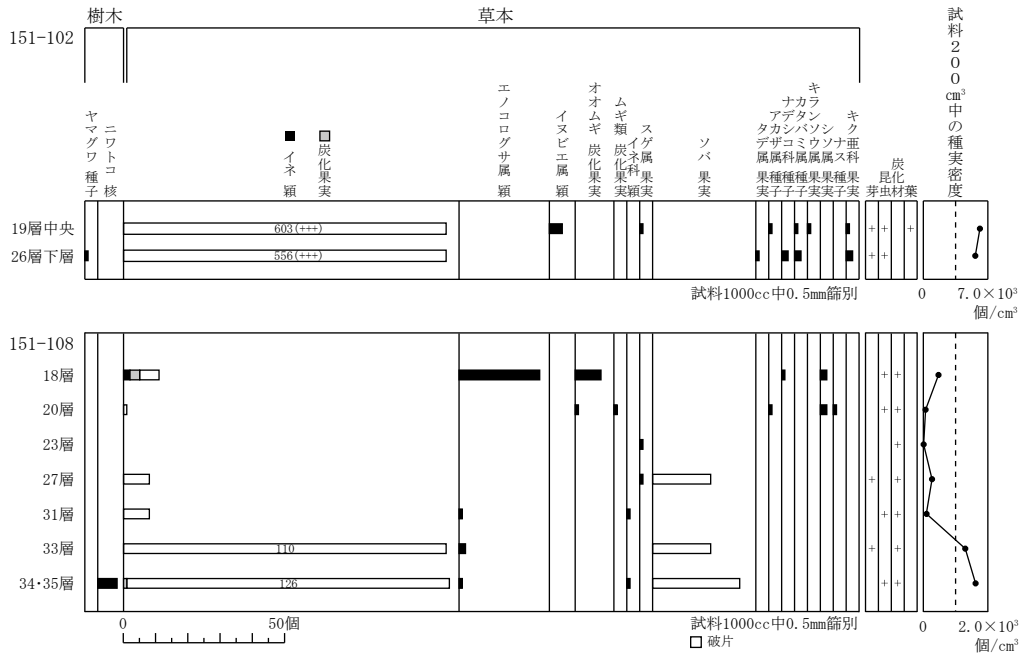
26層下層 種実では草本のイネ穎破片556点、細片(++)が極めて多く、樹木のヤマグワ1点、タデ属1点、ナデシコ科2点、カタバミ属2点、キク亜科2点が検出され、その他に芽2点、昆虫片5点が確認された。

151-108 (井戸) (第103図)

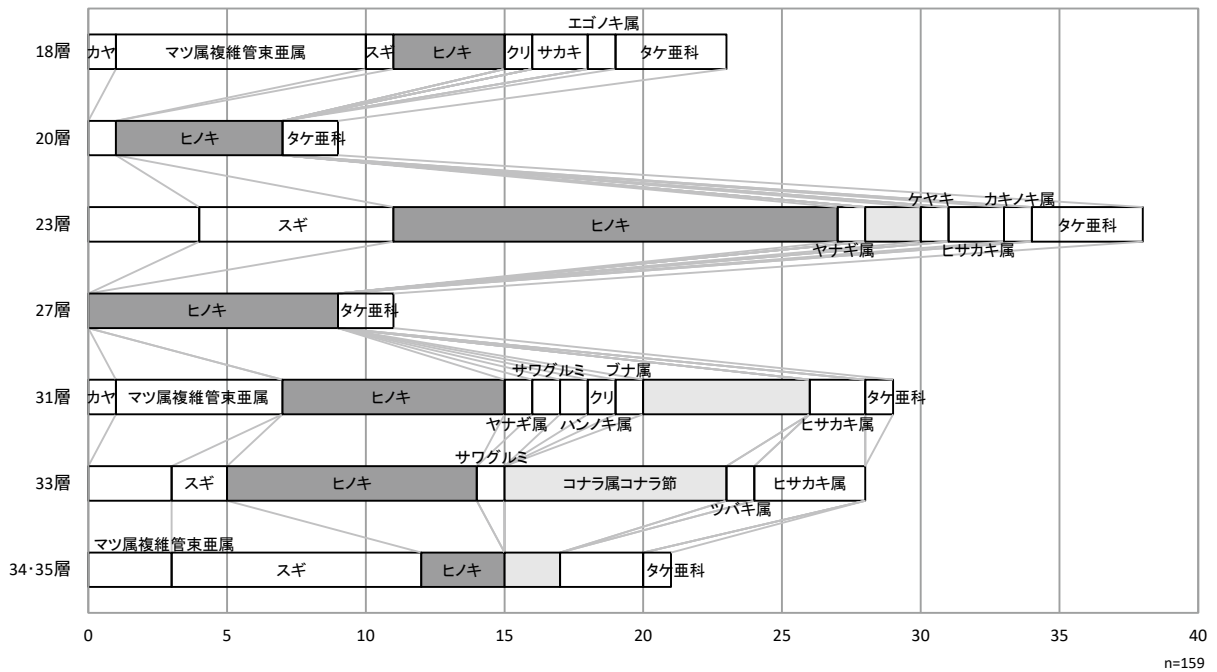
18層 種実では草本のイネ穎2点、破片6点、炭化果実3点、エノコログサ属25点、オオムギ炭化果実8点、ナデシコ科1点、シソ属2点が検出され、他には昆虫片4点、炭化材細片(++)、なわ?(+)が確認された。炭化材ではカヤ1点、マツ属複雑管束亜属が9点と多く、スギ1点、ヒノキ4点、クリ1点、サカキ2点、エゴノキ属1点、タケ亜科4点が検出された。

20層 種実では草本のイネ穎破片1点、オオムギ1点、ムギ類炭化果実破片1点、アカザ属1点、シ

第3節 土壤分析



第103図 151-102、151-108における微細物（種実）ダイアグラム



第104図 151-108における樹種と層序の相関グラフ

ソ属2点、ナス1点が検出され、他には昆虫片5点、炭化材細片(++)、土器片(+)が確認された。炭化材はマツ属複維管束亜属1点、ヒノキ6点、タケ亜科2点が検出された。

23層 種実では草本のスゲ属1点が検出され、その他に炭化材細片(+++)、なわ?(+)が確認された。炭化材はマツ属複維管束亜属4点、スギ7点、ヒノキ16点と多く、ヤナギ属1点、コナラ属コナラ節2点、ケヤキ1点、ヒサカキ属2点、カキノキ属1点、タケ亜科4点が検出された。

27層 種実では草本のイネ類破片8点、スゲ属1点、ソバ破片18点が検出され、その他に芽1点、炭化材細片(+++)が確認された。炭化材はヒノキ9点、タケ亜科2点がみられた。

31層 種実では草本のイネ類破片8点、エノコログサ属1点、イネ科1点、その他に昆虫片2点、炭化材細片(+++)が確認された。炭化材ではカヤ1点、マツ属複維管束亜属6点、ヒノキ8点、ヤナギ属1点、サワグルミ1点、ハンノキ属1点、クリ1点、ブナ属1点、コナラ属コナラ節6点、ヒサカキ属2点、タケ亜科1点が検出された。

33層 種実では草本のイネ類破片110点、エノコログサ属1点、ソバ破片18点が検出され、他には芽1点、炭化材細片(+++)が確認された。炭化材はマツ属複維管束亜属3点、スギ2点、ヒノキ9点、サワグルミ1点、コナラ属コナラ節8点、ツバキ属1点、ヒサカキ属4点が検出された。

34、35層 種実では樹木のニワトコ6点、草本のイネ類破片126点、炭化果実1点、エノコログサ属1点、イネ科1点、ソバ破片27点が検出され、その他に昆虫片4点、炭化材細片(+++)が確認され、炭化材はマツ属複維管束亜属3点、スギ9点、ヒノキ3点、コナラ属コナラ節2点、ヒサカキ属3点、タケ亜科1点が検出された。

4) 考察

151-102 (廃棄土坑)

イネ類破片と細片が極めて多く、多量に破棄されたと考えられる。樹木種実のヤマグワは温帯に広く分布する落葉高木で流路沿いなどに生育する。草本種実のイヌビエ属、スゲ属、カヤツリグサ科、タデ属は水生植物であり、沼沢地や流れの緩やかな水路、湿地や溪流沿いまたは水田、川端に生育し、ナデシコ科、カタバミ属、キランソウ属、キク亜科は人里植物ないし畑作雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育し、これらの草本が周囲に分布していた。

151-108 (井戸)

草本種実のエノコログサ属、イネ科、スゲ属は水生植物であり、沼沢地や流れの緩やかな水路、湿地や溪流沿いまたは水田、川端に生育し、アカザ属、ナデシコ科、シソ属、ナスは人里植物ないし畑作雑草であり、日当たりの良い乾燥地に生育する。これら草本は151-108(井戸)周辺に生育していたと考えられる。検出されたイネ、オオムギ、ソバ、ナスは栽培植物であり食用にもなる。ソバは、気温差が大きく、冷涼な地域で栽培されて生育する。ニワトコは山野、山地の林縁、低地や湿地に生育する二次林種である。

同定された樹種はいずれも温帯上部の冷温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であった。またヒノキは適潤性であり、スギは特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。土壌条件の悪い岩山に生育するアカマツ(マツ属複維管束亜属)、クリ、コナラ(コナラ属コナラ節)は二次林要素である。また、ヤシヤブシ(ハンノキ属)、サカキ、カキノキ属は山野や日当たりの良い尾根筋などに生育する。カヤ、ヤナギ属、サワグルミ、ケヤキは適潤な谷側や谷合いを好んで生育し、ハンノキ(ハンノキ属)は水湿のある低地に生育する。他に湿潤な気候下に生育するブナ属にはブナとイヌ

ブナがあり、温帯上部の冷温帯から温帯中間域に生育する。なおヒサカキ属、ヤブツバキ（ツバキ属）は尾根筋や海岸等に生育する。

5) 小結

調査区 15-1 から出土した堆積物から微細物を同定した結果、樹木種実のヤマグワ、ニワトコ、草本種実のイネ、エノコログサ属、イヌビエ属、オオムギ、ムギ類、イネ科、スゲ属、ソバ、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、カタバミ属、キランソウ属、シソ属、ナス、キク亜科が検出され、炭化材はカヤ、マツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ節、ケヤキ、ツバキ属、サカキ、ヒサカキ属、カキノキ属、エゴノキ属、タケ亜科が検出された。その他には芽、昆虫細片、葉細片が検出された。

炭化材で同定された樹種は建築材や器具に比較的好く利用されるものがほとんどで、またその点数が多く、板材の形状を示す破片もあり、多くは建築材や器具等の一部であると考えられる。また、いずれの層においても針葉樹の同定数のほうが比較的多い（第104図）。なお、中部日本海側では地域的な森林要素からヒノキよりもスギの供給が多く利用される特徴があるが、本遺跡ではヒノキの方が多い傾向がみられる。なお、ヒノキは律令期以降に頻繁に流通するようになった。他にマツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ節、ヒサカキ属、タケ亜科が多いが、ヒサカキ属を除くと部材や器具等の利用にみられる樹木である。またヒサカキ属は径が細いため用材とは考えられず、生育または植えられていた可能性がある。

6 まとめ

15-1 調査区において、寄生虫卵を含む花粉分析、大型植物遺体同定、微細遺物分析を行った結果、遺構ごとに遺体、遺物の内容が異なり、151-28、151-204、151-108、151-259 は周辺植生を基本的に示すが、151-102 はイネ属型花粉が卓越して多く、イネ穎片（粃殻）も多いため、イネ穎（稲粃）の投棄が示唆される。151-26 では寄生虫卵密度と食用になる植物の花粉、種実が多く、糞便の投棄か便所遺構であったかが示唆された。151-106 では廃棄された炭化材が多く、木材の使用状況が示された。食用植物はイネやソバの他ウリ類、ニホンカボチャ、セイヨウカボチャ、アブラナ科、アワ、オオムギ、ムギ類（オオムギ-コムギ）の畑作物、ウメ、スモモ、モモの果樹、ヤマグワ、キイチゴ属、サンショウ、シソ属、カヤ、クリが採取され利用されている。イネ穎（稲粃）が多量に投棄されていることから、イネ（コメ）は多量に扱われている。151-26 の魚骨からはアユを主にサバ属やサケ属、寄生虫卵の感染からはサケ類、アユやコイ科の魚類、鳥類か小動物の摂食が示唆された。151-102 の廃棄された炭化材からは、ヒノキを主にスギ、コナラ属コナラ節、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ）、タケ亜科等の建築材や器具によく利用される樹種が多いため、建物に用いられていたことが推定された。またマツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類、アカマツかクロマツ）、ビャクシン属、ムラサキシキブ属、ナンテン、クリの植栽が考えられ、クリは二次林の可能性もある。周辺地域には水田の分布が示唆され、マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属の樹木が分布していたと考えられた。

参考文献

中村純 1967『花粉分析』古今書院 pp.82-102.

島倉巳三郎 1973『日本植物の花粉形態』『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p.

- 中村純 1974「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究 13』pp.187-193.
- 中村純 1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学 第10号』pp.21-30.
- 中村純 1980「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p.
- 金原正明 1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』角川書店 pp.248-262.
- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一 1987「線形動物・扁形動物. 医動物学」『新版臨床検査講座 8』医歯薬出版 pp.9-55.
- 金原正明・金原正子 1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-』奈良国立文化財研究所 pp.14-15.
- 金原正明 1999「寄生虫. 考古学と動物学」『考古学と自然科学 2』同成社 pp.151-158.
- 笠原安夫 1985『日本雑草図説』養賢堂 494p.
- 笠原安夫 1988「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣出版 pp.131-139.
- 金原正明 1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル No.409』ニューサイエンス社 pp.15-19.
- 南木睦彦 1991「栽培植物」『古墳時代の研究 第4巻 生産と流通 I』雄山閣出版株式会社 pp.165-174.
- 南木睦彦 1993「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編 第四紀試料分析法』東京大学出版会 pp.276-283.
- 吉崎昌一 1992「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナル No.355』ニューサイエンス社 pp.2-14.
- 南木睦彦 1993「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法』東京大学出版会 pp.276-283.
- 渡辺誠 1975『縄文時代の植物食』雄山閣 187p.
- 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学』雄山閣 449p.
- 佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 pp.20-48.
- 島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 pp.296.
- 鈴木三男, 能城修一 1991「越前朝倉氏遺跡から出土した木製品の樹種」『朝倉氏遺跡資料館紀要 1990』福井県立朝倉氏遺跡資料館 pp.15-22.
- 山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第1号』植生史研究会 pp.242.
- 東海大学出版会 1994『日本の哺乳類』
- 松井章 2008『動物考古学』京都大学学術出版

第4節 遺物の構造分析

1 木製品の樹種

1) 試料

試料は福井県福井城跡から出土した木製品のうち、完形で状態の良い遺物、または製品や部材として珍しいもの、または多量にある製品から傾向分析のため抽出した遺物など 150 点である。

2) 調査方法

調査方法は剃刀で木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。No.16 は、数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、薄片プレパラートを作製した。これらを顕微鏡で観察して同定した。なお遺物の形状や状態により、No.17・28・45・56・59・76・85・92・99・115・124 は木口の採取ができなかった。No. は 15-1 ~ 16-1 調査地区からの遺構の昇順である。

2 結果

樹種同定結果 19 樹種（針葉樹 4 種、広葉樹 13 種、樹皮 1 種、イネ類 1 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

マツ科マツ属〔二葉松類〕(*Pinus sp.*) (分析 No.9,12,34) (樹種写真 No.1) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1～15細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属〔二葉松類〕はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D.Don) (分析 No.1～4, 6, 11, 13, 15, 28, 32, 37, 38, 40～42, 46, 52, 54～56, 59, 60, 65, 71, 76, 80 (蓋) 82, 102, 104～107, 113, 115, 118, 120, 132, 143) (樹種写真 No.2) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis sp.*) (分析 No.7, 8, 30, 33, 50, 74, 89, 92, 97, 100, 121, 124, 125, 137～140, 142) (樹種写真 No.3) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する。

ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis sp.*) (分析 No.10, 14, 18, 39, 45, 49, 72, 77～79, 85, 88, 99, 101, 108, 110, 111, 114, 116, 117, 123, 126～129, 131, 133～136, 141, 144, 150) (樹種写真 No.4) 木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔は、ヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属には基本種のアスナロ(ヒバ、アテ)と変種のヒノキアスナロ(ヒバ)があるが、顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

カバノキ科カバノキ属ミズメ (*Betula grossa* Sieb. et Zucc.) (分析 No.16, 98) (樹種写真 No.5) 散孔材である。木口ではやや大きい道管(～190 μ m)が単独ないし2～4個が放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏細胞からなる同性と直立、平伏細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～450 μ mであった。ミズメは本州、四国、九州に分布する。

カバノキ科ハンノキ属 (*Alnus sp.*) (分析 No.53) (樹種写真 No.6) 散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管(～90 μ m)が2～数個半径方向に放射複合管孔をなして平等に分布する。軸方向柔組織は単接線状柔組織を形成している。放射組織は多数の単列放射組織と幅の広い放射組織がある。柾目では道管は階段穿孔と小型で円形の対列壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなるが、ときに上下縁辺に方形細胞が現れる。板目では多数の単列放射組織(1～30細胞高)と単列放射組織が集まってできた集合型の広放射組織がある。ハンノキ属はハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科ブナ属 (*Fagus sp.*) (分析 No.19～21, 23, 47, 57, 61～63, 73, 83, 84, 87, 90, 93, 95, 96, 109, 130, 145, 146, 149) (樹種写真 No.7) 散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110 μ m)がほぼ平等に散

在する。これらは年輪の内側から外側に向かって、大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）が見られる。放射組織は、大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属は単幹のブナ、基部で分枝して複幹になるイヌブナがあり、北海道（南部）、本州、四国、九州に分布する。

ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) (分析 No.91) (樹種写真 No.8) 環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管（～500 μ m）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

ニレ科ニレ属 (*Ulmus* sp.) (分析 No.44) (樹種写真 No.9) 環孔材である。木口では大道管（～300 μ m）が2～3列で孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が多数接合して複合管孔を形成し、花束状、斜線状、接線状に比較的規則的に配列する。軸方向柔細胞は周囲状が顕著である。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を持つ。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は柵状の壁孔が存在する。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～740 μ mである。ニレ属はハルニレ、アキニレ、オヒョウがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino) (分析 No.43, 75, 147) (樹種写真 No.10) 環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270 μ m）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では、大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では、放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

クワ科クワ属 (*Morus* sp.) (分析 No.112) (樹種写真 No.11) 環孔材である。木口では大道管（～280 μ m）が年輪界にそって1～5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では小道管が2～6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では、道管は単穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1.1mmからなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属は日本原産種のヤマグワのほか、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.) (分析 No.5, 27, 58, 66, 67, 86) (樹種写真 No.12) 散孔材である。

木口ではやや小さい道管（ $\sim 110\mu\text{m}$ ）が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では、道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は、すべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ $\sim 700\mu\text{m}$ となっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

マンサク科イスノキ属イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) (分析 No.36, 81) (樹種写真 No.13) 散孔材である。木口ではやや小さい道管（ $\sim 50\mu\text{m}$ ）がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物（チロース）がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では、放射組織は1～2細胞列、高さ $\sim 1\text{mm}$ で多数分布している。イスノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。

マメ科ネムノキ属 (*Albizzia* sp.) (分析 No.26) (樹種写真 No.14) 環孔材である。木口では大道管（ $\sim 300\mu\text{m}$ ）が3～5列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では移行するにしたがって大きさを減じ、年輪最外部では軸方向柔細胞と区別がつかない。軸方向柔細胞は孔圏外で顕著に周囲柔組織を形成している。放射組織は2～3列のものが走向している。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。道管内には着色物質がある。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ $\sim 450\mu\text{m}$ からなる少し角張ったものが多くある。ネムノキ属はネムノキ、ヒロハネムがあり、本州、四国、九州に分布する。

ツゲ科ツゲ属ツゲ (*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var *japonica* Rehd. et Wils.) (分析 No.29, 35) (樹種写真 No.15) 散孔材である。木口では極めて小さい道管（ $\sim 40\mu\text{m}$ ）が多数平等に分布する。木繊維は厚壁である。柾目では道管は階段穿孔（10本前後）を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔には小型の篩状の壁孔がある。板目では放射組織は2～3細胞列、高さ $\sim 600\mu\text{m}$ からなる。ツゲは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) (分析 No.22, 24, 25, 48, 51, 64, 69, 70, 94, 148) (樹種写真 No.16) 散孔材である。木口ではやや小さい道管（ $\sim 80\mu\text{m}$ ）が単独かあるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側（ターミナル状）に配列する。柾目では、道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている（上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる）。板目では放射組織は単列で大半が高さ $\sim 300\mu\text{m}$ となっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列している。肉眼では微細な縞模様（リップルマーク）として見られ、用材として大きな特徴となっている。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

カキノキ科カキノキ属 (*Diospyros* sp.) (分析 No.122) (樹種写真 No.17) 散孔材である。木口ではやや大きい道管（ $\sim 200\mu\text{m}$ ）が単独ないし2～4個放射方向に複合している。道管の接合している壁は厚くなっている。分布数は少ない。軸方向柔細胞は顕著で接線状、網状に配列している。柾目では道管

は単穿孔と側壁に多数の小壁孔を有する。道管内腔には着色物質がみられる。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～500 μ mからなる。放射組織、木繊維とも階層状に配列しており、肉眼的に微細な縞模様（リップルマーク）としてみられる。カキノキ属はヤマガキ、カキ、シナノガキがあり、本州（西部）、四国、九州、琉球に分布する。

ヤマザクラ or カバの樹皮（分析 No.80（綴じ皮））（樹種写真 No.18）横断面と放射断面ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。接線断面では細胞が放射方向に規則正しく配列している。しかし桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

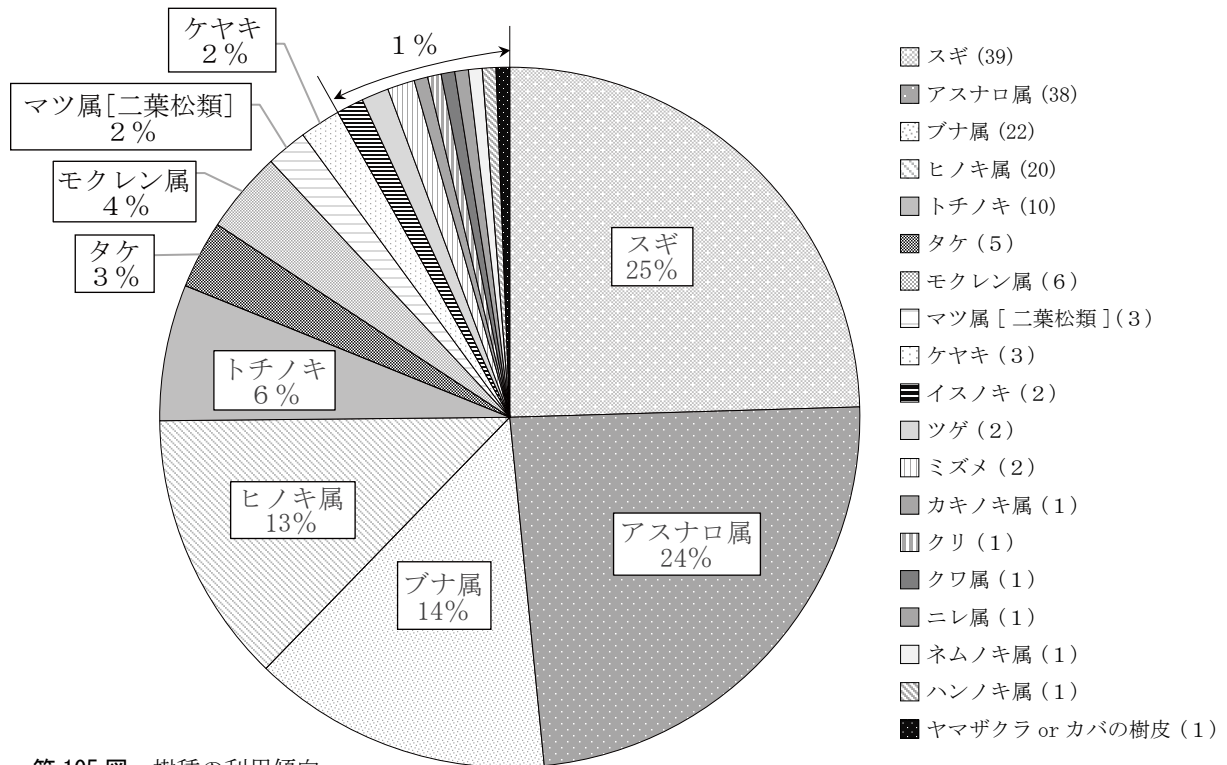
イネ科タケ亜科（Subfam. Bambusoideae）（分析 No.17, 31, 68, 103, 119）（樹種写真 No.19）横断面では維管束がみられる。放射断面、接線断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稈軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

参考文献

- 林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」京都大学木質科学研究所（1999）
 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
 北村二郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 I・II」保育社（1979）
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）
 使用顕微鏡 Nikon DS-Fi 1

第 59 表 器種別樹種組成

樹種	建築材	文房具	服飾具	容器	紡織具	工具	容器(漆)	食事具	祭祀具	部材	雑具	遊戯具	その他	合計
ヒノキ属	3	1	10	11	1	2		7	2	2			1	40
スギ	5	2	2	17		3		3		1	1		3	37
アスナロ属	1	2	3	8		1		5		1			2	23
ミズメ								1				1		2
ハンノキ属							1							1
ブナ属			1				22							23
クリ			1											1
ニレ属												1		1
ケヤキ							3							3
クワ属													1	1
モクレン属			2	1			2							5
イスノキ			2											2
ネムノキ属			1											1
ツゲ			2											2
トチノキ							10							10
カキノキ属								1						1
ヤマザクラ or カバの樹皮				1										1
タケ						1		4						5
合計	9	5	24	38	1	7	38	21	2	4	1	2	7	159



第 105 図 樹種の利用傾向

2 漆塗膜観察と分析

1) 試料と調査方法

調査した試料は、第 61 表に示す漆器類の什器 24 点と食事具 5 点、不明漆器 5 点、櫛 2 点の塗膜が確認された合計 36 点である。

調査方法は、断面観察を行った。本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。次に EPMA 分析のため、作製した塗膜断面プレパラートの導電性を上げて観察精度を上げる為に金 (Au) 蒸着を行い、日本電子株式会社製走査型電子顕微鏡 JSM-6010LA を用いて、電子顕微鏡画像を撮影すると共に、塗膜混和物の元素同定を行った (第 61 表)。

2) 調査結果

塗膜断面の観察結果を、第 61 表に示した。

塗膜構造：下層から、木胎、下地、漆層が観察された。

布着せ：No.75 外面紋様部には漆下地の下に布着せの布の糸の断面が見られた。それらの糸繊維の横

断面の形状は長径と短径の差がややある横長楕円形を呈しており、木綿ではない植物繊維である。

下地：膠着剤として漆を用いる漆下地 (No.58 外面、No.75 外面) と、柿渋を用いる渋下地 (No.19 内面、No.20, 23, 24, 25, 27 外面、No.30 底部、No.33 柄部、No.36, 47 外面、No.48 外面、No.51 外面、No.53 内面、No.57, 59 柄部、No.61, 64, 70, 73, 84, 87, 90, 94, 96, 97, 98 内面、No.146, 148 外面、No.149) とがみられた。また No.10 内面、No.116 については木胎の上に直接漆が塗布されていた。No.35 の櫛は下地については不明である。No.30 杓底部と No.59 漆塗柄鏡箱、No.122 塗箸は下地のみ残存しており、漆層があったかどうかは不明である。

漆層：No.27 外面、No.75 外面、No.148 外面（高台）には漆層の塗り重ねが見られた。また、No.23 外面、No.119 塗分け部は赤色漆、青色漆、赤色漆の塗り重ねが見られた。

加飾：No.20 外面、No.28 外面、No.24 内面、No.25 内面、No.47 外面、No.48 外面、No.58 外面、No.84 外面、No.87 外面、No.90 外面、No.146 外面には赤色漆で、No.36、No.51 外面、No.75 外面には黄色漆で漆絵が施されている。No.149 外面は赤色漆、黄色漆の両方が使用されている。また No.61 外面、No.64 外面、No.70 外面、No.73 外面、No.97 の加飾部には金属片の混和が見られた。

顔料：赤色漆に混和された赤色顔料は、No.10 内面、No.87、No.97 が透明度が高くない不定形粒子のベンガラであった。それ以外では透明度が高く、明確な粒子形状を呈する朱であった。また黄色の漆層に葉石黄が混和されている。No.119 の青色漆には藍の粒子が混和され、No.23 外面は加えて石黄も混和されていた。No.61 外面、No.64 外面、No.70 外面、No.73 外面の金属片は銀、No.97 は金が混和されていた。

また EPMA 成分分析結果以上の分析から、赤色顔料は朱とベンガラの混和が確認された。黄色漆は石黄が確認された。また、No.58 外面と No.75 外面の下地では、炭素 (C)、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) が検出されているが、炭素 (C) は膠着材に使用されている有機質の漆に由来し、ケイ素 (Si)、アルミニウム (Al) などは無機質の地の粉（成分はシリカ (SiO₂)、アルミナ (Al₂O₃)、酸化第二鉄 (Fe₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)) 由来と考えられる。その他ではほぼ炭素 (C) が検出されているが、膠着剤の柿渋と混和剤の木炭粉に由来すると考えられる。これは漆下地では炭素とケイ素が、渋下地ではほぼ炭素が検出されるというように、製作技法の違いと矛盾しない結果であった。

3) 所見

木胎と下地との間に、布着せの布の断面が見られたものが1点 (No.75 外面) あった。その布の素材は、木綿以外の苧麻や麻と推定される。布着せの見られた1点には漆下地、そして透明漆2層の塗り重ねが見られた。また、No.23 外面、No.119 塗箸塗分け部のように下地の上に赤色漆、青色漆、赤色漆と丁寧に塗り重ねが施された製品もあった。その他には下地の上に地色の漆が塗布されたものや、透明漆の上に赤色漆や黄色漆で加飾されたものが見られた。

4) 考察

以上の分析結果を受けて全体をみると、36点53ヶ所の塗膜分析のうち、24ヶ所は漆層が1層のみであった。最も厚い4層塗のものはNo.58の漆塗刀子状木製品で、3層のものは布着せのあるNo.75の漆器椀の外面であった。No.58の漆塗刀子状木製品は下地2層に透明漆1層で、部分的に朱漆が重ねられ4層と3層になる。特有の斑紋を付けた後、研ぎ出して模様を出す唐塗（津軽塗）の技法とみられる。No.75は透明漆を2層重ねた上に、黄色漆で文様を描く。残りの24ヶ所は2層の構造で、うち22ヶ所は透明漆と色漆の組み合わせである。塗膜構造が見られなかった箇所も2ヶ所存在する。

混成された顔料は、ベンガラ・朱・石黄・藍・金・銀であった。分析された36点53ヶ所のうち、顔料が検出されたのは42ヶ所であった。最も多かったのは、朱（辰砂または水銀朱 HgS）で32ヶ所に上る。次にベンガラ（酸化第二鉄 Fe₂O₃）と石黄が6ヶ所ずつで、銀が5ヶ所、藍が2ヶ所、金が1ヶ所であった。目視では、漆黒の無文の端反椀に分類していたNo.23に朱・石黄・藍が用いられていたことは新たな発見であった。また、銀と石黄は金粉の代用品としての側面も考えたい。

下地は2点を除き、全て柿渋であった。このことから、今回の試料は廉価な普及品がほとんどであり、日常使いの漆器類であったと考えられる。

第4節 遺物の構造分析

第60表 木製品樹種同定表

図版番号	分析No.	器種	樹種	木製品番号	図版番号	分析No.	器種	樹種	木製品番号
第39図1	19	漆器碗	ブナ科ブナ属	5-15-13	第47図2	133	曲物 蓋	ヒノキ科アスナロ属	木 431
第39図2	21	漆器碗	ブナ科ブナ属	5-21-10	第47図4	79	曲物 蓋	スギ科スギ属スギ	木 331
第39図3	96	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 494	第47図5	88	曲物 蓋	ヒノキ科ヒノキ属	木 417
第39図4	48	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 123	第47図6	80	曲物 蓋	スギ科スギ属スギ	木 332
第39図5	93	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 466			曲物 綴じ皮	ヤマザクラ or カナバの樹皮	
第39図6	145	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 951	第47図7	135	曲物 蓋	ヒノキ科ヒノキ属	木 489
第39図7	95	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 490	第47図10	89	杓 側板	ヒノキ科ヒノキ属	木 447
第39図8	47	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 122			杓 底板	ヒノキ科ヒノキ属	
第39図9	24	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	102-2-3	第47図11	30	杓 側板	ヒノキ科ヒノキ属	木 13
第39図10	73	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 285			杓 底板	ヒノキ科ヒノキ属	
第39図11	90	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 450	第47図12	127	曲物 蓋	ヒノキ科アスナロ属	木 313
第39図13	20	漆器碗	ブナ科ブナ属	5-17-1	第48図1	150	柄杓 柄	ヒノキ科アスナロ属	木 982
第39図14	25	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	102-3-3			柄杓 側板	ヒノキ科アスナロ属	
第40図1	22	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	28-2-15	第49図1	3	井戸桶材	スギ科スギ属スギ	3-15-1
第40図2	94	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 477				スギ科スギ属スギ	3-4-4
第40図3	83	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 355	第49図3	1	木札	スギ科スギ属スギ	3-1-6
第40図4	57	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 228	第49図5	101	建築部材	ヒノキ科アスナロ属	木 520
第40図5	63	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 243	第49図7	34	杭	マツ科マツ属 [二葉松類]	木 39
第40図6	149	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 959	第50図1	100	建築部材	ヒノキ科ヒノキ属	木 514
第40図7	70	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 280	第51図3	141	墨書 札	ヒノキ科アスナロ属	木 851
第40図8	64	漆器碗	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 245	第51図4	137	墨書 札	ヒノキ科ヒノキ属	木 567
第40図9	87	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 406	第51図5	105	墨書 桶側板	スギ科スギ属スギ	木 592
第40図11	84	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 384	第51図6	71	墨書 札	スギ科スギ属スギ	木 282
第40図12	61	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 235	第51図7	126	墨書 札	ヒノキ科アスナロ属	木 308
第40図14	43	漆器碗 蓋	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	木 74	第51図8	11	墨書 札	スギ科スギ属スギ	28-6-3
第40図15	148	漆器碗 蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 955	第52図14	118	箸	ヒノキ科ヒノキ属	木 179
第40図16	51	漆器碗 蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 139	第52図15	120	箸	スギ科スギ属スギ	木 445
第40図17	75	漆器碗 蓋	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	木 294	第52図16	121	箸	ヒノキ科ヒノキ属	木 454
第40図18	86	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 405	第52図19	116	箸	ヒノキ科アスナロ属	木 101
第40図19	146	漆器碗 蓋	ブナ科ブナ属	木 953	第52図20	31	竹箸	イネ科タケ亜科	木 21
第41図1	23	漆器碗	ブナ科ブナ属	木 954	第52図25	117	箸	ヒノキ科アスナロ属	木 154
第41図2	147	漆器碗	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	100-20-4	第52図33	122	塗箸	カキノキ科カキノキ属	木 512
第41図3	58	漆塗部材	モクレン科モクレン属	木 230	第52図34	119	竹塗箸	イネ科タケ亜科	木 286
第41図4	27	漆器碗	モクレン科モクレン属	表土中-1	第53図1	17	竹べら	イネ科タケ亜科	108-21-3
第41図5	69	漆器碗 蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ	木 279	第53図2	68	楊枝	イネ科タケ亜科	木 275
第41図6	62	漆器碗 蓋	ブナ科ブナ属	木 239	第53図3	103	楊枝	イネ科タケ亜科	木 269
第41図7	109	漆塗合子 蓋	ブナ科ブナ属	木 686	第53図9	124	楊枝	ヒノキ科ヒノキ属	木 92
第41図8	97	漆塗丸板	ヒノキ科ヒノキ属	木 507	第53図12	136	切匙	ヒノキ科アスナロ属	木 492
第41図9	5	匏物	モクレン科モクレン属	5-20-3	第53図13	132	切匙	スギ科スギ属スギ	木 410
第41図10	53	漆塗合子 蓋	カバノキ科カバノキ属	木 163	第53図14	123	切匙	ヒノキ科アスナロ属	木 55
第42図1	49	連歯下駄	ヒノキ科アスナロ属	木 136	第53図15	138	切匙	ヒノキ科ヒノキ属	木 570
第42図2	129	連歯下駄	ヒノキ科アスナロ属	木 324	第53図16	37	切匙	スギ科スギ属スギ	木 47
第42図4	125	連歯下駄	ヒノキ科ヒノキ属	木 307	第54図1	107	へら	スギ科スギ属スギ	木 637
第42図5	134	連歯下駄	ヒノキ科アスナロ属	木 475	第54図2	33	へら	ヒノキ科ヒノキ属	木 36
第42図6	128	連歯下駄	ヒノキ科アスナロ属	木 322	第54図3	38	へら	スギ科スギ属スギ	木 51
第42図7	92	連歯下駄	ヒノキ科ヒノキ属	木 463	第54図4	98	杓子	カバノキ科カバノキ属ミズメ	木 508
第42図9	55	連歯下駄	スギ科スギ属スギ	木 167	第54図5	139-1 139-2	灯明台	ヒノキ科ヒノキ属	木 819
第42図11	110	連歯下駄	ヒノキ科アスナロ属	木 689				ヒノキ科ヒノキ属	木 820
第43図1	26	陰印下駄	マメ科ネムノキ属	近代造成土 34-2	第54図6	99	包丁持手	ヒノキ科アスナロ属	木 513
第43図2	91	板草履	ブナ科クリ属クリ	木 463	第54図11	102	灯明台	スギ科スギ属スギ	木 568
第43図3	46	下駄 打付	スギ科スギ属スギ	木 113	第54図13	8	紡錘車	ヒノキ科ヒノキ属	28-3-3
第43図4	4	連歯下駄	スギ科スギ属スギ	5-20-2	第55図2	28	栓	スギ科スギ属スギ	木 1
第43図5	32	削り下駄	スギ科スギ属スギ	木 137	第56図1	36	櫛	マンサク科イヌノキ属イヌノキ	木 41
第43図6	50	露印下駄	ヒノキ科ヒノキ属	木 27	第56図2	35	櫛	ツゲ科ツゲ属ツゲ	木 40
第43図7	113	板草履	スギ科スギ属スギ	木 711	第56図3	81	櫛	マンサク科イヌノキ属イヌノキ	木 336
第43図8	111	板草履	ヒノキ科アスナロ属	木 703	第56図4	29	櫛	ツゲ科ツゲ属ツゲ	木 3
第43図10	108	板草履	ヒノキ科アスナロ属	木 685	第56図5	115	刷毛	スギ科スギ属スギ	木 733
第43図12	130	露印下駄	ブナ科ブナ属	木 329	第56図6	59	漆塗柄鏡箱	スギ科スギ属スギ	木 232
第43図13	66	陰印下駄	モクレン科モクレン属	木 263	第56図7	74	刷毛	ヒノキ科ヒノキ属	木 287
第43図14	67	陰印下駄	モクレン科モクレン属	木 264	第56図8	140	刷毛	ヒノキ科ヒノキ属	木 822
第44図2	13	桶 底板	スギ科スギ属スギ	28-9-3	第56図9	54	竹管継手	スギ科スギ属スギ	木 164
第44図3	18	桶 蓋	ヒノキ科アスナロ属	204-2-2	第56図12	44	独楽	ニレ科ニレ属	木 77
第44図4	60	桶 底板	スギ科スギ属スギ	木 233	第56図13	16	独楽	カバノキ科カバノキ属ミズメ	108-16-1
第44図7	6	桶 蓋	スギ科スギ属スギ	28-2-2	第56図14	106	人形	スギ科スギ属スギ	木 600
第44図8	65	桶 蓋	スギ科スギ属スギ	木 253	第57図1	9	折敷 脚	マツ科マツ属 [二葉松類]	28-6-1
第44図9	15	桶 底板	スギ科スギ属スギ	100-11-1	第57図2	12	折敷 脚	マツ科マツ属 [二葉松類]	28-7-3
第44図10	78	桶 蓋	スギ科スギ属スギ	木 329	第57図7	7	角材	ヒノキ科ヒノキ属	28-2-6
第45図3	76	桶 側板	ヒノキ科ヒノキ属	木 303	第57図8	142	不明部材	ヒノキ科ヒノキ属	木 877
第45図4	77	桶 側板	ヒノキ科アスナロ属	木 304	第57図11	85	指物 把手	ヒノキ科ヒノキ属	木 400
第45図7	10	桶 側板	ヒノキ科アスナロ属	28-6-2	第58図1	56	不明部材	スギ科スギ属スギ	木 213
第46図3	104	曲物 蓋	スギ科スギ属スギ	木 527	第58図4	112	不明部材	クワ科クワ属	木 709
第46図15	144	曲物 側板	ヒノキ科アスナロ属	木 948	第57図5	131	不明部材	ヒノキ科アスナロ属	木 814
			ヒノキ科アスナロ属		第58図7	114	不明部材	ヒノキ科アスナロ属	木 724
第46図16	14	曲物 尻付	ヒノキ科アスナロ属	100-5w-1	第58図10	39	不明部材	ヒノキ科アスナロ属	木 62
第46図17	72	曲物 側板	ヒノキ科アスナロ属	木 284	第58図12	45	刀形	ヒノキ科アスナロ属	木 95
			ヒノキ科アスナロ属		第58図13	42	不明部材	スギ科スギ属スギ	木 73
第46図18	143	曲物 側板	スギ科スギ属スギ	木 946	第58図14	40	不明部材	スギ科スギ属スギ	木 70
			スギ科スギ属スギ		第58図15	82	不明部材	ヒノキ科ヒノキ属	木 347

第61表 漆塗膜分析結果表

写真No	図版番号	分析No	器種	部位	塗膜構造			顔料
					下地		漆層構造(下層から)	
					膠着剤	混和剤		
1	第45図7	10	桶 側板	内面	-	-	赤色漆1層	ベンガラ
2	第39図1	19	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
3	第39図13	20	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
4				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
5	第41図1	23	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	なし
6				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層/青色漆1層/赤色漆1層	朱/石黄/藍
7	第39図9	24	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
8				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	なし
9	第39図14	25	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
10				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	なし
11	第41図4	27	漆器椀	外面	柿渋	木炭粉	透明漆2層	なし
12	第47図11	30	杓	底部	柿渋	木炭粉	なし	なし
13	第54図2	33	へら	柄部	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
14	第56図2	35	櫛	表面	-	-	黄色漆1層	石黄
15	第56図1	36	櫛	黒絵部	柿渋	木炭粉	透明漆1層/黄色漆1層	石黄
16	第39図8	47	漆器椀	外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
17	第39図4	48	漆器椀	外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
18	第40図16	51	漆器椀	外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/黄色漆1層	石黄
19	第41図10	53	漆塗合子 蓋	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	なし
20	第40図4	57	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
21				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	なし
22	第41図3	58	漆塗部材	外面	漆	地の粉	下地2層/透明漆1層/赤色漆1層	朱
23	第56図6	59	漆塗柄鏡箱	外面	柿渋	木炭粉	なし	なし
24	第40図12	61	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
25				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層/金属片	朱/銀
26	第40図8	64	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
27				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層/金属片	朱/銀
28	第40図7	70	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱/銀
29				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層/金属片	朱/銀
30	第39図10	73	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
31				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層/金属片	朱/銀
32	第40図17	75	漆器椀 蓋	外面	漆	地の粉	透明漆2層/黄色漆1層	石黄
33	第40図11	84	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
34				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
35	第40図9	87	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ
36				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	ベンガラ
37	第39図11	90	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
38				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
39	第40図2	94	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
40				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
41	第39図3	96	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ
42				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	ベンガラ
43	第41図8	97	漆塗丸板	表面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層/金属片	ベンガラ/金
44	第54図4	98	杓子	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	なし
45	第52図19	116	箸	表面	-	-	赤色漆1層	朱
46	第52図34	119	竹塗箸	塗り分け部	柿渋	木炭粉	赤色漆1層/青色漆1層/赤色漆1層	朱/藍
47	第52図33	122	塗箸	表面	柿渋	-	なし	なし
48	第40図19	146	漆器椀 蓋	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
49				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
50	第40図15	148	漆器椀 蓋	外面(高台)	柿渋	木炭粉	透明漆2層	なし
51				外面(体部)	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
52	第40図6	149	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	朱
53,54				外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層/赤色漆1層・黄色漆1層	朱/石黄

第7章 まとめ

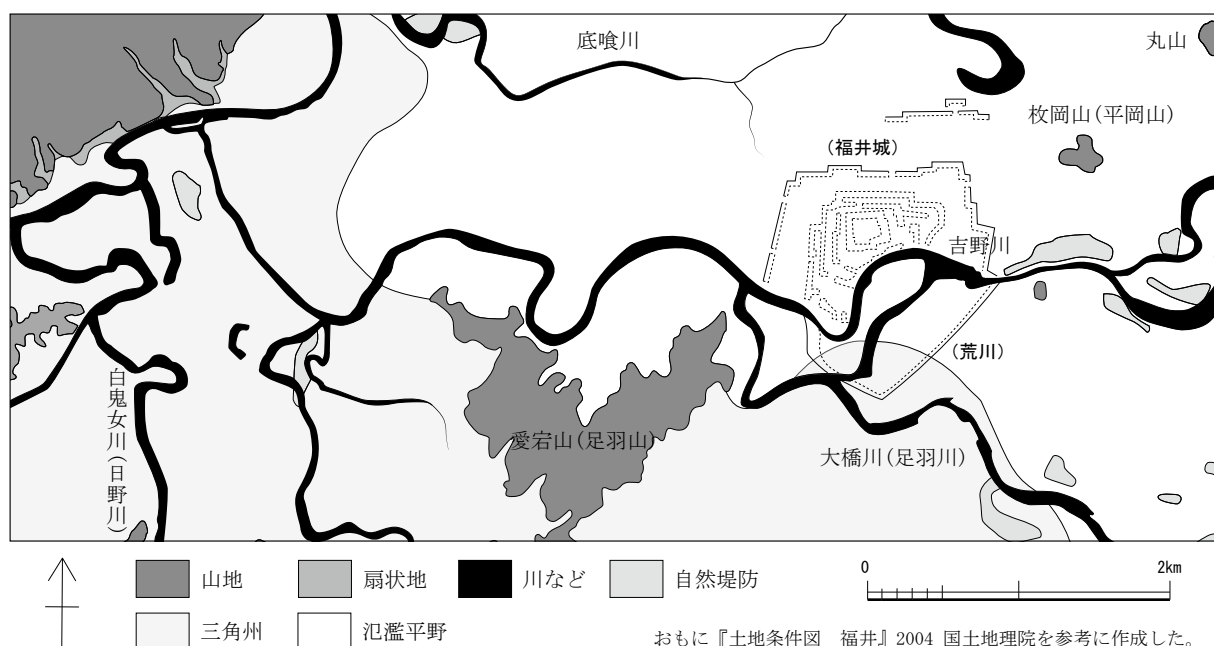
第1節 城ノ橋の変遷

北陸新幹線建設事業に伴う福井城跡発掘調査のうち今回報告する範囲は、主要地方道福井加賀線の通称「城の橋通り」から南の県道足羽川右岸線までであり、福井城南東側外曲輪の「城ノ橋」と呼ばれた区域にあたる。なお、「城の橋通り」は福井城下に存在した道路の名称を引き継ぐものである。

福井城下での調査地の位置は、「城ノ橋」「新屋敷」等の区域からなる外曲輪の南西端に近く、南に外堀とされた足羽川、西に百間堀から連なる漆ヶ淵が近いが、東側は屋敷地が広く展開する。築城以前には足羽川の流路が異なっており、調査地の南あたりで南西に湾曲して方向を変え、足羽山麓に沿うように流れていたようである。また、百間堀の前身は自然河川の吉野川であり、漆ヶ淵あたりから西へ屈曲して流れるが、北東の方で分岐した支流が調査地の東を流れて南の足羽川へ合流したようであり、築城以前の調査地周辺は河川に挟まれた中洲のような地形だったとみられる。FKJ15-1 調査区下層の浅い流路跡や FKJ15-2 調査区の石組水路 152-2 の下層に確認された流路状の落ち込みは、周囲の河川から派生し、両者をつなぐように変遷した小規模な流路の痕跡とみられ、やや不安定な土地だったことが窺える。しかし、FKJ15-1・16-1 では古代の土師器・須恵器が出土しており、周囲の調査では複数の遺構も確認されている。とくに FKJ16-1 ではいくつかの布目瓦が出土しており、中には摩耗が少ない残存状況の良好な丸瓦もあることから、出土量が少ないながらも付近にそれを葺いた建物があった可能性がでてきた。

今回の調査地にかかる福井城下の屋敷地は、「城ノ橋」のうち西側の小道具町と呼ばれる武家屋敷地と、福井城築城の際に城郭内に取り込まれたとされる町屋地である。当時の道路で囲われた屋敷地群を街区とし、調査地内の街区を南西からA～D街区とした。また、D街区のうち石組水路 152-2 から北側は、江戸時代を通して町屋地として存続した部分であるため、E街区として区別した。

現代の城の橋通りは、福井城下の城ノ橋通りを拡幅整備した姿であり、もとの道路は幅7m前後で



第106図 福井城周辺の旧地形 (縮尺1/50,000)

現道の南縁に沿うことが、これまでの調査で明らかになっている（『福井城跡（地下道地点）』2013・『福井城跡（JR 福井駅地点）』2014等）。また、もとの道路の北側に幅5 m前後・奥行10～11 m程度の短冊形の町屋敷地が、道路に小口を向けて並ぶことが確認されており、今回E街区とした町屋地と道路を挟んで向かい合う。この付近の町屋地は、城ノ橋上町・城ノ橋下町・城ノ橋横町・城ノ橋泉町等、道路単位で分かれており、城郭内の町屋地が城ノ橋町組を形成する。

A・B街区は、江戸時代を通して武家屋敷地として存続した街区であり、調査地内にA街区では屋敷地3軒、B街区では屋敷地2軒がかかる。なお、城下絵図によると、A街区南端に付近の町名のもととなる小道具方が位置するが、今回検出した南端の屋敷地（A-1）の南隣の敷地がそれに該当する。幕末頃の城下絵図には、それまでの小道具方の敷地に複数の名が記されるようになり、その中に「ムラヲ」「村尾豊三郎」とみえる。FKJ15-1 調査区南端で「村尾眞兵衛 豊三郎」と刻まれた迷子札が出土しており、後世の攪乱により移動した状況ではあるが、自宅近辺で遺失したようである。

C・D街区は、C街区の南半分については屋敷地数が変化するものの江戸時代を通して武家屋敷地として存続するが、それ以外の部分は17世紀半ば頃を境に街区の再整備が為され、町屋地から武家屋敷地へと変更されている。C街区は、当初南側に2軒の武家屋敷地、北側には沼が迫る空き地のような状況だったが、17世紀半ば頃には南端の屋敷地が二分割されて3軒の武家屋敷地となり、北側は町屋地として整備されるようである。17世紀後葉には、街区の再整備により北側の町屋地が2軒の武家屋敷地となり、あわせて5軒分の武家屋敷地が調査区にかかる。なお、C街区の屋敷境は、境を示す遺構が明瞭な状態で残存せず、明確でない。そこで、城下絵図に記載の寸法をもとに屋敷割を推定した。しかし、そのうち屋敷境付近に位置すると想定された廃棄土坑152-166については、屋敷地C-3に含まれる可能性が高く、この北側に屋敷境が考えられる。これは、廃棄土坑152-166から出土した漆刷毛に墨書された「望月八郎左衛門」が確認されたことによる。城下絵図によると、出土地点付近には18世紀後葉から幕末まで望月氏邸が存続したようであり、家の並びから屋敷地C-3に該当するためである。望月家の当主は、おもに八郎右衛門を名のるが、安永から文化頃まで二名ほど八郎左衛門を名のっており、その頃の人物をさすようである。D街区には、当初C・D街区を隔てる南北方向へ伸びる道路から東へ枝道が派生しており、その道の両側に町屋地が並んでいたが、17世紀後葉の街区再整備により1軒の武家屋敷地となる。なお、C・D街区間の南北道路は、当時の城ノ橋通りから南へ派生した道路であり、北側で緩く角度を変えるものの曲輪の端の足羽川まで直線的に伸びる。町屋を伴う枝道を廃止した結果、交差道路はB・C街区間の東西道路だけとなる。どちらも城ノ橋の区域内で長く直線的に伸びており、城ノ橋での基幹道路と言える。

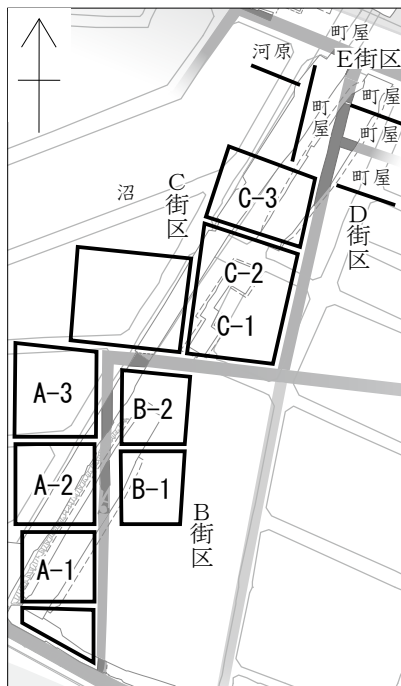
城下絵図に書かれる町屋地の名称は、17世紀前葉には城ノ橋通りに「本町」、枝道周辺に「二番町」と記載されるが、17世紀中葉には城ノ橋通りに「長濱町」、枝道周辺に「二番町」と記載されるようになる。枝道のなくなる17世紀後葉以降は、おもに城ノ橋通りに「城ノ橋上町」「城ノ橋下町」等と記載されるようになる。ただし、18世紀後葉の安永4年や19世紀前半の天保年間の城下絵図等には、城の橋通りに「長濱町」「ナガハマ丁」と記載される。このことから、もともとの名称は長濱町で、街区再整備後に城ノ橋上・下町等と名称も改められたが、通称として旧称も残っていたことが想像される。

今回の調査地周辺の屋敷地名義の変遷は、第62表にまとめた。おもな城下絵図と天保年間の「福井藩家中絵図」の記載をもとに確認したが、名前を記載した紙が剥がれているものが多く、剥がれて場所を違えて貼り直されたものや、文字が消えて判読できないものがある。完全なものではないが、4

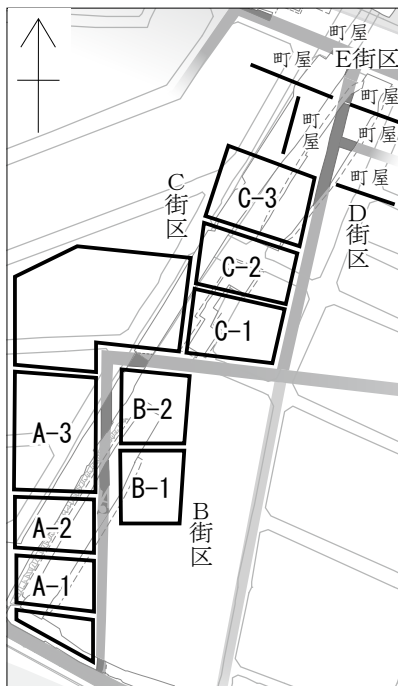
第62表 調査地周辺の屋敷地名義変遷

	(A-1の南)	A-1	A-2	A-3	(A-3とC-1西の間)	B-1	B-2
慶長18年頃 (1613)	木村九右衛門	妹尾又左衛門	広沢兵庫⇒ 荻野一(市)右衛門	多賀谷左内	<沼、空地か>	安藤太郎左衛門	<空地>
万治2年以前 (1659)	須崎三郎右衛門 与力	石川大助	中村弥五左衛門	岡部新九郎	-	林又左衛門	須崎三郎右衛門
寛文年間 (1661～69)	()	石川□□(勘兵衛)	中村弥五左衛門	岡部新九郎	-	林又左衛門	須崎三郎右衛門
寛文10年 (1670)	()	岡九郎左衛門	()	()	-	林又左衛門	須崎三郎右衛門
貞享2年 (1685)	小道具衆	和田金介	伊藤宗恕	岡部新九郎	<空地>	林又左衛門	恒岡安左衛門
正徳4年 (1714)	御小道具ノ者	堀権左衛門	西脇□□(半治か)	稲垣安右衛門	國沢幸左衛門	林又四郎	恒岡安左衛門
安永4年 (1775)	小道具	[樋口喜左衛門]	()	稲垣	()	大藤次兵衛	恒岡安左衛門
享和3年 (1803)	-	渋谷	西脇	稲垣	國沢	吉田	恒岡
文化8年 (1811)	-	渋谷	西脇	永見	國沢	吉田	恒岡
天保年間 (1831～45)	ムラヲ ヨシムラ 今川	渋谷	西脇	永見	國沢	吉田	恒岡
慶応年間 (1865～68)	村尾豊三郎 吉村 久連松	渋谷五郎左衛門	西脇林	永見隼人	國沢政	吉田五左衛門	恒岡兎毛

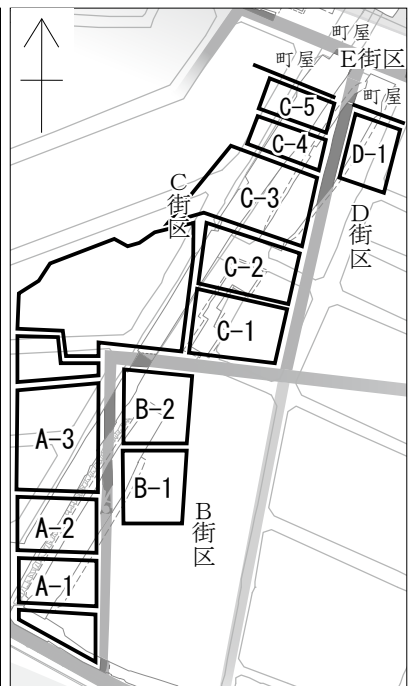
	(C-1の西)	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D-1
慶長18年頃 (1613)	柏木	桜木助之丞		落合□(少か)七	<河原、空地、町屋か>		<町屋か>
万治2年以前 (1659)	□□七人	本多十郎兵衛	加藤所左衛門	()	二番町<町屋>		
寛文年間 (1661～69)	()	本多十郎兵衛	加藤所左衛門	()	<町屋>		
寛文10年 (1670)	三寺与右衛門	本多十郎兵衛	加藤所左衛門	堀豊左衛門	東<空地か>		白樫三郎兵衛
貞享2年 (1685)	三寺与右衛門	本多十郎兵衛	寒江権平	堀平太夫	原助次右衛門	渡辺弥兵衛	味岡彦八
正徳4年 (1714)	荒川助右衛門	本多十郎兵衛	栃屋半右衛門	堀豊左衛門	小堀元右衛門	村田平太夫	杉田織衛
安永4年 (1775)	[渋谷五郎右衛門]	本多十郎兵衛	飯沼十郎太夫	望月八郎左衛門	小堀傳右衛門	栗崎道察	真杉所左衛門
享和3年 (1803)	樋口	下山	飯沼	望月	小堀	栗崎	真杉
文化8年 (1811)	樋口	権太	飯沼	望月	本山	有沢	加賀
天保年間 (1831～45)	樋口	権太	飯沼	望月	本山	有沢	加賀
慶応年間 (1865～68)	樋口喜左衛門	権田宗七	飯沼鉄治	望月八郎右衛門	本山城□(益)	有沢勘	加賀九郎次郎



17世紀前葉



17世紀中葉～後葉



17世紀後葉以降

第107図 調査区にかかる屋敷地の変遷(縮尺1/3,500)

つの時期に全体的な変化を確認することができる。慶長・万治の間（17世紀前半）、貞享2年の前後、正徳・安永の間（18世紀中葉）、享和・文化の間（19世紀初頭）で、それまで続く家名がかわったり、それ以降続く家名が現れたりしている。17世紀前半の変化は、元和末から寛永初年（1623・24）の北庄藩から福井藩へ変化する契機となった事件に伴う大規模な移動が原因だと思われる。貞享2年の前後での変化については、城下のほとんどが焼亡した寛文大火（1669）と、藩領が半減された貞享の大法（1686）の影響だろう。18世紀中葉と19世紀初頭の変化については、城下の再編を促すような事件は思い当たらず、屋敷地区画も変化しないため、人事に係わる屋敷地の変更なのかもしれない。

さいごに、調査地にかかる屋敷地の名義人のうち、来歴が確認できた人物について紹介する。取り上げるのは、慶長18年頃の屋敷地A-2に最初に記載された広沢兵庫、寛文年間の屋敷地B-2にみえる須崎三郎右衛門、貞享2年の屋敷地A-2にみえる伊藤宗恕の3名である。

広沢兵庫は、広沢兵庫介重信のことで、もとは北条氏房の家臣であり、小田原征伐の時に迎え撃った武将の一人である。その後、豊臣秀吉の配慮により、結城秀康の下に仕えることになったとされ、秀康とともに越前に入国したらしい。2代藩主松平忠直の代には敦賀町奉行となるが、慶長17年（1612）の久世騒動（越前騒動）に巻き込まれて、流罪となることが決まる。ところが、彼の過去の武勇を聞き及んでいた酒井忠勝（後の小浜藩主・老中・大老）の預かりとなり、小浜藩家臣となったという。なお、慶長18年の城下絵図は、久世騒動の直後の情報を記録したものとされる。

須崎三郎右衛門については、多くはわからない。しかし、4代藩主松平光通が藩の財政難に対処するため、寛文元年（1661）に藩札を発行した際、山元八右衛門とともに札所奉行に任じられたことが知られる。寛文8年から、札所奉行は八右衛門ひとりとなり、三郎右衛門は外された格好になる。なお、光通の代の給帳には知行が550石と記されるが（「福井県史通史編3」には350石と記載）、寛文12年に召し出された須崎三郎右衛門は、おそらく息子だと思われるが100石と減り、幕末までの間に一時的に御役料として150石加わることがあるものの回復しない。減俸の理由は不明である。

伊藤宗恕は、京都の人で坦庵、自怡堂、白雲散人等と号す。一般には伊藤坦庵で知られる。医術を江村専齋らに学び、父を継ぎ医者となる。後に那波活所に儒学を学び、とくに朱子学の研究に努めたという。著作は「老人雑話」、「坦庵文集」、「坦庵遺稿」等がある。寛文年間に4代藩主松平光通が福井藩の儒官として招聘した。しかし、福井に藩校等の施設がなかったため、本拠を京都に置いたまま、ときおり福井に来て藩士の教育に当たったという（「福井県史通史編3」）。福井での拠点が屋敷地A-2ということになる。なお、福井市本向寺の古文書に伊藤の書状が残る。本向寺は、吉崎御坊大火のとき親鸞真筆の教行信証を体内に納めて守った了願の寺であるが、寺地を越後、加賀等を転々とし、天正10年（1582）に現在地に移転した。そのため、了願の事績について、本願寺でも別の寺院（本覚寺）と混同していた。伊藤宗恕らが本願寺の誤解を解き、本向寺の寺格回復に尽力したことが書状から知られる。

第2節 FKJ21-1 調査区について

北陸新幹線建設に伴う福井城跡の発掘調査は平成28年度で終了し、その後本格的な建設工事が開始された。これまでの間に、設計変更等により新たな調査必要箇所がいくつも現れたが、いずれも対象面積が狭小か、面積が大きくても狭長なため、工事立会として対応している。これまでは、駅舎付近での工事立会であり、その位置は次回制作の報告範囲に該当する。しかし、本書制作中の令和3年8

月に、今回の報告範囲内で工事立会を実施することとなった。工事立会中に遺物が採集されること、掘削深度によっては遺構面に到達することが考えられたため、事前に成果を掲載できるよう調整した。

今回の報告範囲である「城ノ橋」での工事立会は2件ある。1件は、北陸新幹線に伴う消雪基地貯水槽建設である。場所はFKJ16-1調査区の1・2小区間の未調査部分であり、1小区の北にほぼ隣接する位置関係となる。結果的に、遺構・遺物が確認されたことにより、FKJ21-1として福井城関連調査の一つとした。もう1件は、新幹線高架下の管理用道路整備である。場所はJR福井駅高架地点(FKJ00-4)および高架側道5号線地点(FKJ98-8・99-1・3)と今回報告のFKJ15-1・16-1との間で、非常に狭長な範囲である。しかし、近世の遺構面には到達せず、遺構・遺物は出土しなかった。

以下、FKJ21-1調査区の工事立会報告書をもとに概要を記す。ただし、遺物整理は時間的に困難なため、図等は不掲載である。工事範囲は11.2m×8mで、地表下約3mまで掘削する。しかし、地表下1.8m・標高約6.8mで遺構が検出されたため、平面的に検出した。遺構は、土坑3基(211-1・8・7)、小穴3基(211-2・3・4)、溝1条(211-5)と礎石(211-6)を確認した。検出した遺構面は、FKJ16-1-2地区の1面目と整合するようであるが、遺構については関連しそうな配置が見いだせない。ただし、この地点は屋敷地B-2の中央付近となるとみられ、遺構が希薄なことから、一つだけが礎石が確認されたことから、建物があった場所に該当するのかもしれない。

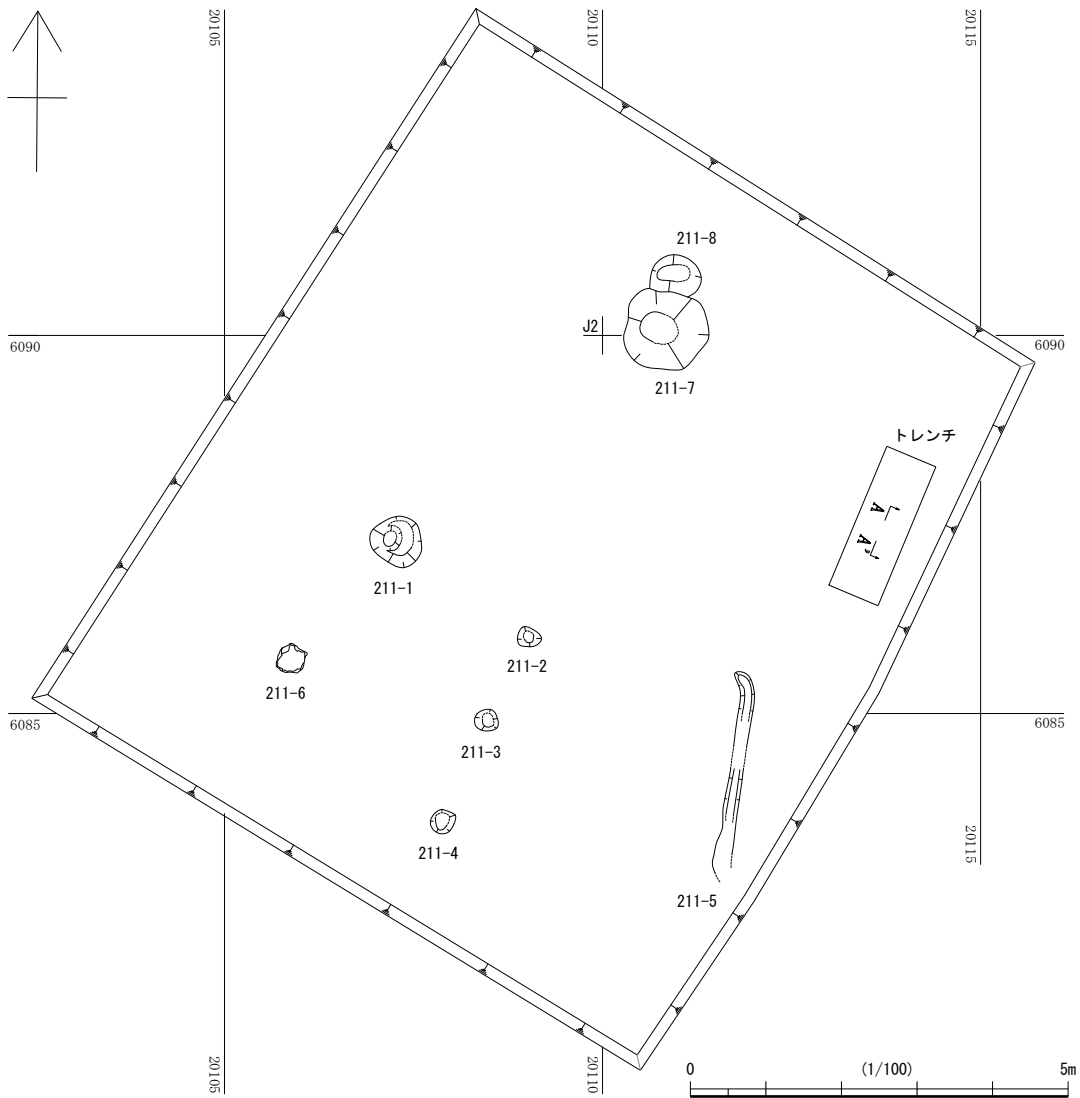
遺構面は、FKJ16-1調査区と同様、後世の削平がおよんでおり、地表から遺構面までの間(包含層)には16世紀後半から17世紀前半の瀬戸・美濃焼の灰釉皿等が含まれていたものの、近現代の磁器等も混じる状況だった。遺構から出土した遺物は多くはない。2基の小穴(211-2・3)から土師質皿片が出土したが、小片のため時期の判別はできない。土坑211-7からは、18世紀後半代の信楽焼や肥前系磁器が出土しており、廃棄土坑として利用されたと想定されている。その他の遺構は出土遺物がない。

この遺構面から下層は、トレンチにより炭化物や植物遺体を含む暗灰色粘土の堆積を確認しており、低湿地もしくは流路内と判断されている。堆積土中から、古代の須恵器や土師器の小片が僅かに出土したが、埋没時期は明らかにし得ない。ただし、この周辺の調査では古代の遺構・遺物が確認されており、また北庄城期の遺構・遺物も広く確認されている。そのため、低湿地や流路の形成は古代かそれ以降であり、北庄城が築城される前の中世後半には埋没していたことになる。

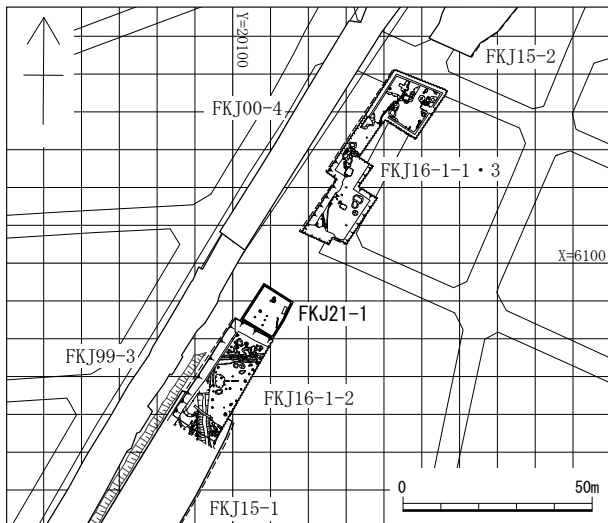


- 1 保育園建設 1995(市)
- 2 NTT発進坑・ガス管理設等〔城の橋通り〕1998(県)
- 3 城の橋通り街路整備 2006(県)
- 4 福井駅付近連続立体交差〔豊島地下道〕1998・99(県)
- 5 JR北陸線外2線連続立体交差
及び高架側道5号線街路整備 1998・99(県)
- 6 福井駅付近連続立体交差〔橋梁部〕1999(県)
- 7 福井駅周辺土地区画整理〔豊島木田線〕2004(市)
- 8 高架排水路敷設〔城の橋通り〕2004(県)
- 9 城の橋通り道路改良 2004(県)
- 10 足羽川右岸線整備 2004・06(県)
- 11 福井駅周辺土地区画整理〔東口都心環状線〕2009(市)
- 北陸新幹線建設 2015・16・21(県)
- A FKJ15-1 調査区
- B FKJ15-2 調査区
- C FKJ16-1 調査区
- D FKJ16-2 調査区
- E FKJ21-1 調査区(令和3年8月)
- F 令和3年9月工事立会地点

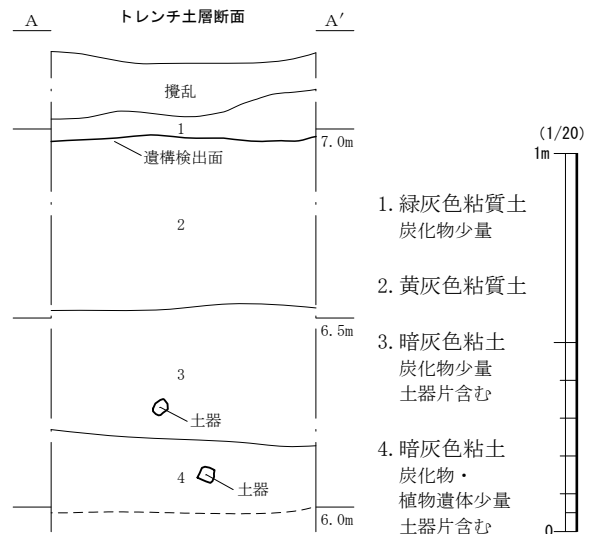
第108図 城ノ橋の発掘調査地点(縮尺1/5,000)



第109図 FKJ21-1調査区全体図 (縮尺1/100)



第110図 FKJ21-1調査区位置図 (縮尺 1/2,000)



第111図 FKJ21-1土層堆積状況図 (縮尺1/20)

第3節 福井城下における土器・陶磁器の様相

これまで伊万里、唐津、瀬戸・美濃、京・信楽、越前、土師質皿等を産地・遺構・整地土単位に紹介した。以下、産地別に碗皿類の様相の変化をみていく。

伊万里と唐津焼は、寛文の大火前後の様相を表すC街区石組水路178・D街区整地土4とE街区整地土3に良好な資料を認める。そこには志野釉を施した天目茶碗や志野大皿等の瀬戸・美濃焼があり、E街区整地土3出土遺物には伊万里の皿を定量認める。このなかには胎土に砂目を残し、蛇の目高台を持つ初期伊万里もあり、唐津焼も鉄釉・灰釉の碗、見込に胎土目と砂目痕を残す皿が多く、寛文の大火以前の様相を表すものと思われる。なお唐津焼には石組水路178の皿のように刷毛目と銅緑釉を掛け合せたものもあり、瀬戸・美濃焼は肥前陶磁器にシェアを徐々に奪われる流れが理解できる。越前焼は鉄泥を刷毛塗した甕とお黒黒壺や無釉の播鉢で占められ、土師質皿はA街区遺構面3の土坑226・230・245でまとまるが、いずれもC・D系の一種類の形態で占める。なおE街区整地土3出土遺物からは中国製の皿が出土しており、この時期の組成の一端を示すと理解できる。

続く17世紀後半頃の様相はD街区遺構面3と整地土3で把握できる。当時期の唐津焼は鉄釉・灰釉碗皿が減り、呉器手碗や丸碗、刷毛目碗や京焼を模倣した京風唐津碗等で占めるが、皿類は壁皿を除くとみられず、京・信楽系の製品はない。続く時期の一括資料がないため比較は難しいが、碗皿類が磁器中心へ移行する時期にあたるものと思われる。

18世紀後半以降はA街区土坑28・井戸108、C街区土坑156・166等と一括資料が増加し、A・E街区整地土1や石組水路2上層から比較的まとまる遺物が出土している。唐津焼は刷毛目の鉢を除くと皆無で、伊万里は半球碗や見込に五弁花文を持つ半筒碗、蓋付碗を多く認める。五弁花文を持つ製品はA街区井戸108出土の皿や石組水路2上層出土のコンニャク印判を施す碗と合わせ、廉価な磁器が多くみられる当期の様相を示そう。ただこの時期に出現する広東碗はいずれの遺構にもみられず、それほど多い印象はない。なおE街区整地土1や石組水路2上層出土遺物には波佐見産の陶胎染付も定量認める。瀬戸・美濃焼は磁器を量産する18世紀末以降に端反碗が目立つが、土坑166のように伊万里が量的に多いことがわかる。その一方で陶器の碗は多様化し、腰鍔碗や鎧手碗のほか白泥の梅花文を描く端反碗を認める。京・信楽焼は高台無釉の色絵碗や無文の碗のほか鍔絵を施す碗皿が多いが、土坑28出土の体部外面を工具で抉る碗のように信楽窯の製品であることが明確なものも認める。このほか、この時期には行平や土鍋、土瓶の在地製品が増え、越前焼も播鉢の形態が大きく変化し、新たな形態の鉢が加わる。この鉢は体部が直線的なものと同様に内湾して口縁が屈曲するものに分かれ、法量も多岐に富み、焼成後に底部を穿き植木鉢に転用した例も認める。時期を同じくして外面に轆轤目を残した中・小型甕も急激に増加する傾向を認める。土師質皿は従来と系譜を別にする内型成形のG類で占められ、風炉・焜炉・火鉢等の瓦質土器が加わる。食膳具と瓦質土器等の在地製品には、福井城跡近辺の三国窯や松岡窯の製品が定量含まれると思われる。

最後にE街区近辺の町屋の様相を考慮できる遺物について触れると、特筆すべきものに焼歪み、陶片が付着する皿の存在があげられる。こうした製品は供膳具に使用することが不可能なため、生産地から直接製品を仕入れる窯買いがなされたことを示し、この近辺に陶磁器の売買を行う店が存在したことを示すと思われる。町屋の性格の把握は困難な場合が多いが、このような資料の蓄積により徐々に解明されていくものと考えられる。

第4節 福井城下における出土漆器の構成

漆器の分類と構成 漆器の分類は各都道府県の調査報告においてみられるように、木胎や下地・上塗りの色や種類、加飾技法や文様、用途や形態等による様々な分類法がある。これまでの福井城跡報告書での漆器碗類の分類も、刊行年度によって基準がやや異なる。福井城跡報告書第102集(2008年刊)と第109集(2009年刊)、第146集(2015年刊)では、用途と形態によって分類している。第102・109集での分類は、飯碗・汁碗・皿と3つに大分し、更に口径と全高の比率で細分しており⁽¹⁾、それら以外をその他⁽²⁾としている。第146集では、この分類の他に漆絵の文様も分類している⁽³⁾。その後の第173集(2021年刊)では、口径・高台径・高台高・全高の各計測値により分類している⁽⁴⁾。今回の報告では以上の分類法を参考に、飯碗・汁碗等の種別や法量でA～H類に分類した(第17表)。

A類(飯碗=イチノワン)は8点、B1～B4類(汁碗大=ニノワン)は16点、C類(破損によりAかBか特定できない)は2点、D類(汁碗小=サンノワン・シノワン⁽⁵⁾)は5点であった。また、E類(端反碗)は1点、F類(腰碗・壺碗・両者の蓋)は平碗と平碗の蓋と腰碗の蓋がそれぞれ1点ずつである。G類(腰高)は点数としては挙げていないが、A類の第39図1と3が破損しており、腰高の可能性がある。H類にあたるその他の漆器は、割り物の容器が2点、合子の蓋が2点、文様の描かれた丸板と盃が1点ずつであった。B1～B4類は特に年代を限定せず継続的に確認される。

漆器の自然科学分析 宝永4年(1707)から備中吹屋において、緑礬を原料とした国産ベンガラが多量に生産され始め、朱とベンガラの市場価格には30:1もの差があったとされる⁽⁶⁾。そのため出土漆器碗資料も全国的に地内面の赤漆の塗りにはベンガラを用い、加飾部分のみ朱を利用する例が多い。しかし第6章第4節2の分析では、加飾部を試料として指定したため、朱の利用率が高い結果となった。

漆器の用材傾向 今回の樹種同定の結果、年代と樹種が大筋判明したA類(飯碗)の8点中7点がブナで、1点がトチノキであった。B1類(汁碗大)の9点中6点がブナで、3点がトチノキであった。漆器碗の用材選択には地域性が指摘されており⁽⁷⁾、上記の傾向は北陸地方でのブナ・トチノキ・ケヤキの順に用材の選定頻度が高いことと合致する⁽⁸⁾。漆器は価格に応じた品質の製品が生産されるため、用材選定における年代による樹種の変化は見られない。日常使いであった飯碗・汁碗が、廉価で多量に入手可能な材を用いていることは、上塗りの回数や下地・加飾が簡素であったことと矛盾しない。少数ではあるが、優品にあたる端反碗・壺碗の蓋・盃等には堅硬で靱性のあるケヤキが全年代において選択される。

漆器の文様 漆器碗類43点中、27点に文様があった。それらの文様の分類を以下に記す。

蓬 菜 文：鶴亀松竹を主体とした文様。鶴と亀は頭部が向き合う。竹は笹のように描写されることもある。年代によって描き方が異なり、今回は年代と筆致から3種確認されている。

植 物 文：花卉を中心に描く花文。葉や実を中心に植物の全体の姿を写した植物文。四季それぞれの季節内の植物を取り合わせ、もしくは織り交ぜて表現した季節文がある。

花 文…立ち杜若・梅・桔梗・菊(菊水も含む)

植物文…桐・蔦・五瓜

季節文…秋草(薄・菊で構成される)

動 物 文：実在の動物を題材とした文様。鷹の羽

幾何学文：家紋に用いられる以前から図案化されていた文様。亀甲・花菱

器 物 文：物の形を文様化したもの。扇・目結・三段梯子

蓬菜文は時代の古いものから順に、県下の一乗谷朝倉氏遺跡でも出土している「越前型蓬菜文」と簡略化された図案を用いる「量産型蓬菜文」、精緻な鶴や松を描写する「原型回帰型蓬菜文」が確認されているが、今回の報告内では、「量産型蓬菜文」と思われる松文様等が5点みられる。

漆器の様相 年代を追って観察すると、画期となるのは18世紀後葉である。福井城跡より膨大な量の漆器が出土する江戸市中の事例でも、同時期に文様が入る椀は減少傾向とされる。このことは、A類（大型の飯椀）や椀の見込みに文様を描く椀が、18世紀後葉以降はみられなくなることと重なる。

飯椀・汁椀・飯椀蓋・汁椀蓋の重椀は16世紀から継続してみられるが、18世紀後葉以降はそれ以前の汁椀よりも全高の低い椀や高台径の広い椀が増え、平椀やその蓋も出現する。この時期は中世からの椀のセット関係の転換期にあたる⁽⁹⁾。輪島市史には、安政7年（1861）に飯椀・汁椀・飯椀蓋・汁椀蓋の組み合わせで「四重椀」として生産された記録が残るため、揃え椀への完全な移行が成立するとはいえないが、江戸市中では画期に重椀系から平椀・壺椀を加えた揃え椀に移行する可能性が指摘されており⁽¹⁰⁾、福井城跡の平椀やその蓋の出現時期と合致する。

註

- 1 本多達哉 2008 「近世の遺構と遺物 木製品」『福井城跡』福井県埋蔵文化財調査センターでは以下の分類である。
飯椀：口径が14cm以上、全高7.5cm以上、高台高2cm以上の器。 汁椀：口径が10～14cm、全高4～7cm、高台高1cm前後の器。 皿：口径が10～12.5cm以下、全高2.5～4cm以下、高台高0.8cm以下の器。
- 2 「蓋・平椀・一文字腰椀A・B・壺椀・腰高・盃・合子・鉢・器台・その他不明」をその他として掲載される。
- 3 杉田曜 2015 「第2節 漆器椀類の漆絵」『福井城跡』福井県埋蔵文化財調査センター pp227～232
- 4 A類：高台高1.5cm以上、底部厚さ0.8cm以上。一の椀に相当。
B類：高台高1.5cm未満、底部厚さ0.8cm未満。二の椀（「二の椀」という名称は御膳の「二の膳に出される椀」と同一である。よって、本文ではカタカナ表記）に相当。体部の立ち上がりが深いものをB1類、浅いものをB2類、底面が広いものをB3類、破損により立ち上がりが不明なものをB4類とする。
C類：破損によりA類かB類か判断できないもの。
D類：高台高1.0cm未満、全高4.0cm未満。重ね椀での三の椀、揃え椀での三の椀・四の椀に相当。
E類：端反皿 F類：腰椀・壺椀と、それに伴う蓋。 G類：腰高 H類：その他
- 5 三の椀・四の椀の詳細については、中井さやか著 2000 「第9章 第4節都立文京盲学校地点出土漆器椀の考古学的分析」『小石川牛天神下 第三分冊』を参考にした。「椀三・四」という分類名称を用い、椀の全高4.0cm以下をおおよその目安としている。三の椀・四の椀は、伝世品として4個重ねた状態でセット関係が明らかである。しかし、出土品は重ね椀として、入れ子式に収納可能かどうかの判定が困難である。よって、双方をまとめた呼称を用いて分類するしかないのが現状である。
- 6 北野信彦 1993 「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』雄山閣出版 p 93
- 7 北野信彦著 2005『近世漆器の産業技術と構造』の「第2章 第1節ろくろ挽き技術(用材利用)」では、北海道(221点)・東北(208点)・北陸/山陰(646点)・中部(277点)・江戸市中(5930点)・東海地域(1231点)・近畿//山陽(1633点)・九州(243点)の近世漆椀を、ブナ・トチノキ・ケヤキの用材選択の高下や、下地や加飾率が一目で分かるようレーダーチャート式に表した。北陸/山陰地域は、ブナ材が優勢ながらもトチノキ材の使用も多い。その比率は、ブナ：トチノキ：ケヤキが6：4.35である。
- 8 本調査地の漆器椀類の主な樹種はブナ22点、トチノキ10点、ケヤキ3点である。
- 9 北野信彦 2005 「近世出土漆器の研究」吉川弘文館
- 10 中井さやか 2000 『小石川牛天神下 第三分冊』 都内遺跡調査会

第5節 絵図等史料と各種自然科学分析結果について

花粉分析では、対象となった遺構の多くで周辺に水田の分布が示唆された。調査区 15-1 は南端が足羽川に接し、北側に慶長 18 年の城下絵図で「沼」・「河原」と記された場所がある。「沼」はその後の絵図でも形を変えながら表示が残るため、足羽川と共に分析結果に影響を与えているかも知れない。

土坑 151-26 は、屋敷地 A-2 内にあり、花粉分析によって便所遺構または糞便投棄場所という結果が得られた。大型植物遺体・貝類・動物骨の同定においても、ほぼ全てが食用かつ小型の種子や焼けた魚骨で、貝殻等の不可食部位はみられない。出土遺物は少数の土師質皿のみであり、糞便以外の廃棄行為がない。この遺構から、寄生虫卵と共に薬用植物の花粉が検出された（第6章参照）。この遺構は土師質皿の年代観から西脇邸に帰属すると推定されるが、西脇以前は医学の心得のあった伊藤宗恕の屋敷でもあったため（195-196 頁）、薬用植物は西脇か西脇・伊藤の両者が用いたものと思われる。西脇については、七代福井藩主松平吉品の時代に新たに召抱えられた人の名簿に「西脇豊治」⁽¹⁾、同給帳に御番組二十三石三人扶持として「西脇甚五大夫」の名前があり⁽²⁾、西脇林左衛門は小道具町に居住していたとの記録が残る⁽³⁾。各種の分析結果から、海水・淡水産の魚介とナス、ウリ等が供される、屋敷地 A-2 の住人の食卓が垣間見えた。

石組水路 152-2 からは、脳を取り出したとみられるイヌの頭骨 8 体分が出土している。この遺構は武家と町屋の境界となっており、近隣にウシの角を加工する工人が活動していた可能性があることから（152 頁）、イヌの脳の用途として、食用・薬用のほかに皮なめしも考えておきたい。

註

- 1 福井市 1988『福井市 資料編 4 近世二』403p.
- 2 同上 pp.286-289 西脇家は西脇甚五大夫（太夫）以後、甚五太夫（子）、林右衛門、林右衛門（子）、西脇省三、の順に明治まで家督を相続している（福井県文書館 2016『福井県文書館資料叢書 12 福井藩士履歴 4 た〜ね』pp.290-292）。
- 3 鈴木準道（舟木茂樹校訂）1977『福井藩士事典』歴史図書社 108p.

報告書抄録

ふりがな	ふくいじょうあと							
書名	福井城跡							
副書名	北陸新幹線建設事業に伴う調査6							
巻次	第一分冊遺構編・第二分冊遺物編							
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第177集							
著者名	御嶽貞義(編) 木村孝一郎(編) 青木隆佳 秋山綾子 佐々木芽衣 杉田曜 九千房百合 中原義史							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒918-8226 福井県福井市大畑町97-21-3 TEL:0776-53-7977 E-mail: maibun-c@pref.fukui.lg.jp							
発行年月日	西暦2022年3月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ふくいじょうあと 福井城跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 とよしま 豊島1丁目	18201	01141	36° 3' 29"	136° 13' 14"	20150401 ～1130 20160401 ～1228	3,070㎡ (表面積)	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
福井城跡	城郭 城下町	中世 近世 古墳時代 奈良・平安時代	道路、屋敷境溝、井戸、廃棄土坑など 自然河川、溝、土坑 など	土器(土師質皿)・陶磁器・瓦・木製品(下駄・漆器)・石製品(行火・石瓦)・金属製品(刀装具・煙管)・自然遺物(種子・骨)など 須恵器・土師器・鉾滓など	外曲輪の城ノ橋地区で、道路や石組水路に区画された5つの街区(屋敷地)にまたがり、城郭内では珍しい町屋の建ち並ぶ部分を検出した。このうちE街区は江戸時代を通して町屋だった街区である。			
要約	北陸新幹線建設事業に伴う調査のうち、地方主要道福井加賀線の起点部分である「城の橋通り」から南側の足羽川までの範囲である。調査区は、福井城の外曲輪のうち南東部の「城ノ橋」地区にあたる。大部分が武家屋敷地で、道路・石組水路などの街区に関わる遺構や、屋敷境溝・井戸・廃棄土坑などの屋敷地に関わる遺構が検出された。また、下層から古代(奈良・平安時代)の遺構・遺物が検出されており、古代の包含層からは炭化物や焼土とともに鉾滓なども検出された。							

福井県埋蔵文化財調査報告 第177集

福井城跡

—北陸新幹線建設事業に伴う調査6—

第2分冊 遺物編

令和4年3月4日 印刷

令和4年3月14日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒918-8226 福井市大畑町 97-21-3

印刷 創文堂印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町 1 丁目 7 番地
